



AC  
145  
G855  
1939  
v.8

Gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







# 羣書類從

第八輯

東京  
續群書類從完成會



AC  
145  
G855  
1939  
v. 8

群書類從第八輯目次

裝束部

卷第一百十二

滿佐須計裝束抄

源 雅亮……………一

卷第一百十三

助無智祕抄

一名年中行事裝束抄

九〇

卷第一百十四

飭抄

久我通方……………一二五

卷第一百十五

後照念院殿裝束抄

近衛冬平……………一九三

卷第一百十六

裝束抄

西三條實隆……………二一五

卷第一百十七

次將裝束抄

京極定家……………二四九

三條家裝束抄

伏見院宸翰裝束抄

二五九

雁衣鈔

二六五

布衣記

二七五

卷第一百十八

連阿口傳抄

高倉永綱……………二八五

連阿不足口傳抄

高倉永綱……………二九六

裝束雜事抄

高倉永行……………三〇三

物具裝束鈔

中山忠定……………三〇八

卷第一百十九

深窓秘抄

三一七

撰塵裝束抄

三二四

袷帷着用時節

三四〇

卷第一百二十

法中裝束抄

是元無名書今私題之

三四二

法躰裝束抄

是元無名書今私題之

高倉永行……………三四七

女官飾鈔

一條兼良……………三六三

曇花院殿裝束抄

聖秀女王……………三六九

卷第一百二十一

御禊行幸服飾部類

三七七

文筆部一

卷第二百十二

懷風藻……………淡海三船……………四二四

卷第二百十三

凌雲集……………小野岑守……………四四九

卷第二百十四

文華秀麗集……………藤原冬嗣……………四六七

卷第二百十五

經國集……………良峯安世……………四九〇

卷第二百十六

扶桑集……………紀齊名……………五五五

卷第二百十七

本朝麗藻……………五八〇

群書類從第八輯目次終

群書類從卷第一百十二

裝束部一

滿佐須計裝束抄

一卷 調度并裝束事

母屋庇調度事

同御裝束事

五節所御裝束事

姬君裝束事

下仕裝束事

女房車衣事

又童事

可暴物事

暴御艷書事

暴名香事

童女裝束事

打出事

下仕事

雜仕事

暴辭書宮事

暴女房裝束事

檢 按 保 己 一 集

暴童裝束事

所具本樣之物等事

童女物忌事

左右

艷書暴樣事

名香暴樣事

暴法服事

付束帶直衣暴樣事

下仕笄子緒搦樣事

辭書宮暴樣事

法服裳結樣事

二卷

束帶事

闕腋事

布袴事

衣冠事

布衣事

衣冠直衣出衣事

付柏夾事

石帶事

魚袋事

劔裝束事

舞人裝束事

陪從裝束事

小忌裝束事

童殿上事

付裝束事

結鬢事

結半臂緒事

禮服裝束事

近衛司着甲事

元服事

取御髻事



三卷

狩衣色々事絹布

奴袴色々事

女房装束事

もやひさしのてうどたつ事。母屋 廂 調 度

まづしんでんのひさしにみすをかけまはす。寢 殿 廂 御 簾 賭 方 表 重

次にもやのみすをかく。もやはしんでんによりて四けんもしくは五けんにてもあるなり。七けん四めんのしんでんならば。もや五けんにみすをかけて。うちにかべしろを引まはすべし。もやのみすをあげんことは。れいのき丁をもやにたてゝ。そのてのうへにつかせてあぐることもあり。それ無下にさがりたらば。そのてのうへにこぶしをにぎりあてゝ。ふたこぶしばかりすかしてあぐべし。みすのこのつきやうは常のごとし。か

べしろはそのみすのたかさにつきて四方をあげまはすべし。かべしろのおもてはみすのかたにあてゝかくべし。こはしのいたをいれて。まづ南より一方づつあげて。よつのすみをばとぢあはせてみすのやうにまきあげて。うちとのひもをもてあげたるしたに一むすびしてのちとりあはせて。すそよりかみざまに七八寸ばかりにおりかさねて。その一むすびのしたにすそをしたうらにしてさしはさむべし。ひもごとにこの定なり。かべしろのおもては。れいのき丁のやうにて。うらはしろくやうして。ひもはおもてはすはうなから。こきうちなからをあはせてあり。うらのひもはみなしろきなり。ひろさ三寸ばかりにかさねて。おもてのひもかべしろにおなじ。もやひさしにひろむしろをしきみてて。ひ



さしのなげし長のうへにやまとむしろをは大和庭柱しらにきり切廻まはして。なげしにむしろのみ  
 みをはしらにひとしくあてゝ。釘柱寄外してうち  
 つく。はしらのもとごとにはしらよせのと  
 にちんしををく。ひらなるまぐらのやうな  
 るものなり。かみにてまぐらのやうにつゝ  
 みたり。ひさしにわたりてかうらいのたゝ  
 みを間奥端ごとに二帖づつしく。なかにおしあ  
 はせておくはしのきはをすかして。おなじ  
 とほりにしくべし。なかをあけてしくこと  
 もあり。たゞしはしかくしのまには。うげん  
 二帖をおくのはしらにそへてにしひんがし  
 にしきてうへにりうびんを二枚しきて。そ  
 の上にしとねをしく。それもとづべし。りう  
 びんはいろく地錦にまだらなるむしろにあ  
 をちのにしきのへりのひろさ三寸ばかりな  
 るを四方にさしまはして。こきう濃ちうらを

つけたり。ひろさながさたゝみにおなじ。し  
 とねながさひろさ四方よほう三尺ばかりにて赤  
 地のにしきのへりのひろさ四五寸ばかりな  
 るを四方にさしまはして。なかにからあやも  
 しはかた堅織物おりものなどをへりのうちさま  
 につけて。そのなかにたて打裏ぎまにぬひめあ  
 り。わたを中にいれたり。うちうらなり。その  
 おもてのぬひめをりうびんのなかすみにあ  
 てゝしくべし。

そのたゝみのにしのかしらに二階をたつ。  
 おもてににしきをお押したり。うらにまはし  
 てくみ紐をしたり。上のこしのおくに火とり  
 白がね籠簀のこはしかあはちあり。はしにゆす  
 るつき環ををくだいあり。にしきのおもてを  
 したり。ゆするつきふたあり。みなかねな  
 り。したのこしのおくにだ下層このは唾壺このふた  
 を置てだこをすへたり。ふたのなかにし

きのおりたてあり。だこはしろがねにて。

□のはんのなかちゐさくくばみたるやう

につくりたるものなり。あう叩のけてをくべ

し。ならべてはしのかたにうちみだりのは

こををく。ふた蓋おほひながらをくべし。にし

きのおりたてあり。ものいらす。あけてふた

を身にかさねてをく人もあるべし。

その二原かゝのみなみにむしろのうへにから

くしげたつ。四小かくなるもののふたのうへ

にちゐさきかゝみのはこのやうなる物あ

り。あし四ある臺鏡にすゑたり。それにならべ

てみなみにかゝみのはこ。やつはながたな

るがおほきなるををく。かゝみ(鏡)まもり(護)ひれ

いれ。だいあり。そのていからくしげにおな

じ。かゝみをとりいだしてかくれば。はこは

ふたしてもとの所にをくべし。

そのみなみに鏡臺鏡をはりてたつ。そのてい

とうだいのつちゐなくてからかさのかみの

やうなり。かみにかゝみかくるところあり。

しもははりてくさびをさすなり。たてゝの

ちまづひれ額布をかく。そのていあをき物にぬ

ひものしたり。かぶりの冠ゑんび燕尾のやうなるが

ふたつあるをなかをつがひたるほそき所

のにしきなる所をかく。よこさまなるきよ

りまへにひきだすべし。そのうへにあせた

なごひ拭をかく。そのていからあやの三尺ば

かりにてあるなるが。なかにぬひめあり。そ

のぬひめをなが長さまになか中おりにして。な

からのほどをとりほ取そめて。ひれのうへに

まへざまに又ひき引かくべし。そのうへにま

もりをかく。そのていつねの人のまもりの

ひとつあるが。にしきをたゝみて緒をつけ

たり。それをうへにうちかけてそのうへに

かゝみをかく。このまもりのこゝろは。かゝ

みをのけ仰張はらせんれうなり。かゞみもと元平ひ  
らぐみの緒紐をつけたり。このひれ。たなごひ  
をかけてまへにさがりたる所をひだりを右  
にちがへて。そのうへにまもりをかくるこ  
とあるべし。このきやうだいのかゞみをこ  
の定にかけて。からくしげかゞみのはこを  
みなみへをしやりて。二かひ階のきはにたつ  
るぎあるべし。うちか内格うしなどのさはらん  
こゝろばせなり。もし又ところ狭せばくて。か  
がみをかけてたてずは。かゞみをばかゞみ  
のはこにいれて。物具どもをいれて。きやう  
だいをはづして。二かひのしたにおくべし。  
その二かひのうしろにやま和とゑの四尺の屏  
風をもやのはしらのきはよりはしぎまに  
きやうだいのうしろ後までたつべし。ひ  
さしのませ間狭ばくてひだふかくば。たゝみて  
おくのはしらのきはに二三枚もたゝめ。は

しにみちあるやうにたつべし。から繪唐のも  
たつることあれども。つねはやま和と繪なり。  
この屏風たつる所衝立についたてさうじをたつ  
る事あり。おもてきぬにしきのへりををし  
たり。たか高まつ松のせん軟さうをかく。東三條に  
ありしは。さが綾殿野にかりせし少將をぞかゝ  
れたりし。これをたつることまれの事なり。  
りうびん龍髪しきたるたゝみのひんがしみな  
みずみに三尺のくろぬりのてのき丁のおも  
てつねのかうけ綢ちなるをうしとらぎまに  
すぢかへてたつべし。そのたゝみの南のい  
たにおほきなるすぢりのはこををく。かけ  
ごなし。すぢりふでつねのごとし。にしのか  
たによせておくべし。そのひんがしにまき  
ゑのけう脇息そくをたゝみのへりにそへて。に  
しひんがし脇ぎまにをくべし。このすぢり祝の  
はこはをかむ置わりはあけてかならずみるべ



し。もしすゞりもぞさかさまになるのゆへ  
なり。もし女御参まいりむことりの所顯あらは  
しなどあらば。このけうそくをたゝみのう  
へにとりあげて取上。三尺のき丁にそへてすぢ  
かへてをきて。そのけうそくのうへに二か  
ゐのうへなる火とりをとりて。たき物熏をい  
れてをくべし。すゞりのはこはけうそくの  
あとへ跡ひんがしへをしやりてをくべし。こ  
れむこの君覺のみち路のれう料なり。

おなじき問まの後もやに御帳あり。きさきの宮  
などのにははまゆ濱かあり。たかさ二尺床ばか  
り。よつ四にしてさしあはせてをく。黒ぬり塗か  
な物ものをうちたり。そのうへにさしみてた  
るうげん二帖を北南にしく。みなみ土敷をまく  
らとするなり。このたゝみをつちしきとい  
ふ。そのうへに四のすみぐ土居につち柄ゐをす  
えて。はしら柱をたてまはしてかも鴨ゐををき

てのち。ぬり漆ごの子あかりさうじをまごとに  
おほふ。窓たくみれう内匠をかならずめすべし。御  
丁あたらしくば吉よき日用をもちてたつべし。  
ふるきはくるしからず。はしらはうしとら  
のすみよりたつるなり。そのちかたびらを  
かくべし。かたびらのていかべ壁代しろにおな  
じ。八帖がうち四帖は五の。四帖は四のある  
なり。五のあるをすみにかくる人あれども  
それはわろし。四のあるをすみぐ幅にかけ  
て。五のあるを四方のくちにかくべし。つぎ  
にもかう幅額をひく。もかうはかたびらのやう  
にて。おもて表ばかりあるをなが長さまにうら  
あはせになか中おりにして。わなをしもにて。  
うしとらのすみよりはじめてかみにひき  
まはすべし。ひだをすみのはしらのもとご  
とにむかひぎまにとるぎぎあり。又うへにお  
ほひたる五ののかたびらのはしにあてゝ。

むかひざまにかた<sup>片</sup>ひだにとるぎあり。この  
定にとるにはすみのひだはあるまじ。又す  
みにとらばこのひだあるまじ。いづれにて  
もありなん。さてのちつねのき<sup>土</sup>丁を三本と  
りよせて。この御帳のみなみ<sup>南</sup>ひんがし<sup>東</sup>にし<sup>西</sup>の  
くちにはまゆ<sup>濱</sup>かのうへにたてゝ。そのき<sup>床</sup>丁  
のいたゞきにたか<sup>高</sup>さをあてゝ。三方のくち  
の五ののかた<sup>上</sup>びらをあぐべし。そのあぐる  
やうは。かべしろあぐるにおなじ。うち<sup>内</sup>との  
ひもしてむす<sup>結</sup>ぶやうかべしろにおなじ。よ  
つのすみ<sup>隅</sup>ぐのかた<sup>中</sup>びらはたれたり。又う  
しろのなかの五ののもすみのやうにたれた  
るなり。この三方のき<sup>几</sup>丁をもひきおろすべ  
し。この木丁をよせ<sup>寄</sup>き<sup>床</sup>丁とはいふなり。きさ  
きならぬにははまゆ<sup>濱</sup>かなし。そのつちしき  
のうへに。つち<sup>土</sup>ぬの<sup>居</sup>うち<sup>内</sup>の<sup>度</sup>りに。なかにうげ  
ん一帖<sup>中</sup>な<sup>墨</sup>かすみ<sup>墨</sup>にしく。みなみまくら。その

うへにから<sup>唐</sup>あやのおもて。にしきのへりさ  
しまはしてわたいれたるが。うち<sup>打</sup>うら<sup>裏</sup>つけ  
たるをしきてとちつ<sup>表</sup>けたり。これをうは<sup>表</sup>む<sup>裏</sup>  
しろといふなり。そのま<sup>紫</sup>くら<sup>檀</sup>の左右に八も  
じにし<sup>字</sup>たん<sup>體</sup>ぢ<sup>地</sup>のてのこ<sup>手</sup>き<sup>小</sup>丁<sup>几</sup>をたつ。ま<sup>二</sup>くら<sup>重</sup>  
き<sup>枕</sup>丁といふなり。かた<sup>枕</sup>びら<sup>枕</sup>ふた<sup>枕</sup>へおり<sup>物</sup>もの  
なり。それにそへてぢ<sup>枕</sup>んのま<sup>枕</sup>くら<sup>枕</sup>ふた<sup>枕</sup>つを  
くべし。

さてのち御<sup>衾</sup>ふすま<sup>衾</sup>ををく。たてまつるべき  
やうにうら<sup>衾</sup>をしたにをきて。く<sup>紅</sup>び<sup>打</sup>のかた<sup>打</sup>を  
うへ<sup>打</sup>ざまにあ<sup>打</sup>とのか<sup>打</sup>たへ<sup>打</sup>ひき<sup>打</sup>かへしてを  
くべし。御<sup>打</sup>ふすまはくれ<sup>打</sup>な<sup>打</sup>ぬの<sup>打</sup>うち<sup>打</sup>たるに  
てく<sup>打</sup>び<sup>打</sup>なし。なが<sup>打</sup>さ<sup>打</sup>八尺。又八のか<sup>打</sup>五<sup>打</sup>の<sup>打</sup>物  
なり。く<sup>打</sup>び<sup>打</sup>のか<sup>打</sup>たにはくれ<sup>打</sup>な<sup>打</sup>ぬの<sup>打</sup>ね<sup>打</sup>りいと  
をふ<sup>打</sup>と<sup>打</sup>ら<sup>打</sup>かに<sup>打</sup>よ<sup>打</sup>りて<sup>打</sup>二<sup>打</sup>筋<sup>打</sup>なら<sup>打</sup>べて<sup>打</sup>よ<sup>打</sup>こ<sup>打</sup>さ  
まに<sup>打</sup>三<sup>打</sup>はり<sup>打</sup>さ<sup>打</sup>し<sup>打</sup>を<sup>打</sup>ぬ<sup>打</sup>ふ<sup>打</sup>なり。それ<sup>打</sup>を<sup>打</sup>く<sup>打</sup>びと  
しる<sup>打</sup>べし。おもてこ<sup>打</sup>あ<sup>打</sup>を<sup>打</sup>ひ<sup>打</sup>の<sup>打</sup>あ<sup>打</sup>や。う<sup>打</sup>ら<sup>打</sup>ひと

へもん<sup>文</sup>なり。

御帳のまく<sup>枕</sup>らのなかのはしらの左右にかみ<sup>上</sup>

より一尺よをさ<sup>下</sup>げてひ<sup>脇</sup>ぢがねをうちて。み<sup>御</sup>

つのをふ<sup>角</sup>たつ。ひとつづつを左右にかけた

り。ぢん<sup>沈</sup>いろの木にてつくりてしろがねの

こをくみ<sup>籠</sup>ませ<sup>組</sup>たり。ほそき<sup>交</sup>さきのかたにか

なものをうちてま<sup>丸</sup>ろを<sup>緒</sup>をつけてふさあり。

あ<sup>總</sup>げまきにむすびたるかしらをひぢがね<sup>角</sup>

にかくべし。御あとのなかのはしらの左右

に又ひぢがねをうちておほき<sup>鏡</sup>なるか<sup>蓋</sup>ぐみ<sup>錢</sup>

を左右にかけたり。其ていきやう<sup>具</sup>だいのか

がみなり。物のぐかくるやう又おなじこと

なり。もし御まくらに御たちををか<sup>柄</sup>ば。つか

にしにてはをみなみにむけて。おび<sup>南</sup>とりのま<sup>前</sup>

へうしろを引<sup>後</sup>のべてをくべし。おとこは右

をしたにてぬ<sup>疑</sup>ればつかはにしになるなり。

その御帳のにし<sup>疑</sup>のまに。うげん二帖を北南

に。ひんがしのはしらのうちのりにしきて。

そのうへにと<sup>東</sup>う京のしとね一枚をしくべ

し。しとねのていしきやう。ひさしの定にぬ

ひめをたゝみ。二枚がなかにあてゝしくべ

し。へりのていはにしきにおなじ。これはあ

かきもん<sup>文</sup>ある兩<sup>面</sup>めんのへりなり。おもてか

た<sup>織</sup>おり物。うらうちうらなり。

そのたゝみ二枚がきたのかしらに。にしひ

んがしざまにてうのはしらにあてゝ。五尺

の屏風二帖をなかをひきかさねて一けん

がうちにたつ。そのま<sup>前</sup>へたゝみのかしらに

ち<sup>厨子</sup>あさきづしひと<sup>一</sup>ころひをたてたり。その

ひん<sup>東</sup>がしのづしのうゑのこ<sup>層</sup>しにかうごの

はこ二<sup>合</sup>がう。したのこしにくすりのはこ二

がうをく。このはこ四がうはみなおなじ

さまにい<sup>入</sup>りずみ<sup>角</sup>なるはこなり。たゞしいれ

ものをみるべし。かうごのはこにはしろ<sup>銀</sup>が



ねにてみ<sup>美濃</sup>のつぼのおほきなるつぼを二がう  
によつづつ<sup>盛</sup>いれてたき物<sup>梅</sup>を<sup>荷葉</sup>いるれうな  
り。このたき物。ばい花<sup>侍徒</sup>。かよう。じじう。くろ  
ぼう<sup>方</sup>を<sup>雲母</sup>いるべきなり。たゞしこのつぼのな  
かにきらゝのつぼひとつあるべし。このつ  
ぼのうへにしろきは<sup>針</sup>はりさ<sup>差</sup>しのやうにす<sup>生</sup>  
しの物にてぬひてうはさししまはしたるあ  
り。いれ<sup>入</sup>かた<sup>帷</sup>びらとなづく。くすりのはこの二  
がう<sup>折</sup>おり<sup>立</sup>たておなじ事なり。一がうにこの  
定のつぼ<sup>三</sup>みつ。かねの<sup>金</sup>さら<sup>皿</sup>のおほきなるひ  
とつ。くすりを<sup>秤</sup>するてつかひひとつあり。一  
がうにはかり<sup>篩</sup>。ふるひ。はし。かゝあり。つね  
のぎん<sup>銀器</sup>きのやうにつるのむかひたるは<sup>箸</sup>しの  
だい<sup>臺</sup>にはし<sup>匙</sup>かゝを<sup>鑷</sup>するてをきたり。ふるひ  
はかねのふちにすゝしものを<sup>簞</sup>はる。このは  
しかゝ<sup>匙</sup>ゝ入たるはこを帳のかたにつるをに  
しひんがしにしてをくべし。これにもいれ

かたびら同じ事なり。にし<sup>西</sup>のづし<sup>厨子</sup>のかみの  
こしに<sup>厨</sup>さうし<sup>草子</sup>のはこ二がう<sup>折</sup>おり<sup>立</sup>たてあり。  
さうしあり。二がうな<sup>切</sup>がらき<sup>角</sup>すみの<sup>合</sup>のはこ  
なり。しも<sup>下</sup>のこしに<sup>櫛</sup>くし<sup>櫛</sup>のはこ二がう<sup>合</sup>皆<sup>円</sup>ま  
ろずみ<sup>角</sup>なり。かけ<sup>懸</sup>ご<sup>子</sup>にすゝりをし<sup>折</sup>すゑ<sup>立</sup>たり。  
したに<sup>下</sup>くしも<sup>櫛</sup>の<sup>物</sup>ぐ<sup>具</sup>を<sup>折</sup>い<sup>立</sup>れたり。おり<sup>立</sup>たて  
いれ<sup>厨子</sup>かた<sup>母屋</sup>びらおなじ。  
づし<sup>厨子</sup>を<sup>母屋</sup>たつべきやう。帳のきは<sup>透</sup>を<sup>際</sup>すかして。  
もや<sup>敷</sup>のは<sup>敷</sup>しらの<sup>敷</sup>ほど<sup>敷</sup>を<sup>透</sup>すかして。この二帖  
しきたる<sup>二</sup>たゝみの<sup>二</sup>しき<sup>二</sup>あは<sup>二</sup>せの<sup>二</sup>な<sup>二</sup>かに<sup>二</sup>。づ  
し<sup>二</sup>ふ<sup>二</sup>た<sup>二</sup>つ<sup>二</sup>が<sup>二</sup>な<sup>二</sup>か<sup>二</sup>を<sup>二</sup>あ<sup>二</sup>て<sup>二</sup>ゝ<sup>二</sup>た<sup>二</sup>て<sup>二</sup>ゝ<sup>二</sup>。その<sup>二</sup>う<sup>二</sup>へ  
の<sup>二</sup>て<sup>二</sup>ば<sup>二</sup>こ<sup>二</sup>も<sup>二</sup>づ<sup>二</sup>し<sup>二</sup>の<sup>二</sup>や<sup>二</sup>う<sup>二</sup>に<sup>二</sup>お<sup>二</sup>し<sup>二</sup>あ<sup>二</sup>は<sup>二</sup>せ<sup>二</sup>て<sup>二</sup>。ふ  
た<sup>中</sup>つが<sup>中</sup>な<sup>中</sup>かを<sup>中</sup>づ<sup>中</sup>しの<sup>中</sup>ち<sup>中</sup>や<sup>中</sup>う<sup>中</sup>きに<sup>中</sup>あ<sup>中</sup>て<sup>中</sup>ゝを  
くべし。このづしと<sup>二</sup>丁<sup>二</sup>との<sup>二</sup>あ<sup>二</sup>は<sup>二</sup>ひ<sup>二</sup>を<sup>二</sup>ひ<sup>二</sup>め<sup>二</sup>ぎ  
みの<sup>二</sup>み<sup>二</sup>ち<sup>二</sup>と<sup>二</sup>す<sup>二</sup>べ<sup>二</sup>け<sup>二</sup>れ<sup>二</sup>ば<sup>二</sup>。た<sup>二</sup>ゝ<sup>二</sup>み<sup>二</sup>を<sup>二</sup>も<sup>二</sup>丁<sup>二</sup>の<sup>二</sup>き  
は<sup>二</sup>へ<sup>二</sup>を<sup>二</sup>し<sup>二</sup>よ<sup>二</sup>せ<sup>二</sup>て<sup>二</sup>。しか<sup>二</sup>て<sup>二</sup>も<sup>二</sup>や<sup>二</sup>の<sup>二</sup>柱<sup>二</sup>の<sup>二</sup>き<sup>二</sup>は<sup>二</sup>に  
し<sup>二</sup>きて<sup>二</sup>。帳<sup>二</sup>の<sup>二</sup>き<sup>二</sup>は<sup>二</sup>を<sup>二</sup>す<sup>二</sup>か<sup>二</sup>す<sup>二</sup>べ<sup>二</sup>し<sup>二</sup>。その<sup>二</sup>た<sup>二</sup>ゝ<sup>二</sup>み

のうへにひさしにたてたるやうなる三尺  
 のき丁をたつ。帳母屋ともやはしらのあはひ  
 ふたぐやうにたゝみのたつ辰巳みのすみにうら  
 をおくにむかへてたつべし。たゞし疊未のひ  
 つじさるのすみにたつる人あり。このづし  
 のうしろの屏風一帖をたつる事もあり。ま  
 た五帖をたてまはして。にしのまをもいれ  
 てに西隣子しのさうじにそへて。もやぎはのみす  
 のもとまでたてまはしたることもあるべ  
 し。つねならず帳衣架のひんがしのまにひんが  
 しにそへて。いか二つをきたみなみにたて  
 て。そのうしろに五尺の屏風を三帖たつべ  
 し。まへにたゝみ二枚をしくべし。つねはい  
 かひとつをたてゝ。屏風も一帖たてゝ。たゝ  
 みも一枚しくつねの事なり。御さうぞくを  
 かくることあらば。まづ御はかまをいかの  
 下層ものこしにみなみにむけて右をうへにた

たみて。こし腰引ひきのべてかくべし。かみのこ  
 しに御ぞ衣表にうはぎうちぎぬ衣小掛こうちぎ一つを  
 かさねて。れいのきぬたゝむやうにせお  
 りにして右をうへにてうちかくべし。かく  
 るほど御そで三寸ばかりをみせてかけよ。  
 いたく見ゑぬればわろし。もし御店からぎぬ  
 あらばそれを裳もたゝみて御ぞ衣のうへにかく  
 べし。御もあらばふたへにをしおりて御は  
 かまにならべてかくべし。もしこの御いか  
 ほか外にたつことあらば。いかさまにもきた  
 に御まくらをもむけ。又たゝみやうをもむ  
 けてかくる事あるべからず。いかさまにも  
 びんぎ便宜によるべし。  
 又このしつらひ。御帳より時にしのぎ一定な  
 らず。御所にしはれ西ならば母屋にかくすべ  
 し。もしひんがしはれ此ならばもやびさしの  
 てうど御帳のひんがしにあるべし。いかさ



晴

立

まにもはれにつきてたつべし。たゞしきさ  
き<sup>后</sup>だちの日はにしはれなればにしのまに大  
さう<sup>床子</sup>じをたてらるれば。もやのてうどは御  
帳のひんがしにわたしてたつるなり。たつ  
るやうおなじことなり。

手宮

置

西

てばこのをきやう。にしのづしのはにしに  
ありつるやうににしにあり。ひんがしのは東  
にあるべしといふ人あるべし。たゞひんが  
しにてもにしにありつるやうに帳につけて  
をくよき事なり。きさきだちの日は。ひさし  
のてうど。ものゝぐ。たゝみ。づし。屏風。す  
ずり。けうそく。き丁にいたるまでとりのく

調度

物

具

帖

硯

脇

息

べし。屏風ばかりをたてらるゝことあり。大  
宮のたびの例にて。けんすんもんの院のた

度

建

春

門

忠雅

びは。花山院の大臣殿のさたにて屏風ばか

獅子

狛

犬

御

倚

子

りをひんがしにわたしてたつ。御丁のまへ  
にし。こまいぬ。ごいしをたつるれうなり。

このひんがしにわたしてたつる屏風は表を  
にしにむくべし。

西

床子

大さうじは御帳のにしのまのもやのはしら

際

養

のきはにたつるなり。そのてい。うへはすの  
こにてながさ三尺ばかりあしのたかさ二尺

ばかりなるをふたつさしあはせてするて。

うへにかうらいをたゞはんでうのやうに

打

敷

半

帖

管

うちうらをつけてしきて。そのうへにすが

四

座

東

南

ゑんざをしきたり。そのたつみのすみに。う

四

座

四

しとらにすぢかへて三尺のき丁をたつ。わ

座

草

鞋

らうだのまへにさうかゐををく。もやのみ

座

間

毎

すのあげたるしたにつねのき丁をまごと

にたてわたす。ひさしのき丁つねのごとし。

立

后

階

隠

たゞしきさきだちの日ははしかくしのに

立

后

其

間

しのわきのまにき丁二本をならべてたつべ

し。

つねのぎ

一本

なり。

この日は

そのまより

ものをまいらするやくあるあひだ。一帖はも

たぐればうちの見ゆべきゆへに。二本をた  
てふたつがなかより物を取りいるれう  
なり。おほいかにまはりてひろむしろをき  
りしく。御丁のうしとらのすみにあたりて  
もやのおく奥組入にみれのふちにくりがたをう  
ちてとうろをかくべし。女御まいり。むこと  
り。わたましなどにこのとうろのあぶらに  
しそく脂燭をともしつけてところあらはし。も  
しはよき日吉までけたで。よき日にえ殿おほ  
ゐなどにたぶなり。わたましおなじことな  
り。もしひんがしはれにて。ひんがしにもや  
のてうどをたてらるとも。とうろはたゞも  
とのやうに御丁のうしとらにあるべし。  
ひさしののき軒のとうろ燈籠のつな綱ひるはかへす  
べし。すそのわな輪穴をかみ上へひきかへしてむ  
すびめよりかみにはさむべきなり。  
このもやひさしの物のぐ具にぐして。こし虎子の

はこ冠といふものあり。そのていうるはしき  
かぶりの冠はこのおほきさにて四かくなり。  
まさ冠ふあり。かぶりの冠はこにとりたがふべ  
しといへども。かぶりの冠はこにはかぶりを  
すふべきだいあり。このはこはむことにを  
くべし。此はこにふくさのものをぬひあは  
せたるをいれてをくべきなり。もしひめ君  
の御れうか。をく所は丁のうしろもしはち  
かきあたりのぬり塗ごめ籠のうちなり。このこ  
とつねに人しらす。  
おほかたみすをかくることは。もやはおほ  
ひみす御簾つねの事なり。はれ晴ならむかたうは  
がへ重にかくべし。ひさしもおほひみすなら  
んところははれうはがへにしてかくべし。  
おほひみすといふははしらのうへにひとへ  
りをひきちがへてすんぼうをとるなり。な  
がさはなげしのしたよりしものなげし花のは

なくぎのかくるゝ程にとるなり。あぐるこ  
 とは。もやは女房のことあらんにはさげて  
 あぐべし。き丁のてのうへまたすこしすかし  
 て。そのうへにふたこふしをすかしてあぐ  
 といふ。行幸たいきやうなどのみさうぞく  
 にはたかくあぐべし。もやもひさしもあぐ  
 るには。こはしといひていたをうすくけづ  
 りていれてまきたるがよきなり。おほかた  
 みさうぞくのよきといふは。みすよくあげ  
 て。もかうよくひきしき。むしろよくのして。  
 ちりひろひ。もやにたつる十二帖の屏風よ  
 くのしてたてなどするをよしとはいふな  
 り。屏風は春夏秋冬をまづひろげてみをき  
 てはるはいかさまにもひんがしにたつるな  
 り。もやひさしのてうどは御所のはれにつ  
 けども屏風をたつることは春をひむがし  
 にたつべきなり。屏風をのすといふはいた

くひだをすへてたつるなり。さてつぎめご  
 とにいとにてとぢあはせたるなり。もやの  
 なんどのうへにも。又うるはしきもやぎは  
 にも。みすをかけておろして。そのうへに屏  
 風をたつるには。はしごとにくりかたをう  
 ちて。やりなはなどのやうなるつなをみす  
 のうへにひきわたして。それに屏風をとち  
 つくる。うるはしき事なれども。このごろは  
 ところせしとてたゞみすばかりにとちつけ  
 たるなり。みすはなんどにかくるもみなみ  
 をおもてにかくるなり。

たいきやうのこと。

もやひさしのたいきやう。りんじきやく。ま  
 つりのつかひのいでたちのところ。大將あ  
 るじ。これらはことおほけれども。みさうぞ  
 くの行事のべちにぞむすることなし。をの  
 をのさしづを見るべし。ざのしきやうはか



うらいのたゝみのやうくはしくかき  
 つけたり。たゝみのうへにりうびんをしき  
 そんざの登者ざにはしとねをしき。大納言已下  
 はゑんざ内座なり。ゑんざといふはしとねのや  
 うなるもののまろにてへりばかりのかは  
 りたるなり。大納言はむらさきのいろのか  
 うらいのもんしたるへり。中納言はうるは  
 しかうらいのへり。宰相のはきなるかう  
 らいのやうしたるをさして。おもてはしと  
 ねのやうにあやをして。うらにはこきうち濃打  
 うらをつけたり。これをゑんざといふなり。  
 ひさしのみすをあげ。ひろむしろをしき。さ  
 しむしろをしきてちんし鏡子ををき。ゑんにむ  
 しろをしき事つねのごとし。もやぎ母屋はのみ  
 すをおろして其うへに屏風をたつること  
 つねのごとし。ひんがしみなみのはしより  
 たつべし。これはにしはれのぎなり。ひんが

しはれならばひんがしのひさしを弁少納言  
 の座ざにはなるべきなり。屏風そのおりはこ  
 の少納言のざのしもより春はたつべきな  
 り。しんでんのみなみにし西のひさしをしつ  
 らふに。みなみのひさしのむしろはしきと  
 ほしてはしくべからず。にしのひさしのひ  
 ろむしろをみなみのなげしのきはまでと  
 ほしてしくべし。みなみのむしろはにしの  
 ひさしともやと母屋のはしらのきは際にしかしめ  
 て。にしのひさしのむしろのいきあひをば  
 にしのをしたがへにしく。にしのざの弁少  
 納言のざにて。きたみなみに兩めんのたゝ  
 み三帖をしきて。そのたゝみのみなみのは  
 しはにしのつまき妻切りのつまぎのきは鉾のほう  
 だて立よりはいま二尺ばかりすぐして。つま  
 どのなからよりすこしひきいりてしきて。  
 りうびんのおもてのゑんざを一枚しきて。

大弁のざとするなり。このゆへににしのむ  
しろをみなみへとほしてしくなり。みすを  
あぐることはもかうのしもにひとへり一を緑  
みせてあぐ。されどもこの大弁のざのうし  
ろのつまどのみすはかまへてたかくあげた  
るがよきなり。もかうのうちにもまきい  
るべし。

つくゑをたてゝ嬰きやうをばす居ふるなり。其  
つくゑのしたにす簀ぎもといひてみすのやう  
にあみて。しろきす生ぎのきぬのうらつけ  
て。まはりにしろ白きへりさしたるが。つくゑ  
のひろさなるをつく机えごとのしたにしくな  
り。外記史のざにはみすをかけず。ゑんにひ  
ろむしろもしかず。なげしのうへにさしむ  
しろ鎖ちん子しはあり。あをべりのたゝみをし  
く。みどりべりといふ。つくゑあり。すごも  
なし。もや三方にみすをかけておろしたる

うへにせん軟しやうとてまんのやうにて。き  
ぬにたかきまつをほんたいにてしきのきど高  
もをかきたり。のゝ一松あるが。ひろきへ  
りのむらさきいろなるさしまはしたるを  
みすのうへにひくなり。これらしきの給ゑを  
かきたれば春をひんがしにはじめてひくべ  
し。もやのみすのもかうのしも下のきはにお  
しあてゝひくべし。もとひもをまん紐のやう  
につけてつなを綱ぐしたれどもつなしてはひ  
くべからず。つなのを緒はみすとせんしやう  
とのなかにをしかへして。へりのなかにこは  
しのいたをいれて。もかうのしも下のきはに  
をしあてゝ。はしらにとぢつけたるがよき  
なり。たけみじかくてしものすかむなかへ  
り。みすふたつかいきあるをばはなつきに  
人のするなり。そのぎ備わろし。ひとへりをひ  
きかさねてひくべし。たゞしま間はひろくて

せんしやうはせばくはちがへることかなは  
じ。はなつきにもすべし。そんざのやすみ所  
とて。外記史のざのそばなどびんぎの所一  
けんにみすかけまはして。かうらいのたゝ  
み一帖をしきて。大臣のそんざのおりはお  
ほつほををき。大納言のにはいたにあなを  
ゑるなり。

もやのたいきやうのみそうぞくおなじこと

なり。たゞしひさしもやのみすをあげまは  
して。おくのなんどのうへにみすをかけま  
はして。そのうへに屏風をたつることつね  
のごとし。さてもやひさしにひろむしろを  
しきみてゝ。もや四けんもしくは五けんにざ  
をしきびやうぶをたつ。そのていひさしお  
なじことなり。さしづを見るべきなり。弁少  
納言なをにしのひさしなり。もやぎはのみ  
すのこのをとほすやうこそかはれ。つねは

かみのこはしにつけてうちひきさげてこ  
そはあれども。これはこはしにつけてやが  
てこはしのきはよりとへもかうのしたにひ  
きいだして。もかうのしたよりひきさげて。  
もかうのしものきはよりまたみすのなかを  
うちへひきとほしてあぐることのあるな  
り。こながらとほすなり。是をみすをぬふと  
はいふなり。

びんぎの所をろくのところとして。はしら  
にくりがねをうちて。あしつをのつなをひ  
きまはして。やうくのろくをかくるなり。  
ろくにはとりのこがさねのほそなが。おほう  
ちぎ。あかぶすまなどいふものあり。とりの  
こがさねといふはおもてはしろくてなか  
へばうすこうばいにてうらは黄なるきぬ  
なり。ほそながといふはれいのきぬのおほ  
くびなき也。おほうちぎ一兩といふはひと



へなくてたゞふたつかさねたるをいふなり。あかぶすまといふはたうさのこきすは色衣ういろなるきぬをいふなり。ろくのしなじなしだいにみえたり。たゞしそむざのろくはこれにかけぐせず。もやにたてたる屏風のうちにびんぎのかたにあるじの座もやのみすのうちにまうけて。おし下逢す人のそんざ主におりあふにはいゑにとりてさもあるものにくつをとらす。又のぼりてのちわがざ我座にしかむれうにすがゑんざをまうけてすのこにしくことあり。そのわらうだもさもあるものにとらす。くつとりわらうだとりとてあるなり。くつはゐかひの上ろうとるべし。ないらん内覧のいゑにもやのたいきやうをすき家母屋大豊朱器のたい響となづけてせらるゝ事あり。みさうぞくのていつねのもやのにおなじ事なり。そむぎ以下の上達部にちいさき大ばん

をすえてがうしのやう合子様なるにてきやうをすふるなり。だいばんのていそんざもおなじ。たゞしよこざの大納言横坐已下はむかひざなり。大ばんはふたつをなかをすかさずをしあはせてきやうをすふるなり。その臺盤縁のをしあはせたるなかにわたりてふちのうへ上にくだものをすふるをなかずみ物といふなり。その大ばんのばちあしのしたにわたりてくにのきぬをゆたんにしたるをつけて大ばんごとのあしのしたにしきまはしたり。うしとらのすみよりはじめてしくなり。このゆたんのすみをばす炭櫃びつのすみのやうにすぢかへてさばぐちにをるなり。それはかうけ高家のいゑにする事なり。人のする事なれどもおりやう折様ならひたるにあしからず。か上達部のうらかきる口つくしければ。かんだちめ殿上びととることな





大將あるじの事。

大將あるじのみさうぞくのやうはしんでん<sup>疑殿</sup>  
にてひさしのたいきやうのおなじことな<sup>大雲</sup>  
り。それにふのものせうさくはんのびん<sup>府者</sup>  
ぎのらうのうへに兩めんべりのたゝみをし<sup>廊</sup>  
く。しやうさう<sup>將曹</sup>以下のざにはべちにふたへ<sup>別</sup>  
ばにしきて下らうをうしろざにすふるなり。  
大ばんのくろぬりなるをたつ。みどりの<sup>緑</sup>  
へりのたゝみをしく。にしはれのいゑならば  
しんでんのみなみにしのすみにあたりて。<sup>西</sup>  
いぬゐたつみざまにすこしすづかへてあく<sup>帷</sup>  
をうちてしくべきなり。こむのあくなり。こ<sup>紺</sup>  
のざのくはんばいにはゑふをへたるくら人<sup>勳孟衛府</sup>  
五ゐよかるべしとて。いづもの大將殿のに<sup>出雲榮長</sup>  
はなりゆきとまさすけとをめされき。かや<sup>存</sup>  
うのことはなちてはぞむすべきことなし。  
さしづしだいをみるべし。所やくをせんに<sup>役</sup>

はてながをせば尺をさしてまづよれ。こと<sup>手長笏</sup>  
人をしきにものをすへてもちてきたらばを<sup>折敷持</sup>  
しきをもたせながら物ばかりをせうくと<sup>敷</sup>  
りするよ。かならずみなすふる事にあらず。  
われ又やくをしてをしきをもちてよらん<sup>手長</sup>  
に。てながをしきながらとらばかならずを<sup>手長</sup>  
しめ。てながとはいはいせんをいふなり。<sup>陪膳</sup>  
火をとす事は三人のやくなり。とうだい<sup>燈臺</sup>  
にあぶらつきすへてもつことさらにすべ<sup>油杯</sup>  
からず。まづうちしき次にとうだいあぶら<sup>打敷燈臺</sup>  
とよるべし。さしあぶらによらんには。とも<sup>指油</sup>  
してもちてもととうだいにあるにすへかへ<sup>元居替</sup>  
て。もとのをととりてかへれ。いれくはへなど  
することなかれ。うるはしくはかねのあぶ<sup>鉄鉢子</sup>  
らつきなり。かねのはさみとてさいしのや<sup>具</sup>  
うなるものをかきあげきにはぐしたるな<sup>櫛</sup>  
り。たいきやうのをんざとはことはてゝお<sup>坐大</sup>

床 土 高  
 ほゆかにおりゐて。かうぶつとてつちたか  
 杯 折 殿  
 つきををしきにしたるさかなくだものをま  
 莖 積 粥  
 いらせ。又いもがゆなどまいらせて。さいば  
 樂 安 名 尊  
 らあなたうとなどうたひ。ことびはなどあ  
 筆 獨 書  
 れば。もとゑんにしきたる一世の源氏のざ  
 のたゝみをとりのくるは二人のやくなり。  
 一人とる事なかれ。とりのけてのち人數に  
 まかせてすがゑんざはしく。ろくの所に。こ  
 祿  
 と。びは。ふえのはここに をくなり。□  
 □ うへのやくをしによるみちをみなみの  
 げんをつかふなり。弁少納言のざ  
 のやくには少納言のざのしもよりよるべ  
 し。これらはつねのことぞんせぬはわろし。  
 五せち所のこと。  
 五せち所はびんぎの所によるべし。うちま  
 母 屋 庇  
 かせては四けんもやひさしあるべきなり。  
 そのうちにびんぎのもやひとつばを帳のま

としつらひて四方にみすをかけてそのうち  
 壁 代  
 にかべしろをひきまはしてあぐべし。もや  
 母 屋  
 ぎはのみすもあげて二けん三けんありとも  
 き丁をたてわたせ。この丁の三方には五尺  
 唐 繪 和  
 にても四尺にてもからゑやまとゑなりとも  
 たてまはして。そのうちにうげん三帖をし  
 く。はしまくらにしくべし。そのまへのひさ  
 しにうげん二帖をしきてそのうへにりうび  
 んをしく。そのうへにしとねをしく。三尺の  
 き丁をたつ。ひだりみぎびんぎによるべし。  
 四尺の屏風をたてゝものゝぐをく事つねの  
 物 共 置  
 ごとし。ひさしのてうどのていなり。すゞり  
 調 度 鉢  
 のはこけうそくきやうだいなどはあるべか  
 息 鏡 臺  
 らず。所もせばし。たとひありともにかゝの  
 二 階  
 したなどにをくべし。二かゝのうへの火と  
 汁  
 りはゆするつきにをきかへてはしにをきた  
 器  
 るもあしからず。よごと夜の毎にのぼるものなれ

ばびんぎよきれうなり。ひさしにはまごと  
にき丁をたつべし。かうらいむらさき所に  
したがひてしくべし。さしむしろ額子ちんしを  
をく。ゑんにむしろをしく。さしむしろある  
所にゑんにむしろしかぬことはだいきや  
うの外記史のざにはしかず。まいりのつぎ  
のあしたにうちで打出を運はこぶ。又かうらいを  
一帖帳のまのゑんにしきてそのうへにと東う  
京のしとね一枚をしきたり。そのひだりに  
いだし火を桶けを盂をく。ふりうこゝろにあり。  
たゞしこの火おけ右なりとも御所につきて  
をくべしといふ人あり。その火おけのまへ  
に。すへなうさうかいを擇や鞋ないばこのふた  
にをきて。ゑり影ぐしまさぐしかんざしをぐ  
して。五せち所ごとにをきまつるなり。ひめ  
君のれうなり。ひめ君の昇のぼるともには。火  
とりにしきの縁へりのしとね三尺のき丁とを

ぐしてのぼるを殿上人をのくこれをも  
つ。よ夜ごとの事なり。まいりする五せちのわ  
らはしもづかひ女房いゑよりさうぞきてま  
いるなり。ひめ君は五せち所にてかみ髪あ上げ  
のさうぞかすこと也。さうぞくはよごとに  
かはる。しき式もくあり。女房はくるま車よりお  
りて五せち所へいりはてつればやがてちが  
ひてかん間所のかたよりいづるなり。ひめ君  
のぼりており下ぬれば。わらはしもづかひも  
さうぞくをぬぎをきてきがへをきていでぬ。  
おほかたは五せちのあいだはひめ君い下  
さぶらふべきことなり。わらはしもづかひ  
のさいしひめ君のかづらかむざし差さしぐし  
とりぐして。うちみだりの打は乱このふたにい  
れて。二かゐ心におくべし。わらはしもづかひ  
のさうぞく。こゝろえたる御前ごせしてよくた  
ゝみて。お帶びをもちてゆひてをくべし。わら



はのうへのはかまかさねながらたゝむべし。ぬぎいづることなかれ。ものいみは一ど物忌度にきりて。かみをたゝみてなかにいれて。へしてよごと夜毎に四すぢづつとりていでてつくべし。物いみはそく横飯ゐをつけてきりてつくるをいみじきことにすれども。なかによせてふたところばかりまいりごとにそくゐをつけて。けう精らにきりてつけたるあしからず。まいりませぬ五せち所にわらはしもづかひたゞのさうぞくをきてまいりて。五せち所にてきるなり。それにはしもづかひのもつほとることあるべからず。うちいではまいりのつぎのつとめて。ながび長櫃つにいれてあかぎぬの仕丁昇かきてまいりたるを三げんならばいだし火をけの左右のまにすべし。やのびんぎ屋便宜によるべきなり。まのかずおほかるには三げんをいだしてなをしもわら

はのさうぞくをもいだすなり。たゞしうちいで四具ぐにはすぐべからず。四ぐありていだすべきところなをあらばわらはのさうぞくをいだすべし。うちで打出のし仕様やうつねのごとし。五せち所のうちではうはぎなし。うちぎぬのうへにからぎぬにてあるなり。はかま又いだすべからず。近代人まねといだす人のあるみぐるし。わらはのさうぞくをいだす事は。くるまよりいだすやうにまづはかまを三尺ばかりひきいだして。そのうへにかざみ汗衫のしりまへとをひきいだして。あこめ細のそでにかざみかさねておくなり。そでなどのいだすほど所によりなげしによるべし。かざみのしりまへはながらかに二三尺もひきいだすべし。そでは右をいださば猶端袖はたそではかへすべし。あこめのつますこしなどいだすべきなり。一けん二ぐ

をいだす。むかひざまなり。

ひさしのみすにこをつけてひめ君ののぼる  
時びんぎの所をあぐべし。とうろは帳燃 横の左  
右のまの軒のきにつるべし。そばにもつるべ  
きところあらばいくつもつるべきなり。大  
だいり五内 裏せちどころ。さうねいでん常 寧 殿 南のみな  
みのにし。きたのにし。兩所のわらはこそ帳  
だいのこゝろ蓋 試みのよなかのつまどよりのぼ  
ることにてあれ。それもなをしもゑんより  
のぼせて。みなみのめ馬 道だうのつまどよりの  
ぼる。つねのぎなり。

御覽せぬ所のわらはしもづかひは。わらは童  
御覽の日はまいらず。かくるゝなり。御覽す  
るところもそのよはひめ君のぼらず。やす  
みの日といふなり。御らんずるところぐ  
のわらはしもづかひばかりまいるなり。さ  
うぞくか汗 衫みのおもてうへのはか袴まのおも

ており物織なり。かさねのはかまうちぎぬあ

こめのおもてあやなり。あこめのかずこゝ  
ろにあるべし。つねはふたへひとへなり。か  
ざみをもあまたをめらかし。かさねのはか  
まををめらかし。かさねうちぎぬかざみの  
うらはかまのすそにでいしてゑ泥 繪 淡をかきだむ  
ことつねのことなり。かざみのおもてのふ  
たへおり物こそめど目 遠をきことなれども。中  
納言時た忠の五せちいだしたりし御覽に  
けん建 春 門すんもん院よりありしこそ。もえぎの  
かざみにむらさきの糸もてり龍 圖んだうおりた  
りしか。□ひら平 絹ぎぬのかざみうへのは  
かまうちぎぬまたつねのことなり。これも  
いくへもかさねだみゑもかき□るこ  
ころなり。す受 領らうのなどはひら平ぎぬにてあ  
るべきなり。御覽のしもづかひ下 仕 裳 蓋のをもつぽ  
とる事取ひがことなり。まいりのよはやくを

すればつぼとるなり。やくもせでたゞせい  
 りやうでんのつぼ涼殿におるといふばかりに  
 て。つぼとることあるべからず。ものこしを  
 もろかきにはゆひながら。ひだりのをわき  
 のかたへかくして。みぎのかた方のかぎばか  
 りをさげてゆはるゝ人々あり。それをしる  
 べからず。いゑゝのことなり。たゞもろか  
 ぎにゆひて。さがりをとりあはせて。ひら平緒を  
 かくるゝやうにうへざまにかへすべし。じ  
 じうでんとせいりやうでんのあはるのなが  
 はし橋はうしとらにすぢかへたるが。わらは  
 のまいらむをりつかれたらん殿上人かぎ  
 みのしりをくちのかたを御所よりかつはお  
 もてを見かつはわらはのかみ髪をみせんため  
 なり。しさい子細をしらずひがせらるゝいまや  
 うの人々のくせか。しもづかひにつかむ織  
 ら人もこゝろありて仁壽殿のはしをもおろ

すべきなり。つち土にゐんにもよくしてすふ  
 べし。  
 うちで火をけしとね。ひめ君おりなばよる  
 はひき引いれてあしたごとにいだすべし。御  
 覽の日のわらはのさうぞくを女院宮ばらな  
 どよりたう日五せち所へおくらるゝことあ  
 らばつかひに女房のさうぞくをた給ぶべきな  
 り。もからぎぬこきはりばかまこれを女房  
 のさうぞくといふなり。つゝみにいれずと  
 りかさねてたぶなり。かさねやうならふべ  
 し。  
 五せち所にかむだちめたちいらればくしは  
 やな柳ゐ宮ばこにいれてまいらすべし。  
 一の所の五せち所にかんだちめ殿上人まい  
 りてたち立かはらけありてうたうたひなどせ  
 らるゝ事あり。いみじ北陣きことなり。  
 まいりのよきたのちんにてずいじんつかふ



人は。わがにても又さらある人は院殿などにも申うけて。隨身にたちあかしせさせらるゝ人あり。

まいりにはひめ君のくるま女房のわらははびらうなり。卿しもづかひのくるまあじろなり。次所つぎのところにひめ君のせんくつぎの五ゐなり。束帶そくたい。女房已下のせんくゑうなり。一の所はくら人五ゐ六位もあり。これも女房以下のゑうそくたい。束帶ひめ君ののぼるすみとりはいづれのもくら人五ゐのするなり。そくたい四人なり。たゞ五せち所へむかふ人はよきほどなるいくわんにてむかふべきなり。御前ごせといふ物はさぶらひのつかさある五位ゑうなどをいふなり。衣冠いくわんする程のものなり。

ひめ君のさうぞく。

うしの日。あかいろのおり物のからぎぬ。

ぢずりのも。すはうのあこめひとかさね。地壇あをきひとべもしはこきひとへ。こきはかま。あかいろのあふぎ。七尺のかつらから物。

とらの日。あをいろのからぎぬ。紫むらさきすそ末濃ごのも。でいゑ。すはうのあやのうちぎひとかさね。こきうちぎぬ。こきはかま。あをいろのあふぎ。めぞめのくんたい。ひれおり物。むらさきのいと。これにあたらしくまうくべし。假變ひたひ。かみあげまうく。かんざし。さいし。紋子四すちあるを本所にまうく。絲鞋からぐし。したぐし。ゑりぐし。こぐし。しかい。これらはくら人がたにまうく。

たつの日。あをずりのからぎぬ。あこめ。

こきはかま。めぞめのも。おなじきくんたい。ひれ。あかひも。ひらてかいをしたれ。

心は。これはおり物。あをずりの扇あたらしくまうく。

わらはのさうぞく。まいりのよはいかさまにもつゝじのかざみ<sup>汗衫</sup>。おもてあや。うへのはかま。おもてたゞきぬしろくはりてやうしてこきうちうらをつく。あこめすはうふたつ。あをきひとへ。こきうちぎぬ。こきはりばかまなり。まづはりばかまをうへのはかまにかさね。こしをきむずる人の右にむすばんずる定におもひあてて。うゑのはかまにつらぬきてすそよりひきいだす。やがてこしもうへのはかまの右のかたよりすそへひきいだしたり。かくてかさねのはかまとはいふなり。それをととりてわらはのはかまをぬがせてきす。うへのはかまかさねながらきすれば。まづはりばかまのこしをゆふ。すそよりいでたるをか

みへひきあげずして。たかのもとをししたるほどにむすぶやうにむすべば。くりいだしなどせねどもこれをひするなり。さてうへのはかまは右をうはがへしにしてこしをひきまはして。ひだりのうしろにかぎにむすびて。いたくさがりたらばこしにをかふべし。さてのちはりばかまのすそをひろくひろげて。もゝだちのぬひめをうへになして。うへのはかまをもこの定にしてまたのをふますべし。あこめをととりてうしろにまはりて。うちぎぬひととりかさねて。くびをみつにをりすゑて。ひとへもきぬもくちをみせて。右をしたがへにてきすべし。くびをよくひきちがえて。まへをおさへさせて。したおび<sup>下帯</sup>をととりて。うしろにまはりてわきのしはをよくをしいて。わきのぬひめのまへのかたをととりて。うしろのをば身にをし



つけて。まへをうへにうしろざまにひきな  
すやうにゆひこめさせて。おびをあてゝ。う  
らうへかくすべし。おびをむすばせてのちか  
ざみをと<sup>唐衣</sup>りて。くびをと<sup>外様</sup>ざまにをしなして  
きす。かたをよくをしさ<sup>汗衫</sup>げて。まへをひろげて。  
ひきちがへておさへさせて。おびをと<sup>上</sup>りて  
うしろにまはりて。か<sup>汗衫</sup>ざみのしりのわきの  
もとをうへ<sup>上</sup>ざまにかへして。おびをゆふべ  
し。ひだりをばおほく三寸ばかりかへすべ  
し。うらうへにみゆべきなり。さてのちまへ  
にまはりて。か<sup>合</sup>ざみのまへをうはがへをう  
へざまにおしあげて。おびのむすびめをか  
くしておびにはさ<sup>面</sup>むなり。したがへも<sup>「か駄」</sup>く  
して。まへをば左右をもあは<sup>合</sup>せにしてわき  
のしたよりうしろへ<sup>引</sup>ひきのべてひかすべ  
し。か<sup>合</sup>ざみのまへはもとよりをもあはせに

おりたる物也。さながらまへをちがへてお  
びをあてゝすべきに。お<sup>髷</sup>びのむすびめもか  
くさんれう。又たゝみながらしたるは。うし  
ろにひかれてまへのひろければ。ひろげて  
あてゝうへ<sup>秘説</sup>ざまにおしかくしたるかた<sup>秘説</sup>く  
ひせ<sup>秘説</sup>ちなり。さてのちか<sup>秘説</sup>ざみの右のはたそ  
でをうへ<sup>秘説</sup>ざまにおりかへして。あこめうちぎ  
ぬひとへのそでぐちをみせて。か<sup>秘説</sup>ゐな<sup>秘説</sup>は  
む<sup>秘説</sup>ほどをよくおして。手をもてお<sup>秘説</sup>させて。す  
き<sup>扇</sup>あふ<sup>扇</sup>ぎをもたす。そでのうへをもよくお  
してそでの<sup>扇</sup>はたをはねさすべし。ひだりの  
そで<sup>扇</sup>は身にかゝるなをひきそへさせてはたら  
かさず。か<sup>扇</sup>ざみの<sup>扇</sup>はたそで<sup>扇</sup>はひきたれたり。  
さてのちもの<sup>扇</sup>い<sup>扇</sup>みをつく。  
<sup>紅</sup>くれなゐの<sup>袴</sup>うすやうをひろ<sup>袴</sup>さ三分ばかりか  
さ<sup>髪</sup>ねながらきりて。右の<sup>耳</sup>み<sup>耳</sup>のまへのほど  
のか<sup>髪</sup>みをつみあげて。わけめより二寸ばか

りさげて。そのしたよりひきとほして。手を  
うしろにむけてかたかぎにむすぶ。しもへ  
さがりたるてはすこしながく。かみにうし  
ろざまなるはすこしみじかゝるべし。むす  
びめのかしら首はすこし五分ばかりはしろ  
くて。このてはあかきかたのうへにてある  
なり。いま一すちをとりてひだりにまはり  
て。左のみゝのうしろに。又てをうしろにし  
て右の定につく。もとはものいみは右をさ  
きとして。うしろにもつけてみつ三をつけた  
れども。このいゑ家の習ならひにてかくふたつ  
をつくるなり。左のまへによせて。もの物いみ  
のかしらのさしいでたるをひねりかへし  
て。あかくみせてつくる人あり。ゆき壹岐のかみ  
もりなりがたう無一のやうなり。されどもいま  
はしろがしらになりたり。右の物いみは  
かみにうしろへむきたるてを手まへざまにむ

けてつくることあり。つねに人しらず。おさ  
なからんものの。ひたいがみ額すきなどした  
らんに。ものいみをつけんをりかくすべし。  
人しらず。ひす秘べし。  
かざみのな汗衫がさたちやうあり。うへのはか  
まのまたのこのなし。あこめ小幅うちぎぬひと  
へわきあくべし。それがきせよきなり。わき  
あかぬあこめのながきなどにあひてみじか  
くきせなし。わらはのすがたをよくするを  
上ずとはいふなり。  
かざみのひだりのはたそでのたもとのすぢ  
を五六寸ばかりほころばす人あり。ゆだち  
となづけたり。ぞく俗のひがごと辭事なり。ぬひふ  
たぐべし。かざみにゆだちをあくることは。  
左のわきのぬひめのまへをたもとまでほこ  
ろばかして。くみ組にてひも組をつくるなり。こ  
のぎ儀つねならず。のり賭ゆみの射手いてにいたりた

るさい相の中將の五せちをたてまつらんに  
あくべしとぞ申つたひたる。物いみはひろ  
くきりつればかみのおほくとられて。かみ<sup>髪</sup>  
のはだみえてわろし。すくなくとればさが  
りくだりてわろし。物いみのひろさをはか  
らひてかみをばとるなり。たうにちはさし<sup>當口</sup>  
ぐしといふものを右の物いみのかしらによ  
こざまにさすなり。このくし<sup>此</sup>これにはさゝ  
ず。ながさ<sup>長</sup>六七寸ばかり。はのたけ五分ばか  
りあるをみねのかたへよくそらしあげてな  
かをさしたるとぞ申す。  
わらはさうぞくの寸ほう。

かざみ。しり一丈五尺。まへ一丈二尺。ゑ  
り一尺にして。三寸をいだしておびにす。<sup>帶</sup>  
おほくびのすそ六寸いだしてひろきをし<sup>下</sup>  
もにす。まへよりおほくびはかみひろに<sup>上</sup>  
すべし。そでのひろさふたのにて二尺一

寸。くびのたかさ二寸。くびのながさ三尺。  
かりぎぬのくびのやうにさすなり。せよ  
りくびをいだす。はたそでおもてばかり<sup>面</sup>  
をなをしそでにす。うちたれ二尺三寸。  
うへのはかま。たけ四尺三寸。このなし。  
あしつぎ<sup>足襪</sup>一尺二寸。すそのひろさ一尺三  
寸。ひろきがよきなり。こし一丈二尺。  
あこめ。たけ四尺一寸。うちたれ一尺三  
寸。身のひろさ一尺三寸。わき七寸にあく  
べし。

かさねのはかま。ながさ九尺五寸。せたま<sup>かい</sup>  
たにぬふ。こし一丈三尺。みのをひとのを<sup>三幅</sup>

一尺一寸におりて。おほかた一尺  
七寸にぬふべし。

しもづかひのさうぞくの寸法。<sup>仕</sup>

きぬのながさ五尺五寸。そでぐち二尺一寸。  
はかまつねのごとし。からぎぬつねのごと

し。うちぎぬは。きぬのたけより六七寸ばかりみじかくすべし。ものながさつねの定なり。はしたのみじかきのなし。もんむらすり。きぬのかずつねは三。御覽四。  
このわらはのさうぞくのやう。むことり。女御まいり。五せち。女御の所あらはしなどのさうぞく。かざみのおもてのおりもの。かさねいつへ三へ。うらだみゑをかくことつねのことなり。うへのはかまのおもて。かさねのはかま。あやくれなわうち。三へ五重することつねのことなり。あこめ五三二又つねのことなり。ひらぎぬのうちさうぞく。この定にかずあるつねのことなり。たゞし女御まいりむことりなどにはひらぎぬのうちさうぞくあるべからず。五せちにとりて。おほかたはくににいださんわらはのさうぞくは。ひらぎぬにてあるべきなり。人によるべ

きことなり。わらはにとのゐさうぞくといふことあり。つねに人しらず。うちぎぬひとつかさねたり。いつへあこめにはりばかま常のごとし。そのうへにかざみをきるなり。くびのをりやうはたそでのかへしやうつねのごとくして。おびをせで。からぎぬのやうにきせて。うしろのわきのもとうらうへ。まへのわきのもとうらうへをあこめにとちつくるなり。つねに人とちどころしらず。ひすべし。うへのはかまをきず。おびせぬゆへにとのゐさうぞくといふなり。むことりのとことあらはしなどせざらんさきにきるべきなり。しもづかひのさうぞく。れいのながききぬのすこしみじかきがよつひとつにうちぎぬかさねたり。たゞしうちぎぬのすそのきぬよりは七八寸ばかりみじかきなり。いろこ



ころにあるべし。つねはまいりのよの夜はし白ろきに濃こきう打ちあを濃ひとへなどにてあるなり。からぎぬ濃むめ梅やなぎ柳あを青うちつねのこ打となり。こきはかまつねのことなり。まづはかまをさす。こしのゆひやうわらはにおなじ。次にきぬにうちぎぬひとへをかさねて。くびを折おり居すゑて。右をうはがへにてよくひきちがへてきせて。おびをとりてうしろにまはりてをしまはしてまへにゆひて。はかまうるはしくひろげ。きぬのすそもひろげをきて。からぎぬをきせても裳をととりておほごしを中な折かおりにしたへおりて。うしろからぎぬのすそをすこしゆひこめて。おびのうへにあてゝ。ひたこしをうらうへのわきのしたよりまへにまはして。もとのおびのむすびめのうへにもろかぎにむすびて。さがりたるをとりあはせてひらをのやうにかへ

すべし。したおびにかへしてするがよきなり。ものこしをむすばんにつよくひくべからず。うちこしなどはひききることのある也。さがりはたけとひとしかるべし。もろかぎはおほかたのこしのながさによるべし。さがりばかりぞたけとひとしかるべき。さがりのうらうへにかぎはあるべし。も裳にはあ頭かちの幅といひてうらうへにみじかきのあり。しもづかひのにはなし。ものすそはきぬのすそのうへにひろげてをくべし。からぎぬのまへひだりのつまをとりて。おびよりしたへとをして。みぎのつまをとりて。わづかにむすびたるが村よきなり。つぎに似さいし子をさすべし。むら濃ごのみつくりの緒ををつけたり。まづむら中ごをとりてな折かをりにとりなして。ひと一とむ結すびしてさいしをつらぬくべし。たゞしかた片かた方をすこしながくすべし。



いたゞきよりひきこさんよういなり。さいしをひだりのてにとりて。しもづかひにむかひてたちて。わけめの右のかたのかみ髪をすこしさいしにてすくひて。わけめをこして。又わけめの左のかたのかみを又すくひて。さいし子のさきのいでたるに。このむらごのいとのかたくをわけめのうへよりひきこして。さいしのさきからむなり。そのからみやうならふべし。ひすべし。本に見えたり。さればいとはうらうへにみ耳のうへにさがりたるなり。かたのまへにびん髪に共ぐしてさぐべし。いたくひたいによせてさしつれば。うつぶしなどすればおつれば。かづら髪のわたりのほどにさすべし。さてのちすぎあふぎをもたすべし。これもたものうへよくおしてもちてそでぐちをみすべし。このきぬのわきのあきたる開がきせよきなり。

ものこしのかたかぎをかくしてする人あり。さいしのからみやうもかはる。いへ家の事なり。  
五せちのはわらは童二人なり。四人八人などあるは御ぐけい殿の女御代だいなどのくるまにのるをりのことなり。しもづかひ二人つねのことなり。五せちのまいりをせんには四人あるべし。ひめ君の持ちんよりをる几。き丁をよほうにさしたるもたんれうなり。き丁のすみをばくら人五ゐとりあはせてゐる。近代はしもづかひさ御さず。ごせ前のさしたるなり。しもづかひもわらはのつぎにたゞゐるなり。  
まいりのよは先まづきたの北ちん陣に。ひめ君の車よりはじめて。うしをはづして櫓しちにきて。ちん陣にむかへてたてゝ。まいりする五せちのまいりあつまりてのち。殿上人まい

りて上らうのひめ君よりしておろす。遠えん  
だうを司ちんより五せち所までしく。さうぞ  
くしまづしもづかひをおろして。もん敷のう  
ちにひだりのわきにたてゝ。さいし子をうち  
みだりのはこのふたに女房八人しもづかひ  
四人これを入たるをとりて。まづしもづか  
ひにさして。もの左のつまさきをととりて。わ  
きのしたよりまへに引出して。右のつまさ  
き右のたもとのうへよりとりて。たもとの  
うへにつまさきをわづかにむすびあはせた  
るを。つぽとるとはいふなり。されば裳もの後  
しろは。かみ上ざまにつぽを中たるなかに髪か  
みさいし子のをなどはいたりたり。きぬのすそ  
はたじもとのまゝにうちひろげてひかせ  
たり。さてのち女房の一のくるまをひきよ  
せて。くちより女房をおろして。しだい次第にさ  
いしをさして。殿上人つきて五せちどころ

へのぼす。あふぎをさし。もをひきたり。女房  
おりはてゝのちわらは二人か汗ざみのしりま  
へをひきてのぼる。つぎにしもづかひ四人  
しだいにのぼる。つぎにき丁さしたるうち  
にひめ君を御前ごせいだきてのぼる。一の所の  
五せちのひめ君をばところの縫ざうしき色いだ  
きてのぼるべし。女房は間かん所のかたより  
やがていでぬ。おほかたに下さぶらふべきな  
り。ひめ君わらはしもづかひ仕ばかりぞとま  
りてかみへはのぼるなり。  
まいりのよは帳だいのこゝろ試みといふ。し  
もづかひはやがてつぽとりながらのぼるな  
り。これにならひてやくもせぬ御覽の日な  
どつぽとる人あり。ふしぎなり。まいりをせ  
ずともまいりの夜よつぽとりたらんはなんに  
はあるまじけれどもつぽとらであるべし。  
一の所の五せちにはわらは二人しもづかひ

四人うへぞうし<sup>上</sup>二人ひすまし<sup>纏</sup>二人あり。わらはしもづかひのさうぞくはつねのごとし。うへざうしはいつ<sup>五</sup>あこめにうちぎぬ<sup>細</sup>ひとへはりばかま。ひすまし三あこめにうちぎぬ<sup>打</sup>ひとへもばかまをきるなり。をのをのでいゑ<sup>泥</sup>あふぎをもつ。ひめ君のちにちんより五せち所へいりてゐるなり。これらはのぼらず。

さい宮さい院女御<sup>代</sup>だいはわらははあれどもしもづかひはしり<sup>走</sup>わらはのさうぞく<sup>襦</sup>をするなり。あこめうちぎぬひとへにはり<sup>襦</sup>ばかまをきてそば<sup>唐</sup>をはさみてかざみをきたるなり。まへはからぎぬ<sup>衣</sup>のやうにひろげて。ついたてにきせて。しりはうらあはせにおりて。わらは殿上のしりながのやうにかくるなり。あしだ<sup>履</sup>をはく。あふぎ<sup>子</sup>うち<sup>糸</sup>はをさす。又けいし<sup>鞋</sup>しかいといふ物あり。けいしはは

りばかまをきてそば<sup>唐</sup>をはさみて。わきながのあこめうちぎぬ<sup>下</sup>ひとへ<sup>仕</sup>をきて。おびをして。そのうへにもをしもづかひのやうにきて。つぼとりたるなり。これもあしだ<sup>履</sup>をはく。さいしをさしたり。扇<sup>糸</sup>をさす。しかい<sup>鞋</sup>ばきは。あこめうちぎぬ<sup>二</sup>ひとへ<sup>編</sup>をきて。そのうへにふた<sup>末</sup>のなるすそ<sup>濃</sup>ごのはかまをきて。した<sup>下</sup>のはかまきて。くゝりをすへてかみをあげて。く<sup>箱</sup>んたい<sup>帯</sup>ひれ<sup>代</sup>をつけて。うちはた<sup>帖</sup>うがみ<sup>紙</sup>をもつ。女御<sup>官</sup>だいはし<sup>代</sup>かいはなし。さうぞくはかみあげの女<sup>官</sup>くはん<sup>官</sup>のするなり。うるはしくはし<sup>代</sup>かいはくべきものなり。内侍のすけもぐしたり。女御<sup>代</sup>だいはし<sup>代</sup>かいはきをしもづかひといふなり。御くるまのとも<sup>紅</sup>に十二人。さうぞく<sup>紅</sup>くれなゐ<sup>紅</sup>のはりばかま<sup>帯</sup>そば<sup>帯</sup>をはさみあげて。うへ<sup>糸</sup>にあこめ<sup>細</sup>をきておび<sup>帯</sup>をす。からぎぬ<sup>衣</sup>をきる。もをつぼとる。



ぬりあしだをはく。さいしをさす。透すきあふ  
ぎもつ。

打出うちでをすること。

一けん問に二ぐ具をいだす。いろ色をりによるべし。まづ先片袴かたばかまをよきほどにひきい  
して。其うへにきぬのまへをひとへをぐし  
て。したふたつばかりをよくひきいだして。  
なげし長押のきは際によくおし出したるがよきな  
り。さらでいちど一度にみなひきいづればきぬ  
のきりくちのうつぶしになりてわろくみゆ  
るなり。ひきいだすことはおほい大床かにより  
てすべし。みち道などにてあらむはいたくな  
がく出いだしなどすべからず。ひろ弘廂びさしな  
どにてあらむにはすこしくつろかにいだす  
べし。きぬのすそをはしら柱寄よせに縫けて。か  
た身をいたすにとりて。せぬ背縫ひなどをはし  
らのとほりにあたるほどにひきいだすべ

し。たゞしなげしたかきところはみじかく  
もあるなり。それはからふべし。はかまはき  
ぬのすそ七八寸ばかりをひきあげて。すそ  
をたらさで。はしへいづることは。ひとへよ  
り四五寸ばかりあまるほどにすそをいだす  
べし。きぬのこづまのきはよりはじめて。す  
ゑびろにいづるなり。そのはかまひとへの  
うへにも裳ものこしをきぬの袖のしたよりこづ  
まのもとよりながくひきいだしてすそざま  
にひきのべて。きぬのすそをまづうるはし  
くしをきて。みすのしたよりてをいれて。き  
ぬのくびをとりてうへざまにをしをりをく  
やうに下しなして。そでをうるはしくぬひめ  
をししたになすやうに袖ぐちに手をいれてう  
らうへ表ざまにひろぐべし。かま乳へてきぬの  
すそのかたへそでををきやるやうにして。  
からぎぬの袖より二寸ばかりひきいれてか

さねをくべし。一けん<sup>具</sup>に二ぐ<sup>土</sup>を出す。うらう  
 へこの定なり。このす<sup>裳</sup>そのうへはしら<sup>柱</sup>よせ<sup>寄</sup>  
 のきはよりものかたづ<sup>片</sup>まをとりて。はしらの  
 きはごとくにひきいだすべし。きぬ二ぐが  
 あはひをひろくいだしなして。そのあはひ  
 にき丁<sup>丁</sup>をひろくみせていだすを上ずとい  
 ふなり。きぬ<sup>几</sup>をひきのべていだして。あはひ<sup>夾</sup>  
 をせばくて。きち<sup>丁</sup>やうをしほくとすくな  
 く見するをわろしといふなり。すがたよき  
 女房のはしらのきは<sup>際</sup>にゐて。かた身をおし  
 いだしたると見ゆべきなり。みなみおもて  
 なんげんもひきわたしたるやうになんげ  
 んもいだすなり。きぬのかさなり。わたつき  
 などをよくいだしなして。きぬ<sup>切</sup>をうつぶし  
 ならやうにいだしなすまじ。きりくち<sup>口</sup>など  
 を物をきりかさねたるやうにすべし。なげ  
 したかき所にたゞひきいだしつれば。うへ

のきぬはすゝみいでてうつぶすなり。まづ  
 したをひきいだして。なげ<sup>長</sup>しのきはにため<sup>押</sup>  
 て。さりげなくてしをけばうつぶす事はな  
 し。きぬのつまのかたをいたくひきいだす  
 まじ。さきとがりなるやうにてわろし。なげ  
 しにひきそへたるやうにいだすべきなり。  
 そでのうへにあるみすはしものへり<sup>間</sup>をかな<sup>毎</sup>  
 らずあらはに見するやうにまごと<sup>間</sup>にあらは  
 すべし。もしきぬのあつきうすきあらば。<sup>厚</sup>  
 つからんをばおし<sup>引</sup>へし。うす<sup>薄</sup>からんをばと  
 ぢいと<sup>糸</sup>などをひき<sup>切</sup>きりてふくらめ。はしら  
 のきはのちん<sup>襷</sup>し<sup>子</sup>などをとりて。した<sup>下</sup>にさし  
 かひなどすべし。はかまをいだすことは一  
 の所つぎのところになし。たいけんもん院<sup>待</sup>  
 の御時よりあることなり。みなみおもて七<sup>賢</sup>  
 けんも八九けんもありといへどはし<sup>階</sup>がく<sup>隠</sup>  
 しのまは御帳のまにていださず。なにごと



もおなじことなり。<sup>立</sup>きさきだちにはしがく  
 しのに<sup>床</sup>しの大さうじの<sup>子</sup>まにてい<sup>立</sup>ださず。か  
 ならずにしとおもふまじ。ひん<sup>東</sup>がしはれな  
 らば<sup>打出</sup>ひむがしにてもあるべし。にし<sup>西</sup>おもて  
 うちでおなじ事なり。これまたひん<sup>長</sup>がしに<sup>押</sup>  
 てもあるべし。つまどのまのうちでなげし  
 のうへに物どもありてい<sup>立</sup>だしくし。これ  
 をよくい<sup>立</sup>だすを上ずとすべし。しとみのと  
 おなじやうにすれば。きぬのいたくな<sup>立</sup>がく  
 いでたるやうにうへの見えてわろければ。  
 みすをふくらめん<sup>立</sup>うにき<sup>立</sup>丁をしきぬのう  
 へにきぬふたつがあはひにみすをひきふく  
 らめてたて<sup>立</sup>。そのうへにおくにあるそで  
 をみすを<sup>立</sup>うちかけさせたるよし。つまどに  
 はちん<sup>立</sup>しなし。かきたらんによるべからず。  
 ならふべし。うち<sup>立</sup>でするほどなればつまど  
 のとびらもと<sup>立</sup>りのけかうしのもともとりて

びんぎの所にをくなり。よるもうちではひ  
 きいるれども人をつけてかうしもおろさ  
 ず。ならひたらんうへのおぼつかなさのれ<sup>料</sup>  
 うにかきをくなり。  
 なつのうちでぐるまのきぬは。まつりのさ<sup>祭</sup>  
 い院女<sup>使</sup>づかひなどはあつぎぬにす<sup>生</sup>し  
 のうち<sup>櫛</sup>きからぎぬをか<sup>衣</sup>さねてい<sup>立</sup>したり。う  
 ちではうるはしくねりたるはりひとへ<sup>引</sup>  
 がさねにひき<sup>倍</sup>へぎかさねてうちでもくるまの  
 もあるなり。つねはくれなるのはりひとへ<sup>張</sup>  
 がさねなり。  
 くるまのきぬをい<sup>出</sup>だすこと。

御くるまのしりよりきぬをい<sup>下</sup>だす事つねの  
 ごとし。たゞし<sup>下</sup>したすだれをか<sup>襦</sup>みにおしか  
 ふことをせで。つまとそでとのあはひにを<sup>袂</sup>  
 くべし。ものこし<sup>袂</sup>さげて。ちずりのつまをす  
 こしこしのうへにひきい<sup>立</sup>だすべし。きぬの

いづることは。くるまのほうだてのかみ二三寸ばかりよりはじめてひきいだして。うちぎぬ單ひとへうはぎ龜尾うるはしくかさねてひきいだして。とみのを尾のうへ四寸ばかりつまさをすかして。きぬのまへをまへいたによくをきて。くるまのそでにおしかけていだして。そでのぬひめをしたにをきなして。すそにをしつけて。袖口をみせてをくべし。そでのしたよりものこしひきいづべし。ながさ二尺はかりあまい。おほかたはきぬのせぬ背ひのぬひめにいとをながくつけて。竹をけづりて車のうちにさして。そのたけにいだしてのち。よきほどをかけよ。さからでよきなり。いづるほどは。きぬのひろさ。まへのかたをいだすにせぬひのほうだてにかくるゝほどなるがよきなり。いとすだれよりいでぬほどなるがよきなり。せはま前へいでも

にはそのいとをすこしおくにいれてつけよ。女房のくるまのきぬいづることもこの定なり。下すだれをすだれのかみにをしはさみて。ひとへとくるまのそでのあはひにさぐべし。御くるまのしりにかはること裳はこのしたすだればかりなり。ものこしは一りやうに四すぢつくなり。まへの左右に二すぢ。うしろの左右にふたすぢなり。ながさ二尺よばかりなどいだすべし。ものこしはあはひをひろくいだせ。せばきはわろし。うたてあり。二人のりはくちばかりにいだすべきなり。  
童わらはのさう装束ぞくをいだすこと。まづわらは片袴むかひて二人のりたれば。はしのかた方のかたばかまをあらんかぎりしもざまにひきいだして。其はかまのうへにかさみのしり汗衫のすそをわらはのうしろよりひきいだし

て。おもてをうらになか<sup>中</sup>をりにして。はかまのすそに二寸ばかりなどたらさでひきさげて。それに又ならべてかざ<sup>袴</sup>みのまへひとつをひきいだして。はかまのうへにならぶるなり。うらうへこの定なればわなをみなむかひざまにいだすべし。一人をこの定にいだせばいづれもおなじことなり。たゞし右のくちにのりたるはあふぎ<sup>扇</sup>さしたるてをさげず。左のくちのはひだりのてをばたゝうちをきて。右の手にあふぎをさすべし。はかまみじかくはかざみをながくはりばかまよりはひきいづべし。四人のるともこの定なり。もしかざ<sup>風流</sup>みのおもてにふたへおり物もあり。又ふり<sup>風流</sup>うもあることあらばおも<sup>表合</sup>あはせにせでうらあはせにたゝみていだすべし。まへよりはかまふたつかざ<sup>汗衫</sup>みのしりまへよつさがりたるに四人のりはしりもかく

あるべし。二人のりはくちばかりにいづるなり。わらはのくるまにはしたす<sup>下</sup>だれ<sup>腰</sup>をかけぬことなり。されどもしたすだれをかけたるひとあらばとるべからず。すだれのうらうへのはしにまきかさねて。わらは<sup>産</sup>のひ<sup>産</sup>たいなどみゆるほどにあぐべし。したすだれのすそ<sup>裾</sup>をいたのうちにあるきよりひきいだしたるがよきなり。はかまのうへかざみのしたにはあこめのつますこし見ゆ。四人のりはしりもこの定にあぐべし。二人のりたるにはしりのすだれはおろしたるなり。わらはの車にはさい相のくるまのなれば下すだれはかけぬなり。もし中納言の車にてかけてまいらせたらんをとるまじ。かけながらあるべし。しもづかへあじろぐるましたすだれかけず。すだれをあぐる事おなじ。はかまをわらはのやうにひきいだして、そ



のうへにまへいたなどにかゝるほどにきぬ  
のつまをひきいだしたるなり。たゞひらに  
うちをきてあるべし。四人あらばしりまへ  
にのせてあぐべし。あふぎをさすことおな  
じ。〔愛〕もをいだす。

ざうし雜仕のこと。むまにのるべし。くるまにの  
りたらばかん所間よりありくべきなり。さう  
ぞくつねのごとし。五せち節のうへ上ざうし雜仕ひ  
すまし洗はくるまにのるべきなり。女御まい  
りにはしもづかひのそうぞくをばはした物  
のきたるなり。とくせん得選といふもののなが  
ききぬきたるがあるなり。このしもづかひ  
さうぞきたれどもくるまにのりては女房わ  
らはなどの車にはつゞけず。かん間こ小うちよ  
りまいりあふべし。うへ和ざうしは女御まい  
りにもあり。あこめい和つゝうちぎぬひとへ  
はりばかまつねのごとし。

ふみ女をつゝむ事衆。

女御まいり。むことりなどのふみは。むすび  
てつゝむ事そらにいひがたし。本をみるべ  
し。

くら人なりとも。又つぎの所にてなりとも。  
うるはしきけさうぶみのつかひをせば。ま  
づその所にゆきて。さうなくのぼることな  
し。中門口のくちにたちてかくと申せば。その  
所の申つぎ中もん中のとよりおりあひて。こ  
れへといふなり。そのみちは中門廊のとより  
つまど妻戸をいりて。中もん廊のらう縁のえんより  
きぬのそでいだしたらん所へゆくべし。女  
御まいりには。うちのくら人はうるはしく  
すきわた殿邊渡にかうらいのた帖み一帖しき  
て。とう京東のしとねしき茵などしてあるなり。  
しとねしきたれども御ふみ女房にまいらせ  
いれてのちたゝみ茵にあるには。しとねをば



われよりかみにしてたゝみにゐるべし。御返ごとをたびて。やがて女房のさうぞくをいだされば。とりてもとの道をかへりて。中もんのらうのうちのえんよりおりて。御所にむかひて一どはいすべし。つぎの人にはろくあるもあり。またなきつねのことなり。ざをしかずは。いづくにてもさもあらん所に御返事のほどはゐるべし。つぎの所にてはろくありともはいすべからず。くら人そくたい。つぎの所のはいくはんにてあるなり。

大臣<sup>辭退</sup>じたいのふみ<sup>表</sup>いるゝはこをつゝむやう。

これも本<sup>機紙</sup>をみるべし。つゝみてぐしたり。だんし四枚を二枚づつうへしたにあてゝつみて。だんしをほそくたゝみて。うへのかさねのもとにひきときざまにかたかきにむすべし。

宇治の大臣<sup>卿長</sup>殿の御時。大臣<sup>辭</sup>じせさせたまひしに。うるはしくはこにいれてつゝみて。なをしもそのつゝみたるはこをたかきあんにをきて。あかぎぬのし丁もちて。けいし二人<sup>職事</sup>しきじ二人束帶にてあいぐして。兵部さうにおくりつかはしたりしかば。いゑはうけて。あくをうちたりししたにすへてかへりにき。きんだいしきじにつけてあるなり。

名<sup>香</sup>かうをつゝむこと。

だうくやう又うるはしき佛事などに。名かうはしろがねのはこのちいさき。はぐるめのはこなどのやうなるにいれてつゝむものなり。おり物うす物から物などのしろき。かう。うすはなだなどなるが。きぬのはたはりよりはすこしせきが。ながさ八尺ばかりなるが。二重も三重もいつへも七重もひねりかさねたるにてあるをおもてをうへにて

まづな<sup>中</sup>かおりにして。其なかおりの所にこのはこををきて。ふたへにをしあはせて。左右のはしをかみに名かうつゝ<sup>際</sup>みたるやうにうらうへをして。そのはこのきはを<sup>唐</sup>からぐみのほそきがこのつゝみ物のいろしたるにてもろかぎにゆふなり。かぎは一尺ばかりさがるべし。すそはつゝ<sup>細</sup>み物とおなじながさあるべし。たゞしこのく<sup>細</sup>みはやがてつゝみ物のかさなりたるかずにいくすぢもあるべきなり。ながくばさがりたる所<sup>蟬</sup>になかうなをむすぶなり。又たゞむすばねどもあり。ほそぐ<sup>細</sup>みならぬともあつ<sup>厚</sup>ひら<sup>平</sup>ひとすぢなどにてゆふこともあるぞ。さてのち<sup>鳥</sup>とりぐちとて。殿上などのふ<sup>文</sup>み<sup>判</sup>さしのやうなる物にこのゆひたる所をさしはさみてあるなり。そのとりぐちとはところにしたがふべし。え<sup>螺</sup>にらでんがひすりたるもあり。だう<sup>堂</sup>くやう<sup>供</sup>

などにはさるべし。そうけの所などにてはくろぬりなるべし。ひらづつみにて物をつゝむ事。まづひらづつみをおもてをしたにてひろげて。なかにころも<sup>衣</sup>ば<sup>笠</sup>このふたをあけてをく。そのうちにいれ<sup>入</sup>かた<sup>帷</sup>びらをいるべし。ひろげてころもばこのうへにをきて。そのうへにしたいか物をいれて。そばをまづうらうへおしおほひて。又しりかしらをうらうへおしおりて。このいれたる物をつゝみかくして。そのつゝみたるをころもばこにをきて。そのうへをひらづつみにてつゝみて。すみずみをむすぶなり。いれ<sup>入</sup>かた<sup>帷</sup>びらのていは。ひらづつみのうは<sup>差</sup>ざし<sup>差</sup>なきなり。冬のはおり物。あやにてもあかうらあり。夏はす<sup>生</sup>ぢ<sup>生</sup>にてひねりかさねたり。このごろはまづいれかたびらにてつ

つむことなし。いれかたびらをばおしたゝ  
みてせんにころもばこにいれて。そのうへ  
にゆらくとみせているゝなり。

まづはりば<sup>張</sup>かまをなかりにしていれて。  
そのうへにひとへものぐをかさねなが  
ら。れいのきぬだたみにしてふたへにをり  
て。右をうへにてをきて。からぎぬもあらば  
そのうへにをきて。そのうへをむすぶなり。  
ころもばこのふたは。ほかへつかはさばつ  
つみのむすびめのうちぎぬのうへにをくべ  
し。うちにて人にた<sup>給</sup>まはゞ。むすびめのうへ  
にをく。あふげてをくなり。ころもばこ<sup>蒔</sup>まき  
ゑらでんをしなどする。つねの事なり。又は  
ゞかりある所などのには。くろぬりつねの  
ことなり。はこのうちにをりたて<sup>立</sup>あり。あや  
おり物<sup>唐綾</sup>からあやつねの事なり。  
わらはのさうぞくをつゝむべきやう。

まづひらづつみをおもてをしたにてひろげ  
て。そのうへにはりばかまをふたつにをり  
て。こしのかたをうへにをくべし。はかまな  
がくば。三へに屏風のひだのやうにこしを  
うへにてたゝみて。こしをうへにてをくべ  
し。そのうへにあ<sup>凡</sup>こめうちぎぬひとへかさ  
ねて。れいのやうにたゝみて。ながくともみ  
じかくとも。袖たけにすそをおりて。右のそ  
でをうへにてをくべし。そのうへにか<sup>付</sup>ざみ  
をせおりにたゝみて。そでうらうへにやり  
て。すそをとりて。くびのもとへまづふたへ  
にをりて。つぎに右のそでをうへにて。これ  
も屏風のやうに三つにおりて。そでをうへ  
にてをくべし。おび。だんしにつゝみてをく  
べし。さてのちひらづつみのすみぐゝをと  
りあはせて。わづかにむすぶべし。しもづか  
へのはたゞの女房のおなじ。



そ<sup>能</sup>うのさうぞくをつゝむこと。

まづひらづつみをひろげて。ころも<sup>入</sup>ばこを  
きて。いれ<sup>帷</sup>かたびらい<sup>大</sup>れて。おほくち<sup>口</sup>あこ<sup>和</sup>  
めひと<sup>單</sup>へうへのはかま<sup>い</sup>るべし。あこめは  
そで<sup>た</sup>けにをれ。うへのはかまはこし<sup>ぎ</sup>り  
をれ。されどもころも<sup>ば</sup>こにな<sup>を</sup>すこしあ  
まるなり。そのうへに衣のうへにけさも<sup>裳</sup>は  
たゝみて。くみもしはかみをたゝみてゆひ  
たり。くみにてゆはゆふやうあり。本をみ  
るべし。けさにならべてをくべし。あふぎし  
たうづかみにつゝみてをくべし。これもほ  
かへつかはさば。ふだんはむすびめのうへ  
におほふ<sup>覆</sup>べし。さうかいやない<sup>柳</sup>ばのふたに  
をきて。つち<sup>土</sup>たか<sup>高</sup>つきのうへにす<sup>次</sup>へたり。  
そくたいをいれてつゝむともし<sup>第</sup>だいこの定  
なり。うへのきぬはせおりにして。なかおり  
に又しているべし。御さほなどにかくるや

うにたゝむべし。御なをしまたこの定なり。

そ<sup>束</sup>くたいのさうぞく<sup>二</sup>のこと。  
<sup>三</sup> 帯

そくたいをきること<sup>著</sup>はなつふゆおなじこと  
なり。冬<sup>牛</sup>のにははんびつね<sup>臂</sup>はなし。わき<sup>肩</sup>あけ  
には冬<sup>夏</sup>もあり。なつのにははんびをぐした  
り。あこめ<sup>和</sup>なし。かたびらにひとへをかさね  
てきるべし。こはくはりたるひとへばかり  
又つねのことなり。なつはかんだちめ<sup>上</sup>あか  
色のした<sup>下</sup>がさね。殿上人ふた<sup>二</sup>ある。おとなし  
き人青くち<sup>柄</sup>ばつねのことなり。冬つゝ<sup>葉</sup>じの  
したがさね。かんだちめあや。殿上人ひら<sup>平</sup>ぎ  
ぬなり。又さもあるをりやなぎ<sup>柳</sup>さくら。うら  
やま<sup>山</sup>ぶき又<sup>吹</sup>おりによりてきるなり。殿上人  
もいろ<sup>色</sup>をゆりたるこれら<sup>襦</sup>をみなきる。わか  
き人うらこ<sup>裏</sup>きすはうもえぎ又つねのこと  
なり。うへのはかまもかくのごとし。おとな



しき人はやなぎのしたがさねとてきる。う  
 らはあをくろいろにそむるなり。豆 糸まめぞめと  
 申す。かんだちめなどはおもてはからあや  
 などにてあり。殿上人諸を大夫などは。おもて  
 はたゞきぬをふくさばりにてつくるなり。  
 うへのはかまのおもてふくさにてきるな  
 り。御堂 供 堂 童 子だうぐやう千ぞうなどのだうどうじ  
 のそめわけとて「は敷」左右わかちてやなぎつゝじ  
 とてある。やなぎのつねのうすやなぎなり。  
 つゝじといふはつねのしたがさねをいふな  
 り。はんぴのらん綱にはいづれもうらなし。さ  
 ればおり物などのはおもてばかりをする物  
 なれば。くさぐさ近 代とさがりてみえず。されば  
 きんだい代かくしてこはきうらなどをつけて  
 あらす人おほかり。だうどうじのそめわけ  
 などにははな鼻 切ぎれといふ物をはくことあ  
 り。それはさし差 懸かけとて。まつりのつか使ひな

どのかへさの日はく。又六位のはれにはは  
 くものなり。く香 經つぬひのするものなり。  
 わきあけのこと。  
闕 腋わきあけをきることは。したがさねまでは  
 つねのそく束 帶たいなり。わきあけはしたがさ  
 ねにおなじやうにぬひかさねたるがよきな  
 り。しりはいま三寸ばかり。下がさねのみじ  
 かき。かゝげたるにはよきなり。ひろさ五分  
 ばかり。かた身づつせばきが中 折なかをりにす  
 るにはよきなり。まへは狩 衣かりぎぬのやうな  
 るをわきあけのうはがへのすそをあしのく  
 びにつかせて。したかへをば一寸ばかり引ひ  
 きあげ。したがさねをも一寸ばかりづつし  
 たざまにひきあげつゝきする也。しりはき  
 てのち。たけのあたるほどをしたがさねに  
 とちかさねて。やがてしもざまにうらうへ  
 のはしをしげからでとちてだしたるが。た綯

ちにかくるおりはよき也。

ひ難ゐ頭ながしらとは。しりをとリぢかさねての

ち。したがさねかさねながらわきあけのひ

だりのつまをとりて。うへざまにひきかへ

し。した下がさ髪ねをかさねながらすみざまに

すぢかへており。又すぢかへてふたへをり

たれば。かみ上はせぬ背ひのぬひめのかみ上ざ襟ま

へをるゝなり。そらにはいひがたし。なら智ふ

べきことなり。さきとがりなるをそばにひ

きまはして。とがりたるさきをたちのおび

とりのなかよりひきとほして。さきはたけ

とひとしくさぐべし。かくひきとほさんを

りは。はんぴの緒を兵ぐしてとほして。このさ

がりたらんしりのうへにさぐべし。これは

わするゝことなり。はんぴはらんをよくあ

らしたるがよきなり。いたくさがりたるも

おめてわろし。よこぬひめのかみ上二三寸ば

かりみゆるほどにあつべきなり。ふゆのは

うちはんぴなり。かんだちめうちのくら人

などはらのはんぴなり。たゞのし衆うはくろ

はんぴなり。なつはかんだちめうちのくら

人黒はんぴなり。殿上人已下は薄うす物。した

がさねのやうに二あゐなり。冬はかんだち

めはつねにはんぴ片きることなし。し諸よさ社の

行幸などにかたま舞ひとといふことあり。それ

にはかならずきることなり。はんぴのをは

こをといふ物にてくびをゆひて。このごろ

の人は上下せられたればよし。たゞうるは

しくゆふやうあり。本をみるべし。ならふべ

し。さうぞく装束のひ秘することなり。

ほうこのこと。

ほう布こといふ事あり。きぬ指さしぬ買きうるは

しくきて。そのうへにしたがさねきて。うへ

のきぬにしりつくりて。おびさして笏さくを

もつなり。ゑうはせず。そくたいにしたがさ  
ねのしりをくるといふことあり。それはい  
かでかは。そのながさの物をかみにくりあ  
げて。せなかにをくことはあらん。すそをた  
けとひとしくはからひて。そのかみをわな  
にしてさげて。かみ<sup>上</sup>をさがるまじくおびに  
よくかふなり。

濃

装

束

そくたいにこきさうぞくといふは。うへの  
はかまのうら。おほくち。こき物にてあるな  
り。すはうのあこめ。あをきひとへにてあ  
るべし。たがさねはつねのつゝじなり。夏は  
二あゐの下がさね。こきはりひとへにしろ  
きかたびらをきるべし。あかきなどはきる  
べからず。五ゐも六ゐもおさなくてはじめ  
てありきなどする人はみなきるべきことな  
り。

首書

ひとへもこきひとへにてこそはつねにも

あれ。

四月一日。しら<sup>白</sup>がさねとてしろきうす物を

はんぴしたがさねにきる。しろきはりひと<sup>張</sup>

へ。しろきあせとりをきるなり。かんだちめ<sup>草</sup>

殿上人。五ゐ六ゐ。外記史きる也。ゑうはき<sup>衛府</sup>

ず。かむだちめのもむもんなり。かとりとい<sup>緋</sup>

ふものをうるはしくはきるなり。十月一日

もきる。ねりたるきぬさやくとはりたる

なり。したがさねにうらあり。

首書

なつ冬のしら<sup>極</sup>がさねならねども。ごくね<sup>無</sup>

ちのころ。官たかくいたりたる人のしら<sup>白</sup>

がさねをきるはつねのことなり。これも大<sup>臣殿の仰</sup>

と。すけゆきがてにう<sup>らにかきてをしたり。</sup>

そくたいは四月一日よりなつのをきれど<sup>衣冠</sup>

も。いくわんは五ゐも六ゐもごけいのほど<sup>御襖</sup>

などまでは冬のをきるなり。ふゆのうへの

きぬをきるべし。さしぬきもなつのさしぬ



きはごけいのころよりきるなり。きぬは一日よりひとへがさねをきて。すゞしのひとへなり。ひたひとへはまつりのころより六ぬはきるなり。それもすゞしくばひとかさねつねのことなり。五月といふともさむからんにはきぬをきるべし。まつりの御幸などには六位はひきへぎにすゞしのひとへをかさねてきたるなり。十月一日よりふゆのそくたいなれども。又いくはんは五せちのころまではなつのなり。六ぬのさしぬきもきる也。うちのくら人などこそあれ。院のくら人などとうほく院のねん佛の頃よりうす色のふゆのさしぬきをしおに色とてきる。さてもありなん。たゞししをんいろはひがことなり。ほかにしるしたり。

わかやぐ人は。なつすゞしのさしぬきをあさぎにてもうすいろにてもきませてきるつ

ねのこと也。五位になりなば。ふゆあさぎをとくきよ。あしからず。六ぬのしんなどはかりばかまをきるに。さしぬきなどきんれうに。院のひくら人などになりてきるなり。きんだいならねどさしぬきにいくはんするふしぎなり。殿下のこうとうなど猶かりばかまなり。ほうゐの事はきんだいさたなけれども。六ぬのしらはりのかりぎぬにきらゝふるひてきることは。五月七月などのしをれたるにきることなり。ふゆなどきるはうたてきことなり。

かうのぬのかりぎぬつねのことなり。されども院のくら人などにておそくうちへわたりなどして。さかりすぐれば。右のたもとぬひこして。しろききぬ。あをきひとへなどをきてあるをうたへありとはふるくは申けんとぞ。五ぬもしらはりのぬの。かりぎぬは夏



はきるにあしからず。かうのぬのかりぎぬ  
又つねのこと也。六ゐもつねはことゝある  
ことには。うやをかくべきなり。きんだいか  
かぬふしぎなり。五ゐもしうのおまへなど  
へまいるとては。さうなくうやをかきて。  
ふみくゝみをして。ふるくはまいりけるな  
り。

わかき殿上人など瑠璃り色のさしぬきとてあ  
さぎのこきをきることは。五月などのふた  
あゐ藍のさしぬきのしをれたるおりきること  
なり。きんだいはいつもきる。ふしぎく也。  
しをん紫菀いろのさしぬきとて九月ばかりに殿  
上人などのきるは。おもてはうすいろのな  
つのさしぬきに。あをうらのはりうらをつ  
つけてきるなり。これをしをん色とはいふ  
を。たゞうす色のふゆのさしぬきをつけた  
る。みぐるしく。かやうのことをしりたり

とて。人まへは晴れにていたくいふべからず。  
をのづからとふ人あらばこたへ。もし又さ  
もあらん人にははしくゝをいふべし。むげ  
にしらぬやうなるもわろし。たゞしひする  
ことは。やすく人のしつべきことを秘ひする  
也。大事なることはいへどもきゝとること  
なし。

かんだちめなどのさく櫻らのした下がさねとて  
きるは。おもてはからあやおり物なれども。  
うらはこきむらさきに染るなり。花のさく  
らにはあらず。いろをゆりたる殿上人かん  
だちめにおなじ。さしぬきむらさきのおり  
物つねのことなり。かやうのものをうち緑の  
くら人きるに。うへのきぬのろうさうなる  
うるはしきことなり。あを色はふゆ冬もなつ  
も。からあや唐綾ふせん浮線れう綾けん顯もん文さなど  
にてあるぞいみじき。さればにや。はれにも

ちゐることなり。

大臣の大將などのたいきやうのそんざをも

し。又のりゆみのそうをもとるに。かいねり

がさねの下がさねとて。くれなるのこくう

ちたるあやのおもてに。ひとへもんのふく

さはりのうらつけたるをきる。この下がさ

ねをきんには。こうばい<sup>紅梅</sup>ちのひら<sup>平緒</sup>ををかな

らずさすべし。たゞし正月七日いご<sup>以後</sup>ならば。

こうばいはもちゐるべからずと申す。

大將のこうばい<sup>紅梅</sup>ちのひら<sup>平緒</sup>をにかいねりか

さねきることとは。りんじ客又もやの大饗

にきる也。のりゆみ<sup>賭弓</sup>のそう<sup>奏</sup>には。こうばい

ちのひらををばさゝぬ也。一の人のきん<sup>君</sup>

だちは。殿上人のあいだなれども。せんく<sup>達</sup>

うをくるまじりにぐしたるなり。これ<sup>前</sup>もう<sup>殿</sup>

てなし

衣冠<sup>冠</sup>はん<sup>直衣</sup>なをしにきぬをいだすこと。

いくはん<sup>打</sup>なをしにきぬをいだすこと。うち

ぎぬ<sup>衣厚衣</sup>あつぎぬいづれもつねのことなり。五

せちにはくら人はくれなゐうちをいだす。わ

かき殿上人またつねの事なり。又殿上人は

おめらかして五へも三へもみちがさね<sup>紅葉重</sup>な

どにしてもいだす。おもており物あやつね

のごとし。かすが<sup>春日使</sup>のつかひなどにはいくわ

んにもなをしにもきぬをいだして。かぶり

にかしはばさみ<sup>柏夾</sup>をする事なり。くゑんえい<sup>巻綴</sup>に

はあらで。えん<sup>燕尾</sup>び<sup>外</sup>をとざまにをりて。たけ<sup>竹</sup>な

どをけづりてはさみてさしたれば。くゑん

えいのやうにさがりたるなり。それはだい<sup>内</sup>

りせう<sup>裏焼亡</sup>もうにはかの行幸などには。ゑふ<sup>衛府</sup>み

なすることなり。大將なをしにてはじめて

ありきになをしにうちぎぬいだして。さく<sup>笏</sup>

をもち<sup>持</sup>たちを<sup>帶</sup>はけども。それにはかしはば

さみせず。五せちにも又<sup>修</sup>正の御幸などに

もなをしにきぬをいだすことはつねのことなり。これらにはかしはばさみせず。なをし<sup>直衣</sup>はじめには又かならずきぬい<sup>始</sup>ださず。きこめてもあれども。さく<sup>笏</sup>をもちたちをばくことはおなじことなり。

きぬをいだすことは。きぬさしぬきをきたるうへにわたいたりたるきぬにてもうちぎぬにてもをきて。うらうへのつまをさしぬきのまへよりまへによくひきちがへておびをするなり。うしろはたかく引あげて。まへのつまさきはさしぬきのうへにたけに三四寸たらぬほどにあぐべし。うしろはなをしにてもうへのきぬにてもきたらん<sup>襦</sup>に。らん<sup>中</sup>のすそよりへりををきたるやうにみゆまじきなり。見せたる人々あり。あさまし。みせじれうに。わざときぬのうしろのすそをな<sup>中</sup>かいりにぬふこともあり。さらねどもよくお

しあげておびしつればみえねども。いたくうしろをだにをしあぐれば。つまのうしろ<sup>後</sup>へひかれてまへのひろぐることにあり。又せばまへのかたはまへへまはらねば。うらうへにおほくびをつけたるよし。きぬをい<sup>こい</sup>だして。まへなるつまをうらうへのそばへをしなして。さしぬきをひきあぐる人あり。まへをい<sup>こい</sup>だすといふなり。つまふたつをば前<sup>こい</sup>に見せて。そのうへよりさしぬきをば引あぐべきなり。

宮づかさ<sup>司</sup>にまつりのつかひ<sup>使</sup>などするもうへのきぬにうちぎぬい<sup>柏</sup>だして。かしはばさ<sup>夾</sup>みしてくだる。このゑづかさおなじことなり。わらふかぐつをかならずはくべし。

かんだちめ殿上人このゑづかさなどはたちひらを折によりてもちゐる。かんだちめは<sup>無文玉</sup>つねはむもんのごくのおび。こ<sup>紺地</sup>んちのひら



をさすなり。殿上人はつ角のおび。めなうつ  
ねにさすことなり。そだい諸大夫ぶこの定なり。め  
なうはず通ふ方のなきかはりにもちゐるも  
のなり。たゞしり臨時祭んじのまつりの日は。殿上  
人めなうをさすことなかれ。めなうといふ  
ものは天下に八すぢぞむかしはありける  
を。五ゐのまひ人みなさしつれば。のこり殘は  
あるべくもなきをきんだいめなうのおほく  
なりたるゆへに。あない案内もしらずさす殿上  
人あるべし。

節會  
せちゑにはかんだちめ殿上人。おび帶にぎよ  
たい袋をつく。かんだちめはきん金なり。殿上人  
のはしろ銀きなり。おびの右のわきにほう方せ  
んといふ四方はうなるいしふたつがなかにつ  
くといへども。もとこしによるべし。ふとか  
らんはせなかなりなん。ほそからんはわ  
きにいりてかくれなん。をりによりてはか

らふべし。

たちのさうぞくは。つねはあをきかはなり。  
されどもむら紫さき綵だんのひら平緒をならんに  
は。むらさきがはにてしかへよ。

さうぞくはした髻うづはきて。うへのきぬを  
きて。ひもをときてのち。で出居ゐ脇のけうそくに  
しりをかけて。びんは上鹿らうはかくことな  
り。大將のずいじんなどの御びんなどにめ  
さるゝには。中もんにさぶらふが昇のぼる所  
あり。やなぐゐをときてたつるところあり。  
中門のうちのらんをのぼる。つ壺ぼにてもや  
なぐ鉢ゐにてもあるをば。中もんのらうのな  
かのおほきなるはしらによせてかくるな  
り。これもしりたらんあしからず。  
いろをゆりたる人。もえぎのさしぬきつね  
のことなり。む木くら蘭んち地は按け非び違い使しの別べた當  
うのきるものなり。それもきるをりあり。だ



いりせうまう。かぶりにかしはばさみして。焼亡  
しら白羽矢はのやにとがりやふたつさしておふな  
り。

首書とがりやさすことは。花山の家にすると  
こそきしやうにおぼゆれ。こと人はい  
とせぬにや。

まひ人のさうぞくのこと。

まひ人のさうぞくたまはるには。いくはん  
をして。まへのようちへまいりて。ゆば殿に  
て給はる。よきふくろをぐすべきなり。袋具かべ  
いじうをせんもおなじことなり。近代きんだい  
くら人のもとへ。ふくろばかりをやるつね  
のことなり。あをずりはかりぎぬのしりな  
がきに山あゐといふものして竹きりにほう  
わう風をすりたり。したがさね春はさくら。ふ  
ゆのにはつじ。うちはんぴなり。はかまは  
ふたのにてまたなし。脚くざく孔雀丸のまろをいろ

いろにかき。したのはかまをかさねたり。も  
もだちをいろくにくみたるいととしてつが  
りたり。つがりやうならふべし。かくにおよ  
ばず。腰材こしむらごのこしなり。くら人のけび  
いしはもくだちをばつがらで。またのをつ  
がるなり。

かもやはたなどの製茂八條はれの御幸などにはまひ  
人のすりば符かまを宮ばら大臣大將などにめ  
さるれば。からあやにに錦しきのこしをさし。  
たまのつがりをして。くれなるのうちたる  
したのはかまなどをしてまいらせらるゝな  
り。それにはかましたのはかまべち別々に  
てまいらする人あり。うたてあることなり。  
これよりやがてはかまにしたのはかまをか  
さねて。ふたへにをしおりて。ひらづつみに  
もいれでまいらするなり。これのみにあら  
ず。たゞ人のもとへまひ人のすりばかまを

つかはさんにもかさぬべし。さてこれをか  
さねのはかまとはいふなり。

まひ人のさうぞくをすることは。まづはか  
まをつがりで。したのはかま。きぬうちぎぬ  
をきて。はかまをまへごしの右をとりて。う

しろよりまはして。左のわきにかたかぎに片襷

ゆふなり。さてうしろごしのひだりをまへ

より右にひきまはして。右のわきにまたか

たかぎにゆひて。うらうへにさげたるなり。

ながさはこしにしたがふべし。さてのちは

かまぎはをきる。く結ゝりをすへてのち。した

がさねはんびをきることわきあけにおな

じ。そのうへにあをずりをきる。まへはわき

あけのやうにした下入いりにきすべし。あをず

りのしりはひとのなれども。したがさねの

しりのうへになかのぬひめになかをあて

て。わきあけのやうにとりてしりをかくる

こと又わきあけのやうなり。たちにかけん  
をりはんびのをひきいづべし。したうづを  
ひとへはきて。しか結鞋ゐをはく。はかまのくゝ  
りにて。しか結鞋ゐのきびすにかけてゆひたる  
がぬげでよきなり。そののちひだりのそで  
のぬひめのうへのかたにあかひもとちつ  
く。うしろのさがりにうはてのなかよりひ  
きとほしてさげよ。まへはあをずりのひと  
はりどころよりさげよ。

あか針ひもはひろさ紐五分ばかりにて。なから

のほどにあげ總角まきむすびて。うらうへのさ

がりに姥になむすびて。ひらてが平手貝ひをおした

り。こきうちひとすぢ。すはうひとすぢある

なり。五尻ゐ六尾ゐはしりぎやをさす。五虎ゐはと

ら。六水豹ゐはあざらし。をのくひらをあり。

さく笏をもつ。かざし挿頭花陣のはなはちんにてさす。

さすべきところをかぶりにかねてはなちて

まいる。

べいじうのさうぞく。

そくたいなり。あをすりのすりやうかはる。

するかざしやまぶき。これもぢんにてさす

なり。

をみのこと。

をみをきることは。そくたいのうへにあを

すりをきるなり。そのすりあをくてむめき

じをする。かんだちめ殿上人。五せちのせち

ゑの日。大じやうゑなどに。藏人まできる。

はんぴをきる。しろきあこめひとへ。しろき

あせとりなどにてあるなり。しり。又これも

ひとのなれば。まひ人のやうにしたがさね

のしりにもとぢつくるなり。これもあかひ

もあり。これは右のかたのうへになかをと

ぢつけて。うしろまへにさげて。うしろはわ

きにとぢたるがよきなり。かぶりにひかけ

といふものを左右のみゝのうへにさげた

り。かぶりのこじのもとにひかけのかづら

といふものをゆひて。しろきいとのはしな

どほとかしくみなるしてあげまきになをむ

すびさげて。かた／＼に四すぢづつかぶり

のつのはさめて。まべにふたすぢうしろ

にふたすぢ左右にさげたるなり。このいと

かざるところにこゝろ葉とてむめのえだの

ちいさくつくりたるをこのかづらにまとひ

てたてたり。かづらなければあをきいとよ

し。このこゝろは。かぶりのまへのすぢのも

とと。うしろのかづらむすびたるところに

たつといふ人あり。ひかけかた／＼に入す

ぢもあり。心々なり。せちゑなればぎよたい

をつく。殿上人はめなうをさすべし。かんだ

ちめはうもんのおびさす。ひらをををみの

ひらをといふ物あれども。つねになければ。



こんちをさすつねのことなり。かんだちめ  
はかざりだちなり。

わらは殿上のこと。

わきあけのさうぞくものぐつねのごと  
し。うへのきぬあかい赤色なり。つねの五ぬの  
うへのきぬのあかみたるやうなり。もんに  
あふ葵ひつねのことなり。したがさねつねの  
つゝじ。おもてあや。うらひとへ。もんやう壁  
してうちたり。なかへ中あり。はんぴはくろは  
んぴ。らんをなどは羅といふものなり。なつ  
はうすもの。常のあこめのいろこゝろにあ  
るべし。たゞしこきさうぞくならば。すはう  
のあこめあをきひとへにて。こきうちぎぬ  
きるべし。うへのはかまおりもの上かんだち  
め部のさうぞくのていなり。これはこきさう  
ぞく。うらはこし。おほくちもこかるべし。  
とりかさねてわらうだのうへにをきてと

りいだすべし。きるべきしだいにをくべし。  
おび。つ角の丸の柄まろとも。五ぬの笏さく。ひき引お  
び。したうづ機。しかい。あふ扇ぎをぐすべし。だ  
み繪あり。なつのしたがさねあかい。くろ  
はんぴなり。いろをゆりたるゆへなり。うへ  
のはかまのうら。おほくち大口あかくともくる  
しかるまじけれども。をさなければうちま  
かせてはこきさうぞくなり。さうぞくをす  
ることはつねのわきあけなり。たゞしはん  
び袴の緒をゆふべし。本を見るべし。さうぞくし  
てのち。わらうだにこのちごをすへて。びん  
づらをゆふべし。  
かゝ腰げの上は宮このふたにはさがたふたすち。□  
ながさ一尺餘よばかり。ほそさ五分細ばかりに  
ら羅をたゝみて。いろ手のいとにて。かつら  
て手に條ふことりをぬ小ひたり。いろはんぴの  
らんれいのき。か□むらさきのいと鳥のふとら



かにおしよりたるが。□ながさ二三尺ばかりなる三すぢ四すぢ。くし二枚がうち。とき桶ぐし一枚。ひらかうがい一つ。あぶらつぽに油あぶらわたいれて。□こがたなひとつ。これらをかゝげのはこのふたに糸いれて。さうぞくにぐしてとりいだすなり。ゆするつきの水柳いれて。やない筥ばこに紙をきてぐすべし。かみねりふたすぢ。

みづらをゆふこと。

まづときぐしにてちごのかみをときまはしてひらかうがいにてわけめのすぢよりおなじをわけくだして。まづ右のかみをかみねりしてゆひて。左のかみをよくけづりて。あぶらわたつけなでなどして。もとぐりをとるやうにけづりよせて。ひ□さきのいとをひとすぢとりて。そのみづらのところ。あがりさがりのほど。めとまゆとのあはひ

にあたるほど。まへうしろのよりのきは。ちごのかほのひろさはそさによりてゆふべし。かほひろくはまへによせ。ほそくはうしろによすべし。たゞしいかさまにもみゝよりはまへなり。かみのもとを五いつからまきばかりつめゆひて。かみよりしたうらにまむすびにゆふべし。まづしたむすびをして。かうがいのさきをゆするつきの水にぬらして。むすびめをぬらしてまむすびにすべし。いとをのべじれうなり。糸をきらでかみのすそをよくときくだしてのち。みゝのうしろのかみをみゝのうしろかくるゝほどにびんぷく幅をふくらかにけうらにひきて。みゝをかくすべし。つぎにかみのすそをちごのかたのまへによくゝなでつけて。ちごのむねにをしあてゝ。ちのほどにあたるほどをとらへて。またあかいとして三まとひば

かりして。まむすびにつよくゆひて。こがた  
 なしてむすびめのきはよりいとをきるべ  
 し。さてそのゆひたるしものかみをよくよ  
 くなでてのち。みつ<sup>三</sup>にわけて。みつぐみにす  
 そまでくみくだして。そのすそのくみはて  
 をかみへひきかへして。もとゆひたるいと  
 のきらでをきたるして。このくみはてのも  
 とをもとゆひたるところにまむすびにして  
 のち。きはよりいとをきるべし。いづくをも  
 ゆはんにはむすびめをぬらせ。いとのかつ  
 ろがぬなり。かみのすゑをばみゝのうへよ  
 りこして。びんぶくのうちはさむべし。な  
 をすゑいでば。くびかみのうちにをしいる  
 べし。ちごをさなくてかみみじかくば。べち  
 につけがみといふものをもとゆひたるうへ  
 にゆひつけてゆふなり。そのかみなどをよ  
 くゆひなどしておとしなどすまじきなり。

つぎにはさ<sup>枕</sup>がたをとりて。このもとをゆひ  
 たるうへにあてゝ。ちごのうしろにてをし  
 てはさがたにむすぶ。そのゆひやうかくべ  
 きにあらねば。ひだり右の本をゆひてぐし  
 たり。まづひだりをゆひてのち。わらう<sup>四</sup>だな  
 がらひきまはして右をゆふべし。わがまは  
 るもこちなければ。このれうにわらうだに  
 はすうれども。きみの御みづらなどにまい  
 りたらんにはびんなし。われまはるべし。  
 ゆ<sup>油</sup>するつきの水はいとのむすびめぬらさん  
 れうなり。つぎにちごをたてゝ。わきあけの  
 しりをか<sup>か、ヘイ</sup>ゝく。したがさねによくかさねて  
 みだるまじく。はり<sup>針</sup>にいとをつけて。うらう  
 へのはしをところぐとちてせぬひをす。  
 そよりなか<sup>中</sup>を<sup>折</sup>りにかみへをりのぼせて。ひ  
 だりのわきのしたよりまへにひきこして。  
 うしろはちごのたけとひとしきほどにて。

そのなかほどをわなにをしをりて。すそを  
うへにて。ぬひめをば身のかたになして。ひ  
だりのたもとにわなをうしろへうちこし  
て。ひちのかみにうちかけたれば。しりのす  
そはまへのかたにさがりたるなり。つぎに  
しかるをはく。したうづをはきてそのうへ  
にはくべし。ぢん陣をあゆむほどはくつ履のし  
きをぬきてはくべし。しかるははきては殿  
上へも御所へもまいるなり。左大臣殿つね  
おほせらるなるは。うちの御びんづらはか  
はるなり。べちのことにあらず。御ぐしのす  
ゑのみにはさむ所をもとまきのいと元のう  
へにくるくあるかぎりまきをきてゆひ  
つけたるなりとおほせらるなるはひがごと  
にやとおほゆ。いかにむつかしげならん。を  
さなくおはします御ぐしのつけがみさがら  
ば。せん先にゆひたるかたのもとゆひのいと

をきらで。御いたゞきよりひきこして。右の  
もとゆひにゆひつけよ。

首書馬にのらせ給ときは。うはてにしりはか  
く。つねのそくたいの定なり。すきゆきがて  
にてかきてお  
した

とのゐさうぞくといふは。つねの衣冠いくはん  
なり。さしぬきしたのはかまつねのごとし。  
そのうへにわきあけをきて。かりぎぬのを  
びをするなり。しりのかけやうはそくたいに  
おなじ。きまへもたけとひとしくきすべし。  
とのゐさうぞくには。さびびづらとてゆふ  
なり。ことのしだいはおなじことなり。ゆふ  
やう又おなじことなり。もとゆひたるいと  
をまむすびにむすびて。きはよりきりてな  
かをゆはず。すそをくまでよく肩かたの  
まへにかみのすそなでさげて。むらさき紫む  
らご濃のいとのみつぐりにこおよりのほどに



よりたなる九尺ばかりあるして。もとゆひのむらさきの糸のうへをもろかぎにゆふなり。そのかぎはながさはちごのちの<sup>乳</sup>のほどまでさがるべし。すそはひざにあたるほどまであるべし。いとみじかくばそれよりみじかくてあるべし。かみのすゑも。このいとすそも。わなも。うらうへながらかたのまへよりさがるべし。これもわらうだにすへて。まづひだりをゆひてまはしてゆふべし。このふときいとをあしづをといふなり。かくあしづをしてゆひたるうへにうるはしきびづらのやうにはさ<sup>狭</sup>がた<sup>形</sup>をゆふことあり。とのゐさうぞくのと<sup>束</sup>おもひて。ひきつくらふおりの<sup>牛</sup>事也。おほかたそく<sup>帯</sup>たいのさうぞくにははん<sup>牛</sup>ひの<sup>結</sup>をといふものあり。それをきんだい。ほそき<sup>ひ</sup>をしてくびをゆひて。ひきまはしてしたる。ことやすきれうなり。う

〔原本圖在此間今依便宜移下〕

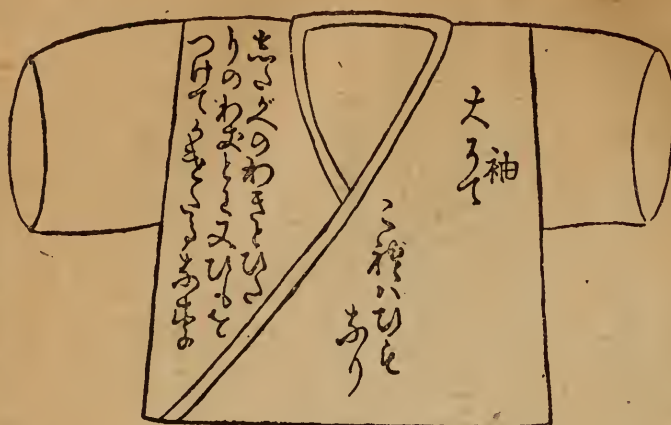
らいふくをきること。

るはしくはさがりたるをのやうにて。八尺ばかりにてふたすぢあるなり。ゆふやうかきにくければ本をしてぐしたり。ゆふべきやうは。まづうへのはかまをひきのべてきて。そのうへにこしのもとよりあてゝ。あしつぎのしもにこのはん<sup>牛</sup>びの<sup>臂</sup>をのひろさのほどをさげてゆふなり。これはひすべし。ゑふ<sup>衛</sup>の<sup>府</sup>わきあけなどにはゆふべきをつねにはゆはず。わらは<sup>童</sup>殿上の人<sup>童</sup>はかならずゆふべし。

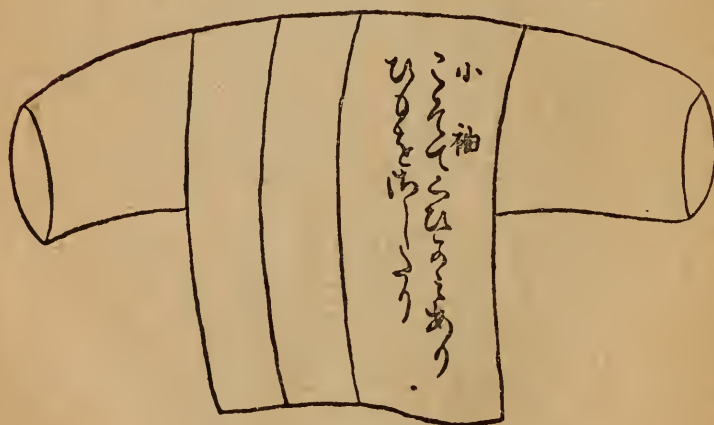
まづえ<sup>鳥</sup>ぼう<sup>帽</sup>をして。びんをかきておる。つぎにしたうづ一枚<sup>小</sup>を<sup>袖</sup>はく。つぎにこそでのうへにおほく<sup>大</sup>ち<sup>口</sup>をきる。そのうへにも<sup>裳</sup>をうしろよりまへにひきまはして。そうのもきるやうにして。ものうしろなるを<sup>結</sup>を右のかたよりひきこして。まへのひだりのわきなる



らいふくのやう



くびをうちへおることは。  
こそでのくびのひものしも  
にあたるほどになるべし。





かぶり冠緒をあり。つけど  
ころはみゝのまへなれ

ども。みゝ

のかみより

みゝのうし

ろへこして。

おとがいの

したいにゆ

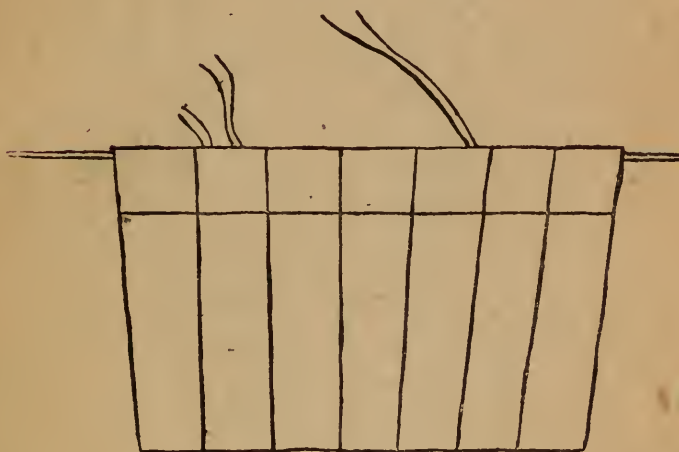
ひて。さが

りなくびか

みにおしいれたり。又

うるはしくくびかみの

外そとにみする人あり。



これは変もなり。たゝみ  
やう。その俗ものてい  
なり。こしつきをして。  
しもはみどり緑いろのけ  
もん文紗さなり。かみはし  
ろきけんもさ。きるを  
りはこしにひきまはし  
て。まへにひきちがへ  
てゆひて。うしろにつ  
けたるな緒をかたよりひ  
きこして。まへなるな  
にゆふべし。



鳥皮鳥のくつ。おもて  
に赤赤朱朱をぬりて。う  
らに錦錦のうらうらをなし  
たり。おなじき襦しきあり。  
あかきいとのをつけた  
り。

みじかき表をにむすぶ。さげじれうな裳。  
うへのはかま袴のすそ裳より裳もをば三寸あげて  
きすべし。そのうへに小袖袖をば三寸あげて  
もすそより四寸ばかりあげてきる。三寸つ  
ねのことなり。小そでより大そで三寸あげ  
てきる。おほかたうへのはかまのすそより  
おほそで大袖袖のすそ裳までに一尺につもるべし。  
三寸づつあげてきるべきなり。したおびを  
せず。大袖にはひもどものあるをかけてあ  
るなり。したがへのつまなるひもをひたり



白地白の錦錦しるしちちののししきののした  
うづなり。

のわきなるにかくべし。大袖ながくばしも  
を一定にして。かみへなであげてしたおび  
をして。そのうへにとちて。ひらをのみじか  
きやうなる物をあてゝ。まへにむすびて。し  
た一枚をうへにかへして。むすびめをかく  
して。うらうへのはたをとづべし。ながくば  
かたかぎ。みじかくばまむすびにもすべし。  
ながくてかぎのみへば二枚がなにかにかく  
してとづべし。さがりは一尺上よ六ばかりなり。  
ひらをよりはみじかし。かみ上ろく六寸乳にちの

しもなどにあつべし。まへに右のひざにあ  
てゝ。たまのつらぬきてはたのやうなるを  
さげたり。ぎよくは<sup>玉</sup>いとふなり。かみにあ  
るを<sup>袷</sup>をすのしたよりとをしてゆふなり。ゆ  
ひめをかくしてずにはさめ。ひだりのわき  
のしたにた<sup>短</sup>んと<sup>袷</sup>てきり<sup>切</sup>ひら<sup>平</sup>を<sup>緒</sup>のやうな  
るものをさぐ。ていはずにおなじ。是にひす  
ることは。ずのむすびめをかくしてゆふば  
かりなり。したうづ。しろぢあかぢつねのこ  
となり。

かぶりにみゝのほどにあたりて左右に<sup>緒</sup>をあ  
り。そのををみゝのうへよりみゝのうしろ  
へこして。をとがひのしたにゆふべし。すゑ  
はつゆなどして。くびかみのうへにみせた  
る人あり。又くびかみのうち<sup>折</sup>に<sup>烏</sup>をし<sup>帽子</sup>いた  
るつねの事なり。をりえ<sup>心</sup>ぼ<sup>輪</sup>うしのうへにと  
うし<sup>心</sup>みの<sup>輪</sup>わをふとらかにして。かみぼそに

して。み<sup>三</sup>へもよへもかさね<sup>三</sup>いれたり。かぶり  
をふかくいれじれうなり。

くりが<sup>烏</sup>は<sup>皮</sup>のくつにをつきたり。あしのうへ  
にゆふべし。たち<sup>常</sup>をはかず。尺<sup>笏</sup>をもつ。げ<sup>牙</sup>の  
尺。もしはつね<sup>常</sup>のもち<sup>用</sup>ぬさく。うへのはかま  
からあやをきるべし。

大<sup>袖</sup>そで小<sup>袖</sup>そで。四<sup>青</sup>ゐのうへのきぬのあかみ  
たるにすはうのうらをつく。あ<sup>青</sup>を<sup>色</sup>いろのも  
あり。大<sup>袖</sup>そでのくびはつねのきぬのやうに  
すそまでつけく<sup>す</sup>だしたるをうちぎまにをり  
とほして。こそでのくびかみのうへにひき  
まはしたるなり。ひもはみすべし。大袖より  
はこそでの<sup>甲</sup>はながし。

中少將のよろひきるやう。

かぶり<sup>冠</sup>つねのごとし。く<sup>香</sup>ゑん<sup>纓</sup>えい<sup>纓</sup>をして<sup>纓</sup>お  
ひかけをす。おほく<sup>大</sup>ちに<sup>口</sup>あせ<sup>汗</sup>とり<sup>取</sup>をきる。う  
へのはかまをきて。かり<sup>折</sup>ぎぬ<sup>友</sup>のおびのやう



についたてなるわきあけをきる。したかさ  
ねきず。牛臂はんびなし。わきあけのうへにかり  
ぎぬのおびす。帯おびささず。よろひをきる。  
くびかみなどをさいしきて。それでもなくて  
うちかけのやうなるくさずりはあり。その  
うへにたちをはく。平緒ひらををまへにゆふこ  
とつねのごとし。たゞしゆひてのち。むすび  
めをらいふく綴服のすのやうにかくして。一枚  
をかへして。ふたつがなかにわなをかくし  
てとつべし。さがりのながさ常のごとし。胡や  
なぐぬををふ。簪うは上おびはひくべし。ひかぬ  
は常のことなり。たゞのをりはうしろをば  
うはてのかみよりこしてゆふなり。これは  
おびをさゝねば。たゞひらををのなかにあて  
いゆふべし。  
うは上おびをひくこと。  
いたつきにからみて。しものむすびたるを

ときて。いたつきにはからみながら。ながき  
かたをうしろにひらををのうへにひきまは  
して。まへにひらををのうへにかたかぎにゆ  
ふなり。うはおびのすそにつゆつけたるを  
ひらををのすそにひとしくせよ。みじかくば  
ちからなし。又うしろよりひきまはして。も  
とのいたつきのもとにむすぶこともあれど  
もそれはわろし。  
おひかけをかくる事は。近衛府このゑづかさ。衛府ゑふ  
のかみ。管大將常のことなり。大臣の大將はか  
けず。行幸にもけにも。平胡ひらやなぐぬにかけ  
てもたせたり。  
ひら平緒をかへすべきやう。  
さがりは二枚あるをうへより一枚かみより  
しもへかへす人あり。それはむすびめをそ  
んじてわろし。うへのおもてなるべきかた  
をせん先案にあんじてしたにかさねてしたよ

り一枚をうへぎまにかへして。その二枚が  
なにかにかぎをかくしてとづべきなり。

おとこになるあいだのこと。

くしたな<sup>櫛</sup>ごひをひろげて。なかのほどにくし  
のはこのふたを<sup>筥</sup>をきて。ふたのうちにだん  
し二枚<sup>紙</sup>しきて。そのうへにもとゆひ。くし二  
枚がうち。ときぐし一枚。かうがい。たかむ  
ながたな。つか<sup>柄</sup>をかみにてつゝむべし。かみ  
ひねり<sup>捻</sup>ふたすぢいれたり。くしたなごひの  
左右をてばこのふたのうへにをしおほひ  
て。またしりかしら<sup>湯</sup>をうらうへをし。をりか  
けてつゝむやうにするなり。ゆする<sup>環</sup>つきに  
水をいれてやないば<sup>柳</sup>このふたにすゑてぐし  
たり。又かぶりにてあれば。こじ<sup>冠</sup>をはなちて。  
それもやないばこにすゑたり。くしたなご  
ひはながさ七尺ばかりにて。三のばかりあ  
り。おもてあやうす<sup>表</sup>かういろなり。うらこき<sup>裏</sup>

うちたるひとへもんなり。

打  
首寄

櫛

筥

たみながらしきて。そのうへにたかうな  
がたな。もとゆひ。くし二枚がうち。とき  
ぐし一枚。かみねり<sup>紙</sup>三すぢをぐせらる。こ  
れも兩せちえのぎに<sup>捻</sup>かるべし。な  
らうところは。だんしをひきちがへてし  
くところならいたれ。ふしんなり。のちの  
れうにしろしをくなり。すけゆきがてにて  
かはらけにしそく<sup>指</sup>をきて。をしき二枚に<sup>燭</sup>  
すへたり。さぬ<sup>簪</sup>きわらうだ一枚ぐすべし。も  
しわれとりはちをせば。ざによりてわらう  
だしきたらんにひだりのひぎをさきにか  
けてゐて。くしのはこのふたをつゝみなが  
ら。ち<sup>兒</sup>ごのまへによこさまにきて。うるは<sup>正</sup>  
しくひろげて。ちごをうつぶしにひぎをお  
りてふせて。もとゆひをとりて。くしのはこ

すけゆきがてにて  
かきとおしなり。

折敷

のうへにひきのべて。をきてかみ<sup>髪</sup>をかみざ  
まにかきなして。おなじよりうるはしくわ  
けて。まづ<sup>紙</sup>ひだりのかみをうるはしくとき  
て。かみ<sup>紙</sup>ひねりしてゆひて。またみぎをとき  
てのち。とりあはせてもと<sup>髪</sup>ぐりにとりて。び  
んぶく<sup>幅</sup>ひきてのち。しきたるかみをと<sup>髪</sup>りて。  
かみのすゑをふさのほどをのべて。つゝみ  
て。かみひねりしてゆひてきるべし。きらん  
ことはよういあるべし。ふさのほどみじか  
くするな。うるはしくもと<sup>髪</sup>ぐりをと<sup>髪</sup>りて。ふ  
さはさまんにあしからじのれうなり。か  
みばかりはきれねばかみのうへをきる也。  
あしくきりてちごのひたいきるな。ようい  
あるべし。とくとりはつるがよきことなれ  
ば。ながきもとゆひをばふたへにおしをり  
て。みじかくしてとるなり。とくとりはてん  
れうなり。もとぐりとりはてゝ。みづしてけ

づりあげてのけば。かくはん<sup>加冠</sup>の人のかぶり  
をもえ<sup>烏帽子</sup>ぼうしをもせさするなり。かみのす  
ゑはちごにみ<sup>不</sup>せで。きりはてゝひぎのした  
にをし<sup>巾子</sup>かひて。くしのはこのふたにいれて  
のく。こじ<sup>巾子</sup>をはな<sup>放</sup>ちたるかぶりなれば。まづ  
こじをもと<sup>髪</sup>ぐりにいれてのち。ひたいをせ  
さするなり。又こじをはな<sup>髪</sup>たぬつねのこと  
なり。かうがいにてひたいをわたして。びん  
をかくまねをす。さうぞく<sup>束</sup>はまづわらはさ  
うぞくにてもなをしにてもきて。おとこに  
なりて。かへりいりてそく<sup>束</sup>たいをして。いで  
てはい<sup>拜</sup>してのち。もとのぎにつきて。まへの  
ものはまい<sup>物</sup>らするなり。もとぐりのふさを  
ゆふことなし。

御

<sup>髪</sup>

もとぐりをとること。

御くし<sup>櫛</sup>のはこのふたにかみ<sup>紙</sup>をしきて。もと  
ゆひ。御くし二三枚<sup>髪</sup>。かう<sup>櫛</sup>がい。かば<sup>髪</sup>さみ<sup>鉄</sup>をい。



れたり。とることつねのごとし。たゞし御もとゆひをの拭ごふことは。まづかみをすこしやりて。ほそくたゝみて。びんぎ便宜ならんかけがねのつぽにひきとほして。はなづらのやうにむすびて。それより御もとゆひをひきとほして。すゑをとりあはせて。ひろきかみをた帋ゝうがみ紙のやうにみつ三にたゝみて。わなのところを御もとゆひふたすぢがなかにいれて。ひきのべてのごひて。御もとゆひのなかのほどをぞも本とつけたるはなづらのやうなるかみにきししとすりのごふやうにうらうへのすゑをとりてすべし。御くしのはこのふたををきて。御もとゆひのすゑを六七寸ばかりををきて。ひだりの手しとりて。さりげなくてながきかたを右の手してひだりのひぢのほどにをしあてゝとりて。そこをきとひねりてをきて。そこより

もとまきのはじめをば箱しそめて。いつからまき。おほく多てななからまきにすぎず。もとまきおほかれ髪ば。もとぐりのとくぬくるなり。又ひぢにあてねば。六七寸のほどよりながきかたをく櫛しのはこのふたの二方にひきあつることも有内べし。うちの御もとぐりとることもおなじことなり。ふさのゆひやうかはるなり。ふさをふたつにわけてこもとゆひふたつして。べち別くしにふたつにゆふなり。そのゆひやうは。うらうへながらかたかぎ片にゆふなり。そのかぎのてをひだりみぎにむすべし。ひだりのはめ女のこむすびにせよ。それがよきなり。もとぐりとることはならふによるまじ。てん天せい性のてきによるべし。

三卷  
かりぎぬ衣のいろくやうく。



おりもの。すはう。もえぎ。しろき。こ  
うばい。きなる。

このいゝどもはわかくおさなき人。いはひ  
にみなきるいゝどもなり。

すはうはうすきすはうにうらこきすはう  
のきぬ。あをきひとへにても。こきひとへに

ても。むらさきのさしぬき。こきしたのしか  
まをきるべし。うらこきすはうのかりぎぬ。

すはうのにはひのきぬなりとも。ひとへし  
たのはかまをなじことなり。かりぎぬすは

うにても。もえぎのきぬにくれなゐのひと  
へならば。くれなゐのしたのはかまくるし

かるまじ。おもてすはうなりとも。かばざく  
らなどならんには。いはひのことにはきる

べからず。もえぎのかりぎぬには。くれなゐ  
のにはひにこうばいのひとへ。くれなゐの

うすやうにしろきひとへ。こうばいのには

ひにくれなゐのひとへ。うすこうばいにあ

をきひとへもくるしからず。又やまぶきの  
にはひにあをきひとへ。又きなるひとへも

よし。これもさくらもえぎなどにては。いは  
ひにはきるまじ。こうばいのかりぎぬ。うら

まさりにてもうすこうばいにても。もえぎ  
のきぬくれなゐのひとへ。むらさきにほひ

くれなゐのひとへ。むらさきのうすやう。し  
ろきひとへ。これらをきたるよし。たゞしこ

うばいのかりぎぬは。としのうち正月十五  
日のうちにきるべし。十五日すぎてはきぬ

ことなり。うすいろのきぬにくれなゐのひ  
とへもよけれども。うすいろのきぬをいは

ひにはきぬなり。

大臣殿五ゐの少將にて十五六のほどこい

だむらさきのさしぬきさせ給しとき。と

ばの上なんじのくらべむまの日。きくち

ばのひねりかさねたる御かりぎぬ。おみ

なべしのすゞしのきぬ。しろきひとへに

うすいろのさしぬきのあをきうらつき

たるをとく大<sup>鳥羽</sup>殿きせまいらせさせ給た

りければ。とばの院。かやうのなりはこの

世にはいまはいともみえぬをめぐらしく

いみじとぞおほせられける。コノカシラガキ

ノ御テナリ。ドモ。コ大臣殿

しらあを。むらさきのにはひにくれなるのひ

とへ。もえぎのきぬにくれなるのひとへよ

し。これもさくらにては。いはひにはきるべ

からず。うすいろのきぬもよけれどもいれ

ず。たゞあらむには。うすいろのきぬにくれ

なるのひとへつねのことなり。むめのかり

ぎぬにては。いはひにもきるべし。

うらやまぶきのかりぎぬにむらさきのにはひ

くれなるのひとへも。又むらさきのうすや

うにしろきひとへも。もへぎのきぬにくれ

なるのひとへも。うへこきすはうにてした

へにほひてあをきひとへも。うつくしきも

のなり。

いとゆふむすびかりぎぬ。おさなき人のやな

ぎさくらむめなどにてきるものなり。

ふせんれうは。もえぎ。すはう。しろき。きなる

もあり。わかき人つねにきるものなり。この

いろくはおりものにをなじことなり。た

だしいはひには。からものはうちまかせて

はきぬもの也。

わかき人はなつのかりぎぬはひねりかさ

ねてをきる也。三八なりともひねりなり。

色によるべし。コ殿ノ御

けもんさは。わかき。をさなき。おとな。いろこ

そかはれ。つねにきるものなり。

とくさ。うすいろ。うすはなだ。しろあを。

このいろ／＼にしろうつけて。しろききぬ。しろきひとへ。おとなしき人みなきる。たゞしはりうらはうすはなだ。しろきにはつけてもきるつねのことなり。しろあをのしけもんなどにてあるにはりうらなどつけては。いたくおとなしき人はきず。みるいろのしろうらは。わかき人はきず。なからおとなのしろぎぬもうすいろのきぬも。かさねてきたるよし。

首書

わかき公卿もとくさのかりぎぬきるときは。うすいろのきぬにしろききぬかさねてきるには。うすいろのさしぬききるほどのよはぬなれどもくるしからずとぞとく大じ殿おほせられし。コ殿ノ御テナリ。あかきかうのうらしろき。このいろ。わかき人もうすいろのきぬにしろぎぬもよし。又おとなしき人もきてん。

にがいろのうすいろうつきたるは。わかき人。うす色のきぬもきなるもしろきもかさねてきれども。うすいろはくろみあひたるやうなり。きなるきぬは秋のはじめなとめまたなか／＼三月にきるものなり。ひはだいろのしろうらといふは。あかいろにしろうらのつきたるなり。これもうすいろしろぎぬかさねておとなしき人のきるものなり。

このみるいろ。あかきかう。にがいろなどは。なからおとな。もしはわかきもきる。このいろいろきぬほどのおとなもあり。ふたあぬ。二こきはなだ。はなだのしろうら。もえぎ。あかい。くちば。うすあを。はじ。むしあを。二ふたあぬのかりぎぬには。すゞしうらはわろきものなればつけず。はりうらにもあるなり。きぬはくれなゐ。やまぶき。こうばい。き



なる。もえぎ。うすいろなどもきれども。つねにはくれなゐのきぬきず。やまぶきにあをきひとへよし。

首書

紅紫。このいろは。けのいろにあらず。本

書にもみえたり。コ殿ノ御テナリ。

こうばいのほひにくれなゐのひとへよし。きなるにくれなゐのひとへは秋きるなり。つねにはきず。黄緑ぬを春きるには。きひとへをきるべし。もえぎにくれなゐのひとへよし。うすいろにくれなゐのひとへは。たもとのかろみあひてわろし。このきぬどもは。わかくをさなき人のかさねてきるなり。すこしおとなだつ人はしろぎぬよし。

首書

すいじんはてんとうぎぬとて。あはひを

きらはす引かさねきるを。あきすけの三ゐといひし人は。あまりすいじんをこのみて。うすいろのきぬにきなるきぬひか

さねてきて院へまいりたりければ。うすいろにしろぎぬかさぬるはつねのことなり。これこそあまりのことなれとて。鳥羽とばの院わらはせ給けるとかや。たゞしうす色にかぎらず。おとなしき人のくれなゐむらさきのきぬなどきるほどの一日のはれには。しろききぬをかさねてきるはつねの事なり。つうじぎぬとなづけたりとかや。コ殿ノ御手也。

濃

深

袴

衣

生

こきはなだのかりぎぬも。すゞしうらはわろし。ねりうらのよきなり。きぬはふたゐるのにおなじ。あゐ色はいづれもきるべし。

白

裏

はなだのしろうらはをさなき人はきず。きぬも又いたくくれなゐやまぶきなどいろこきはず。しうらにはわろし。きなるしろきなどよし。

もえぎのかりぎぬ。はりうらなればやまぶき山吹



うすいろよし。きなるきぬはこざうしきめ小 群 色  
かしくてわろし。やまぶき濃  あをきひと  
へならねども。こきうすきにわたるひとへ  
よし。

うすいろまたふたつにくれなぬのひとへな  
らねども。しろぎぬかさねて。しろきひとへ  
にてもきる。

あかい赤ろはうすいろうらなれども。うすいろ  
のきぬやまぶきつねのことなり。わかき人  
もえぎのきぬにくれなぬのひとへうつく  
し。

くち葉朽のかりぎぬ。ねりうらすとしうら。つね  
のこと。きなる黄きぬきれども。きなるはいた  
くさだまりたり。うすいろしろぎぬあしか  
らず。

はじ藍のかりぎぬ。うすいろのかりぎぬ。あきの  
はじめにすゞしのきぬに。ひとかさねにて

もねりぎぬにてもよし。しろぎぬまたよし。  
むし虫 糞あをのかりぎぬ。うすいろのはりうらな  
らば。山ぶきよけれども。秋のはじめにきな  
るきぬ。うらこきすはうのすゞしのきぬな  
ど。ひとかさねにてわかき人のきたるよし。  
なか／＼秋すぎで。としのうちにしろき  
きぬよし。としかへりてはむしあをはきぬ  
いろなり。

あを唐 線いろ。からあや。けもんさ。ふせんれうにて  
も。うすいろうらこきうらをつけて。はれに  
きるものなり。

あをぐろといひしものは。むしのあをがいま  
すこしこきにあをうらつけて。むさ武者などの  
きる物なり。

からあや。しろあを。やなぎさくら。ひそく秘 色。し  
ろあを。うすいろのきぬ。しろぎぬともによ  
し。やなぎまたこのきぬどもによし。

さくらのうらはわかき人はこくてもきる。おとなしき人はうすくとあかうらにつけてもきす。しろぎぬつねはよしとおもふをり。くれなゐやまぶき又よし。

秘色ひそくのかりぎぬうすいろうらなり。これもつねはしろぎぬよしとおもふをり。くれなゐやまぶきまたつねのことなり。小栗秋はひそくにうすあをうらつけて。こぐりいろとおとなしき人はきるなり。これらは五ゐはみなきるものなり。

首書ひそくはなを一日のはれにきるいろなり。そののちは。けにてもきてん。これにあらずして。はじめよりしろぎぬなどに

續はきす。コ殿ノ御  
徳ナリ。

おりあを。うすあを。しろあを。唐紙からかみ。うすいろ。これらはみなしろきす。うすいろなり。おりかりぎぬねりうらはつけぬことなり。

又さふらひもしはそだいぶとおもふをりつけてもきる。うすあをのかりぎぬにはうすいろのきぬよし。うすいろにはしろきにしかず。

首書うすいろのおりかりぎぬは上らうはきるまじきこと也。社司やしろのつかさやうの物。このみきる色なり。

唐紙からかみ又うすいろのきぬもよし。しろきもよし。おりかりぎぬはなつもふゆも五ゐのためにいみじき物なり。あさぎのさしぬきにもうすいろにもきたるによし。

顯文抄うす物けんもさにおなじやうの物なれば。いろおとなもわかきもこゝろにあり。いとをそめてうすあをなどにおりたるが。あやのやうなるものおりうす物といふは。くら人などもきる物なり。

長絹ちやうけむのかりぎぬおとなしき人のきるも

のなり。よりくゝりをさしてきるなり。又そ  
だい<sup>大</sup>ふもさしてきる人あり。まことしくお  
となしくて。きる人はくゝりさゝでたもと  
ぬひこしてもきるなり。

ぬのかりぎぬ。ふたあゐ。もえぎ。<sup>青丹</sup>あをに。くち  
ば。<sup>香</sup>かう。すはう。うすあを。<sup>女</sup>をみなべし。こ  
ん。はなだ。<sup>白</sup>しらはり。

このいろ／＼のぬのかりぎぬ。殿上地下の  
六あつねにきるものなり。このなかにも。ひ  
とへかりぎぬにてきるいろは。かう。あをに。  
くちば。もえぎ。すはう。しらはりなり。ふた  
あゐ。をみなべしなどは。うらつかではわろ  
し。をみなべしはすゞしうら。ひねりかさね  
てよし。

<sup>首書</sup>内大臣殿はふたあゐのぬののひとへに  
て。るりいろのさしぬき。<sup>鳥羽</sup>とばの院の六月  
の御逆修にきさせ給たりけり。中將の御

時なり。ヤガテコ殿ノ  
御テナリ。

コトカ  
別當殿

この別當殿のきんじきの中將のころ。し  
らはりのぬのかりぎぬをうすいろのさし  
ぬきにき給たりしをば。ある人上ろうの

ぬのかりぎぬはそめてをきることなり。  
しらはり<sup>白張</sup>はきぬことなりとぞ申し。も

ろもとと申し物しりに外記のことなどに  
はにすや。されども宇治の入道<sup>忠實</sup>どののお

ほせなど。よくおぼえたりし人なり。<sup>コレ</sup>モコ  
殿ノ御テナリ。

ナリ。

ふたあゐはすゞしうらはわろければ。はり  
うらすこしたゝかにはたぬひたるもわろ  
し。このみきるべからず。くちばすゞしうら  
もうつくし。あかくちば<sup>赤朽葉</sup>ひとへにて。すゞし  
うらつけたるは<sup>箱</sup>うすくちばのきうら  
つけたるは。もえぎのきぬもうすいろも。ま  
たなつすゞしのひとへにもうつくし。

青丹あをに。もえぎ。山ぶきのきぬも。うすいろも。

又なつすゞしのひとへにてもよし。いつも  
きるいろ也。

うすあを。しろうらひねりかさねて。うすいろ  
山ぶきのきぬ。なつすゞしのひとへにもよ  
し。

女郎花をみなべしは。六月七八月などはなちてはき  
ぬものなれば。すはうのしろうらのすゞし  
のきぬなどよし。

白張しらはりは。六ぬは五月六月などにきる物な  
り。常にはきず。かうのかりぎぬはいつもき  
る。をみなべし。うすいろのきぬ。もえぎな  
どもよし。なつすゞしのひとへにてもうつ  
くし。

紺夏こむ。ふたあゐは。しめらぬものなれば。なつ  
あつきころ。すゞしのひとへにきたるうつ  
くし。ふゆはいたくきず。このなかにこむふ

たあゐにるりいろのさしぬき。かうのかり  
ぎぬもおなじ。さしぬきなどにはかんだち  
部上達めもはれなどにきる物なり。

白張しらはり。かう。こん。ふたあゐは。五位もき  
る物也。ぬのかりぎぬにはこれこそつねに  
五位のきる。白はりをつねにきることとはせ  
ず。きんだい冬もきる。いはれぬことなり。  
蘇芳すはうのかりぎぬ。六ぬはいつもきるべし。

きぬはやがてうらこきすはうもくるしから  
ず。うすいろもよし。春うらやまぶきよし。秋  
黄餅きぎぬよし。秋はきくとても。春はぼうたん  
餅もちつゝじとても。か□にあるいろなり。  
うすもえぎのきぬもうつくし。

奴符さしぬき。  
むらさき。はしたいろ。牛色うすいろ。ねりあさ  
ぎ。はなだのうちさしぬき。もえぎのさしぬ  
き。むらさきのおり物緋のさしぬき。いろ色器ゆり



たる殿上人も。内うちのくら人などきる。たゞ  
のむらさき。わかきかんだちめ殿上人をさ  
なきわかき腹五位六ゐみなきることなり。か  
ならずはらじろ白をさすべし。  
はしたいろ。これ又おとなだつわかき人など  
はきる事なり。

うすいろ。又あさぎ。もえぎなど□も。殿上ち  
下の五ゐみなきることなり。

首書うすいろには。おなじいろのくゝりをむ  
すびたるなり。はらじろをさす。

ねりあさぎは。なつふゆおとなしき人のきる  
ものなり。そだいぶなどは五ゐになりなば。  
とくきたるにあしからず。うすいろはなつ  
さしぬきのむつかしきに。  
はなだのうちさしぬきは。をさなき殿上人も  
しは六ゐなりとも。こととあらんにはきた  
らんくるしかるまじ。

もえぎのさしぬきは。いろをゆりたらん人は  
きたらんくるしかるまじ。わらは殿上の人  
などはつねにおりものにてきるなり。くゝ  
りおもての色にてくみさげけり。

首書ほり川編の院名のくらゐの御時。それがし。た  
だいま藏なおぼえず。五十よにしてははじめ  
てくら人になりたりける。もえぎのおり  
物のさしぬきをふみちらして。そはわき  
ちて。あさがれゐにまゐりたりければ。み  
かどゆゝしのさうぞくのさまやとて。す  
こし御へいきうのていなりければ。かし  
こまりてついで。君のゆるしたびたる  
いろなれば。しろしめすにおよばずと申  
ければ。わらはせ給けり。コ殿ノ御  
手ナリ。  
なつさしぬき。ふたあゐ。るりいろ。うすいろ。  
おりあさぎ。紫しを菫んいろ。

ふたあゐは。おさなくわかきみなきることつ

ねのことなり。はらじろをさすべし。

るりいろは。わかけれども殿上人などのあつきをり。ふたあゐもあつれたればきる物なり。

うすいろは。つねに五ゐ六ゐみなきる物なり。おりあさぎは。五ゐはわかきもおとなしきも。

夏さしぬききる人はみなきるなり。

しをんいろは。つねにきる物にあらず。秋はじめにきる物なり。うすいろのなつさしぬきのおもてにうすあをのねりうらをつけて。すはうのしろうらのかりぎぬ。すゝき菰をみなべしのすゞしのきぬなどうつくしきものなり。

なつうすいろをきる。五ゐはあさぎをきませたるくるしからぬことなり。なつふゆあさぎのねりたるをきる人は。なつもなつさしぬきはきず。またうすいろのさしぬきなつ

もふゆもきず。いはひのことなどにてかみなどよりきせらるゝにはきることなり。

ぢ下地のそだい諸大ふなれども。かすが春日まうで諸など

には。おりもののかりぎぬ。からあやのさしぬきなどはきることなり。

きぬは。六ゐはにほひもうすやうも。ふた二つみるつねのことなり。殿上人またさたにおよばず。ぢ下の五ゐもことゝあるには。しろぎぬ二がうへに。くれなゐ。紫。うすいろもかさねて。みつもきるなるべし。きぬ□いふなり。くれなゐかさぬれば。しろうらをつくるなり。

むらさき。はなだのきぬ。うすいろはしろきひとへがうへにもふたつがうへにも。かさねてきるはつねのことなり。

ひと一かさね重にきるきぬのいろ。

うらこきすはう。はるはなでしことてきる。

夏もなでしことても。又うらこきすはうと  
ても。わかき人おさなききる。

うす色又はる秋よし。

うすあを。四月にわか若かかえでとてうつくし。き

なるは秋よし。春はなか／＼。ふたつばかり  
にひとへかさねて。たゝらへいろとてぞき  
る。

しろぎぬ白絹は。おとなしき人すゞしのひとへか

さねても。ねりひとへにてもいつもよし。

一所の殿上人ならぬ六ゐは。さしぬきはうち  
まかせぬことなり。かりばかまをきるべき

なり。六ゐのしん進なりとも。一所のひくら人

などにても。さしぬききるに。この比はむら

さきふたゐゐにところをかず。殿下の勾當

などはけにもきぬものなり。

かりばかまは。なつふゆはこしにてみゆるな

り。うすくあついなるは。宮のさふらひ所の

しう衆のきるなり。かみざまのは。うちぬ字法布のの

かりばかまなどのよきなり。たゞしかくい

へども。人のさうぞくみなあらぬことにな

りにたり。はからひておりによるべし。六ゐ

などははれ晴にもけ嬰にもぬのかりぎぬをき

ども。きんだい浮線綾ふせんれう。けもんさ。をき

てきぬなり。はれには。さはなにをかきる

べき。

すいじん身はくれなゐ。うすいろも。やまぶき。む

らさき。ふるくはろく緑のきぬを。ひろひあつ

めぎぬとてきけるなり。

このゑ近衛の大將のすいじんは。いろ色をつくし

てな朽葉上にをもきれども。こきくちばかみしも

はきぬことなり。中少將の似にてわろきゆ

へなり。大將も中少將の分もかりばかまは元

三のほ染どはこうばゐ分にてあれども。二日も

三日も行幸あれば。そめわけ分をきてこうば

ゐはきず。いかさまにも三日のちはきぬ  
なり。さぶらひ衛府ふなどのさもあるがおと  
なだつは。みるいろのうらしろきかみしも。  
とくさのうらしろきかみしもなどはつね  
にきるものなり。

行幸なきとしは七日まできるなり。青書コ殿ノ  
御テ。

コウバイバカマハ十六日ノセチエマデト  
モキコエタリ。三日ノウチ行幸アリテ。ソ  
メワケニナリヌレド。七日ハマタコウバ  
イノハカマヲキルトコソキコエレ。元三  
七日十六日。コレナラデハ。サテノ日ハイ  
カサマニモスハウバカマヲキルナリ。物

御モモエギハカマナリ。

女房ばうのさうぞくのいろ。

春夏秋冬のいろ。いはひにきるいろい  
ろ。

うらこきすはう。蘇芳

おもてはなからほどのすはうの。うらはこ  
きすはうなり。あをきひとへ。

すはうのにほひ。

うへはうすくて。したざまにくくにほひて。

あをきひとへ。

まつ松重がさね。マツガサチハ。アチキチウヘニテアルチ。  
ミルヤリニオボユルハヒガゴトカ。

うへ二つすはうのこきうすき。もえぎ龍木のに

ほひたる三。くれなゐのひとへ。

しろぎぬつねのことなり。

すはうのにほひ。しろぎぬにはしこきうち

をかさぬべきなり。

くれなゐ紅のにほひ。

うへくれなゐにをひて。したへうすくにほ

ひて。こ紅梅うばいのひとへ。

くれなゐのうすやう。

くれなゐにほひて三。しろき二。しろきひと

へ。



こうばいのにはひ。

うへはうすくて。したへこくて。あを<sup>青</sup>きひとへ。またまさりたるひとへをもきる。

もえぎのにはひ。

うへはうすくて。したへこくにほひて。くれなゐのひとへ。

うすもえぎ。

おもてはみなうすあをにて。うらのすこしこきなり。これもくれなゐのひとへ。

や<sup>柳</sup>なぎ。

おもてはみなしろ<sup>白</sup>くて。うらみなうすあを。くれなゐのひとへ。又うらにはひておもてはしろくて。うらはしたへこくにほふ。

十月一日よりねり<sup>練</sup>ぎぬわたい<sup>衣</sup>いてきる。

き<sup>菊</sup>くのやうく。

おもてみなすはうのにはひ。うらみなしろ<sup>面</sup>し。あをひとへ。

おもてすはうのにはひ。うすきなる二。あを

きか。こきうすきくれなゐのひとへ。

も<sup>紅</sup>み<sup>葉</sup>ぢのやうく。

くれなゐもみぢ。

くれなゐ。やまぶき。きなる。あをき。こきうすきくれなゐのひとへ。

はじめみぢ。

きなる二。やまぶきくれなゐ。すはうくれな

ゐのひとへ。

あをもみぢ。

あをきこきうすききなるやまぶきくれなゐすはうのひとへ。

か<sup>蝦</sup>へ<sup>手</sup>でもみぢ。

うすあを二。きなるやまぶきくれなゐ。くれなゐのひとへにても。すはうのひとへにても。

もぢりもみぢ。

あをきこきうすき二。黄きなるやまぶきくれ  
なぬ。うらはすはうくれなぬ。やまぶきこき  
うすきくれなぬのひとへ。

五節せちよりはるまできいろ。

むらさきの匂にほひ。

うへこきむらさきよりしたへうすくにほひ  
て。くれなぬのひとへ。

むらさきのうすやう。紫 薄 様

うへよりしたへうすくて三。しろき二。しろ  
きひとへ。

くれなぬのにほひ。さきにしるしたり。

くれなぬのうすやう。さきにしるしたり。

こうばいのにほひ。さきにしるしたり。

うらまさりたるこうばいは。おもてうすく  
てうらまさりてあをきひとへ。

やなぎ。さきにしるしたり。

もえぎ。さきにしるしたり。

やまぶきのにほひ。

うへこくてしたへきなるまでにほひて。あ  
をきひとへ。

うらやまぶき。真 山 吹

おもてみなきなり。黄うらみなこきやまぶき。

あをきひとへ。

はな花 山 吹なやまぶき。

うへよりしたまでみな中らいろのやまぶき  
也。あをきひとへ。

むめぞめ。

おもてはみなしろくて。うらみなこきすは  
う。あをきひとへ。

むめがさね。梅 重ムメガサ子ハ。ウヘコウバイナル  
モ。アカイロナルモアルナリ。

うへしろきこうばいにほひて。くれなぬ一。  
こきすはう。こきひとへ。あをきひとへも心

心なり。

ゆきのした。雪 下クレナキノヒトヘコ  
ソヨケレ。アチキハワロシ。

しろき二。こうばいにはひて三。あをきひと

へ。

紫

村

濃

むらさきむらご。

むらさきにはひて二。あをきこさうすき二。

くれなゐのひとへ。

ふたついろに。

うすいろ二。うらやまぶき二。もえぎ二。くれ

なゐのひとへがさね。

フタツイロハ。モエギヲウヘニカサヌル

コトモアルトカヤ。サレドツチニハコノ

定ニウスイロヲウヘナリ。カズオホクス

ルニハ。コウバイナドコソ。

いろく。

うすいろ一。もえぎ一。こうばい一。うらやま

ぶき一。うらこきすはう一。くれなゐのひと

へ。又さくらつゝじとて。さくらのき

ぬ。さくらもえぎのうはぎ。かはざくらのか

らきぬなどをきる。

四月うすぎぬにきるいろ。

菖蒲

さうぶ。

あをき。こき。うすき。しろき。こうばい。こき

うすき。しろきすゝしのひとへ。

わかさうぶ。

おもてあをきこさうすき三。ふたつはうら

しろし。しろおもて二。うらこうばいのには

ひ三。しろきすゝしのひとへ。

ふぢ。

うすいろのにはひて三。しろおもて二が。う

らあをき。こさうすき。しろきすゝしのひと

へ。又くれなゐのすゝしのひとへ。

四月ノアハセノキヌニハ。イカサマニモ。

シロキスバシノヒトヘヲカサヌルコトニ

コソアメレ。マツリヨリノチ。スバシノキ

ヌニセンコソ。クレナ井ハカサ子メ。アハ

セノキヌニハ。ナニイロニテモアレ。シロ  
キヒトヘト思ハヒガゴトカ。

<sup>陶</sup>つゝじ。

くれなゐにほひて三。あをきこきうすき二。  
ひとへしろきくれなゐ。こゝろぐなり。

花<sup>橘</sup>たちはな。

やまぶきこきうすき二。しろき一。あをきこ  
きうすき。しろひとへ。あをひとへ。

う<sup>卯</sup>のはな<sup>花</sup>。

おもてみなしろくてうらしろき二。きなる  
一。あをきこきうすき二。うらしろきひとへ。  
な<sup>燕</sup>でし<sup>子</sup>こ。

おもてはすはうにほひて三。しろきおもて  
二。うらすはう。くれなゐ。こうばい。あをき  
こきうすき。しろき。くれなゐひとへなり。  
しろなでしこ。

おもてみなしろくて。うらすはう。くれなゐ。

こうばい。あをきこきうすき。しろき。くれな  
ゐひとへ。こゝろぐなり。

ぼ<sup>牡</sup>うた<sup>丹</sup>ん。

おもてみなうすきすはう。うらみなしろし。  
すゝしのひとへ。

わか<sup>若</sup>かえ<sup>蝦</sup>で<sup>手</sup>。

みなうすもえぎ。くれなゐ。しろきひとへ。心  
心也。

もち<sup>餅</sup>つゝじ<sup>調</sup>。

すはう三にほひて。あをきこきうすきしろ  
ひとへ。  
五月<sup>掄</sup>ひね<sup>重</sup>りがさね。

さうぶ。うすぎぬのいろにおなじ。

むらさきのうすやう。うすぎぬのいろにおな  
じ。

くれなゐのうすやう。うすぎぬの色におなじ。  
花<sup>橘</sup>たちはな。うすぎぬにおなじ。



なでしこ。<sup>撫子</sup>うすぎぬにおなじ。

ウスギヌハ。ウラノイロくナルニ。ヲナ  
ジャウニハイカナルベキゾ。オモテノイ  
ロノ定歟。<sup>杜若</sup>  
かいつばた。

うすいろにはひて三。あをきこきうすきく  
れなゐのひとへつねのことなり。[ ]ば  
かりなり。

六月よりのひとへがさね。<sup>單重</sup>

すはうくちば。<sup>朽葉</sup>くれなゐうすいろ。うすあを。  
からかみそめつけ。ふせんれう。<sup>唐紙</sup>

からかみきなるに。しろたてあをきかさねを  
したり。けもんさふせんれう。<sup>顯文紗</sup>これらはみな  
ふたへなり。すはうくちばくれなゐうすいろ  
うすあを。これらはみなしらがさねしたり。  
カラカミハヤウくナリ。キガラカミア  
ヲガラカミツ子ノコトナリ。スハウウス

イロウスクチバ。ウヘシタオナジコサナ  
ルモアリ。ツ子ノコトナリ。

七月七日よりきがへする。

はぎうすいろにあをたて。したにあをきか  
さね。

をみなべしきなるにあをたて。したにあを  
きかさね。

オミナベシナドハ。六月ギラムノ御エ。<sup>祇園會</sup>

[ ]ナドヨリキル。ツ子ノコトナリ。

八月一日より十五日まで。ひねりがさね。<sup>捻重</sup>

くれなゐのうすやう。

むらさきのうすやう。

すいき。

すはうのこきうすき三。あをきこきうすき

しろひとへ。

アヲキヲウヘニカサ子テ。ナカ[ ]アリ

テ。シタニスハウヒトへ[ ]ニホヒテ。ヤ

ガテスハウヒトヘト思ハヒガゴトニヤ。  
龍 りんだう。かいつばたにおなじ。

きく。ねりぎぬにおなじ。

もみぢ。ねりぎぬにおなじ。

八月十五日より九月八日まで。わたいれぬ

す生ゝしのきぬ。すはううすいろしろききく

もみぢ。ねりぎぬに同じ。

をみなべし。

おもてをみなべし。うらみなあをし。くれな

ゐのひとへ。

九月九日よりすゝしのきぬのわたいれたるを

きる。くれなゐむらさきうすいろ

しろ。これらみなつねのことなり。

十月一日よりねり練衣ぎぬはしにかき

このきぬともにうはぎにをきてはおりによ

りこゝろにあるべし。あゐいろは襦じいろを

かさぬ。きくのきぬにもみぢのうはぎをも

かさぬ。もみぢのきぬにきくのうはぎをも  
 かさぬべし。

うちで打には。きくもみぢのきぬはおぼろげ

にてはなし。をし押いだしぎぬにはつねのこ

となり。

上らう女顔ばうのいろを色ゆる紫といふは。あを青

いろあかい袈ろのおり物のからぎぬ。地摺ずり

の裳をきるなり。いろをゆりぬも

□さもある女綴ばう。おりもの唐衣のからぎぬを

ゆりてきる。つねのことなり。つねにはりう

もん文のえび蒔染ぞめ唐衣のからぎぬ。りうもんなら

ねどもねりぬき。つねのことなり。いろをゆ

りぬ女打ばうも。うはぎはおりのものなり。

うちい出でには。いかさまにも。えびぞめのお

りもののからぎぬなり。たゞしいろをつく

しなどすることには。えびぞめならし

のへにしきのからぎぬ □ のことなり。

妾 玉 上 差  
もにたまのうはざしつねのことなり。

くるまにはのる人のしなにしたがへ。おり  
物りうもんあひまじることなり。

うはぎ。いかさまにもおりものなり。

からぎぬにはひもといふものあり。からぐ  
みのいろくになるにてあけまきになをむす

びて。六すぢも八すぢもして。からぎぬのお  
ほくびのかみはうらうへにつけたるなり。

うちでにもくるまのきぬにもあらば、そで  
のうへにとにひきいだしてさぐべし。きぬ

からぎぬうはぎ   きなりまで。やうや

うに色をつくし。にほひ   てる常の事な

り。うちぎぬはうちまかせてはくれなゐな  
れども。きぬにしたがひて。こきうちはなだ

えびぞめうち。あをうち。すはううち。しろ

ちつねのことなり。

すはうのきぬには。こきうちこきはかまを

かならずきるなり。しろぎぬまたこきうち  
こきはかまなり。このいろくのうちぎぬ  
は。たゞきぬつねのことなり。

もはなつふゆこし   こしむらごなれ

どもねらず。   いふな   らねども。

くちばうすいろ。つねのことなり。

なつのくるまのきぬには。うるはしくは

りひとへがさねをも。ひとへがさねをも。も

のくかさねていだす。つねのことなり。

きぬのいろをもさだめ。くるま <sup>車</sup> 三りやうと

も五りやうともさだめられば。あつぎぬ。な

つもふゆもかならずいだすべし。

御くるまのしりには。あ   にもいだしぬ

なり。まつりのさい院のいだしぐるま。ない

しのすけの <sup>侍</sup> いだしぐるま。あつぎぬをいだ

せども。からぎぬうはぎもはすゞしなり。あ

ふぎはまつりの日はふゆのをいだす。かへ

さには。きぬはおなじことなれども。あふぎばかりはもちかへて。なつのあふぎをいだすなり。

わらはのさうぞく。あこめはねりたれども。かざみ<sup>汗衫</sup>うへのはかまはすじなり。

うちい<sup>打</sup>でおし<sup>出</sup>いだしぎぬ。をりによりいろこゝろにあることなり。りうもんはさま<sup>□</sup>なり。おし<sup>□</sup>いだしぎぬ。こゝろの<sup>□</sup>ゆるなり。よくこゝろあるべし。

うちでは。すみのひぢおりこそよくこゝろえあるべきこと。御がにまさ<sup>安元</sup>すけがは<sup>雅</sup>じめて<sup>亮</sup>いだしたりしをみてする人あれどもみぐるし。本を見るべし。すはうのにはひうらこきすはうなど。上ろうなどのたてまつるは。かすはいくらもこゝろく<sup>く</sup>なり。こきうちすはうのうはぎ。こうちぎふたへおり物つねのことなり。又こ<sup>□</sup>うちの女ばう

は。うはぎ<sup>□</sup>うちぎぬにからぎぬばかりなり。<sup>□</sup>て五せちのもうはぎはなし。

これは本には。三卷まき物にてあるを。一帖にかきうつしたるなり。まさすけがみづからのてにてかきたり。やちにかみにかきてをしつけたるは。すけゆきがてなり。かしらがきはこ殿の御てなり。それをみなかきうつしたるなり。かたかなにてかきたることは。わらはがかきたるなり。

應永第九之曆林鐘中旬加修理畢。

入道參議

冬

高倉永行卿殿

いで<sup>出</sup>ぬ<sup>居</sup>の<sup>具</sup>ぐ。すけゆきがてにて。おくに<sup>子</sup>づし<sup>一</sup>ひとよろひ<sup>壁</sup>。まき<sup>底</sup>底<sup>器</sup>。はじめづしのかみの<sup>上</sup>こ<sup>附</sup>しのはしに。ゆ<sup>滑</sup>するつき。だいふた<sup>あり</sup>。おなじきづし



のおくに。かゝ<sup>極上</sup>げのはこ<sup>筈</sup>だいあり。おくのづし  
にはな<sup>放</sup>ちのはこ<sup>筈</sup>二合。<sup>まき底。だいあり。か</sup>  
け<sup>脇息</sup>うそく。す<sup>息</sup>ぐりのはこ<sup>一</sup>。  
で<sup>出居</sup>いにとりて。びん<sup>便</sup>ぎの所<sup>宜</sup>にこれをたてゝ。こ  
の定に物<sup>具</sup>のぐをおくなり。このた<sup>細</sup>なのまへに  
かう<sup>北</sup>らいのたゝみ一帖<sup>面</sup>しく。

きたおもてに。

くろぬ<sup>黒漆</sup>りのおほきなる二かい<sup>階</sup>のだいあり。た  
なをた<sup>下</sup>つ。い<sup>眞鍮</sup>れものしものこ<sup>層</sup>しにはん<sup>椽</sup>ざうたら  
いぬ<sup>眞鍮</sup>きす。おなじきこ<sup>古</sup>しに<sup>代</sup>ならべて。た<sup>手</sup>なご<sup>巾</sup>ろ  
のはこ<sup>錦</sup>。ちいさきこ<sup>薛</sup>だいのまき<sup>立</sup>ゑしたるに<sup>居</sup>す  
う。はこもおなじくまきたり。にし<sup>折</sup>きのおりた  
てあり。

右満佐須計装束抄以柴野彦本校合聊加傍注畢

群書類從卷第百十三

裝束部二

助無智秘抄

一名年中行事  
裝束抄

四方拜。元日。

御劔ノヤクノ近衛司。龜 殿モトヲシニマキエノ

タチナリ。

小朝拜。元日。

上達部ハ有文ノ帶。金魚袋ヲツク。飭劔紋ヲハク。カザタチノ裝束。アカナメシニハダンノ平緒。コンヂノヒラヲ。キラハズ可用之。アラナメシノ裝束ニハ。ダンノヒラヲハモチ井ズ。大將モ宰相中將モ。隨身ハ紅梅ノカリバカマ也。七日マデハコレヲモチ井ル。七日中ニ朝キムノ行幸アレバ。ソメワケニナリ

ヌルニハ。紅梅ノ狩袴ハ。七日中ニモチ井ルベカラズ。左右衛門左右兵衛督ノ隨身ハ。イツモアラバカマナリ。

近衛司ハワキアケノ袍ニス井エイニテ。ラデンノホソダチ。銀魚袋。巡方ノツノオビナリ。メナウヲモチ井ルコトモアレドモ。ウチマカセテハ巡方ノオビナリ。隨身ハサキニミエタリ。マキエラ螺 鈿デンノ劔ハ近衛司ナドハモチ井ズ。上達部タチモ。オトナシキヒトノモチ井ルベケレドモ。ソレハワカキモ時々ミナモチ井ル。クワノクツハ公卿モ近衛司モオナジモノナリ。

小朝拜。

藏人上臈一人計小朝拜立列。但無官ハ列ニ  
タ、ズ。シヤクヲモタヌユヘナリ。

文官。位袍。笏ヲモツ。靴ヲハク。

衛府。位袍。絲鞋。劔。紫革裝束。尻鞆。平緒。

或人シザヤヲイレズトイフ。シカレドモ近  
代ミナイル。

節會。

文官。位袍。他ノ裝束ツ子ノゴトシ。

サクラノ下重ヲキルベキカ。タバシ又ツ子ノ  
コトナリ。上袴ウキモンヲモチ井ルベシ。タ  
バシカタモンモアルニシタガフナムナシ。雜

衛府。位袍。浮文袴。ヒラヤナグヒヲオフ。

野劔。ムラサキノカハ尻鞆。シザヤ。平緒糸鞋。ヒラヲ。シカイ。ヌ

ノオヒヲナリ。

儀式官。位袍。ツ子ノシタギヲキルベシ。

元日ノ早旦ニ御クスリトテ白散ヲグスル事ア

リ。二日三日同供ス。後取トテ毎日ニ一人ヅツ  
イル。元日ニハ四位。二日五位。三日ハ六位ツト  
ムルナリ。コレミナ束帶ナリ。近衛ヅカサナド  
ハツトメズ。

同日一所拜禮事。

文官。位袍。裝束ツ子ノゴトシ。

儀式官。同文官。

衛府。位袍。野劔。紫革裝束。尻鞆。平緒。淺沓。但着  
有レ例  
云々。

件間平ヤナグヒニオイテハ。トモノモ

ノニモタスベシ。

三日臨時客。

上達部モ近衛司モ。蒔繪細劔ナリ。タバシ一

ノ人ノトノバラハ。ラデンノ劔ヲ二三日ト

モニモチ井ラル。タバノ人ハ蒔繪劔ナリ。尊

者ニ大將ナドムカハンニハ。カイ子リノ下

ガサ子ヲキル。ハレニ紅梅地ノヒラヲサ

ス。アル人チカク紅梅地ノヒラヲヲ。ノリユ

ミノソウノ日サ、レタリケル。ヒガゴト、コソウケタマハレ。隨身ノ紅梅ノ狩袴ニグシタルコトナリ。カイ子リニハコンチノ平緒モクルシカラズ。ムラサキダンノ平緒ヲササヌコト、故實ニ申。昔花園ノ左大臣ドノノリユミノ奏ノ日。カイ子リニ紫ダンノヒラヲヲサ、セ給タリケレバ。法性寺殿アザケラセ給テ。太政大臣<sup>久我ノ大相國也</sup>。コソヲシヘモラサレタリケントオホセラレケレバ。花園殿ハチサセ給ケルトカヤ。

火ノ色ノ下重。カイ子リトカハリタルモノナリ。火ノ色トハ。ウラオモテトモニ打物ニテ。中倍ヲ入タルナリ。カイ子リトハタバウラクレナ井ノハリタルニテ。中ヘモナキナリ。ノリユミノ日ハ。カイ子リヲキルコトナリ。火ノイロハ宿德ノ大臣。モヤノ大饗日尊者シテキルコト、ゾキ、ツタヘタル。三條

内大臣殿コノヒノイロヲト、ノヘテ。カイ子リトコ、ロエテ。ノリユミノソウノ日キサセタマハントテ。アルヒトニミセサセ給ケレバ。ミテメデタク候。但カイ子リニハ候ハズトマウシケレバ。大臣殿イトモ心得ズシテキサセ給ニケリ。

上東門院昔大原野行啓。宇治殿非參議時舞人タリ。習樂ノ日紅打下重。黒半臂。時ノ美談ナリケルトカヤ。

### 七日十六日節會。

公卿。近衛司。元日同事也。十六日ノ節會ゾカナラズ夜ニイルユヘニ。外辨ノ上首ハ。カナラズダンノヒラヲヲサストマウシナラハシタル。承明門ヨリヒキテイルガ。ダンノヒラヲ火ノヒカリニアラハレテイミジキトカヤ。

六位如元日。



朝觀行幸。二日アルヒハソレヨ  
リノビテモアリ。

上達部ハラデンノタチ。巡方ノオビ。靴ノグ  
ツ。大將オナジ。但ヒラヤナグヒヲオフベシ。  
大臣ノ大將ハ隨身ニモタスルナリ。オイカ  
ケヲヤナグヒニカクルナリ。隨身ソメワケ。  
左ハス蘇芳ハウ。右ハクチバナナリ。又ヤナグヒノ  
エビラ。大將ハクエンシヤウエリタルヲバ  
モチ井ズ。ナヲ輕々ノ故ニヤ。

近衛司。ワキアケ。ヤナグヒ。劔。隨身ナドハ  
大將ニオナジ。セキヨリトノ神社ノ行幸ナ  
ドニ。近衛司ハヤナグヒノマロヲ、ヒク。大  
將モシハ近衛司ハモトモ染裝束ヲスベシ。  
但上達部ハ下重ハイロアルヲモチ井レド  
モ。ウヘノ袴ハ只例ノ定ノウキモンナルヲ  
モチ井ルベシ。タゞシワカキ人ナドハソメ  
ウヘノハカマヲ用モアリ。禁色ノ人半臂下  
重イロアルオリモノヲモチ井ルニハ。ヤガ

テハン半臂ビオナジモノナリ。

オリモノノ下重ハイカニモ二度ハモチ井  
ズ。實長卿宰相中將ノトキ。春日行幸ニウラ  
ヤマブキノオリモノ、下重ヲキテ。マタヤ  
ガテカヘサノ日。ソノ裝束ヲ用タリケレ。大  
將宰相中將若三位中將ナドハ。コトナルハ  
レニ染裝束ヲスベシ。左右兵衛督人ガラニ  
ヨリテキルベキニヤ。左右衛門督ナドハイ  
トセスコトナリ。イハンヤ顯職ニ井ヌ人ハ  
ソメ裝束ハミグルシカルベシ。定賴宰相非  
參議中將ナリケルトキ。カイ子リヲキタリ  
ケルトカヤ。水精スイシヤウツカノタチハ馬ニ  
ノル日ハカズト宇治殿賴通ハオホセラレケル。  
スベテヨキタチヒラヲバ馬ニノル日ハ不  
用事也。又近衛司行幸日ハ。チイサキ馬ニノ  
ルベシ。オホキナル馬ハ御輿ヲミサゲテビ  
ンナシ。又近衛司ハミナ平文ノウヅシヲ用

ベシ。カラオ、ムスバズ。

ヒラヤナグヒノ水精ノハズカブラ。閑院大將朝光ノシイダシタマヒタリケルトカヤ。

ソレヨリサキハウシノツノナリ。近代大將ノヤナグヒニハ。水精ノカブラニテアリ。近衛司ノハ。ウハザシカブラニヲスルナリ。

雨儀ノ行幸ノ時。御輿ニアマガハスルニハ。鳳輦ヲバオホヒカクサズ。雨皮ヲホコロボシテイダシタルナリ。

二宮大饗。東宮中宮也。三日有此事。

上達部。近衛司。裝束臨時客ノ日ニ同。

母屋大饗。

掌客使トテ。尊者ヲムカフル使也。主人ニシタシキ近衛司ヲモチ井ル。モトヲシ。マキエノタチ。マロトモノオビ。馬ニノリテムカフ。尊者ノゼムクウシテカヘル。尊者ハ火ノイロナラ子バ。サクラノオリモノ、下重ヲ用

ベシ。上達部ハ有文ノオビ。ラデンノ劔也。

藏人。蘇甘栗使勤仕ノトキ。衛府。文官。儀式官。ミナ青色ニ火色下重ナリ。タバシ廷尉ハ

雜色ノ下重ヲキルベカラズ。

叙位。五日。依二日次一。可有二延引事一。

上達部。無文帶。蒔繪劔。近衛司同。

女叙位。同。

御齋會。自二八日一始。十四日終。

上達部。蒔繪劔。無文帶。近衛司モオナジ。蒔

繪劔。マロトモノオビ。

御薪。

裝束ツ子ノゴトシ。

兵部手番。

裝束ツ子ノゴトシ。

踏哥節會。

公卿。近衛司。裝束カミニミエタリ。

大將ノ隨身アラバカマニアラタム。

射禮。<sup>十七日</sup>建禮門前ニテヲコナフ。

上卿參議。裝束ツ子ノゴトシ。六府ノ將佐。サ  
ウヅクツ子ノゴトシ。ユミヤトモアヒグス  
ベシ。

賭弓。今朝<sup>射遠</sup>イノコシヲ行フ。

公卿。蒔繪劔。無文ノオビ。弓矢鞞ヲアヒグ  
スベシ。ユミヤハザニツクトキ。モチャウア  
ルベシ。

近衛司。モトヲシ。マキエノタチ。マロトモノ  
オビ。弓矢アヒグスベシ。ユミニトモヲツク  
ルヤウアルベシ。

今日ハヤナギノシタガサ子ヲキズ。四府將  
佐ハマツ矢ノソウトイフコトアルベシ。

除目。<sup>正月十一日。又  
被撰ニ日次。</sup>

公卿。マキエノタチ。無文ノオビ。ハコブミヲ  
トル人。ヨルナレドモカイツクロフベシ。一  
ノ人ノトノバラ執筆ニマイリ給トキ。オリ

モノ、下重ヲモチ井ラル、オリモアリ。近  
衛ツカサマイラバ劔ヲハカズ。タビシヒビ  
ツ。ツイガサ子ノヤクナドニハ。花族ノ人ハ  
ヨ爪フ爪。

除目清書。<sup>上卿宰相着  
仗座ニ行レ之。</sup>

裝束ツ子ノゴトシ。

下名。同。

釋奠。如レ常。

文章生藏人着位袍參役。但宴會ニハ着青  
色。

大原野祭。

裝束ツ子ノゴトシ。

春日祭。

ツ子ニハ弁バカリマイリテヲコナフ。一ノ  
人ノトノバラ中納言ニナリテハジメテ上ケ  
イセサセ給ヲバ。春日詣トナヅケテユ、シク  
キラメカル、事也。タビノ上卿ハセズ。近衛

司内 幕 寮コソクラヅカサノ幣ヲタテラル、ニアヒ

グシテ。ツカヒトテ二季ニ左右近衛カハル

ガハルスルコトナレバ。近衛司モサルベキ

人ハイデタチシテ。キラメキテクダルコト

ナリ。ミチ路 程ノホドハナヲシニカシハバサミ

シテ。野劔鳳 箱ニシザヤサシテハキテ。ワラフカ

グツハキテクダル。隨身ニハスイカシ水 干カリ

アラナドキセテ。ウツシ馬ニノセテサキニ

ウタスベシ。ノチハキラメカズ。諸宮ノ

使モ幣ニグシテマイル。ソレモ近衛司東宮

中宮スケ。モシハユゲヒノ佐ナド宮司ニテ

クダルハ。ソレラモキラメクベシ。廷尉佐ハ

ラウドウナド郎 等グスルトカヤ。

祈年祭。二月四日。

装束ツ子ノゴトシ。

園韓神祭。

装束如常。

列見。二月十一日。

公卿。有文ノオビ。ラデンノタチ。フカグツ深 香

ハクベシ。アメノフルトキノミチアマリア

シキニ。列見定考外記政事ナラ子ドモ。フカ

グツヲハクベシ。

圓宗寺寂勝會。

上卿宰相參ニハ。御齋會ニ被准アヒダ。劔笏

ヲテセズ。

祈年穀奉幣。

装束ツ子ノゴトシ。

仁王會。

公卿。出居ノスケ。ミナマキエノタチナリ。

季御讀經。行事藏人初後日ニ着青色。但極熱ノ時被レ行者強不レ可レ着。無レ便之時可レ有ニ用心ニ歟。

装束如常。

位祿ノサダメ。二月中旬ニ行。

装束如常。

御燈事。



石清水臨時祭事。

使四位上ラウ。ワキアケノ袍。巡方帶。ラデンノ劔。アサキクツ。

舞人。アヲズリノ袍。ラデムノタチ。メナウノオビ。五位ハシザヤイル。

公卿。蒔繪劔。無文帶。

殿上人。近衛司モ劔ヲハカズ。

此日ハメナウノ帶ハサ、ズ。  
重環

カサ子カハラケトテ。花足ノ殿上人ヲエリ

テセサス。裝束ツ子ノゴトシ。

代始ニハ。使ハ宰相。カサ子カハラケニハ公

卿ノヨルナリ。

今日ハ公卿サクラノシタガサ子ヲキルベカ

ラズ。主上ノタテマツルニハ懼カルナリ。臨

時祭日ハ馬腦ノオビヲサ、ズ。舞人サスユ

ヘナリ。昔ハメナウノオビハワヅカニアリ

ケレバ。モタヌ人モマヒ人ノ料レウニカリモ

トメシケレバ。タバノ殿上人ハサスニオヨ  
バズ。ソレガ今ニ流例ニナリテ。近代ハツク  
リメナウトテオホカレドモ。ナヲサ、ヌナ  
リ。近衛司モ今日ハ劔ハカズシテ。重盃ノヤ  
クモスルナリ。

六位。

調樂夜。裝束ツ子ノゴトシ。

試樂日。青色。野劔。紫革裝束。尻鞘。平緒。絲鞋。挿

頭竹葉。但中務丞兵庫助等。雖帶劔無尻

鞘。是細劔也。ハンビ牛轡ニオキテハ可着也。ソ

モソモ件日文官ノ藏人。又非藏人。衛府。ア

ナガチニビ美麗レイノ裝束ヲ不可着。タバツ

子ニキヨゲナル裝束ヲ可着也。

祭日。早日ニ行事藏人アヲイロウキモン

ノサシヌキニウチギヌキテ。舞人裝束ヲ

ワカチタマウ。檢非違使ハアヲバカマナ

リ。打衣ハキズ。衣ヲ出サズ。但行事藏人ア

ヲイロヲキザル先例アリ。シカレドモ近代カナラズキル也。タノ藏人装束。衣冠束帶トモニキル。タバシ他ノ藏人ハ舞人陪從装束ヲクバルアイダ。アヲイロヲキル

ベカラズ。件装束舞人陪從ニワカチタマ

ヒテノチ。ゲ<sup>下殿</sup>デンシテ舞人ノ装束ヲシテ

イソギマイルベシ。ソノ、<sup>其後</sup>チ御襖ヲヲコ

ナフ。但件装束青摺袴ヲ以<sup>ニ</sup>公物<sup>モ</sup>チ井<sup>私</sup>ル

ベシ。ア<sup>相</sup>コメヒトヘアハセノハカマヲワ

タクシニアヒマウクベシ。件日ノタチノ

装束アヲカバナリ。カ予テアヒマウクベ

シ。ソモ<sup>抑</sup>件日供奉ノレウニ。隨身二人

グスベキナリ。然ルヲ未到<sup>督</sup>本府ノ尉ハ心

ニマカセズ。サレバ府ノカミ<sup>督</sup>ニフレ申テ

モヨホスコトナリ。カドノオサハ<sup>長</sup>コ、ロ

ニマカセテメシツカフコトナリ。御倉ノ

小舍人又オナジク<sup>同</sup>メシ<sup>召</sup>グスベシ。内記藏

人若陪從ニイラバ。着青摺陣ヘイヅベシ。マタモム官藏人陪從ニイラバ。ウキモム<sup>浮敷</sup>ノハカマノウヘニ着陪從ノ装束也

二孟旬。<sup>四月。十月。</sup>

ワカキ上達部ハコノ日白重ヲ着。无文ノカ

ブリ。白キコメ<sup>數</sup>ノシタガサ<sup>重</sup>子。シロキムモン

ノミガキバカマ。白帷。白單。マキエノタチ。

无モンノオビ。コノ日モ一ノ人ノトノバラ

ハ螺鈿ノ劔ヲハキ給。代ノ始<sup>平座</sup>ニハ旬ヲヲコ

ナハル。サラヌトキハヒラザトテ。出御モナ

クテ。仗座ニテ見參ヲソウセラル。殿上人ハ

コノ日出仕スレバ。老タルモ若モカナラズ

白重ヲ着。御襖ノ日マデハアラタメザルニ

ヤ。装束躰ハ公卿ニオナジ。少納言ナニガシ

トカヤイヒケルヒト。白重ニ赤帷ヲキタリ

ケリ。サルハ職者家ニアリケルトカヤ。旬ノ

日ニアラ子ドモ。六七月ヨリアツキニハ。宿

徳公卿白重着ツ子ノコトナリ。又桔梗下重トテ。公卿モ殿上人ノヤウニフタア井ナル無文ノ下重ヲ着事アルベシ。ソレモ平絹ノ

ミガキ表袴ヲキルナリ。キキヤウノシタガサ子着トキハ。アラタン<sup>青綴</sup>ノ平ヲヲサスベシ

トゾ。アフチダンノ平緒トテ。ムラサキアヲキマジリテダムナル平緒ニハ。劔ノ装束ム

ラサキガハモキラハズ用也。サレバ殿上人ハ。メナウノオビ。樋螺鈿ノ劔。揀綵平緒モ

チツレバ。事カケヌトゾマウス。ヒラ<sup>具</sup>デンノタチトハ。ヒラスキテソノナカニカヒラス

リタルナリ。セキエイルベキトコロニモ用トゾ。又白重。夏。ワカキ人ハ<sup>近</sup>縑<sup>代</sup>ノ絹ヲゾモチ

井ル。ソノキヌ大和國ノ貢也。キン<sup>近</sup>ダイハタエテミエズ。シカレバタバアツキカラキヌ

ヲモチ井ル。旬アルトキハ老人公卿平緒ヲ苗色ニソメテ着事アリ。表袴モ平絹ヲモチ井

ル。白重ノゴトシ。苗色トハ黄氣アル青物也。大將ノ番長青狩袴トイフモ。故實ニテナヘイロニソムルナリ。

### 六衣更衣。

文官無官オナジク白重ノ装束ヲ着ス。袍ハ位袍ナリ。宿装束ニオキテハ有文ヲモチ井ルベシ。冠オナジ。

衛府儀式官。無文ノ装束ヲキズ。タバツ子ノゴトシ。有文ヲモチ井ル。タバシ文官無官ノ人更衣ノアイダ。ミナ縑ノ白重ヲ着ス。冬ニイリタルトキノ更衣ハ。平絹ノ装束ヲ着ス。平絹装束ヲ着ストキ。無文ノカブリヲモチ井ルベシ。

更衣ノ後宿装束ヲキルハ。マヅ貫首直衣ヲキラ<sup>冬</sup>ル。又一薦ノ藏人キテノチ。フユナツ<sup>夏</sup>ノ装束ヲキルベシ。タバシ冬ノ更衣ノアイダナツノ袍ヲキル。冬ノサシヌキヲキル。ツ子



ノコトナリ。ナツノ更衣ノトキ夏ノ袍ヲキテ。冬ノサシヌキヲキルベカラズ。マタ四月一二日ノアイダニ文官ヨリ衛府儀式官ニウツル人。宿衣ノトキ。冬ノ袍ヲキルベキカ。タダ夏ノ袍ヲキルベキカ。分明ナラザルコト也。タバシ夏衣ハソノ儀可有便力。可尋シ。抑夏ノ更衣ノトキハ以灌佛日有文裝束ヲキルベシ。冬ノ更衣後以射場始ノ日キルベシ。タバシ灌佛射場始ナキトシハ。相慮其程テ只可着有文裝束一歟。タバシカルベキコトイデキタラムトキ早キカフベシ。

灌佛日。神事ニアタル年  
チコナハレズ。

裝束如常。六位同。位袍。  
ツ子ノ裝束。

賀茂祭。

裝束ツ子ノゴトシ

六位。

垣下藏人二人青色ヲキル。下重ニオキテ

ハフタア并カ。タバシ蘇芳マタツ子ノコトナリ。三四臈藏人カナラズ件ノ役ヲツトム。前駟藏人裝束。位袍。黒半臂。蘇芳下重。浮文袴。但白尻鞆。平緒。淺沓。相具ベキモノ。御藏小舍人。府隨身二人。ケビ并シハカドノオサ二人。隨身二人。テウドカケ一人ソヘグスベシ。

還日。垣下藏人行事ナラビニ臈等ナリ。裝束位袍。黒半臂。蘇芳下重。浮文ノハカマ。衛府勤仕ノトキハ。タチヲハク。ケビ并シハ平劔。革緒。裾長ハ細劔。丸緒。壺胡籙弓。於胡籙者。廷尉裾長タバオナジコトナリ。垣下ニアラザル藏人見物ノトキ。衣冠ニテ見物スベシ。侍臣ノ車ナリ。衛府者ヲナジクヤナグヒヲ可隨身也。祭日。位袍他裝束ツ子ノゴトシ。タバシ行事藏人布袴ノ小舍人二人ヲグシテ大路ヲ



所渡也。車簾前アグベカラズトイヘリ。非  
藏人乗渡之時。ウシロノスダレヲアグベ  
キカ。

警固間事。祭前未日アルヒハ申日ヲコナハル。マ  
ツリトッマルトシモ。コレハ行ハル。

衛府藏人伴日ヨルヒル帶弓箭也。參御

前御膳ヲ供スルトキモ。ツ子ニコレヲタ

イス。靈胡籙ツボヤナグヒホソタチナリ。テイ井

ニヲキテハ平劔ナリ。タバシヤナグヒニヲ

キテハ廷尉尻長同前也。奏文トキハユミ

バカリヲヲク。靈文杖フンサシヲトテ御所ニ參

ナリ。タバシ陪膳ノ四位ハユミヤタチヲ

トキヲキテコレヲグス。タバシエイヲバ

トカズ。オイカケヲテセズ。アルセツニタ

チハタイシナガラ候也。近ハ右近中將基

忠朝臣陪膳ヲツトムルトキ。タチヲハキテ

コレヲ供ス。マタ左近中將公實朝臣陪膳勤

仕ノトキ。タチヲタイセズ。イカバ。コレビ

ンニシタガフコトカ。タバシヤクソウノ五  
位六位ニヲキテハ。ユミバカリヲヲキ。他

ノモノノグラヲミナタイスルトコロナリ。

マタシムカウニヲヨビテ殿上ニフストキ。

カタハラニトキヲクナリ。タバシ密々ニ直

廬ニヲクレイナリ。マタ陣外ノトキハサラ

ニ不可着。タバトモノモノニモタスルナ

リ。先ニ殿下ニマイリテ。キウセンヲタイ

スル人オホクアルガ。ソノユヘナシ。

御賀茂詣事。供奉藏人上臈二三人バカリ

カ。衛府文官ライハズ。ミナ青色ヲキル。式

部丞アライロヲキルトキ。冠ノヒタイア

テハナチテシリヲ曳ナリ。衛府藏人タチ

ヲハク。シリナガハ細劔丸緒ホソダチマロヲ。ケビ

井シハ平劔カハラ。伴御物詣式日ナラバ

ツボヤナグヒ。ユミヲモタスベシ。コレケ

イゴノアイダニヨリテナリ。タバシ式日

近衛手番日。

侍中將監アヲイロヲキテ本府へマイルベシ。

定賑給使事。五月中行之。

第一ノ大臣ノ申行事也。サハリアレバ次人

ヲコナフ。装束ツ子ノゴトシ。

忌火御飯。六月十一日。月十二日。二月。旦ニアリ。

陪膳。ムカシハ布袴ニテアリケリ。イマハソ

クタイツ子ノゴトシ。

御體御卜。六月十二日。月十日。

月次祭。六月十二日。月十一日。

神今食。六月十二日。月十一日。祈年祭ノゴトシ。

中院行幸ムカシハアリケリ。公卿マキエノ

タチ。近衛司ノタチオナジ。ツボヲオフベシ。

アサキクツ。大内ヨリナルトキノコトナリ。

諸司ノ小忌ヲキル。大將檢非違使別當ハヒ

ラヤナグヒ。ウラニアヒタルヒト供奉スルナ

リ。近衛司ハアヒアハズヲイハズグスベシ。

ナラザルトキナラバ。ユミヤヲモタスベカ

ラズ。コレケイゴニアラザルユヘ也。表袴

下重等ソノ人ノコ、ロニアリ。廷尉ニヲキ

テハコノカギリニアラズ。白キハカマヲキ

ルベキナリ。他ノ藏人モ雖常事。黒半臂。蘇

芳下重。白表袴ヨキ也。タバシワカキ藏人

ハソメバカマ。フタヘオリモノナドキルツ

子ノコトナリ。廷尉侍中供奉ノトキ。カド

ノヲサテウドカケグスベキコトナリ。

松尾祭。

梅宮祭。

已上。上酉日ナリ。

吉田祭。

中子。四月。十一月中申。

寂勝講。

公卿。マキエノタチ。出居將。オナジ。

侍中火舍取ノ藏人。アヲイロヲキルベシ。

ミナ小忌ナリ。公卿ハ上卿一人。宰相一人。御  
ウラニアヒタル人ノマイルナリ。タバノヒ  
トハオホミノアクニ候。行幸ナキトキハ。神  
祇官ニテ上卿宰相辨バカリニテヲコナハ  
ル。十二日ゲサイノ御カユアリ。小忌ノヒト  
ヒカゲヲカクベシ。

侍中。行幸供奉御湯殿人。朝衣ノ下重ヲヌ  
ギテ。今衣ヲキルナリ。シタウヅヲヌガズ。ア  
ルヒハ朝衣ノシタガサチノウヘニ今衣ヲキ  
ル。

節折。六月。十二  
月晦日。

乞巧奠。七月七  
日。

盂蘭盆。七月十  
四日。

秋季仁王會。アキノキノニ  
ムラウエ。

ハルノゴトシ。代ノハジメニハ大仁王會ト  
テ殿々ニテアリ。

相撲。

大將奏ヲトル。ワカキ人ソメ装束ツ子ノコ  
トナリ。公卿近衛司ラデンノタチ。公卿ノオ  
ビ有紋ナリ。奏ヲトル人コトニビレイノ装  
束ヲキル。

侍中。ハジメノ日。行事并他ノ藏人二人バ  
カリアヲイロヲキル。アルヒハ四人バカリ  
キル。近衛將監藏人アヲイロヲキ弓箭ヲタ  
イス。ツボヤナ。劔。ホッダ。ツギノ日。アイカハリ  
テノコル藏人ラ。アヲイロヲキル。タバシ行  
事二ケ日ナガラキルベシ。装束二具アリト  
モ。カイツクロフトキ。位袍ニキカユルツ子  
ノコトナリ。

釋奠。同三二  
月。

季御讀經。同三三  
月。

定考。大畧同ニ  
列見。

駒引。

上卿近衛司ミナマキエノタチ。

官奏。

平座。九月九日。

例幣。

八省へ行幸ナリケリ。近代タエタリ。

六位。

文官。位袍。淺沓。把笏。

儀式官。同文官。

衛府。位袍。ツボヤナグヒ。ホンダチ。

マロチ。淺沓。件儀裾長衛府事也。

檢非違使。ヒラヤナグヒ。ノダチ。裝束ムラサキ。

シリザヤ。ヌノオビ。シカイ。行幸ノアイ

ダ本陣ニタツ。

御國忌時。

行事藏人アヲクチバノシタガサ子ヲキル。

冬ハヤナギヲキル。タバシ近代アナガチニ

コノコトナシ。

更衣。十月。同四月。

射場始。

公卿近衛司。マキエノタチ。位袍。他ノ裝束ツ子ノゴトシ。公

卿侍臣藏人ヲ。ミナ箭一手ヲコシニサス。

侍中。

文官。袍ツ子ノゴトシ。白重ヲ着。

衛府。ヒラヤナグヒ。ユミ。タチ。裝束ムラサキガハ。

シリザヤ。ヒラヲ。ヌノオビ。シ

カイ。位袍。タノ裝束ツ子ノゴトシ。

初雪日。

侍中。アライロオリモノノサシヌキヲキテ。

諸陣ヘムカヒテ見參ヲトルベシ。就中ニ帶

刀ノ陣ニムカフ藏人。ヨウジンスベシ。アラ

イロニアラズトモ。タバビレイノ裝束ヲソ

クタイニテモキルベシ。

朔旦旬。十一月一日。四月旬ニオナジ。

五節。

丑日。



帳臺ノ出御ノ御共ノ人々。殿下以下五六人ばかり。直衣ナリ。アルヒハ衣ヲイダシ。アルヒハイダサヌモアリ。殿上人兩貫首直衣。以下人々アルヒハ直衣。アルヒハソクタイナリ。六位ハコヨヒハ。イツカフニソクタイニテアルベシ。

寅日。

貫首以下一向直衣衣冠ナリ。六位オナジク衣冠ナリ。タバシアヅカリノ藏人ハソクタイヲスベシ。アヲイロヲキルベシ。式部丞アヲイロニ火イロノシタガサ子。衣冠ナラバウキモンノサシヌキヲキルベシ。他ノ藏人ビレイノ装束ヲキルトイフトモ。アヲイロオリモノノサシヌキヲキルベカラズ。貫首以下ミナキヌヲイダス。アルヒハウチギヌ。アルヒハオリギヌナリ。ウチギヌニモ中年人ハワタヲイル。夜ニ

イリテノチ。ナベラカナルソクタイヲシテ。御前ノコ、ロミニマイル。

卯日。

今日モ殿上ノエンスイナリ。貫首以下直衣。諸大夫殿上人ハ衣冠ナリ。六位又衣冠ナリ。オホヨソハ殿上人モ六位モ。ヲサナキニハコキシヤウゾクトテ。エビゾメ或モエギウチサシヌキニ。ウチギヌモサシヌキモ<sup>貫</sup>デ<sup>泥</sup>イニテダミカヘシテ。ウラコキスワウノキヌ。コキヒトヘ。コキシタノハカマナドキルナリ。アヲノキヌハワカキ人ハキヌトゾマウセドモ。近代ハワカキ近衛司ナドモ<sup>着</sup>キタリ。藏人アヅカリ<sup>下</sup>布袴。アヲイロ火イロノシタガサ子エビゾメ<sup>重</sup>ノ<sup>浮</sup>ウキ<sup>漂</sup>オリ<sup>物</sup>モノノサシヌキ。アルヒハアヲ<sup>色</sup>イロニ<sup>固</sup>カタ<sup>放</sup>モンノオリモノノサシヌキ。紅ノウチギヌヲイダス。コレモン<sup>交</sup>官ナリ。

衛府

エウニヲキテハ。ウチギヌヲイダサズ。コ  
 メテキルベシ。檢非違使ケビ井シハ殿上人ノエン  
 スイ。ワラハ御覽ノアヒダ。サウゾクソク  
 タイヲスベシ。タバシアヲイロヲモチ井  
 ルベシ。承暦二年平時範布袴ヲキル。アヲ  
 イロニモエギノハンピナリ。コレ平行親例  
 云々。他ノ藏人ヲ寅日ノ裝束ノゴトシ。タシ六  
位ダシギヌ件日中院ノ行幸アルトシハ。ワ  
チコムベシラハ御覽ノノチ秉燭ニヲヨブアヒダ。殿上  
 人藏人ソクタイニテ行幸ニクブス。小忌  
 ヲキル。日蔭ヲカク。タバシコケナリ。ソモ  
 ソモ御ウラニアハザル侍臣。コトニ行幸  
 ニ供奉セズ。コレヲミヲキザルユヘナリ。  
 タバシ殿上ノ職事十人ハ。御ウラニアハ  
 ズトモカナラズ小忌ヲキルベシ。

## 辰日節會。

人々ミナソクタイナリ。タバシ預藏人朝

ハ宿衣ヲキルベシ。アヲイロナリ。モクラ  
 ンチノオリモノノサシヌキニ。ダシギヌ  
 欸冬ヲモチ井ル。タバシケビ井シハアヲ  
 バカマニ一コンゾメ。ウツベ衛府ハキヌヲ  
 イダサズ。尅限ニ小忌ヲキ。ヒカゲヲカク。  
 イトノイロ人ノ心ニアルベシ。シロキヲ  
 ヨキトス。ウキモンノハカマ。イロコ、ロ  
 ニアリ。文官儀式官オナジ。衛府ニヲキテ  
 ハ弓箭ヲタイス。ヒラヤナグヒナリ。アヲ  
 カハタチ。アチシリザヤ。ヒラヲ。ヌノオ  
 ビ。シカイナリ。ソモ〱中院ノ行幸アル  
 トシ。今日小忌ヲキル。行幸ナキトシハ小  
 忌ヲキズ。タバシ小忌ヲキルトキハ。式部  
 丞福シリヲヒキヒタイアテヲハナツ。廷尉  
 オナジクシリヲヒキ。儀式官文官トイフ  
 トモカナラズハンピヲキル。コレ小忌ヲ  
 キアケナルニヨリテナリ。又ヲミヲキル

日。ビレイヲコノム人。ソノハカマフタヘ  
オリモノノハカマナリ。タバシ廷尉ニヲ  
キテハコノカギリニアラズ。シロキウキ  
モンノハカマナリ。ヲミノウヘニキウセ  
ンヲタイス。節會ノアイダ童下仕ニツク  
ナリ。マタ式部丞藏人小忌ヲ着ナガラ點  
標。曩時無此事。而近代之例定事也。射場殿ヨリイデテ列ニ  
クハ、ルナリ。

新嘗祭。行幸アルトシモアリ。

新嘗會。

上卿一人。宰相一人。弁少納言各一人。小忌ヲ  
キタリ。昨日新嘗會ヲコナヒタル人ナリ。節  
會。公卿近衛司ノ裝束サキ、ノ節會オナ  
ジコトナリ。

賀茂臨時祭。

公卿殿上人ノ裝束石清水ノゴトシ。タバシ  
カヘリタチノ御カグラヲコナハルベシ。

神今食。六月ナミルベシ。  
御佛名。

公卿出居將。裝束ツ子ノゴトシ。

行事藏人。カナラズアヲイロヲキル。火舎取  
ノヒト御導師ヲオホスル人ナド。カナラズ  
アヲイロキルベシ。火舎取ノヤクノヒト。オ  
ホクハ行事ノ所役ナリ。マタダウドヲジノ  
藏人コレヲキル。タバシアヲイロヲキズシ  
テ件ノヤクヲツトムルヒト。マ、ソノカズ  
アリ。シカルベカラザルコトカ。

荷前使事。十二月十二日。

裝束ツ子ノゴトシ。

御佛名。

公卿。

マキエノ劔。出居劔笏ヲモチ并ズ。他ノ出居  
ノ儀ニハカハリタリ。今夜フルクハ大將カ  
ナラズ宿マウシセサス。又半夜ノ御導師ノ

ホドニ左近府殿上ニ栢梨ヲスエテ公卿以下  
ニス、ム。次將互ニ勸盃。栢梨トハ府ノ庄ノ  
名ナリ。攝津國ニアルニヤ。

内侍所御神樂。

裝束ツ子ノゴトシ。近衛司ナレドモ。コヨヒ

ハタチハクマジ。

追儼。

十二月晦日。

上卿宰相衛府タルヒトハ。ツボヤナグヒヲ  
オフ。近衛ヅカサモモトヲシニツボヤナグ  
ヒ。

陰陽寮桃ノ弓葦ノヤヲマイラス。上卿以下

コレヲトルトキ。弓ヲ撒シコレヲモツベシ。

衛府藏人弓箭ヲタイス。タバシツボヤナグ

ヒナリ。細タチ。平緒。廷尉トイフトモツボヤ

ナグヒヲオフ。タバシタチハヒラダチナリ。

革緒。

十一日神今食行幸事。

戊尅行幸中院。主上着御帛御裝束。御腰輿。  
無警蹕鈴奏。公卿以下前行。前日行事藏人注  
殿上人夾名給神祇官。仍隨小忌之合否所  
供奉也。供忌火御飯之後。大忌之人不昇殿。  
凡今日扈從人除執柄殿下之外。皆着小忌  
衣。行事藏人以小舍人令賦之。參仕之後於所邊袴上着之。衛府上卿宰相懸  
綬。用壺胡籙蒔繪劍。近衛司同之。近衛兵衛  
外雖不供奉。爲雲客之衛府用壺胡籙。五  
位以上皆着縫腋候御後。至于六位者平裝  
束布帶着糸鞋。用平緒入尻鞆。但檢非違使  
用平胡籙。於廷尉府生以下。褐衣垂袴。用壺  
胡籙。一位以下尋常束帶。用淺沓。如例。殿  
上四位之中一人藏人一人。奉供御湯殿。是  
山蔭西宮勸修寺等之種族所勤仕也。其儀入  
御神殿之後。御湯殿役人二人參北掖戶下。  
依天氣。於同壁下各着今支。伴役職事。近衛  
司之間多有其便。爲衛府之者。先解弓箭。脫



表衣下襲戰等。昇殿。或不脱六位脱袍着。今

支。或脱立戸下。即以主殿官人令取御湯。藏

人計之。次上臈役人先試御湯寒温。以手搔次

縫殿獻浸布。次内藏寮獻天羽衣。次獻御汁

坏搔上宮等。次縫殿寮供祭服御裝束。改帛御

裝束着御也。次藏司供御幘。御湯殿役藏人於

戶外。次第令催獻。同役上臈人於長押上傳

進之。次主水司供御手水御湯。役人帶四品

之時。即奉仕陪膳。爲五位之時。藏人頭奉仕

之。去康和五年十一月新嘗會行幸之時。左少

將實隆朝臣爲御湯殿役人。而俄以他行。藏人

頭又以不候。仍左中將俊忠朝臣更奉仕陪膳。

是臨時儀也。次召御笏。次小忌。上卿催行次

第事。丑尅供曉膳。□剋還宮。大忌公卿於陰

明門幄前名謁。右近次將問之。

助無智秘抄一名年中行事裝束抄  
付臨時

齋王卜定。

勅使祿アリ。藏人頭勤之。中將ナドハ劔ヲハ

キ笏ヲモツベシ。

齋院被進扇使。御禮日祭日  
等兩度也。

殿上藏人アヲ色ヲキテ參勤之。本院祿ヲタ

マフ。

御願寺供養。

御齋會ニ准ゼラル、ヲリ。堂中トイヘドモ

劔ヲハキ笏ヲ持ベシ。

御讓位。

節會行ヒテウルハシク御讓リアルニハ。公

卿螺鈿劔。有文帶。魚袋ヲツケズ。衛府ノ人ハ

壺ヤナグヒヲオフ。近衛大將檢非違使別當

ハ平胡籙。近衛司ハモトヲシ。ツボヤナグヒ。

蒔繪太刀。靴。カタセチエナレバ立陣也。又

位ニテ事オハシマス君ノ御時。節會オコナハレズシテ。神璽寶劔バカリヲ新帝ヘワタサル、ニモ。近衛司裝束オナジコト也。公卿ハ蒔繪ノ劔ナルベシ。上官巡方帶也。

開關事。

讓位日セキヲカタメラレタルヲヒラク也。

大事ノ公事也。時ノ有識ノ上卿參テオコナフ。コノツイデ解陣モアリ。六府ノ將佐モ。直衣ニ柏夾。蒔繪劔。壺胡籙ニテ參リテ後。陣トクベキ由ノ仰ヲウケ玉ハリテ後。弓箭ヲトキテ纓ヲオロス也。オホカタ警固ノ間ハ。直衣ニテモ弓箭ヲ帶シ。或ハモタセテ近衛司ハ有也。公卿ハタバ内裏ノ公事バカリコレヲ帶ス。他所ニテハタイセズ。天慶ノ將門ノ亂ノアヒダ。節會ノ日公卿ハタバツ子ノ定ニテ。諸陣ハ警固シタリト見エタリ。御齋會ノ日ハ御前ニ候公卿ミナ。衛府ハ弓箭ヲ帶

スト云リ。イカナルコトニカオボツカナシ。平治亂ノトキ桂大納言于時中納言ツ子ノ定ニテアリキ。三條内大臣殿其日節會ノ内弁ニテ奉レバ。ヤナグヒ隨身ニモタセラレタリ。大炊御門右大臣。于時中納言松殿。于時中納言此人ハ平胡籙。右大將壺。中納言中將殿螺鈿劔ニテオハシアヒタリキ。オボツカナシ。スベテ胡籙オフ日ハ魚袋ハツケヌナリ。モトヨリツケタリトモトクベシ。

御即位。

位ヲユヅリ奉リテ後。始吉日ヲエラビテ天ニツゲ申サル、心ナリ。香ヲ庭ニタクハ其心ナリ。一ノ大臣禮服キテ内弁ノコトハオコナハル。左右ノ御子代トテ。宰相モシハ三位禮服キテ八人堂上ニ候。外辨公卿ハ禮服キテミナアリ。中納言ノ中ニサルベキ一人叙位ノ宣命使ヲスルナリ。禮服ノ外辨。或ハ

人或六人モアリ。近衛司ハサイ着ノ袍モメ  
シテミジカシ。タバシ冬ハ下襲ヲキズ。ウヘ  
ノキスバカリナリ。カツラヨロヒヲキル。ヨ  
ロヒトイフハ舞ノウチカケノヤウニシタ  
リ。フルクハキヌナドニテカタノ如クシケ  
リ。近代ウルハシクカ子ヲイタニマゼテ。メ  
デタクイトニテオドシナドシタリ。昔ノコ  
トハナニ事モ輕色ナルナリ。平胡籙ヲオフ。  
老懸ヲカク。螺鈿ノ野劔常ノゴトシ。ヨロヒ  
キルヲリハ平緒ハムスブ様有。ソレヲシラ  
ヌ人ハキリヒラヲニテ。タバ風情モナクユ  
ヒタルナリ。將ノ隨身ハタレバカマ常ノゴ  
トシ。里内ヨリ八省ニ行幸アルトキ常ノゴ  
トシ。禮服ヲキヌ上達部。ウチマカセテハ參  
ルマジキ事ナレドモ。近代ハミナ參ズルナ  
リ。ソレハ無文帶。蒔繪ノ劔ナリ。或螺鈿ヲモ  
チ井ル人モアリ。五位ノ次將モ今日ハシザ

ヤヲサ、ズ。寛弘ノ御卽位ニハ行成卿ゾ中  
納言ニテ宣命使シタリケル。興福寺ノ寶藏  
ニアル禮服ヲ給ハリテキタリケリ。ソノ玉  
ノ冠ノイレ物ノウチニ其日ノ我作法進退ヲ  
メデタキテニテ委ク書テヲキタル也。大炊  
御門ノ右大臣ノ久壽ノタビ中納言ニテ宣  
命使シテ。ソノ冠ヲ申タマハリテセラレタ  
リシニ。其行成卿ノシルサレタルモノハミ  
侍シ。禮服ハ累代ノ物ヲ申玉ハリテキルコ  
トモアリ。又ワタクシニアタラシクト、ノ  
ヘテキルコトモアリ。ボロトヤレソ  
ジテワロケレドモ。クルシミナキモノハ禮  
服ノ袍ナリ。サテフルキ袍ヲバ禮服ノヤウ  
ナリトイフニヤ。昔ノ人ノ裝束ナエト  
ゾアリケル。サレバヒトツ車ニ大臣タチナ  
ドノ二三人モノリアヒテアリキケリ。末代  
ノ人ノ裝束ハ一人ダニモ車ニノリグルシ。



大カタハ装束ナユベキオリ。コハキ物ヲキタルモワロキナリ。節會ニ人ノイタクモ装ハズカザリケルニヤ。齊信卿ノ消息ニ先代ノ時ノ節會袍コレヲカシケンズトカ、レタリケルハ。節會ノ袍トテフルクナエタレドモ。人ニカスガアリケルニゾ。オボツカナシ。人ノ病スルトブラヒニムカヒナドスルニ装束ナドノコハキハキハメテビンナキコト、ゾ。又後朱雀院ノ御時ニ其年ノ旬ニ公卿ノタチナミタリケルヲ御覽ジテ。次日資房卿ノ藏人ノ頭ナリケルヲメシテ。昨日公卿ノ装束ヲ御覽ゼシカバ。以外ニ袖コソ大ニナリタレバ。カクテハ世ノツイヘナリ。イカバスヘキ。右府後小野宮殿ノモトヘマカリテ。イヒアハスベシトオホセラレテナゲカセタマヒケレバ。右大臣殿ニ申サレケレバ。御返事ニ。ミナノ公卿ニソノヨシオホセラレンモアシク

候ナン。ワレソノ由ヲウケ玉ハリテカシコマリ申サバ。サスガ老大臣ノ御氣色カバフリタリトキコエバ。人モナヲリハンベリナントハカラヒ申サレケレバ。ソノ定ニ披露シテ。門サシテカシコマルヨシセラレケレバ。人ミナキ、オツレテ。モノノ寸法ヲチヒサクナシテケリ。近代ノ人ノ袍ハホト／＼綾二疋バカリナリ。

### 大嘗會御禊日。

位ニツカセタマヒテ。大嘗會オコナハルベキ御ハラヘノ行幸ナリ。一ノ大臣節下ヲツトメラル、節旗ヲサキニ立タリ。大納言ノ大將ナドモ其例有。隨身ハハンエキタリ。左ハツ、ジノ下重。コキウチノヒトヘ。右ハ柳ノ下重。コレモアヲウチノヒトヘ也。左ハワシノ羽ノヒラヤナグヒ。六位ノ府ノヤナグヒノ定。右ハシキリ羽ノヤナグヒナリ。劔ニハ



平尻鞆ヲイレタリ。ソメワケノカリ袴。タバ  
シスソゴ。大臣大將ノ府生ハ馬ニノリテ本  
陣ニ候ベケレドモ。故實ニ大將ノ邊ニ近ク  
ウチソヒタリ。番長ハ馬ノクチハリタリ。雜  
色ヲバコノ行幸ニハ具セズ。オノヅカラア  
レドモ六府ノホカラアユブベシ。近衛ノ將  
ハ例ノ行幸ノ定。隨身ニモ蠻繪ハキセズ。ヤ  
マトグラニノルニハ杏葉ツクベシ。左右衛  
門左右兵衛府ノ隨身ニハ蠻繪ヲキセタリ。  
幼主ノ御時ハ女御代トテ。大臣モシクハサ  
ルベキ大納言ノムスメヲイダシタテラル。  
フルクハ御元服ノ日。ヤガテソノ人ヲ女御  
トサダメラレケル。末代ニハカナラズシモ  
シカラズ。又幼主ノ御時ニハ母后御ウシロ  
ニノラセ玉フ故ニ出車アリ。攝政殿モ幼主  
ノ御時ハ馬ニテ供奉アルコトモアリ。オリ  
居ノ御門ハ二條大宮ニ御棧敷ツクリテ御覽

ズベシ。御棧敷ノスノコニハ。兼官ナキ大臣  
モシハ前官ノ人ノシタシクオボシメスベキ  
人ナドゾ。一人モシハ二人候テ。御コシノト  
ヲラセオハシマストキハ。地ニオリテ井ラ  
ル。アマタハ井ヌコト、ゾ。

供奉六位。

藏人八人。此中ニ五位二人有ベシ。

五位。

闕腋袍。

シリミジカ。アヤノ表袴。黒半臂。巡方帶。

魚袋チツ

大和鞍。

杏葉チツク。タチハクベキ人ハ螺

鈿ヲハクベシ。

六位。

卷纓。

老懸チヒトツミシリミジカ

蘇芳褐袍。半臂。下重。如常。浮文

袴。

丸鞆帶。弓箭ヲタイセズ。熊皮行騰。

劔。

ぬりぐつ。縁螺鈿鞍。韋鹿切付。楚鞆。

又說。

ホソエムビノ冠。老懸。ぬりぐつ。布帶。他

ノ物ノ具同前。コレマタ難ナシ。

或説。タチヲハキ弓箭ヲ帶ス。

僮僕。童舎人バカリナリ。押紙。ザフシキチメシグセズ。アル人マタコレ

ヲグ  
ス。

大嘗會國郡卜定。

大臣以下陣ニツキテ定申サル、也。悠紀ハ  
近江。主基ハ丹波。モシハ備中也。官寮ヲメ  
シテイヅレノ郡ト云コトヲウラナヒサダメ  
ラル、。サテ博士ウケタマハリ。本文ヲイダ  
シテ。悠紀主基ノ御調度ノ御屏風ニハ。時ノ  
テキエラビテ其本文ヲカ、セラル。マタ時  
ノウタヨミニ仰テ。本文ノ心ヲイハヒニヨ  
セテ。哥ニハヨマセテ。同御屏風ニカ、セラ  
ル、也。

卯日廻立殿行幸。

大内ノ内裏ナル時ハ。鳳輦ニテ廻立殿へ行  
幸有。タバシ龍尾道ノウヘニテ腰輿ニタテ

マツリウツル。幼主ノ御時ハ母后タテマツ  
ルベケレバ。鳳輦ニテヤガテ廻立殿ヘツカ  
セタマフ也。主上ハ帛ノ御装束ヲメス。納言  
參議ウラニアヒタルハ。小忌ヲキテツカフ  
マツル。其外ハ大忌ノ阿克ニツクベシ。近衛  
司ハツ子ノカチノ行幸ノ定ニテ。蒔繪螺鈿  
劔也。壺ニテアリ。廻立殿ニテ御湯アルニ。藏  
人頭御湯殿ハスルナリ。藏人ハ山蔭中納言  
ノ子孫ヲモチヒラル、。其時ナキニハモト  
メテモ藏人ニナサル。大嘗宮ニウツラセ玉  
フニハ。前行ノ大臣トテ御サキニ立テ。大臣  
一人ツカフマツル。攝政殿ハ御後ニオハシ  
マス。主上ノアユマセ玉フ筵道ヲバコト人  
ハフマズ。コレ大神宮ヘ物マイラセハジメ  
サセ玉フナリ。コトシノ物ヲバコノノチキ  
コシメス。

辰日節會。

悠紀ノ帳ニツカセ給ナリ。公卿ノ裝束例ノ節會ノ如シ。カナラズ今日ノ内弁ヲオコナヒ玉フ。夜部ノヲミノカミ宰相ハワタクシノ小忌ヲキテ參ル。近衛司ハウラニ合アハズヲイハズ。ミナヲ小忌ミヲキテ參ル。小忌ノシタニハ常ノ束帶ノアコメノカサナリタルヲキル。

### 巳日節會。

主基帳ニオハシマス。ソノコトガラ昨日ノゴトシ。内弁ハ大臣サハリアレバ大納言モセラル。今夜ハ清暑堂ノ御神樂アルベシ。コノ堂ハ豐樂ノ堂ノ名ナリ。豐樂院ノイマダヤケヌサキニハ。ソレニテノミ大嘗會オコナハレタリケリ。サレバ小安殿ニテハ御神樂アレドモ。世ノ人イヒナラハシタルコトニテ。清暑堂ノ御神樂トイフナリ。

### 午日節會。

コレハソノ儀大畧同事也。タバシケサ悠紀主基ノ帳ヲゾコボチテ。タバ例ノ豐明ノ節會ノ定ナリ。叙位ニカ、井シタル近衛司ハ。小忌ニ平胡籙オヒテ老懸カケテ劔ハキテ列ニ立タルコソイミジケレ。節會ハテ、大内ニカヘラセ玉フニハ。ヤガテホコヲサゲテゾ行幸ニハ供奉スル。節會ハトヨノアカリニカハリタルコトハ。悠紀主基ノ久米マヒヲゾ御覽ズ。

### 臨時事。

### 殿上賭射。

射手ニオキテハ。公卿。四位。五位。六位。ミナアヲ色ヲキル。儀式官。文官ト云トモミナワキアケアヲイロヲモチ井ル。禁色ヲユリタル人心々ニ錦織物等ヲキルナリ。シカラザル人ヒラギヌヲモチ井ル。文官トイフトモカナラズ半臂ヲキルベシ。コレアヲイロ

ワキアケナルユエ也。タバシ近衛將劔ヲハ

ク。細劔。平緒。外衛佐尉左右馬頭侍從少納言等ニ

オキテハ帶劔セズ。射手出居トイフトモ。近

衛司ハミナ帶劔スベシ。

念人裝束常ノ如シ。藏人モ射手ニイラズバ

位袍ヲキルベキカ。念人ト云トモ公卿侍臣

等。弓箭ニイタリテハ所隨身也。

仁王會。

行事ノ藏人アヲ色ヲキテ火舎ヲトル。タバ

シゴク子ツナラバ。アナガチニアヲ色ヲキ

ルベカラズ。

最勝講。

オナジ裝束常ノゴトシ。子細上卷ニノセタ

リ。

掲焉ノトキ麴塵袍ヲキル事。

ケチエンノ時。御楔垣下五節預。御佛名堂童

子等カナラズキルベシ。又御齋會内論義仁

行幸。

王會季御讀經御佛名行事コレヲチャクスベシ。但仁王會季御讀經堂童子形勢ニシタガフベシ。極熱ナルニヨリテナリ。御佛名ニオキテハカナラズキルベシ。タバシ青色ヲキズシテ堂童子勤仕人ソノカズアリ。文章生藏人束帶ノトキカナラズ青色ヲ着ス。又延尉ノ藏人青色ヲモテ常ニトノ井裝束ニモウヘブシニモキルベシ。

行幸。

公卿裝束如常。衛府タル人弓箭ヲタイス。老懸ヲカク。大臣ノ大將ハ弓箭ヲタイセズシテ人ニモタス。老懸イタクキヲヤナグヒニカケタリ。近衛司ワキアケ。老懸マキエノタチマロヲ帶劔。弓箭ヲオフ。靴ノクツナリ。藏人ミナアヲ色。靴ヲモチ井ル。唐尾カラヲヲイハズ。不結マタアヲリヲサ、ズ。フチラデンノ鞍。楚鞞ソシリガヒ葦鹿キツケ也。二省丞ノ藏人八省ニ供奉スルトキ位袍ヲキル。カ



ヲヲヲムス。御後ニ供奉ノ時アヲ色ヲキ  
ル。シリヲヒク。カブリノヒタイアテヲハナ  
ツ。カラヲヲムスバズ。衛府ノ藏人本陣ニ供  
奉スルニアヲ色ヲキ。弓箭ヲタイス。タバシ  
平胡籙。布帶。野劔。尻鞆。紫革裝束。平緒。絲鞋。脛巾。  
鞆也。京中トヲキ所オナジキナリ。地下ノ衛  
府ハ相違ス。

臨時奉幣ノ時八省ニ行幸事。

裝束如常。

藏人裝束。九月十一日例幣ノゴトシ。

大井鷹狩行幸事。野行幸ト號ス。

近衛諸衛佐。ミナ褐襖袴。葉脛巾。近衛將ハ平胡  
籙。諸衛佐ハ狩胡籙ナリ。承保三年十月廿四  
日ノ行幸ニ二品式部卿宮アヲ色。關白殿ア  
カ色ノ袍ナリ。大臣以下參議非參議ミナア  
ヲイロヲキル。左右近衛將各二人タカカヒ  
タリ。件人ノ裝束スイカンナリ。神妙也。左近

中將公實朝臣。右近中將基忠ナリ。件ノスイ  
カンノ人。路ノアヒダハ御輿ノ左右ニシコ  
ウ。野クチヲイラシメ玉フア□ダ。弓箭ヲト  
キテタカラスエテ野外ニノゾム。抑大井ノ  
御所ニツカシメ玉ヒテ後。御舟ニ御スルア  
イダ。近衛司ノタカカヒタカラスモテ。モト  
ノゴトク弓箭ヲ帶シテ御舟ニ候ス。藏人ノ  
裝束ニオキテハサウイナシ。

件度供奉藏人等。

左衛門尉藤原孝清。

裝束。青色。黑半臂。蘇芳下重。浮文袴。

左衛門尉平時範。

同廷尉。裝束。如孝清。

左兵衛尉藤原家實。

青色。蘇芳半臂。同下重。同表袴。

大膳權亮藤原惟信。

青色。萌木織物下重。蘇芳半臂。

非藏人式部丞橘致綱。

青色。供奉本省。位袍如常。

蔭孫高階能遠。

青色。唐晴色下重。

蔭孫源行實。

青色。桔梗織物下重。萌木袴。

藏人頭左近中將源雅實。裝束。補選綾褐衣。白結物狩袴。象眼鏡。

藏人頭源俊實。裝束。象眼。褐衣。懸袋。狩袴。打衣。

左少辨藤通俊。裝束如常。着青色。

抑六位衛府藏人。

平胡籙。劔。尻鞆。平緒。布帶。絲鞋。如例。行幸。

殿上和歌合。

先々ノ裝束サダマレルハフナシ。タッシ承曆二年四月廿八日也コノコト有。左右人下重ミナ蘇芳也。但藏人ハ表袴ハオモヒニ着ス。

左方。

左衛門尉源行實。袴唐綾黃。

式部丞大舍人助藤仲實。袴萌木。

左衛門尉藤清宗。廷尉白袴。

非藏人式部丞橘致綱。裝束如常。

右方。

左衛門尉藤惟宗。一藏廷尉白袴。

中宮少進藤知家。袴唐織物。

蔭孫藤基綱。浮文袴。

臨時勅使。

御直衣ヲオロシテキル。カブリノカシハバ冠。柏。夾。

サミセズ。

行啓供奉藏人。

文官アライロ。タッシアフリヲサ、ズ。二省

丞ハカラヲヲユフ。衛府ノ供奉スル時。啓ノ

尉平胡籙。尻鞆。平緒。布帶。絲鞋。行幸供奉ノゴトシ。アチイロヲキル。非

啓之人シカラズ。タッ前駟ノ儀ナリ。

輦車宣旨仰事。

コノ宣旨ヲオホスル藏人。カナラズアライ

ロヲキル。ウキモンノハカマモシクハカラ綾。文。唐。

アヤ。

天皇御服之時事。天下諒闇是也。

殿上侍臣。四位。五位。六位。ミナ橡ノ袍。タッ

シ表袴下重等鈍色ナリ。宿裝束ハ差貫褂等

ミナ鈍色。但褂ハ黃色花田ミナマジヘキル也。

### 燒亡時事。

奏燒亡藏人。宿裝束ト云トモコレヲ奏ス。束帶ニテモモトヨリソノカギリニアラズ。廷尉藏人燒亡ノ所ニユキムカフトキ。冬ハアヲイロキル。白キアヲバカマ一斤染毛沓也。タバシニハカニテケグツヨウ井セズバ。アサキクツニテアルベシ。又弓箭胡籙ヲタイスベシ。夏ノ時アナガチニアヲ色ヲキズ。但着不着ノコト人ノコ、ロニアルベシ。廷尉ハアランニシタガヒテ。白羽ノ矢ナリトモオフベシ。檢非違使等參内ノアイダ。殿上口ニナラビタツ他ノ藏人ソウスベシ。モシ他藏人タチカクレバ。殿上口ノハシラノモトニ弓箭ヲヌギ置テ。小庭ヲワタリテ殿上ノワキノトノモトニ毛沓ヲヌギオキテ。御所ヘ參テ

奏スベシ。承保二年七月廿九日内裏燒亡。上卿侍臣藏人裝束。束帶。衣冠。タバアルニシタガフベシ。タバシ近衛司。諸衛佐ミナツボヤナグヒヲオフ。檢非違使別當源俊明卿。直衣ニ隨身ノ白羽ノ矢ヲオフ。火長ノ矢カ。殿上ノ廷尉ミナ狩胡籙ヲタイス。

抑左衛門尉源盛長。我家ヨリアヲイロヲキテ參ル。シカルベキ人ミグルシキヨシヲシメサルアイダ。近邊ノ人イデテ位袍ニ着シアタム。

### 藏人初參事。

新藏人初參ノ時。無紋ノ裝束ヲキル。

冠。無文。位袍。

夏ハウス物。二藍。冬ハ綠衫。ムラサキウラ

下襲。

無紋。表裏。

袴。

ヒラギヌ。襷。綾モエギ

襦。

紅。紅生ナ

大口。

紅。紅生ナ

帶。

紅。紅生ナ

角まろ。襪。子リ

扇。

衛府官ハ劔。細。劔。笏。タイス

冠モ細纓ニテアルベシ。文官儀式官笏バ

カリヲモツベシ。

## 宿裝束。

平絹奴袴。

ハラジロア  
ルベシ。衣。綾如  
レ常。單。同。

禁色ヲユルサレテ着トキハシカルベキ人  
ノ御裝束ヲ申ス。半臂。下襲。表袴等也。此  
外ハ私ニ用意ス。禁色ヲユルサレテ後シ  
バラクアテ。ウスモノ、サシヌキヲキル  
ベシ。宿衣ヲユルサレテ後。兩三日布袴ヲ  
着ス。タバシ近代ハ一日バカリキルカ。オ  
ホヨソ青色ハ束帶ニキテノチ。トノ井裝  
束ニキルベシ。新任ノ人又コロモガへ後  
一兩日ヲヘテ。衛府儀式官ニウツリニン  
ジ。文官檢非違使ニウツリニンジナドス  
ル人ノ事也。

凡藏人青色ヲ着スル時カナラズウキモンノ  
袴ヲキルベシ。カラアヤノ袴キルトキカナ  
ラズ象眼ノ下重キルトイヘリ。タバシ冬ハ  
カナラズカラアヤノハカマヲ用。下重半臂

ニオキテハ。ハナヲ象眼ヲモチ井ルベシ。シ  
ロキアコメヲキルベカラズ。宿衣ニアヲキイ  
ロヲモチ井ルコト。カナラズオリモノカラ  
アヤノサシヌキヲキルベシ。但固織物ハ上  
古キズ。シカルヲ近代出來イテイタルモノ也。ナ  
ヲアヲイロヲキン日ハモチ井ルベカラズ。  
タヅヌベシ。夏時ウスモノ、サシヌキヲ用  
ルツ子ノ事也。二省丞ハアヲ色ヲキルトキ。  
ヒタヒアテヲハナチシリヲヒク。但沓ニオ  
キテハ。ハナキレアサキ心ニアルベシ。夏ノ  
時アヲイロアナガチニキルベカラズ。タバ  
シ人ノコ、ロニアリ。キンニオキテハベチ  
ニソシリアルベカラズ。タバ極子ツノコロ  
ニテミグルシキ故ナリ。

## 掲焉ノ時麴塵ヲキル事。

ケチエンノ時藏人カナラズキクデンノ袍ヲ  
キルベシ。コレ雜袍ノ宣旨ヲカウブリタル



ニヨリテ也。宿衣マタシカナリ。就中蘇甘栗使。臨時祭舞人試樂日。御禊垣下五節預<sup>中</sup>。ニカナラズキルベシ。<sup>畧</sup>又廷尉ノ藏人。青色ヲモテ常ニトノ井裝束ニモウヘブシニモキルベシ。

### 青色ヲキザル事。

主上令着御日ハ。案内ヲシラズ着バヌギカフベシ。賀茂祭ナラビニカヘリノ日。二省ノ丞役ヲツトムル日。檢非違使ハジメテ廳ニツキテ畏ヲ申日ト也。節會ノ本官役凶事ノトキキルベカラズ。凡藏人青色ヲキルコ、ロ。御衣ヲタマハル心也。麴塵ハ大臣以下非藏人藏人所雜色非雜色通用ナリ。但非藏人ハ無文ヲ用ベシ。オホヨソ藏人シカルベキコトニヨリテ勅使ニテ城外スルトキ。御直衣ヲオロシテキルナリ。但文官ノ藏人ノ事也。衛府ニオキテハ着セズ。凡無官藏人結官

ノ後。還着以前無文ノ裝束ヲキルベシ。タバシ近代シカラズ。諸司ノスケ式部丞ニウツリニンズルトキ。下重ヲヒキアゲテ拜賀ヲ申也。新任ノ衛府卷纓ナラビニワキアケノホウヲキル。但近代結官里亭ニイデ、衛府ノ裝束ヲキテ參内ス。殿上人兵部ノアテブミヲマタズ。シリナガキ衛府檢非違使ノ宣旨ヲウケタマハル時。殿上口ニシテシリヲコレヲキラスキル。タトヒ里亭ニイヅトイフトモ。參内ノ後シリヲキルベキカ。又畏ヲ申ザルサキ宿衣ヲキテ夜參内スルトコロ也。但表袴ノウラニオキテハ。件ノアヒダモトノゴトク蘇芳ノ色ヲモチ井ルツ子ノ事也。畏ヲ申テノチシカルベカラズ。アヲウラヲモチ井ルベシ。畏ヲ申サヌサキトイフトモ。シロキキズ。アヲバカマニオキテハキルベシ。有<sup>青</sup>心喪<sup>鈍</sup>人アヲニビノ織物。表袴。綾ノ柳色ノ下重ヲキ

ル。夏ノ時ハアヲニビヲキルベシ。綾ノキヌ

マジヘテコレヲ用井ル。伊賀殿御事參河權守平範國藏

人タリシアヒダ。左衛門權佐殿御事式部卿宮薨之時コノ裝束

ヲキル。又勘解由次官平行親藏人タリシ時。

伯耆守道行朝臣卒去之時。コノ裝束ヲキル。

伴道行朝臣ハ行親伯父ナリ。シカルヲ惟仲

卿ヤウシタルニヨリテ着服ヲセズ。心喪ノ

裝束ヲモチ井ルカ。コレヲラト、先例ヲタ

ヅヌルニ。但アヲニビノ表袴ヲキテハ心喪

ノ人ニカギラズ。ソライロト號シテトキド

キキル也。凡ソメ袴ハシカルベキ時キル也。

ビンナキ時着用スル傍難バウナンアルコトナ

リ。上古年齡ヤウヤクカタブク人アヲニビ

ノサシヌキヲキル。近代シカラズ。

オサナキ人ノコキ裝束ノ事。十五歲以前事也。

束帶。

袍。半臂。文官冬コレナキズ。下重。コレラハ夏冬ニツ

ケテ。ウチマカセタルフツウノモノ也。シ  
タギハ冬ウラコキ蘇芳ノ袖ニ濃單也。マ  
タアヲキ單モクルシカラズ。表袴ノウラ  
大口。コレラハコキイロニテアルベキナ  
リ。

夏。

表袴ノウラ大口ハ冬オナジ。アカカタビ  
ラアヲ單ノカハリニシロカタビラシロキ  
ハリ單ニテアルベシ。タノ裝束冬ノゴト  
シ。コキヒトヘチキルトキハリヒトヘチバキズ。

布衣。

コレモカリギ狩衣又ハフツウナルベシ。スハ  
ウノキヌニコキヒトヘ。又アヲキヒトヘ  
ニテ。シタノハカマコキニテアルベキナ  
リ。夏ナラバ四月ニ。ソレモスハウノキヌ  
一カサ子ニスバシノシロキヒトヘヲ重子  
テキルベシ。五月ヨリハヒタヒトヘニテ

アルベシ。キヌハアルベカラズ。八月十日  
ゴロマデハコノヂヤウナリ。八月十日ア

マリナラバスハウノスバシノキヌニスバ  
シノヒトヘヲカサヌベシ。九月ツゴモリ  
マデハコノ定也。十月一日ヨリハ子リギ  
ヌニコキヒトヘニテモアヲキヒトヘニテ  
モアルベシ。又オトナシケレドモイロユ  
リヌ近衛司ノ祭ノ使スルニコノ装束ヲス  
ル事アルベシ。ソレハ袍ハフツウノ袍。シ  
タギマタコノ定ニテ。半臂下重コキイロ  
ニテヒトヘニテキルナリ。ヒトヘハ冬ノ  
下重ノウラバカリヲヒトヘニテキルコト  
アルベシ。コレモシロカタビラシロハリ  
ヒトヘ。ウヘノハカマウラ大口コキ色ニ  
テアルベキナリ。

水火童女装束。  
汗衫。

色蘇芳。或ハミドリノイロ。綾平絹イヅレモ例有。夏  
ノ時ヒトヘガサ子。

寸法事。

身ヒロサ九寸。カタ。大袖九寸。ハタ袖四寸。  
袖ノ口二尺二寸。マヘノナガサ一丈。ウシ  
ロノナガサ一丈二尺。アコメ夏ハヒトヘ  
ガサ子。

寸法。

ソデノ口二尺二寸。タテ三尺五寸。ウチキ  
ヌハキウチ。ソデノ口二尺二寸。タケ三尺  
三寸。ウヘノハカマオモテシロシ。ミガク  
ウラシドリ。〔ミ臑〕

寸法。

ナガサ三尺七寸。

シタノハカマコキウチ。ナガサ七尺。オビ  
犀角サイカクヒキオビ一スヂ。カタミシ  
カイタス。ビンヅ  
ラノレウノムラサキノヨリイト。絲アフギ扇

ヒノアフギ。クツ。アサキクツ。  
 ビンヅラノ事。總角事也。

マヅカミヲフタツニワケテ。耳マヘ、ナヲヨスベシ

ニミ、ヨリ一寸ヲアゲテシタユヒヲスベシ。下 結

ソノウヘヲムラサキノクミニテモ。ヨ

リイトニテモ。フトサハハシノホドナル。結

ナガサ三尺バカリアルニテユヒ。メノコ

ムスビニシタレバ。コレハ主上ノ御總角

ノムスビヤウ也。ワナノカタヲマヘニア

テタレバ。ワナノナガサ一寸バカリニテ。

スコシマヘヘスデカヘタルヤウニテ。兩

方ツノ、ヤウニテアルナリ。サテワナナ

ラヌカタハ。ウシロヘムキテ六寸カ、リ

ニテ。フタスチサガリテアルベシ。

# 主上ノ御總角ノ事。

チタイハコノ定ニユヒタルヲ御グシノスソ  
 ヲ三ニワケテ。フタツヲバクミアハセテカ

ミヘアグベシ。サテイマヒトツニテアゲ  
 タルモトヲマトフベシ。

## 御服事。

一大小諸神及季冬奉幣諸陵。帛衣。卽位及正朔  
 受朝賀。袞冕十二章。

一朔日受朝聽政。受蕃國使表并幣。及大小諸  
 會。黃櫨染衣。

一本服二等以上親喪。服錫紵。外祖父母亦同。三等以下

及諸臣之服喪。除帛衣。外通用雜色。貞觀臨時格。此

段喪葬令歟。姪孫雖二等依以日易月制。不

服錫紵。歟云々。錫紵者細布鼠色淺黑袍。帛衣

者謂白練衣。

右助無智秘抄以東叡山普門院本書寫授合



群書類從卷第一百十四

裝束部三

飭抄上

一衣服

袍麴塵青色帛赤色淺黃橡

表袴老少之人文

柏付單衣老少着用夏冬裁縫

襪

帖紙

衣付單衣

下袴

出衣

布袴

下襲夏冬老少文寸法先例染色

打衣

大口

扇

直衣

奴袴

布衣

衣冠

一袍。

首書

筆談曰。中國衣服。自北齊已來。全用胡服窄袖緋綠。唐貞觀時猶爾。開元之後稍廢轉矣。通典曰。宇文護始袍加下襪。遂日爲後制。即今公服也。

麴塵。

天子常着御。稱黃櫨染。文。竹桐。鳳凰。麒麟。

近衛天養二十一朔旦旬。主上黃櫨染御袍。躑躅

御下襲。黑御半臂。縮線綾表御袴。

青色。

天皇着御。文同黃櫨染。臨時祭次度出御。着御青色。櫻御下重也。藏人着之。所雜色

御禊前駢着之。拜領由歟。藏人被聽禁色之時。先着御衣等。其意也。仍件色相傳古物云々。

帛。

天子令從神事御之時着御。

天養元九八。齋宮群行。震儀召改白御裝束。

着御事。御大内之時一度召御裝束。行幸

里第之時先令着御尋常御裝束。於小安

殿召改白御裝束。

仁安二十一廿一。自廻立殿移御神殿。主

上着帛御裝束。無文玉巡方御帶。其體甚少。自院被獻之。

淺黃。

親王着御。

保延五或秘記曰。後白川雅仁親王元服。諸卿等相

談曰。無品親王着黃衣。或曰。謂之淺黃。專

不分明。宗能卿曰。是黃色之薄也。予曰。或

記曰。親王着黃衣。注曰。其淺黃也。世稱之

黃衣。或記曰。着綠袍云々。以之推之。猶

淺黃色歟。指貫體也。宗能曰。淺黃者是心喪色也。

豈可用哉。餘人更不口入。予心中雖存無

其謂之由。更不出口外。歸亭。後勘日記。

長和二年三月廿二日行成記曰。新冠兩王

着黃衣。其淺黃色也。御川稱之黃衣。寬治元六二御曆曰。着

綠表衣。給云々。改着男御裝束。綠御袍淺

黃也。世稱之黃衣。面葵綾練之。裏同色平

絹。同練張之。有文御帶。件御裝束。自此前

自待賢門院被調進也。

近衛久安六十廿三。新大納言傳法皇詔曰。重仁

親王元服夜。袍色如何。其意趣宜裁。狀奏

聞者。報狀曰。無品親王黃衣之由見西宮

抄。臨時中。又縫殿寮式有所見。淺黃。即薄黃由也。可用

薄黃色。

多案。先年六條宮元服之時。袍色有御沙

汰。薄女郎花色也。有黃氣者。

赤色。

太上皇一着御之。

保元四朝一觀。着御赤色御袍。

長寬元朝同上觀。今年不着御赤色。着御橡云。

今案。先院後羽脫屣之始。神社御幸朝觀等

着御赤色。後々着御橡也。文窠中竹桐也。

橡袍。

四位以上橡。五位有蘇芳氣。六位綠。廷尉

佐大夫外記史大夫尉等着赤色。近代四位

五位無差別。不知故實云々。志之羅綾。非

尋常物。故普賢寺入道基通說トテ或卿相談曰。

件物吾未見聞。古者張目綾トテ自然只張

付也云々。文多者唐草。但有輪無輪。當家

用無輪云々。當時攝政達家九條。窠中唐草。近衛

流。納言之時。立涌雲中窠。唐草中有關白之後無

窠。只大立涌雲云々。當時右府實氏納言之

時如恒。而大臣之後着遠文袍。故入道大

相國賴實。大臣之後着大龜甲遠文袍。前右

府師經。又着之。

治曆土御門令後冷泉着遠菱文袍。若宿老高位之

後着歟。但件日着御心喪服。若依此事着

遠文歟。可尋。赤色淺深。隨家習着之。當

時大外記清中兩家有淺深也。師重朝臣。良

業真人又如此。大夫尉又如此云々。

一下襲。付半臂。

實錄曰。隨官多服半臂。卽長袖也。唐高

祖滅其謂之半臂。或號背子。

冬。面浮線綾文。粉張瑩裏遠菱文。濃打菱壯年

之人有中陪。又文四菱重也。老者一菱遠文。

或說。宿老之人面裏張テ着之。不瑩不打。

稱公繼フクサ張下重。或只稱張下重云々。野

宮左府常着之。夏赤色。老少之儀宿老濃有

黑氣。若人蘇芳有赤氣。半臂。冬禁色之人欄

羅。薄物。身濃打。夏大文黑半臂。冬常者不着



之。袒裼之時若騎馬之時着之云々。不聽禁色之人。冬平絹。其色如恒。夏穀二藍半臂。冬濃打。夏二藍。半臂襪以一幅折返而付之也。而後堀川院朝觀持明院之時。土御門大納言息中將顯定朝臣。着染裝束。半臂ヲメラカシテ着之。人々傾奇云々。可有有意事也。仍注之。

下襲寸法事。

假令。大臣一丈四五尺。大納言一丈二三尺。中納言一丈一二尺。參議八尺。四位七尺。歟。但近年無存寸法之人。只以長爲先。且又隨人高下可斟酌其長短歟。後堀川院御時。雖被定寸法。不拘制法歟。檢非違使別當已下裾。可載先例也。大理拜賀家次第曰。應德記曰。尻長四尺餘。御裝束被減云々。建久御記曰。御下襲尻四尺餘。御裝束被減

云々。

進辭書後大理進退事

久壽元十一延徳或秘記曰。別當隆俊卿勘物曰。別當進辭書後。延下襲裾。不待左右出仕。若返給者。且曳。雖一兩日數度進辭書。每度延裾云々。准此今日未返給辭書。可出衣歟。而不出之如何。問其由之處。无所陳。

下襲色之事。

火色。

臨時客。賭弓。試樂。凡無止事之時時着之。

唐綾下重着黑半臂事。

久安二二一列見。或秘記曰。予令着唐綾

櫻下重。猶着黑半臂之故也。至織物者。不

着黑半臂。禪閣命云々。忠實

仁平元十一廿三臨時祭試樂。舞人隆長。治

承相三男。着火色下重。黑半臂。紺地平緒。



基原

長寛元正十八賭弓。或秘記曰。左大將火色下重面裏打之。右大將裏張之。合付中陪。火色下重者。裏可張也。入道殿被仰曰。有打事云々。但僻事也。

忠雅

仁安二正十八賭弓。或秘記曰。右大將火色下重裏張之。件裏文單文繁也。四五寸計小筋ヲ遣テ織也。有中陪。紅梅地平緒。

首書

嘉禎三年正月三日臨時客。左大臣被着。

榮經

火色下重。後日案内人曰。面裏共打。中陪強張。文面浮線綾圓。裏遠菱如常云々。黑半臂。紺地孔雀唐草平緒。累代物云々。後日顯平卿曰。中陪紅梅衣。張ヲメラカサズ。ヲシタ、ミテ入中也。紅中陪ハ黑見云々。半臂裏普通單。但コハリノ料ニ付。裏面小葵。裏菱濃打。或說淺黃色云々。天養元正廿一賭弓。左大將雅定。初取奏。着火色下重。

類長

久安三三三八禪閣御賀。宇治左府着火色下重。

鳥羽

天仁二正一臨時客。殿下皆練下重。黑半臂。

忠實

紺地平緒。

鳥羽

永久四正二臨時客。内府忠通。着皆練下重。

黑半臂。紺地平緒。

崇徳

長承三正三臨時客。尊者左大臣家忠。皆練下重。黑半臂。

多案。火色皆練已似無等差。但如長寛記。以裏張可稱皆練。歟。年紀不守次第載之。且隨見出故也。

紅梅。

正二三月晴着之。或年中十一二月着之。

付蘇芳打裏之時。稱紅梅也。

首書 四條

通家

嘉禎三正三臨時客。主人攝政。裏紅梅下襲。堅織物浮線綾圓。面白裏蘇芳。同半臂。紺地平緒。

仁平二正三朝觀行幸。中將隆長着紅梅織物半臂下重。

仁安二正二臨時客。基房主人攝政。紅梅下重。面紅梅。

裏蘇芳打也。浮文梅散花。下不着半臂。肩一領長。

保延四正二朝觀。或秘記曰。予裝束。半臂。

紅梅堅文織物。下重紅梅浮文織物也。兩種

物文相同。浮文堅文織誤。臨期難調改。令

申此由於大殿下之處。忠實浮文堅文各別者。

騎馬之時定見苦歟。被仰可着打下重之

由。而新打下襲。明日料未裁縫云々。自內

被仰可早參之由。大殿下御返事曰。刻限

已遲々。只不擇浮堅文可着用。依此仰不

着半臂。騎馬日須着半臂。雖然不着又常

事也。

仁平三正三臨時客。實能尊者。臣內大唐綾梅下重。黑

半臂。

長承三正三臨時客。忠通主人。紅梅織物半臂下

重。蘇芳。

四季着之無難。但夏生綾也。若薄物。

承安三四十七。高倉近衛使少將隆房。薄蘇芳薄

物半臂下重。表袴青打。非禁色也。

保安元四賀茂行幸。安忠新右大將被着蘇芳二

重下襲。織物裏色。濃如何。

久安二十一。八皇后宮入講結願。宇治左府

着蘇芳堅文織物下重。得子

嘉保二四十七。首雲堀川御禊前駟右兵衛佐實隆。

薄蘇芳下重。右衛門權佐時範。蘇芳萌木表袴。下重。嘉禎三

四廿三八幡行幸。近衛大殿。少將兼平。着

蘇芳二陪織物半臂下重。地龜甲。文青濃薄鶴丸。萌木

表袴。文如常。但紫濃薄窠文。

薄色。

宿老之色也。四季通用。賴德佐渡院御宇春日行

幸翌日。令前左府。良平着之。于時七月歟。單

綾織物。文筥形也。

松重。

四季通用之色也。故左府。家通前關白息。後堀川院朝。

觀高陽院之日被着之。于時正月。有色々

文。

保延三七廿三仁和寺競馬。宇治左府。于時內大臣。

松重半臂下重。白浮文織物表袴。紺地平緒。

首書嘉禎三四廿六八幡行幸。實雄三位中將

着松重下重。拾重文筥形。白浮文表袴。頭中將

資季朝臣着松重下重。蘇芳表袴。

花葉色。

經黃色緯欸冬色。大畧花欸冬色欸。裏青打

云々。多者三月着用。故通宗卿。任子宜秋門院中

宮之時。大原野行啓試樂着之云々。

紅葉。

十月十一月晴着之。青紅葉。黃紅葉。紅紅

葉。櫨紅葉。色々。蝦手紅葉。在人情。

仁安三十廿一大嘗會御禊。故殿。于時通親中將。黃紅葉

下重。同半臂。文筥形。濃蘇芳表袴。予年少之時。

故殿仰曰。染裝束文多所用菱形文也。予

建曆度爲藏人頭。用此色目了。顯德

保延五十廿六成勝寺供養。宇治左府着紅

葉下重。

菊。

十月十一月晴着用之。菊色々在人情。

久安五十十一日吉行幸。三位中將兼長着

菊半臂下重表袴。

裏欸冬。

春冬等晴多着用之。

嘉禎三四廿三八幡行幸。近衛三位中將基嗣

着生裏欸冬。但夏裏欸冬如何。被申合大

殿欸。然者有其故乎。可尋。兼鐙

嘉禎三正三臨時客。左大臣着裏欸冬下

襲。文筥形。紫綾平緒。同半臂。



花橘。

四五月晴着<sub>二</sub>用之<sub>一</sub>。

通光前內府宰相中將通忠爲<sub>二</sub>中宮權亮<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>仕賀

茂祭使之時。着<sub>二</sub>花橘下重<sub>一</sub>。蘇芳表袴。

首書

嘉禎三四廿三八幡行幸。右大將家着<sub>二</sub>花

橘下重。白表袴。浮文歟。公經。太政入道未<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>羽

林。實藤又着<sub>二</sub>此下重<sub>一</sub>。但二重織物。萌木表

袴。

女郎花。

七月八月晴可<sub>二</sub>着用<sub>一</sub>歟。

仁安三八四朝覲。中納言兼雅着<sub>二</sub>女郎花下

襲。

柳。

宿老人着<sub>二</sub>用之<sub>一</sub>。

鳥羽

元永元正廿六立后。瑞子關白柳下重。紺地平緒。

天養二十一朔旦旬。出居侍從右京權大

夫顯親朝臣着<sub>二</sub>柳下重<sub>一</sub>。于時記之。衰老之故

歟云々。

久壽元二廿六法勝寺千僧御讀經。或秘記

曰。今日初着<sub>二</sub>柳綾下重<sub>一</sub>。同三月廿日院御八

講。右大臣<sub>中院</sub>着<sub>二</sub>唐綾柳下重<sub>一</sub>。或秘記曰。今

日右大臣語曰。用<sub>二</sub>引柳半臂下襲之日<sub>一</sub>。以

薄織綾爲<sub>二</sub>表衣<sub>一</sub>。見<sub>二</sub>土御門右府記<sub>一</sub>。康平三

年四月廿二日宇治殿仰云々。

保延六十二大殿出家拜問。令<sub>二</sub>着<sub>一</sub>布袴給。

柳下

永治元十御禊。女御代前駈五位十六人。已

上柳打下重。先々多用<sub>二</sub>櫻<sub>一</sub>。今度長元例也。

永治宜<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>康治<sub>一</sub>。下效<sub>レ</sub>之。

嘉禎三正三臨時客。菅宰相爲長卿着<sub>二</sub>柳

張下重。歲八十歟。

黃柳。

仁安二正二臨時客。或秘記曰。尊者左大臣

經宗。黃柳下重。面薄黃如<sub>二</sub>練色<sub>一</sub>。裏濃黃打也。



後日平相公親範。談曰。後日尊者被命曰。近

日可着<sub>二</sub>火色<sub>一</sub>下重之時。前有<sub>二</sub>晴宿老之人<sub>一</sub>。

用<sub>二</sub>此色<sub>一</sub>。師實京極大殿令注給裝束記如此。故

知足院入道殿令命給。文固文窠文。京極令

色給時。令用黑半臂。依平相公命如<sub>レ</sub>右。而

後日左中將賴定朝臣談曰。參向彼亭。令

取<sub>レ</sub>出件下重給見之。面薄黃浮線綾固文

織物。裏薄青打也。平相公說僻事也者。又三

條中納言實房。曰。左府被命曰。須着<sub>二</sub>火色<sub>一</sub>

也。而賭弓在近。連々無念。仍所着也。又着

黑半臂。若有<sub>二</sub>難人<sub>一</sub>歟。打任下重同物着事

也。然而有所存者。

多案。說々中。賴定朝臣。三條中納言之說。

可<sub>二</sub>信受也<sub>一</sub>。親範虛言人之由聞置之。其

謂歟。首書

若鷄冠木下重事。嘉禎三四廿三八幡行

幸。三位中將公佐着<sub>二</sub>若鷄冠下重。白表袴<sub>一</sub>。

引耗。

中將顯親朝臣着<sub>二</sub>同色下襲<sub>一</sub>。文龜甲。

多炎天着之。先年修明門院春日一員御幸。

宰相中將實氏着<sub>レ</sub>之。重子單濃打也。

保安元四賀茂行幸。關白候<sub>二</sub>御後<sub>一</sub>。忠實騎馬。着<sub>二</sub>引

耗下重。紺地平緒給<sub>一</sub>。首書

曳陪支下重付裏事。嘉禎三四十六賀茂

祭。使右近少將源輔通朝臣。爲<sub>二</sub>內府口入<sub>一</sub>。

被<sub>二</sub>出立<sub>一</sub>。而引陪支下重半臂等可<sub>レ</sub>付裏之。

由諷諫。人々疑殆。家實前內府被<sub>二</sub>不審<sub>一</sub>云々。

或人曰。近衛大殿傾奇給云々。案經

嘉禎三四廿三八幡行幸。攝政新大納言

着<sub>二</sub>引陪支半臂下重<sub>一</sub>云々。若家

曳陪支下重半臂事。

康平二四十二。土御門齋院自<sub>二</sub>大膳職<sub>一</sub>入<sub>二</sub>紫

野院。御袂也。向<sub>二</sub>新大納言師實<sub>一</sub>。出立所日。裝

束表衣如常。曳陪支半臂黑打綾。殿下仰曰。顯通

半臂或用夏薄物黑半臂云々。傳聞往年濟時小一條大將。大納言故殿道長言。同日奉仕此御禊

御前之時。下重同用引陪支半臂。彼大將

用夏薄物黑半臂。故殿如今日所用。時人

曰。彼大將知此事人也。又故殿者大入道兼家

殿并一條左大臣殿存生之間也。定有故歟

云々。左大臣云。彼大將半臂。是又一說也云

云。今雖有兩說。今日只用故殿餘風也。

萌木。

仁安二十廿一日吉御幸試樂。新中將賴實

逢腋。萌木下重。同半臂。裏濃蘇芳上袴。

櫻。

三月晴多着<sub>レ</sub>用之。白櫻。櫻萌木。樺櫻等也。

白櫻歲中正二三月或用之。予歡喜壽院供

養。三月。于時着櫻萌木下重。浮織物。而萌木

櫻ノチリノ。裏花田打。有<sub>二</sub>中陪<sub>一</sub>。

永久三十一朝觀行幸。新大納言忠通法性寺殿。樺櫻

下襲。櫻花文。

保安四二十九朝觀。新大納言有仁。櫻萌木二

重織物下重也。

天養元正廿一賭弓。宇治左府着櫻張下重。

去年朝觀行幸所着下重也。

永治元三廿一女御得子。堂供養。大將着樺

櫻織物下重。

仁平二正三朝觀行幸。宇治左府着櫻堅文

下重。

永久四正二臨時客。民部卿櫻下重。紺地平

緒。師時記云。白櫻下重歟。可用紫綵者也。

白重。

宿老之人多着<sub>二</sub>用之<sub>一</sub>。先年左土院御宇寂勝

講。當時前左府良平公。于時大納言。着美絹白重。人以

不爲可。故左府家通前關白息。着稱鹿路。在龜惡絹。彼家云々。

保延六十一新所旬。或人記曰。康和二

七月一日新所旬。此日左大臣俊房。着白重。

云々。今日予着之如何申<sup>忠實</sup>禪閣。仰曰。老人

苦熱之比着<sup>忠實</sup>白重。因之彼大臣被<sup>忠實</sup>着歟云

云。何可<sup>忠實</sup>着乎。仍今日余着<sup>忠實</sup>打下重。

久安四六一秘記曰。院御逆修結願。土御門

大納言着<sup>雅定</sup>生裝束襪練。老人尤可<sup>忠實</sup>然歟。

仁平二正三。關白令<sup>忠實</sup>着<sup>忠實</sup>白重。

仁安三十二殿記曰。衛府着<sup>忠實</sup>闕腋之時。不

着<sup>忠實</sup>白重云々。

永久四正二臨時客。或人記曰。師時朝臣着<sup>忠實</sup>

用白重如何。<sup>男</sup>左府二先年故民部卿<sup>俊明</sup>殿下

令<sup>俊明</sup>任<sup>俊明</sup>太政大臣給時。大饗日被<sup>忠實</sup>着<sup>忠實</sup>件下重。

彼人爲<sup>俊明</sup>一大納言之上。宿德之舊臣也。以

彼思之。猶宿老之人可<sup>忠實</sup>着用歟。但更衣之

日。不論<sup>忠實</sup>老少皆所<sup>忠實</sup>着也。依<sup>忠實</sup>不審一旦所<sup>忠實</sup>

書付也。可<sup>忠實</sup>尋<sup>忠實</sup>先例。

長寛元五或記曰。隆季卿着<sup>忠實</sup>白重參内。中古

爲恒事。然而近代不見。或人曰。此事不<sup>忠實</sup>甘

心。宿老人可<sup>忠實</sup>然人着<sup>忠實</sup>之云々。

久安三十四一或秘記曰。仁和寺灌頂後朝。

予着<sup>忠實</sup>白重。

仁平元正一或秘記曰。今日太政公着<sup>實行</sup>白重。

其表瑩之。諸卿傾奇。申<sup>忠實</sup>禪閣之處。有無

難之仰。

永久四正二師時記曰。下官着<sup>俊房</sup>白重。白袍。單

衣。紺地平緒。大臣仰曰。不論<sup>忠實</sup>殿上人上達

部。オトナビヌル人着<sup>忠實</sup>之者也。

多案。宗能難。無其謂歟。

嘉禎四正。着<sup>首書</sup>白重事。内々示<sup>忠實</sup>合備州之

處。御白重尤珍重候。且所見如<sup>忠實</sup>然。慥ニナ

レバ彌勿論之事歟。金剛勝院供養日。<sup>康治</sup>二年

六月。顯賴卿着<sup>忠實</sup>用之。次日宇治左府被<sup>忠實</sup>語

申<sup>知足</sup>禪閣。ソレハ何様ニシテ令<sup>忠實</sup>着ケ

ルニカ。白重ハ冬着<sup>忠實</sup>之。夏ハ四月朔日ノ

白重ヲ置テ。定ナドノ有夜。熱時着<sup>忠實</sup>之。又



老者ノ刷之時着也。秋中間着白重何故哉云々。師元曆記所注如此候。隨覺悟令注申候。

二藍。

苦熱之比着用之。先年寂勝講。右大將實氏公。

着之。文如常。

首書嘉禎三年五月廿三日寂勝講。內府右大將着。

二藍下重。文如常。同三年五月寂勝講。前

左府三位中將公佐着二藍云々。

青朽葉。

自寂勝講之比。至于七月中下旬。極熱之比

又甚雨之時多着之。無其難。宿老人雖非

極熱惣着之。隨吉事時不着之。着用之儀

大概如此。於殿上人宿老者。近代モ多用

之。爲家卿少將之時于時十六七歟。着之。其色濃。公

卿希見之。前關白當時攝政寂勝講被着

之。有黃氣トクサ色也。

保元二四十五祭歸立。近衛使右中將信賴朝臣。今日着青朽葉半臂下襲。櫛綵平緒。

仁平元五廿四寂勝講第三日太政大臣白單衣。青鈍半臂下襲綾。沃懸地劔。

保元三六九相撲事始。少將成憲朝臣年預。

着青朽葉下襲云々。

同節。七月或秘記曰。出居將或青朽葉。青綵

平緒。

首書嘉禎二五廿三寂勝講。通成朝臣六十着青

朽葉半臂下重。其色濃ハナヤカ也。地薄物。棟

綵平緒。縫卯花。五卷日。頭中將實雄朝臣着

之。其色薄也。同年九月九日重陽平座日。

權辨兼隆朝臣着青朽葉下重。其色薄青。

花色トクサニ可染歟。又極熱之比着之

云々。孟秋九月不可然歟如何。嘉禎三四

廿三八幡行幸翌日。帥中納言隆親卿加

陪從。着青朽葉。其色薄云々。



唐裝束。

仁安三八廿四殿記曰。內府久我雅通御拜賀。予

于時中將禁色也。唐綾表袴。顯文紗下襲。赤色。

久安正四行幸。忠通攝政令着柳唐綾櫻下重。

裏色薄。唐綾表袴。

同二二一朝覲。宇治左府着唐綾櫻下重。表

袴。十一日列見。着件下重。彼記曰。雖唐

綾猶着黑半臂。至織物者。不着黑半臂。

禪閣命。

首書嘉禎二五廿三寂勝講。中納言實經中將着顯

文紗赤色。下重。表袴。縮線綾歟。分明不見。

左頭中將實雄朝臣同着顯文紗下重。後

聞。表袴固文云々。不可然歟。

フクサノ裝束事。

練緯ヲ染テ着也。雅賢年卅五。中將朝覲行幸着

之。經通東大寺供養樂行事着之。

或古老曰。有禁色之望人。着之尤見苦。又

無禁色望人共ニ付テ片腹痛。不着ハ宜

歟。但可依事。少年顯官者。着用何事在哉。

蒲萄染。

按此條言常服嘉禎四年三月廿八日春日行幸翌朝。左大

將實經立片舞。着蒲萄染下重。黃丸文。

一表袴。

夏冬無差別。禁色人有文。宿老人藤圓。若人

霰窠文。藏人頭。聽禁色之殿上人。五位六

位藏人等着霰窠文。又晴時浮文。常ハ堅文。

但近年五位藏人等隨所存着之。不可例

事也。不然之人平絹。疊之。裏皆紅打。有中

陪。

一打衣。

近代多不着之。或人曰。尋常之儀。雖冬束

帶着打衣云々。夏赤帷上付張柏紅。近代

多袖許付。畧儀也。

保延四十一廿三字治左府着座記曰。不着

打衣云々。

多案。件度雖不着之尋常着之歟。仍注載之。

一柏。付單衣。

公卿用赤柏。壯年之人着染柏。若萌木薄色類。權大

納言家良。曰。吾等大臣後着赤柏。納言間着

染柏云々。宿老之人。或白衣平絹。同單云

云。夏帷上付張柏。紅。老人白帷。白張柏云々。單衣。紅。單文。年少之人重文。宿

老遠菱。

嘉禎二九九重陽平座日。菅相公爲長卿

着白帷。白張單衣。老儀歟。尤可然歟。

壯年人束帶着濃單衣事。

久安四六廿三。侍從兼長申慶。束帶濃單衣。

同五八廿五三位中將兼長申慶。或秘記曰。

今日始着紅裝束。先々濃裝束。

夏束帶着染柏事。

或人衣抄曰。九月九日以後。夏束帶不着赤

帷。着染柏。如黃色也。有其說。猶重紅單衣也。其單衣平絹也。

一大口。

紅生平絹。或紅張衣。但近代不用之。宿老之人或白

張絹。

一襪。

平絹。或說。夏着唐裝束之人。着顯文紗襪

一重云々。或人曰。故通宗卿爲藏人頭最

勝講着唐裝束之時着之云々。足下可有

用。意事云々。黑足見苦云々。佛名故人有襪

合事。或練緯之二重。或雪下紅梅。盡種々

美也。近代如此事一向絕了。

一扇。

公卿宿老之人。束帶之時不論夏冬持檜

扇。直衣之時猶持之。年少之公卿。或炎天

持蝙蝠。冬年少之人橫目扇。散薄畫繪。持之。

久安五十十一日吉行幸。三位中將兼長用

塗銀泥畫菊之冬扇。依禪閣仰也。

首實

重服扇。保元二十一廿八或秘記曰。重服

之後初出仕扇鈍色。至于扇者夏冬改

之。諒閣扇事。冬扇如尋常。但不置文云

云。兩度諒閣。藻壁門院。後堀川院。或置

文。夏扇權花。色薄香村濃。香村濃。或壯

人散薄云々。

香染扇事。

保延四二四春日祭。宇治丞相上卿。束帶香

染冬扇。

若大臣持夏扇事。

保延二九二鳥羽競馬。或秘記曰。予衣冠帶

野劔。持夏扇。依大殿仰也。

一帖紙。

陸奥紙。或檀紙。好事雲客祭警固聽樣帖紙。

透夏直衣云々。

一直衣。

聽禁色之人。夏大文薄物。冬浮線綾。不然之人。夏穀。冬志々羅綾。宿老之人裏白。壯年薄色裏。

香直衣。

保延三三三平等院一切經會。大殿着之。

無欄直衣。

久安三九十二法皇天王寺詣。宇治左府依

鳥羽

仰着無欄之直衣。薄色裏濃之由注之。

浮文直衣事。

建曆大嘗會寅日。左中將資平朝臣着浮文

直衣。

織浮線綾。

兼日依上皇仰。余于時藏人頭奏之。彼

時仰曰。着浮文直衣之時必可奏也。主上

着御之故也。若今案之仰歟。將又有先例

歟。彼時如此事有淵深之沙汰也。

宿老之人着平絹直衣事。

承安元四十七賀茂祭。近衛使右少將隆房

朝臣出立。從花山院大相國忠雅着鳥帽子直



衣。立烏帽子。平絹直衣。三條相國。公房。後高倉院御中陰

初七日歟。通光。着之。前內府西山御堂供養日被

着。道家。又當時攝政常被着云々。前內相府曰。

着平絹直衣指貫事。上下平絹者似諒闇。

仍故實一物着有文云々。

初夏老卿着冬直衣事。

仁安三五一殿記曰。民部大輔憲雅朝臣。語

申大夫殿。定房。久我。曰。故朱雀禮部能俊。瑛子。待賢門

院中宮御時爲彼大夫。御惱之間。四月朔比。

宿侍着冬直衣之由傳奏。大夫殿被仰曰。

宿老公卿皆以着歟。此兩三年之前四月朔。

故卿二品喪家。五七。爲布施取着直衣行

向。公經。先到入道相國亭。於彼客座覺悟着冬

直衣之由。卽主人對面。無隔心謝此事。相

國答曰。故院。後白。御參籠天王寺。父入道實

宗。四月朔比。思失着冬直衣。稱忘失之由。

妙音院入道曰。宿老公卿着之常事也。

大理烏帽子直衣共官人事。

保元元三二或秘記曰。大理殿相具若君被

渡宮法印房。烏帽子直衣。共檢非違使能景

云々。負胡籙。立烏帽子。毛沓。

文治二八廿。參花山院。申承雜事之次被

仰曰。故忠雲法印爲故宮座主弟子之日。

我着烏帽子直衣。共官人着烏帽子者。彼

日御裝束。不注。愚曆仍令書裏。此事中出

之趣者。別當家通。先日被示送曰。烏羽御念

佛中間欲着布衣。仍又官人可着烏帽子。

在共之由存知如何。先人重通。大理之時。官

人着烏帽子在共云々。是古老之家人之說

云々。我不覺悟。又不記置。依不審所尋

申也。予答曰。不覺悟。大理着布衣相具

官人事。不打任歟者。後聞。大理猶着直衣。

志基景。着冠在共云々。禪閣又被仰曰。大理

着布衣相具官人事不見知。至于烏帽子



直衣者可然歟。仍我有此事。是私出行儀也。

一衣。付單。

自十月一日至三月晦日。尋常三領。練單衣。非

老者單文綾。單衣。但三月二月末。頗及暑

氣者。衣一領。重綾衣。歟。生單衣。平絹。以之號一重。又無難。二

領三領之染衣ニハ。シタニ不重。白衣。時

不用。白單衣。一重生單衣ハ。染衣ニカサ

ヌル無憚。尋常定事也。自四月一日。春夏モ

着レドモ。此日以後。至五月十餘日。近代五月不ハ必定用之也。用

單衣。壯年之人ハ若雞冠木薄色。宿老ハ白

衣ニ帷ヲカサヌ。自二月末三月着レ之。稱帷重也。自五月十

日。近代四月下旬猶如此。至八月十四日。平絹生單衣。保

延以往。雖衰老之次將之輩更不着帷。近

代皆着之。自放生會比至九月九日。綾生

衣一領。平絹生單衣也。至九月晦着之無難。其色

女郎花。朽葉。蘇芳。薄色。薄青。黃。青裏等

也。故院御時成菩提院御念佛結願。八月上旬之時。壯年人皆着生衣。晴ニハ猶可着歟。自九月九日至十五日。又如四月張衣一重着之。生毛練モ任意也。自十月一日張衣三領。見上。但非年少人。非極寒者一重。生單衣。衣無難。非壯年人。雖八月中旬着白張衣無難。又雖壯年。晴日着色々張衣常事也。近代三領衣。五節壯年人外不着歟。

或人衣抄曰。文治三年新日吉小五月。中將忠經。少將家經。着生衣。參。夏始生衣自是始。其後通宗又着之。通具又着之。其後遍滿。古老不知此事。偏新儀也。

養和元年八月。梶井宮受戒。供奉殿上人多着張衣。少々着生衣。

治承三年秋。左中將泰通朝臣。年卅三。左少將資通朝臣。年廿八。共直衣着白張衣。少年所見也。雅賢

實教等ハ雖三十餘猶着生衣。其比人老少皆ヲトナシキ裝束ヲ着用。仍下官自年十八着薄色奴袴。近年人不<sub>レ</sub>然。或曰。蹴鞠之人着若年之裝束云々。中御門内府宗能。說曰。男裝束惣無生衣。不可着云々。仍彼子孫不着之。但亡祖卿藏人少將之時。白川院歷覽鳥羽殿東山之日。浮文指貫。着女郎花生衣。烏帽子。風口ニカウガイヲ指テ居鶴鷄供奉之由。物語之次聞之。寛治之比。猶有男生衣歟。

仁安三四廿六殿記曰。大夫殿御教命曰。自五月可着單計。通親予申曰。因幡少將隆房。近日着生衣。被仰曰。令着已云々。或人又着張衣常事也。又着生衣云々。

同二九廿二同御記曰。殿仰曰。九月十三日以後。可着練衣。不可着涼衣。八月十五日以後。可着生衣。九月練衣一重。生單。十

月二重練單云々。

保元三八廿五院號始御幸。後白川殿上人衣冠。多

着生衣。或單平絹衣事。

保延四二三宇治丞相春日詣。綾紅打出衣。

白衣三單文。白單衣。

### 一奴袴。

色淺深。隨年依官可斟酌也。禁色之人織物。不然之人志々羅平絹。壯年之人夏着大文薄物。或鳥多須岐等。生織物白文奴袴。高貴之人着之云々。當家壯年之間。着龍膽多須岐。宿老之後藤圓。

### 夏冬指貫更衣事。

或人衣抄曰。自十月維摩會比。至四月御禊前用練指貫。自四月御禊日至十月十日比。生指貫。若五節着夏衣之輩相待不冬衣之

仁安二九十八殿記曰。參殿尋申曰。夏指貫何比マデ可着候哉。被仰曰。五節マデハ

令着也。故入道殿御教命ニハ着夏指貫。色ノ衣可透也。冬指貫。維摩會行事弁下向可着。其前貫首着之。雖然好事者。十月籠居五節着也。來月上旬衣冠。猶着夏指貫也。雖廿日比可着衣冠。

保延二四御禊。或秘記曰。雅賴談曰。自今日可着生奴袴云々。此事在雅兼卿記。故花山院左府殿之仰云々。但彼卿曰。雖無所見。古人之着用如此云々。

仁安三四六殿記曰。着衣冠。冬袍。冬指貫。祭以前不着直衣指貫。

今案。保延雅賴談。仁安道親故殿之記。相叶或人衣抄意。歟。但祭以前之由令記給。御禊前一兩日事也。但同事歟。可着夏衣冠。歟之由。有後日難云々。

五節着夏指貫事。

首書嘉禎二年十一月五節寅日。花山末子少

將。年十五直衣冬如常指貫。單衣二紫勾三

青單衣。歟。冬打衣青透云々。如仁安御記

或人抄者。可着夏袍。歟。如何。

保延二年二十八宇治左府于時內大壯年

直衣始。織物薄色堅文。指貫籠括。臣大將。

仁平三二廿八中納言中將兼長直衣始。紫

堅文織物指貫。

久壽元十一廿三中納言中將師長直衣始。

薄色浮文指貫。末濃奴袴。或書曰。如洛外

非尋常出仕之時。色々末濃。村濃。如唐綾。

非制限着之云々。

今案。公卿勅使。八十嶋類也。

保元四正廿六公卿勅使。別當。時忠。大夫進

隆家。末濃奴袴。青鈍浮文奴袴。

保安五十廿一新院鳥羽高野御幸。御後左衛門

督。通季。青鈍浮文織物奴袴。白文御奴袴。

保安四二二新院始御幸。御奴袴半色二重



織物。鸚鵡唐草白丸文。無文青鈍奴袴。

保安五四十四兩院御棧敷御幸。殿下濃打ヒヘキ出衣。青鈍無文奴袴。依仰着薄色奴袴。

四品之後可着薄色指貫事。

仁安三正八殿記曰。雅通大納言殿久我。教命曰。四

品之後。可着薄色指貫。雅定是入道殿中院。仰也。

薄色指貫結腹白也。是又入道殿中院。仰也。

多案。兩祖御命尤可信受。雖然近代十

二三歲輩。多昇四品帶高官。尤可斟酌

事歟。已異于古也。

壯年公卿冬指貫夏指貫着交事。

仁安三五一殿記曰。大夫殿久我。仰曰。冬指

貫。年少公卿與夏指貫着交常事也。宿老

之人者不及沙汰着冬指貫者也。

保安五七十三若宮始渡御白川殿。公卿已

下四人皆被着薄色奴袴。有別仰。

紫指貫着用事。

或書曰。紫奴袴ハ及廿者不可着。近代人

人所見及。兼宗卿十七少將之時着薄色。五

節公衡卿廿四侍從之時猶紫奴袴也。人々

所存様々歟。通資卿十八少將之時着薄色。

父內府存生之時也。雅通

今案。仁安殿記。大納言殿命曰。四品之後

可着薄色也云々。今所被思合也。但

十四五六猶可斟酌歟。

年少大臣晴時可着堅織物指貫事。

保延三十二三法成寺御八講堅義日也。或

秘記曰。參近衛殿。也實大殿問曰。着何指貫哉。

余答曰。薄色綾指貫。殿下起色曰。年少大

臣堅義日必着堅織物指貫。何可隨老人之

作法。於老人者。雖淺黃平絹有何憚哉。

此文二重織物指貫事。

嘉禎三十一十九寅日殿上淵醉。太政入道

此條言紫欺

公經



末子少將實藤。着梅丸白文紫二重織物指貫云々。如此事如何。執柄臣嫡家多者無

止人着之也。但當世獨步之人。不能子細哉。後日六條大納言有傾奇也。

不依官隨年齒用紫奴袴事。

平治元年二月十日。中納言中將基房。春日

祭進發日。被着紫織物奴袴。同日右大弁資

長着薄色奴袴。

夏織物。

久壽二四廿一賀茂祭。隆長見物。二藍織物

奴袴。鳥櫛文。

淺黃堅文奴袴。

保延六十一十五童御覽。宇治左府于時大臣大將。

着淺黃堅文指貫。

萌木指貫。

仁安三十一廿二童御覽。中將賴實着萌木

指貫。梅重出衣。

今案。建曆度寅日。當時右大將家嗣于時中將。着此色也。

公卿借用殿上人奴袴事。

久安四二十一攝政忠通法性寺邊移徙。予宇治左府。

着宿衣。借用侍從師光薄色指貫。余無薄色指貫之故也。

宿老之人。大將後着薄色奴袴。

仁安三八廿二殿記曰。爲御使忠雅參花山院。

着直衣。可參院。愚意所存淺黃指貫何樣

可候哉。古賢大將之後着薄色云々。土御師房

門殿拜賀翌日。令參宇治。着直衣毛車。令

帶劔笏云々。而今度令相具之由在御記。

然者今度此定可候歟。御返事曰。尋常儀薄

色宜歟。淺木何樣可候哉。然而率爾也。淺

木又有何事哉。去廿四日御直衣始。薄色練

指貫。

薄色指貫。

或人書曰。夏指貫狩衣。薄平絹用程人着薄

物指貫。假令英華之輩。着綾羅之程。猶用薄物也。無先途之輩。過壯年。薄物依異樣不着之。近代無文織綾薄物指貫。人多着之。古人曰。如近衛司。努々不可着。老者依無止事。用生奴袴之時。薄物着用也。近代少年少將着之。冬シ、ラ綾。古人又惡之。近代每人着之。直衣同前。

### 紫菟色指貫。

或人書曰。九月九日以後。或說。必不待九日。有可然晴時着之。

晦以前着紫菟色指貫之人。着練指貫。件指貫。古人紫菟色。面薄色青裏着之。雖着紫冬。二藍夏。人於此間練指貫者。猶可用紫菟色。秋中不着此色之人。尤過十月上旬。可着冬指貫。歟。雖着紫菟色。於袍者猶着夏袍。

### 指貫腹白事。

或書曰。少年壯年腹白結。少年之時結ノ組

ヲク、リサシノ中央之程ニツイトヲシテ。マヘニ腹白ヲ結也。故殿京極殿歟。仰曰。我等一門此前ノニ結。假令十六七以後ノ人ハ。ク、リサシノ内ヲ融シテ引出シテ。腹白許ヲ結也。中少將侍從。兵衛佐之輩。年廿四五マデハ必可用腹白。頗サタサグル時。朝夕有事煩撤之。晴日猶可用腹白。如五節也。次雖三十之人。猶晴ニハ結ヲ不籠。腹白ノ程ヲ過テ。オトナシキ人ハ。指貫同色ノ組ヲ融テ引出テ。白絲ヲ不交。其絲許ヲ如腹白組テ猶サグル也。腹白ハ四筋サガリタル。是ハ二筋也。及三十餘者。此事不可然也。

### 瑠璃色指貫。

仁安三四六殿記曰。大夫殿久我。敎命曰。淺黃指貫。五月以後可着。言瑠璃色。

或書曰。極熱之比。着瑠璃色指貫。近代雖屬冬氣不憚。猶似不知故實歟。

一下袴。

宿老之人。白下袴。壯年用紅下袴。并濃下袴。故有

雅卿着黃生下袴。白下袴下着之。自資賢卿常

着之云々。後日對面正佛房之次。號馬入道。問

之。答曰。故入道常雖着之。非此袴云々。

老後可着白下袴事。

仁安三正八殿記曰。大納言殿久我。教命曰。

老後可着白下袴也。

生單下袴。

保延二九二鳥羽競馬。宇治丞相衣冠。白袷。

生單下袴。

一布衣。

張裏壯年之人用之。但舊例無過失。高年之

人多着之。生白裏宿老之後用之。近來老少

用之。尤可有差別事也。

保安五十二兩院雪見御幸。經實按察唐蒲萄染

襖。紅衣。忠教戶部香織物紫裏襖。紅衣。侍從中

納言。濃香襖。通季左衛門督。青織物襖。實行別當。白衣。

新源中納言。唐蒲萄襖。實記左兵衛督。唐蒲萄卷染新

三位。ヒハダ襖。衛府三人皆帶劔。

保安五十廿一新院高野御幸。御後左衛門

督通季卿。布衣。蒲萄染綾織物青打裏襖。青

鈍浮文綾織物奴袴。皇后宮權大夫師時。布

衣。薄色圓文綾襖。裏濃。十一月二日同還

御。別當忠教。白綾狩襖。立涌紅衣。ムク蘭地

奴袴。立烏帽子。

布狩衣。

極熱之比勿論。其後依時依人歟。其一門ユ

ルサレタル人ノ着タルガ宜也。非可然之

人者不可然。予少年。十二故殿相具令參

六條殿給。朽葉布狩衣。結色々々如三着之。先院

隱岐。御時。夏比上下多着之。壯年之人。或指

廣結也。白組也。

薄平結。



或書曰。卅四五以後人不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着歟。

白裏狩衣事。

或書曰。白裏狩衣ハ。故人雖衰老猶憚<sub>レ</sub>之。

近代嬰兒多着<sub>レ</sub>之。倭成入道沈倫不<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>顯

官<sub>レ</sub>叙四位。及四十之後。着<sub>レ</sub>白裏狩衣。侍從

大納言成通卿。參會院見<sub>レ</sub>之。白裏狩衣キ

サセ給ナトテ被<sub>レ</sub>流涕。是衰老失前途之由

歟。以之思<sub>レ</sub>之。侍從少將等更不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>着歟。近

代公衡。兼宗。忠季等。侍從少將之時皆着

之。

着<sub>レ</sub>白裏之間布衣帶事。

或書曰。着<sub>レ</sub>白裏之間。雖布衣用<sub>レ</sub>白帶。恒

例也。

張裏狩衣事。

保元中納言中將春日祭上卿下向日。中山

內府<sub>忠親</sub>于時中將。着<sub>レ</sub>縹張裏狩衣。薄色指貫。白

衣二。同單云々。

白裏狩衣。

平治元春日祭上卿下向日。中山內府<sub>于時</sub>

着<sub>レ</sub>縹白裏。白衣。白單云々。

織狩衣事。

仁安三正八殿記曰。大納言殿敕命曰。四品

之後。織狩衣雖<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得意。汝猶不<sub>レ</sub>可

着。

一出衣。

久壽元正八。<sub>崇徳</sub>新院修正御幸。隆長衣冠。出<sub>レ</sub>紅

打衣。

平治元二十。中納言中將<sub>基房</sub>春日祭進發。

直衣。出<sub>レ</sub>紅打衣。右大弁資長。衣冠。出<sub>レ</sub>裏欸

冬衣。

久壽二四廿一賀茂祭。隆長見物。直衣尋常。

二藍織物奴袴。<sub>鳥襪</sub>紅曳折。出<sub>レ</sub>之。生單。

保延二十一十二五節帳臺試。予着<sub>レ</sub>直衣。<sub>薄</sub>

指貫。白衣。紅打衣出<sub>レ</sub>之。



保延四十一。宮御方淵醉。民部卿忠教。直衣。

淺黃奴袴。蒲萄染衣不出之。侍從中納言實

隆。直衣。淺黃指貫。紅梅出之。

嘉應元十一十三殿上淵醉。頭弁直衣出。柳

衣。

長寬元十一十五同淵醉。頭中將。忠親。柳織物。雅冠。出掛。頭辨。

白出掛。

仁平三十一十八。頭弁朝隆朝臣。昨日直衣。

出衣。今日衣冠。不出衣。

大治元十一。中將宗能。白衣三。着同單衣。

薄紅梅織物。浮文。

仁安三十一。通親。故殿櫛紅葉五重。ナメラカス。面織物。紅

紅葉三。青單衣。

永久四十一十三。宗能出蘇芳打衣。

仁安三十一廿一。故殿。禁色織物。管形。濃蘇芳裏。打出衣。裏勝萌木。衣三。

立涌雲。紅單衣。單文。有文直衣。薄色織物指貫。紅打衣。

紫薄樣三。

長寬二十一十五。內藏頭俊盛朝臣。柳掛。前

周防守隆輔朝臣。大貳成範朝臣。同掛。右中

將家通。實宗朝臣。少將通能。已上紅梅織物掛。

保安四十一。備中守敦兼。參河守有賢。衣冠。

白織物。固文。綿衣出之。

仁平三十一十六。隆長直衣。紫浮文織物指

貫。出紅打衣。十八日。紫浮文織物指貫。紅

梅浮文織物出衣。不入綿。有中陪裏等。

保安五十一十七。藏人左兵衛尉泰重。青色萌木浮文

簀形。織物紅打衣。紅梅句衣等也。

長寬元十一十五。五位藏人重方。薄色唐綺出。白二領。

同單衣。堅。頭藏人左兵衛尉源通定。青色袍。織物指貫。皆紅掛三領。

同單。

仁安三十一廿一。皇太后宮淵醉。大相國。忠雅。

不令出衣給。兼實。右大臣。出衣。大宮大夫。公保。花

着白織物衣給。山院中納言。兼雅。已上束帶。別當。時忠。着二斤。權大

染平絹云々。

夫。宗盛。出衣。

長寬元十一十六或秘記曰。宮御方淵醉。恭房

府。右將軍。兼實長中宮權大夫。右衛門督公保。大宮

宰相隆季。宰相中將實國。已上不<sub>レ</sub>出衣。右兵衛

督重盛。出<sub>レ</sub>裏濃紅梅厚衣。武衛密語曰。人々

不出衣。已爲<sub>レ</sub>失錯<sub>レ</sub>歟。予答曰。有<sub>レ</sub>何事乎。

先々恒事也。後日申<sub>レ</sub>大納言殿。被<sub>レ</sub>仰曰。末

座壯年之人々皆所<sub>レ</sub>出也。我爲<sub>レ</sub>三位中將之

時。皇嘉門院爲<sub>レ</sub>皇太后宮御所禁裏時。紅打

綿入所<sub>レ</sub>出也。可<sub>レ</sub>參<sub>レ</sub>童御覽之人。不<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>其

召之時。着<sub>レ</sub>束帶半臂<sub>レ</sub>參上。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之人

着<sub>レ</sub>束帶。頗爲<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>便事也。故中院<sub>雅定</sub>右府所<sub>レ</sub>被

示也。

天養元十廿八重仁親王着袴。崇徳上皇御直衣。

出<sub>レ</sub>紅打衣。

永久二二十四新大將<sub>法性寺</sub>直衣始。有<sub>レ</sub>出

衣。紅打衣。云々。

保延二十二十八字治左府大臣之後直衣始。紅打出衣。

仁平三十二廿八中納言中將兼長直衣始。

紅打出衣。

久壽元十一廿五中納言中將師長直衣始。

紅打衣。

仁安三十一廿一<sub>多子</sub>皇后宮淵醉。別當時忠着

一斤染衣。平絹云。

同二十廿四日吉御幸。舞人賜<sub>レ</sub>裝束。殿記曰。

予薄色衣二。紅單衣。濃打衣出<sub>レ</sub>之。泰通薄色

二。紅單衣。濃打衣。隆房黃葉衣三。紅單衣。

崩木織物出衣。知盛薄色二。紅單衣。濃打出

衣。通能薄色二。紅單。紅出衣。

同四二十二殿記曰。皇后宮平野行啓。賜<sub>レ</sub>舞

人裝束。着<sub>レ</sub>直衣。薄色衣二。紅單衣。出<sub>レ</sub>紅打衣。是

陽院春日一員之御幸。令舞人等各以出衣紅打

衣。但家光出<sub>レ</sub>紅梅織物。勤<sub>レ</sub>仕舞人御時例也。

久壽元九廿九鳥羽競馬。兼長右大將衣冠。半色

織物奴袴。白生單衣。出衣引打。不着

保延二十一十四中宮淵醉。皇子宇治左府于時

臣大將。着直衣。白衣。薄色織物指貫。濃打。

長寬元十一十六童御覽。兼實右將軍被出松

重。猶不入綿打重。浮文藤圓指貫。右府基房

被出裏衣厚綿絹云々。

保延二十一十四童御覽。宇治左府直衣。

半色丸文奴袴。薄紅梅衣二。同色單衣。裏

濃紅梅織物出衣。忠通關白淺黃丸文綾奴袴。

令出堅文織物白厚衣。給。保延三十一

十五童御覽。宇治左府于時內大薄色浮文

織物指貫。濃打出衣。白衣三。白下袴。單

衣。同六十一十五。同人淺黃堅文織物指

貫。白堅文織物出衣。仁平元十一十九童

御覽。同人紅梅浮文出褂。薄色堅文奴袴。

同三十一十八童御覽。兼長紫浮文織物

指貫。出紅打衣。仁安二十一廿七春日詣。

因幡少將隆房衣冠。出紅打衣。保延四二

三字治丞相春日詣。衣冠。綾紅打出衣。五

日同歸洛。直衣。浮文織物宮形。濃蘇芳裏

打出衣。裏勝萌黃衣三。立涌紅單衣。保延

五十一十五大殿八幡詣。同競馬。大殿着

堅文織物出衣。同十一月十一日大殿春

日詣。宇治丞相衣冠。紅打出衣。大殿衣冠。

御出衣經青緯櫨色也。文立涌雲。永治元

三廿一女御美福得子。堂供養。院御直衣。紅御

出衣。保安五二十雪見御幸。新院御鳥帽

子直衣。紅堅文織物出衣。濃紫織物浮文

御奴袴。保安五四十四兩院御棧敷御幸。

殿下濃打忠通七へキ出衣。令着青鈍無文奴

袴。保延二正廿六御五十日。上皇御直衣。

固文綾。御出衣龜甲浮文織物。紅色。入綿。保

延二九二鳥羽競馬。宇治丞相衣冠。紅打



出衣。

一衣冠。

宿德人。大弁宰相。依事着之。雲客者修正御幸。院尊勝陀羅尼着之。自餘衣冠之。雖束帶帶革緒劔。无難事歟。

久安四二十一忠通攝政法性寺邊移徙。宇治丞相着宿衣。

仁安四正廿六別當時忠伊勢勅使發遣。衣冠柏夾。無出衣。

仁安二十一廿七殿記曰。基房攝政春日詣依院宣勤仕前駟。衣冠。騎馬之間。帶劔野太刀。着半靴。少將隆房。少將光能。衣冠。

保安五十廿一新院高野御幸。始終參御共

人々。上達部殿上人布衣。自餘衣冠。別當一人衣冠。不渡前庭。藏人右衛門權佐實親衣冠。負狩籙。帶劔。柏夾也。

保延二九二鳥羽競馬。宇治丞相衣冠。出紅

飭抄中

打衣。前駟束帶。

一布袴。

執。聳若四方拜。非公事无止之時着之。直廬除目。攝政被坐簾中之時着之。

保安二三七忠通新博陸慶賀之後初出仕。直衣。檳榔。前駟等布袴。

康和二四雅實禊祭日。內大臣參齋院。御布袴。大文奴袴。蘇芳下重。野劔。

此分迄。撰者通方卿以自筆令書寫畢。已後分。逍遙院俗內大臣實隆以自筆令染禿

筆。右本限日數借用之故。文字等難見分事共。如本令書寫畢。重可清書者也。

飭抄中

一身具



冠

老懸

平緒

弓

笏

一冠。

烏帽

劔訪劔螺鈿薛繪野劔  
槌螺鈿薄塵地黑漆

帶有文無文紺青玉  
馬腦犀角牛角

箭箭筈筈羽樺矢  
尻隙塞表帶

履靴沓淺沓深沓半靴毛  
沓鼻切沓薰沓糸靴

紫綵紺地白地萌木地青  
綵紅梅檀綵香綵鈍色香

四位已上有文。地下五位已下无文。

年少之人用薄額。近代有事煩。不依年齒

用厚額。僻事也。中年人或用半額冠。儀額

隨人面立之。挿頭花之時。令放前細絲也。

纓閉之。不然爲風各別被吹成也。

保延三正一槐記曰。于時內大  
臣右大將。初着厚額冠。

年十  
八。

仁安三正八殿記曰。通親  
雅定。大納言殿久我。教命曰。

四品之後。可着厚額冠。入道殿中院。仰也。

猶着薄額冠。人間有歟。雖然不得意也。

柏夾事。

削白木端。其長如卷纓木。但不塗墨。以  
白可爲詮。非常警固時如此。或說。破

檜扇用之云々。破懸。纓末ヲ取テ。巾子ニ

引充テ。巾子ノタケノ程ヲ夾懸。末ハ在外。

ワナハ在內。卷纓指所ニ指也。卷纓ハ内ザ

マヘ卷。是ハ外ヘ折。玄隔不似也。不知人

多以卷纓爲柏夾。或裝束師云。柏夾有秘

說。木ヲ三ニ破懸テ。纓二枚ヲ夾テ卷。不

延亂也云々。兼日存知。如春日祭使若公

卿勅使。柏夾木塗云々。件木黑白共ニ。其長

不過一束之内云々。

一烏帽。

宿老之人薄塗。壯年厚塗。近年不論老少

着薄塗。不可然事也。古人着薄塗烏帽子。臨期平禮云々。額打樣。隨人面可有有意。

只以不屬目爲善也。晴時布衣。可用平

禮云々。而近代希也。入道相國公經。一門烏

帽額上ヲ取ヒサク。先祖阿古丸大納言。白

川院寵愛之間。烏帽ノサキヲ取テ常令引

寄給。其濫觴云々。資賢卿家。烏帽子後ヲ

スヘタリ。如此家々曲節之外。只以不屬

目之樣爲吉也。正佛房號馬。入道。曰。無此事云

々。

### 平禮事。

或書曰。雖中少將。備威儀日。多平禮。公保

卿少將二十許マデ常事也。基家。光能。及十四

近代其兩人外。近將不及見。基家又好此

事。

### 一老懸。

古今厚薄異也。古ハ事外薄也。今ハ甚厚。但

隨人可用事歟。檢非違使別常用厚老懸爲吉。老懸緒紫。或紺絲。

### 日蔭老懸事。

保安四十一十八宗能卿記曰。國司。入夜廻

立殿行幸。今朝着裝束參內。但卷纓老懸。

日蔭之間。尤有其二煩。今度嘉禎元年大嘗會。通成朝臣

賜皇后宮御給叙。從上四位。仍立叙列。老

懸懸日蔭上。或六位懸日蔭下。不可然歟。

### 一劔。

#### 飭劔。

四節會。大嘗會御禊。加茂祭使節用此劔。

近代多用代。如法飭劔。御禊行幸。節下大臣

帶之云々。近衛康治御禊。宇治丞相帶之。如法

飭劔。故師賴卿。師光元服之時授之。每見

此劔。淚難禁之由被記。故堀川左府劔云

云。飭劔裝束革多赤滑。而建久三正一院拜

禮。有藍革裝束并青革滑等云々。

嘉禎元十二十九御佛名次。或公卿有紫滑裝束云々。

又曰。古物飭劔。大畧木地云々。

久安二十一十四近衛或記曰。豐明節會了。叡子

內親王退出。群卿改劔撒魚袋。土御門大納

言宗輔。劔魚袋如本云々。是爲奇。同三十一

廿同記曰。同節會了。皇后自內裏出御白

川。余以下替劔弃魚袋供奉。

多案。先年左土院御宇。自嘉陽院豐明

節會了還御閑院。步儀。人々大畧改劔撒

魚袋。而權大納言忠房卿不改之。上皇數

度被責仰。松殿入道諷諫之由被申。雖

然御禊行幸之外。用飭劔供奉無所見

之上。不快之由被仰。仍被退出。了。今

見久安宗輔所爲。更以覺悟注之。

承保土御曰。節下同殿隱文巡方帶。飭劔不

用代云々。

一螺鈿。

任大臣。立后節會。行幸。列見。定考。元三中

出仕。公卿用之。或無止佛事拜賀等。卿相

用此劔。雲客節會之外不用歟。元三二三

日或用之。卿相時云々。少納言。八省輔。列

見。定考。行幸。節會等之時帶之。

正月二三日出仕用螺鈿間事。

保元四正二中山記曰。蒔繪劔。御堂御流者

三々日之間螺鈿劔也。然而非參議之間。不

可。然之由。故祖父相府令申教訓先人

給。

仁安三正二殿記曰。縫腋蒔繪細劔。內

府螺細劔。賴實。賴定螺鈿如何。定房。實家

蒔繪劔。公卿可帶螺鈿。殿上人可帶蒔繪

云々。

同四正三殿記曰。出仕。縫腋。丸鞞帶。蒔繪

太刀。



仁平元正三或秘記曰。今日余及兼長卿螺

劔太刀。有文帶。師長朝臣蒔繪劔。丸鞆帶。

愚案。保元仁平記。相叶仁安御記情歟。

事由卿相帶之。依有二宮饗疑也。殿上

人誠無其益歟。

賀茂詣用此劔事。

保延六四十五。忠通關白賀茂詣。予宇治。螺鈿劔。

大臣着レ之例也。

同五十廿五大殿賀茂詣。兩殿下螺鈿劔。有

文帶。大納言已下蒔繪。無文帶。

多案。賀茂詣。大臣可用此劔歟。

御八講用此劔事。

久壽元三廿院御八講。人々蒔繪。無文帶。雅定

大臣中院殿帶螺鈿劔。

競馬日帶此劔事。

保延四四廿七仁和寺競馬行幸。宇治丞相

花柑子螺鈿劔。盧橘紺地平緒。

相撲節出居將帶之事。

保元三七或秘記曰。出居將等皆闕腋。螺鈿

劔。或槌。

拜賀用此劔事。

永久二二九內大臣拜賀。蒔繪螺鈿劔。鸚鵡。

保延二十二二十三宇治左府于時內大臣。慶申。金作

堀物蒔繪螺鈿劔。有槌。

久安五八廿五三位中將兼長。慶申。或秘記

曰。用金劔。蒔繪螺鈿。平緒。紫綵。帶。有文。

仁平三十二廿七中納言中將兼長慶申。蒔

繪螺鈿劔。有文帶。

多案。公卿之後拜賀。用螺鈿劔。有文帶

歟。

着座用此劔事。

保延四十一廿二字治左府着座。蒔繪螺鈿

劔。摺三鸚鵡。有文帶。

大嘗會御襖帶弓箭之人帶此劔事。



永治元十御襖。或秘記曰。帶弓箭之人。帶

螺鈿劔。不付魚袋。

永承土御門曰。帶衛府之人。胡篋。螺鈿劔。

不付魚袋。按門依例

治曆江記曰。衛府公卿帶弓箭之輩着螺

鈿。不付魚袋。

螺鈿劔樣々。嘉禎元二十九御佛名次。

或人語曰。近衛前關白家。花橘螺鈿劔殊

勝云々。沉地櫛半玉以金付之。葉青瑠

璃。花銀云々。永久三三朝觀。新大納言

寺殿帶金作紫檀地鸚鵡螺鈿劔。同二朝

觀。新大納言同人槌螺鈿劔。保安三朝觀。

殿下金作紫檀地螺鈿劔。永久二六任

大將。內大臣法性寺紫檀地鸚鵡螺鈿劔。保

延二十二九任大臣。宇治。蒔繪螺鈿孔雀。金

作劔。大殿□綵平緒。同正廿一母屋大饗。

宇治左府紫檀地螺鈿劔。水精柄。仁平元

正廿六內大臣大饗。宇治左府。水精螺鈿

水精柄。此劔。治曆三正尊者日京極殿所

用也。見御曆。保延四二三春日祭。上卿

宇治丞相金作沃懸地劔。孔雀鸚鵡乘唐鞍

時不用槌螺鈿事。堀川嘉保二十四十七江記曰。

美作守自此亭出立。雅俊劔右兵衛督借之。

槌螺鈿水精甲也。御襖前駟者。用槌螺鈿

歟。乘唐鞍兼經時。一向不用槌也。嘉禎三

正三臨時客。左府被帶沉地鸚鵡金作螺

鈿劔。累代物云々。

一蒔繪。

卿相雲客帶劔之人多用之。但可帶蒔繪

之公事。雖有通用螺鈿之例。可帶螺鈿

劔之公事。無帶蒔繪之例。余家賀劔在前

內府許。具平親王劔云々。海部白蒔。子孫始

拜賀之時。借請用之也。

葦手劔執柄家被用吉事事。

寬德三十三土御曰。從<sup>後伶</sup>殿賜<sup>御通</sup>葦手劔平緒

二筋。明後日侍<sup>後房</sup>從拜賀料也。

保延二十二宇治丞相參結政。蒔繪劔。<sup>葦手。銀作。</sup>

<sup>御堂御物云々。兼  
宣旨日所帶也。</sup>

保安四三十一新闕白令賜<sup>忠通</sup>隨身之後申

慶。射懸地蒔繪細劔。殘葦手也。

同日公事不替劔先列事。

保延六六廿三宇治。列見。不替劔參直物。

永治元五十七同人記曰。列見。右大將實能。

不改劔參最勝講云々。尤可然事也。

天養元十一九考定了參位祿定。不替劔。

<sup>多案。</sup>螺鈿多雖不改之。於飭劔者必可

改之歟。上皇仰留<sup>二</sup>耳底<sup>一</sup>。

有樋劔事。

仁安二正賭弓。右大將銀樋劔。<sup>今案。老少  
或用之。</sup>

瑠理柄劔。

保安四三廿九臨時祭。<sup>忠通</sup>攝政金作樋劔。蒔<sup>唐</sup>

草。瑠理柄也。

瑠理水精柄不用<sup>後伶</sup>騎馬事。

康平三三十二土御曰。齋院入紫野。新大納

言師實勤仕前驅。紫檀地村螺鈿中鴛鴦飛

蛟柄。<sup>後通</sup>殿下仰曰。騎馬之時不用水精瑠理

者也云々。仍今日用此劔。

嘉保二四十七江記曰。美作守自此亭出立。

劔。右兵衛督借之。樋螺鈿水精甲也。水精甲

騎馬之時雖不着。近例皆着之。猶如舊記。

騎馬時不薰香歟。

沃懸地事。

宿老之人檢非違使別當等用之。但中院大

理問答抄。蒔繪沃懸地。共有加點。彼是可

用歟。但用遠文蒔繪云々。<sup>實行</sup>

仁平元五廿四最勝講。太政大臣帶沃懸地

劔。

<sup>公能</sup>同四三卅大理出行始着劔。沃懸地。

建久元故殿大理御出行始。沃懸地劔。

拜賀帶。蒔繪太刀事。

保延五十二廿七右大將實能。慶申。着蒔繪劔。无文帶。或秘記曰。尋常着螺鈿劔。而彼一門慶申日。着蒔繪劔。無文帶。

蒔繪劔樣々。

嘉禎元二十九御佛名次。或公卿語曰。京極大殿常被帶有黑樋劔。付劔銀細樋上下渡之。中黑地蒔繪。處々唐草。上下沃懸地云々。樋寄上方度之。古人不執蒔繪劔。執螺鈿劔云々。此劔有二。一腰傳在。花山院云々。稱川樋劔者。樋中畫種々繪。其上伏水精若瑠璃云々。

保安四二三新關白被下萬機詔。蒔繪細劔。孔雀。金造堀物也。

保延四十二廿七。或秘記曰。知信朝臣爲大賴長殿御使持來細劔。沃懸地。一有樋。共蒔繪。曰。沃懸地劔。

者。故京極大殿御着座之時。渡御長實卿宅。

大殿內々給御劔於長實卿令奉給。當時關忠通

白殿下御着座之時。渡御東三條。又大殿令

奉此劔給。然者今度依爲祝物所令奉

也。然而納言度令奉了。貴殿御物定也。同

物兩度。頗不得心。仍副他劔一令奉也。

件劔故大殿常所帶給也。相傳。當時大殿常

令帶之。仍自今已後。貴殿予也。常可令帶

也。予答曰。賜心テ恐悅不少候。

一野劔。蒔繪。木地。螺鈿。蒔繪螺鈿。尻鞘。

近衛次將。外衛佐等常令持之。束帶出仕之時。相具劔。

率爾隨役之時。多用此劔也。或宿老公卿。

高位之人常令持之。或付護。公卿將遠所行幸

之時。着蒔繪螺鈿野劔。木地。次將行幸之時

多用之。而近代。次將或用蒔繪螺鈿野劔。

云々。且者御襖。嘉禎。弁少將實雄。入道相國末子。用蒔

繪螺鈿野劔云々。定有其例歟。可尋宿老。



次將騎馬之時。宿衣之催。着束帶用革緒野劔。不具隨身。或又具隨身。常事也。修正御幸。多如此。遠所使節之時。入尻鞘也。

雖相具布衣隨身。主人并隨身不帶野劔例。

平治元二十中山記曰。關白春日詣余。忠親余着布

衣。隨身重不相具。依率爾貧將力不及之故也。又非榮花乎。新中將賴定朝臣。又如予儀。少將兼雅隨身。雖着染裝束不帶劔。仍又不被帶劔。

蒔繪螺鈿可用遠所事。

仁安二十廿三殿記曰。大納言殿久我。被仰曰。蒔繪螺鈿。遠所行幸可用。木地螺鈿。京中可用者也。

大將直衣始用此劔間事。

仁安三八廿二殿記曰。爲御使參花山院。忠雅廿四日着直衣。可參院。土御門殿拜賀翌日。令參宇治。着直衣。毛車。令帶劔笏。而

今度令相具之由在御記。今度此定可候歟。廿四日御直衣始。參院給。令帶劔笏御。蒔繪野劔。案。雅通八月十日任內大常劔也。臣。十一日兼右大將。

多案。土御依非公所參。不被帶劔歟。久

我殿依院參令帶劔笏給歟。雅定

保延六十二九左大將中院。師房直衣始。不帶劔

笏。但令持云々。土御門右府例云々。有興云々。

今案。中院殿追土御門殿例。不被帶劔笏云々。猶有其故歟。

永久二二十四新大將。法性寺殿。直衣始。出衣。着野

劔把

中納言中將直衣始用此劔事。

仁平三十二廿八中納言中將兼長直衣始

出衣。帶野劔。小狐把。慶賀。

久壽元十一廿五中納言中將師長直衣始

出衣。帶野劔。小狐把。笏。



試樂日舞人或帶野劔。

仁安二九五殿記曰。參花山院。被仰曰。

日吉御幸試樂來月廿一日。闕腋。或帶野劔。或細劔。

大將內裏燒亡帶此劔事。

保延四二廿四內裏燒亡。自東三條行幸白

川殿。楓長。予帶野劔。草緒。蒔繪。敝柄。

尻鞆事。

仁安二九五殿記曰。參花山院。仰曰。尻

鞆事。舞人之時。竹豹皮不憚之由。故法性

寺殿被仰云々。可用虎皮也。廿日參殿。久

我。申承雜事之次。申曰。舞人之時。可入虎

皮尻鞆之由內府被命否如何。被仰曰。必

不入虎皮。竹豹ヲ入也。予勤仕舞人之時。

故播磨入道尻鞆ヲ借用。是竹豹也。雖然虎

皮又神妙歟。

仁安二十一廿一賀茂臨時祭。同三石清水

臨時祭舞人之時。故殿用竹豹尻鞆給也。

同四二十二殿記曰。四位用豹皮。五位用虎皮云々。

仁安四正廿六公卿勅使。別當時忠。衣冠。

帶野劔。入虎皮尻鞆。

細尻鞆事。

或書曰。布衣騎馬。殊刷時。御幸已下。執柄

宇治供奉。若親姓之人。如公卿勅使相伴時。

帶野劔。或虎皮細尻鞆云々。

諒闇劔尻鞆事。

保元元或秘記曰。水豹尻鞆。無文青草裝束。

左右衛門權佐惟方。賴憲。尻鞆。虎皮。

一槌螺鈿。

槌螺鈿者。普通之樣。蒔繪槌中摺貝也。

或說。稱槌螺鈿者。有槌螺鈿也云々。此

事不得其意。蒔繪槌事。依有螺鈿通用歟。

螺鈿有槌者。何有通用之詮哉如何。先年

隱岐院御逆修御佛事日。通方。予爲三位中將。用

樋螺鈿樋ニ景菱ヲ摺。普通ヨリハ廣。嚴重ニ見也。入道相國帶螺

鈿鈿之由傍難云々。其時上皇仰曰。樋螺

鈿通用物歟云々。仍人々閉口之由。後日聞

之。

一薄塵地。

心喪服。用此鈿云々。

承保元十廿六土御曰。着心喪服。上東門院御服也。

帶薄塵地無文紫革裝束。紺地無文平緒。

一黑漆。

諒闇帶之。金具等拔替吉服劔具也。裝束

無文紫。或藍革云々。劔柄白佐女如常。重

服同黑鞘。金物黑漆。白革裝束。柄黑佐女

云々。

保元二十一廿八中山曰。劔柄黑佐女。鞘黑

漆。金物黑漆。白革裝束。柄金物等塗墨用

之。忠雅督殿如此。

一平緒。

紫端。劔裝束紫革。繡不定。孔雀。尾長鳥。竹桐鳳

凰。或唐花。四季花。但黃鳥神妙物也。或青

端相交之時。春用之云々。此平緒壯年人毛

用。宿老人毛用。但繡可有用意事也。近代

大略不論日夜。每公事用之。無念事也。踏

哥節會可用之由。見保延五正十六宇治左

府記。

宿老人用紫平緒例。

建久三正一拜禮。中山內大臣。忠親紫端。縫黃孔雀。關白。

紫端平緒。

紫端平緒劔裝束間事。

保延四八十七槐記曰。行啓。師賴卿曰。只今

蒙勅授宣旨。御劔暫可申請。問曰。螺鈿歟。

答曰。蒔繪也。不供奉行啓。可奉仕若宮前

駟。予曰。劔裝束青草。平緒紫端何事有乎。答

曰。紺地何事之有乎。即召遣之。

嘉禎元十二十九御佛名次。或公卿曰。故普

賢寺入道命曰。用紫端之時。必非劔裝束紫革歟。故如何者。代々所用劔等。不改裝束革。又件帶劔之日。用紫端之由被注。以之案之。紫端平緒。劔裝束藍革。無難歟云云。

參案。此事尤可。有其謂。保延左府案已相叶者歟。古人言有其興也。

端平緒樣々。

永久三二九內大臣拜賀。紫端平緒縫鶴。

保安四三三新關白萬機詔被下。紫端平緒。

鶴松枝千鳥相交也。

保延四十一廿三字治左府着座。螺鈿劔。紫

端平緒。縫松鶴千鳥等。

保安四十五大嘗會御襖。忠通攝政平緒紫端。

縫黃鳳凰。

保延二十二九任大臣。宇治。紫綵平緒。孔雀。別當也。

仁平元正廿六內大臣大饗。宇治。紫綵黃鳳平

緒。

保延四二三春日祭。宇治丞相上卿。紫綵黃

鳳平緒。

紺地。劔裝束藍皮。

古人多繡祝物。唐鳥。白黃。若唐花。能見繡

也。此外千鳥。梅。雉。若鶴。松等多繡之。近

代繡種々新物。不被甘心事也。執柄家繡

葦手平緒。多慶賀時用之。件平緒裏。鷹司

殿自令付給之由。見宇治記。御堂入道平緒

云々。定繡祝言歌情歟。心喪平緒無繡云

云。

承保元十廿六土御門殿令着。心喪服給之

時。紺地無文平緒云々。或壯年之人紺地平

緒。以絲置文云々。大理平緒。遠文獅子蠻

繪。或黃鳥云々。

舞人用紺地平緒古物事。

仁安二殿記曰。大納言殿仰曰。汝可用希有



紺地平緒。近代人々用美麗平緒。不知故實也。繡小鳥。小草。竹桐平緒也。

仁平元十一廿五。舞人隆長。用紺地平緒。

小忌人用紺地平緒事。

久壽元十一十九豐明。右大將兼長卿。紺地平緒。

保安四十一大嘗會。國司宗能朝臣着仁小忌。

彼人記曰。紺地平緒。小忌舞人之時。所用

紺地平緒也。

御卽位着甲次將可用紺地事。

仁安三十三殿記曰。大納言殿久我。敎命曰。

着甲之日。用紺地平緒云々。

紺地平緒樣々。

永久四正一。忠實殿下紺地平緒。以白絲縫忠實蠻

繪也。

同三三朝觀。新大納言紺地平緒。孔雀蠻繪。

保安三三朝觀。忠通殿下紺地平緒。縫白鳥許也。

保安四三十一新關白令賜隨身之後申

慶。紺地平緒。縫革手。

保延二十三宇治左府于時內大臣。慶申。紺地

平緒。繡梅丸文。

着火色下襲。用紺地平緒例。

保安五正賂弓。內府着有仁火色下襲。用紺地平

緒。故實也。

白地平緒。劔裝束藍革。

稱小忌平緒。着仁小忌之時用之。繡桐竹若

小草等云々。是小忌文也。

平治或秘記曰。大嘗會辰日。着仁小忌平緒。依

無其實。用紺地。人々皆如此。或用綵。抑

小忌平緒者。白縫小忌文。今度所不見及

也。

青綵。或稱襦綵。劔裝束藍革。

四五月比用之。縫藥玉。宸勝講出居將。好

事次將用之云々。或縫卯花。燕等。或縫花



橘。瞿麥。又縫黃孔雀。色々唐花。

保元元七相撲節。或記曰。出居次將。或青朽

葉下襲。青綵平緒云々。

紅梅地。劔裝束  
紫革。

多者賭弓。臨時客。着火色下襲之人用之。

繡遠山小松等。後堀川寬喜臨時客。爲尊者當時

右府實氏公。着火色下襲用。此平緒。其色事外

濃薄ナル程ヲ染歟。件平緒繡遠山。

仁安二正賭弓。右大將紅梅地平緒。縫白  
梅。

萌木地。劔裝束  
藍革。

春用之歟。予見之。繡紅梅。白梅等。

櫛綵。劔裝束藍革。  
或櫛革。

多者九十月用之。繡菊。龍膽。或繡紅葉。予

家用來賀平緒。櫛綵歟。着紫綵平  
緒變歟。具平親王平

緒云々。繡菊。枯野等。稱左土院御平緒。故

雅清卿。後堀川貞應御禊勤仕大將代之時用。櫛

綵平緒。縫黃菊。白菊。大嘗會。午日。  
嘉禎。於東廊

座雜談之間。實氏右府曰。去御禊。公佐用櫛綵

平緒。土御門大納言問曰。繡如何。答曰。菊

龍膽也。又問曰。裝束革如何。櫛革有綵云

云。右府曰。前後緒不依劔裝束。而用櫛革

之時。必用櫛革之後緒云々。不得其意

云々。首書

或人曰。櫛革者。藍革上ヲ染也。文黃也。

薄櫛綵。

未見其躰。或公卿曰。有此平緒云々。逐可

勘入。

香綵。

未見其躰。或公卿曰。有此平緒。逐可勘

入。

鈍色。

諒闇之時用之。重服之人同用之。但無總

歟。

保元二十一廿八中山記曰。重服平緒鈍色。

絹帖之。自普通平緒ハ三許分狹帖之。無總并繡。

香。

諒闇之時用之。而貞應度諒闇。故通具卿用。

香平緒。人々傾奇。仍今度諒闇。藻壁門院。後堀川院。兩度諒闇。

也。左金五弃置。予用之。後日披見中山內

府記之處。保元故久我大臣殿令用給。劔裝

束無文紫草云々。甚有興事也。今度予劔裝

束又如此。自然相叶先祖所爲。誠是愚者之

一得也。

一帯。付魚袋。

有文。或稱隱文。有二。巡方圓友。

節會。行幸。行啓。列見。定考。拜賀用之。無

止佛事。賀茂詣等。高位之人或用之。其文

鬼形。獅子形。唐花。非一。眞實玉火ニモ不

燒云々。予所持帶。故兼忠卿家燒亡之時。

在其中。一切無損氣。先院隱岐。御參籠八

幡之時。先年被召隱岐院了。件帶鬼形。

拜賀用有文。

保延二十二十三字治左府于時內大臣。拜賀。有文

帶。螺鈿劔。

小忌人用有文。

久壽元十一十九豐明。右大將兼長卿。有文

帶。

崩繪劔用有文例。

保安四三三新關白萬機詔被下。有文帶。崩

繪劔。

童殿上人用有文事。

久安元正四槐記曰。菖蒲丸。童殿上所借用

之有文。右大將實能。帶之。頗如尋常帶。攝政殿。余

等借用。故入道右大臣殿宗忠。小帶。而件帶

先年爲當今令用給。自院被召云々。今日

行幸。令用件帶給云々。

馬腦。

四品用之。舞人之時用之。着小忌之時。或用之。臨時祭舞人等依用之。馬腦有員。仍所役殿上人不用之。故實云々。

仁平元十一廿五槐記曰。舞人隆長。馬腦帶。小馬腦。

久壽二四廿一同記曰。賀茂祭。皇后宮使憲

親朝臣。明日用小馬腦。

小忌着馬腦帶。

保安四十一大嘗會。宗能着小忌。馬腦帶。

犀角。付巡方圓友。

巡方。節會。行幸之時。侍臣用之。圓友。常用之。

用之。

仁安二十廿一日吉御幸試樂。後鳥羽新中將賴實

用巡方。

久安四六廿三侍從兼長申慶。着束帶黃朽

葉。丸軻。在二法性寺。

久壽二四廿一賀茂祭。多子皇后宮使權大進憲

親用鴛鴦。通天。

久安五十廿六師長昇殿。帶巡方。狛錦。

青瑠璃。稱二紺青玉。

先年商人持來之。故母儀三品殿取之。賜

予。但何事二可用ト云事不分明。而經賴

卿記。次將節會用之由注之。

牛角。稱二烏犀。

地下六位檢非違使等用之。重服之人用之。

諒闇之時用之。但近代公卿以下多用犀角

帶也。

保元二十一廿八中山曰。重服後出仕。帶牛

角云々。

魚袋。首書。

實錄曰。三代以革爲之。謂之笄袋。魏易

之爲龜。唐高祖給隨身魚。三品以上其

飭金。五品以上其飭銀。故名魚袋。賜紫

則賜金魚。賜緋則賜銀魚。



公卿金魚袋。四品以下銀魚袋。付二帶第二石右方。或第一石。隨

人之肥瘦。付緒紺糸或紫四組。黑漆或朱漆云々。

云。節會大嘗會御禊等付之。

大嘗會兼國司之人標山引日不付魚袋事。

保安四十一十八宗能朝臣兼國司供奉。着

小忌。不付魚袋云々。

節會大外記大夫史不付魚袋事。

保安四或秘記曰。大嘗會大外記師遠。大夫

史政重。用巡方。但不付魚袋。大外記大夫

史者。雖五位身。不付魚袋云々。可尋由

緒。

首書外記不付魚袋事。内々事次問師季朝

臣。無別子細。師安マデハ付之。近代不

付云々。五位已上可付之云々。釋奠ニ

モ都堂座五位外記史可着靴也。而近代

不着。是又畧儀云々。

齋宮入野宮諸司前駟不付魚袋事。

仁安二九廿一殿記曰。初齋宮入野宮。或付

魚袋。家習不付。

仁平三九廿一兼長卿勤仕前駟。無魚袋。

一弓箭。

弓。

蒔繪可隨簾敷。各別又不可有難。或摺貝

云々。彌。銀堀物。或塗物。其文隨蒔繪。取柄。錦。或御綾。有伏組。取柄

上下卷組。赤或紫。宿老之人用白檀紙并色紙。壯年

老少有。或用真樺。質德建曆御禊。中將資平朝臣

用之。其色紅梅色也。件度少將爲家用青薄樣。後

日及沙汰。無所據之由。上皇被語仰也。中

院大理問答抄。真樺。白樺。共有加點。彌上

下藤加點。鹿角加點。弓上下彌。銀堀物。中院大理

物具問答。鐵散物有。加點。卷組紺糸云々。

一箭。

簾。

打任天所用。公卿蒔繪。或螺鈿。非參議次將木



地螺鈿。而近代多用木地蒔繪。無伏輪。大將用之。宿老之儀也。中院大理問答抄云。沃懸地。蒔繪。兩樣注之。但沃懸地。有加點。

諒闇簾。

保元元或秘記曰。黑漆簾。無文青革裝束。箭多波禰。以鈍色絹押之。普通押錦之所也。

簾。

黑漆細能見也。上差有水精鐫。中院大理物具問答抄。鐫牛角二筋之由有御加點。

筥。

皆水精。中院大理物具問答抄。牛角有御加點。

諒闇箭波須事。

保元元或秘記曰。角波須。

羽。

大將已下次將切生。中院大理物具問答抄。切生摺尾注之。摺尾有御加點。

諒闇箭羽事。

保元元或秘記曰。所存霞尾羽。

表帶。

公卿蘇芳綵。次將蘇芳青相交綵。春紅梅地。

青文。夏青地。紫文。秋黃地。青文。好事之人如

此用。但常ハ蘇芳青相交綵也。有水精露。

或瑠璃有藥。宿老之人無露云々。中院問答抄。蘇

芳綵。無露。有加點。

引表帶事。

諸人所知遠所。日吉春日等類也。行幸引之。而仁平

二正三或秘記曰。朝觀。小六條院隆長依爲

五位結表帶云々。

多案。壯年五位。次將引表帶。張弓歟。引

表帶之時。或結箭。或結簾上。師鈎片鈎

有兩說云々。

樺。

眞樺。白檀紙。色紙。壯年之人紅梅。隨年有淺深。

或用薄樣。

建曆御禊度。中將資平。用眞樺。紅梅色也。少將爲家

用青薄樣。後日及沙汰。上皇仰曰。無所據

云々。凡與弓無各別之儀。中院大理物具

問答抄。白樺有加點。

矢尻。

金銅上差。加利末多。中院大理物具問答抄。

鐵。散物。共有加點。

隙塞薄樣。

薄樣。隨老少可有有意。打任テハ紅神妙

物也。大理白色紙。若檀紙云々。

後緒。

藍革紫皮共用之。打任テハ紫革用之。押

蝶小鳥貝。吹反錦皮。用檀綵平緒之時。劔

裝束檀皮者。箭後緒同檀皮云々。頗不知其

故。右府說也。

一笏。

音雲

唐會要曰。笏。周制也。周禮。諸侯象。大夫

魚鬚。又竹。晉宗以來。謂之手板。魏以後。

五品以上用象。武德四年七月六日詔。五

品以上象笏。六位以下竹木笏。

予所持之笏。法性寺關白賜清隆卿之笏。雅

隆入道授予。以之爲本樣也。甚持吉。入

道相國賴用之。當時右大將家此樣也。頭廣

厚。八重而持惡也。當家拜賀所用之親王御

笏。薄テ持吉。古物如此歟。手本皆ツヒタ

リ。往古人拜趨以之可知歟。

久壽二正一槐記曰。節會。今日所用笏。殊

有光明。押笏紙之時。可損其光。放笏紙拭損光

也。仍於高陽院借請俊通笏。押笏紙。將

着陣。時把件笏。重服之人笏如常。保元或

秘記曰。但不瑩云々。

一履。

靴沓。

華氈錦。帶革有金物。但錦色。隨老少可用。一歟。可有二用意事也。節

會。付立后任大臣。行幸。行啓。列見。定考等着之。

元日出仕之人爲見任者。雖不參節會令持之故實也。

諒闇靴沓。

保元元或秘記曰。靴。無文革緣。色目普通。靴帶

不挿。靴氈淺黃絹。

淺沓。

禁色之人沓敷。用織物。表袴之切云々。但堅文浮文可隨人也。不

然之人用平絹。皆押文。爲不混屬也。但大

臣若大將不押文。不混屬故也。執柄家凡

不押之歟。

祭使着淺沓事。

仁安三四十八近衛使左少將脩範。淺沓。

重服沓事。

保元二十一廿八或秘記曰。今日初出仕。裝

束重服。赤沓。裏鈍色。

深沓。

政始若深雪深雨之時用之。無華旋有緣。

無文案革。

半靴。

直衣。衣冠。布衣騎馬之時用之。華氈錦事

如靴沓。

毛沓。

或古老抄曰。布衣騎馬。殊刷時。或毛沓。有

帶。如靴帶。

多案。公卿勅使。始終扈從之人。可用歟。

鼻切沓。或稱鴈鼻。

臨時之祭。若諸社行幸御幸舞人試樂日。或

用此沓也。土御門大納言。于時中將。先院。隱岐。八

幡賀茂御幸試樂日。着火色下重用此沓。

彼時予勤仕五位舞人也。着例淺沓。

大嘗會御禊女御代前駟用此沓事。

永治元御禊。女御代前駟廿人。雁鼻沓。六位



鼻切沓。

多案。永治記。五位前駟雁鼻。六位前駟鼻切沓卜注。若有差別歟。可尋。

藁深履。

保安五二十兩院雪見御幸。新院御烏帽子。

直衣。出衣。藁深沓。有華旋。

飭抄下

一禮服

冠

裳

玉珮

烏皮履

一近衛次將甲

一小忌

諸司小忌

大袖小袖

綬帶

牙笏

〔鞆〕

大禮若豐明節會小忌小忌袍赤紐日蔭心葉半臂

舞人挿頭小忌付赤紐摺袴付下袴津實利糸下重付牛臂打衣付袖單糸鞋

一乘物具

車唐車糸毛廂檳榔庇網代庇網代檳榔飭車八葉牛車

鞍唐鞍和鞍移唐笠

一禮服。

大袖小袖。同色。

橡。麴塵。紫。有後堀川三色。貞應度通具卿着麴塵

色。予橡。當家所用之禮服。在鳥羽寶藏。其色橡也。仍用之。宰相中將雅

清着紫色。其地大畧唐綾歟。單袴大口等如

尋常。

裳。

水色也。其地穀。

冠。二儀實錄曰。自黃帝制爲冠冕。

其圖在近衛永治元或人別記。近代所用略物也。

綬。

如平緒組也。貞應予帖唐綾令畫繪也。人



人所爲大略如此。

玉珮。

繪樣在永治別記。

牙笏。

貞應度多以木如牙笏作之。先例又如此

云々。

從治泉

師房

賴通

永承六二十土御曰。參殿。有牙笏。事次殿

仰曰。上下共方。是天子御笏也。是朝拜宛

御用者也。其外神事之時。多用給上圓也。

敬神之心歟。

天曆御時。廣平親王參入之時。主上賜彼親

實賴

師範

王上下方御笏。其時小野宮大臣。九條殿。傳

聞此由致傍難云々。

鳥皮履。

其圖在永治別記。

鞮。

白地紫地等小文錦。

一近衛次將甲。

仁安三三廿殿記曰。御卽位。着裝束。先着

大口。次着單并帷。次着表袴。次着闕腋。

不着半臂下重。雖夏着冬袍。纔着。添尻。其上着

或說。夏着下重。爲隱身透也。纔着。添尻。其上着

甲。腰二結。世比衣。不用帶平緒也。結。世比衣

記。大納言殿敎命曰。着甲。次綬。冠卷。相具平胡

之。日必用。紺地平緒云々。次綬。冠卷。相具平胡

錄并靴沓。人々甲多用金銅。予押金薄。次將

皆張弓。實守不張弓。依大納言殿敎命也。

一小忌。

諸司小忌。

建曆度予見之。麻布龜惡物也。四幅。身二幅。袖左右

各一幅。凡四幅也。前方兩方引合テ插帶。前方

以紙捻閉之。自左方引融上手也。今度通氏朝臣白布

美麗也。如形摺之。或後方自帶下引融。籠

三角中云々。

大嘗會若豐明節會小忌袍。

着次第。只如闕腋。以袍替小忌計也。

今案。下襲尻ハ廣。小忌尻ハ狹シ。面ニ疊成方。引寄テ折之懸後。尻折目本ヲ頗右方ヘ引出。令小忌多見也。

雖非衛府二條至于小忌闕腋。

但平治元大藏卿長成着位袍。弁官皆尻長。

上官纔着。嘉禎元大嘗會四條。大外記師兼着纔

着小忌。壽詞奏齋主着縫腋小忌。

保安四大嘗會。或秘記曰。小忌衣事供奉。此

事諸司等皆着之。但此中右衛門權佐實親。

大外記師遠。史纔着也。齋主公長縫腋。

平治或秘記曰。小忌事其舁如闕腋。但身一

幅也。用ニ狩衣寸法。但前尻如ニ闕腋一也。白布ヲ粉張ニシテ摺レ之。後瑩クナリ。無裏。單布也。無

披手本ニノ縫越之。摺樣。形木文小草梅柳水麩雄蝶小鳥等也。續

飯ヲ裹布テ。形木上ヲ叩テ。布ノ面ヲ上ニ

テ押付テ。覆物踏之。其後形ノ上ニ山藍ヲ

葉許取集テ摺之。木ニテ以墨硯ヲ摺樣ニ

摺也。朽墨吉ト云々。無山藍時用麥葉。目

波志木云々。頸紙蝶小鳥小草許摺也。身後長五摺之。或三長。同前三長摺之。下臑不摺袖。合上自前後摺之。或懸縫目一摺之。或大袖摺レ之。端袖小草許摺レ之。赤紐。

濃打并蘇芳打也。細帖之。赤紐。長一丈四五

尺。前ニ濃蘇芳ナル各一筋。ニナニ結也。後

又如此。并四筋。

仁安三十一十九豐明。兼長卿着着ニ小忌右肩。舞人着左。依ニ袒裼一也。小忌。赤紐。

平治秘記曰。赤紐。濃打并蘇芳打也。有下繪

押貝。或只所々押貝計。或又羅ニ用縫物。

付有ニ其便一右手本。舞人赤紐者付左。小忌者付右也。手本

縫目ノ上ニ付レ之。前自ニ針所引貫。

日陰。

組タテ一丈二尺計ト云々。細圓組。或分組。

平治秘記曰。日陰縹。結冠巾子。結目有縷上。組用ニ青糸。又

以糸造之。小枝少々在圓結。白組。若少人或用紅梅

レ之云々。予用ニ生縹。又白相交又用ニ萌木云

云。今度。以細絲付纓也。冠ノ上結。前方二筋。後方二筋垂也。或三筋。

今度嘉禎。大嘗會。通成朝臣用青糸日蔭。

實基卿曰。尤有其謂云々。

心葉。

平治或秘記曰。心葉。梅枝三寸計也。予金枝

付梅花貝。今來以續飯爲藥。或銀枝付同

貝。若蘇芳貝破。或用銀。或結花紅梅白結。

本ニ頗前方ニ付テ纓ヲ副。巾子立之。左右

方各一枝也。或狹上結四枝立之。但件希也。

半臂下重如常。禁色之人羅。不。然之人濃打。

打衣。

仁平三十一十九豐明節會。兼長卿小忌。濃

打衣。

久壽元十一十九同節會。右大將兼長紅打

衣。

平治秘記曰。若少人或着打衣。

柏。付單衣。

仁平三十一十九豐明。兼長卿小忌。裏濃紅

梅。柏二領。濃單衣。

久壽元十一十九同節會。右大將兼長紅柏

一領。紅單衣。

平治秘記曰。柏或着淵醉白衣。繆上。也。予只

着薄色柏一領。

表袴。

仁平三十一十九豐明節會。兼長卿小忌。堅

文。須用。表袴。紅裏。浮文。

久壽元十一十九豐明。右大將兼長浮文表

袴。

舞人。

插頭。

臨時祭。於禁裏賜之。諸社御幸行啓。或於

社頭賜之。或於仙洞賜之。先院隱岐。八幡

御幸。自鳥羽南殿有御出立。卽於御所賜



之。行幸之時。於社頭賜之也。

試樂日插頭事。

仁安二十廿三日吉御幸試樂。殿記曰。少將隆房插頭指右事也。而左如何。後日大納言殿仰曰。使指左。而爲違指右也。試樂日指左有何事乎。

小忌。付赤紐。

小忌文竹桐。夏不瑩之。冬瑩之。故實。多者着拜領小忌歟。但年少之人或私調之着用云々。赤紐用公物。

仁安二十一廿一賀茂臨時祭。同三四三石清水臨時祭。故殿着拜領小忌給也。但頸紙ヲ指改云々。

仁平元十一廿五秘記曰。臨時祭。舞人隆長少將。青摺私調之。當色頸紙不合期故也。赤

紐有螺鈿。着左。

摺袴。付下袴津賀利糸。

同以公物着用之。但下袴津賀利糸私用意之云々。

仁安二十一廿一賀茂臨時祭。同三四三石清水臨時祭。用公物。但三乃□下襲私用意。雖拜領襲袴不着之。近年人々着狩袴云云。津賀利組。私儲之。青白二筋。

仁平元十一廿五或秘記曰。舞人隆長摺袴。當色津賀利組私儲之。濃袴。私儲之。當色袴。龜惡之故也。

摺袴腰夏冬無差別事。

仁安三四三石清水臨時祭。殿記曰。摺袴。无腰并津賀利組。重尋遣。須之持來腰生村濃。大夫殿仰曰。雖夏晴之時腰張衣也。生衣不知案内公卿所爲歟。

依新制摺袴腰可撤金銀珠玉事。多子

仁安四二十二殿記曰。皇后宮平野行啓。摺袴各錦腰也。凡驚人目。過例事。襲袴多以紅。五重七重許有之。少々濃袴也。及深更。



光雅送書狀曰。錦腰金銀之類被止了。早可撤。又雜色可付花者。風流可止。已以支

度相違。是國家之煩歟。兼日無其儀。如此甚不便也。大臣殿仰曰。承曆上皇御覽。甚

以優美也。早可撤之由被仰云々。於御前

被撤金銀。是非其儀。給了後撤。以外事歟。

大相國錦腰不可撤之由被示。承曆不撤。

然而大臣殿猶錦字被載之旨被仰。然而不

撤。同十三日行啓。未明出立。着裝束。自

夜前着入之。而俄金銀玉表着。風流錦腰

可停止之由。稱院宣大進光雅示遣。仍忽

撤之。以組絲用。令撤玉等。錦腰依大相

國之敕命不撤之。承曆雖被止金銀玉表

着等。不撤錦腰云々。按上皇疑童之誤。

下襲。付半臂。

同可用公物也。

仁安二三臨時祭。通規故殿勤仕舞人。令用公

物給也。或壯年結構之人。私調之着用。非無先例。

仁平元十一廿五或秘記曰。臨時祭。舞人隆長。半臂常色下襲。

舞人半臂躑躑不可然事。

仁安三十二十六後土曰。通規今年舞人半臂躑

躑云々。未聞事也。仍着私物。或着伴半臂。

伊保定宗着之云々。自餘私物云々。

打衣。付袖。單衣。

私儲之。夏赤帷上ニ張單ヲ付也。打衣如

冬。或宿老之人着袖。不着打衣。

仁安三十一廿一賀茂臨時祭。殿記曰。私相

儲紅打衣一領單等也。

同三四三同御記曰。赤帷單衣。紅張單也。付帷上。紅打

衣。有裏。是私物也。侍從伊輔。左兵衛佐公

網。着濃打衣同單衣。

同四二十二殿記曰。皇后宮平野行啓。濃打

衣。以泥畫梅花。薄色衣一。單衣。紅帷着之。

仁平元十一廿五或秘記曰。臨時祭。舞人隆長。濃打衣。裏濃蘇芳褂二領。濃單衣。私儲

之。

首蓋

嘉禎三四廿三八幡行幸。舞人皆如冬打衣。柏單衣着云々。六位藏人一人。下二着赤衣云々。

糸鞋。

韃上着之。乍着昇堂上。無憚。參入之時。深泥者乍着糸鞋着淺沓。但取去敷云々。糸鞋作在八幡也。仍通氏朝臣舞人勤仕之時。尋別當幸清令着之。

一車。

唐車。

太上天皇。攝政。關白。無止之人乘之。雨皮。多者張席ヲ下ニヲシマキテカラグ。但關

白一門并當家張席ヲ上ニテ。雨皮端ヲ出テ。十文字ニカラグル也。

八十嶋典侍。

保元二十廿六八十嶋典侍。侍子紀伊局。勅使唐車。

殿下賜之。

大嘗會御禊。

永治元十御禊。乘唐車供奉。

若宮御行始。

崇徳

天治二八廿五若宮渡御二條殿。御車等。遠

君仁

江守宗章朝臣調獻唐御車。以青色糸付

房。簾等皆青色也。

糸毛。

呈子

久壽元十四或秘記曰。中宮自鳥羽南殿行啓。同田中殿先例召在禪閣之貞信公青糸毛。今度被用。在院青糸毛云々。件車。故待賢門院爲中宮。常出入之時。白川院被造云々。

多案。貞信公青糸毛。執柄家秘藏之間。白川院始令造給歟。且藻壁門院入宮之時。

青糸毛新車又出來。入道相國造之云々。

件車在近衛之流故也。

<sup>高倉</sup>仁安三十廿一御襖。女御代車。貞信公青糸毛。前攝政被調

之。簾。青色。糸。卷有繡。下簾。青色。有繡。頸總。青色。組

總。村濃。鞞。赤革。朱漆。疊縵綢端。錦茵。雲珠。寬弘

以後不居。雨皮持一人。烏帽子。狩衣。退紅襖衣。白襖袴。布下袴。

永治元十御襖。御車。貞信公御車。相國加修理。葺青糸。

押金窠文。青簾。有繡。伏組。浮線綾綾青下簾。有

縵。縵綢半帖。唐錦綠茵。赤鞞。付杏葉。棟綵組

綱。雲珠。寬弘以後不居之。今度可居之由有仰。不知其旨之處。依御牛震令取也。

頸總。同以下可付之。而御牛垂頭。牛。自院被依被引地。又令取之。

紫糸毛車。

永治元十御襖。女御代二車用朱雀院車。而

后宮出車料。自殿下被召畢。仍用齋院車。

是又先例也。廂差紫糸毛。押金窠文。紫糸

卷簾。有繡。同色頸總。縵綢半疊。東京錦茵。

赤革鞞。杏葉。棟綵組總。三車。齋院車。按察大納言被獻。實本家

御沙。無疵。紫糸毛。押金銀窠文。相。自餘同

二車。已上自一車至三車。一。金作車。不引出袖。

長元九御襖。女御代御車。青糸毛。庇指二

車。有廂。自此車。四車。无庇。

廂車。

保延六十二九或秘記曰。左大將中院直衣始

云々。左大將曰。半蔀車觸申執柄。忠通殿依許所

乘也。廿六日馬權頭顯定云。大將今日初乘

半蔀車。申事之由於入道殿乘之云々。

檳榔廂。

保延二三四大殿春日詣。直衣冠。檳榔。忠實。有平蔀庇。

網代。連子。或號三。網代廂。

網代有庇。或網代有連子物見。懸簾。攝政



關白大臣大將乘之。

金作車。

永治元十廿六御禊。女御代金作檳榔毛。左大

將殿被例檳榔用金物也。青簾。下簾。紫。連着

鞞。自餘如常。

毛車。

執柄家々禮之人用檳榔毛。檳榔。前關白近衛鎮西志摩戶庄土產

云々。仍三所望當家用營。但檳榔毛尋得之時

用之。又無難云々。予兩度尋取富小路中納

言盛兼卿用之。以二囊爲一兩。但不足云

云。簾蘇芳。緣綠金綾。下簾蘇芳。未濃鞞。連着革鞞。疊。

纒網榻。大臣黃金物。大將散物。納言已下黑漆金諒

闇。晉通之儀无相違。少々用無文藍草青

簾。淺木末濃下簾。今度兩度諒闇。後堀川。藻壁門。執

柄一門。但大納言家良如レ常。右府兄弟。實氏公。左金吾

具實。用此儀。貞應故通具卿用此儀也。

保元二正一或秘記曰。公卿以下車如恒。殿

下并亞相毛車懸青簾。无文青草緒等也。

直衣始用毛車事。忠通

保安二三七新博陸殿用之。慶賀之後初有

出仕。便直衣。檳榔。

保延二十二廿八字治左府大臣後直衣始。

檳榔。

仁平三十二廿八中納言中將兼長直衣始。

檳榔。

仁安三八廿四久我殿直友始。毛車。雅通

保延三三四大殿春日詣。宇治丞相扈從。直

衣。檳榔。音書

嘉禎三三三六近衛前關白被申。兵仗拜

賀。乘檳榔廂車。上檳榔庇。有圓總。袖上連子繪唐

花。物見有半蔀。蘇芳簾。同下簾。廿八日

直衣始。件車被替簾。常簾也。藍草端一蝶。被

懸青下簾。不差黃也。

文車。



久安五四廿或秘記曰。中將兼長朝臣正下拜賀。中將車去年用常網代。今日始用檜網代。粗長文同。是餘例也。

十月十六日同記曰。師長昇殿。網代車。其文廢小鳥。

仁安二二十五殿記曰。殿久我。被仰曰。車文如何。侍從同樣如何。故入道殿不御之時。予

中宮權大夫出仕之時。令違袖。予本定紋ヲモダカ鶴。又

物見。予緣青。紋金青。然者爭不違哉。袖中ニ鶴ヲ作

テ令起如何。被仰曰。不可然。此一家通文

不吉也。物見ニ令出。簾如何。予近衛使之

時用之。尤吉。仍此定ニ定了。

多案。今子孫皆通文。違先人御命如何。

三位師季卿。故典藥頭賴基養育。鐘愛无

他。仍申請故殿令乘大面。但物見金青。

無簾。而近代彼兄弟皆乘之。塗綠青。令

張簾ニ付總。凡種々秘事。或大臣調此

車。每出仕用出車。未代甚无念事也。爲

是如何。

四月十六日同御記曰。古人被語曰。大面車。

故入道殿近衛司之時。賀茂祭使令勤仕給。

而件時出來云々。又大固食車。六條右大臣

御車也。而大相國殿令傳給公卿之後。依

六條右大臣殿仰。件車傳給楊梅大納言。大

面車非先祖者歟。故右府御時出來歟。固

食車。野行幸之時初出來云々。是辭說也。自

土御門殿御時出來歟。

押紙云。嘉禎三年五月廿七日。久我恒例八

講。定通內府被入。束帶。被乘上網代車。上自網

錢金後日前內府被語曰。吾家兩三代不調

件網代車。只調半蔀車。所乘也。若花山之

家例歟。且又大臣着束帶乘網代事。定無

先例歟。可乘網代者。直衣若衣冠可宜

歟。吾家可用網代之時。借子息車常事

也。又堀物揚云々。件揚當家不調。只自納

言大將之時。用黃金物揚也。一日又被懸下簾云々。同不得其意。如此遼遠之時。不懸下簾也。青侍語。件車簾端。普通蝶圓ヲ圓蝶ニヲ以墨消之云々。以言大臣用一蝶。无案内。雜書如此調歟。言一蝶者。只圓蝶一ツアルナリ。

飭車。

賀茂祭見物雲客車。

久壽二四廿一隆長見物。其車上檜網代。實檜。左右縱緣。內張青薄物。外空立松。簾用伊豫簾霞地切之上緣際。每懸緒處附花柑子。上左右簾皆付千鳥。物見紺青亂文。不解垂簾。禪閤班牛。畝鞞。件鞞本夾堅食。御禊前駟車。

仁安三四十五御禊。左兵衛佐通盛車。透蝶圓文。雜色車。付松藤水鳥。保元元四十一御禊。左衛門佐光家車。松藤

鶴透ス。牛黃班。左兵衛佐家通車。杜若透之。本文也。

永保三四十三御禊。前駟左衛門權佐爲房。八葉網代。不開物見。楊梅色革鞞。伊知比遣繩。

賀茂祭使車。

保元二四十四諒闇。近衛使右中將信賴朝臣車渡大路。袖透文採色々。物見下網代上付文。簾切テ霞地紫革緒押貝。鞞入志部。雖甚雨張筵不覆。

承安三四十七近衛使隆房風流右樂器舞裝束付之。依右近又用右歟。車簾付蝶鳥舞也。是古風流也。信家中將風流云々。彼時牛童着胡飲酒柴束。

仁安三四十八太皇太后宮使大進右衛門權佐經房車。不施近衛使右少將修範。風流殊美。唐花。

畫。付。唐花。

治承二四廿一右馬助爲保車。唐草丸透之。

長物見。打立不知。牛黑班。轍入安傳。春宮使權佐

維盛朝臣。將右少車。透蝶。本車文簾付。洲濱立。

松樹。轍有藥。院御牛黑。紫勾打衣。交遣繩。

中宮使大進基親車。透袖許。葵藿等也。袖

上寄子以紫縹白色紙形。簾不彩色。革押

貝。有末濃總角并總藥等。院御車。牛黑。近

衛使少將顯家朝臣車。車當色皆用五節之風流。網代。張赤地錦。

上許。色紙形。押色々錦。上許也。物見。以青玉石疊形。貫也。懸之。但下方一尺ノ

程卷。物見下。地展銀薄。其上畫牡丹唐草文。以紺上之。青綠青畫燕子。縹總文。以紺地錦。

摸几帳帷也。前袖。左方彫透。殿上人立形。着直衣。右方彫透。童女立形。着黃

紅葉後袖。左方彫透。下仕立形。紅薄樣五。蒲萄染唐衣。着透扇。右方彫透。衛府藏人立形。着

青色袍。不立板內。畫唐繪。緣。貫玉。摸御

葎之。其着上着東京錦茵。五節所簀子之躰也。後簾。

貫玉。摸御簾。切右方。自轍。村濃。紫與

金銅帽額。打出紅勾五。遣繩。櫨

打交。有牛。志本黃。院御牛。

八葉。付小八葉。

大八葉。五緒。長物見。極位人大臣乘之。而

近代多乘用。不可然云々。

賀茂祭日弁已下車。

保元二四十一御禊。權右中弁雅方。五位藏人左衛門權

佐。車。不切物見。

仁安三四十五右少弁重方車。小八葉。外記

史无物見。

保元元四十二頭左中弁雅教朝臣車。八葉

物見如例。赤轍。黑牛。

嘉保二四十二有信問答。江納言車。用八葉。

遷除。而文依有例頗大。八寸許如何。予曰。

八葉文大小。更不可有異儀。時範爲六位

檢非違使之時繪遷際。是經幸相議所爲

也。猶无便宜。於八葉大小者。殊可無其

差別。又車物見不可開。是先例也。予爲廷

尉之時。奉御禊前駟之日。兼房朝臣見物



陳之。所感事二。所傾事二云々。所感事二

者。一者先容貌。是爲廷尉。一者車尤可如

此。不<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>物見<sub>一</sub>。所傾事二者。一者府隨身帶鷺尾

胡籙。切文。可令負鷹羽胡籙也。一者冠巾

子頗高云々。是一說。藏人左將監爲季所傳語也。

嘉保二十四十七御襖。右衛門權佐時範車。八葉

網代。打立不<sub>レ</sub>知。不<sub>レ</sub>開<sub>二</sub>物見。黑鞆。伊知比遣繩。

重服車。

保元二十一廿八或秘記曰。車八葉。黑鞆。借

請督殿令新調給。

多案。近代多用八葉。歟。如法喪車張莚

云々。久安宇治左府調之歟。

新車乘始故實。

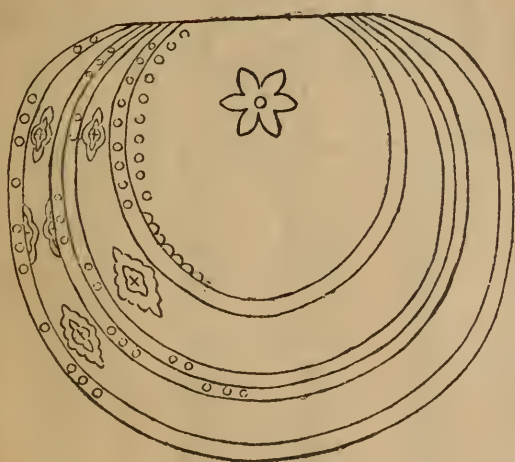
久安五十廿五或秘記曰。午刻師長乘新車

也。依未造了無輪云々。先日禪閣命曰。乘

新車之時。不必有輪之由。故殿御命也。

一鞍。

唐鞍。橋。黑地螺鈿。入<sub>レ</sub>玉。表敷。錦。大滑。有<sub>二</sub>金銅金借<sub>一</sub>  
請德大寺唐鞍寫之。大滑。三重有伏輪。二  
重付透金物。端三十二。次端二十六。鞍敷  
下紺地錦伏輪。上有菱針等。多見之。必不  
一樣。或付藤丸金物。或付花橋。有鈴等。而  
此鞍大滑无鈴。



鐙。金銅。

古唐鐙等。多者無舌。只輪許也。而近代爲踏能所爲歟。可然也。

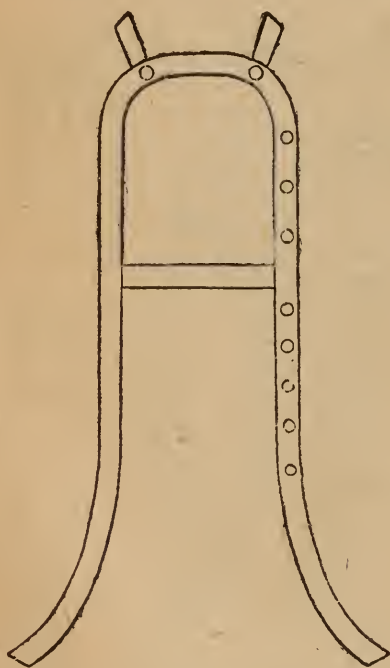
轡。金銅。



鞦。赤滑。或朱漆。付杏葉。

鞦廣一寸四分。兩方長四尺三寸。杏葉一方五。兩方十。

有金物。一方九。凡兩方十八。



杏葉。

九。 胷懸七尺一寸。杏葉五。廣如尻懸。方金物。

伏輪黃鏡白



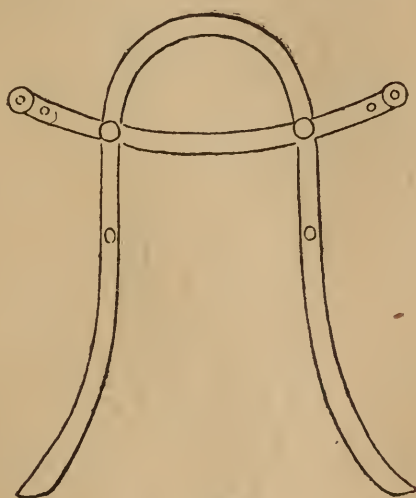
カコ

如帶上手

面懸。

立二尺。廣一寸。橫加紐。定三尺九寸。方金物六。

カコア



手綱。

蘇芳綵如<sub>レ</sub>常。四位已下青綵也。

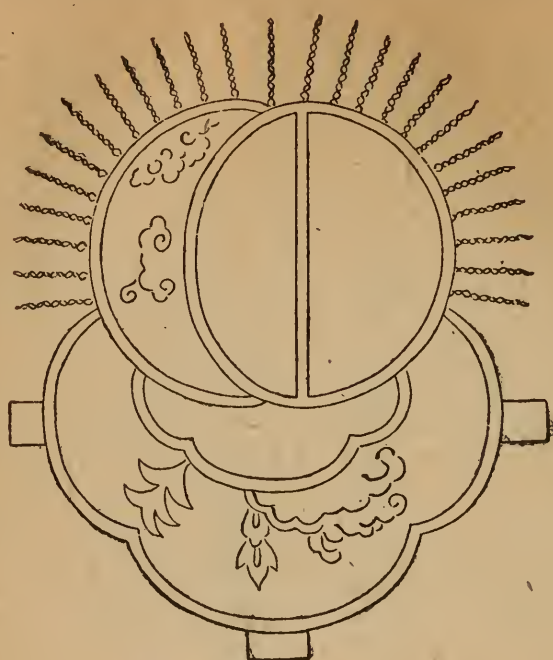
差綱。

祭使種々綵。村濃。或打交。藤打。亥繩。蘇芳綵。御襖白差繩也。



雲珠。

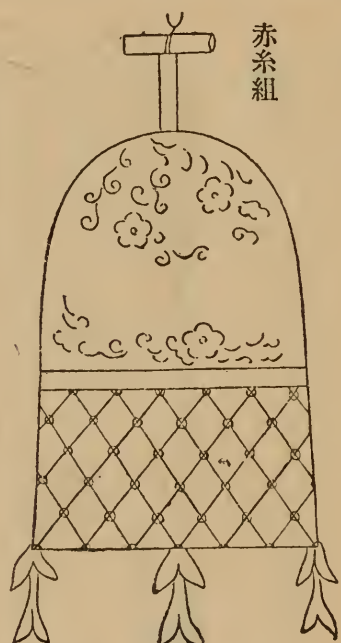
有伏輪。上透唐草。下鏡。



頸總。

鉢透物中有大鈴。下璣珞。

赤糸組



八子。

兩方六筋。已上十二。

シナテノモトニ付云々。或記。毛ツケト記。



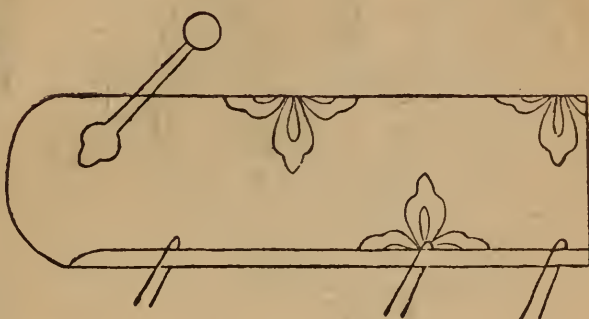
金銅鈴

鞍覆。如レ常。

嘉禎二年四月廿三日祭。通成朝臣使節。借<sub>公經</sub>請入道大相國唐鞍。八子無鈴。

銀面。

尾囊長一尺二寸。



長元九御襖。公卿及節下<sub>教通</sub>少納言飭馬。銀面。尾袋。

頸總。雲珠。杏葉。皆具。

治曆元御襖。諸卿已上皆乘飭馬。菖蒲形。銀面。唐鞍。杏葉。雲珠。頸總。如レ常。

保安御襖。<sub>忠實</sub>攝政鏡鞍。杏葉。下引赤銅。

天仁或記曰。殿下騎馬給間。御顏突當昌蒲形給。人々稱危。自今以後可用意事也。

永治元御襖。宇治丞相節下。彼日記曰。鹿毛馬自<sub>忠實</sub>入道殿下給。先日雖尋求。敢無被飭馬。只有葦毛被飭。俗人說不飭葦毛馬。依

似淨飯王也。仍飭葦毛馬否。欲申入道殿之間。昨日下午給此馬。柔栗無驍氣。向車

差笠更以不驚。今朝置唐鞍。予先乘試。唐鞍八子雲珠鈴頸總也。自入道殿修理下給。

<sub>忠實</sub>攝政本自騎馬支度時。令用此唐鞍給云云。

承保元節下大臣土御馬。河原毛。字湮川。唐鞍。杏葉。具從法成寺入道殿傳來。在左大

臣家云々。今所被借遣也。

和鞍。

行幸可用緣螺鈿云々。雖然近代或鏡鞍。或蒔繪。彼是所用也。切付。四位已上豹皮。五位已下虎皮。手綱公卿蘇芳綫。四位已下棟綫。差繩。公卿師差繩。四位已下片差繩。行幸舌短鐙。御幸舌長泥障。

泥障伏輪事。

保元元四十一御禊。前駟右衛門佐光宗。泥障有伏輪。

祭便引馬鞍。

治承三四廿一近衛使右少將顯家引馬。鏡鞍。鞆櫛末濃。畝同村濃。不<sub>レ</sub>染<sub>二</sub>交<sub>一</sub>青色。泥障懸金

銅伏輪。打交差繩。有藥總居飼。懸<sub>二</sub>青砂鞍<sub>一</sub>。覆<sub>二</sub>有縫物<sub>一</sub>。

大嘗會御禊女御代前駟鞍事。

永治元十御禊。前駟廿人。五位十六人。蒔繪螺鈿鞍。虎皮切付。泥障。小總。鞆櫛綫手繩。六位四人。緣螺鈿鞍。葦鹿切付。泥障。楚鞆。

棟綫手綱。

初齋宮入諸司鞍。

仁安二九廿一殿記曰。初齋宮入野宮。五位

已上和鞍。黑地。楚鞆。付杏葉。結唐尾。

仁平三九廿一或秘記曰。兼長參<sub>二</sub>野<sub>一</sub>宮。和鞍。用

唐鞍鞆。竝付<sub>二</sub>杏葉<sub>一</sub>。

大治三十四初齋院御禊。別當有賢用蘇

芳綫手綱并連着鞆。例歟。可尋。

保安五九廿一初齋宮御禊。前駟中將宗能

朝臣馬。鹿毛。黑地螺鈿鞍。大滑下鞍。豹切付。

連着鞆。付<sub>二</sub>杏葉<sub>一</sub>。

天養元九八西河御禊。因幡守藤原信輔。長

門守源師行。越中守源資賢。土佐守高階盛

景。各和鞍。付<sub>二</sub>杏葉<sub>一</sub>。參議右近權中將經定。和鞍。

唐鞍鞆。付<sub>二</sub>杏葉<sub>一</sub>。權中納言左衛門督公教。鞍鞆

如先。於東廊邊。右兵衛督公行語曰。雖供

奉齋王東河御禊前駟。此事未見尋得。先天



皇御大内之時。供奉此行幸之人。無文帶  
繒繪劍。仍齋王前駟動仕之時。騎泥障馬。  
如今日。從里第行幸八省之時。有文帶螺  
鈿劍。但撤弓箭并老懸等。或垂纓。駕結唐  
尾馬。新中納言季成卿同之歟。先供奉行  
幸故也。

治承三四九初齋院入左近府給。勅使參議  
左中將定能朝臣。和鞍。不付杏葉。不結唐  
尾。左衛門權佐光長如此。

仁安二六廿八初齋宮東河御襖。殿記曰。申  
刻參。垣下役少將泰通參。今夜前駟也。予問  
曰。馬令指泥障給歟。將又令結唐尾給  
歟。答曰。指泥障。淺沓也。予依爲芳契。教  
曰。結唐尾可着靴。少將驚。如命令結唐  
尾。

多案。治承定能儀。若有所見歟。天養公  
行語。又如此。而泰通一向似不存歟。

公卿將諸社行幸。

久安五十十一日吉行幸。三位中將兼長鏡  
鞍。緣臥組。已上禪閣賜之。

雪見御幸上皇御騎馬御鞍。

保安五十二御馬。栗毛。鏡地鞍。但緣堀物。舌長

鐙。近代物也。豹切付。不竹物也。連着鞍。蘇芳綵手綱

等也。

諒闇鞍事。

保元元二十十七御方違行幸。或秘記曰。鞍

緣螺鈿。或沃懸地。韋鹿切付。淺黃手綱。無文革大

滑等云々。然而余今夜。付事安用移。嘉承

或人記又注。且非無所據。又夜陰不及沙

汰。公教悉不能調儲。右少將實國朝臣又駕移。

左將軍諷諫云々。已叶愚案。或多只駕普通

鞍。雖然又夜陰不及沙汰哉。

藻壁門院諒闇中日中法勝寺御八講御幸。

面々人々所爲不同。或借用大夫尉騎馬。

鞍。赤手綱。壺鐙云々。或緣螺鈿。或普通鞍云々。

嘉保二四十七江記曰。美作守自此宅出立。

鞍右大將被借。橋并鐙并鏡也。小文韃豹。

其轡又鏡也。只水付散物也。手綱。蘇芳綴私儲之。泥障新栽之。

移。

近衛次將乘用平文移。或摺具入玉。或入有錦心。上敷大滑。緣用錦。付金文堅。或入銀。或押薄文。

轡。或平文。或金銅。手綱。蘇芳平緒。有伏組。平文。付堅食。差

繩。或鞞津緒。或藤。或棟綵。或打交。舊例。左右次將各一人用。

寮移。近代面々新調用之。宿老次將或乘和

鞍。次將等夜行幸用無文鞍云々。甚不可

然事歟。

平文移鞍覆。无所見。但打覆無難歟。

仁平元十一十三臨時祭。舞人隆長。中將。乘

平文移。禪閑調之。白差繩。

鞭。

乘和鞍之時用詩繪鞭。用平文鞍之時。猶

用詩繪鞭。無難歟。舞人用藤卷鞭。馳馬故

歟。打任テハ鞭令指舍人腰。而平禮出衣。

舍人令指狩衣頸紙。高官高位之人。強依

不持鞭。如此歟。淺位之人尤自可持。仍

无此儀歟。可尋。

鞞。

古鞞チイサク總短。近代鞞甚大總長。四條

大納言隆親。母儀三品八十嶋勅使之時。爲

藏人頭。直衣出衣令張口皮時。鞞ニ付金

物。故松殿入道見物曰。鞞金物有打所云

云。若辻ニ可打歟。一向今案也。可尋

笠事。

賴平卿曰。囊。當家記。無裏緒頸革。強非大

滑。用小革之由。前關白近衛。所語也。

此抄者通方卿抄也。元亨二年五月五日。以六條前中納言之本。書寫畢。不可外見。

權大納言判

延文二八六。以前相國本。校合之。文字誤等直之了。

中納言藤一判

此一卷。土御門大納言殿御抄。號飭抄也。御自筆正本。至愚老相傳秘藏。而應仁已來兵亂。仁和寺坂本比叡山等。所々雖預遣。終以紛失歟。子細難書述者也。仍此本借請按察卿。親長卿忍老眼之不堪。手自寫之。細字不見解。只任筆畢。子孫堅可停止外見者也。

文明十八年三月六日。調料紙一枚許染筆。同四月十日終功了。此內不染翰之日十五六日也。

從一位源朝臣判

此外臨時公事衣抄雜衣抄。并羽林籠鶴抄。本朝沿革禮等。仁王會抄。皆此御抄也。一時紛失。惜哉。右借請中院前內府。通秀公。本餘暇之次。連々染筆了。不可外見者也。

文明十八年十一月九日

權中納言藤原朝臣

此一冊秘々。且雖窓外不出候。種々令懇望。限日數借請畢。此內上半分程者。撰者以自筆令書寫。已後西三條逍遙院入道。內俗大臣實隆。以自筆所書續也。於本雖無比類。書寫之誤等。猶可有之歟。後日令清書。可備證本者也。

于時天正十七年六月廿七日

羽林郎源某判

右飭抄三冊。以屋代弘賢松岡辰方之本。按之書中所引。以實氏書當時右府以定通書土御門大納言依之。案之。自嘉禎元年十月至于同二年四月之間抄之歟。按合之。序聊加傍注。以便童蒙云。



群書類從卷第一百十五

裝束部四

後照念院殿裝束抄

冠事。

透額冠事。

<sup>恭實</sup>六條殿十八まで令用給。<sup>于時</sup>攝政。

<sup>家實</sup>猪隈殿御記云。建仁元年四月八日初着<sup>土御門</sup>額宛<sup>薄額</sup>。

冠。

<sup>兼經</sup>岡屋禪閣廿年まで着給。

<sup>兼平</sup>照念院殿十三まで着給。<sup>大納言</sup>大將。

槐記云。初着厚額冠。十八。

柏夾事。

雅鈔云。かぶりのえんぴをかしはばさみて。ふたへにおりて竹などをわりてさしは

さみて冠にさしたり。いそのもはさみて。すそはうへのかたにみせて。けんゑいといふものさしたるやうに。けんえいはえむびの末まきつめたり。是はかりそめの事なり。

裝束着様事。

<sup>忠實</sup>知足院殿仰云。東帶尻ハ平緒の下縁に宛て可<sup>レ</sup>作。小ガ吉也。

衣笠前内府家良<sup>兼實</sup>命云。月輪ハ三シハエモンヲカ

カレタリケルヲ。<sup>兼通</sup>普賢寺殿ハ筑紫人ナドコソ

タクリモテト咲給。

東帶事。

濃裝束事。上階以前着之。但可<sup>レ</sup>依<sup>二</sup>年齢<sup>一</sup>歟。

黑半臂。躑躅下襲。濃打柏。近年尋常之時強不<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>之。

裏濃蘇芳柏二。若一。濃單衣。或青。濃大口。

縮線綾表袴。裏濃。栴ノ横目扇。

改濃裝束着紅裝束事。多上階後着<sub>レ</sub>之。

半臂下襲。濃裝束之時無相違。紅打柏。近代尋常時強不<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>。

萌木柏二。若一。或薄色。安元御賀三位中將殿如此。紅

單衣。表袴裏赤。赤大口。檜扇。

最勝講中裝束事。

猪隈殿。後鳥羽三位中土御門大納言大將。建久五年。正治元年。裝束如

恒。其後丞相也。

岡屋殿。後堀河嘉祿二年大納言十七。初日如常。結日。二

藍下重。常薄物半臂。同二藍也。紺地平緒。

大殿。四條兼平嘉禎四年大納言十一。第三日。唐裝束。顯紋

紗。紋唐草。赤色下重。同黑半臂。白唐綾。文霰地窠。表袴。

紺地平緒。

仁治元年。大納言大將。第三日。二藍下重。薄物。文如<sub>レ</sub>常。同半臂。

表袴如恒。紺地平緒。

唐裝束事。

知足院殿仰云。唐裝束。冬ハ唐綾ノ表衣。同表袴。

下重。唐絹ノ半臂ナド着也。大口。柏。單衣ハ不<sub>レ</sub>然。

夏ハ唐絹ノ表衣。同半臂。表袴。於單。帷。大口

者不<sub>レ</sub>然。

若時最勝講ナド着<sub>レ</sub>之。

白裝束事。

普賢寺殿。建久九年夏。御方違行幸。着白張單衣。帷。

今案。是白裝束歟。第三度御攝籙間也。御年三十九歟。

白裝束時。表袴裏白。

猪隈殿ハ不<sub>レ</sub>着白裝束。

岡屋殿。後深草龜山寶治元年御還補之時令着給歟。御年三十八。

照念院殿。文永六年大閣兵仗慶申ノ時着給。御年四十

二。

雖着白裝束。表袴裏計ハ紅ヲ着時モアリ。後深草建長

文永永仁大閣拜賀之時如然。伏見冬平。注<sub>レ</sub>之。

圓光院殿。後宇多弘安九年正月一日始着給。柏單表袴裏大口等紅也。

御年四十。

愚身。花國正和四年。冬平。四十一

夏冬白重事。

鳥羽元永元年十二月七日寂勝寺供養。殿曆云。參内。

重面ヤウシタルヲ着ス。知足院殿ノ仰云。中外抄。御

堂四月一日ノ白重ヲ令置給ヲ極熱時取出着

御アリ。凡白重ハ老者トオモフ時着也。件時ハ

只綾ヲ白シテ着也。又上ノ袴冠ナドモ有紋也。

又殿上人ナドモ。一日不出仕シテ次日ヨリ出

仕ノ人ハ白重ヲバ着スレドモ。冠表袴ナドハ

例ノヲ可着也。

信範卿記云。仁平二年正月三日朝觀行幸。關白近衛

殿着御白重。御下重面綾九文。紅裏單文。

又云。保元四年四月旬。殿下白重。後白河。御柏。單衣如例。基實。緋半臂下襲。

同日六條殿御記目錄云。參内。白襲。

八日灌佛。參内。着白襲。

岡屋禪閣。建長五年十二月法勝寺阿彌陀堂供

養。着白張下重給。于時大閣。

縫腋事。

衣笠内大臣命云。普賢寺殿ハマトハジト被仰

キ。和名抄ノ心也。

先祖人袍文事。

岡屋御命云。六條殿殿上人ノ程。着普通文袍給

歟。

信範記云。御袍文如凡人之由載之。一門人ハ龍膽唐草也。

仰云。四品并上階中納言等拜賀之時。申執柄

御袍着之。代々例也。闕腋袍。殿上人時。四度

節會行幸ノ時着之。行啓ニ陣ノ次將許着

闕腋供奉。御後ノ人ハ縫腋也。

龍膽唐草ノ文袍事。攝錄以前着之。

岡屋御命云。一門人着之。件文自法性寺殿御

時出來。先公殿上人ノ程。凡人袍ノ文ヲ着給。公卿

以後召此唐草文袍云々。此事被示東山禪閣

之處。自公卿以後着事不知之由被示キ。



繪樣。

文大小可  
依年齡。



袍文事。

仰云。餘家皆着輪無轡唐草等。但大臣以後着改之人等有之歟。大炊御門故内府冬忠公大龜甲。花山院相國通雅公輪違等着之<sup>キ</sup>。家例也。

岡御命云。<sup>道家</sup>東山入道物語云。執龍膽文、表、衣。古ハ凡人着之歟。

<sup>忠達</sup>法性寺殿御時。被書公事給之時。邦綱大納言着立沸雲袍。

沸雲并鶴浮線<sup>蝶</sup>テウノ袍事。

知足院殿仰云。立沸雲袍。宇治殿召ケルトテ。一人着之。我讓關白之後初出雲ヲ着也。申テ云。件ノ立沸雲ハ。宇治殿初而召候歟。仰云。其ハイカバ有ケン。先例ナドヲ以令着御歟。

(原本立沸雲繪樣在此間今從便宜移下)

建長六年二月十八日經光卿記云。九條前内府被仰云。執柄被着立沸雲袍事。京極大<sup>師實</sup>殿仰云。壯年之執柄不可着之。五旬後可用云云。而近代昇氏長者人。不謂年之老若皆令着給。又齡及五旬之□。近代已稀之故歟。

立沸雲繪様。

攝錄ノ時冬  
着レ之。

或抄云。執柄袍文沸雲ハ。  
攝ニ四海一如レ雲。故用レ之。



浮線テフ  
攝錄

時夏袍文。

冬直衣文。冬下襲  
面ノ文等同レ之。



大閣時袍文繪樣。

夏冬同之。



赤色袍事。

着此袍之時可爲染下重也。寬治表袴同染之。具見三代々之記。

代々令着給例。

道長一條御堂。寬弘二年三月八日中宮大原野行啓。影子年御

一。四十

後一條寬仁二年十月廿二日御年五十二上東門院行幸。

東三條行幸之時。法興院殿又如レ此云々。

師賢白河京極大殿。承曆三年十一月廿七日大原野行

啓。御年三十八

寬治二年正月十九日行幸。御年四十七袍織物。

知足院殿。天仁二年九月六日高陽院競馬行

幸。御年三十二袍織物。

月輪。建久五年三月十六日任子中宮大原野行啓。

四十五。袍唐綾。

岡屋殿。建長二年十月朝親行幸。

彼時岡屋御記云。文立沸雲如レ常。裏蘇芳。

用赤色袍之時。先例多用織物。雖然綾又



有例。其色頗赤。非紫色。彼時ノ袍切如此。建長二岡御記云。赤色袍。不限執柄臣。第一上卿可着之由。見西宮記文。今度袍用綾事。後白河二條保元平治等内宴之時。法性寺殿六條殿如此。闕腋刷日猶如此。其上六條殿雖若齡令用之給。況於衰老哉。表袴如此之時可用浮文。雖然衰老之間用綾。是非無例。後白河保元法性寺殿如此。准彼此例所着用也。始着無張目之袍事。

弘長元年正月一日愚曆云。今日始無張目。俗云シ之袍着之。

弘長元年正月十一日經光卿記云。殿下岡屋入道殿第二度執柄御時。御袍御直衣非志々良。熨面被用之。古賢之所爲雖不必然。自今春止志々良由令語給。

半臂事。着青朽葉下襲時。半臂。事在下重部。

雅抄云。冬は半臂つねはなし。わきあけには

冬もあり。夏のにははんびをぐしたり。

仰云。文小葵歟。弘安春日行幸時。尋申大北政所之處。不覺。但小葵歟云々。

今案。冬も袒裼などする時はきる也。黒打半臂也。染装束時は別事也。

夏之細黒半臂事。身下襲ノ裏様ナルモノ也。ラム羅也。

### 下襲文事。

冬下襲面文。

見右。

同裏文。或豎文也。夏下重文同之。

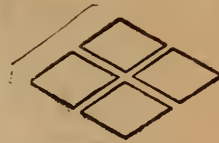
岡御命云。下襲ノ文ノヒシハ立ザマニ付之。

普賢寺殿被仰云。先公ハ横被付之。審不之間尋申東山禪閣之處。立ザマニ付之由被示

キ。

打下襲事。

通卿着櫻下重。去三日宰相中將實澄着同色下重。而人々云。節會日躑躅外不可着他色下重。由被難。後日以<sub>レ</sub>此旨尋申左府。仰云。於元日ハ躑躅下重外不着他色之由所聞傳也。於自餘之節會不聽其旨。故二條殿教通。談云。正月用下襲次第。元日躑躅。二日皆練。三日櫻。七日柳者。



知足院殿仰云。入道殿臨時客日櫻御下重。不令着半臂御。櫻下重爾不着黑半臂之由見御曆。

又仰云。櫻下重綾ナルニハ黑半臂也。織物ニハ同色半臂也。

又同仰云。櫻下重ニハ劔裝束用青草。他人用紫草。但櫻下重用紫草事有也。

永久四年正月二日長秋記云。右大臣殿仰云。櫻下重ニハ必用紫綵也。

下襲ノ緣事。

年少ノ間オメラカス。

下襲ノ色事。

師時卿永久御元服堀河後宴、日記云。中納言顯

正月七日ノ日也

染裝束事。

衣笠命云。ヲトナビタル人ハ染下襲計不

染表袴。

四條大納言隆親卿云。前關白良實。被語シハ。

染裝束時染下重不染表袴事。必非宿老振

舞。裾可懸高欄。公事ノ日。若人モ裾計染之

由見松殿抄。

常着色々。

薄色。夏有裏。

蘇芳。夏宿老人。或無裏。

濃打。夏無裏。號引倍木。

柳。年少人不可着。自五節至三月。

花山吹。自正月至三月。

櫻。自正月至三月。

樺櫻。同。

袴。五月。

二藍。夏無裏。

裏濃蘇芳。

松重。已上不嫌時節。

紅梅。自五節至正月十五日。

裏山吹。同。

櫻蒔木。同。

朽葉。夏多着レ之。

菊。自九月至五節。

蒔木。不嫌二時節。

花橘。四五月。面朽葉裏青。

已上下襲也。此內蘇芳裏濃。紅梅裏。山吹

蒔木等ノ表袴ニモ着レ之。

嘉禎三四廿三八幡行幸之時。照念院殿首書四條于時。蘇

芳二重織物御下重。同織物蒔木表袴。竝見二御記。

嘉保二四五賀茂行幸。左大將二藍織物下重。

欸冬織物表袴。在心記。

西宮鈔云。

蘇芳。夏冬着レ之。

蒲萄。冬時用レ之。

二藍青赤黃朽葉白襲。古時無レ之。

白柳青朽葉之外。公卿不レ服平絹。

高家口傳ニ云。或人申云。蘇芳ノ下襲着

時ハ表衣裏ニ紫ヲ用ト舊物ニ書付。不審也。

引倍木下襲ノ事。冬下重ノ裏濃打也。

鳥羽  
天仁二年四月廿六日八幡行幸。曆云。今日ヒ

卯花。四五

藤柳。打或張。

紅躑躅。打。用二平絹。



へギノ下襲。半臂。

保安二年四月七日賀茂行幸。私御記云。濃

打ノ下重。號引倍木。同半臂。

法性寺殿御消息云。引倍木。極熱之比不着

之。以賀茂祭爲終。以例幣行幸爲始云々。

西宮記云。曳倍木。四八九月之間用之。或黑

半臂。或打半臂。

後二條殿大將間着之給。承曆元四十七賀茂行幸、時也。于時參議大將。御年十六

歟。

文治元年四月廿二日賀茂詣。殿下濃色引倍

木。御下重打物也。無裏。單也。冬ノ直衣。文綾

丸也。

弘安三年四月十九日愚曆云。賀茂行幸也。

着束帶。濃打ノ下重。號引倍木。冬ノ躑躑ノ下

重ノ裏也。ハタヲヒ子ル。依制符。近年彼下重

不打之。只張也。仍キラナシ。然而今日打之。

同半臂也。件下重四月着之。天仁保安。知足

院殿法性寺殿八幡賀茂等行幸。于時令着之

給。于時白河師進攝政。承曆後二條又令着給。參議大將。此外故

普光苑關白。弘長賀茂行幸日着之。還御以後

不着引倍木之由。在法性寺殿御記。

弘長賀茂行幸之時。大納言實經欲着引倍木

下重之處。關白着用之間不着云々。

躑躑張下襲事。近年制符以後。朝夕着此下重。

岡屋禪閣御命云。元三ナドニ着事有之歟。但

慥例不勘出。

弘長元年正月十一日經光卿記云。參殿下。仰

云。此一兩年令着張下重給。然而赤單ハ如

常。未及白單。攝錄令着交打下重給。常事

也。節會日爲打下襲云々。

火色皆練下襲事。岡御命云。カイ子行幸ニ不着。

岡御命云。二色無指差別事。歟。六條殿松殿

被賭弓日。一人ハ裏ヲ打。一人ハ不打。イカ

ナリケルコトニヤ。兩人替タリケレドモ。法

性寺殿何レヲワロシトモ不被仰云々。

知足院殿仰云。カイチリ重ハ必用<sup>二</sup>黒半臂<sup>一</sup>表袴用<sup>二</sup>織物火色<sup>一</sup>。下重裏ハ張タル物也。

助無智秘抄云。火の色の下重はかいねりとか

はりたるもの也。火の色とは。うらおもてと

もに打物にて。なかへをいれたるなり。かい

ねりには。唯うらは紅のはりたるにて。なか

へもなきなり。のり弓のそふの日は。かいね

りをきたる事也。火の色は。宿徳の大臣のも

やの大饗日尊者してきる事とぞ聞つたへた

る。三條内大臣此火の色をとゝのへて。かい

ねりぞとこゝろえて。のり弓のそうの日き

させ給はんとて。清職と申しものしりたりし

五位にこれはいかにとはれければ。うち

ひらいて。めでたく候もの也。但かいねりに

は候はずと申ければ。大臣いとも心えずし

て。きでやまれにけりとかや。上東門院むか

し大原野に行啓。<sup>續通</sup>宇治殿非參議の時舞人たり。試樂ノ日に紅打下重。黒半臂。美談也。

知足院殿仰云。かいねりがさねは可用<sup>二</sup>紺地

平緒并青草装束ノ劔也。

應保元年二月十日中山内府記云。加伊練ハ

稱<sup>二</sup>火色<sup>一</sup>其體。面ハ紅打。裏ハ如<sup>二</sup>紅單<sup>一</sup>。中倍ハ

紅色ヲハイスル也。不<sup>二</sup>捻重<sup>一</sup>。只中ヘヲ籠テ縫

也。而故内府公ノ教ヘ。賭弓之時紅打三重ヲ

重テ着之。伴日雪灑之間潤頗見苦云々。

正嘉二年二月十八日經光卿記云。向<sup>二</sup>三條入

道右府第。被<sup>二</sup>語云<sup>一</sup>。祖父左府入道ハ被<sup>二</sup>作<sup>一</sup>装

束記文。是人々衣裳色目以下抄物也。隨分家

之重寶也。搔練下襲。火色下重ハ各別物也。

共爲<sup>二</sup>赤色<sup>一</sup>之間。人存<sup>二</sup>同物之由<sup>一</sup>歟。是不可

然。搔練ハ張下重也。火色ハ頗色薄。搔練ハ赤

色殊深也。着搔練之日。必可<sup>レ</sup>指紺地平緒云

云。如此之口傳等多被書之。

始着<sub>三</sub>柳下襲事。

後二條殿。

堀河

永長元年十二月爲房卿記云。殿<sub>廊通</sub>下令參御

堂給。關白殿今日始令着柳張下襲給。年

來只令着打下重給也。被<sub>中</sub>大<sub>二</sub>殿有<sub>三</sub>其沙

汰。但件年十一月廿九日臨時祭。初令着柳

下重歟。猶可勘。

知足院殿。

鳥羽

天永二年三月十五日。<sub>貳弓。攝籙以後六年。</sub>

猪猡殿。

斯德

建保二年三月五日。<sub>執柄以後九年。卅六。</sub>柳并青朽葉

着之給也。

照念院殿。

後深草

正元元年二月五日西園寺一切經供養日初

着給。柳下重ハ心喪ノ色トテ。吉事時不着

之由申習。

首書

圓光院殿。弘安大納言時着給。

愚身。正和五三十六臨時祭日。<sub>年四十</sub>

雅抄云。有泰抄。おとなしき人やなぎ。<sub>まめ</sub>

といひて。あなぐ。面はふくさばりにてきるお

ほかり。

仰云宿老後冬夏青朽葉也  
始着<sub>三</sub>青朽葉下襲事。

猪猡殿。

建保二年三月五日。<sub>攝籙以後九年。御年三十六。</sub>

岡屋殿。

四條

仁治元年五月廿四日。<sub>宸勝講。攝籙以後四ヶ年。卅一。</sub>

照念院殿。

後深草

正嘉二年五月始着給。<sub>御年三十一。</sub>

彼時被用<sub>二</sub>下重切<sub>一</sub>也。

令<sub>三</sub>注置給云。色猶可<sub>三</sub>黃青混<sub>三</sub>苗色<sub>二</sub>云々。

圓光院殿。

基忠

後字多

弘安九五最勝講時初着給。御年四十。

後深草

正嘉二五廿四愚曆云。今日始着<sub>三</sub>青朽葉下

重。地并文加常。青色ノ過タルハ苗色ニ似



タル由禪閣被仰。半臂同色也。地并文不違下重。自餘紅。引倍木以下如例。

普賢寺殿。朽葉下重惣不着給。岡命。

岡屋殿御命云。夏秋不嫌。折節着之也。色ハ聊有黃氣。

師光云。心喪ノ色トテ神事ニ不用ト申。雖然賀茂祭ニハ着之。嘉保元年土記云。賀茂詣。大殿青朽葉御下重。朽葉ノ下重。後二條殿即如斯。

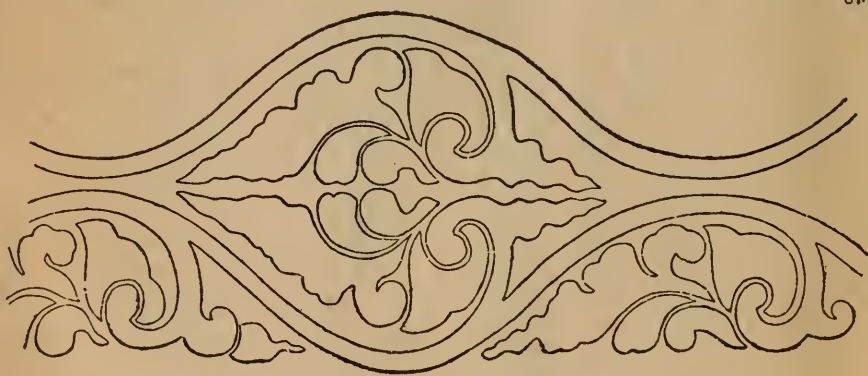
節會日着柳下重事。

岡屋殿御命云。節會ニ着柳下重事不可然。但有例。殿曆云。永久四年正月七日柳下重。

今案。執柄不列。朝廷勿論歟。

正治二年正月十六日親輔卿記云。節會。殿下御參内。御束帶。濃青張御下重裏濃青。面綾張白。平絹御袖如恒。

衣文。  
之。柏同



束帶下紅打衣事。

近代常時畧之不着用。如祖謁之時着之。

束帶下衲事。

知足院殿仰云。公卿ハ蘇芳ヲモ萌木ヲモ着。

但濃單衣不可裝。仰云。常ニハ大臣以前萌

木。大臣以後紅也。

安元御賀ニ三位中將殿薄色衲。

六條殿上階御拜賀。紅御衲。猪隈殿同御拜賀。

萌黃御衲。

岡屋禪閣御命ニ云。吾ハ大臣以後束帶ノ下ル

着赤衲。凡一門人大臣以後着之。

單文。

上階以前濃單衣。或青。上階以後紅。

夏束帶下帷事。

仰云。上階以前白。上階以後紅。着白裝束之

時又白。

表袴腰結事。

岡屋禪閣御命ニ云。家嗣公云。闕腋之時必結  
後。縫腋ハ只結前。

表袴文。霰窠也。若年ノ時着レ之。雖宿老後一晴時又着  
レ之。文大小依ニ年齡。其事委可レ勘ニ先例也。

衣殿仰云。若時縮線綾。其次固織物。文藤丸。

霰窠マデハアラス。次アヤ也。餘人固織物之

時モ霰也。

始着固文藤丸表袴事。

岡屋。嘉祿二年四月。大納言。  
十七。

束帶下亦張單衣事。

普賢寺殿被遣信範卿許御書云。

夏張單衣時。近代用綾凡夏單衣ハ生單衣ヲハリタルニテ本儀可有之然者用平絹之條叶  
束帶亦バリノ單衣ハ常之平絹用之。綾ハ  
道理無不可依色

如何。依有ニ不審事尋申也。

束帶下白張單衣事。

建久九年七月廿二日。普賢寺殿御記目錄云。

御方違行幸。着白張單衣帷事。  
御年卅九。

岡屋禪閣。寶治元年正月令還補給之時。衲以

下被用白色。歟。卅八。

藤丸文如此。指貫文同レ之。



照念院殿大閣始。四十一年。着白袖以下給束帶下大口事。

殿上人間色濃。

上階以後色紅。始ツカタ練歟。

白裝束時白色也。

笏事。

知足院殿仰云。有横目ハ見苦也。

仰云。慶賀笏。

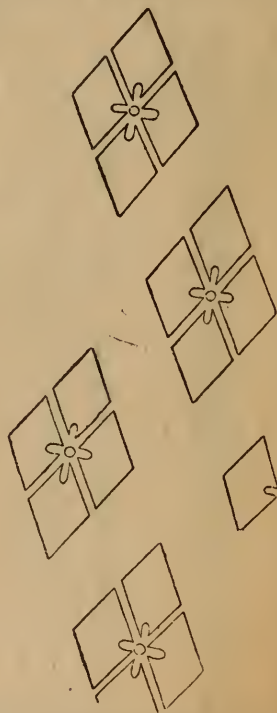
在近衛。

代々拜賀時用之。牙笏着

禮服時用之。

飭劔事。

仰云。節會時帶之。但大節會。白馬。豐明。并御禊行幸





之時不用代云々。

崇徳

永治槐記云。如法飭劔。必用赤滑革足緒。

飭劔代事。

子細見右。

高倉

安元元年正月一日午禪記云。飭劔代。紫檀地

螺鈿。鞘黃樋。赤滑革裝束。

螺鈿劔事。

行幸時用之。九條殿流正月二日用之。

執柄時節會或用之。

片節時諸卿用之。

此外猶有着用事等。

衣云。沉地盧橘御劔事。京極大殿。實金葉。青

瑠璃花銀。是又紛失。

二宮大誓日也

長和五年正月二日小右記云。大納言公任着

道長

有文帶。螺鈿劔。舊年送消息云。左相府云。二

ヒヨト

日用螺鈿劔。雖不然之事。依被命可着者

歟。無二宮大饗之時。公事不用隱文帶。螺

鈿劔者也。大納言存此由。年來不着。而依相

府命所用也者。大謬言也。今日多用樋螺鈿。

失舊說畢。

カフ螺鈿事。

衣笠命云。文具ナルニ。フチヲ金ニテモナ爾

ニテモ入タル也。

仰云。摺貝ハタバ金ヲホソクフセタル也。刷

日着之。

蒔繪螺鈿劔事。

遠所行幸。兩日行幸。公卿以後拜賀等用之。

正月二日九條殿流用之。

遠所行幸時用蒔繪螺鈿劔事。

衣笠命云。木地ハ令損之故也。襲行幸ナドニ

ハ。蒔繪劔ニ紙ニテ貝ノ様ニ文ヲ押也。

蒔繪劔事。

常公事每度用之。有樋劔同前。但聊刷日可

着也。

於紫宸殿被行即位之時。執柄用蒔繪螺鈿野劔事。

行幸時四位將用之。五位入尻鞘。遠所行幸時。大將并公卿將或用之。蒔繪野劔。執輦之時被用。是又紛失。仰小狐事。瑠璃水精柄等劔事。

岡屋禪閣御命云。瑠璃水精等柄劔者。晴時用之。但騎馬日不用云々。

劔足緒草隨平緒色取替事。

衣笠命云。普賢寺殿全無取替事。紺地平緒爾紫草ノ足緒モ紫平緒藍草足緒モ不可有苦之由被仰キ。而猪隈殿每度令取替給。

衣云。胡籐ノウシロヲトヒラヲトハオナジクテ。劔ノヲハカハリタルモクルシカラズ。

衣ハシ草裝束ノ劔。紺地。紅梅地。紫綵。樗綵等。惣皆ハシカハノ裝束ハクルシカラヌ事也云々。花山院此裝束ノ劔有云々。京極大殿

御物云々。

京極大殿黑槌劔事。

一ハ在花山院。櫛皮ノ裝束也。一ハ入道殿ノ御時紛失。

劔足緒事。

知足院殿仰云。櫻下重着之時。劔ノ緒ハ我用藍草。他人ハ用紫草。

騎馬日劔平緒事。

知足院殿仰云。騎馬ノ日ハ最上ノ劔平緒。水精柄等不用事也。

白重時劔緒平緒事。

知足院殿仰云。白重ハ紺地平緒。青草之足緒劔。

紫綵平緒事。

晴時着之。年少之間雖非指晴常着之。

青綵事。

同紫綵。

櫛綵事。

仰云。八九月之比着之。猶可見先例。但見在十月如

紅葉相殘時者用之。後鳥羽院仰之由。今出川相國記之云々。

紺地事。

常時用之。

仰云。葦手平緒倫子紺地也。繡者鷹司殿御堂北政所。自

令縫給云々。或說令付裏給云々。葦手劔一具物也。着陣之時多用之。

紅梅地平緒事。

仰云。非常物。普賢寺殿御時有之。不知行方

云々。有子細歟。

嘉保二年正月三日自筆云。臨時客。櫻練下重

着之。紅梅平緒。件緒御堂殿被着御。今日帶之。

樗綵平緒事。付手綱。

衣笠命云。樗花開比五月許差之云々。而手綱

ハ不嫌時節。樗綵ハ青綵紫綵交也。

仰云。四五月比差之。青綵有薄紫勾歟之由

有一說。而多者青綵紫綵相交歟。此事猶不審。

前右府公衡公二具所持。皆兩綵相交。玉帶事。

延曆十四年聽參議以上着白玉帶。

有文巡方帶事。號二隱文。

節會行幸用之。帶二筋劔螺鈿時繪螺鈿劔等。時用此帶也。

永長元年二月十九日自筆云。宇治殿御談云。

法性寺御八講日被帶隱文云々。劔時繪也。

臨時客日。時繪劔差有文帶云々。此事不

審也。

有文丸韮帶事。

差無文帶之日。殊刷時着之歟。

無文玉丸韮帶事。

公卿以上常時用之。

馬腦帶事。

四位常時用之。

犀角帶事。

五位用之。



魚袋事。

仰云。元三中行幸付魚袋。而後鳥羽院御時。相似大嘗會御禊行幸トテ被<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>之。猪隈殿以下於御所俄被<sub>レ</sub>撤<sub>レ</sub>之。仰云。九條殿元日節會魚袋加修理不出來間御遲參。貞信公被<sub>レ</sub>尋申之間被<sub>レ</sub>申此由。仍我令付給魚袋解之被<sub>レ</sub>進。後日被<sub>レ</sub>返進之時。被<sub>レ</sub>付松枝。令向貫之家給。被<sub>レ</sub>令詠。付之被<sub>レ</sub>進。

春かせにこほりとけたる池の魚は

千歳を松のかけにかくれむ

仰云。公卿以後金魚袋。公卿以前銀魚袋。胡籙丸緒事。

冬忠公云。板突爾一ツ纏テ宛。平緒半引廻結前方。不垂末。挿帶宛。平緒半引タレハサガリテ見。同聊自半上引廻之。

雅抄云。まろををひく事は。もといたつきにからみて。しもにむすびたるをときて。いた

つきにからみながら。ながきかたをうしろにひらをのうへにひきまはして。みじかきかたをとりあはせて。まへのひらをのさがりのうへにまろをのすその露つけたるをひとしくして。かたかき<sub>片</sub>にむすぶ。もすそをひとしくむすびたらすばかりの事にぞある。仰。平胡六羽。是等ニハ切テ用之。仍テ細キ也。餘人ハ不切用之云々。仍廣キ也。行繼云。此邊ニハ切テ用之。仍鼻ツキニハグ也。弓ニ卷紫組事。端ハ繁ク中程ハマバラニ卷也。イカニモ解也。衣笠内府ハ解ザル様有也。ソクヒナド付ハ無下事也云々。

衣丸緒結付事。左右ノワオナジ様ニシテ。露ハ二寸餘サガリテアリ。サガリハ左ヘ板突ノカタヘサガルナリ。ウシロヲニ貝五六所付也。ウシロヲツクルハ。革サキ下ヘムク也。マヘ緒同ジ。ウスヤウ紅エビラニイル。又

ハツハ水精面指カブラ。餘人不<sup>然</sup>。クビハヒ

タクビ。シモニ羽ノキハニコガハアリ。クツ

マキバハニカミニコガハアリ。

衣丸緒引事。イタツキヲバカラマズシテ。ア

ナヒキマトヒテマムスビニ結テ。ウシロヘ

ムキタルヲヲ。ウシロヲノカミニソヘテム

スビテ。タリヲバハサムナリ。タリヲサグル

ニハ。平緒ノカミニサグルナリ。

衣丸緒引事。ヒラヲノカミナルウシロニソ

ヘテ引ベシ。イタツキヲバカラマズシテサ

グルガヨキ也。マヘノタリヲバサゲズシテ

ハサミタルヨシ。タリヲサグルハ。ヒラヲノ

フサノカミニアツベシ。

仰。或人云。丸緒ノ露。ヒラヲノ上ニヒトシク

ムスビタルヲバタ、クト云。カタノ、ヲミ

ジカク結ビタルヲバタ、カズトイフニヨリ

テ。タ、クタ、カヌ兩説也。冬忠公説。不<sup>垂</sup>

挿帶。

平胡六羽事。

カブラヲ面ニ差。然而裏面ニ子ヲ成間。カブ

ラニハ裏羽ヲハグ也。又弓矢不<sup>卷</sup>紅梅檀紙。

只白檀紙也。但實ニハ色紙ヲ卷之由。有<sup>普賢</sup>

寺殿仰。

衣笠命ニ云。平胡六羽。近來大畧不<sup>切</sup>シテハ

グ。廣着故歟。

小隨身胡六事。

仰ニ云。如<sup>ハ</sup>小隨身用<sup>逆顏</sup>僻事歟。可用<sup>葛</sup>歟

云々。仍弘安十年朝覲行幸之時。三位中將タ

ダノ隨身ニ用<sup>葛</sup>。隨身等云。餘家者用<sup>葛</sup>。執

柄家自<sup>小隨身</sup>時用<sup>逆顏</sup>之由。信範卿注<sup>之</sup>。

猶可<sup>爲</sup>逆顏也。後日見<sup>信範卿記</sup>。六條殿普

賢寺殿殿上人ノ間ハ葛。公卿以後逆顏也。但

少將拜賀被<sup>用</sup>逆顏。是殿御隨身簾被<sup>借渡</sup>

由也。教經卿云。栗田口大納言入道記。普賢

寺殿仰トテ。殿上人程用葛。公卿已後逆顏云云。

中山記云。近衛殿少將拜賀事。被示人々。隨身箠者。諸衛惣箠也。而家例用猪皮。是攝籙人上下臚隨身共用猪皮。取渡件箠之体也。我時不見給。而故信範卿云。只存在故殿納殿申テ被用猪皮。有何事哉者。仍隨彼申狀了。又可然歟申之御時被用了。不可及異儀者。拜賀當府隨身參入給胡六。仍有此沙汰也。後日參栗田口。時申此事。被仰云。雖攝政關白府生番長。用猪皮箠是例也。下臚者用惣箠。而春日詣後雖下臚皆用猪皮。其故者。乘移馬之時下臚皆用猪皮箠是例也。其家執柄家用之由。往年或人所示也。年久其人不覺悟。但有職之由所覺也。近衛大將上臚隨身猪箠也。其モ下臚乘移馬日者用猪事也。

衣笠命云。中少將隨身胡六。小牛革等。左ハ紫革。右ハ藍革也。然而通用無苦云々。  
襪事。

鷹北政所被仰云。練貫ヲバ不用ト岡屋殿被仰。

靴、花仙事。

衣笠命云。靴ノハ赤地。但丞相以前ナドハ。

其ハ青地無苦之由。普賢寺殿被仰。後日命云。

普賢寺殿、仰ニハ。靴ノ花仙者青地。而猪熊殿

ハ執柄以後コソ青地ニテハアレト被仰ト。

故大納言入道者赤地也。但赤ラカナル染裝

束時ハ青地ト中キ。

保安大嘗會御禊日朝記云。殿下御靴窠錢用。

黃烏錦。無事華麗之故也。

雨日着深沓事。

永承五年東北院、行幸。雨降。公卿深沓。次將着靴。



資房記云。深泥日着靴太無便宜。但執柄被定仰云々。

衣云。深沓ハ雪時相具之。不靴。不半靴。無花仙。

汗拭布事。

龍君命云。普賢寺殿御時ハ長五尺許也。

布袴事。

雅抄ニ云。ほうこは。さしぬきつねのきぬ。したのはかまをきて。そのうへにしたがさねをきて。うへのきぬにしりをつくりて。おびをさし。さくをもつべき也。

夏布袴ハ。岡屋殿仰云。帷ニ重張單衣。但夜分ハ帷計モ着之。

衣冠事。

嘉祿三年四月五日。經一御記云。夏加茂祭以前着冬裝束。冬五節以前衣冠ハ着夏裝束。秘事也。

此事如執柄如何。

隱文巡方



隱文丸柄



了  
右後照念院殿裝束抄以肥後守經亮藏本及一本校正

群書類從卷第一百十六

裝束部五

裝束抄

西三條實隆公抄也

冠

纓

袍

下襲寸法色

半臂

柏

單

大帷

表袴

大口

襪

笏

扇

帖紙

帶

劔

平緒品々

帶品々

魚袋

履品々

衛府具足

卷纓老懸袍  
間塞薄樣樺

弓矢筥羽  
矢尻表帶

衣冠

直衣文冠直衣

烏帽子直衣

同着例

布袴

直衣布袴

同着例

組懸

衣

單

奴袴同文下袴

帷

笏

扇

小直衣

水干

布衣

直垂

長絹

道服

襖袴

褐衣

退紅白丁 衣色

冠。

推古天皇御宇冠位十二階ヲ定ム。孝德天皇古キ冠ヲ止ラル。左右ノ大臣ハ猶古キヲ用ユ。天武天皇悉古キヲ止テ。漆紗ノ冠ヲ用ユ。今ノ烏帽子也。持統天皇又本ノ冠位ヲ授ラル。當時ノ冠是也。有文無文トテアリ。尋常有文也。但近代織物ノ羅ナキニヤ。糸ヲ以テ菱ノ紋ヲ閉付テ。唯有文ノヨシ許也。

天子御冠。

薄額。暑天ニハ半額ヲ召ス。角ノ上程ニ穴アリ。羅ニテ引塞也。是世ノ始ヨリ崇神天皇ノ

比マデモ。神鏡ト同ジ殿ニマシマスユヘニ。  
朝夕御冠ヲ離サレズ。緒ヲ通シテ結バレシ  
ト也。又御神事ノ時ハ。御幘トテ。白キ絹ヲ以  
テ巾子ヲ結バセ給フナリ。

臣下冠。

少年薄額。中年ノ後厚額ナリ。或記ニ十五歲  
マデハ薄額。十六歲ヨリ厚額ノヨシ見エタ  
リ。然ルニ京極大閤師實三十四歲左大臣ノトキ  
初テ厚額ヲ用ユ。後二條關白師道三十二歲内大  
臣。宇治左府賴長十八歲同ク内大臣ノ時ヨリ用  
ユ。此等ノ追先蹤。十六歲以後モ任槐已前ハ  
可有レ用捨事也。近代ハ官ノ尊卑ニヨラズ。  
一向十六歲ヨリ厚額ヲ用ルコトニナレリ。  
抑透額ノ冠ハ。榮通忠義公ノ息閑院大將朝光始  
テシ出シ侍ルヨシ見エタリ。

纓。

同冠。羅ヲ以テ用ユルナリ。

袍。

表衣トモ號ス。衣服濫觴。漢朝ノ始鳥獸ノ羽  
皮ヲ服トス。黃帝始テ衣服ヲ作ル。我朝ノ始。  
神代鷦鷯ノ羽。天照大神御代始テ神衣ヲ織  
ナリ。應神天皇御宇百濟ノ服。大寶令ヨリ唐  
ノ衣服ヲ用ル也。

黃櫨染。

文桐竹  
鳳凰。

天子常ニ召ス。黃櫨染ト稱ス。延長ニ大原野。  
承保ニ大井川等ノ行幸ニ臣下モ着用ス。是  
ヲ染ルニハ綾一疋ニ櫨十四斤。蘇芳十一斤。  
酢二升。灰三石。薪八荷。

麴塵。

或號ニ青色。  
文同。

是モ天子ノ御袍ナリ。臨時祭庭座舞御覽。又  
ハ弓塲始ナドノ晴ノ時召ス。青白橡ト稱ス  
ル是也。又臣下着用ノ例邂逅ニ見エタリ。但  
藏人はヲ着ス。所ノ雜色御襖前驅日着スル  
ハ拜領ノ由ナリ。染ルニハ綾一疋ニ苧安草



大九十六斤。紫草六斤。灰三石。薪八百四十斤。

帛。

夏生。冬練張。

天子御神事ノ時ニ召ス。廻立殿行幸。奉幣使發遣。齋宮群行等ノ日召也。

赤色。

文策中ニ竹桐。

太上天皇ノ御袍。赤白ノ橡ト稱スル是也。大

治朝觀。建久ニ八幡等ノ御幸ニ召ス。時ニヨ

リ天子モ召ス。内宴賭弓ノ日ナド例アリ。又

攝政關白モ是ヲ着スル。御通宇治京極等皆着用

ス。但松殿ノ口傳ニ。赤色ヲ着スルニハ故實

アル由見エタリ。北山抄。赤白ノ橡闕腋ノヨ

シシルス。西宮抄ニ近代縫腋ノヨシ見エ侍

ル。染ルニハ綾一疋ニ黃櫨大九十斤。灰三石。

茜大七斤。薪七百二十斤。

黃衣。

文小葵。

儲君以下無品親王ノ袍。又西宮抄ニ。無品親

王孫王源氏ノ公卿ノ子孫等昇殿ヲ聽テイマ

ダ無位ノ程是ヲ着スルト見タリ。此袍ノ色古今沙汰有之。縫殿寮式。淺黃。西宮抄。薄淺黃。京極大閤。中御門右府等ノ記ニ綠色。行成記ニ黃衣。是淺黃色也。世ニ黃衣ト稱ストイヘリ。保延ニ親王元服ノ時。淺黃。コレ黃薄色也トシルシ侍ルナリ。

深紫。

一位ノ袍ノ色ナリ。院ニモ召スナリ。最上ノ物ナレバ。非其人シテハ着用スルコトナシ。仍深紫深紅ヲ禁色ト云。其淺キ色ハ制ノ限ニアラズ。ユルシ色ト云フ。延喜ニ善清行ノ議奏。長保太政官符ニモ此由見タリ。異朝ニハ。紫紅ヲ間色トシテ朝服ニ不用之。又婦人ノ服ニチカキニヨリテ褻服ニモセズトイヘリ。但隋煬帝。一品紫。次ハ緋。次ハ綠ヲ用ルヨシ見エタリ。染ルニハ綾一疋ニ紫草三十斤。酢二升。灰二石。薪三百六十斤。

淺紫。

二位三位是ヲ着ル。染ルニハ綾一疋ニ紫草五斤。酢二升。灰五斗。薪六十斤。

深緋。

四位ノ着ル色ナリ。綾一疋ニ紫草卅斤。茜大四十斤。米五升。灰三石。薪八百四十斤。

淺緋。

五位ノ着ル色ナリ。綾一疋ニ茜大卅斤。米五升。灰二石。薪三百六十斤。

深綠。

六位。帛一疋ニ藍十圍。苳安草大二斤。灰一斗。薪一百廿斤。

淺綠。

七位。帛一疋ニ藍半圍。黃檗大二斤。

深縹。

八位。帛一疋ニ藍十圍。薪一百二十斤。

淺縹。

初位ノ着スル色ナリ。帛一疋ニ藍半圍。薪三十斤。但大同ノ格ヨリ。七位深綠。初位深縹ニ改ラレ侍ル。

皆如是品々アル事ナレドモ。中古以來。四位已上ノ袍フシカ子ニテソムルユヘニ。其差別ミエザル也。仍四位ヨリ一位迄オシナベテ黑シ。今モ五位緋。六位綠也。此外ノ品ナクナレリ。零落ノ儀也。但四位ニ黑クスルハ。深緋ヲ染ルニ紫艸三斤ヲ加ルユヘニヤ。サレドモ四位ト三位トノ色ハカハルベキコト也。參議正四位下庶明。天曆五年二月中納言ニ任テ從三位ニ叙スル時。九條右丞相ヨリ淺紫ノ袍ヲヌギテツカハス。又資房記ニモ三位ニ叙シテ袍ヲ改ルヨシ見エ侍ルモノ也。

袍文。

主上。

桐。竹。鳳凰。上皇。菊。唐草。窠ノ中ニ八葉菊。將軍家。無レ輪。任槐以後。竹。桐。

攝家。丁子。唐草。杏葉。多須支。龍膽。關白ニナリテハ。雲立涌。大閣ノトキ雲ニ鶴也。又攝錄ノ時。夏ノ文。浮線蝶ノ丸ナリ。土御門<sup>運方</sup>大納言抄ニ當時攝政九條。窠ノ中ニ唐草。近衛流。納言ノ時ニ立涌ノ中ニ窠ノヨシシルス。三條大炊御門中院ノ黨。日野勸修寺等輪ナシ。西園寺。德大寺。花山院。四條ナド轡唐草。大臣以後ハ異文トテ。三條。大龜甲。西園寺。丁子。唐草。大炊御門。龜甲。洞院。藤。鞆繪。或藤丸也。此外猶有ルベシ。家々相傳ノ子細有事ナレバ。他家ノ事強テハシルシガタシ。各冬ハ志々羅地ノ綾。裏ハ平絹。夏ハ穀。又異文ノ袍ハ熨地也。

### 下襲。

近來上下別ニ切テ用ユ。下襲ノ下ト稱ス。裾ノコトナリ。冬ハ表浮線綾。色白。裏ハ遠菱ノ綾。色蘇芳ノ濃打也。是ヲ蘇芳打ノ下襲ト云。

色家ハ立菱ノ文。諸家ハ横菱ニ織ル。又壯年ハ四菱ノ重文也。中陪アリ。老者ハ一菱ノ遠文濃色也。或ハ裏表共ニ不<sub>レ</sub>打。只張テモ用ユ。野々宮<sup>公卿</sup>左府常ニコレヲ着ル。夏ハ穀ノ遠菱ノ文。蘇芳。裏ナシ。生蘇芳ノ下襲ト云是ナリ。又禁色ヲ聽サレザル殿上人以下ハ。躑躅ノ下襲トテ平絹也。色ハ蘇芳ノ下襲ニ同ジ。夏ハ二藍ノ穀ナリ。文。右ノ外莒ガタ。杏葉。以下下襲ニヨリテ可有替事也。

### 寸法。

代々ノ制符同ジカラズ。近代用來ハ。攝關一丈二尺。大臣一丈。大納言八尺。中納言六尺。參議五尺。四位五位四尺。皆踵ヨリ餘ルホドヲ云。是後堀川院ノ制符ナリ。主上ノ御裝束モ。御下襲。半臂。打衣。袖。單。表ノ袴。大口ナドハ臣下ニ不<sub>レ</sub>替。但文小葵也。又裾ヲ別ニスルコト不宜云々。



火色。

裏表共ニ打。臨時客。賭弓。御賀ナドノ極テ晴ニ。無止事。人はヲ着ス。

紅梅。

表紅梅。裏蘇芳。冬ヨリ春ニ至テ晴ノ時着ス。  
〔以下イ无〕臨時客。塔供養ナド例ナリ。

赤色。

拜賀。春日賀茂等參詣ニ用ユ。

松重。

表青。裏紫也。朝觀。行幸。行啓。競馬等ノ晴ニ四季共ニ通用。

花葉色。

經黃。緯欸冬。裏青打。多ハ三月着用ス。

紅葉。

表黃。裏蘇芳。九月ヨリ十一月マデ着ル。是ヲ黃紅葉ト云。青紅葉。表青色。裏朽葉。櫨紅葉。而蘇芳。裏黃色。蝦手紅葉。面薄青。裏黃色。數多品々侍ルナリ。

菊。

表白。裏蘇芳。十月十一月晴ノ時用ユ。

裏欸冬。

表黃。裏紅。春冬臨時客。御賀。春日詣。行幸ナドニ用ユ。花欸冬。面薄朽葉。裏黃。白欸冬ナドト替リイ无。モ巾侍也。

女郎花。

表。經青。緯黃。裏。青。七八月ニ着ル。

柳。

表白。裏青。冬ヨリ春マデ着ル。又黃柳トテ有リ。着用ノ儀同ジ。〔以下イ无〕臨時客。御賀。旬ナド例アリ。

櫻。

表白。裏蒲萄染。春ニケ月ノ間晴ニ着ル。或說ニ第一ノ大臣常ニ是ヲ着スルトイヘリ。櫻朮木。面朮木。裏赤花。樺櫻。面蘇芳。裏赤花。等色替レリ。着用ノ儀同ジ。〔以下イ无〕臨時祭。任大臣。除目ナド例有。

躑躅。

表白瑩。裏濃打。冬ヨリ春ニ至テ用。〔以下イ无〕拜賀。春

日祭例有。

青朽葉。一説。面。經青。緯黃。裏青。是チ青朽葉ト云。

木賊色也。最勝講ノ頃ヨリ七月中旬マデ着

ス。是極熱ノ時ト云リ。サラヌ時モ宿老之ヲ

着ル。又極熱ノ頃ハ右ニシルスニ藍ノ下襲

モ用ユ。七月ヨリ九月ニ至テ用ユル也。黃朽

葉モ着用ノ儀同ジ。

紅。

紅梅ヨリハ色厚也。コキ是モ晴ノ時用ルナリ。邂

逅ニ見タリ。

白重。

裏表共ニ白シ。更衣ノ日上下着スル。宿老ハ

更衣ナラヌ日モ着ル。又極熱ノ時モ是ヲ着

スト見エタリ。又衛府闕腋ノ時ハ白重ヲ着

セズトイヘリ。

蒲萄。

表蘇芳。裏花田。冬ヨリ春ニ至テ是ヲ着スル

也。〔以下イ无〕春日行幸ナド例アリ。

曳倍木。

色蘇芳。濃薄ハ時ニヨル。多ハ炎天ノ頃はヲ

着ル。諸社ノ行幸御幸。齋院ノ御禊。賀茂詣ナ

ドニ例アリ。

唐綾。

是ハ唐裝束ニテ。文色ナド強チ定事ナシ。下

襲表袴ニ唐綾唐ノ顯文紗ナドヲ着スル事

也。凡唐裝束ハ。一日晴ト稱シテ尋常ニ替リ

侍ル也。仍定ル儀ナシ。又唐裝束染裝束ハ。老

者ハ用之侍ラザル事トミエタリ。

右袍。下襲。時ニヨリ事ニヨリテカハレリ。

仍先例ヲ追テ着用シ侍ル事ナリ。着用ノ

先例シルシ侍ルベケレドモ。事多ニヨリ

テ。先色メ計ヲシルシ侍ル也。

半臂。

唐ノ高祖其袖ノ長ヲ制シテ減ズ。是ヲ半臂ト號ス。禁色ヲ聽ル人。冬。襴。羅。薄物ノ濃打。夏ハ大文ノ黒半臂也。近代春冬ハ常ニ不着。五節ノトキ。袒裼ノ時。若ハ騎馬ノ時はヲ着ル。非色ノ人ハ。冬ハ平絹濃打。夏ハ穀ノ二藍文。菱ノ三重多須岐也。此外下襲ニヨリテ其色ヲ儲シト見エタリ。

袖。

公卿ハ赤キ綾ヲ用ユ。中壯年ノ人ハ染タルヲ着ル。文ハ。將軍家桐唐草。諸家少年重文。中年以後遠菱也。凡袖ハ春冬計用ユ。近代一向是ヲ畧ス。又宿老ニ至リテハ白キヲ用ル也。

單。

紅ノ綾。文ハ菱。四季共ニ着ル。春冬フクサバリ。夏秋ハ張單也。是ヲ夏ハ引倍支共號ス。是

モ近代ハ袖單トテ。帷ニ袖計ヲ付テ用ユ。極老者ハ白キヲ用ヒ侍ナリ。

大帷。

紅ニ染タル大帷也。汗取ノ帷ト號シテ。夏秋是ヲ着ル。近代單ノ袖計ヲ付テ。夏冬共ニコレヲ着ス。老人ハ白キ帷ナルベシ。

表袴。

夏冬無差別。少年浮線綾。霰地ニ窠ノ文。中年ヨリハ藤ノ丸堅文。是ハ公卿以下禁色ヲ聽ル人着ル。非色ノ人ハ平絹ノ瑩裏ハ何レモ紅打也。但老人ハ不<sub>レ</sub>打ナリ。此外承保大井川ノ行幸ニ。京極關白唐錦ノ表袴。正治ニ猪<sub>家實</sub>猥關白萌木ノ表袴ヲ着用セシハ。唐裝束ノ時ノ事ナリ。

大口。

赤大口トテ。紅ノ生ノ平絹ナリ。又ハ張絹ヲモ用ユ。但近代見エズ。宿老ノ人ハ白キ張袴



也。

襪。

練貫ヲ用ユ。宿老ハ平絹。唐裝束ノ時ハ色々美ヲ盡シタル事ドモ見エ侍ル。凡襪ハ束帶ノ外着用セザル事ナリ。御免ヲ蒙テハ。直衣衣冠ニテモ用ヒ侍ルナリ。

笏。

天子ノ御笏。上下方也。是朝拜ヲ受タマフ時ノ御笏也。上古ハ神祇ヲ拜給時持給フハ前圓ナリ。臣下ノ笏。古ハ五位以上ハ象牙。白木ノ笏ヲ通用ス。前詔後直也。六位以下木ヲ用ル。前挫後方也。又五位マデハ散位モ是ヲトル。六位以下ハ散位ノ輩トル事ヲユルサルヨシ。長元七年法曹ノ勘文ニ見エタリ。異朝ニハ天子球玉。諸侯象牙。大夫ハ魚鬚又ハ竹ナリ。士ハ木ニテカザリ。或象骨ヲ以テカザルヨシモ見エタリ。兩朝共ニ形相ノ替リ

扇。

ヲ以テ尊卑ヲシメス。然ニ中古以來。禮服ノ時バカリ牙ノ笏ヲ用ヒ。常ニハ竝テ木ノ笏也。一向制ノ定ル事ナシ。但主上上皇ハ。近代マデモ牙ノ笏ヲ用ヒ給フト見エ侍ル。

宿老ノ公卿。夏冬ヲワカズ。束帶直衣ノ時はヲ持ツ。年若キ公卿。炎天ノ比蝙蝠。冬ハ杉目。泥薄ノチラシ檜書タルヲモツナリ。攝家用ヒ來ハ。盛年ノ時。兩方ノ面ニ藤ノ丸ヲ糸ニテ這ハシテ押タル檜扇ヲ持。又十七八歳ノ比ハ白キ糸ノ閑アマシタルヲ藤ノ房ニ結テ持。一向十五以前ハ杉ノ横目ニ繪ヲ書タル蝶鳥ノ蟹目ノ扇也。古ハ檜扇ニ公事ノ次第ナド書テ持タルト見タリ。

帖紙。

陸奥ノ紙ヲ用ルヨシ見エタリ。時ニヨリテ薄様檀紙ナドヲ用ル事モ侍ルナリ。

帶。

直衣ヲ用ル人ハ直衣ノ切ヲ用ル。サナキ人ハ下襲ノキレヲ用ユ。夏冬ノカハリモ直衣下襲ニ同ジ。

劔。

飭劔。

諸ノ節會。内宴。御禊。行幸ナドニ公卿是ヲ帶ス。如法ノ飭劔近代不及見也。仍テ其樣委曲記シガタシ。裝束ハ紫滑藍草ナドト見エタリ。鞘ハ大略木地ノヨシシルセリ。安元二年三月四日太上天皇ノ御賀ニ。松殿關白紫檀地ノ金作ノ螺鈿ノ劔ヲ帶ス。鞘ノ上下ニ水精ノ伏龍アリ。目ノ内ニ玉ヲ入ラル。是飭劔歟ノヨシ月輪殿記ニ見エタリ。

飭劔代。

内宴。節會。御元服等ニ公卿是ヲ帶ス。代トハ飭劔ノ代トイフナルベシ。北山抄ニ是ヲ内

宴ノ劔ト稱スル由載タリ。承元四年四月朔日峯禪閣ノ記ニ云。今日關白飭劔代ヲ帶ス。其勢螺鈿劔ノゴトシ。金ヲ以テ伏輪ヲカクル。紫檀地ノ上ニ唐草ヲ貝ニテ押也。柄ニ瑠璃ヲ用ユ。露同ジク瑠璃ナリ。殊勝ノ物ト云云。

螺鈿劔。

行幸ニ公卿以下是ヲ用ユ。節會ノ日ハ諸衛ノ將佐是ヲ帶ス。又節會ノ日。執政ノ人代ノ代ト號シテ此劔ヲ用ル也。御堂ノ流。元三ノ間ハ螺鈿ヲ帶ス。殿上人ノ時ハ蒔繪ナリ。此外讓位。任大臣。立后。列見。定考。或ハ無止事。佛事ニモ用ユ。列見。定考。行幸。節會ニハ少納言八省ノ輔モ是ヲ帶ス。御禊ニ帶弓箭。公卿是ヲ帶ス。賀茂詣ニハ大臣帶之。宇治左府ハ拜賀并競馬ノ日モ帶セシナリ。拜賀ニハ公卿ノ後帶スルト見エタリ。又九條右丞

相ノ曰。列見。定考ハ是官中ノ大事也。公卿以下螺鈿ノ劔可<sub>レ</sub>帶云々。其様。地ハ沈地。紫檀地等ナリ。木地ニ金貝ヲ摺ル物ナリ。

將軍家拜賀此劔例。

康曆元年七月廿五日鹿苑院<sub>義備</sub>准后大將拜賀ノ時。沉地螺鈿劔ヲ用ラル。

永享二年七月廿五日普光院<sub>義教</sub>將軍大將拜賀ニ沉地螺鈿劔ヲ用ラル。

康正三年七月廿五日慈照院<sub>義政</sub>准后大將拜賀ニ同劔ヲ被<sub>レ</sub>用也。

攝家。

嘉禎三年正月三日光明峯寺<sub>道家</sub>攝政ノ臨時客ニ普光院<sub>良賢</sub><sub>于時右大臣</sub>紫檀地ノ螺鈿。水精ノ柄ノ劔ヲ用ユ。

諸家。

仁平二年正月廿六日大饗ニ宇治ノ左府金作ノ紫檀地。螺鈿劔ヲ用ユ。文鸚鵡。唐草。綠螺

鈿伏輪アリ。柄瑠璃ナリ。<sub>忠實</sub>禪閣是ヲ給フト云。槌螺鈿劔。

帶スル儀。蒔繪ト螺鈿ト通用ノ劔ノヨシ峯<sub>家</sub>殿下ノ記ニ見エタリ。又金槌ハ過差ノ儀ナリ。行幸ニ公卿着用ノヨシ記セリ。通用ノ劔トハ。鞘ハ蒔繪ニシテ。槌ノ中ヲ螺鈿ニスルナリ。

應永十五年四月廿五日。福照院<sub>滿基</sub>關白ノ記ニ槌螺鈿トハ槌ノ中ニ螺鈿ヲスル。鞘ハ蒔繪ナリ。是通用ノ物ト記セリ。或記ニ槌ノアル螺鈿ノ劔ヲ槌螺鈿ト存ズル輩アリ。誤タル説ト云々。其様。或金銀ノ槌。或ハ瑠璃水精ノ槌ニ或ハ唐草ナド。イロノ文ヲ槌ノ中ニ摺ナリ。

蒔繪螺鈿劔。

遠所ノ行幸ニ公卿是ヲ帶ス。又拜賀ノ日必此劔ナリ。或記ニ此劔ヲ螺鈿ト蒔繪ト通用



ノヨシ思輩アリ。僻事ナリ。

將軍家拜賀ニ此劔ノ例。

建武元年十一月十九日等持院將軍參議拜賀

ノ時。蒔繪螺鈿ノ劔帶セラル。

長祿三年慈照院准后左大臣ノ拜賀ニ同ジク蒔

繪螺鈿劔ヲ帶セラル、ナリ。

攝家。

元永二年知足院攝政内大臣ノ拜賀ニ蒔繪地

鸚鵡螺鈿劔ヲ用ラル。

諸家。

仁平元年八月十日宇治左府春日詣。蠻繪ヲ

蒔。鸚鵡ノ螺鈿劔。同十一日。金作ノ沃懸地ノ

螺鈿劔ヲ用ユ。

蒔繪劔。付蒔繪樋有劔。

是ヲ平塵ノ劔ト號ス。尋常着用ノ物也。拜賀。

行幸。弓場始。御讀經ナドニモ帶スルナリ。治

承元年十二月二日中將良通拜賀。唐草蒔繪

劔ヲ帶ス。此劔御堂殿ノ御物也。拜賀ノ時必

是ヲ帶スルヨシ月輪殿下ノ記ニ見エタリ。

將軍家有樋劔ノ例。

應永二十三年四月廿日内大臣勝定院將軍義持石清水

八幡宮臨時ノ祭ノ日。樋アル蒔繪ノ劔ヲ用

ラル。

攝家。

保安四年三月廿九日臨時ノ祭ニ攝政金作ノ

蒔繪ノ樋ノ劔ヲ帶ス。瑠璃柄也。或記ニ騎馬

ノ時瑠璃水精ノ柄ヲ用ザル事ト見エタリ。

螺鈿野劔。

近衛ノ次將外衛ノ佐等。行幸ニ之ヲ帶ス。又

春日等ノ遠所ノ行幸ニ。公卿ノ大將次將ナド

着用ス。邂逅ノ事ナリ。攝家一流ノ所爲ノヨ

シ後成恩寺記ニ見エタリ。永長二年左大將。

知足院知足院殿下。天永二年中納言ノ中將忠通。承元四年

左大臣光明峯寺殿下。ナド。春日行幸ノ日此劔ヲ用ラ

ル。

蒔繪野劔。

大將等ノ直衣始并御幸ノ供奉。直衣ヲ着ル時是ヲ帶ス。納言ノ直衣始ニモ野劔ヲ用ル例アリ。又直衣衣冠ノ時モ帶ス。布袴ニモ是ヲ帶ス。其様。毛拔形アリ。平緒革緒時ニシタガフ。又尻鞆アリ。虎豹等ノ品アリ。尻鞆ニオイテハ公卿遠所ノ行幸ノ時ニ是ヲ用ル。賀茂石清水等ノ臨時ノ祭ノ舞人ハ常ノ事也。凡野劔ニナリテハ蒔繪螺鈿。シヒテハ差別ナキト見エ侍ル也。

將軍家此劔ノ例。

建久元年十二月二日右大將賴朝直衣始ノ時。革緒ノ野劔ヲ帶ス。

康暦二年正月廿日義滿鹿苑院准后大將ノ直衣始。

永享二年十一月九日義成普光院將軍大將ノ直衣

始。

康正二年正月廿五日義政慈照院准后大將ノ直衣

始。

文明十九年正月廿五日義尚常徳院大將ノ直衣始等。皆蒔繪螺鈿ノ野劔ヲ帶セラレシ也。

攝家。

元永二年二月十四日忠通法性寺攝政大將ノ直衣始ノ時ニ野劔ヲ用ユ。

文治四年正月廿七日愛實月輪殿下氏ノ長者ノ後

初テ春日ノ社ヘ參詣ノ時。衣冠ニ海浦ノ野劔ヲ帶ス。先例小狐ノ劔ヲ用ユト云々。同日

内府。良通。二位中將。後京極良經同衣冠ニ野劔ヲ用

ユ。

諸家。

康和三年四月祭ノ日。雅實久我内大臣齋院ニ參時。布袴ニ野劔ヲ帶ス。

平鞆劔。

上皇變ノ御幸ノ時。御車ノ内ニ入ラル。將軍家攝關以下公卿出行ノ時。車ノ内ニ入テ。下車ノ後ハ前駟ニモタシムル也。帶スル事ナシ。

將軍家例。

寛正四年十一月二日。義政慈照院准后等持寺八講ノ時。冷泉左衛門佐永祿朝臣平緒ノ御劔ヲ持ヨシ見エタリ。

諸家。

貞和二年十一月九日。公實中園相國風雅集竟宴ノ日。院參ノ時。革緒ノ劔ヲ車ノ内ニ入。下車ノ後前駟上首ニモタシムルヨシ日記ニ見エタリ。其様。常ノ蒔繪野劔ニ革緒ヲ付テ。柄ニ毛拔形ノアルモノナリ。則毛拔形ノ劔ト號ス。或革緒ノ劔トモ號スル也。

平緒。

紫綵。劔裝束  
紫革。

諸節會行幸。拜賀。大嘗會之御禊。任大臣ノ大饗。春日祭。御賀等之日是ヲ用ユ。又若年ノ人ハ尋常ニ是ヲ用ユ。繡孔雀。尾長鳥。桐。竹。鳳凰。唐草。四季ノ花。黃鳥。鶴。松。千鳥ナド也。強テ定事ナシ。紫ニ青綵相交平緒ハ春用ユト見エタリ。

蘇芳綵。

此平緒。執柄ノ外他人用ザル由。寛治六年八月九日ノ記ニ見エタリ。

青綵。劔裝束  
藍革。

或棟綵ト號ス。四五月ノ比最勝講ナドニ是ヲ用ユ。藥玉。卯花。盧橘。瞿麥。燕。孔雀。唐草ナドヲ縫ト見侍ル。

紺地。劔裝束  
藍革。

讓位。節會。行幸。御幸。拜賀已下。凡尋常用ル平緒也。又小忌之舞人。甲ヲ着ル次將紺地ヲ用ル也。古人多ハ祝ノモノヲ縫。又唐花。千



鳥。松。梅。雉。鶴ナド縫也。昔ハ紺地ニ蘆手ヲ縫タル平緒。御堂關白以來攝關家ニ傳テアリシト也。

將軍家拜賀ニ此平緒ノ例。

建武元年十一月十九日等持院將軍參議ノ拜賀ニ此平緒ヲ用ラル。

應永十四年七月十九日勝定院將軍大將拜賀時。紺地ヲ用ヒラレシ也。

攝家。

寛治八年四月十四日賀茂詣ニ京極關白此平緒ヲ用ユ。同日。宇治關白同紺地ヲ用ヒラル。

承元四年十月廿五日讓位ニ光明峯寺大納言

ノ大將ニテ紺地ノ唐草ノ平緒ヲ用ヒシ也。

萌木地。劔ノ裝束  
藍草。

春是ヲ用ユ。紅梅白梅ナドヲ縫ト見エタリ。

安元二年三月四日御賀ノ時ノ舞人中ニ。萌木ノ平緒ヲ用ユルヨシ見エタリ。

紅梅地。劔裝束  
紫草。

多ハ賭弓。臨時客。此平緒也。又染裝束ノ時はヲ用ユ。繡ニハ遠山。小松。白梅ナドナリ。又

火色ノ下襲ヲ着ル人。此平緒ヲ用ユト見エタリ。

嘉保二年臨時客ノ日。後二條關白火色下襲ニ紅梅平緒ヲ用ラル。

櫛綵。劔裝束藍草。  
或櫛草。

九十月是ヲ用ユ。又御襖大將代ヲ勤ル時用ユ。繡ハ菊。龍膽。紅葉ナドト見エタリ。具平親王ノ平緒。櫛綵ニ菊ノ枯野ヲ縫トシルセリ。

帶。

有文巡方帶。或隱文ト  
稱ス。

節會。行幸。行啓。列見。定考以下公事。又無止事。佛事。拜賀。賀茂詣。御賀等ニ高位人はヲ用ユ。文ノ事。鬼形。獅子形。唐花。唐草ナド也。

眞實ノ玉ハ火ニモ不<sub>レ</sub>燒トイヘリ。凡裝束ノ具足ノ中ニ劔笏帶ニハ名物共アリト見エタリ。

將軍家拜賀此帶ノ例。

建武元年十一月十九日等持院將軍參議拜賀ニ有文巡方ヲ用ラル。

康暦元年七月廿五日鹿苑院准后大將拜賀ニ有文巡方ヲ用ラル。

長祿三年十二月十五日慈照院准后左大臣拜賀ニ此帶ヲ用ヒラレシナリ。

攝家。

仁平元年八月十日宇治左府春日詣ニ獅子形ノ帶ヲ用ユ。又光明峯寺承久三年四月攝政。安貞二年十二月關白。各拜賀ノ日同帶也。

無文巡方帶。

天子帛ノ御衣ヲ召時。此帶ヲ用ヒ給。凡人ハ是ヲ不<sub>レ</sub>用ヨシ。兼良後成恩寺記アリ。

有文丸鞆帶。

有文巡方ト通用ノ物也。仍着用ノ例巡方ニ同ジ。但節會行幸ニアラザル日便アリト見エタリ。

無文丸鞆帶。

尋常着用ノ物也。春日詣ノ御前。布袴ノ時丸鞆ヲ用ヒ。束帶ノ時ハ巡方ヲ用ルヨシ見エタリ。又蒔繪ノ劔ヲ帶スルニハ此帶ヲ用ユト見エタリ。巡方丸鞆共ニ玉ノ帶ノ事也。彈正式白。白玉帶ハ三位已上并四位ノ參議マデ用ルヨシ見エタリ。

馬腦帶。

舞人并小忌ヲ着ル人ナド着用ス。又四位ノ人尋常是ヲ用ルヨシ。通方土御門大納言ノ抄ニ見エタリ。但彈正式ニ馬腦ハ五位已上通用ストアリ。又應德三年正月朔日。左大弁匡房于時從三位。馬腦ノ帶ヲ用ユ。保元三年内宴ノ日。關

白法性寺。赤色ノ袍ニ馬腦ノ帶ヲ用ユ。安元元年四月。侍從良通（小イ）馬腦ノ帶ヲ用ヒシ也。

金青玉帶。

承暦二年七月廿八日。相撲ノ召合ノ時。殿上人巡方帶ヲ用ユ。然ニ長忠金青玉帶ヲ用ユ。不可然由日記ニ見エタリ。安貞三年正月廿七日。峯關白法性寺寶藏ヲ開テ。帶ノ箱三合ヲ取出ス。此中ニ金青玉ノ帶二腰アリ。

瑠璃玉帶。

治承四年御卽位日。主上可レ召御帶。兼日院ヨリ獻セラル、有文ノ瑠璃ノチイサキ御帶ノヨシ信範記ニ見エタリ。

犀角巡方帶。

節會。行幸以下。四位五位是ヲ用ユ。又弁官拜賀等ニ用ル也。

犀角丸鞆帶。

用事犀角巡方ノ帶ニ同ジ。但五位尋常是ヲ

着用ス。彈正式。班犀ハ五位已上通用ノ由見タリ。

白石帶。

大外記是ヲ用ユナリ。彈正式。紀伊國石ノ帶ノ白クカバヤケルハ。六位已下不可用ヨシ見エタリ。

烏犀帶。

尋常六位是ヲ用ユル。彈正式ニ六位已下ノ帶ノヨシ見エタリ。

魚袋。

異朝ノ儀。古ハ算袋。魏文帝易テ龜袋トス。唐高祖始テ魚袋ヲ諸臣ニ給フ。當朝ノ儀。延喜式ニ參議以上及紫ヲ着ル諸王ノ五位已上金魚袋ノヨシ。自餘ノ四位五位銀魚袋ノヨシ見エタリ。節會。大嘗會。御禊。內宴。臨時祭使。二宮大饗ナドニ是ヲ着。又御禊ノ時。四位五位トイヘドモ國司ヲ兼ル人ナラビニ外記史



ハ着ザルヨシ見エタリ。

履。  
〔草鞋〕  
押鞋。

天子尋常ニメス。幼主ノ時ハ糸鞋ヲ用給フ也。

靴。

朝賀。小朝拜。節會。内宴等ニ天子モ召。臣下ハ此外即位。行幸。行啓。列見。定考。駒牽。讓位。立后。立太子。任大臣。釋尊等ニモ是ヲ用ユ。

半靴。

直衣。衣冠。布衣ニテ騎馬ノ時モチユ。行幸御幸ナドニ束帶ニテモ用ユ。凡騎馬ノ時ノ履ナリ。

淺履。

尋常公卿以下悉ク是ヲ用ユ。禁色ヲ聽タル人ハ。履敷ニ表袴ノ織物ヲ用ユ。非色ノ人ハ

平絹也。又文ヲ押ス。大臣大將文ヲ不押。惣而執柄家ニハ文ヲ押ザルヨシ見エタリ。

深沓。

外記廳ノ政ニ公卿是ヲ用ユ。尋常ニモ甚雨深雪ノ時着用スル也。

鼻切沓。

或ハ雁鼻ト稱ス。臨時祭。諸社ノ行幸。公卿以下是ヲ用ユ。舞人試樂ノ日モチユ。昔ハ四位五位ノ上官計是ヲ用ユル由見エタリ。或說。雁鼻ハ又替リタルヨシ記セリ。

藁深沓。

雪見ノ御幸。上皇着御ノヨシ見エタリ。  
〔草鞋〕  
草履。

御齋會行香ノ間。王卿着用ノヨシ見エタリ。  
糸鞋。

舞人及諸衛ノ六位是ヲ着用ス。殿上ノ舞人ノ時。風流ノ糸鞋見タリ。主上太子幼時召ナ

リ。將軍家伊勢參宮ニ被<sub>レ</sub>用之ハ又別之事也。  
麻鞋。

手振走孺ノ着用スルヨシ見エタリ。

毛履。

檢非違使以下。便ニ隨テ着用ス。

衛府具足。

卷纓。

卷纓ハ大將以下五位已上。弓箭ヲ帶スル輩  
是ヲ用ユ。但卷纓ト云ト柏夾ト云ト有<sub>レ</sub>差別。  
柏夾ノ時。纓ノ卷樣。末外ニアリ。輪穴ハ内ニ  
アリ。柏夾ノ木ニ差別アルナリ。

細纓。

武官ノ輩六位已下是ヲ用ユ。六位藏人はヲ  
用ルモ武官ノ故也。

老懸。

武官ノ人。卷纓ニ是ヲ用ユ。但六位ハ細纓ニ  
用ル也。其品厚薄ノ替リアリ。古ハ薄ク近代

ハ厚キヲ用ユル也。緒ハ紫或ハ紺ノ糸ナド。  
時ニヨリ人ニヨリテ替ルベシ。納言ノ大將  
ハ行幸等ニ弓箭ヲ帶。仍纓ヲ卷テ老懸ヲ用  
ユ。大臣ノ大將ニイタリテハ弓箭ヲ不<sub>レ</sub>帶。隨  
身ニ令<sub>レ</sub>持之。仍老懸ヲ不<sub>レ</sub>懸ナリ。然ニ鹿苑  
院准后ハ。永徳二年ノ行幸ニ左大臣ノ右大  
將トシテ纓ヲ卷。老懸ヲカケ。弓箭ヲ帶セラ  
ル。但コレハ別勅ノヨシ見エタリ。後例タル  
ベカラザルヨシ。成恩寺關白經編シルサル。凡大  
臣ノ大將弓箭ヲ帶スルコトハ。雷鳴陣ノ外  
先例ナキヨシ見エハベルモノナリ。  
〔テシイ〕

袍。

位襖〔袍イ〕トテ。武官ノ輩ハ闕腋ヲ用ヒ侍ル也。事  
ニヨリ攝關大臣ナドモ闕腋ヲ用ヒ侍レド  
モ。尋常弓箭ヲ帶スル輩ニ限リテ。闕腋ヲ着  
用シ侍ル事也。

弓。

蒔繪或ハ摺貝。彌ハ銀ノ彫物。或塗物。其文ハ蒔繪ニ隨ヒテ書。取柄上下ノ卷ハ赤或ハ紫。紺糸等也。樺ハ若年ノ人。<sup>〔紅イ〕</sup>紺梅ノ檀紙并薄樣ヲ以テ是ヲ卷。宿老ノ人ハ白キ檀紙ヲ用ユ。但建曆元御禊ノ日。少將爲家青キ薄樣ヲ以テ卷。<sup>後日及ニ沙汰也。</sup>後鳥羽院ノ仰曰。年齡ノ沙汰非正儀。何モ白樺ヲ以テ可卷云々。建曆ノ度。中將資平眞樺ヲ以テ卷之。其色紅梅ノ色ナリ。

籠。

公卿蒔繪。或螺鈿。非參議ノ次將。木地螺鈿。或ハ木地蒔繪ヲ用ユト見エタリ。裝束藍革。錦革。多ハ紫革ナリ。平胡籙。木地螺鈿ハ行幸ノ日毎ニ用之。蒔繪ハ例幣行幸ニ用之。螺鈿ノ劔ヲ帶スル時モ妨不可有也。蒔繪螺鈿ハ兩方ヘ通用ノ物也。壺胡籙。讓位節會等ノ警固ノ時。衛府ノ公卿以下帶之。但大將ハ壺ヲ負

ザル由見エタリ。

久安五年十月朔日。日吉ノ行幸ニ。三位中將兼良平胡籙ヲ帶ス。紫檀地ノ螺鈿ノ籠也。

壽永二年二月廿一日朝覲行幸ニ。大將良通。平胡籙。中將良經。平胡籙。

嘉禎四年三月廿八日。春日御幸ニ。左大將<sup>圓明寺實</sup>

經。平胡籙。沈地。蠻繪。螺鈿。紫革。後緒蘇芳

綏丸緒。羽面星丸。裏妻黑。<sup>共高名ノ物也。</sup>弓蒔繪。丸緒

ヲ引ト云々。

箭。

籠。

黑漆也。上差ハ水精ノ鐫ナリ。平胡籙ニハ落矢マデ廿一筋。壺胡籙ニハ六七筋歟。慥無所見。

筈。

水精ナリ。

羽。



大將以下次將切生。或抄曰。鷺羽ヲ以テハタ〔タイ〕  
紅梅ノ檀紙。若ハ白キ紙ニテ卷之。

眞樺。或白キ檀紙。色紙等ナリ。壯年ノ人ハ紅  
梅。或薄樣。其品弓ノ樺ニ同ジ。

矢尻。

金銅。上差加利末多。

間塞薄樣。

尋常妻紅ヲ用。大理ハ白色ノ紙。若ハ檀紙ヲ  
用ユト見エタリ。

表帶。丸緒トモ云。

公卿蘇芳綵。次將蘇芳青ヲ相交也。春ハ紅梅  
地。青文。夏ハ青地。紫文。秋ハ黃地。青文。好事人  
如此用之。但常ハ蘇芳青相交綵也。水精或ハ  
瑠璃ノ露アリ。宿老ノ人ハ露ナシト見エタ  
リ。遠所行幸ノ時。上達部次將野劔ヲ帶スル  
時。表帶ヲ引。五位次將ハ是ヲ結。舊記ニ表帶

ヲ結トモ引トモアリ。同事ト見エタリ。

右劔。平緒。玉帶。弓箭。沓以下着用先例品  
品是アリ。事繁ニヨリテ畧シテ記侍ラザ  
ル也。

布袴。

常ノ袍ニ指貫ヲ着テ。下襲劔笏等ヲ用ルヲ  
布袴ト云。攝政直廬ニテ叙位除目等以下ノ  
公事ヲ行フ時着用之。或ハ大臣等拜賀トシ  
テ來入ノ時用之。此外四方拜。神社參詣。執  
智ナドノ公事ニアラズシテ無止事。時皆例  
アリ。又攝政關白ナドノ前駐魏々タル時用  
ユ。或春日詣ノ御前ノ辨少納言等着用スル  
也。將軍家ニモ用ラレ侍ル也。  
嘉慶二年正月十六日久我相國具通。右大臣ノ  
拜賀トシテ鹿苑院准后ノ亭ニ參。准后布袴  
ヲ着用セラレシ也。

衣冠。

常ノ袍ニ指貫ヲ着スルヲ云。公事ニアラズ  
シテ尋常參内ノ時用ユ。或ハ春日詣。競馬。修  
正。御幸。院ノ尊勝陀羅尼ナドノ時ニハ劔笏  
ヲ用ユルナリ。晴ノ時ハ衣單出衣等モ重ル  
事アリ。

將軍家ノ例。

文和三年二月廿四日。等持院將軍參内ニ。衣  
冠。浮織物ノ指貫ヲ用ラル。

延文二年七月廿九日。寶篋院將軍參内ノ時。  
衣冠ヲ着用セラル。

康暦元年四月廿八日。鹿苑院准后。于時右大  
將ニテ參内ノ時。衣冠ニ下結ヲ被用也。

同社參之例。

至徳二年八月廿九日。鹿苑院准后春日社參詣  
ノ時。衣冠ニ下結ヲモチヒラル。

寶徳四年三月九日。慈照院准后春日社ニ參詣  
ノ時。衣冠ニ下結ヲ用ラレシ也。

攝家之例。

嘉禎三年四月十日。御室開田准后入室ノ時。

普光園院。于時右大臣。衣冠。白衣。白キ生ノ單。薄色

ノ生ノ奴袴ヲ被用。園明寺。于時左大臣。薄青ノ衣。

白キ生ノ單。半色ノ浮織物ノ奴袴。紅ノ下袴

ヲ用ユ。

應永二年九月十七日。鹿苑院准后大講堂供養

ニ登山之時。福照院關白。于時大納言。衣冠。蒔木ノ唐

織物ノ指貫。腹白ノ結。紅打ノ衣。生ノ單。紅

ノ下袴等ヲ用ラル。

直衣。

春冬。表。白志々羅綾文。浮線蝶ノ丸。少年人

ハ丸ノ勢小クシテ繁居之。長大ニ及ニ隨テ

次第ニ勢分ヲ大ニナシテ遠ク居ル也。裏。弱

年ノ人ハ紫。成長ノ時次第ニ薄クナシ。或薄

縹ニモスル也。猶又年老テハ大畧白キゴト

クニナス也。後ニハ一向白キ也。極テ宿老ノ

人ハ。表モ平絹ヲ用ユ。宿徳ノ直衣是也。童躰ノ人ハ。表白浮織物。繁文。裏紫ナリ。夏秋ハ裏ナシ。薄物。文三重多須支。或ハ弱年ノ人ハ二藍。次第ニ濃花田ヨリ薄花田。後ハ大略白キガゴトシ。袖ノ端捻之。文ハ弱年宿老共ニ以テ繁文三重多須支ナリ。童躰之人モ薄物。但文ハ小葵ナリ。色ハ二藍也。土御門大納言抄曰。直衣ハ禁色ヲ聽人夏大文ノ薄物。冬浮線綾。然ラザル人ハ夏ハ穀。冬ハ志々羅ノ綾ト云々。西宮抄ニ王者以下雜袍ヲユリシ人。直衣ヲ着用ストイヘリ。

### 直衣文。

天子。冬小葵。裏櫻重。夏單直衣。文以下臣下ノゴトシ。又御引直衣トテ尋常ニ召之。臣下ニ替レル直衣ナリ。是モ昔ハ御下直衣トイヘリ。近代御引直衣ト稱ス。僻事ノヨシ見エタリ。

### 冠。

此直衣ニ冠ヲ用ユルヲ冠直衣ト稱ス。強テ名目ニアラザレドモ。鳥帽子直衣ニ對シテ稱スル也。冠ノ品右ニ見エタリ。

### 鳥帽子。

此直衣ニ立鳥帽子ヲ着用スルナリ。假令冠直衣ヲ着シテ内ニ參。直ニ院參ノ時鳥帽子ヲアラタメ着ルヨシ。諸記ニ見エタリ。仙洞ハ右眉。攝家ハ小諸眉。諸家十六以前諸眉。以後左眉也。壯年立鳥帽子。老者折鳥帽子。攝家ナドハ折ザル事ト見エタリ。然ニ近代宿老ノ後はヲ折ナリ。諸家ハ十六ヨリ是ヲ折。清花大臣家ナドハ折ベカラザル事也。但鷹狩或ハ蹴鞠。馬上ナドノ時ハ折鳥帽子タルベシ。又社人如木ノ雜色等立鳥帽子ナリ。サレドモ是ハ柳佐比ト稱シテ各別ノ物也。又社人如木退紅等ハ暫時モ風折ヲ用ザル事ナ



リ。凡鳥帽子〔ニイ〕ヲ細鳥帽子。引立鳥帽子。平禮ナ  
ドノ替〔イモ〕リアルト見エ侍レド。近代ハ着用ス  
ル人ヲ見エ侍ラザル也。

天子直衣着御例。

建久二年十一月廿日五節參入。主上御裝束  
ヲメス。小葵ノ綾御直衣。同文ノ白キ御衣ニ  
領同單衣。紅打ノ御衣。濃紫ノ霞地ニ窠ノ文  
ノ御指貫。腹白ノ御結。紅ノ御下袴。白御檜扇  
等ト云々。

承久二年十一月十五日五節參入。主上御裝  
束小葵ノ御直衣。裏薄紅打ノ出衣。綿ヲ不  
レ入。半色  
ノ浮文ノ織物ノ指貫窠ノ文。腹白ノ結等着  
御。

太上天皇。

天養元年十月廿八日重仁親王着袴ノ時。上  
皇冠直衣。薄色ノ織物ノ指貫。紅打ノ衣ヲ出  
サルト云々。

將軍家。

貞和四年十二月十七日上皇新院ニ御幸。御  
直衣。出衣。二重織物ノ紫ノ御指貫。腹白之御  
結。

建久元年十二月二日右大將賴朝。四十四歲。建久  
三十七十三除目征夷大

將軍。直衣始ノ參内ノ日。直衣ニ藤丸ヲ固織物

奴袴。薄色ノ紅梅ノ衣ヲ出ス。

嘉禎三年十月。前大納言賴經。號ニ七條將  
軍。廿一歲。參内ノ

日直衣ヲ着用。

貞治六年三月廿九日寶篋院將軍義詮。于時大  
納言。卅八歲。

中殿ノ御會ニ直衣。薄色ノ固文織物ノ指貫。

紅打ノ衣ヲ出ス。

康曆二年正月廿日。鹿苑院將軍直衣始ニ二

藍ノ直衣。紫ノ織物ノ指貫。文藤ノ丸。紅ノ下

袴。腹白ノ結。紅打ノ衣等ヲ用ラル。

寛正五年十二月五日慈照院義政。于時左  
大臣准后。准后

十歲。新院ノ御幸ニ直衣如常。指貫花田織色。  
文雲立涌。被用。

童躰ノ例。

應永元年十二月十七日勝定院義持。元服以前

ニ直衣。紫浮織物。文小葵。綾蘇芳。文桐。唐草。單。綾濃色。文小葵。指貫。

紫二重織物。地文龜甲二白浮線蝶之丸。結腹白。下袴紅扇。横目檜椿。等ヲ用ラ

宿德之例。

文明十二年正月十日准后義政。于時左大臣。年四十八歲。年

始ノ參内ニ直衣。如常。指貫。白綾。襪。平絹ヲ用

ヒラレ侍ル也。

攝家。

寛治七年閏三月十日知足院關白。忠實。于時中納言。十七歲。

左大將ノ後始テ直衣ヲ着テ院ニ參ル。紅打

ノ出衣。紫ノ浮織物ノ指貫ヲ用ラル。

元永二年二月十四日法性寺攝政。忠通。于時内大臣。二十三歲。

大將ノ後始テ直衣ヲ着テ參内。紅打ノ出衣。

紫ノ浮文ノ指貫ヲ着用ス。

宿德ノ例。

文明十二年四月廿六日大染金剛院。持通。于前關白。六十五歲。

慈照院准后參内ノ日。生ノ白平絹ノ直衣。

同色ノ指貫ヲ着用ス。

欄ナキ直衣。

久安三年九月十二日法皇天王寺詣ニ宇治左

府仰ニヨリ欄ナキ直衣ヲ着ル。薄色。裏濃ト

云々。

香ノ直衣。

保延三年三月三日知足院前關白トシテ平等

院一切經會ニ。香ノ直衣ヲ用ヒラレシ也。

直衣ノ布袴。

直衣ニ下襲。指貫。劔。笏等ヲ用ユルヲ直衣ノ

布袴ト云也。布袴ヨリハ邂逅ノ事ト見エ侍

ル。保延六年九月廿九日大外記師元抄ニ。知

足院殿仰ニ云。御堂宇治京極ノ大殿ニ。昇進

并内辨官奏除目執事等ニ至ルマデ。一トシ

テ替ル事ナク蹤ヲ追侍レド。直衣布袴ト云

裝束ヲ着セザリシ也。サレドモ。シカルトキ  
ノ裝束ハ。其事ニ逢ザルニハ不及力云々。

### 將軍家直衣ノ布袴ノ例。

應永廿七年二月九日嵯峨ノ寶幢寺供養ニ。勝  
定院將軍紅梅之直衣。下襲。指貫。蒔繪劔。紫地  
ノ平緒等ヲ被用也。此時蒔繪ノ劔如何之由  
後成恩寺注ス。サレドモ。治安二年五月關白  
ノ競馬。下官布袴ニ細劔ヲ用ル由。小野宮ノ  
記ニ見エタリ。又仁平三年十一月廿六日宇  
治左府ノ春日詣ニ御前上官少納言藤原教  
宗。布袴ニ細劔ヲモチユルヨシ見エタリ。カ  
タト巨難有ベカラザルカ。但後成恩寺ノ  
難ゼラレシゴトク。月輪後京極以來。攝家蒔  
繪ノ野劔ヲモチヒ來リ侍ルナリ。

### 攝家。

永祚元年四月八日法興院攝政競馬ニ直衣布  
袴ヲモチユ。

正曆年中ニ御堂關白曲水宴ノトキ。紅梅ノ  
直衣。火色ノ下襲。紫ノ織物ノ指貫ヲ着ス。  
〔以下三行イモ〕  
凡直衣布袴ハ。其日第一ノ公卿ノ取意也。下  
薦トシテハ斟酌アルベキヨシ家ノ記ニ見エ  
タリ。

### 組懸。

本儀紙捻也。紫ノ組懸ハ後鳥羽院蹴鞠御好  
ユヘ建久年中ヨリ始テ出來タル事也。サレ  
ド建久以來モ蹴鞠ノ時ナラデハモチヒザル  
事ニテ侍ルヲ。近代ハヨノツ子用ル事ニナ  
レリ。然ニ今モ公事ニハ必紙捻ヲ用ヒラル  
ル也。上古ハ蹴鞠ノ時モ紙捻或ハ琵琶箏ノ  
緒ナドヲ假初ノヤウニモチヒ侍リシ事也。  
衣。

衣ノ事。或ハ粕トモコレヲ稱ス。但三條轉法  
輪。家ニハ。束帶ノ下ニカサヌルハ纔着トテ  
粕トス。直衣并狩衣ノ下ニ用ルハ莫大長シ。



是ヲ衣ト稱スト見タリ。直衣ノ下ノ衣ハ夏冬大略差異ナシ。色ハ薄色。萌木。紅。黃。蘇。芳。紫。紅。梅。此等少年ノ人用ユ。白色ハ長年ノ人用。皆綾也。中年已後白キ衣ニ志々良綾ヲ用ル也。文ノ事ハ小菱。宮形。浮線蝶ノ丸ナド也。若年ノ人ハ繁文。老年ノ人ハ遠文也。裏イヅレモ平絹也。但此等ハ尋常ノ時用ユル分也。晴ノ時ハ浮織物。唐織物。時ニ隨テ色々ノ衣ヲ出衣ニ用ユト見<sup>エイ</sup>タリ。

單。

直衣ノ時。此單ヲモ重ル也。其品。右ニ記侍ル也。

奴袴。

四位五位ハ平絹ナリ。色淺<sup>薄イ</sup>黃。公卿以上綾ノ織物ナリ。是若年人用之。綾ハ中年以後是ヲ用ユ。禁色ノ人。十五歲以前濃紫ノ浮織物。文付龜甲。裏同ジク紫ノ平絹也。是ハ春冬ノ事

也。夏ハ生ノ浮織物。色又同ジ。經緯トモニ染テ是ヲ織也。裏生ノ平絹。色又同ジ。十五歲以後ハ鳥多須岐ノ浮織物也。色紫。裏同前。夏ハ生ノ織物。文并ニ裏同前。或ハ若年ノ人薄物ノ大文ノ三重襷。瑠璃ノ指貫ヲモチユ。又薄色ノ鳥多須岐。或ハ藤ノ丸ノ織物用之。浮織物。固織物。年齡并ニ官位ニヨリテ是ヲ用ル也。中年以後薄色ノ綾。文藤ノ丸。色ノ淺深。年齡次第ニウスクナル也。中年以後老者ハ淺黃也。至極老人ハ白色ノ練ノ奴袴也。差貫ノイロ年齡ニヨル事。十五歲。中納言大將ノ時。薄色固織物。十七歲。大納言。薄色固織物。十八歲。綾同文。同。薄色。二十八歲。左大臣。綾。關白直衣始。薄色固織物。以上光明峯寺殿下ノ着用ノ次第如此。凡是ヲモツテナゾラヘシルベキ儀歟。但時ニヨリテ又故實有ベシ。極テノ晴ニハ老人モ紫ノ指貫ヲ着用スル事侍ルナリ。

差貫之文。

天子。

霰地ニ窠文。或雲立涌。凡主上差貫ヲ召事ハ。五節參入并殿上淵醉ノ夜差貫ヲ召ス。是ハ侍臣ニ相交テ御覽ノ由也。仍晝ノ御座ノ御劔ヲ召具セザル事也。又蹴鞠ノ時内ニ着御アリ。後鳥羽院蹴鞠御好ノ故ニ。此御代ヨリノ事也。古ハ蹴鞠以下无ノ時モ小口袴ヲ召トミエタリ。

仙洞。

八葉之菊。或ハ鳥多須岐。藤丸。雲立涌也。花園院二十四歳ノ御時。始テ藤丸ヲ着御ノ由見タリ。

將軍家。

鳥多須岐。或ハ藤丸。雲立涌ナリ。但年齡官位ニヨリテ被用侍ル事也。

攝家。

鳥多須支。藤丸。雲立涌也。雲立涌ハ攝關ノ後ニ着用スト見エタリ。

紫苑色之指貫。

九月九日以後。晦日以前。紫苑色ノ指貫ヲ着ス。或說ニ必九日ヲ待ズ。可然晴ノ時はヲ用ユト云々。

瑠璃之指貫。

極熱ノ比着用ス。然ニ冬ニ至トイヘドモ是ヲ着ル。故實ヲ知ザルニ似タリト云々。一說ニ五月以後着用セザルヨシシルセリ。然ニ六七月故人多着用ス。

下袴。

腹白ヲ用ユル程ノ刷之日是ヲ用ユ。腹白ノ結ノ時ハ必是ヲ用ユルナリ。是モ昔ハ綾也。近代ハ平絹。十五以前ノ人濃蘇芳。十六以後ノ人紅。長大ノ後白色也。裏ハ表ニ同ジ。文強チ定事ナシ。近代平絹ヲ用ユル故ニ。文ノ沙

汰ニ及ビ侍ラザルナリ。

奴袴之結。

紫ノ指貫ヲ用ユル人。腹白ヲ結ル。腹白ト稱スルハ白組紫組二筋ヲ奴袴ノ結差所ヘ入テ長クアマシ。引出シテ封結ノゴトク組タル也。薄色ノ奴袴ニハ腹白ヲ用ヒザル事也。結ハ一筋引出シテ是ヲ結。或又籠ル也。中年以後ハ一向是ヲ籠ル事也。但中年以後モ晴ノ時ハ猶紫ノ指貫ニ腹白ヲ用ユルト見エタリ。又腹白ノ年齡過ル人ハ。指貫ト同色ノ組ヲ用ヒテ腹白ノ如クサグル例モアリ。淺黄ノ指貫ニハ白キ組ヲ用ユト見エ侍ル。腹白ノ組ハ二筋ニテサガリ四ツアリ。餘ノ組ハ一筋ニテサガリ二ツアリ。腹白ノサガリハ長ク。餘ノサガリハ短ク侍ル也。

帷。

直衣ノ時ノ帷ハ聊束帶ノ時ニハ替リタルヨ

シ見エタリ。然ドモ近代其差別沙汰スル人侍ラザル也。

笏。

直衣ヲ着用スル時。事ニヨリテ持之也。笏品。右ニ記シ侍也。

扇。

直衣ノ時尋常持之事同ジ。右ニ注シ侍ル也。

小直衣。或狩衣直衣。

攝家ハ丞相已後。凡家ハ幕下ノノチ着之。文色等ハ大略。狩衣。尋常着用スルハ浮文ノ織モノ。夏ハ生。冬ハ練也。堅文織物并練ノ薄物。夏冬通用。浮文ハ繁。堅文ハ遠也。但依年齡可相計也。風流小直衣ハ無法令。且可依先規也。裏ハ平絹練生任心。色ハ可隨面色。袖結ハウスヒラ。蘇芳綵。紫勾以下也。モ宿老淺黄。濃薄打交。又堅固。細々長絹。小直衣ニハ白糸ヲヨリテ一筋ナラベテ結トス。無定法。



尤略儀ニテ侍也。〔モ〕但狩衣指貫ニ下結ハ常ノ事也。小直衣ニ下結スル事ハ先規未ダ勘ズ。出衣單等重ル事ハ久安四年三月宇治左府高野詣記ニ見タリ。〔エム〕攝家於私亭内々人ニ對面ノ時ニ直衣前張ヲ着スルナリ。猶褻ノ時。生平絹ノ袴ヲ着ス。夏冬同ジ。練緯薄物トハ。堅ハ生。緯ハ練。織ヤウハ穀ノゴトクモチリテ織也。

水干。

紗ニテモ平絹生ニテモ。又色ハ白ヲモ〔テイ〕何色ニテモ。大納言時マデ内々着用之。又陽明ノ家ニハ。大臣又前途ノ後モ如長絹直垂被着用之。尤不審也。

布衣。

狩衣者色不定。若年ノ時ハ紅梅。萌木ノ浮文織物。盛年ハ堅織物ノ遠文。十五未滿時ハ袖結毛拔形。若キ人ハウスヒラノクミ。萌木。紫。

紅等ノ打交。次ハ紫匂。次ハ薄色。次ハ淺木。裏ハ表色ヲ可用ナリ。白裏狩衣ノ事。或書曰。故人雖衰老猶憚之。近代嬰兒多着之。倭成入道沈淪不居顯官。叙四位及四十之後着白裏狩衣。侍從大納言成通卿參會院見之。白裏狩衣着サセタマフナト被流涕。是衰老失前途ノ由歟。以之思之。侍從少將等更ニ不可着歟。近代公衡〔西山寺〕兼宗。忠季等。侍從少將之時不着之。平治元年春日祭。上卿下向中山内府〔忠親〕于時將着。縹白裏白衣白單云々。着白裏之時。帶白帶恒例也。布狩衣ハ時人ニヨリテ着之。又織襖トハ。狩衣ニ重織物ト見エタリ。保安五年二月十日兩院雪見ノ御幸。〔延イ〕  
經實按察唐葡萄染襖。紅表袴。忠敬戶部香織物。紫裏紅衣。侍從中納言濃香襖。黃衣。通季左衛門督青織物襖。紅衣。實行別當白唐織襖。白衣。新源中納言唐蒲萄襖。唐紅衣。實能左兵衛督唐蒲萄染襖。唐

紅衣。新三位ヒハダ襖。衛府之人皆帶劔。保延五年十月廿一日新院高野行幸。御後。左衛門督通季卿布衣。蒲萄染。青打裏襖。青鈍浮文織物奴袴。皇后宮權大夫師時布衣。薄色固文綾襖。裏濃。十一月二日同還御。別當忠教。白綾狩襖。立涌雲。紅衣。木蘭地奴袴。立烏帽子云々。

直衣。同布直垂。

練ヲ用ユ。色ハ何ニテモ。今見ルニ大槩黑紅色也。ムク蘭地ト云色ノヨシ或人申侍シ。下ハ房ノナキ長絹成ベシ。紗ノ直垂ハスグレタル家々ニ着シ侍ル。大槩水干ノゴトシ。陽明ノ家ニハ精好ノ直垂ヲ紅染御着ノヨシナリ。小刀ヲ着シ給。小刀ハ他家ニモ用事侍リ。布直垂ハ諸大夫着ス。是ヲ俗ニ大紋ト云。大キナル紋付タルニヨリテ云カ。緒ハ打紐也。前ニテムスビテ下ル。下モ上ニ同ジ。長キ

袴也。素襖袴トノ替リ目。ムナ緒革ト打組ナリ。  
長絹。

元服以前之ヲ用ユ。菊トヂトテ黑キ房アリ。地ハ生ニテモ紗ニテモ色ハ白シ。同イ  
道服。

地ハ狩衣ノ如シ。出家着用ノ衣ノゴトシ。月形ナキ物ナリ。大臣至極ノ褻ニ用。是ニ立烏帽子ヲ着用ス。

襖袴。

近衛大槩着。狩袴ナド同類。名ノミ替テ子細ナシ。狩襖トテ。隨身。舍人。牛飼等ノ着。狩袴。白染分。朽葉。紅梅。萌木。二藍等。サマ<sup>ハ</sup>有。事也。可<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>先規。

褐衣。

隨身ノ着スル物ナリ。狩衣ノ脇ヲフサギタル物ナリ。着用事可<sup>レ</sup>依<sup>ニ</sup>先規。

退紅。白丁。

是等ハ下部ノ着物也。笠持。沓持等ノ着物也。

退紅ハ能家ニ具スル也。

衣色。

梅。面白。裏蘇芳。十一月至二月。

ツボミ  
苔紅梅。面紅梅。裏蘇芳。

裏倍紅梅。表紅梅。裏紅。

紅梅。表紅。裏紫歟。十一月至二月。

紅。紅梅ヨリハ色厚也。

柳。面白。裏青。自冬至春。

黃柳。

花葉色。經黃。緯山吹。大畧花山吹色。裏青打也。多三月着レ之。

櫻。面白。裏青歟。關白大臣等春着レ之。

樺櫻。表蘇芳。裏赤花。二三月用レ之。

櫻萌木。面萌木。裏赤花。

花山吹。面薄朽葉。裏黃。自冬至春。

裏山吹。表黃。裏紅。春冬多着レ之。

躑躅。面蘇芳。裏青打。三月着レ之。古記。躑躅下重。表蘇芳。裏紅打云々。又一說。面白。裏蘇芳。或裏青トモ。

藤。表薄紫。裏青。三四月着レ之。

卯花。柳同。四月着レ之。

菖蒲。面白。裏紅梅。五月用レ之。

ハナタチバナ  
盧橘。面朽葉。裏青。四五月着レ之。

嬰麥。面紅梅。裏青。五六月用レ之。

青朽葉。面青。緯黃。裏青。四月至五月老者多用レ之。

黃朽葉。七月至八月。

萩。面蘇芳。裏青。秋着レ之。

女郎花。經青。緯黃。裏青。或裏不レ付レ之。七八月着レ之。

桔梗色。槿花田。

紫苑。面薄色。裏青。九月九日以後晦日以來着レ之。說多ナリ。

龍膽。面蘇芳。裏青。

黃紅葉。面黃。裏蘇芳。十一月着レ之。

青紅葉。面青。裏朽葉。

若蝦手。面薄青。裏紅。又一說。裏薄紅歟。

白菊。面白。裏蘇芳。又號蘇芳。十月十一月用レ之。

落栗色。源氏有。

苗色。薄萌木。

枯色。面白。裏薄色。

雪ノ下。上白。裏紅。中部同。

赤朽葉。

萩。經青。緯蘇芳。裏青。

女郎花。

槿花田。

紫苑。

龍膽。面蘇芳。裏青。

黃紅葉。面黃。裏蘇芳。十一月着レ之。

青紅葉。面青。裏朽葉。

若蝦手。面薄青。裏紅。又一說。裏薄紅歟。

白菊。

落栗色。源氏有。

苗色。薄萌木。

枯色。面白。裏薄色。

雪ノ下。上白。裏紅。中部同。

赤朽葉。

萩。經青。緯蘇芳。裏青。

女郎花。

槿花田。

紫苑。

龍膽。面蘇芳。裏青。

黃紅葉。面黃。裏蘇芳。十一月着レ之。

青紅葉。面青。裏朽葉。

若蝦手。面薄青。裏紅。又一說。裏薄紅歟。

白菊。

落栗色。源氏有。

苗色。薄萌木。

枯色。面白。裏薄色。

雪ノ下。上白。裏紅。中部同。



松重。面青。裏紫。四季通用。

青木賊。

黃木賊。

黑木賊。

今樣色。濃紅梅。

蒲萄染。面蘇芳。裏花田。當時着用薄色。指貫色也。又織色。經赤。緯紫。

二藍。赤色ト青花トニテ染也。夏用レ之。 苔色。面香。黑ミアリ。裏一藍。

檜皮色。面蘇芳。黑ミアリ。裏花田。 虫襖。面青黑ミアリ。裏二藍。又薄色。

濃蘇芳。四季着レ之。無レ難。 薄蘇芳。

裏濃蘇芳。面蘇芳。裏黃。 蘇芳ノ香。面蘇芳。裏黃ヲサスナリ。

赤色。櫛ト茜トニテ染レ之。アクチサス。又織色。經紫。緯赤歟。

氷。面白ヤウ。裏白無文。 秘色。〔珊瑚色イ〕

瑠璃色。濃花田也。今濃淺黃ト云。 紺ノ青丹。ヒコン

青丹。濃青丹ハ黃チサス。表裏同。 比金襖。面青黃。裏二藍。

烏ノ子重。面白瑩。濃蘇芳。一說表裏白瑩平絹。更衣時上下着レ之。又老者常用。

搔練。表裏紅打。或裏張。又云。火色。自レ冬至レ春。

萌木。濃萌木ナリ。 香。就三老若一淺深有。

赤香。

香ノ文濃。

水色。

花田。本名淺黃也。濃花田。薄花田有レ之。

淺黃。

薄色。經紫。緯白ナリ。又染色モアリ。或二藍色薄トモ云。

濃色。經緯トモニ濃紫色。 青鈍。花田濃色也。尼ナド用色ト云。

鈍色。ウツシ花ニテ染レ之。又云。花田染也。又蘇芳ニダウサチ入テ染ト云。青花ニ黑ミチ入ルトモ。諒闇之時直衣指貫勿論。表袴表ノ袍此色也ト云々。

橡。諒闇ノ時。殿上人已下着レ之。袍染色也。從ニ本官ニ之時不着レ之。必着ニ位袍一。

濃打。濃紫ヲ打。近代附子カ子ニテ染レ之。

濃青文濃。薄青。經白。緯青。又染色モアリ。

白襖。

赤櫛。魚綾。山鳩色ト云。

木蘭地。黑紅色歟。 虹色。

青色。苅安ト紫トアクチサス也。

當色。私云。諸色也。見ニ衣服令義解。當色ノ如木ニアリ。

半色。經緯トモニ薄紫也。 火色。下襲ノ色ナリ。自レ冬至レ春。

聽色。

紅薄色ヲ云。尼君ナドニモ。重ノ衣ニハクレ  
ナ井ヲ用ル。源氏物語玉葛ノ卷ニ見タリ。

梔御衣。

クチナシノ色モ。女ニテハ尼  
ノ着色ナリ。同卷ニ見タリ。

這裝束抄。西三條逍遙院

內大臣實  
隆公。

撰本也。可謂

奇珍者也。

天正五年孟夏中院。

〔イモ〕  
黃門郎經

勅

右裝束抄以松岡辰方藏本一校畢  
更以古抄本一校了

群書類從卷第百十七

裝束部六

次將裝束抄

前中納言定家卿京極

節會

元日。白馬。正月七日。

踏歌。同十六日。豐明。十一月十五日。

垂纓。闕腋袍。半臂。巡方帶。付魚袋。螺鈿細劍。靴。

隨身垂袴。舊老公卿將隨身。或着染袴。垂袴。

下官用此說也。

壺。元日白馬。必着紅梅狩袴。踏歌或同之。或

着例染袴。說々不同。

踏歌節會夜。一品宮入御院御所。下官着

闕腋。供奉成定着縫腋。但不參節會。左大

臣殿內辨。飭劍。魚袋。令參給其御供。闕

腋更不可有難。

件日。若節會以前。若以後。雖隨他所役。着此

裝束。更無難。一院拜禮。

若御幸以下。有可騎馬供奉事者。臨時斟

酌。或着縫腋。薛繪劍。丸鞆帶。供奉之後。着改參節

會。又有其例。土御門

元久二正五御幸。御元服後宴。供奉人多着

縫腋。改參內。

建永二正七關白從一位時。拜賀改之。家實

長曆元正七嬬子入內。以後不改其裝束。後朱雀

元久元正七攝政從一位拜賀。供奉人不改。良經

白馬節會日。若預加階之人。源中納言師仲卿用此說。尤為證據歟。



卷纓。螺鈿野劔。不付參內。魚袋。引陣之後立入閑

所。懸綏帶弓箭。平胡錄。如立叙列給位記。拜

舞畢退出。撤弓箭綏。垂纓參所々拜賀。五位

將若叙四位者。着五位袍。相具尻鞘。參內

帶弓箭。時同入尻鞘。叙列畢又撤尻鞘。着改

四位袍。參所々拜賀。

叙人若勤馬頭代者。叙列畢同撤弓箭綏。而

垂纓勤之例也。

馬頭代事。參內之後當座催之。當用左右當座下

又雖上薦勤之。薦下薦故障之時。中將猶有例。着靴取梓。爲上說。或着淺沓

取笏。次說也。

行幸。

卷纓。綏。闕腋袍。巡方帶。螺鈿野劔。五位入弓。尻鞘。

蒔繪。平胡錄。相具弓箭。參內。召仰訖帶之。若兼日有召仰之時。參內直帶弓箭。

隨身。

狩胡錄。棠脰巾。洛外行幸。棠下着。必着染分袴。

左蘇芳。右朽葉。雖元三中猶着染分。

遠所行幸平胡錄。曳表帶。丸緒也。但八幡行幸猶

不曳之。南京之時曳之。或人云。更依遠所不曳之。品有可曳人歟。隆

長爲五位將。依五位朝觀行幸曳之云々。

元二三日。

縫腋袍。蒔繪細劔。平緒。丸鞆帶。

隨身。

白馬。更着紅梅袴。二日有朝觀行幸。雖令着染分。三日猶可令着紅梅袴。或有更不着紅梅說上云々。紅梅袴。自元日至十八日賭弓

日除行幸日。令着之。但家々說不同。

女叙位院宮御申文役。

御前之儀時不帶劔。不把笏。依殿上役也。直廬儀

之時帶劔取笏。

御齋會內論義。季御讀經。仁王會。灌佛。最勝講。

臨時御讀經等出居。

蒔繪細劔。丸鞆帶。

隨身。

隨身。

染分。左。二藍。右。萌木。左右近又任意。於御齋通用。會者紅

梅袴也。  
同地事。

佛名出居。

殿上次將。不帶劔。不取笏。不具隨身地。

下將。帶劔取笏。

射禮。賭射。弓始場。

例束帶。縫腋。丸鞞。不持相具弓矢。真卷弓矢也。

懸。臨。刻限。插矢。右腰。取弓。乍付三鞞弓懸。持

之時。出居舞之裝也。於射禮賭射者。隨身紅梅袴。若三日被行時。非此限。用例袴也。

春日祭使參內并社頭裝束。

垂纓。闕腋袍。巡方。帶。魚袋。飭劔代。紫綵平緒。隨

身。蠻繪。指鞭。綦脛巾。左筆尻鞞。

路頭。

衣冠。若直衣刷之時。出衣。綦深履。或半靴。柏夾。蒔繪野劔。

虎皮弘尻鞞。

隨身。布衣。狩胡錄。乘移馬。

向出立所入。

束帶如例。細劔。隨身如例。

臨時祭使。

闕腋袍。禁色下襲。半臂。巡方。魚袋。螺鈿細劔。紫綵平緒。隨

身。蠻繪。

路頭。於朱雀院邊改之。

衣冠。或出衣。半靴。蒔繪野劔。弘尻鞞。柏夾。刻限無。

其程。隨身不改蠻繪。

舞人。

卷纓青摺。赤紐。半臂。下襲。打衣。地摺袴。糸鞋。襪。

不乘沛芥馬之人。赤紐不融帶表手。糸鞋緒。

懸袴結結之。指切青摺。袖之緒爲故實。乘

惡馬之人。赤紐引融表手。糸鞋緒不懸袴結

結之。

寒氣時。打衣之下重尋常染衣二領許着之。

暑氣時。猶着打衣冬單衣。無其難。於單衣者

雖着何色衣。猶可用紅。又不重紅單衣之

時。紅色不可着之歟。假令黃。薄色。紅梅。

蒨木等類衣可着歟。着濃打時必重濃單衣。

若重染衣者重濃蘇枋宜歟。

舞人着他色單衣事。故人不甘心。近代多之。

似不知故實。

庭坐役人。

束帶如例。但不用馬腦帶。

多令持野劔。不具隨身。

或持細太刀。平緒。具。隨身。心々各別。  
是中  
山内

府說  
云々。

警固。四月未  
日夕。

例束帶。垂纓。細劔。  
把笏。

參内。依上卿召參陣。承可警固。由之後。卷

纓。綏。豫相具負靈  
纓。取弓。至解陣日。不論束帶宿衣

時。必可着  
夏直衣。帶弓箭靈劔。綏。出行他所之時。猶

卷纓相具弓箭綏等。綏靈イタツキ  
ニ結付也。勤仕陪膳之

人。暫撤物具。卷纓。綏。  
如元。勤畢又着之。役送人置

弓計也。不撤劔弓箭。直衣警固之時。劔緒。胡

籙緒皆ハコエノ下ヨリ結之也。

賀茂祭使。

多着加伊禰利加佐禰。被聽禁色之人非此限。又  
着例二藍半臂下襲恒事也。

垂纓。巡方。魚袋。飭劔代。紫綵平緒。赤色扇。或

帶平胡籙持弓。說々不同。隨身蠻繪。指鞭。

向出立所人。六衛府。卷纓。細太刀。平緒。相具  
物具等。取笏。隨身如例。

還立日使。

如昨日。但着青朽葉半臂下襲。

解陣日。

帶弓箭。承上卿命。還出。撤綏弓箭垂纓。

馬場騎射。左近。五月三日荒手結。五日眞手結。  
右近。四月荒手結。六日眞手結。

束帶如例。細劔。丸鞆。隨身。靈。垂  
帶。笏。

府步射同之。被行賭射之時有此事。

放生會。

偏如行幸儀。

駒牽。

裝束如例。細太刀。把笏。  
具。隨身。

法勝寺大乘會。凡准御齋  
會法會。



帶劔。五卷日雖取捧物。猶帶劔持笏。取笏。隨身如例。

其外佛事所必撤劔笏耳。

### 五節之間。

丑日。參入直衣。古人不刷。寅日。殿上淵醉。直衣。楚々出衣。隨身。

布衣。同夜束帶。打梨。卯日如昨日。非付童女。

人。兼日催。若少年之輩者不出衣。昨日不仕人或出衣。昨日雖不仕。

無難。同夜有中院行幸時。

卷纓。綏。縫腋。丸韞帶。細劔。蒔繪。壺。弓。着。小忌。

之人。袍上着。小忌。小忌帶前後各押入。諸司小忌。不法ノ物也。以紙捻一閉之。

辰日節會見上。

有中院行幸。着。小忌之裝束。大嘗會時。三々夜着也。侍從猶帶劔。

同將冠。垂纓。日蔭。有。心。佐。小忌袍。白布以草摺之。右方付赤紐。

身袖如符衣。尻均三下襲。例半臂。下襲。表袴。袖。單衣。以下

皆如例。巡方。魚袋。螺鈿細太刀。着。靴引

陣也。

追讎。

縫腋。卷纓。如警固時。但夜事不及刷。負隨

身壺。帶野劔。用蘆弓。爲故實耳。

立坊立后任大臣節會。讓位又同。

縫腋。蒔繪細太刀。垂袴。取笏。相具綏弓壺。

參內之後。臨刻限。卷纓。綏。帶。弓箭引陣。多着淺沓。

或着。事畢又撤之。垂纓退出。出向饗所。新任大

臣。若后宮。宮司等拜賀申繼之時。垂纓。取笏

微弓箭。申之。今日申繼。雖先出逢時。不撤劔。依便宜也。是近代例也。

立后若勤啓將者。同垂纓取笏參陣。蒙上卿命

之後參本宮。又卷纓着綏弓箭。祇候。第三日

給祿退出。

后宮行啓啓將。一如行幸。

行幸記。供奉行啓時。解弓箭。撤綏供奉。若行

幸可有還御者。卷纓。爲遷幸儀者。垂纓也。非

啓陣。次將供奉後。垂纓。縫腋。螺鈿細劔。持笏。着靴。

束帶如例。不帶多曳下襲尻。如夜陰雨儀時。或懸裾又無其難。

拜賀中繼。

先不帶劔。不取笏出逢。還舉中其人候由。帶劔把笏還出。仰聞食由。但近代多出逢時。猶帶劔取笏恒例也。但不可然。

行幸他所。

一兩日御逗留之時。帶弓箭之儀。一同警固之間。

御幸諸院并親王大臣以下皆准之。

束帶催之時。細太刀。隨身壺如例。若衣冠布衣催之時。私着束帶。供奉之日猶細太刀平緒。猶具隨身。無其難。又雖束帶。於衣冠催時者。帶野劔。是常事也。於帶野劔者不可具隨身。凡細太刀平緒之時。必相具隨身。着衣冠布衣供奉之時。

詩繪野劔。相具參入。及刻限。着半靴。之時可帶之。半靴。非殊晴者。

不具隨身。於刷時者相具布衣隨身。殊結構之人令負狩胡籙持弓。尋常人帶劔計也。於一員御幸者一同后宮行啓。

布衣騎馬殊刷之時。御幸以下執柄宇治。令供奉。若親姓之人如公卿勅使相伴時。或令懸調度。尋常野矢也。但必帶野劔。鹿皮。或虎皮。半靴。或毛沓。有帶。如靴帶。

朝夕出仕。不論束帶直衣布衣。令持詩繪野劔。

若不慮隨殿上之外役者可帶之。束帶之時帶劔者必持笏。如夜御幸可取松明之時。依署儀。雖帶劔。不持笏無難。

禁中諸院之外隨身之時必帶野劔。取笏。有兼日催者。細太刀平緒。相具隨身耳。

后宮以下無殿上之所。隨役時。惣帶劔把笏。如此事非兼日催。隨參會勤仕之時。帶野劔。無其難。雖有殿上所諸院同宿后宮親王以下陪膳役送所宛等之時。必帶劔把笏。近日稱內府說也。公繼公也。院御所中解劔隨役。保延之比。待賢門院灌佛。中將公能帶劔笏。彼是玄

隔也

白重事。

不論職事。非職。文武官。殿上人着之。雖地下上宜着之。

四月十月朔日出仕之人着之。或說。朔日雖

不出仕着之云々。

及祭前日多着之。或灌佛日改之。假令隨可

然事。着尋常裝束。日必可改歟。冬十月中旬

之間斟酌可改之。雖夜有行幸者。必可着

染重歟。着白重之間。雖布衣用白帶。恒例

也。中古向祭使出立所之人猶着白重。近代

或人難之云々。

青朽葉下襲。

自最勝講之比。至于七月下旬極熱比。又甚

雨時多着之無其難。宿老之人雖非極熱。惣

着之。隨吉事時不着。如拜賀移徙元服着袴。

指貫事。

自十月維摩會比。至四月御禊前。用練指貫。

自四月御禊日。至十月十日比。生指貫。若五節着夏之

衣之輩。相待其程。但九月九日以後。或說。必不待。不可改。改冬衣。九日有可待

晴時。着晦日以前。着紫苑色指貫之人。着練指

貫。件差貫古人紫苑色。面青裏着之。近代只

以例薄色指貫。稱紫苑着之。雖着紫。冬。二

藍。夏。人於此間練指貫者。猶可用紫苑色。秋

中不着此色之人。尤過十月上旬。可着冬

指貫歟。雖着紫苑色。於袍者猶着夏袍。極熱

之比。着瑠璃色指貫。近代雖屬冷氣。不憚。猶

似不知故實歟。

如洛外。非尋常出仕之時。色々末濃。村濃如

唐綾。非制限。隨時着之云々。

四月十月更衣之後。不着直衣。此間宿衣用。位袍也。及着

改指貫之時。始着直衣也。

夏指貫。狩衣。薄平結。用程人。着薄物指貫。假

令英華之輩。不着綾羅之程。猶用薄物也。如

下官。無前途之輩。過壯年。薄物依異樣。不

着之。近代無文織綾。薄色指貫人多着之。古



人云。如<sub>レ</sub>近衛司<sub>一</sub>。努々不可<sub>レ</sub>着。老者之依<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>止事。用<sub>レ</sub>生奴袴<sub>一</sub>之時。着用物也。近代少年時着<sub>レ</sub>之。冬志々羅綾。古人又惡<sub>レ</sub>之。近代每人着<sub>レ</sub>之。直衣同前。

非常警固事。

內裏燒亡。

古人云。陣中三町之內。火事時。不待<sub>レ</sub>仰帶<sub>レ</sub>弓箭。但臨時可<sub>レ</sub>斟酌。雖<sub>レ</sub>遠如<sub>レ</sub>風狂煙掩<sub>一</sub>者。可用<sub>レ</sub>意歟。雖<sub>レ</sub>三町內事。尋常不及<sub>レ</sub>騷動<sub>一</sub>者。不可<sub>レ</sub>急歟。如此之時。可<sub>レ</sub>守有職<sub>一</sub>先達若貴人之所<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>并教訓<sub>一</sub>。

山大衆參陣時。

高倉 同 後鳥羽嘉應。治承。建久二年。將佐帶<sub>レ</sub>弓箭。

順德建保六年。又有<sub>レ</sub>此事。次將多帶<sub>レ</sub>狩胡錄。頭中將伊時重服束帶。蒔繪劔。可<sub>レ</sub>謂不足<sub>レ</sub>言。

假令於<sub>レ</sub>里亭<sub>一</sub>見火。若聞<sub>レ</sub>不慮事<sub>一</sub>。馳參者先必着<sub>レ</sub>宿衣<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>馳參。卒爾周章事。布衣不<sub>レ</sub>憚。但雖<sub>レ</sub>

裝束。

近邊<sub>一</sub>。非<sub>レ</sub>內裏火。布衣人不可<sub>レ</sub>昇殿。猶在<sub>レ</sub>里亭<sub>一</sub>。必可<sub>レ</sub>着<sub>レ</sub>衣冠<sub>一</sub>歟。若着<sub>レ</sub>布衣<sub>一</sub>參<sub>レ</sub>他所之時。有<sub>レ</sub>如此之事者。歸家可<sub>レ</sub>改哉。尤乍<sub>レ</sub>布衣<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>參歟。抑如<sub>レ</sub>此之時。束帶細太刀之類。努々不可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之由。古賢誠<sub>レ</sub>之。若着<sub>レ</sub>束帶<sub>一</sub>備<sub>レ</sub>他所禮<sub>一</sub>時。又難<sub>レ</sub>改着<sub>一</sub>歟。其事無<sub>レ</sub>其隱者。束帶<sub>ニテ</sub>參<sub>レ</sub>有何事<sub>一</sub>哉。內裏之外束帶事不可<sub>レ</sub>勝計<sub>一</sub>。

直衣。若衣冠。帶<sub>レ</sub>野劔<sub>一</sub>。弓。狩胡錄。冠。柏夾。或雖<sub>レ</sub>直

衣<sub>一</sub>負<sub>レ</sub>野矢<sub>一</sub>。滋藤弓。無<sub>レ</sub>其難<sub>一</sub>。或布衣尤可<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>野矢<sub>一</sub>歟。

但只可<sub>レ</sub>隨<sub>一</sub>所在<sub>一</sub>。シトキツバ。アヲヒツバノ太刀不<sub>レ</sub>

可<sub>レ</sub>憚。

今案。

無爲本自參<sub>レ</sub>內祇候之時。猶於<sub>レ</sub>禁中<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>如此事者。尤召<sub>レ</sub>寄瀧口矢<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>帶<sub>レ</sub>瀧口尤可<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>故實<sub>一</sub>。次將召<sub>レ</sub>取弓箭之時。貫首之外イタツキヲ拔取天指<sub>レ</sub>腰也。爲<sub>レ</sub>謁<sub>レ</sub>貫首也。依<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>便也。頭中將召<sub>レ</sub>之

者。イタツキナガラ可進。瀧口雖不存。次將必拔可返給也。

於里亭見此事。猶可相具狩胡籙歟。柏夾木必可用意。

先例。管見不及。大畧。

後朱雀院御時。頭中將資房。烏帽子。直衣。雖

資房卿所爲近代不可用之。

六條院御時。四月上旬中將實守。衣冠。柏夾。狩

胡籙。知物由人。大畧一同。或將着例行幸裝

束。或將着冬直衣。人々驚目云々。

安元元年五節最中陣有火日。出御南殿。御引直衣。

內侍不着裝束。取劔璽在御供。關白殿追參

入。內侍之跡見苦。近衛司可取劔璽由被仰

云々。

同三年大極殿燒亡夜。依火近行幸土御門。

夜少將雅賢。實教。供奉賢所步行。或諸大夫

騎馬渡其前。雅賢以弓打其頰云々。

同年衆徒參陣。次將帶弓箭。維盛ハコヘノウヘニ負矢。人感之云々。可依人也。

建久二年山大衆參陣。忠季朝臣。直衣帶野劔

胡籙之間。先上結。柏夾。狩胡籙。騷動之間於下侍裝之也。

件日下官依殿下御供束帶。但相具狩胡籙。

忠季帶之間。於同所帶之。柏夾木自懷中取

出。彼朝臣見之。加感言。自餘次將見之。召寄

瀧口矢。又令卷纓。共人等卷之。皆卷纓也。見

人々更直之。又更取寄狩胡籙負之。雅行一

人雖參入更不帶物具。垂纓不帶劔祇候。定

有所存歟。

柏夾事。

削白木端。其長如卷纓木。但不塗墨。以白可爲詮。非常警固之時如此。槍扇破

懸天。纓末取天。巾子引充天。巾子タケノ程夾。

纓末在外。ワナハ在內。卷纓指所指也。卷纓

內ザマへ卷。是外折。玄隔不似也。不知之人

多以卷纓爲柏夾。

若着布衣者。雖昇燒亡御所。於臨幸御所者。不昇殿。自庭上可退出。

土御門內裏燒亡之時。師仲中將布衣云々。自餘雖多依故人談注之。

次將參內之時。先可尋問御輿長等參否。近可

候腰輿之由先可加下知。

事及危急者。雖非近習。不願推參恐近伺御

前邊。先可奉見玉躰平安。古老之遺訓也。安

元陣中燒亡之日。頭中將。入道內大臣。融二間參朝

餉。爲奉見玉躰也。人以爲可。

禁中之外。雖諸院后宮。不帶弓箭。只帶劔計

也。

燒亡之所事及危急者。馬引入庭上騎之。近候

御輿邊也。諸院以下等如此。不憚門內。又云。如

此之時。頗可着尋常之服。打梨之躰似不知

故實云々。

文應元年五月十五日。以右少將守資朝臣本書寫之。以青侍右筆之間。文字散々難見解。歟。此鈔者。定家卿書出之。授子息畢。

左權少將判

爲備忽忘書寫畢。正三位判

四條隆永卿本寫之。

永正十年夏五月 右大臣判

右次將裝束抄以奈佐勝臯屋代弘賢松岡辰方藏本校合畢。



### 三條家裝束抄

一號伏見院宸翰裝束抄

一冬袍はしづら地の綾文縁。家用之輪無は當家。大炊御門。中院黨。日野。勸修寺等用之。轡唐草は西園寺。徳大寺。花山院。四條以下多用之。夏冬無差別。大臣以後異文袍定ル事也。當家は壯年の時雖任大臣。暫輪無用之也。宿老之後用龜甲。大龜甲遠文。居之。大サ七寸計なり。八條大相國被<sup>御用</sup>此文。仍而當家用之。他家異文袍。西園寺は長命唐草。大炊御門龜甲。閑院藤鞠繪。自餘只今不覺悟。追而尋記。又異文袍は熨地なり。裏普通物なり。冬袍は裏有之。平絹なり。強張調之。色の事。四位已上は稱黒袍。フシカ子にて染之。面はフクサ張なり。夏の袍は文同上。薄物織之。無裏。色又同上。餅ノリにて強ク張之。一下襲事。冬のは面熨シ地の綾。文浮線蝶丸。遠

文に居之。調様は粉張。如雜色之狩衣。裏同ジキ綾。文遠菱。濃蘇芳染之。大略如フシカ子染なり。裏はサヤ／＼と強張張之。近來下襲上下別に切て用之。稱下襲。下ハ裾ノ事也。袍長サ大臣大將一丈也。大納言八尺。中納言六尺。參議五尺。四位五位四尺也。此は踵より餘ル程をいふ也。抑此面白粉張。裏濃蘇芳。中倍花田は躑躅の下重と號して。老弱貴賤常の時通用の物なり。但四位より以下は裏面俱平絹なり。只今所注<sup>スル</sup>は公卿以上の事也。又雖四位以下。聽禁色。人公卿の定めなり。夏の下襲は薄物。文遠菱。色蘇芳。或は稱赤色。公卿常の時用之。如夏袍也。無裏。只單なり。如袍張之。緒を捻なり。下襲の尻は夏冬共に二幅なり。寸法の事ノ記右畢。顯職并弱年の人。異なる晴の時。染裝束とて。半臂。下重。表袴等。色々用之。其間事。見入道左大臣<sup>實房</sup>

殿裝束抄。仍畧之。又四位已下は當時二相の色なり。二相とは。赤花青花と相交ル色なり。

一半臂事。春冬尋常の時近代不着之。定事も。

如五節ハダスグ可袒之時必着之。調様。色以下委細

見。裝束御抄。仍畧之。夏秋着之。大紋薄物。

大文ト云ハ。三重襷の重文の菱なり。色如袍。欄并に忘緒。半臂の同物な。

みて用之。如懸帶。又結腰物なり。

一單事。單文の綾。紅に染て用之。春冬はフク

サハリ。捻ル鰭。夏秋は張單とて板引にする

也。色春冬に同なり。是を夏は引倍木とも號

する也。至極老人は白くて用之。

一赤帷。夏秋着之。紅に染たる大帷なり。強張

之。汗取の帷と又號之。至極老人白くて用之。

冬は不着之也

一柏は。文小葵。地は綾なり。紅色。面ふくさ張。

裏平絹同色。極強張之。尋常の時着之。或又

略之。冬の時計の事なり。夏不着之。老若通

用なり。但近年畧之條常事也。染裝束の晴。紅打柏なり。壯年の人萌木薄色。或は着之。凡束帶の柏は一領の外不着之。

一上袴。壯年の人。縮線綾と稱して白き浮織物。

地は小石疊。號之。霞也。其中有窠の文。中年の人は堅織物。文藤丸。遠居之。裏紅の板引。腰に

有上指糸。白き練線クリの糸ふとくよりて指之。

股立。有夷懸ノ糸。白練絲ふとき也。冬夏四季同物也。老

人モ非白裏。紅張裏なり。板引にせず。

一赤大口。常に着用するのは。生の平絹を紅に

染て如常ノ大口縫なり。但四のなり。上の袴

よりも短キなり。夏冬同物なり。裏面におなじ。

一着袍次第。

冬は先着赤大口。次上袴。次單。次柏。次下重。

上下。其上袍。夏は先赤大口。次上袴。次赤帷。次

單。次下重。上下。次半臂。次袍。或説先赤大口。

次下重。柏風情の物着之。次上袴を着して。

次下重。柏風情の物着之。次上袴を着して。

上の袴の腰にて下着を着籠。二説也。

一直衣事。

地下の人不着之。建保三禪閣命。近衛司ハ雖ニ地下ニ着之云々。

春冬面しぐら綾。文浮線蝶圓。少年の人はまろの勢分少くして。聊繁居之なり。調様。面白くて不着色。ふくさ張。裏さやくと強張之。若年の人は紫色。年成長の時次第薄くなして。薄花田。又猶年老て後は大略如白なり。衰<sup>シテ</sup>宿老の人は裏一向白なり。張様は同事なり。又至極老人は。或着平絹直衣。不着色。張様又同前。童躰の人面白浮織物。文小葵重文也。裏同前。紫。夏秋は裏なし。薄物。文三重襷。色は若年人二藍。紫。次第濃花田。薄花田。後は大略如白成也。袖の端捻て。文は若年之人宿老共以無差別。重文三重襷なり。又童躰の人の薄物。文小葵也。色の事二藍なり。帶の事直衣切なり。冬裏あり。夏無之。或は又下重の切をも用る也。異説也。

一指貫事。

四位五位は平絹。公卿以上は綾并に織物なり。織物は若年人聽禁色之以後用之。綾は中年以後の人用之。十五以前人濃紫の浮織物。文つゞき龜甲。裏同紫平絹なり。さやくと張也。是は春冬の事なり。夏は生の浮織物。色二重濃紫。文同冬。皆經緯共染て織之。裏生の平絹。文同面。

一衣ノ事。若年の人は。冬時衣二三も重着之。是古義なり。近代大畧晴時之外一着之。或は襦とも稱之。但當家存知之分。束帶の下などに重用るは。纔着<sup>サイチャク</sup>。ダケトヒト。以是爲<sup>ヒト</sup>襦。直衣并に狩衣の下に用之は莫大也。以是爲差別。狩衣直衣の下衣は夏冬大畧無差異。色は薄色。萌黃。紅。黃。蘇芳。紫。紅梅。女郎花用之。是等壯年の人用之。白は長年の人用之。皆綾なり。面ふくさ張。裏平絹。色同面。さやく



と張て如<sub>ニ</sub>女房ノ薄衣。長年人は白き衣。用<sub>ニ</sub>し  
じらの綾常ノ事也。文の事。小葵。莒形。浮線  
蝶の丸。若年の人は繁文。老大の人は遠文な  
り。是は皆尋常の時用之分也。異晴の時。顯職  
并に壯年の人。或は浮織物唐織物など。隨時  
色々の衣を出衣に用<sub>レ</sub>之。其色等委細不及  
注。分明に見<sub>ニ</sub>古記<sub>ナリ</sub>。

狩衣の衣は<sub>スベテ</sub>大都直衣におなじ。但五月九月  
壯年の人用<sub>ニ</sub>生衣<sub>ニ</sub>裏表生也。皆用<sub>レ</sub>有色。不用<sub>レ</sub>  
白。多分女郎花蘇芳なども也。

一單事。常の單文重菱也。綾色は。紅。白き。青き。  
薄色。蘇芳。黃。ふくさ張。春夏秋冬同事也。夏張單  
とて。きらくと板引にして用<sub>レ</sub>之。或は引へ  
ぎとも稱<sub>レ</sub>之。老人不用<sub>レ</sub>色。用<sub>レ</sub>白なり。

一下袴事。本儀綾也。十五以前の人濃色。<sub>濃蘇芳の事也。</sub>  
十六以後の人紅色なり。長大の後白色なり。  
裏面さやくと張<sub>レ</sub>之。下括の時用<sub>レ</sub>之。文は定

れる事なし。畧儀。近代平絹也。張樣同前。  
一帷事。常袖白き布の大帷なり。冬時不用<sub>レ</sub>之。  
壯年の人なれども五六七月張單に重て用<sub>レ</sub>  
之。中年以後の人四月八月衣に重て用<sub>レ</sub>之。  
又單計に重て六七月に用<sub>レ</sub>之。又七夕帷とて  
帷計をも用るなり。是は中年以後老人事也。  
香帷老者用<sub>レ</sub>之。多五月事也。近代經檢非違  
使別當人の外不用<sub>レ</sub>之。又束帶の赤帷を汗取  
と稱して用<sub>レ</sub>之。蹴鞠の家の人の事也。他人不<sub>レ</sub>  
然。

一着<sub>ニ</sub>直衣<sub>ニ</sub>次第事。

先單。次衣。次指貫。此下着どもを着籠むで。  
指貫の腰を結。次<sub>ニ</sub>着<sub>ニ</sub>直衣<sub>ニ</sub>。

晴の時出衣あらば。結<sub>ニ</sub>指貫腰<sub>ニ</sub>之後。指貫の  
上へに着<sub>ニ</sub>出衣<sub>ニ</sub>。以<sub>ニ</sub>太帶<sub>ニ</sub>結<sub>ニ</sub>之。出衣の尻つみ  
あげて挿<sub>ニ</sub>帶後<sub>ニ</sub>。出衣の前あきて。妻出<sub>ニ</sub>兩膝<sub>ニ</sub>の  
間。

夏秋は先帷。次張單。或ハ號引ヘギト。若年の人は張單の上に生衣を重着なり。用生衣の事は五月九月事なり。老人は不着生衣事也。次着指貫。有出衣。着之の躰同冬。

一狩衣事。

或ハ鷹衣とも書レ之。稱ニ布衣ニ同物なり。

五位以上用織物。狩衣不因禁色の事也。春冬松重。面蒔木。裏紫。文大略松唐草。松蠻繪。松菱などなり。凡着其色之時用其文。通用なり。自餘以此可知。老人不レ用之。花山吹。面黃。朽葉。織物ならば。經紅。緯黃。用レ之。裏紅平絹。文山吹立涌。山吹蠻繪。山吹唐草等也。老人不レ用之。裏山吹。面黃。朽葉。裏青。文同前。裏張裏。柳。面白。裏青張。引のりにする也。織物綾などは。文柳蠻繪。柳立涌。只又柳を重文織也。壯年以後の人。或面用練緯。用唐綾。若年人浮織物。浮線綾。薄物等用之。蒔木色。裏面同前。若年人用之。四季通用之十五以前の人不用之歟。香の色。若年人はこがれ香と號して。下かぎ

を薄紅にして。黃をませて染之。所詮濃香也。織物にて着するの時は。經緯共に濃香に染て織之。裏紅也。張裏引ノリ也。老人は經は香なる糸。緯は白糸なり。仍文白也。浮織物。浮線綾。長年の人不レ用之。唐綾并に薄物等を用也。又老者は白裏。生張也。

櫻蒔木。

面蒔木。裏紫張裏也。

文櫻立涌。櫻蠻繪など也。春

用之。中年以後不レ用此色。若年人用之。

白櫻。

面裏共白。或又裏紫なり。

若年中年之人用之。文ノ事同

前。老者不レ用之。春用之也。

樺櫻。

面薄蘇方。裏濃蘇方。

若年之人用之。中年以後不

レ之。文事同前。春用之。

裏濃蘇芳。

面薄蘇方。似ニ樺櫻。

文無定物。宜在人意。若

年人用之。間繁文也。

黃青裏。是は號ス枯色ト。面香。裏青。冬時若

年人着之。

花田。

季通用也。

圓花田と號して。面裏共ニ同色。壯年の

人は張裏。中年の人は生張の裏用之。老者、  
白裏生張。用之。十五以前人不用之歟。薄青  
裏同。若年壯年人用之。老者不用之。白裏は壯  
年人も官により依事用之。

檜皮。面ひはだ色。裏同色也。或又花田裏。兩

說共無苦事なり。若年の人不用之。中年以

後の人用之。老者は白裏。

白色。若人年は浮織物。浮線綾。練薄物等也。

中年以後は唐綾唐和共用也顯文紗の薄物。老人も練緯老人

も用之。裏は若年の人は張裏。中年以後生張也。

赤色。若年壯年の人等用之。裏同色也。

蒔木。春夏通用之。若年の人着之歟。雖夏張

裏先規なり。

浮線綾は冬夏通用之。練ノ薄物は冬ばかり

用之云々。

右一冊。伏見院御宸翰也。以或人之秘本

令書寫畢。

黃門侍郎源房判

此一冊。以清閑寺中納言源房自筆本。以古本如

寛文七年陽月廿七日

黃門侍郎資熙判

資熙卿云。抄中稱當家者三條也。

ツバキ龜甲。裏同生。色紫也。此年齡十五以後

鳥多須岐。浮織物。色紫。裏同前。夏は生織物。

文并裏同前。或又如此。若年の人夏薄物大文。

三重多如淺黄云々。瑠璃色指貫用之。又薄色文鳥織物用之。

須岐。瑠璃色指貫用之。或藤丸。又薄色織物用之。

以後薄色。綾指貫。文藤丸。色淺紋。依年齡。次

第依老薄クナス也。夏冬無差別。練指貫也。

至極老人は白色也。又淺黄綾差貫。中年之人



用之。着薄色之人も依事用之。奴袴を括事。  
着紫指貫之人多分腹白<sup>ヲ括ル</sup>。腹白ト稱スル  
ハ白組紫組二筋を奴袴ノ括リ差所へ入テ。  
長クバアマシテ。引出テ封ジ。緒ノ如ク組タ  
ル也。<sup>或又猿尾トモ</sup>薄色奴袴ニハ腹白ハ不括事也。  
<sup>尾トテ一結之緒四五寸計切テ引事也</sup>結ハ一筋。或ハ引出テ結之。  
或又籠ルナリ。中年以後籠之勿論事ナリ。

右此書の裏書にあり。

元祿九年正月廿八日寫之訖。

## 雁衣鈔

禁中御鞠布衣例。

李部王記云。天慶六年二月廿九日。溫明殿前  
ニテ有蹴鞠事。當世得其名輩數十餘人。布  
衣。烏帽子ヲ着セリ。

布衣事。

<sup>撰集秘記云。布衣。太上天皇已下隨便服用之。無所限。</sup>

張裏。壯年之人用之。但舊例無過失。高年人  
多着之。生白裏。宿老後用之。近來老少用之。  
尤可差別事也。

一織狩衣。

久我内大臣通親公仁安二年正月八日記云。  
大納言敎命。四品之後織狩衣雖令着。不得  
意。汝猶不可着。

一布狩衣。

通方卿抄云。極熱之比勿論。依時依人歟。其  
一門ゆるされたる人の着たるが宜也。非可

然人者不可然。予少年。三歟。十二故殿相具令

之候。六條殿給。朽葉布狩衣。給其之如松藤也。着之。

先院隱岐。御時。夏比上下多着之。壯年之人或

指廣結也。白組也。

一張裏鴈衣。

保元中納言中將春日祭上卿下向日。中山內

府。于時中將宿老歟。着。縹張裏狩衣。薄色指貫。白衣二。

同單。

一白裏狩衣。

或書云。白裏狩衣は。故人雖衰老猶憚之。近

代嬰兒多着之。倭成入道沉淪不居顯官。叙

四品及四十之後着。白裏狩衣。侍從大納言

成通。參會院見之。白裏狩衣きさせ給しなと

て被流涕。是衰老失前途之由歟。以之思

之。侍從少將等更不可着歟。近代公衡兼

宗。忠季等侍從少將之時皆着之。平治元年

春日祭上卿下向日。中山內府。于時中將。着。縹白裏

白衣。白單衣云々。

一長絹狩衣。長絹狩衣ハ。經大理之人着之。其外我身至極テカクト思人着也ト。先達所申也。

或書云。宿老人可着之。但檢非違使別當雖

年若必定着之。都テ公卿成ぬれば着用無

憚。殿上人者四位ノ中弁可着之也。又經歷

三ヶ國受領者着之云々。近代不可然歟。醫

師陰陽師等着者非正長絹。るせ絹也。長絹

と云は如筭絹也。

狩衣色々。

白青。

表裏同。表練薄物綾也。或浮織物。裏粉張也。不論

老少。不嫌四季。

萌黃。

面裏同。裏引糯。若色也。至十七八廿マデ

着之。

二藍。二藍。白裏。晴時着之。故實入ニ中倍。不

面裏同。表濃花田。然者。裏白透面。色白ノ惡也云々。アカミ有裏引糯。年齡同。萌

黃赤色。

赤色。

表蘇芳。裏濃花田。或云。裏二藍。若色也。

花田。

面裏同。壯年人濃。老人薄。濃花田ハ師花田ニテ。及貳十全可着之。白裏ハ自四五十着之。或云。冊着之。

香。

表裏同。白裏は五十餘人着之。

木賊。

表黑青。裏白。白裏老色也。五十餘人可着之。

黑木賊。

裏白。祝之時不可用之。

薄青。

表黃青。裏青。師薄青ハ三四十人モ着之。白裏ハ五十餘人着之。おとなしき人ハ青ミヲ薄すべし。年によりて薄く濃かるべき也。

薄色。

表薄花田。赤みをすこしすべし。裏濃薄色。至廿餘人着之。白裏ハ冊已滿人着之。

檜皮。

表蘇芳。裏二藍。老色。白裏ハ冊之後着之。

淺黃。

表薄紺。裏同。及五十餘六十可着之。白裏又老色也。

蘇芳。

二藍の猶赤みあるべし。

篠青。

表白。裏青。三四十之人着之。

青苔。青丹。

苔色。

表濃香。裏二藍。若も頗老も着之。不論夏冬。

比金青。



寶治二年十月廿一日宇治御幸。大宮大納言

公相卿。供奉。比金襴狩衣着之。件色面黃青ニテ

頗有黑氣。裏用青色。加引乃利歟。衣唐花紅。引立

烏帽子。有平禮同。

櫛。

表赤色。裏黃。若色也。年少人モ又十七八人

モ着之。秋末冬初可着之。

朽葉。

薄紅黃ヲ差。

青朽。

裏青。

紅梅。

表紅梅。裏蘇芳。若人着之。

白梅。

面白。裏蘇芳。

柳。

表白。裏青。若モ老モ着之。

櫻。

面白。裏薄色。或云。二藍。若色。卅計ニテモ着之。

樺櫻。

表薄色。裏濃色。裏ニ赤も有べし。十七八ニ

テ着之。

櫻蒨木。

面蒨木。裏二藍。自樺櫻頗若也。

卯花。

表白。裏青。

春號レ柳。秋號レ菊。

鷄冠木。

表裏同。

花橘。

面黃。裏青。

躑躅。

面紅梅。裏青。

樗。棟。

面薄色。裏青。

萩。

面薄色。裏青。或云。面蘇芳。裏萌木。廿許ニテ着之。

女郎花。

面黃。裏青。秋初可着之。到十七八着之。

海松色。

面黑。裏黑青。老色也。老人裏二藍。或白裏。

老色也。

虫襖。蒸青。

面青。裏二藍。或濃薄色。卅許人着之。自其

頗若人モ不可有苦。或人記。虫襖狩衣ハ秋

晴ニ令着也。其外ハ不用。但祭使など色多

盡之時。或令着之。

白菊。

表白。裏青。秋末冬初着之。若色也。

黃菊。

面黃。裏青。

紅葉。

面赤色。裏濃赤色。

黃紅葉。

面黃。裏黃也。但青裏ヲモ付也。

枯色。

表薄香。裏青。自冬至二月許可着之。若モ

頗老モ着也。或云。おとなしき色なり。

松重。

表青。裏蘇芳。或云。濃薄色。赤み有べし。十

七八ニテ着之。冬色也。或云。表萌木。裏赤也。

氷。

表裏白。但表は只張べし。裏板引也。或表裏

共用引糯事在之。

一依四季可着色。

春。

紅梅。白梅。柳。櫻。萌黃。權櫻。

夏。

卯花。鷄冠木。躑躅。棟。

秋。

萩。女郎花。秋初。海松色。虫青。白菊。黃菊。秋末。冬初。

紅葉。黃紅葉。

冬。

枯色。松重。冰。

一不論時折節可着色

白襖。二藍。蒨木。花田。薄色。薄青。檜皮。赤

色。青苔。香。朽葉。淺黃。苔色。海松色。蘇芳。

木賊。

一祝之時可用色。

松重。海松色。白。青。二藍。蒨黃。

一聳取之時可忌色。

薄花田。薄青。赤色。香。淺黃。櫻。枯色。苔色。

薄色。

一移徒之時可憚色。

赤色。檜皮。苔色。蒨木。薄青。櫻。淺黃。香。

一常不可用色。

黑木賊。比金青。

一用布狩衣色。

白張。二張布狩衣、五月雨時着事也。二藍。紺。蒨黃。赤朽葉。端ニハ裏ヲモ付着也。女

郎花色。青之蘓芳。朽葉。薄青。

或云。布狩衣朽葉。香用。二藍ヲモ着歟。常ハ不

打任歟。布狩衣ニ織物指貫ニ着タルガ能見

也。只指貫頗貧氣有之歟。

一侍狩衣色事。

赤色。二藍。花田。虫襖。薄青。蘇芳。青櫛。赤

櫛。檜皮。木賊。薄色。海松色。篠青。表白。裏青。冰。花

出ノ已メマロ。薄青。

重代宿老侍。海松色木賊ナドヲカユモ着事。

常事也。又一日晴時。狩衣付練貫。又五位侍

着用香狩衣事。晴之外細々不可用之云々。

一袖結事。

有裏狩衣如常。練裏狩衣差ニ練結。生裏ニハ差ニ生結也。或書云。薄平結。三十四五以

後人不可差レ之歟。



但於六位ハ。雖爲有裏狩衣。可差搓結ヨリ。是秘說也。

布狩衣結事。壯年人青村濃紫村濃。中年人濃村濃。老人白也。四十八九人頗可早速云々。

然バ五十已滿可宜歟。着白指貫人。袖結可白也。

但雖壯年人。於有色狩衣香花田二藍之類也。用白縫結常事也。或村濃如常。

幼稚人。或薄平。或置結也。

置結ト云ハ。毛拔形ノ形ニ糸ヲフサギ。其中ニ或花或草色々結之也。

正下四位中將ハ。雲客極官位也。可着白裏狩衣。可差組分結也。爲年少者。猶可爲薄平歟。袖結ヲバ不可用之。

### 一折吹反事。

問云。袖端并吹反折事。其故如何。又何狩衣可折哉。答云。於吹反ハ。表裏色替之時ハ。

### 一衣色事。

雖爲何色結搆ニ候。可折之。嵯峨内大臣家嗣公。命云。淨土寺入道。德大寺左府。予云。俊使時行向キ練童々。予本ヲ反キ。或反。德大寺不可反歟之由示之。淨土寺何様ニ者可一樣之由示之。予後案之。不可反也。侍。布衣ノ裏能時。吹反シトテ爲見反之歟。衣狩衣不可然也。

紅梅。蘇芳。薄蘇芳。裏濃蘇芳。萌黃。

或記云。萌木衣ハ自五節着之。何家此由ヲ執。

薄色。紅。紫。吳綾。綠。苔。黃衣。白衣。山吹。練貫。綾。

### 一單衣色事。

濃紅。白。青。黃。

問云。布衣ニ出萌木單事有之哉。然バ何之色單可出哉。

答云。崩木單事勿論。紅單白單例事也。其外蘇芳濃單等有之。

又問云。上結之時。猶柏ニ着單事有之哉。

答云。邂逅事歟。細々には未見及也。

一大帷色事。

白。崩黃。香。藍。摺紅。

一帶色事。

冬躑躅。夏二藍。公卿以下禁色人。赤色之外二藍也。白生帶。若六

位之人晴之時可用之。但地下六位常ニ用

事秘說也。又一日晴之時用錦帶事有之。

或記云。凡狩衣帶ハ切下襲裙用之。仍隨其

色。公卿并禁色四位五位有文赤色。非禁色四

位以下地下人等無文二藍也。青色帶ハ着青

朽葉下襲人用之。

問云。如柳櫻狩衣着之時。反冬帶事有之

哉。其故如何。若爲替色歟。然者何白襖之時

不用之。外又可用バ。何も布衣之時可反哉。

答云。白襖之外反事。未見及不存知。一奴袴下袴等色事。

在直衣篇。仍不注之。

一近來細々用習狩衣色々。

梅。面白。裏蘇芳。自三五月節至三月一着之歟。

櫻。面白。裏花色。櫻裏是也。自三五月節至三月一歟。

樺櫻。面蘇芳。裏同。時節同櫻。

櫻萌木。面青。裏二藍。時節同樺櫻。

柳。面白。裏青。四季通用。卯花菊同秋之故歟。

裏山吹。面黃。裏紅。自三五月節至三月。但於狩衣ハ春季用之。

花山吹。面薄朽葉。裏黃。時節同裏山吹。

藤。面薄紫。裏青。三月用之。四月同通用之。

已上。春季可着用此色歟。

盧橘。面朽葉。裏青。四月五月着之。

昌蒲。面青。裏濃紅梅。時節着之。

棟。面薄色。裏青。四月五月着之。

瞿麥。面蘇芳。裏青。或面用二紅梅。兩說也。四五六夏三ヶ月著之歟。

桔梗。面二藍。裏青。五月六月着之。

女郎花。面黃。裏青。六月自祇園會同着之。秋季通用之。但九月於狩衣ハ非常事歟。

萩。面蘇芳。裏青。時節同女郎花。

已上。夏季可着。用此色歟。

檀。面蘇芳。裏黃。秋用之。

龍膽。面薄蘇芳。裏青。自九月至五節。

黃菊。面黃。裏青。時節同龍膽。

葉菊。同二柳號。時節同黃菊。

白菊。同二梅號。時節同黃菊。

移菊。面中紫。裏青。時節同右。

青紅葉。面青。裏朽葉。時節同龍膽。

黃紅葉。面黃。裏蘇芳。時節同右。

已上。秋季可着。用此色歟。

松重。面青。裏蘇芳。冬常用之。但他字不可有悞也。

枯色。面香。裏青。

自師馳至二月歟。但五節表着間用之。次

又三月着用間有之哉。此等例近曾雖不可。

近來儀不可及色難歟。他色々又如此。相

違不可勝計之歟。

青丹。濃青差黃。表裏同色。

苔色。面香。裏二藍。

赤色。面蘇芳。裏縹。

白襖。

二藍。

崩黃。薄青。縹。

香。

檜皮色。

海松色。

木賊。青。黃。白。黑。

已上。不定時節歟。

虫襖。一說爲玉虫色。但夏季着否。存畧儀歟。

朽葉。面歟。冬裏黃。

茶染。



槿。

同衣。

黃青裏。

自秋至五節一歟。

萌黃。

自五節至春。或號若鷄冠木。又四月用之。

薄色。

時分不定。

黃衣。

春季着哉否。有異儀一歟。

紅衣。

裏中紅梅衣紅單等之時號紅勾重。白衣白單等之時號紅薄樣。

紅梅。

紫衣。

付櫻裏之時號葡萄染。裏薄紫衣歟。單之時號紫勾重。白衣白單之時號紫薄樣。

欸冬。

表紅。裏黃。表薄朽葉之時號花山吹。

裏濃蘇芳。

不定。時分。

白衣。

指貫。

紫。

冬。

單色。

薄色。

淺黃。

青色。

二藍。夏。

紫苑色。

夏或號薄色。或裏青。

瑠璃色。夏。

白色。

近代着レ之哉。

青鈍。

半二重。

半葉色。

本云

以陽明本書寫畢。

應永己卯曆應鐘三五天。以公務隙任本

馳筆者也。

鶴首左大丞藤原判

應永卅年南呂五々。借請一位大納言

兼宗卿。

自筆寫本。課命管城毛錐子。掃鴉蚓了。于

時清風颯々。頻排一點之殘燈。秋夜皓々。

既聽五更和鐘焉。

鳳城就官藤原判

康正二年沾念五日。借請前內槐

時房公。

本。以他筆書寫畢。如右與書者。祖父入

道殿御抄也。正本撰失之間。重所寫置也。

于時三春興漸盡。百華香已稀矣。

諫議蘭臺藤原判

# 布衣記

永仁三年八月日。伏見院北面日野殿に被<sub>レ</sub>參仕申。齊藤越前守助成が於<sub>二</sub>在所<sub>一</sub>諸家青侍北面少々有識之輩二十餘人參會之時。申合以<sub>二</sub>連判定置之事<sub>一</sub>。隨而北面瀧口布衣判官已下侍出仕進退之事。

一布衣進退。立烏帽子。風折可<sub>レ</sub>折左。紙よりの烏帽子懸也。五位にて指貫時可<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>馬上也<sub>一</sub>。衛府時は風折也。内々時は不可<sub>レ</sub>折之者也。

一裝束之下ぎ。夏冬相替。白帷白小袖也。次狩衣。青袴。押折也。衛府時者重衣。袖一重。青袴に身を入。下<sub>レ</sub>結也。大帷。下袴。重あり。次五位にて狩衣。白布。平絹の指貫。花田色也。結を上。次袖の結はすじの糸左<sub>レ</sub>綺右<sub>レ</sub>綺二筋。色はあゐ染に三寸許の段五分許。にはひ可有<sub>二</sub>黃色也<sub>一</sub>。次衛府をつくる時。織狩衣に袖一重。衣を重。指

貫に身を入。下<sub>レ</sub>結。次上帶は。自<sub>二</sub>四月至九月<sub>一</sub>は。生のせいかうに紫淺木の間色を付。自<sub>二</sub>十月至三月<sub>一</sub>。練絹に白粉を付。上に成方に黒重をする也。一分許。五位六位無替。次押折の時。五位六位共以<sub>二</sub>裾を左へ<sub>一</sub>。刀之下へ引取。但衛府は不<sub>レ</sub>取裾。但馬上之時可<sub>レ</sub>取裾。下時下裾。

一太刀。刀。扇事。太刀は衛府の太刀。五位之時は平さやをも用。絃袋をさす。次刀はさやまき。さげ緒は鎌倉さげ緒。かうがい同鎌倉。次扇如<sub>レ</sub>常みがき付也。

一弓矢事。弓は重藤。矢數廿五。上指四。かぶらしこにさす。限<sub>二</sub>齋藤家如此<sub>一</sub>。是利仁天下御敵退治時より云々。尙以其故在<sub>二</sub>之云々<sub>一</sub>。次矢黒うるしにさはすや。羽は鷺の羽。上指白篋。羽鷹羽。鷺の羽。何にても用。四羽にはぐ也。何もはぎ糸の上をば紙はぎにする也。次上帶。金手皮付。但押折之時は金手皮なし。主人矢をおひ。

弓持衰なし。調度懸持之。隨而調度懸の裝束。衛府時與押折時可替也。衛府時は立烏帽子走水干也。色は萌木。上下同色。押折時は折烏帽子。赤皮の烏帽子懸。紙綺の小結。裝束はかちむのよろい直垂なり。

一馬のこしらへ様之事。髪まかず。沓かけず。鞍は水干鞍。切付はあざらしの皮。上敷同皮。或師子面皮。力皮。師子丸にて上をつゝむ。ふせぐみあるべし。轡は鏡ぐつは也。しをでのくつ。腹帶。鐙は白鐙。舌長胸より肩まで白。次内内之時。常しきの鐙不苦。次手繩腹帶はかちんの類。不然者淺黃。指指繩打ませ。白淺木かちん三色。左打右打二筋取合て指也。指樣。馬のふりがみより三卷をきて。かうきはにくびの骨のどの下にて。ひとつときの懸結にしばりて。胸の右のわきにたはむ程にしをでのねにたぐり付也。たぐりのながさ一尺二寸也。次引

さし繩之衰。白指繩也。仍ふとさの程。指指繩常の布の一はたばりを六に立て。三ぐみの繩二筋に成なり。ながさのほどは三丈なり。但布一のながさ二丈五六尺歟。布一のゝながさも不苦。次引さしなわの事。聊ふとぐとし。布一はたばりを五にわり。三筋をもつて三打にするなり。次しりがいの事。糸ぐみのうね。押折の時はうね許。衛府の時はふさを付なり。次あをりの衰。くまの皮。次ふちは。くま柳のとうまきのふち也。舍人刀のごとくにさす。ぬき入の方を上になす也。馬にははだか足にてのる也。かちにてはあさ沓をはく。或はげゝもはくなり。山坂にてはすへわらんぢなり。

一笠の事。公家武家共に無替。晴の時白袋。けしやう皮あり。笠持常白丁也。立烏帽子。打懸着也。しと筒腰にさす也。同主人のしやう木持歟。次雜人夫一人。笠しやう木松明已下有之。



一馬の時僮僕者事。衛府時は童一人。郎從二人。調度懸一人。舍人二人。中間六人。其儀は隨時。かいぞへの若黨中間。跡に上下着召具。

一童裝束事。髪をさげ。入もとゆひをする也。白紙也。下着事。夏冬により替也。白帷白小袖也。上は水干。下は葛袴。水干色紫蒔木間なり。のぼりはた袖。一身に袖一色を替。くずにてもする也。次我が家文を金ぱくにてをす也。在所は前袋に一。左右袖外に二所。前に二所宛。已上五なり。うしろには不付。同はかまにも不付。袖のくゝりとくび程は赤皮也。次葛袴は。中程よりもすそをかちに染。こしの下よりすそまで。色々の繪具にて繪をかく也。時々の文草木花紅葉也。所々に白金。ぱくにて切はくをちらすなり。腰は絹也。又絹をもかさね候也。絹の事。紫紅蒔木の間。平絹に色を付。所々に金白はくにて雲を入違たむなり。のぼりといふは

前袋半分なり。

一郎從事。立烏帽子。裝束走水干。上色うすかう。袴葛也。はく紙にて水干に家の紋をおす。うしろ左右袖の上五所。前袋に一。已上六。袴にはおさず。くゝりを上。刀をさす。

一調度懸の事。立烏帽子に蒔黄色の走水干。上下同色。くゝりを上。刀をさす。しこをおひ弓を持。しこはかけをにて左の肩へ懸。右の脇の下へひきまはし。つるまきをかたにもたせ。次白布を十徳のおびの如く平ぐけにして。其帶をもつてゑびらを腰に付。弓をばつるを上になし。にぎりの程を右のかたにかけ。本はずを一尺ばかりをきて。右の手にてかたくる也。刀をさすなり。

一舍人の事。立烏帽子に右近ぞめの走水干。上下同なり。くゝりを上。刀をさす。一人如此。一人はそへ舍人也。折烏帽子。淺木の一重直垂也。

紙よりの小結也。

一中間事。折烏帽子小結常也。染直垂に大帷を重。袴に大口を重ね。直垂の色付。地かちんにもんを香。或地香。文かちむ。又は蒔木也。家の文也。はくにて文を付時は。地色かちんにてもかうにても無文也。文をつくる在所。上下九所。上はうしろのぬひめ。左右の袖の上。胸の引合。但引合には文を二ツにたちわりて兩方に付。間一也。然ば上に四なり。袴はうしろ腰の下に一。前ひざの上左右に二ツ。もゝだちに兩方二。已上五なり。袴にはくゝりを入上也。ちわらちをはくなり。

一立所の事。行連次第。繪圖に在之。

一衛府の時も路次近所の御供には馬に不可乘。不可有<sup>を連イ</sup>其用意也。不乘馬時者。衛府をも連。郎徒舍人不可入者也。

一八幡。春日。日吉。非其而已。都の外御供には。

押折にて參會の御供たりといふとも。さ様の在所へは。かん小路なきによりて參會申に不及。其上遠路なるによつて。且爲御用心。乘馬にて路次の供奉可申也。其時は僮僕の者可替。衛府時但郎徒を不召具なり。

一調度懸の事。折烏帽子に紙よりの小結に赤皮の烏帽子懸。褐布直垂に赤革のひぼなり。袴もくゝりを入れて高く上。矢をおひ弓を持交は。衛府の時に不可替。但しこに手かはをさすべからず。その外は同もの也。

一舍人事は。ゑふの時のそへ舍人のごとし。折烏帽子。紙よりのこゆひに淺木の一重直垂にくくりを上也。

一童と中間と不替。衛府時成とも。御供成とも。はれの時の様に依てけつこう有べし。

一諸役次第事。抑御出仕之時。於殿中第一御祝の給仕事。第二御裾の役。第三御すだれの役。

第四御笠の役。第五御沓の役。御しちの役。如斯次第イに上首より可隨なり。

一於本イ本家進退の事。出仕中門の沓ぬぎにいで。

道の脇に立。御車中門による時は。すだれの役に隨。すだれの左のすそを。かどをとりて指上時。上之方車の右にめす。于時共イすだれをおろす也。御車御門に立時は。中門の沓ぬぎにて沓を進。其時小雜色の方より沓を如斯請取。自如木方。青侍請取。其時如木三足あよみよる。其時侍一足歩向。目禮して沓を請取。沓ぬぎにて進也。但諸大夫の進時。依爲上首侍。不綺之。諸大夫隨諸役也。次笠持の事。如木進退かうこなきによて。小雜色の方より請取なり。其時禮如木與同夏也。

一諸社の祭禮に本家御參向在時も。又御私御參社の時も。御へいひざつき已下社頭において有之。仍御師御祓をもつて參。侍立向取次申。

其時左の手を上になし。右の手を下になして。左の方へなびかして請取。廳上の方へ參時に。右の手を上になし。左の手を下になし。持なをし。右の方へなびかして參也。御取有て以後本座になる時。御拜已後御師參。直に御幣を給者也。御師社頭の御前にをきて。拍手打て後御沓をなをし參せて御退出あり。如此役に隨時。我身も沓をぬがず可隨者也。

一狩衣事。六位之狩衣は。面仁和寺布好也。裏は練貫を付也。付色は主の年により又は狩衣の色による。面裏同色をば二重と申。此色は紫菀木の間也。主の年二十ばかりまでは可用也。次面菰木裏白をばとくさ色と申。此色をば主年廿四五まで可用。次面紫裏菰木をばひわだ色と申也。次面こき菰木裏薄菰黃をば海松色と申。次面紫裏白をば萩花色と申也。次面紫裏薄紫をば藤重と申也。卯花色。瞿麥色。女郎



花。尾花。白菊。ひは。櫻色。梅重。柳色。或面蒨木裏紫をば松重と申。色々の名どもあり。雖<sub>レ</sub>然近代此色付失<sub>レ</sub>にて知人なし。所詮面も裏もその色のこき薄きにて其名を申替也。いかにも主の年によりて其色をば好むべきなり。次に袖のくゝりの事。六位にては常式のまだらをめす。かのあつぐみなり。五位之時布狩衣をば已前に書をく也。折狩衣には平ぐみたるべし。殿上人の狩衣のくゝりと同ものなり。

一六位之時の青袴事。面は上品の宇治さらし也。布に白粉を付。八の袴。裏は練貫にのりふのりをよく付て。いかにもさやめきは張る<sub>〔符號〕</sub>べし。下重の袴。いさゝかふとき布にのりをつよく付て。いかにもえもむをよく持様にはるべし。内まちと腰をば生の絹たるべし。下袴腰はほそき布也。すそのくゝりはねりくりの糸丸ぐみ

たるべし。

一大帷事。是もふと布にてはなし。いさゝかほそぬのなり。ふのり粉をよく可<sub>レ</sub>付。のりのうすきは衣文を不<sub>レ</sub>持也。

一衣之事。歳十六七許までは。平絹のいた引たるべし。色は狩衣の色によりて蒨木紅の間たるべし。又あこめを用候也。年廿許よりは紅のあやたるべし。歳卅二三までは可用也。其已後。假令くちば香貫白風情のをりを可用也。いかにも依<sub>レ</sub>狩衣色可<sub>レ</sub>好也。

一押折の時は重衣事本儀には無之。但不<sub>レ</sub>重衣時は無行粧間。晴時は雖爲押折可<sub>レ</sub>重衣也。不<sub>レ</sub>苦事也。於<sub>レ</sub>本家内々時は殊不可<sub>レ</sub>重衣。如此子細依<sub>レ</sub>腰細也。

一袖一重事。好絹をうこん染に色を付。狩衣の袖より一寸ばかり出べき也。衣と大帷の間に可<sub>レ</sub>付也。

一五位之狩衣の事。上品の宇治さらしの布に白うすく粉を付て。一重狩衣なり。袖のくゝりは具に在<sub>レ</sub>前。次指貫。平絹。色は花田色なり。裏は白絹にのりふのりこを付て。いかにもさやめきはるべし。まちこしは生の上品の絹也。下結はねりくりの四ぐみなり。押折の時は上結。衛府時は下結なり。かやうの事は五位六位不相替。

一太刀事。六位の時は衛府の太刀。五位にては平さやをも可用。衛府の時は五位六位までも帶劔なり。馬上時同前。押折の時は中間持也。本家にて御しやくをも取。御給仕をも仕時は太刀を取なり。就中末代於<sub>二</sub>子孫<sub>一</sub>。此趣可<sub>レ</sub>秘々々。不可<sub>二</sub>取散<sub>一</sub>。若可<sub>レ</sub>開輩は諸神諸佛可有<sub>二</sub>御罰<sub>一</sub>。

諸家之青侍末代重寶也。いかにも可<sub>レ</sub>秘之。

調度懸郎從舍人馬皆副中間同副舍人笠持郎從童

瀧口出仕次第事。

一頭辨しゆくし始之時御供申者也。瀧口人數之夏。其家人は依<sub>レ</sub>時六人まで被<sub>二</sub>召具也<sub>一</sub>。但一人も被<sub>二</sub>召具者也<sub>一</sub>。人數あまりおほき時は。一薦。二薦。三薦。四薦。五薦も次第に申者也。一瀧口の事。七歳之年より十二三歳迄が本職なり。但御事闕時は十五六歳まで不<sub>レ</sub>苦。是は家之瀧口事也。道瀧口は年廿歳ばかりまでは可<sub>レ</sub>隨也。

一主の進退の事。立烏帽子に狩衣。風折也。下着の夏。夏は白帷。冬は練貫たるべし。

一装束の事。水干狩衣と申者也。上下共に同色なり。登端袖替故に如此名を申替也。只狩衣のごとし。着様も如<sub>二</sub>狩衣<sub>一</sub>。仍装束のやう。面白練貫ならば。裏の色あをかるべし。面白練貫ならば。裏は平絹たるべし。面には縫物をする也。文夏は主の家の紋をもぬひ付也。又時の草木花紅葉をもぬひ候也。次のぼりはた袖は金襴

たるべし。色は水干の色によりて。はた袖の地の色をかへ候なり。又は主のこのむべき也。裏をばいかにものりこはくふのりを入べし。袖のくゝりはけぬきがたにて。殿上人の袖のくゝりと同物也。次大帷の下の袴も狩衣のごとくあるべき也。次衣をも重袖一重もあるべき也。狩衣と同事也。袴には身を入れて下結也。上の帶の事は狩衣のごとし。次淺沓なり。

一太刀は衛府の太刀也。六位の也。刀は鞘卷なり。一扇は檜扇なり。板數十六まい。付花さげの糸は色々也。太刀は中間にもたすべし。太刀はくことなし。

一弓しこの事。主のたいすべき也。弓は重藤。矢はしこの矢也。是常式の如し。矢の數十六筋さす。其外上ざし二筋さす。的矢也。齋藤イモの家に上ざし四筋たりといへども。瀧口の時は的矢一手さしそへたるによりて。上指其まで四

筋に用也。瀧口おさなきによて。禁中にても君の御ゆるされ有て的をも仕なり。依之的矢をさすなり。是瀧口のめいはうなり。次馬にも乘なり。いかにも少年が本也。

一弓しこも矢も主にあいにたるやうにこしらへるなり。矢の篋上ざしまでは白篋たるべきなり。的矢はのごひうるしたるべし。羽ばたうの羽にてもはぐなり。但上指と的矢との羽は鷹の羽たるべし。上指は四立にはぐべき也。しこには上帶に手皮付べき也。

一しこを主のおひ様は常のごとし。弓の持やうは。左の手につるを袖の中へ成て持也。馬の上にても其如く持也。いかにも絃を袖の中へ引そへ持也。絃をうちへなす事は瀧口のこつはうなり。其子細在口傳也。

一内裏にて貫首殿上に着座の時。瀧口殿上の小庭の土戸の外脇壁の内に床木を上首次第に



立ならべ腰をかくる也。其時弓を右の手に持  
なをし。弓杖につく。其時は弓庭にて的を射  
時。足をふみ定弓杖つくがごとし。

一殿上の小庭にてもんじやくと申て。瀧口祝言  
に哥うたふ事あり。其時床木に腰かけながら  
瀧口の云。主殿つかさゞ。殿上の小板敷には  
貫首の御座候やと申。主殿司答云。いやさもさ  
ぶらはすと申。其以後瀧口歌うたふなり。

そよや祝なれば。松の枝には鶴こそすをば  
くへ。岩ほが上に龜あそぶなり。やれかとい  
う。

如此うたひてしこうするなり。一反うたひて。  
なを申候へとあらば又うたひ候なり。三度ま  
ではうたひ候也。うたひはてゝ後。もんじやく  
のさきのげざんといふ也。是は見物の人をは  
らひのけたる詞なり。内裏にても。本家にても。  
門前出入時も。見物衆せきあひ候時可申詞也。

一本家にて瀧口出仕時。在所與廳造合ついがき  
に副。殿上の小庭のごとくに寢殿のきはより  
上首次第に着。床木弓を右の手に持なをして  
つえにつく也。

一馬の拵やうは衛府時に不替。次のりやう同  
前。沓を不用素あし也。裾を取事。狩衣の時の  
ごとし。乗馬の時取。下馬時下。弓矢をば殿中  
にても可持なり。

一僮僕之事。不可替。衛府同夏也。在所同前。依  
無替不及委注者也。

一家の瀧口。家の判官と申は。其於本家。普代の  
侍の成所の判官の夏也。みちの瀧口道の判官  
と申は諸家に在之。被召具なり。且又諸家へ  
渡て。御訪肝要にて。身をやとはかし申間。其  
本家多。又は本家不定。然者公家の御家をき  
らはす奉公申によりて。家の方よりは是を下  
する也。其本家をさらす普代して各別の主を

とらず。北面ながらその本家けんたいする計也。故に家の瀧口家の判官とて。是を宗とする  
と云々。

一判官出仕之事。冠束帶赤衣也。別當殿ていゐの  
すけと進退大略同前。僮僕已下の吏。如本目  
録ならば事の外の大儀也。但それは上古の  
事。近代は家の判官も道の判官に毎事可相  
尋。家の事。久退轉之間。目錄の難用道の事。毎  
年賀茂祭に自然別當殿御出仕の時。細々供奉  
申間。如其相尋出仕供奉申は。更不可有。其  
難者也。何時も家の道を發。隨其役事あらば。  
悉道の判官をたのむべき上は。別て委不及。  
注置。近代道の外家の判官無之上は。雖發家。  
例年沙汰し付し如くならば。諸家の不審御難  
あるべき間。如斯注なり。此記錄式目次第何  
にも可秘。此道に入ざる輩に不可見。背。若  
此。押有一見者。佛神三寶の御討を可蒙之

由。本記に在之乎。我家心指深輩。若のぞむ事  
あらば。以。討文。可相續之者也。仍爲末代衆  
議如此。所定如件。

兵衛尉能兼在判	越前守助成在判
兵衛尉賴直 同	左衛門尉房名在判
兵衛尉助氏 同	右衛門尉重宗 同
左衛門利盛 同	兵衛尉景季 同
左衛門宗信 同	左衛門尉安盛 同
左衛門尉安忠 同	左衛門尉信忠 同
河内守安俊 同	左衛門尉長信 同
越前守重信 同	越前守忠信 同
河内守安範 同	丹後守貞房 同
越前守信光 同	伊勢守長信 同

已上

群書類從卷第一百十八

裝束部七

連阿口傳抄

裝束寸法

一束帶。

袍ノ長サ

主上院東宮ハ一ノ御骨ヨリ御キビスマデノ御寸法ニ餘リアルベシ。一尺二寸。親王大臣次第ニ可有<sub>二</sub>了簡<sub>一</sub>歟。餘リ年少次第ニ殿上人七寸餘リ。地下五六寸。何モ年少可有<sub>二</sub>了簡<sub>一</sub>歟。

同廣サ。

主上院東宮ハ一ノ御骨ヨリ中ノ御指ノサキマデニ一寸餘ホドヲ<sub>三</sub>ニヲリテ。御大袖ハ御身ヨリ五分ヒロシ。御ハタ袖ハ此外ニ付ベシ。

宮大臣ハ御指ニ五分アマル程ヲニニラルベシ。殿上人ナラバハコヒニヒトシ。地下ハ聊タラズ。大袖ノ付目ヨリ。ワキヘ一寸五分スデカヘテ上ベシ。

ハタ袖ノ事。

大袖ノ三分ガ二也。

袖ノ口ノ事。

身ト大袖トヲ合テ猶二寸五分。或一寸。仁ニヨリテ可有<sub>二</sub>了簡<sub>一</sub>歟。

ハコヒノ事。

身ノ廣サニハコヒノ長サハ一寸五分ミジカシ。凡ノ寸法ニヨリテ可<sub>レ</sub>定歟。此スソ三寸五



分セバクオトスベシ。サキハスソボソナルユ  
 エナリ。袖ノ付メトハコヒノツケギハトノア  
 ハヒ一寸五分アルベシ。是ヲ帶トウシト云。但  
 帶トウシハ前ノ付下ニアル也。一寸五分ノ間  
 ニ小紐ヲ付ル歟。

### ラムノ高サノ事。

ハコヒノナガサニ一寸五分オトルベシ。タケ  
 ニヨルベシ。襦ノ左右ニ耳ノ様ナル物ヲバア  
 リト云。其ソバへ出タル分。襦ノ高サニ一寸五  
 分オトルベシ。是モ年少可ニ相計。アリノサキ  
 アリニ同。

### 大クビノ事。

上ハエリノ廣ノ半ナリ。下ハ上ヲ二合タルホ  
 ドナリ。是ハ上下年ヲ不謂。可ニ了簡同。

### ム子ノヲリメノ事。

クビカミノ前ノキヲヨリ七寸六寸ノ間也。了  
 見上下ニヨラズ。年少ハ可ニ相計。

### 一半臂

袍ノ長サヲ五ニヲリテ三分也。ム子ノ折メヨ  
 リ也。此外ニ襦アリ。上下年少同事。廣サハ袍  
 ノ身ニ一寸ヒロシ。袖ナシ。襦ノ高サハ袍ノラ  
 ムニ五分オトルベシ。左右ノ脇ニ十二宛。後ニ  
 六タ、ミ置間。長サ一丈二尺。是半臂アラシト  
 云。

### 大クビノ事。

六寸アルベシ。上サマ次第二セバシ。

### 忘緒事。

廣サ三寸五分。長一丈二尺。年少又可ニ了簡。帶  
 ノ長サ可依腰。是ヲ引帶ト云。忘緒ノタ、ミ  
 ヤウアリ。二ニヲリテ。ワナノ片ヲ三分一ホド  
 ニヲリテ。マタワノ中ヲ引帶ニテ結。

### ム子ノヲリメノ事。

袍ノハ頭紙ノ下ヨリサス也。是ハエリヨリサ  
 ス間。頭紙ノアツサヲ三寸バカリアテ、袍ノ

ム子ノヲリメヨリ三寸ニテモ二寸五分ニテモ寸法ニヨリテ長サ可定。

### 下襲事。

前ノ長。ム子ノヲリメヨリ袍ノ欄ノツケギハマデ也。後ハ裾別ナラバ帶ニハヅレヌホド也。裾ツバカバ其長サ仁ニヨリテ長短アルベシ。主上大臣一丈二尺。腰ヨリ下分也。此外腰ノ上一尺四寸。帶ノ上ノヘニシカタ下ヨリノハ子カヘシ四五寸。是ヲ取合テム子ノヲリメヨリイクラホドトシルベシ。大納言ヨリ參議マデ一丈。殿上人八尺。地下七尺。但辨少納言ノ人可了簡。其人ツイタケモアリ。廣サハ身ハ袍ニ同。袖ハ袍ニ一寸ニテモ五分ニテモマササルベシ。

### 一袖事。

長サ袍ニ五六寸ミジカシ。廣サハ下襲ノ了簡也。

### 一單事。

長サ一寸袖ヨリマサル。袖ノ廣サ一寸五分袖ヨリヒロシ。身袖ニ同。

### 一表袴事。

長サ一ノ骨ヨリキビスマデノ寸法ヲ三ニヨリテ二分ニ猶二寸ナガシ。是ハ殿上人ナドノニヨシ御所サマ大臣ナドハ今一寸五分長クスベシ。マタ人ノ腰ノ高下ニモヨルベシ。廣サハ長サノ三分一也。猶一寸五分マサルベシ。大ノ小ノハ大ノ三分ガ一也。猶一寸セバ変也。サカリノホドハ。足ツキニ五分カハルホド也。足ツキ九寸バカリ。寸法ニヨリスソノ口三寸計オトスベシ。マタノカタ也。腰ノ高サ一寸五分。長一丈二尺。上下年少可計。ヒダヲバ小ノヲノゾキテトルベシ。

### 大口事。

表袴ニ同。足ツキナシ。スソヨリ上ヘ内ヘオシ入ル。如此スレバ。モ、ダチヨリ下ハ四ヘニ

ナル。長サハ表袴ヨリ三寸バカリミジカシ。  
一直衣事。

長サ袍ヨリ一寸ミジカシ。上ザマハ二寸ミジ  
カシ。廣サ袍ヨリ二三分バカリセバシ。自餘如  
袍。

相事。

長サ直衣ノ長サニ六七寸ナガシ。廣サ袍ノ相  
ノツモリノ如シ。

單事。

長サ相ノ如シ。廣サハ袍ノ單ノゴトシ。

指貫事。

上ザマハ實身ノ御寸法ニ六寸五分ナガシ。大  
臣以下ハ次第ニ。殿上人三寸五分。地下一寸  
餘。或ハ餘ナシ。廣サハ長サヲ二ニ折テ猶一寸  
ヒロシ。上ザマノ也。殿上人ナドハ五分マサ  
ル。地下ハアマラズ。此内ニ大ノ小ノアリ。大  
ノハ小ノニ二寸五分マサル。是モ寸法ニヨリ

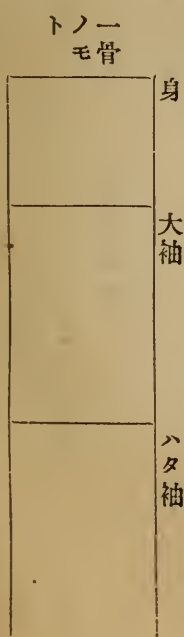
テ一寸マサルモアリ。モ、ダチハナカラヲリ  
也。マタハ一寸アガル。ク、リ一丈二尺計。

下袴事。

長サ一尺廣サ一寸。指貫ニマサルベシ。  
一狩衣事。

長サ前一尺後四寸實身ニマサル。大臣以上如  
此。公卿大畧如是。大納言以下可了簡。殿上  
人以下前八寸後二寸實身ニマサル。地下輩ナ  
ドハ猶ミジカシ。年少又可相計。廣サハ實身  
ニ三寸マサル寸法ニテ。一骨ヨリ中指マデノ  
分也。身ハ大袖ニ同。ハタ袖ハ一寸五分セバシ。  
紙形ニテ可計。

其紙形如此。





身ハ半ノ寸法也。  
合テ大袖ニ同。

如レ此アツル間。身ハ二ツ分也。  
只今(其大袖ノ)ヒロサチ身ニシルスベシ。

### 袖口ノ事

大袖ハハタ袖ノ廣サヲ合テ猶二寸マサル。大臣以上也。大納言以下次第ニ可<sub>レ</sub>了簡。殿上人ハ其寸法指ニ同。侍ナドハ指ニタラズ。

### 相事。

長サ一尺實身ニマサル。廣サ二寸五分狩衣ヨリセバシ。狩衣ハ一身ナリ。二寸五分オトルホドヲナカラヅツハカラヒアハスベシ。小寸法可有<sub>レ</sub>了簡。袖口ハ布衣ニ同ジ。

### 單事。

長サ一寸廣サ一寸五分相ニマサル。分袖ノ事ナリ。身ハ相ニ同。

### 指貫事。

如<sub>レ</sub>注右。カハルベカラズ。

### 袖ノク、リノ事。

十五以前ハケヌキ形。十六ヨリウスヒラ。其後アツボソ。老者ハヨリク、リ。六位ハヨリク、リ本義ナリ。雖<sub>レ</sub>然當時一向ケヌキ形。クミヲモサス。

### 一淨衣事。

狩衣ヨリツ、シクスベシ。ハタ袖ハ一寸オトリナリ。

### 袴事。

長サ淨衣ノ前ノ長サニ今一尺三四寸ミジカシ。廣サハ長サヲ二ニヲリテ七八分セバシ。マタノ付所上ヨリ一尺。

### 相事。

長サ實身ニ八寸長シ。廣サ淨衣ニ一寸ミジカシ。

### 下袴事。

長サ一尺廣サ五分。袴ニマサルベシ。

葛袴事。

長サキビスヨリ五分バカリ餘ル。廣サ長サノ半分也。但三分バカリマサリモスル。上下同色ノ水干ナラバ三四寸モヒロシ。上下水干ハユウケンナル間ナリ。上ハ布衣ノ前後ノミジカキ物也。タリクビニヒボアリ。タリクビナラバ右ノヒボヲカタヨリ後ニ付テ。左ノヒボヲバクビカミノヲリフセタルサキニツケテ。左ノタモトヨリ取出テ。前ニスチカヘテユフベシ。馬ニ乗時ハ右ノヒボヲモ後ヨリ前ニ同ヤウニユフベシ。鞠ノ時又如此。

一エリノ寸法ハ前後ヘノアツサヲエリト云リ。マヘノ廣サハアツサヨリモ今二三分セバシ。コレハエリ形ノ事也。ナカラヲリ也。頭紙ヲバ其マハリニアテ、カキ形ノ間ハ三分ガ一ヨリ一寸三四分バカリ廣シ。是ハエリ形ノタチノ也。ヌヒシロヲオキテクビカミヲハカラ

フベシ。年少ノ人ムキテアツベシ。クビ形ハ後一寸マサル。前ノカキスツル分一寸セバシ。一鳥帽子ハ其仁ノヒタヒノキハヨリウシロヘノカミノハヘギハヘマハシテ。二ニ折テ可<sub>レ</sub>定。タケハタカクアラバ。ヘリノケテヨハウ。ヒキクバ。ヘリノケテヨハウ也。ヘリノ高サ一寸バカリガホド也。人ニヨリテ五六分モアリ。七八分モアリ。可<sub>レ</sub>計。

一身ノ二アルヲバ大忌ト云。一アルヲバ小忌ト云。

一晝裝束ト云ハ束帶ノコト也。直衣并衣冠ヲ宿裝束ト云ヲモチテ可有<sub>レ</sub>了簡。

一ハタカ單トハ束帶時打衣相ヲ不着ヲ云カ。

一束帶着次第。

先着赤大口。其後表袴ニ足ヲ入テイマダ腰ヲユハズ。次ニ單ニ相ヲ重テ後。袴ノ腰ヲ結フ。腋ノ通リヨリハ聊前ヘヨセテ。右ノ方ニ片カ

ギニ結之。腰ノスソヲ同程ニハカラフ。但片ミサカリノ程上臈ハ長ク。下臈ハタカク也。或ハ前ニ兩カギニモスベシ。次ニ下襲ノ腰ノシハヲ深ク入テ。帶ニテ腰ヲユフ。但裾ベチナラバ。裾ノ腰ニテ可結。或ハ半臂重テ忘緒ニテ可結之。次ニ半臂忘緒ノワナヲ左ニアテ、イタクツヨカラヌ程ニ結之。其後ニ袍ヲ着テ。頭紙ヲバ前裝束師マハシテ。後裝束師ヒボヲ入。先右ヲ可着。右ノ袖ヲ手ニ入ル。下カヘナル故也。次ニ腰ノシハヲ深ク入テ。前ヘマハスホドヲ可待。前ヘマハシオフセテ後。尻ヲ作テ前裝束師ノユビニオサヘサスベシ。尻ノ作ヤウ。腋ノ縫目ヨリチト前ノ方ヲサシサゲテ。取テ。上ヘ引上。其アゲホド。スソニ見合テ。欄ノ高サヲハカラフベシ。帶ノトホリヨリシモヲ引上テ。腋ノシハニマトヒ付ヤウニカラミカクシテ。内ヘヒチル也。下ヲバヨコザマニ取テ。上ヲバタテザ

マニ取テ。腰ヲカフベシ。チトマトヒカクシタルヨシ。尻ヲ帶アテ、ノチ。大ニヒキナセバ。ワキノシハヒカレテツマルガヨキ也。前裝束師ニヨクトラヘサセテ。其上ニ帶ヲアツ。帶ユヒテノチ。尻ノ大小ヲ見ハカラヒテ。イマダウルハシクシメザランサキニ。尻ヲ作オフスベシ。ツマリタラバ。イクラホドモヌキ出ベシ。大小ヲハカラヒオフセテ。尻ノ高サヲハカラヒテ。高クバ内ヘヲリカヘスベシ。中ノ縫目ヲバ帶ノ下ノトホリヨリモイマスコシサガリメニラル。左右ノカドヲバ帶ノ中スミニアテガヒテ中タワニスベシ。三角一面ニスルト云ハコレナリ。三角一面トイヘバトテ。中ノヌヒメヲ裝束師ノ前ヘ引テカドヲツクルコトニハアラズ。心エヌ仁。サヤウニスルコトアリ。比興也。三角トハ兩方ノカド二角タカカド有。中ハ中タワナルガ一角也。兩方ノ角



ノアヒハ面スグナル間一面ト云。中ノヌヒメニカドヲアラセントテヲル事。ユメノアルベカラズ。中ヲヒキクダニアラスレバ三角ニミユル也。兩方ノカドヲタカクシテ。カドヨリナホ腋ノカタヲベタノト取ヒシギテ。カドヲタテタルガヨキ也。カドヲタテ、帶ノカタヲ共ニマカサントスルハキタナキコト也。帶ノシハヲヨクノ腋ノカタヘオシヤリ。ミメヨク作ナス。尻ノ大小仁ニヨルベシ。相カマヘテ袖ノ下ニタワマヌヤウニスベシ。ワキノカヒヤウニヨルベシ。尻ノ大小。御所サマハ勿論也。大臣以下次第ニチイサク。但參議ニイタルマデハ。公卿ナレバイタクチヒサカルベカラズ。殿上人モ次第ニ。下臈ニナラバチヒサクスベシ。凡尻ハ餘ニ大ナルハワロシ。次ニ襦ヲオシカヘスコト。襦ヲ上ヘハチアゲテ。ソレヲマタ上ザマヘミマキシテ。主ノ大口ニオシ

マトフベシ。次ニ袖ノ衣モンカクコト。身ヨリノシハヲカタノトホリヨリハサゲテトリテ。上ヘ高クカキ上。次ニ一ノシハヲカマヘテ深ク入テ洞ヲ深クスベシ。二ノシハヲバ淺ク。ホラノトヲリ取。身ト袖トノ縫メヨリ三寸餘身ヨリノ方也。二ノシハハ是ヨリハシヘ二寸餘。<sup>一二ノ</sup>間也。一ノシハトハタ袖ノ付目ト一寸バカリアルベシ。一ノシハノサキ。ム子ノヲリメヨリ一寸或ハ五分ウシロヘコス。ム子ノヲリメタカクツキタラバ。ヲリメノモトニテアルベシ。タカサヒキサニヨリテ見合ハカラフベシ。一ノシハ。ハタ袖ノ付メヨリオクヘ四寸バカリ入ベシ。其次ニソノアヒホドニ二ノシハヲ付ベシ。二ノシハハハサ、カナルベシ。マタ同ジホドニモス。是ハワロシ。袖ノ外ハ一ノシハノトホリヨリハタ袖ノスソヘカドヲトホスベシ。サレバトテ。カタナノハノヤウ

ニトルコトハワロシ。マロヤウニトルベシ。  
ハタ袖ノスソ上ヘハスルコトハ地下ニイタ  
リテノコトナリ。殿上人以上ハ唐ノ犬ノ耳ノ  
ヤウニフラ、トサガルベシ。ソレサグルシダ  
イハ。二ノシハノ通りヲ次第ニスソヘニホハ  
カシテ。ハタ袖ノスソヘシダイニニホハカシ  
テ。スソマデヲリワレバ。スエハフラ、トサガ  
ルモノ也。袖ノ衣紋モシリノゴトク。次第ニ  
下臑ヘハ小クカクベシ。洞ヲサゲテトリテ。後  
ヘ袖ヲコセバ。衣紋大ニナル。洞ヲアゲテ取テ  
衣紋ヲ付バ小ナルベシ。次裾ヲ石ノ帶ノ上手  
ニカクル事。帶劔ノ時ハ劔ノ足緒ノアヒニカ  
クル也。殿上人ハ尻ノ右ノハシ。面ノ白ミヲ  
二寸バカリミセテ。アラハニヲリカヘスベシ。  
公卿ハサモセズ。只裏ノ黒ミバカリヲミスル  
也。大方中ノヌヒメヲ前ヘナリ。兩方ノハシ  
ヲバウシロヘナリ。スソノナガサノ事。表袴

ヨリチトアガルベシ。ソレモ仁ニヨリテケヂ  
メアルベシ。公卿ハ大略スソヲヒクホドナリ。  
前裝束師表袴ノ腰ヲバ結ベシ。是ハ本義也。右ノ腋  
ニユフハ片ワナニ結ベシ。スソノサガリノホ  
ド。カタ／＼餘ニ長クバ。ワナニ長キ方ヲカヒ  
カクベシ。袒ノ前フクラ。腋ヲヨククツロゲ  
テ。タワヤカニ引上ベシ。下重ハ兩方一寸餘  
前チフス也。ツツヲリテ。コレモ腋ヲタブ／＼トク  
ツログベシ。前ノ高サハ襴ノツケメマデトバ  
クベシ。但前フクラヲ本トスベシ。次ニ半臂ノ  
前ニホンキ物ヲクビノサキ也。兩方ノ腋ヘオシヤリ  
テ。下具ヲモタスルヤウニ。此前ヲバチトツメ  
タルガヨシ。忘緒ハイタクツヨカラズ。或ハ忘  
緒ノ引帶ヲバウシロバカリニアテ、前ヲバ  
ハヅシテ緒ニハコメズ。袖ノ衣紋カク時ツマ  
ルハワロキ故也。前ヲハヅシタラバ。ノチニク  
ビノサキヲバ帶ニカフベシ。凡前ヲバ半臂バ

カリヲバハナツキニス。次ニ袍イマダ着セザル以前ニ。先下具ノ袖ノ下ヲ取合テ。ヨコザマニ主ノ手ニモタセ。其後袍ノ袖ヲ入テ。頭カミヲ重テ。ヒボヲ後裝束師入ヲ待ベシ。次ニ下カヘノランノ付ギハヲ取テ。主ノ後ヘ左ノ手ニテ引マハシテ。右ノハギニ引カケテ。左ノ手ニテトラヘテ。右ノ手ヲサシヤリテ。セノヌヒメヲ取テ主ノ左ヘ引ベシ。<sup>上イ</sup>セノ縫メ。ナカラヨリチト左ヘスグルホド也。右ノ手ニテ襦ノツケギハヲ後ヘ引マハスベシ。左ノ手ニテトラヘタルヲバハツサズシテ。右ノ手ヲウシロヘヤル。裝束師ノ左ノヒザニテ。ハヅレヌヤウニ押付ベシ。上カヘマハシオフセタルトキ。マタ裝束師ノ右ノヒザニテ主ノ左ノハギニオシツケテ。前ノ高下前フクラヲバハカラフベシ。上カヘノ大クビノ帶ノシタヲナカラバカリタテザマニヨリテ。<sup>ランノツケギハマデ也。</sup>スチカヘテニ

ホハカスベシ。ランマデハカクベカラズ。前ノフクラミタラバ。アラハニシテ。上<sup>左ノ手ニテナリ。</sup>ヲバ下ヘ内ヘオシイレ。上ヲバ右ノ手ニテサ、ゲテ。其上ニ帶ヲアツベシ。緒ヲ二マトヒシテツヲクユフベシ。次ニ上手ヲ取テ左ノワキノ下ヨリサシヤルベシ。前ノヒキサハ。院春宮。御足ノコウニツク程也。主上ハ今スコシ高キヤウニメス也。執柄ナドハ一寸バカリアガルベシ。大臣二寸バカリ。大納言以下花族ナラバ二寸餘アガルベシ。或三寸。人ノ家ニヨルベシ。藏人頭五寸。四位五位ノ雲客ハ六寸バカリ歟。袖ノ衣紋カク時。袍カサ子ヌ以前ニ。下具ヲヨクノ重オフセテ。袖ノ外ワキノシハノソバノヲリメヲトリヒシグベシ。袍カサ子テ後ハ。ツヨクカタナノハノヤウニハトルベカラズ。袍カサ子テ後。衣紋ウルハシクカク時。其ヲリメ<sup>ハタ袖ノキハ。</sup>ヲ一人ハトラユベシ。凡



衣紋ヲバ後裝束師カクベシ。ウシロヲバ上手  
ガスル故也。ハタ袖ノハシヲサゲテ引バサガ  
ル也。アゲテ引バアガル。

### 一下具事。

半臂。在忘緒。下襲。裾別ニモ有。打衣。夏引倍木。相。單。表袴。  
赤大口。大帷子ハ非分ノ物也。夏ノ時ハ無單。  
大帷子ヲアセトリト號テ着。白モ赤モ大帷子  
ハアセトリト云也。夏ハマタ單ヲコハクハリ  
テ。ハリ單ト云テ着。相ヲバ老者ハ不着歟。此  
時大帷子也。打衣ヲバ夏ハ不着。此面ヲハナ  
チテ着ヲ引倍木ト云也。餘リニ年少ノ時。大帷  
子ハ無骨也。主上ハ御大帷子メサズ。御鞠ナド  
ノ時メス事アリ。十五以前六十以後。赤帷子ヲ  
不着。白シ。十五以前ハ濃色ナル間。帷ハ白シ。  
六十以後ハ老者ナル間。何モ白キ具成間白シ。  
凡鞠時ハ直衣衣冠ニモアセトリトテ赤帷子  
着。面白キ也。又白帷子ハ勿論。イツモ着間無

### 子細。

#### 一直衣着次第。

先下袴。當時兼指貫ニ重テ一度着之。次單。夏  
ハ無之。更衣ノ單ヲ着也。老者汗取トテ帷ヲ  
着ス。主上花色御帷ハメサズ。次相。夏ハ更衣。  
單。大帷ナド着也。次指貫。次打衣。夏ハ引倍  
木。妻ヲ不出バ指貫ノ下ニ着。又說ニ。妻ヲ出  
トモ下ニ着テ。指貫ノ上ニ。古ハ前ヲホコロバ  
シテ出說有。上結ノ時。打衣。單。下袴不着。此  
時ハ大口。バカリ也。只相ト更衣單ト也。着様  
ハ。腰ヲマハシテ前ヲ青魚尾サバトテウチチガユ。  
當時ハ如東帶スソヲマハス也。ハコヒノ作  
様。下ヲ上へ。人ノ下クチビルノヤウニシテ。  
マタ上ヨリクチビルノヤウニ下ヘキスベシ。  
タバシマタ下クチビルヲ畧シテ。上バカリニ  
テクワセタルヨシ。ハコヒノ下ヲ帶ノ下ヘ引  
タルハ。ハコヒノサキハ子テヨシ。縫目ニカド

ナクテマロヤウニハスベシ。腋ノシハヨク入  
ベシ。小紐ノ付所肝要也。帶トホシトテ。袖ノ  
下ニハコヒノ上一寸五分アル所ニ付ベシ。腋  
ノシハハ下具ノ着様ニヨルベシ。衣紋如東  
帶。

實身寸法ヲ取事。其仁ヲ板ニ立テ。一ノ骨ヨリ  
板敷マデ可取。廣サヲバ左ノ手ヲノベテ中指  
ノサキマデ可取。若此人普通ニカハリテ腰高  
クモヒキクモアラバ。腰ノモトニ寸法ヲ可  
取。

代々相傳之口傳抄。先一帖奉授小弼殿候。  
不及外見。可令秘藏給者也。

貞治五年九月六日

藤原永綱二位

連阿 在判

連阿不足口傳抄

肥前入道持連  
橋以國抄共也

一指貫身入事

一淨衣身入事

一襖袴身事

一水干狩襖事

一小忌事 臨時祭大嘗會以下

一元服事

一髻鬢事

一指貫身入次第。殊口傳故實アルベシ。

下袴ヲ指貫ノ縫目ヨリ後へ五分コスベシ。指  
貫ハ前へ五分チガフベシ。下袴カヘスコトキ  
ビスノモトヨリ一寸五分殘シテ内ヘヲリテ。  
前ノヌイメノトホリヨリモ、ダチノ方ヘ上  
ヘサキボソニヲリカヘスベシ。但是ハ故實也。  
本儀ニハ。指貫ノスソヨリ一寸五分ヲリカヘ

スヲ皆内ヘカヘス。之ハ昔也。當時ハオリチガ  
ヘタルヨシ。若クオサナキ人ハウスク入ベシ。  
次第老者ハアツク入ベシ。ナニトシテモアツ  
クナル間。イカニモウスク入ベシ。ク、リノシ  
ワ。長ク末ヲトホシテ。不同ニ入ベシ。シワハ  
コマヾトアルガウツクシキナリ。ヨウロタ  
ワノシワハ。モ、ダチノハシヘオリトホス  
ベカラズ。六七寸オクニテタテザマニシワ  
ノ末ヲオリテヲリトムベシ。ニホワズシテニ  
ハカニトバマリタルヨシ。下袴ヲ重時。シト  
シトト重ヲウスベシ。入時モ、ダチノタモト  
ヲ人ニトラヘサセテ。キビスノモトヲ我足ニ  
テフマエ。左ノ袴ヲバ我右ノ足ニテ。右ノ袴ヲ  
バ我左ノ足ニテ踏ベシ。ヨウロタワノシハヨ  
リ入ベシ。アマリタカキモワロシ。ヒキ、モワ  
ロシ。テウレンセバ可有<sub>レ</sub>了見<sub>一</sub>。  
シワノ名。

股ダチノトホリニシワノ數多キヲバク、リ  
ノシワト云。手形ノシワトモ云。青袴ニハ必手  
形ノシワト云ベシ。マタノトホリニ一ツトホ  
リタルヲバヨウロタワト云。ソノトホリノ前  
ヲバ膝ノシワト云。ヨウロタワノ前トモ云。ス  
ソニサガリタルヲ追立ノシワト云。追立ノシ  
ワト云ハ。今チトケスシキ夏也。タエヌクシワ  
ト云。サキダチキル時。ヒカレテタエヌヘナ  
リ。其前ヲバ菖蒲形ト云。是ハフタ青袴淨衣  
ニハヨシ。指貫ニハタエヌノシワノ前ト云ヨ  
キナリ。ヨウロタワノシワノ内ヲヨコザマニ  
ミダレズ。ヌケヌヤウニアヲノキミオリカヘ  
スベシ。カマカセテムズトアルベシ。  
ク、リノクミノ名。

腹白ト云ハ。一筋ハ白。一筋ハ指貫ノ色ナリ。  
是ヲク、ルヤウ。ク、リサシノ上マナカホド  
ヲ。一寸バカリヅツサシトホシテ。色アルヲ下。



白ヲ上ニ入テ。引スヘテ身ヲ入ナリ。花族ノ人ハモ、ダチノトホリノスイメノモトヨリ出ス。花族ナラザル人ハ前ノトホリヨリ出ス。其組ヲ三グミニスベシ。藤花ノヤウナリ。カマヘテ色ノ有ヲ面ニ出サズ。腹白ハ腹黒ニスベシト云々。クミタル分ノ長六寸ばかり。其末ニクマザル分。色ノアルニ。白ニマカルベシ。其長七八寸ばかり。ワナノ方ハクミトバムル所ニテトバマル。白ト色ノアルト。二ニテオシマハシテユイトム。此分十五以前ノ夏也。十六七ばかりマデモスル人アリ。オサナキ時ハヤワラカニクム。次第ニカタククムベシ。凡十六以後。ク、リサシノ内ヘ二筋ヲ入テ。前ノヨリ出テ腹白ニクムベシ。此時ハチトミジカシ。此後此定ニ出テクマズシテタバオシミダスベシ。此名ヲミダレ腹白ト云。此後子ズヲトテ。ワナヲ内ヘ入テサキヲ出。鼠尾ノ長八九

寸許ヲ一筋出間出分ハ二筋也。此ク、リハ必白カルベシ。老者ノ指貫ナル故也。コノ後ワナノ方ヲ出猿ヲト云。子ズ尾ヨリ短シ。四五寸歟。六十二ナラバコムベシ。但子ズヲサル尾ヲバ常ニハ不出。引繕<sup>結イ</sup>之時可出。唯普通ニ。常議ニハ十五マデク、リサシノ上ヲ一寸計サシトホシテ腹白ニクム。此後ハク、リサシノ内ヘ入テ取出テクム。此後内ヘ入テ取出テクマズ。廿餘ニナラバ。コメク、リ。ク、リサシノ内ヨリ出バ必自前ス。凡花族ハモ、ダチヨリナレドモ。御所サマコソ如此ナレ。關白家凡人家人ノ心ニヨリテ。自前出仁アリ。可尋<sup>ミ</sup>其人也。

一ク、リ本様。

一淨衣身入次第。ク、リノシワノ所。白菟ノ額ヤウナルベシ。

下袴ヲ皆内ヘヲルベシ。追立ノシワヲバ不入。ヒザノシワヲバ指貫ノホドフカクハ不

入。ク、リノシワハアラ／＼ト可入。此シワヲトホス時。マツ通ヲミセテ。手ニテ取ツメテ。ク、リテスフベシ。モ、ダチノトホリヲ人ニトラヘサスルコト。アハヒ四寸バカリオキテ。股ダチヨリモシモヘ六七寸許サゲテ。兩方ノ手ニテ引ハダケテトラヘサスベシ。ヒザノシワヨリ下ナルシワヲカタ／＼トヨスベシ。ヨウロタハヲバキハメテ多クマロヤウニシモヘタハシテ。サキサガリニスバキノナビキタルヤウニ入ベシ。筋ヲスグニトホサズシテ。シワヲベチ／＼ニトリトホス。ヒト、リニセズシテ。取ニカメ／＼スベシ。

シワノ名。

ク、リノシワ。手形ノシヒザノシワ。

是ヲチノウチト云。  
菖蒲形。指貫ヲマシ。

追立。此シワハ不レ入。指貫バカリニ可レ入。

ヨウロタワ指貫ニカハル多。

モ、ダチノ後ニタテザマニオリタル。ユキ

カクシノシワト云。指貫ニナキシワナリ。一襖袴ノ身如淨衣。但アラ／＼トヒキ／＼トケスシク入。

一水干。狩襖。上ハ水干。下ニハ指貫着也。スソゴノ指貫ナド也。兒童ナドノ着歟。下具如狩衣。一臨時祭ノ小忌事。

前後ノ着様如狩衣。前後ニカメス。衣文ハ身ヨリバカリヲカ、デカイタグベシ。裾ヲ上手ニカクル時。闕腋袍ノ如クヒナガシヲ取。小忌ノ時右ヲカタヌグ。赤紐ハ左ニ付。二筋也。石帶ノ上手ノ内ヲ引トヲスベシ。闕腋ナル間半臂アラジ。必々可出。夏モ冬ノ下具ヲ着スル。面白儀ナリ。此公事ノ本儀冬ナルユヘナリ。五節ノ時ハ左右思々ニヌグベシ。

一ヒカゲノ糸付事。

冠ノ角ノモトニ青絲ニテユイ付。苔ノマ子ナリ。心葉モ角ノヲバ前ノカタニ草ノオイ出タ

ル様ニ付ベシ。苔ヲウユベシ。青糸ヲ苔ノ様ニ付ベシ。是糸也。

凡小忌ノ赤紐左ニ付。右ヲヌグ也。當家ニハ付チガユベシ。他家ニカハルナリ。カタヌグ時ハ。紐ヲハヅシテ小忌バカリヌギテ。下具ヲミスベシ。

一小忌。文ハ遠山ニ雉。縫様如ニ狩衣。但タモトハ如ニ淨衣。袖四如ニ束帶。ミノ下具ヲ着間ナリ。裾長下襲同。短裾ノ仁モ此時ハ長裾也。

臨時祭ノ小忌ノ繪様。

大嘗會五節ノ小忌繪様。

五節之時ハアナガチニカタヌガズ。但五節ノカタヌギト云ハ。袍着タル時ノ事也。其時ハ袍バカリヌグナリ。梅ヲ付ズシテ小草ヲ付タルヲバ小草ノ小忌ト云。草ヲハラ／＼ト摺付ナリ。

殿上ノ淵醉如此。

一凡小忌文ハ。杉。梅。蝶。小鳥ナリ。

一舞人裝束事。

摺袴。腰左右ニ結垂ベシ。ヒヲク、リツカリノクミ。片一筋ヅツナリ。或ハ二筋ニテ片ヲツクル。此時兩方四筋也。キラメクニクミノサキニ露シベヲ入ベシ。玉ニテ上サシス。或ハ又金物ウツ。ツカリノアナニ。檢非違使彈正官等跨々ヲク、ル。

赤紐事。陪從舞人左ニ付。クセ馬ニ乗時上手ニカラム。又ハタ袖ノハタヲ一寸バカリ切テ。大指ニツラヌク。此時是ニモ金物アリ。半臂打衣タムベシ。ハタ袖ノ金物。當時無其儀。

一摺袴ノヒヲク、リノ本様。

一使束帶。公卿使不給御服給。御下重。御表袴ナリ。

一舞人。青摺。鳳凰。桐。竹。摺袴。蠻繪。

キラメク時。年少綾ニテ下地ヲスル也。スリバカマト云ハスリノ名ナリ。

一陪從。青摺。文。シユロ。表袴。普通。



一加陪從。陪從ニ同。

一此日ハ舞人馬腦帶ヲ指。乍<sup>ニ</sup>十人也。六位ハ犀角ノ丸鞆。布帶ヲモ指也。

此日四品ノ指馬腦ヲ借用ノ心地也。

一頭挿花事。

使藤。陪從。山吹。

舞人櫻。人長藤。使ニ同。

主上先黃檯染。庭座御覽之時。孫廂ニ出御之時ハ青色御袍被<sup>レ</sup>着御。此時六位不着。凡青色袍於禁中一人着間也。此日雖爲四品。不指馬腦帶。舞人被<sup>レ</sup>借間也。犀角ヲ指故ハ日本國ニ馬腦十具アルヲ舞人十人ニ被<sup>レ</sup>借用間也。八具ト云說アリ。其時ハ六位布帶ヲ指。

一臨時祭日ハ近衛司着<sup>ニ</sup>禁色表袴云々。近代無此儀。

一舞人裝束事。

其祭夏ナル時モ冬ノ下具ヲ着モ一說也。又夏冬着スル一說。又夏ナレバ一向夏ノ下具着ス。一說也。一向夏ノ下具ヲ着。小忌ノ鷺目ニハル

ベシ。又冬ヲマスル時。引倍支ヲ略シテ唯袒ヲヒラク、リヨリ出ナリ。是一儀ナリ。

一赤紐事。

長一丈廣サ三分ニ。中一筋ハ蘇芳。二筋ハ濃色ドリ。タ、ミ樣ハ一寸四分ヲ四ニオリテ。三分半ニタ、ミナシテ。中ノホドヲニナニ結テ。テウ小鳥ヲアイニ書也。押モスル。金銀ノハクニテモスルナリ。

一五節ナドノ時。小忌公卿下ハ表袴也。摺袴ハ凡舞人バカリ也。

一元服次第。

主ハ我手ヲニギリテ。二ツ重テヒタヒニアテハ。ウツブキニ龜居也。

打亂筥。廣蓋。兩說。小本結三筋可<sup>レ</sup>入之。二筋ハサキユイワク。刀ハタカンナ刀。サキヲ五分バカリスグニナルベシ。ス刀ト云之時ハ刀ノサキチトマロヤウナリ。ツカノツ、ミヤウハ。タカンナツ、ミナリ。髮ハ二ニワケタルヲダシニテツ、ミテ。二ニオリテ刀ヲサカテニ

持テ。我方ヘハヲナシテ引キル。主ノ方ヘハヲムケズ。左ヨリハヤス。理髮ノヒザノ下ニサシカウ。左ノヲバヤガテ左ニ。右ヲバ右ニナリ。櫛手拭ハ綾二ノ三ノ間也。四方ナリ。ソレヲ主ノ前ニヒラク。元服ノ具ト云ハ小本結三筋。櫛三枚。此内トキ櫛一枚。カミヒ子リ三筋。タカンナツ、ミニス。カウガイニ。ビン櫛一。刀一。長六寸。ユスルツキヲ柳篋ニスユ。打亂篋ハ猶本儀也。ユルス土器ノ臺アラバ勿論ソレニスユル。ユスルツキト。自餘ノ具足ト物二ニスユ。

親王殿下御元服事。又在別紙。

一警取次第。

スルスツケ紙捻三五七九之間凡半ナルベシ。

先ニタケノ紙捻ニテ根モトユイラス。三マトヒシテ一ムスビニス。次ニビムフクヲ引ヒキヲウセテ後。ツヨクシメテ眞ムスビス。其キハニスルスツケノカミヒ子リ一アリ。カミヒ子リ五ナラブ。次ニアヒヲアラセテ又スルスツ

ケラス。其數半ナルベシ。取持ハ本儀ハ元服ノ時ノ如クアルベケレドモ。主ノ居ヤウニヨリテ後ヨリモトル。ソバヨリモトルベシ。其主子クラハ子テモトルベシ。凡小本ユイニテモトレ。取時ハウツブキタル本儀ナル間。トモカクモアルベシ。カマヘテ主ノムヅカシク思ハヌヤウニトルベシ。此後ヒビンカク時。カウガイビングシサカテニトリ。口ニテクワヘナドスル。ミグルシキ事也。カウガイノ取ヤウ書付ニ及バズ。可有口傳也。文章不足。口傳抄不可有他見。無沙汰之子孫ニツタフル事アルベカラズ。可入火中。後嵯峨院以來隨分有沙汰事ヲ書付。寶治以來抄共也。

貞治五年十月三日又一帖書進也。

藤原永綱入道

連阿彌陀佛

此本民部少輔高階盛重朝臣授畢。

應永十一年九月十日書寫。

右京權大夫高階成春相傳之。

此抄伯二位忠富王所持本。一覽之次卒染筆。

不可出他所而也。

永正第三暮春候

内大臣

## 裝束雜事抄

淨衣事。布六丈。上下之分。

白布こはぐと調ず。上は布衣に同じ。但兩方の袂を前へ一寸づつぬひこす。はた袖のはしをば内へ折て縫なり。其外はひねり。前後のすそをひねらず。袖のくゝり白すゝしのまろぐみ。つゆばかり入也。十五歳までは白生平絹をさす。或は白糸くゝりも用之。此時ははた袖はしぬはず。ひねるなり。五だんに入。かり衣のごとし。はた袖のはし縫事。昔はまる組を縫くゝみけると云々。今は露ばかりなれども。そのゆへ也。はかまもおなじ布。もゝだちの二の前うしとをして。まへにちうしろへまはり。わりの後に入。如此四のづつ左右の袴にあるべし。惣の袴の廣さ。昔は一尺三四寸にすぐべからずと申ども。當世はひろきをこのみて。一



尺六七寸にさたす。またこし白生平絹。白下袴。はかまぎはを入なり。指貫は申にをよばず。夏冬同物也。下具冬は裃。或衣大帷子。夏は引倍木。或單等也。色目狩衣に同。常はたゞ大帷子ばかり也。白生帶。大口は着せず。衣文も狩衣に同。衣等を着せば。袴ぎはにかさねくはゆべし。社參の時用之。仙洞も内々御社參の時は着御あり。公私かはらず。又生絹淨衣もあり。童形もしは上臈の若時用之。絹には必袖結白平組也。或はいと下具は布に同。委細は式目抄の下にあり。

半尻事。三丈一（二）尺。

かり衣のうしろの一尺ばかりみじかき物也。色目。着用の時節。衣文帶等。皆かり衣に同じ。宮の御童躰御俗躰。若き御時着御也。攝家清花人も若時着す也。指貫に着せば裃など下具あるべき歟。常は只内々まへ重の白大口も着給

也。委細は法躰裝束抄の奥。童裝束の所に有。布衣の事。

しらあをこる香花田等也。萌木みる色檜皮などもある歟。此色々はきぬの狩衣着する年齢に同。常の布ひとへにてはたをひねる。前後のすそをばひねらず。ぬひやうも下具等も同前。色を付るには薄き布がうつくしき也。袖のくゝり生の白糸をさす。二筋づつ入也。三だんに染。まつ紫たん十五又おさなき時はけぬきがたもする也或十六までさす。もえぎたん。十六七より廿四五或卅ばかり迄さす。こうたん。廿六七或卅ばかり迄是をさす。白糸は六十ばかりよりさす。是も官によるべし。白あをのふん也。色ある布衣には老少たゞ白糸の結也。又萌黄たんさす程の人。たとへば廿三四のころ迄は。こる香なども。此もえぎたんをさすも。内々はくるしからず。夏冬通用也。又晴のとき二藍などに。白生の平組をもさして。若人

用なり。五たんにこはりをつかひても入。又こはりもなくつぎとふしてもいる也。仙洞も布衣をめさるゝなり。光嚴院は花田寄布の御狩衣を夏常にも着御有しと云々。下具きぬのかり衣に同。

### 臣下袍事。

四品袍。ふしかれ染綾しぐら。宿老は熨斗目也。裏平絹。色表に同。はた袖は面を折かへす。夏は薄物。關白より四品まで袍色おなじものなり。

### 攝關家御袍文。

地唐草窠中に龍膽。中少將より大臣まで此文なり。

雲立涌。關白當職之時着給也。

雲二鶴。大閤之時着給也。是は大畧のしめ也。

### 凡人袍文。一通の人の事なり。

興唐草。閑院兩家は皆着す。但三條家は輪無しと云々。此外着用家々。御子左。四條。平松。楊梅。山科。菅家。當家。兩局輩着用之。

無輪。源家。平家。花山院。三條。日野。勸修寺。

異文之事。但大臣以後家々之文不レ同。又相國之時袍文かはる也。

三條。きんけう 德大寺。西園寺。花山院。大炊御

門。久我。堀川。勸修寺。竹の丸を着云々。

五位袍。蘇芳染綾しぐら四位に同。家々不レ同。裏平絹。色表に同じ。又黒裏も付る也。夏は薄物。文色も同。

朱紱。赤衣事也。色紅に黃氣あり。しぐら。文不レ同。裏平絹。廷尉彈正は黃裏。五位外記史は蘇芳裏。夏は薄物。文色等冬に同じ。官外記は。入らんとて。袍の左右のらんのありを中へおし入てぬひて。當職の程は着也。他官不レ然。

六位袍。綠衫平絹を紺に染たる物也。裏蘇芳。夏無文薄物。こめと云物也。色二藍むらさき色なり。

青色袍。練浮織物。文牡丹に尾長鳥。たて青。緯黃。裏蘇芳。夏は裏をとりて着す。夏冬同物なり。麴塵と

もいふなり。

此青色は殿上六位藏人一臈必是を着す。晴

の時は三人迄着して路次供奉。庭上迄參内

す。堂上は一人ならでは着せず。院以下諸第

へ參る事子細なし。又一臈藏人は。公方御袍

黄爐をもちをも下されて細々着用之。

文官は縫腋垂纓。武官は何れも闕腋細纓老

掛等也。文官なれども内舍人兼帶の藏人は。

警固時は卷纓。老掛。弓箭。劔を帶す。袍は縫腋なり。二省丞は此御袍をば公方御束帶の日は着せず。私の青色を着す。又臨時祭庭座の時は。私の青色も着せず。位袍を着す。これ公方青色を着御の故也。まとはしの袍は。たつ時身の前うしろを引揃へて。中を折て。その折目のきは前の方に襟かたをあけて。うしろにはこゑのわなをぬひて。胸の折目をとりにてたゝめば。前後同たけに成なり。此外らんあるべし。

わきあけの袍事。

公卿は衛府官なれ共着せず。殿上地下四位五位の衛府官着之。常のまとはしの袍のらんをときて。うしろにぬひつゞけて。下襲の裾の長さと同す。節會行幸の時かやうなるべし。着様は後伏見院震筆御抄にあり。但その様に前を當時はひきくは着せず。ちと高き也。六位

藏人のわきあけは。短様裾たけとひとしき也。後四五寸計打はゆべし。下襲のゑりより一二寸みじかゝるべし。武官の藏人はいつも腋あけを着する也。まとはしもわきあけも。着様は口傳抄。後伏見院御抄にあり。肩あて腰あては當世<sup>セイ</sup>きず。

裝束の下に着小袖の事。

白き小袖は老若<sup>オイ</sup>用之。紅梅うき織物のこうばいは。十五迄着用之。白きうき織物は廿四五迄着なり。但官又人によるべし。廷尉佐弁官は練貫着せず。但職事兼帶の弁は着す。綾の小袖は三十餘より着之。夏は白帷子老少着也。

裾丈數事。

主上春宮是同。一丈二尺。

御きびすより御引ある分也。上につゞく御たけの分。此外四尺ばかりもあるべし。これは御おとなの事なり。御寸法にしたがひて



はからひ申べし。

上皇主上におなじ。

又凡人の如く。御裾を別にめさるゝ事もあり。時宜也。

關白。一丈二尺。

是もきびすよりの分。腰よりは一丈五尺。

大臣。一丈。

是も同前。腰よりは一丈三尺。

大納言。八尺。

腰よりは一丈一尺。

中納言。七尺。

腰よりは一丈。

參議二位三位。五尺。

是も腰よりは八尺。但參議二位三位は。今一

尺餘ながしと云々。

檢非違使別當并大辨參議。三尺五寸。

腰よりは六尺五寸。

四位五位六位。四尺。

腰よりは七尺。

應永六年四月日

參議正三位行備中權守藤原朝臣永行

# 物具裝束釵

## 一釵事。

飾釵。

近代其實希也。當時用三飾釵代也。公卿節會日用之。殿上人祭使之時用之。

螺鈿細釵。

木地。公卿行幸日若列見定考之日用之。殿上人節會日用之。

槌螺鈿釵。

槌計摺貝也。前官大臣常用之。

蒔繪細釵。

或有銀槌。若人用之。蒔繪槌者雖老

蒔繪螺鈿釵。

宿老公卿殿上人行幸之時用之。但近代公卿殿上人常用之。

黑漆細釵。

諒闇之時用之。

螺鈿野釵。

殿上人行幸日帶之。但花族壯年之公卿春日行幸ナドニ用之。常事也。

蒔繪野釵。

大將直衣之時或用之。殿上人布衣日帶之。或雖束帶一如御幸一帯之。

金作細釵。

大臣之外不用之。

## 一平緒事。

紫綵。

四季通用之。

香綵。

用之。

櫛綵。秋外希歟。

紅梅地。

賭弓日大將用之。

青綵。

青檳綵平緒同事也。

薄櫛綵。

紺地。

蒨黃地。

鈍色無文。

諒闇平緒。

## 一帶事

穀帶。

有文巡方。

公卿節會行幸用之。

有文丸鞞。

子細同有文巡方。

無文丸鞞。

公卿常用之。帶蒔繪螺鈿之時用之。

馬腦帶。

巡方。

曲水宴。野行幸。關白用之。

角帶。

巡方。

四位以下節會行幸用之。

## 一平胡錄事。

羽。

水精括。

筈又波須トモ。

簾。

木地螺鈿。大臣大將用之。蒔繪螺鈿。但刷日花族公卿將用之。

棟綵。

四季通用之。

青摺。

紺地ニ以白糸一縫桐竹也。

無文巡方。

主上帛御裝束令用之給。

丸鞞。

尋常四位五位帶之。

丸鞞。

四位以下常用之。

篋。

箭十六也。此內落箭。

尻鐏二。

或七。號ニ皆鐏。

丸緒。

蒔繪弓。

一束帶事。

冠。垂纓常事也。

卷纓。警固中公卿殿上人爲衛府官者用之。

柏夾。非常之時公卿殿上人爲衛府官者用之。

細燕尾。六位侍非藏人隨身用之。

透額。年少人着之。

綾。

袍。異文大將以上着之。

縫腋。常着之。

闕腋。衛府官者節會行幸日着之。

半臂。公卿。夏三倍タスキ薄物黑染。襪同。冬面小菱綾黑染打之。裏平絹水色張之。襪羅單。但折端。非職殿上人。夏無文薄物。色同前。冬平絹黑染打之。襪同上。

人。夏無文薄物。色同前。冬平絹黑染打之。襪同上。

下襲。公卿。夏赤色下襲薄物。文菱。冬躑躅下襲。面白綾。文浮線綾丸。裏濃打。文菱。非職殿上人。夏二藍下襲。無文薄物。冬躑躅下襲平緒。

文薄物。冬躑躅下襲平緒。

表袴。若年公卿并聽禁色。殿上人。窠霞浮織物。中年以上藤丸堅織物。若少人付濃裏。

袒。夏不着之。若少人蘇芳或萌黃。中年人薄色。

引陪幾。夏着之。

大口。紅。若少人濃色。

襪。練貫。

魚袋。公卿金。殿上人銀。節會并祭使付之。

扇。

履。

笏。

白重。

唐裝束。

生裝束。

染裝束。

一直衣事。

直衣。夏公卿三倍タスキノ薄物。非職無文薄物。カトリノ直衣ト云也。冬公卿浮線綾丸志々良綾。非職無文綾。云也。

櫻直衣ト云也。

二陪織物直衣。上皇并兒着之。

織物直衣。花族年少殿上人着之。

紅梅直衣。

練貫直衣。

平絹直衣。

指貫。若年公卿冬紫織物指貫。文鳥多須幾。夏二藍生指貫。文同。自五月一薄物瑠璃色指貫。文三重多須岐。至八月一着之。壯年人薄色織物指貫。文藤丸。冬面裏練之。夏面生裏練之。織物淺黃指貫。中年公卿晴之時着之。綾指貫壯年以後夏冬通用着之。

宿老大臣着平絹指貫。

鳥帽子直衣。大臣一大納言大將等着之。又大臣子孫等雖三大中納言。於家中一雲客以下對面之時

着之。

着之。

小直衣。

狩衣直衣。



引直衣。

一禮服事。

玉冠。

小袖。

表袴。

玉珮。

扇。赤色。

引帶。生絹。

燈心輪。

一布衣事。

梅狩衣。

柳狩衣。

櫻狩衣。

櫻萌黃狩衣。

樺櫻狩衣。

花山吹狩衣。

面白。裏蘇芳。自三五月節一正月十五日マテ年少人着レ之。

面白。裏青。自一正月一至四月祭日一着レ之。

面白。裏二藍。春用レ之。自一年少一壯年一着レ之。

面白。裏黃。裏濃二藍。春用レ之。自一年少一壯年一着レ之。

面薄色。裏濃二藍。春用レ之。自一年少一壯年一着レ之。

面タテ紅ヌキ黃。裏黃。春用レ之。若人着レ之。

裏山吹狩衣。面黃。裏萌黃或紅。若年人春着レ之。

藤狩衣。面タテ青ヌキ黃。裏萌黃。自一春至一四月一着レ之。歟。

卯花狩衣。面白。裏青。四月五月着レ之。

若鷄冠木狩衣。面裏共薄青。四月着レ之。

杜若狩衣。面二藍。裏萌黃。四月五月着レ之。

盧橘狩衣。面タテ黃ヌキ紅。裏青。四月五月着レ之。

棟狩衣。面薄色。裏青。四月五月着レ之。

女郎花狩衣。面タテ青ヌキ黃。裏青。自一六月一至一九月一着レ之。

瞿麥狩衣。面薄蘇芳。裏青。四五月六月着レ之。

菖蒲狩衣。面青。裏濃紅梅。四五月着レ之。

桔梗狩衣。面二藍。裏青。五六月着レ之。

萩狩衣。面薄紫。裏青。自一六月一自一八月一着レ之。

紫苑狩衣。面濃薄色。裏青。自一六月一自一八月一着レ之。

黃紅葉狩衣。面萌黃。裏蘇芳。自一九月一自一五月一着レ之。

青紅葉狩衣。面萌黃。裏黃。自一九月一自一五月一着レ之。



引差繩。

勒負搦。

一移具事。

黑移。平文移。

橋。

大滑。

轡。

鎖羈。

一和鞍具事。

橋。

四緒手。

表腹帶。

大滑。同前。

轡。

尺泥障。

切付之時用之。大滑之時不用之。

一鞞事。

連着。

楚鞞。

連子總。

鞭。

鞍覆。

左筆。

鐙。

手綱。

鈴。平文之時用之。

表敷。

切付。

四位豹。五位虎。

鐙。

大滑之時靈鐙。切付之時舌長鐙。

手綱。

公卿蘇芳綵。殿上人棟綵。

畝鞞。

小總。

一切付事。

小豹。

公卿及四位用之。

虎。

五位用之。

水豹。

六位用之。

一手綱事。

蘇芳綵。

公卿用之。

紺綵。

六位用之。

一鞍覆事。

打鞍覆。

面濃打。裏蘇芳打。

透鞍覆。

地薄物青。文三倍多須幾一倍也。鱗ヲ捻。以ニ色々糸。唐鳥唐花縫之。

虎皮鞍覆。

花族鞞水干鞍之時用之。

鹿皮鞍覆。

水干鞍之時常用之。殿上人絹裏。地下前驅以下布裏也。

一差繩事。

綾打交差繩。

賀茂祭使ナド風流之時用之。

布打交差繩。

水干鞍之時常用之。

白布差繩。

唐鞍大和鞍黑移鞍等常用之。

竹豹。

小豹ヨリモ勝物也。上臈上達部用之。

韋鹿。

外記史內記等用之。

棟綵。

殿上人以下四位五位用之。

織物鞍覆。

面青顯文紗。裏青打絹。



一車事。

飭車。賀茂祭使乘之。

赤絲毛。賀茂祭女使乘之。

唐庇車。上皇女院乘之。

檳榔毛車。關白以下至參議常乘之。

八葉車。長物見大八葉大臣乘之。切物見大八葉上下常乘之。小八葉外記史弁官暨陰之輩乘之。

一楊事

黃金物。大臣用之。

黑金物。納言以下公卿用之。

一下簾事。

蘇芳末濃。毛車之時用之。

青末濃。濃末濃トモ云也。網代車八葉車之時用之。

繡下簾。糸毛并唐庇等用之。毛車之時用之。事有二先規。

一雨皮事。

面練薄青染之差油。裏白生絹。近代面裏練之。薄青染不差油。爲公平云々。公卿以上

僧綱用之。

張筵。殿上人以下凡僧用之。

一小忌事。

豐明節會大中納言參議弁少納言着之。近衛

司大嘗會之時着之。

小忌心葉。金銅梅花也。

日蔭糸。

赤紐。

一青摺事。

臨時祭舞人着之。文桐竹也。但陪從小忌ハ

シユロ也。

青摺。

赤紐。

摺袴。

打衣。

表袴。

單。

一挿頭花事。

臨時祭之時。使藤。舞人。櫻。陪從人長。冬。歟。大嘗會辰巳節會。小忌納言。櫻。參議。冬。歟。關白。

藤。親王。紅梅。大臣。藤。納言。櫻。參議。冬。欸。

一隨身袴色事。

藁脛巾狩胡錄之時必用染分袴。

染分。左近蘇芳。右近朽葉。儲色。左近二藍。右近萌黃。

紅梅袴。元日出仕次將隨身必着之。然者至十八日賭弓日着之。元日不出仕一次將隨身。白馬踏歌可着染分袴。

白襖袴。

左右衛門兵衛督隨身着之。左右近衛拜賀日又着之。

一蠻繪文事。有說々々。

常說。左近。師々。右近。熊。

一劔并平胡錄裝束事。有說々々。

常說。左近。紫革。右近。藍革。

一馬副事。

行幸行啓并一員御幸之時。公卿召具之。祭

使召具之一。

冠。卷纓。

褐衣。

綾。

袴。

相。結構之時着之。

布帶。

舌地。近代只藁沓也。

同人數事。

大臣十人。

中納言六人。

祭使八人。常事也。

一手振事。

祭使召具之。常十二人也。

冠。卷纓。

褐衣。

下襲。

單。

布帶。

藁脛巾。

一小舍人童事。

狩衣。上下。

單。同前。

藁脛巾。

大納言八人。

參議四人。

綾。

半臂。

相。

袴。

藥袋。布。

舌地。

衣。

單。

毛沓。

水干。

袴。

脛巾。城外之時用之。

藁沓。

水干并狩衣事。依時可隨主人裝束也。

一雜色事。

平禮。

白張。上下。

衣。

單。

下袴。

沓。

襪。

或平禮上ハチ亂緒。或細烏帽子上結山藁沓。或風流之時着當色也。以上依時可隨事也。

一車副事。

冠。

綾。

衣。

襖袴。

藁脛巾。

以上糸毛并庇車之時着之。

平禮。

白張。上下。

下袴。

亂緒。

以上如木之時着之。

烏帽子。コウヘイ。

白張。上下。

藁沓。

以上細々常如此。

同人數事。

院八人。

關白太政大臣六人。

大臣四人。

大中納言二人。

參議散二位三位一人。

牛飼事。

裝束之樣大略同車副。但不着白張也。遣手

之外水干葛袴。或着直垂。

一御廐舍人事。

如木之時平禮亂緒。フタコノ時細烏帽子藁

沓。

平禮。

狩衣。上下。



衣。

單。

亂緒。

一居飼事。

水干。紅。

紺袴。

藁沓。

一馬部事。寮御馬相副者也。

冠。

綏。

褐衣。

襖袴。

袒。

單。

一飼丁事。同前。

裝束同居飼。

應永十九年八月廿一日書寫之。本者花山院亞相忠定卿自筆也。仍文字悉不違寫之訖。

右物具裝束鈔以松岡辰方之本按正了

群書類從卷第百十九

裝束部八

深窓秘抄

御袍寸法。

御身之長四尺。但伏見殿ハ三尺九寸也。御帶トヲシ一寸五

分。ハコエノワナ九寸。同サキ九寸。カタミノ分

ナリ。廣サ一尺五分。御ノボリ三寸五分。月形ノ

半分。下六寸五分。御袖長二尺。廣サ大袖一尺五

分。鯨袖七寸五分。御襦ノ高サ八寸。蟻七寸五分。

蟻サキ六寸五分。

立樣同御長取事。

御身一丈三寸。御後五尺一寸五分。御エリ肩ハ。

前ニアク分ハ三寸五分ノ内二寸ニユリ。二身

ノ分二丈六寸一ハリ。御袖夏四一ノ分。長サ四

尺四寸。一丈八尺一ハリ。御ノボリ五尺。御襦九

尺。御首髮二尺五寸。以上一丈六尺五寸一ハリ。

以上二ハリニタケトル也。但イヅレニモ入シ

ロアルベシ。ヒイル計アル也。以上惣御長五丈

八尺。入シロ三尺八分也。冬ノ御袍ノ時ハ。又ハ

タ袖五尺イルベシ。冬惣丈數六丈三尺イル也。

御直衣冬縫立ノ定。宮ノ御方(後主御門院殿)御元服ノ寸法ナリ。

御身ノ長四尺。御胸ノ折目ウチ。御襦ノ付ギハ

マデ。御胸ノ通り折目六寸也。御身ノ廣サ一尺

一寸。ハコエノワナ九寸。御帶トヲシ一寸五分。

御大首上ハ月形ノ半分。下六寸。御袖ノホタテ

二尺二寸。御大袖一尺一寸。御鯨袖七寸五分。御

欄ノ高サ七寸五分。御蟻六寸五分。御蟻先五寸五分。御袖御タケ四尺五寸。御胸ノ折目八寸。御身ノ廣サ一尺五分。御セヌヒ上打一尺二寸。左右ノ御裾ノ脇一尺一寸縫ベシ。御エリ廣サ三寸。御身ノ前ウチ出ル。御胸ノ折目ウチ御ウシロヘ明ニテ。御後ハ一幅ニテ。御エリハ四尺五分。御身分御エリノ廣サハ三寸バカリ。御前ハワナ也。御大首常ノ如シ。下五分。廣サ一尺一寸。御袖前四寸。御胸ノ折目御後一尺四寸。御指貫ノ長サ四尺。御モ、ダチノタカサ。下ヨリ二尺二寸。長下打廣サ一尺九寸五分。大のは一尺一寸。小のは八寸五分也。襜積八寸五分。御後同。御腰。御前六尺五寸。御ウシロ四尺五寸。御直衣ノ丈數。冬ノ分。御身二丈一尺二寸。御前五尺二寸。御後五尺四寸。御ノボリイラクビ五尺一寸。御袖六コノウチ。御緒袖二丈四尺。御欄八尺九寸。以上五丈九尺二寸。此寸法ハツメタルナリ。御裏四丈四尺八寸。

傍續ヲノヲノ縫立ノ定。正長元年九月十六日室町殿義孝寸法。身ノ長。前四尺八寸。後三尺一寸。大クビ四尺。欄ハコレノヨブンニテ。身ノ廣サ一尺五分。大首髪ハ月形之半分。下五寸五分。袖ノ下縫ハツシ六寸五分。緒袖袖ノ引立一尺九寸。大袖一尺五分。緒袖七寸五分。袖付上一寸アケテ下七寸。欄之高サ七寸。ワナ二尺五寸。欄ノ兩方ノハシ折テ一寸五分ヲ間ベシ。惣縫立ノ丈數三丈三尺。指貫ノ長サ四尺。股立ノ高サ下ヨリ二尺二寸。腰ノ長サ六尺。廣サ一尺九寸。大ハ一尺五寸。小ハ八寸五分。襜積一尺一寸。前後同ジ。御引直衣。宮ノ御方御着袴ノ寸法。身ノ長三尺六寸。廣サ七寸五分。御袖ノ引立一尺六寸五分。廣サ八寸。緒袖五寸。御衣長三尺七寸五分。廣サ七寸五分。御袖一尺六寸五分。廣サ八寸五分。内袖ナシ。御單長三尺八寸五分。廣サ七寸五分。袖一尺六寸五分。廣サ九寸五分。袴長



サ三尺。腰七尺三寸。直衣身ノ長二尺七寸五分。  
廣サ七寸五分。袖ノ引タテ一尺六寸五分。廣サ  
七寸五分。緒袖五寸。袖長二尺九寸五分。廣サ七  
寸五分。袖一尺六寸五分。廣サ八寸。指貫長二尺  
五寸五分。廣サ一尺三寸。下之袴長三尺五寸。廣  
サ一尺三寸五分。御腹白長サ九尺ヅツ二筋。紫  
二筋白ク。

直衣ノ縫立。二ノ宮ノ御方。長享二年十二月  
十二日青蓮院御得度ノ御時。

身之長三尺五寸。廣サ一尺五分。胸ノ折目五寸。  
ハコエノワナ八寸。袖タケ二尺ノ内但分アリ。  
欄ノ長サ八尺四寸。高サ七寸五分。蟻七寸五分。  
サキ六寸五分。ノボリ四寸。同スソ五寸五分。身  
ノ長サ七尺七寸ニユリ。

半尻。二宮御方(御室御所十歲)入  
室ノ時ノ縫立寸法。

身御後二尺三寸。廣サ九寸。前三尺一寸。ノボリ  
上三寸。スソ四寸五分。袖タケ一尺三寸五分。廣  
サ大袖九寸。緒袖六寸。惣以上一丈三尺九寸。右

縫立ノ分此外コシアルベキ歟。ハタ袖ヨリイ  
デベキカ。

夏之御直衣御服寸法。宮ノ御方。  
十七歲。

御身九尺五寸。二ツ分一丈九尺。御ノボリ五尺。  
御袖四尺一寸。四ツ分一丈六尺四寸。御欄八尺  
五寸。又八尺五寸五分。御首髮二尺二寸。惣以上  
五丈一尺一寸。三尺九寸入シロ又五丈二尺。代  
七百五十匹。

常々御服用ノ冠服ノ分少々。

軒冕十二章。玉冠之御時唐服也。

禮服。大袖也。有レ裳有レ綬。  
有三玉佩。有ニ御肩宛。諸臣又用。色有レ差。

玉冠。唐冠也。組緒ヲ用。

拔巾子。御元服之御時用。諸臣同。

透額。同十六未滿也。

金巾子。常ニメサル、御冠也。金ノ紙ヲ以御

纓ヲハサム也。

三山。唐冠之時用之。

卷纓。老懸之時用之。吉禮凶禮共有之。老懸

三ノ習有。

細纓。六位用之。老懸アリ。

御立烏帽子。ヨリ井ノ御時御用也。諸臣ハ大

將以上。又大臣ノ息。又凡人以下ハ十八未滿也。但神人ハ淨衣ノ時用之。

折烏帽子。大サビ。小サビ。諸眉。片眉アリ。人

ニヨルベシ。左右ニ習有。

平禮。地下ニ用之。

御袍。諸臣同用之。織紋有差。色又不同。夏冬

有差。

御直衣。ヨリ井ノ御時用之。夏冬有色。夏チア

ハ字ラ冬タ。諸臣又用之。

引直衣。小直衣。傍續也。色雜々。

相。織物ニアラズ。付色ナリ。單ニ重ヌルモノ

ナリ。上下トモ用之。

小忌衣。一名青摺。神事等ニ用之。

淨衣。黃又白。神衣也。

水干。單也。上下トモニ用之。

帛衣。神事ニ御用ヒ也。諸臣ハ不用。

黃櫨染。御衣之色也。

麴塵。同御衣之色也。極薦賜之。

薄額。厚額冠ニアリ。

高巾子。踏歌人用之。

下襲。其差多矣。

缺腋。羽林用之。腋ノ字テキト云。

半臂。畧衣也。唐之世作之。上ノ服也ト云々。

單。褂。裾。夏冬有差。

帷。汗取也。

表袴。束帶。

指貫。奴袴也。下括時。衣冠直衣布衣。狩衣ノコト。等ニ用

之。色有差。大臣白ヲ用。

赤大口。人ニ依テ有差。束帶用生絹平絹精強

等也。

指籠。袴ノ字。指貫ヲ畧シタル也。

狩襖。隨身舍人等用之。布ニ裏ヲ打タル也。夏

冬用之。

素襖。上下ト云。下部ドモノ用ル也。

直垂。上下用之。平服也。

道服。大臣ノ平服也。

平緒。帶劔ニ用之。紫綵。紺地青綵。白棟綵。櫛

綵。有前張。

半尻。童形用之。前張ハ宮ノ御方被用。

大褂。小褂。女房用之。

五衣。四時ニ依テ用之。女服也。板引同。

唐衣。ウヘノキヌ也。

裳。ヒトヘ。夏用之。

掛帶。女房用之。

御襪。諸臣モ用之。有差。錦。練貫。平絹等也。

靴沓。天子諸臣通用ス。深沓也。

淺沓。鼻キレ也。常ニ用之。

牙ノ笏。禮服ノ時用之。

福等柴ノ笏。一位ノ笏。位山ノ櫟也。

有紋巡方。无紋巡方。天子ノ外不用之。

有紋丸鞆。无紋丸鞆。

以上玉ノ帶也。非參議以上用之。

馬腦帶十具。唐ノ帶也。今傳ヘテ以爲舞人之

帶。

犀角。烏犀。六位用之。

斑犀。凶禮用之。

飭太刀。木地螺鈿。蒔繪螺鈿。樋螺鈿。蒔繪細

太刀。螺鈿ノ野劔。蒔繪野太刀。黒漆太刀。六位。

沃懸地太刀。沉地螺鈿。

魚袋。金銀。非參議以上着之。

草鞋。鞋チカイト云習也。

天子之外不用之。僧道又用

絲鞋。幼主ノ御時用之。又舞人用之。

烏皮沓。禮服ニハ必此沓也。



靴毯。錦也。青赤之二色。是ハ深履ノタヲ、イ也。

半靴。タヲイナシ。侍用之。

踏懸。舞人ノ沓也。

毛沓。布衣騎馬ニ用ルコト有。皆侍ノコト也。

公卿ハ不然。

鴨沓。蹴鞠用之。

雁鼻。淺沓也。又鼻切トモ。但別也ト。未知。

藁深沓。雪履也。

華旋。有服沓。赤沓。鈍色裏也。諒闇沓。无文章

緣。靴毯淺黃平絹也。

打衣。今ハ着用ノ人ナシ。冬ハ打衣ヲカサヌ

ル也。夏ハ大帷也。其上ニ張相ヲキル。今又畧

ノ袖計用テ。相モナシ。畧ノ畧シ也。

直衣。襴ナキヲ用ルコト。宇治前左府着之。久

安三年ノ記ニ見ユ。

浮線綾直衣。香直衣例在之。

平絹直衣。宿老着之。冬直衣ヲ夏用ルコト。老人用之。

蒨黃指貫。羽林賴實。仁安三年十一月廿三日着之。

薄色指貫。宿德ノ大將用之。

薄物指貫。是又老人也。

紫苑指貫。冬用之。

ルリノ指貫。淺黃常ノ指貫也。元來夏ノ指貫。

今四時共用之。

白下袴。老後用之。壯年紅濃下袴也。

黃生下袴。白袴ノリンニ出也。

出衣。又打衣也。色々不同。

柏夾。白檜木也。長サ手一束也。黑白有。卷纓

之如クニスル也。但口傳有。

萱草之袴。尼ノ袴。

裾。一丈四五尺ヨリ七尺マデノ間用之。強不

レ拘ニ寸尺歟。

下重。[ ]火色。晴ノ時用之。

紅梅。正二三月。又仲冬季冬。

スワウ。四季トモニ用。薄色同。年老ノ人用

之。

松重。即チ四時用之。

裏山吹。春冬。

盧橘。四五月。

女郎花。七八月。

柳。老卿用之。

黃柳。宿德之大臣用之。

蒨黃。壯年雲客用之。

櫻蒨黃。通用色々アリ。

ニア井。夏用之。

白重。老人用之。菊并紅葉冬用之。

花葉色。裏青表薄黃。七八月用之。

青朽葉。七月末用之。

引倍木。暑夏ニ用之。主上夏ハ相ナシ。引倍木

也。

應仁二年八月日

前參議顯言在判

右深窓秘抄行世既久然其中往々有可疑者且顯言卿寬  
正三年以權中納言薨而書應仁二年前參議甚無謂蓋他  
人借名以所作也讀者可辨

# 撰塵裝束抄

## 皇太子禮服。

禮服。冠。

謂作有別式也。

黃丹衣。牙笏。白袴。白帶。深

紫紗褶。

謂褶者所以加袴上。故俗云袴褶也。

錦襪。烏皮鳥。

謂烏皮者皂皮

也。鳥者高鼻履。

## 親王禮服。

一品禮服。冠。四品以上。每品各有別制。深紫衣。牙

笏。白袴。條帶。

謂條帶者辨絲。

深綠紗褶。錦襪。烏皮

鳥。

佩綬玉佩。謂綬者綬綬也。佩者帶玉。天子佩白玉。公侯佩玄玉。是也。

諸王禮服。

謂五世王不入此限。令內通例也。即須着諸臣之服。

一位禮服。冠。五位以上。每位及階各有別制。諸臣准

此。深紫衣。牙笏。白袴。條帶。深綠紗褶。錦襪。

烏皮鳥。二位以下五位以上並淺紫衣。以外皆

同一位服。五位以上佩綬。三位以上加玉佩。諸臣准此。

諸臣禮服。

## 朝服。

令每世一年國司行事是也。

一位禮服。冠。深紫衣。牙笏。白袴。條帶。深縹

紗褶。錦襪。烏皮鳥。三位以上淺紫衣。四位深

緋衣。五位淺緋衣。以外並同一位服。大祀大

嘗元日則服之。謂此文承上三條也。大祀者臨時之大祀。假如祀天地之類也。大嘗者神祇

令每世一年國司行事是也。

一品以下五位以上。並皂羅頭巾。衣色同禮服。

牙笏。白袴。金銀裝腰帶。白襪。烏皮履。六位深

綠衣。七位淺綠衣。八位深縹衣。初位淺縹衣。

並皂縵頭巾。

謂縵無文繪也。

木笏。謂職事。烏油腰帶。白

袴。烏皮履。袋從服色。親王綠緋緒。

謂以綠緋二色相雜而爲

也。一品四結。二品三結。三品二結。四品一結。

諸王三位以上同諸臣。

謂三位以上者一位以下也。同諸臣者下文正位紫緒一位三

結等是也。

正四位深緋。從四位深綠。正五位淺緋。

從五位深縹。結同諸臣。

謂下文上階二結下階一結是也。其初位者以大小二爲

正從。即大初位上少初位上二結之類。

諸臣正位紫緒。從位綠緒。上階



二結。下階一結。唯一位三結。二位二結。三位一結。以緒別正從。以結明上下。朝廷公事卽服之。

### 制服。

无位。謂庶人服制亦同也。皆皂縵頭巾。黃袍。謂裁縫體制一如朝服也。

烏油腰帶。白襪。皮履。朝廷公事卽服之。尋常通得着草鞋。家人奴婢橡墨衣。謂橡櫟木實也。以橡染。俗云縵橡衣也。此條無白袴者。文之省略也。

凡服色。白。黃。丹。紫。蘇。芳。緋。紅。黃。橡。縵。蒲

萄。謂縵者三染絳也。蒲萄者紫色之最淺者也。綠。紺。縹。桑。黃。措。衣。素

柴。橡。墨。如此之屬。當色以下各兼得服之。

謂假令着紫之人。兼得服蘇芳以下諸色之類。此條包爲男女立制。

### 內親王禮服。

一品禮服。寶髻。謂以金玉飾髻。緒故云寶髻。四品以上。每品各

有別制。深紫衣。蘇芳深紫紕帶。淺綠褶。蘇芳深

淺紫綠纈裙。錦襪。綠鳥。飭以金銀。

### 女王禮服。

一位禮服。寶髻。五位以上。每位及階各有別制。內命婦准此。深紫衣。五位以上皆淺紫衣。自餘准內命婦禮服。唯褶同內親王。

### 內命婦禮服。

一位禮服。寶髻。深紫衣。蘇芳深紫紕帶。淺縹

褶。蘇芳深淺紫綠纈裙。謂下條云綠縹纈裙。此條无紕字。卽知五色交綵以爲纈文。錦襪。綠鳥。飭以金銀。三位以上淺紫衣。蘇

芳淺紫深淺綠纈裙。自餘並准一位。四位深緋

衣。淺紫深綠紕帶。烏鳥。以銀飭之。五位淺緋衣。

淺紫淺綠紕帶。謂在傍爲紕也。自餘皆准上。大祀。大

嘗。元日。則服之。外命婦夫服色以下任服。謂衣裙並同。

### 朝服。

一品以下五位以上。去寶髻及褶鳥。謂其錦襪亦去。爲與鳥類。以外並同禮服。六位以下初位以上並着義

髻。謂以他髻飭自髮。是爲義髻。衣色准男夫。深淺綠紕帶。纈

纈裙。初位去纈。白襪。烏皮履。四孟則服之

制服。

宮人深綠以下兼得服之。紫色以下少々用者聽。謂用細帶等。綠縹紺纈。謂三色纈各得特用。不得交色之類也。綠縹紺纈。以爲纈。其不顯深淺者。即得通服。及紅裙。四孟及尋常則服之。若五位以上女。除父朝服以下色者。通得服之。其庶女服同無位宮人。

### 武官禮服。

衛府督佐。兵衛佐不在此限。以下准此。謂依官位令。位下官也。其雖任五位。不可同督。依相當法。制禮服故也。仍須依朝服法。准志以上。加錦襖襦。若六位任三衛佐者。亦准志以上法也。竝皂羅冠。皂綾。謂冠絃也。牙笏。位襖。銀裝腰帶。金銀裝橫刀。白袴。烏皮靴。兵衛督赤皮靴。錦行騰。謂騰絨所以覆股脛。令衣不飛揚者。

### 朝服。

衛府督佐。竝皂羅頭巾。位襖。金銀裝腰帶。金銀裝橫刀。白襪。烏皮履。其志以上竝皂縵頭巾。皂綾。位襖。烏油腰帶。烏裝橫刀。白襪。烏

皮履。會集等日。謂元日及聚集并蕃客宴會。加錦襖襦。赤脛等。止爲志以上立制也。

巾。帶弓箭。以鞋代履。兵衛。皂縵頭巾。皂綾。位

襖。烏油腰帶。烏裝橫刀。帶弓箭。白脛巾。白

襪。烏皮履。會集等日。加三挂甲。帶槍。以位襖代紺

襖。以鞋代履。主帥。謂門部使部。其隊正等者依衛士例也。皂縵頭巾。

皂綾。位襖。烏油腰帶。烏裝橫刀。白脛巾。白襪。

烏皮履。會集等日。加三挂甲。帶弓箭。以縹襖代位襖。以鞋代履。竝朝廷公事卽服之。衛士。皂縵頭巾。

桃染衫。白布帶。白脛巾。草鞋。帶橫刀。弓箭。

若槍。會集等日。加朱末額挂甲。以皂衫代桃染衫。朔

日節日卽服之。謂朔日者四孟朔日也。節日者初注會集等日是也。其主帥以上注稱會集日者。朔節日亦同。但衛士注言會集日者。非是朔節日。凡着朝服之時。督佐牙笏。志以上木笏。此文不載者。畧諸須知也。

尋常去桃染衫及槍。其督以下主帥以上袋准

文官。

古衣。烏獸之羽皮。黃帝易之布帛。鄭玄易緯

乾鑿度注云。古者田漁而食。因衣其皮。先知

蔽前。後知蔽後。後王易之以布帛。易下繫

蔽前。後知蔽後。後王易之以布帛。易下繫



辭曰。包犧云伏犧氏之王天下也。作爲網罟。以

佃以漁。則田漁而食。伏犧時也。禮運說。上古之

時云。昔者先王食鳥獸之肉。衣其羽皮。是田

漁而食。因衣其皮也。又曰。後聖有作。治其麻

絲。以爲布帛。易繫辭曰。黃帝堯舜垂衣裳而

天下治。然則易之布帛。自黃帝始也。白虎通

曰。衣者隱也。裳者障也。所以隱形自障蔽也。

則以蔽形已爲禮之初。而貴服賤服各有等

差。是爲禮之成也。故孝經卿大夫章云。非先

王之法服。弗敢服。注云。服者身之表也。尊卑

貴賤各有等差。故賤服貴服。謂之僭上。僭上

者爲不忠。貴服賤服。謂之偪下。偪下者爲失

位。是以君子動不違法。舉不越制。所以成

其德也。服野王案。在上曰衣。在下曰裳。摠

謂之服。今云衣服者不獨衣裳。謂摠可服

用之物也。

皇太子禮服。

下條云。大祀大嘗元日則服之。官曹事類云。寶

龜元年。皇太子始着禮服。

禮服冠。謂作有別式也。

古記云。禮服冠。謂禮冠也。玉冠是也。

黃丹衣。

黃丹者。以紅花支子酢麩交染。縫殿寮式云。

黃丹綾一疋。紅花大十斤八兩。支子一斗二升。

酢一斗。麩五升。藁四圍。薪一百八十斤。准生木所定餘

皆准衣謂袍也。

牙笏。

彈正式云。五位以上通用牙笏白木笏。前誦後

直。六位以下官人用木。前挫後方。今按。五位

以上通用牙笏白木笏。六位以下用木。則示

尊卑之異也。故禮玉藻云。笏。天子以球玉。諸

侯以象。大夫以魚須文竹。士以竹木象可也。

鄭玄曰。球。美玉也。文猶飭也。大夫士飭竹以

爲笏也。不敢與君竝用純物。是示尊卑也。



大夫與士笏俱用竹。大夫以魚須飾之。士以象骨爲飾。不敢純用一物。所以下人君也。又按。五位以上前詘後直。六位以下前挫後方。則示其形制異也。故玉藻云。天子搢珽方正於天下也。諸侯茶。前詘後直。讓於天子也。大夫前屈後屈。无所不讓也。鄭玄云。此亦笏也。謂之珽。珽之言珽然无所屈也。前後皆方正也。茶謂舒懦。所畏在前。圓殺其首。屈於天子也。大夫上有天子。下有己君。故首末皆圓。前後皆讓。正義云。前詘謂圓殺其首。後直下角正方。讓於天子者。降讓於天子。故詘也。挫。鄭玄曰。折也。賈逵曰。折其鋒曰挫。說文摧也。牙。象牙也。

白袴。白帶。深紫紗褶。

白袴。表袴也。縫殿式云。深紫絞紗一匹。紫草十五斤。酢三合。灰四斗六升。薪一百廿斤。廣雅。紗。小也。微也。小穀也。古記云。褶似婦

人裳也。私按。褶。着袴上也。禮服中所謂裳也。

錦襪。烏皮鳥。

親王禮服。

一品禮服冠。四品以上。每品各有別制。

二品以下四品以上。皆着禮冠。但形制各有別式也。

深紫衣。牙笏。白袴。

深紫衣。所謂大袖也。深紫。縫殿寮式云。深紫綾一疋。紫草三十斤。酢二升。灰二石。薪三百六十斤。

問。論語。紅紫不以爲褻服。注。紅紫間色不正。且近婦人女子之服云々。又詩云。綠衣黃裳。綠亦間色也。聖人不以紅紫爲私居服。詩人刺以綠爲衣。而本朝服制。一位以下着紫衣。六位着綠衣。何乎。答。隋煬帝數出遊。令□下百官以戎服。從一品紫。次朱。次

綠。後世遂爲朝服。然唐人朝服。猶着禮服。京師士人行道間。猶着衫帽。後變爲白衫。今紫衫戎服也。國制因循隋服也耳。

衣服。漢朝衣始。上古衣鳥獸之羽皮。黃帝初作衣。世本曰。胡曹作衣。胡曹。黃帝臣也。

日本衣始見神代。但不見其始作之由。又少名彥神以鷩鷩羽爲衣。又天照大神織神衣。應神天皇世。百濟王貢縫衣工女。本朝應神以來用百濟衣服。大寶依令。用唐衣服。深紫等戎服也。養老始右襟。

冠。孝德大化四年罷古冠。左右大臣猶着古冠。天武十一年三月詔曰。親王以下百寮諸人位冠莫服。六月以男夫始結髮。仍着漆紗冠。今按烏帽子也。持統四年授冠位。冠。推古朝定十二

階。賜之也。天武朝罷之。令着烏帽子。持統又授冠。

條帶。

大袖上帶也。

深綠紗褶。錦襪。烏皮鳥。佩綬玉佩。

爾雅郭璞曰。綬。卽玉佩組。所以連繫瑞玉者也。綬。組綬。禮記。組綬。天子玄。公侯朱。大夫純。世子綦。士緇。此佩玉之組也。應劭漢官儀曰。綬。長一丈二尺。法十二月。廣三尺。法天地人。此佩玉之組也。朱云。无品親王無禮服。稱有品故也。綬。乳下左方付之。以絲針付之。玉佩。右方懸之。當膝。隨步有聲者也。

諸王禮服。

二位以下五位以上竝淺紫衣。以外皆同一位服。縫殿式云。淺紫綾一疋。紫草五斤。酢二升。灰五斗。薪六十斤。

諸臣禮服。

四位深緋衣。五位淺緋衣。

縫殿寮式云。深緋綾一疋。茜大四十斤。紫草三十斤。米五升。灰三石。薪八百四十斤。淺緋綾

一疋。茜大卅斤。米五升。灰二石。薪三百六十斤。

大祀。大嘗。元日則服之。

疏云。大祀。謂臨時祀也。大嘗。謂每世嘗也。

大祀卽大嘗也。元日。正月一日朝賀是也。今大嘗祭時不着禮服。卽位日着用之。不知其故。

朝服。

朝參之服也。

皂羅頭巾。

頭巾。今世冠是也。彈正式云。凡除禮服并參議以上半臂五位已上幘頭之外。不得着羅。

金銀裝腰帶。

彈正式云。刻鏤金銀帶及唐帶。五位以上竝聽着用。

六位深綠衣。七位淺綠衣。八位深縹衣。初位淺縹衣。

縫殿寮式云。深綠帛一疋。貴布亦同。藍十圍。苧安草大二斤。灰一斗。薪一百廿斤。淺綠帛一疋。藍半圍。黃蘗大二斤。深縹帛一疋。藍十圍。薪一百廿斤。淺縹帛一疋。藍半圍。薪三十斤。初位淺縹衣。大同元年十月七日格。

皂縵頭巾。

無文冠是也。不用羅。只用絹也。

木笏。謂職事。

職事官用笏也。

烏油腰帶。

彈正式云。凡烏犀帶。聽六位以下着用。但有通天文者不在聽限。

袋從服色。

朱云。无位有袋不善。无用也。位袋。弘仁雜格止云々。

親王綠緋緒。

是以下。謂其袋并緒色也。



諸臣正位紫緒。從位綠緒。

此一句者。一位以下初位以上袋緒色也。

上階二結。下階一結。

此一句者。四位以下初位以上袋緒也。

以緒別正從。

一位以下三位以上。以緒別正從耳。无上下

故也。

制服。

穴云。於無位不合云朝服。故云制服耳。

無位。

未叙初位之前無位色。謂之皂也。

黃袍。

尋常通得着艸鞋。

无位之者。雖仕諸司。公事之外通着草鞋。况

庶人車馬之徒。不可着皮履。

家人奴婢橡墨衣。

橡者。以搗橡并茜灰染之。朱云。家人奴婢。謂

官戶奴婢亦同也。

凡服色者白黃丹。

私按。白御衣。女帝御服也。故置黃丹上。歟。黃

丹以紅花支子酢麩交染。

紫。

以紫草染之。

蘇芳。

以蘇芳木染之。

緋。紅。黃橡。纁蒲陶。

緋以茜染之。紅以紅花染。

綠。紺。縹。桑黃。揩衣。蓼柴。橡墨。

綠。以藍與蒨安染之。縹。以藍染也。

如此之屬。當色以下各兼得服之。

朝服之色。從位立法。今此條爲下重立也。

講書私記。私案。黃丹者太子服也。紫。緋。綠。縹。謂

之當色也。

內親王禮服。

寶髻。

紕帶。

禮記。鄭玄注曰。紕。緣邊也。又曰。在下曰紕。爾雅。紕。飭也。音疋夷反。

淺綠褶。

穴云。女褶服。褶上耳。跡云。男褶表袴上。

女褶先着褶而纈裙着表。而褶下端顯也。

蘇芳深淺紫綠纈裙。

以五色交染也。

外命婦。

穴云。三位妻服紫衣。四位命婦服緋耳。

朝服。

義髻。

義。命之意也。穴云。六位以下着義髻。五位以上无髻耳。今上髮女房所用之髻也。

四孟。

孟月之朔日也。

宮人。

朱云。宮人謂十二司宮人者。

其庶女服同无位宮人。

制服條。爲無位宮人立制也。

武官禮服。

禮服之時。不着弓箭。

牙笏。

衛府督佐。五位相當也。故執牙笏。

朝服。

其志以上。

兵衛佐以下并餘司尉以下也。穴云。兵衛佐同。

志以上服。若帶五位者。與衛門督朝服无別。

也。

尋常去桃染衫及槍。

朱云。尋常去桃染衫者。未知可着何衣。答。

依文。除桃染衫之外。皂衫并他色等可着。

朱末額。

四位深緋衣。用紫裏。有所以哉。答。四位深緋。以茜交染紫。五位淺緋。染茜不交紫。深緋裏用紫色。類不違歟。

四品以上。每品各有別制。

延喜式部式云。其禮冠者。親王四品已上竝漆地金裝。以水精三顆。琥珀二顆。青玉五顆。交居冠頂。以白玉八顆立櫛形上。以紺玉廿顆立前後押鬘上。其徵者立額上。一品青龍。尾上頭下。右出左顧。二品朱雀。右出左顧。三品白虎。尾上末卷。頭下右向。四品玄武。爲蛇所纏。竝右出左顧。立玉者有莖并座。居玉者有座無莖。諸王禮服。

式部式云。諸王一位漆地金裝。以赤玉五顆。綠玉六顆。交居冠頂。以黑玉八顆立櫛形上。以綠玉廿顆立前後押鬘上。二位以白玉一顆。綠玉五顆。交居冠頂。以赤玉八顆立櫛形上。自餘竝准一位。三位以黃玉八顆立櫛形上。

自餘竝准二位。四位漆地櫛形押鬘。玉座皆金裝。自餘銀裝。以赤玉五顆。綠玉六顆。交居冠頂。以白玉十顆立前押鬘上。以青玉十顆立後押鬘上。不立櫛形上玉。五位漆地銀裝。以黑玉十顆立前押鬘上。以青玉十顆立後押鬘上。自餘准四位。其徵者鳳。三位以上正位正立仰頭。從位正立低頭。正四位上階左出右向。下階右出左向。從四位上階左出左顧。下階右出右顧。五位准四位。

諸臣禮服。

式部式云。諸臣一位以紺玉八顆立櫛形上。自餘竝准王一位。玉色交居。王臣各異。二位以綠玉五顆。白玉三顆。赤黑玉三顆。交居冠頂。以赤玉八顆立櫛形上。自餘准一位。三位以黃玉八顆立櫛形上。自餘准二位。四位以赤玉六顆。綠玉五顆。交居冠頂。自餘准王四位。五位以綠玉五顆。白玉三顆。赤黑玉三顆。交居冠頂。自餘竝准一位。三位以黃玉八顆立櫛形上。



餘准王五位。其徵者麟。正從出向。皆准諸王。

褶裳。裙廣五尺二寸。裙廣二寸五分。長二尺二寸三分。

寸三分。

衣有小袖大袖。重着之。小袖有頸紙。大袖无

之。文色一如小袖云々。

綬玉佩。天子者綬三垂之。玉佩左右一流垂之。

庶人者綬二。玉佩一流垂之。當右付之。

褶。推古天皇十三年閏七月己未朔。皇太子命

諸王諸司俾着褶。

一服用事。

延喜彈正式云。凡五位以上。通用牙笏白木笏。

前詔後直。六位以下官人用木。前挫後方。愚案。

禮服用牙笏。尋常用白木笏。

凡衣袖口濶無問高下。同作一尺二寸。已下其

腋濶者一尺四寸。其表衣長纔着地。愚案。今世袍丈尺過法用。

也。

凡除禮服并參議已上半臂。五位以上幞頭之

外。不得着羅。愚案。參議已上半臂。并五位以上冠今代猶用羅。西宮抄云。五位已上。六位藏人

及新冠者皆用綾冠。更衣時并暑月者。白下襲。着無文冠。

近代五位已上。雖更衣着綾。愚案。綾則謂羅也。白襲着無文冠。無文者以單絹一張之也。

凡無品親王諸王內親王女王等衣服色。親王着

紫以下。孫王准五位。諸王准六位。其服色者用纁。愚案。衣服令云。

無位黃袍。西宮記謂。無品黃衣。又延喜縫殿寮式云。無位淺黃

也。故無品親王衣用黃色。此謂親王着紫以下者。一品親王用紫以下一也。同者包無品親王黃衣而言也。但縫殿寮

式。淺黃有稱綠色之淡。而無品親王或用綠袍。故長和二年三月行成卿記云。新冠兩王着黃衣。注云。淺黃色。謂之黃衣云々。

凡婦人得着夫衣服色。但節會之日不在此例。

凡大臣帶二位者。朝服着深紫。諸王二位已下

五位已上。諸臣二位三位並用中紫。愚案。衣服令。三位以上淺紫衣。延喜□二位大臣准一位。故用深紫袍。諸王五位已上用中紫。而諸臣二位三位同。□蓋尊王氏一故也。

凡庶人以上。不得襖子重着。

凡綾者。聽用五位已上朝服。六位已下不得服

用。愚案。今世五位已上袍。得用綾。

凡五位以上女。依父蔭得着禁物。雖爲六位以下妻。猶得

依父  
蔭。

凡揩染成文衣袴者。竝不得着用。但緣公事所着。并婦女衣裙。不在禁限。

凡淺衫染袴。朝廷公會悉聽服用。

凡錦衣者。內命婦及女王并五位以上嫡妻子。竝節會之日聽通服。繡者不在聽限。

凡深淺純紫裙者。聽庶女以上通着。

凡蘇芳色者。親王以下參議以上。非參議三位及嫡妻女子并孫王。竝聽着用。

凡衛府舍人刀緒。左近衛緋繩。右近衛緋繩。左

兵衛深綠。右兵衛深綠。左門部淺縹。右門部淺縹。

凡囚獄司物部橫刀緒色。胡桃染。帶刀資人黃。

凡諸禁色者。摠雖下衣不聽服用。

凡支子染色可濫黃丹者。不得服用。愚案。黃丹爲太子之服色。

故也。

凡減紫色者。參議已上聽通用。五位已上聽着。

半臂。私案。西宮云。減紫色綾半臂。雖冬時。欄必用羅類。

凡赤白橡袍。聽參議已上着用。私案。西宮云。赤色服之。青色。帝王及公卿以下侍臣隨便服之。如延喜式者。赤色。參議已上着用。與西宮不同。

凡公私奴婢。服黃。蒲陶。淺紅。赤。練橡。白橡。墨染。其裙青。赤。繩布等色聽之。紫。緋。綠。紺。

縹等不須全色。唯得縹紕裁縫。私案。衣服令制服衣。又服色條云。凡服色。白。黃。丹。紫。蘇芳。緋。黃。橡。縹。蒲萄。綠。紺。縹。桑黃。摺衣。紫。柴。橡。墨。如之屬當色以下。各兼得服之。注謂。假令着紫之人。兼得服蘇芳以下諸色之類。此條包爲男女立制也。今案。當色トハ位ヲ云也。

凡親王以下車馬從服色。通着皂及躑躅染。青。

褐。自餘色皆斷之。其女從衣者。通着黃。赤。練蒲陶。退紅。中綠。淺綠。橡。白橡。墨染等色。

凡親王以下。五位以上及內親王。孫王。女御。內命婦并參議以上。非參議。三位嫡妻。女子。大臣

孫。女藏人等從竝聽着染袴。

凡金銀薄泥。不得爲服用并雜器飾。但五月五日諸衛府甲冑之飾。不在制限。愚案。下條云。凡五月五日供節。諸衛府



官人以下。除<sub>三</sub>甲冑飾<sub>二</sub>之外。不<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>金銀<sub>一</sub>云々。又近衛府式。又騎射條云。官人二人。着<sub>二</sub>皂綾緋布衫。金畫絹甲形。金畫布冑形。近衛州人。細布甲形。銀畫布冑形。又兵衛府式云。凡五月五日騎射。官人二人。皂綾。深綠貴布衫。金畫細布甲形。金畫冑形云々。又案。五月五日。今世童子菖蒲冑者是也。

凡純素金銀及白鐵。聽<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>五位已上服用之飭<sub>一</sub>。

凡縹色以<sub>レ</sub>藍摺者。衛府舍人等儀服。他人不得<sub>レ</sub>輒用<sub>一</sub>。

凡畫飭太刀。五位以上聽<sub>レ</sub>之。

凡刻鏤太刀。非<sub>二</sub>新作。聽<sub>二</sub>五位已上着用<sub>一</sub>。

凡刀子及。長五寸以上不得<sub>レ</sub>輒帶。但衛府者聽<sub>レ</sub>之。

凡內命婦三位以上。聽<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>象牙櫛<sub>一</sub>。

凡五位以上聽<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>虎皮。但豹皮者。參議以上及非參議三位聽<sub>レ</sub>之。自餘不在<sub>二</sub>聽限<sub>一</sub>。私案。西宮抄。太刀尻鞘并下

韜等。公卿用<sub>二</sub>豹皮。四位五位用<sub>二</sub>虎皮尻鞘或竹豹<sub>一</sub>。

凡白玉腰帶。聽<sub>二</sub>三位以上及四位參議着用<sub>一</sub>。玳

瑁。馬腦。斑犀。象牙。沙魚皮。紫檀。五位以上通

用。私案。西宮云。白玉隱文。王者以下三位及參議已上用<sub>レ</sub>之。斑犀四位五位用<sub>レ</sub>之。

凡紀伊石帶隱文。王者。及定摺石帶。參議已上。刻鏤金銀帶及唐帶。五位已上。竝聽<sub>レ</sub>着用<sub>一</sub>。紀伊石帶白哲者。六位以下不得<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>之。私案。西宮云。無帶紀伊石。無

文玉等公卿。

凡烏犀帶。聽<sub>二</sub>六位以下着用<sub>一</sub>。但有<sub>二</sub>通天文者。不在<sub>二</sub>聽限<sub>一</sub>。

凡魚袋者。參議已上及着<sub>レ</sub>紫諸王五位已上金裝。自餘四位五位銀裝。

凡以<sub>二</sub>獨窠錦爲鞍褥者禁<sub>レ</sub>之。

凡六位以下。鞍鞦總不得<sub>二</sub>連着<sub>一</sub>。但聽<sub>レ</sub>着<sub>二</sub>鞦衢及後末紫鞍褥。紫籠頭鞍靶緋鞦等。皆禁斷<sub>レ</sub>之。繡鞦不在<sub>二</sub>制限<sub>一</sub>。

凡參議已上。檢非違使別當已下。府生已上。聽

着<sub>二</sub>緋鞦<sub>一</sub>。

凡貂裘者。參議已上聽<sub>レ</sub>着用<sub>レ</sub>之。私案。西宮云。臨時祭舞人歸路。服<sub>二</sub>黑

皮衣。

凡熊皮障泥。聽<sub>二</sub>五位以上着<sub>レ</sub>之。



凡大臣已上覆鞍者用淺紫。參議已上深緋。諸王五位以上綠色。諸臣黃色。六位已下不得用。凡內外諸司。不論把笏非把笏者。公事公會之所。悉着靴。自餘時着履。把笏者。雖非公會。又雨泥之日。聽着靴。庶人等通着履。

凡六位七位朝服。同着深綠。八位初位共服深縹。私案。衣服令。朝服條云。六位深綠衣。七位淺綠衣。八位深縹衣。初位淺縹衣。

凡諸衛府生以上。左右馬寮准此。除衛仗日之外皆着靴。但着布帶時須用麻鞋。私案。西宮云。麻鞋。手振走孺之所用。

凡除着靴之外通着麻鞋。私案。西宮云。麻鞋。手振走孺之所用。

雜染色事。

黃櫨。天子衣。櫨十四斤。蘇芳十一斤。綾一疋定。下同。  
深紫。紫草三斤。

深滅紫。紫草八斤。酢一升。灰一石。

淺滅紫。紫草一斤。灰二升。絲一絢。

淺緋。茜大三斤。

中蘇芳。蘇芳大八兩。酢六合。灰二斗。

黃丹。皇太子衣。紅花大十斤八兩。上支子一斗二升。

中滅紫。紫草八升。酢八合。灰八斗。

深緋。茜三十斤。

深蘇芳。蘇芳大一斤。酢八合。灰三斗。

淺蘇芳。蘇芳小五兩。灰八升。

韓紅。紅花大十斤。酢一斗。

深支子。紅花大十二兩。支子一斗。酢五合。

淺支子。支子二升。紅花小三兩。酢一合。

青白橡。荊安大九十六斤。紫草六斤。灰三石。

中綠。藍六圍。黃藥二斤。

青綠。藍四圍。黃藥二斤。帛一匹。

中縹。藍七圍。

淺縹。藍一圍。

中藍。藍一圍。黃藥十四兩。

白藍。藍小半圍。黃藥七兩。絲一絢。

淺黃。荊安大三斤八兩。灰一斗二升。

喪服事。

素服。見後愚昧記。

冠。卷纓。無文。

下重。鼠色。無裏。夏冬同。

退紅。紅花小八兩。酢一合。帛一疋。

黃支子。支子一斗。

橡。搗橡二斗五升。茜大二斤。灰七升。

深綠。藍十圍。荊安大三斤。灰二斗。

淺綠。藍半圍。黃藥二斤。

深縹。藍十圍。

次縹。藍四圍。帛一匹。

深藍。藍一圍小半。黃藥十四兩。絲一絢。

淺藍。藍半圍。黃藥八兩。綾一疋。

深黃。荊安大五斤。灰一斗五升。綾一疋。

袍。平絹黑色。

半臂。同上。

單。鈍色。

表袴。平絹鼠色。或鈍色。裏柑子色。

相。鈍色。或白。

大口。柑子。或白。

扇。鈍色。或白。

沓。鈍色敷。

劔笏。不帶之例也。

直衣。生絹。黑絹。

指貫。練裏。或薄黑草。

帷。白。

相。同之。

下袴。練白。

扇。花田紙。無薄。

帶。鈍色。

狩衣。平絹鼠色。冬練。夏生。共無裏。尻長短有說。

帷。同之。

衣。鈍色。或白。

帷。同之。

單。同上。

凶服。見二類聚。

袍。黑染平絹。夏生。冬練。張如橡。

下重。鼠色。裏柑子色。

表袴。同上。

白帷。

諒闇服。見二類聚。

直衣。鈍色。平絹。

冠。無文。卷纓。

白衣。

指貫。同色。

合袴。

同束帶。

無文位袍。本儀綾也。平絹略儀也。云。鈍色張裏。鈍色張面。

表袴。柑子色。赤裏。猶用紅可然也。

同色張下襲。下襲裏張鈍色。表袴チメラカサズ。中陪アリ。皆鈍色ナリ。

平絹白褐。單。

赤大口。

黑漆鞞銀裝細劔。無文藍革裝束。

鈍色平緒。斑犀帶。鶴通也。

襪。平絹。檜扇。如常。

無文卷纓冠。玉葉。沓。裏白平絹。

毛車。如恒。青簾。綠無文藍革。

淺黃末濃下簾。隨身褐衣。濃張單。鈍色袴。

番長白狩袴。白單濃打。

近衛白單。自餘如例。

女房裝束。

理髮如常。

白絹唐衣。

白褂單。

或花田衣。不着打衣。

心喪裝束。

橡袍。

以橡染也。裏同平絹練張。

表袴。

鈍色。紅裏。

下襲。

鈍色。

薄鼠色平絹直衣。

指貫。

各有三色。色裏。

鈍色衣一重。

普通亮陰白衣也。而嘉承知足院殿着鈍色張單給也。

西宮記曰。心喪裝束。綾冠。綾袍。青朽葉。青

鈍袴也。

或用無文冠。

除重服後一月着輕服。

同記云。冬遭喪者。一周間服冬裝束。夏時

遭喪者。又一周用夏裝束。當朝元無夏冬

衣。依滋野相公起請。夏冬更衣。重服者。猶

依舊例歟。

服者裝束。

服者不新創。一笏。見手板經。

切上緒繩纓冠。

古以鹿絹作之。

牛角帶。

帝王用烏犀黑角。

黑造劔。

白革裝束。

赤沓。

王公黑單袍。四位五位本位色薄。人之爲養

子。爲實父若養父。隨親疎。着服之時用輕

服。無文冠。位袍。黑表袴。襪。例沓。

未知名舊例。近代所見也。

候。殿上童子。重服時。着黑橡縫腋。昇殿上

官儀式官。隨本官役服位衣。無止家司職

事者。卅九日間布衣上。

前尻長。

着卷纓冠。齋會

日着素服。

重服公卿乘黑筵。

玉葉曰。

壽永元八十四。

着鈍色小直衣指貫等。是淨

衣之躰也。

皇嘉門院御服中。

同記。壽永元五廿七。此日大將除服。着無文鈍色布

衣。

同記。養和元十二十八。余及大將着御服。共濃色也。

於家中着直衣。橡。無裏。鈍色衣也。出郭

外。

截戶。着素服。重服帶。麻繩。紙ヲ卷也。

大將於同所着

之。

先是於家中着布衣。依余例。用布狩衣袴。黑色鈍色衣。輕服帶。麻布二卷。紙也。

其色雖黑用輕服帶。四條宮御時。知足院殿



例也。

同記。今日第二七日。二位中將着鼠色練狩衣。無裏。

同記曰。壽永元五十五。今日余始出仕。橡直衣。練指

貫。白帷子。重服冠。黒沓等也。用人車。前駈不加冠。不着服。參院。

右撰塵裝束抄以松岡辰方藏本校正了

### 袷帷着用時節

柳原一品資定卿。稱名院え被相尋事。

あはせ着用の事。過し秋の比。いさゝか其沙汰候つる。それに付て。不審出來候まゝ愚存注進候。抑更衣は。首夏孟冬二季にかぎり候得者。公宴本式の時は。今とてもあひかはるべからず。およそ近代見及候分。四月にいたりて公卿はあはせを着し。殿上人は賀茂の祭以後更衣候か。十月南部維摩會以後。冬の装束に改られ候。但公卿老後高官の人は。四月といへどもあつき折は帷を着し。又八月にもさむき時は。公宴といへども内々御會ごときの時は。袷を着用歟。然るを五月五日より九月八日まで。老臣といへども帷たるべきよし其沙汰候畢。此事如何可有候哉。もとより公卿も束帶本式の時は。九月中今も夏の装束勿論

にて候へども。直衣直垂のには。八月中旬のころよりも。重陽の秋にいたりて。大あわせを着用のやうに覺悟候。八月中に裕をはぐかり。帷にてうへをつゝみ着用の事は。武家やうといひて難じ候歟。又重陽より公卿殿上人ともに小袖。大かた定れるやうに候へども。それも内々の事にて。更衣にはあらず候也。所詮裕はかたびら通用の物にて。いつよりいつまでと日限定め着用とは見えず候歟。武家には老若によらず。四月朔日より五月四日までは裕を着して。端午よりは帷子にあらため。又九月朔日より八日までは裕を着し。重陽にいたりて更衣候。近代の事に候哉らん。其沙汰候ける。公私事により時によるべくは候へども。宿徳の仁と淺位の輩との差別勿論候歟。向後分別のため注進候。是亦賢慮くわしく。被<sub>レ</sub>勘付候はゞ本望候旨。可<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>芳慮<sub>一</sub>候也。

裕の事しかぐと記したるもの不<sub>二</sub>見及<sub>一</sub>候。又時々の衣裳無沙汰のみにて候得者。法をはづれたる事のみ候間無念の事候。いか様當時かたびらには。着用見ぐるしき事と存候。時の寒熱によりて。自のはともかくも有てと存事候。所見も候はぬ事にて候間。きと難<sub>レ</sub>申候。他事期<sub>二</sub>後音<sub>一</sub>候。恐々謹言。

卯月廿一日

覺

柳原殿

右以<sub>二</sub>彼亭賢眞筆<sub>一</sub>寫<sub>レ</sub>之。

于時天正十五仲春初三

從三位清原朝臣國賢

# 群書類從卷第二百一十

## 裝束部九

法中裝束抄

是元無名書  
今私題之

法中裝束之事。

一鈍色白裳付香染事。

問云。鈍色ノ名目并其所用如何。

答。或云。只色ニ付テ鈍色ト云歟。又ハ椎鈍ト

號ス。其由可尋之。所詮素絹ノ織色ニテ不<sub>レ</sub>染

也。本躰ハ穀<sub>コメ</sub>ヲ云歟。從僧如キノ所用大旨如

爾也。但御修法息炎淨衣ハ龜品之平絹等也。

一時一會ノ料之故歟。若淨衣被<sub>レ</sub>下程之時。私

ノ椎鈍ヲ用之由舊記ニモ見タリ。鈍色ハ必

編<sub>スミシ</sub>ノ物也。白裳ハ必練テ粉ヲ付張ニセル也。但

清華ノ僧。生ノ裳ヲ着ル常事歟。是ハ可<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>別

儀。從僧乃至承仕ノ着用モ練タル白裳而已。

問。此鈍色ヲバ誰法師何時着用之乎。

答。凡僧以上法印乃至。文白裳ヲバ因<sub>レ</sub>時黑袍。

承仕マデモ通用也。衣裳束ノ外ニハ引襲タル

者也。鈍色裝束ニハ多分小袈裟襪ヲ着ナリ。所

詮鈍色ハ上下通用之者也。或云。俗中直衣ニ准

云々。

問。僧正ハ香鈍色云々。何可<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>鈍色乎。

答。只是穀ノ鈍色ヲ香染ニシタレバ。香鈍色ト

云歟。名目相違也。星月夜トモ申如歟。此香染

糸ヨリ染テ織シナルベシ。

一相表袴事。



問。袒者本鉢綾敷。平絹敷。又所用樣如何。

答。僧綱ハ白綾有文。凡僧ハ練貫也。裏平絹練張タルカ。聊サカメキタル者也。

問。此袒ヲバ何ニ宗ト重子着乎。

答。衣絹布ノ衣共重也。鈍色袍裳等通シテ重用也。

問。何ノ季節ニ用之乎。

答。自十月至二月用之也。自四月至九月ハ。大帷ヲ專重之間袒畧也。又御修法之時淨衣ノ下ニモ重之。但如此冬節ニモ袒ノ用意ナキ貧修學者等用大帷事。是多分之儀也。何樣引刷タル出仕ニハ袒必可重之者也。

問。表袴ハ何物乎。

答。僧綱ハ綾白。凡僧ハ練貫。如此用習之敷。何モ裏ハ平絹ニテ練タル也。或裏ヲ赤ク染之。或蒼ク染之有也。凡ハ不可然敷。俗中表袴ハ白粉張ニテ赤キ裏ヲ付タルモ有之敷。

問。此袴ハ何裝束ヨリ着之乎。

答。鈍色袍裳等通而着用之也。又御修法之時。四種法。何モ同表袴裝束ナルベキ也。

問。此表袴從僧已下同可着用敷如何。

答。從僧マデハ鈍色表袴裝束古來常事也。其以下ハ無其例敷。龜山文永之比。後七日法小行事。東寺所司也。着表袴。其姿不異伴僧。不可然之由突

鼻。修中改之。指貫着之云々。當時モ小行事必鈍色指貫也。以之思之。表袴サマデ下臈ノ者不着敷。近來故座主之時。三寶院結緣灌頂興行之時。螺吹之役。當堂預號ウシロト後戶堂隨其役。而鈍色襖袴。號狩袴是先例也。可着表袴之由頻望申也。突鼻之間遂用狩袴也。

一袍裳付香染事。

問。袍裳其色其文如何。

答。色ハフシカ子黑色勿論。文ハ織付タル也。クツワ唐艸或蓮花ヒシダスキ。以下其文不定

ニシテ其類尤多也。夏袍ハ褌也。冬袍ハ練テ裏アリ。但夏ノ袍ニ裏付タル粗有之歟。是冬通用料云々。裏ハ或ハ白或ハ空色等。不一准歟。

問。此袍裳何程法會着用之乎。

答。傳法結緣灌頂并万ダラ供。アザリ并職衆必着用之。又御齋會内論議顯密法事。晴儀皆是號法服着用之歟。又十弟子以下專當所黑袍着用之。常事也。但袍計通用歟。於裳不爾也。又僧正ハ香染ノ袍裳有テ同前也。夏冬之替目同之。

抑香袍裳與香鈍色其異如何。

袍裳ハ必有文。鈍色ハ穀ニシテ無文也。此其異也。又法親王等着用紫袍。常事歟。或如僧正。香染衣用也。

一衲橫皮事。

問。此袈裟其躰如何。又何法會用之乎。

答。衲ハ綴リ也。其又無定樣歟。四方ノ縁等ハ多分綾。或紺地ノ錦等用之。橫皮或唐錦或織物縫物。美麗結構多也。仍衲與橫皮其文以下各別也。御室ニ寶珠之衲トテ貴寶物アリ。其モ橫皮ニ如意寶珠ヲ織レル錦ト云。公庭晴儀。專衲橫皮着用也。僧綱之大僧正大阿ザリマデモ着用也。又凡僧ノ衲衆ニ加ル之時。紫甲ヲバ不用也。衲橫皮着用之僧綱凡通用之袈裟而已。

一紫甲青甲事。

問。紫甲ハ其躰如何。誰人着用乎。

答。地ハ紫ノ綾有文。ヘリハ黑色ノ綾等常事也。橫皮又不相替。是自律師至法印僧綱之着用也。青甲ハ地青ク。ヘリ又黑色等。如紫甲。橫皮又同色。是ハ一向凡僧有職非職着用者也。又檀甲トテ已講掛之袈裟有之。地ヲハジノ色ニ染タル也。又甲ノ袈裟トテ醍醐當寺櫻會仁王會舍

利會ニモ。古物二三帖有之。雖聞之未見之。又僧正着用ニ□袈裟トテ。平袈裟ノ外衲横皮ノ外ニ用之。其鉢。只地ハ香ニシテ。ヘリヲモ香ナガラ。色ヲ黒キ様ニ染替タル者也。是ハ故賢俊僧正之時マデモ着用有之也。香ノ平袈裟ニカハリタル所ハ。平袈裟ハ地モヘリモ同ジ。文同色。甲袈裟ハヘリノ色ヲ黒クシテ。文モ又替タル紺□文□紋爲シタトモ地トヘリトノ色ヲ染替歟。甲袈裟ニ可混亂者哉。可分別也。

問。此僧綱ノ甲袈裟ハ何時着用乎。

答。晴儀□横皮□レテス□ノ儀ハ平袈

裟ナリ。□法等ス□其外□一會導師

ナド□付タル時□歟。□袈裟如然。不分明

歟。

一平袈裟事。

問。平袈裟其鉢如何。又何之時誰人着乎。

答當寺之所用平ケサ清花子以下用也。綾着用清華人。浮文ノ□。所詮皆白色也。當所者灌頂之□儀之時。聖者證記等着用。又灌頂之十弟子必用也。又ハ修法大法之開白結願伴僧着之常事也。精好之袈裟□之間。鹿絹平袈裟多候也。僧正ハ平袈裟。香染也。雖有文地與縁同色ナル者也。

一轆事。

問。是綾歟平絹歟如何。

答。當寺之樣。綱凡通而練貫用之。多分如此歟。予此事不審候間。故四條黃門閑談之次手談此事。俗中所用ハ平絹之粉張ノ物定式也。黃門云。然者不審。北嶺之宿老三井之耆德ニ相尋之所。一同申云。皆平絹之轆着之。是内衆之端用之候由也。但名僧等練貫用之。是別儀也。殊更修法之大アザリ等。努々練貫不可用之由申歟。予聞。是等說尤叶愚意。仍近來修法之時。



畧練貫用平絹粉張。襪了。而近來以來當寺僧綱已下。多分此儀ニ成侍歟。不可思議也。仁和寺所用可尋記也。

一草鞋錦事。

當寺諸僧老若之草鞋ノ錦。或赤地或青地或紺地紫。凡思々而未一准。是無定樣之故歟。或云。俗中靴ノ履ニ准之者。公卿ハ赤地錦ニテ張之。殿上人ハ青地ノ錦用之。網凡可准之歟。然而僧正可用此儀之法ナケレバニヤ。青赤之□。又不定歟。爲之或當時金襴□草鞋。出現以大阿闍梨所着。多分金襴多也。

一衣事。

問。當寺一座道常着用ノ衣。上古之祖師之影像ニ不見之。自何時代出來哉。

答。或云。上古ハ大畧褊衫歟。大師一門等影像如爾也。今此衣ハ。或山僧ノ申シ、ハ。天台祖師慈覺之時。猿衣トテ如此シ出サル、由語

之。但猿衣ト名ツケラル、其由不審。大帷重タルヲ多分付衣ト號歟。袖ヲモ冬ハ重事如注上。故光濟僧正ハ仙洞樣ヘモ内々夜ハ衣裝束ニテ被參シ。其裝束云々。其姿ニテ可參之由勅定。又局杯ヘモ不憚之對面歟。凡ハ鈍色ヲ可着也。昔ハ法師モ俗中モ。俗中所用之束帶ヲ着之。指貫ヲ着ト袍ニ指貫ヲ着スルハ。俗中ニ衣冠ト稱ス。束帶ニハ表袴ヲ着ス。是ハ晴之儀也。衣冠ハ内儀歟。又俗中ニモ下裝束トテ。夜ハ直衣ナドニテモ仙洞樣ヘ參入事アリ。其姿ニテ又被召出事モ有之歟。

一等身衣事。

侍法師等所着用歟。多分布衣也。指貫着之。袈裟不着之。是内々儀歟。又穀等ヲモ不着。裳袈裟之時號等身衣歟。所詮裳袈裟ヲ不着之時之姿也。勝寶院道意僧正。後七日法勤修之時。阿闍梨坊客來ニ。坊官等身衣廿人陪膳之由誤

傳之。定是布衣歟如何。

源本云僧正御筆可秘藏也。

源

享保十八年癸丑十一月廿日。報恩院前大僧  
正隆源以御自筆寫。本紙有行樹院。申出書  
寫。文字虫入不分明者也。

澄翁

右法中裝束抄門人稻山行教於京師得之

法躰裝束抄是元無名書  
今私題之

法躰裝束交付童躰裝束事

一鈍色着樣事丈數等有之 一五帖袈裟懸樣事

一椎鈍事サシカ 一裘帶事

一指狩事 一付衣事

一法服事寸法事有之 一平袈裟事

一衲袈裟事 一甲袈裟事

一入道衣袴事着樣縫樣寸法な  
出樣等有之

一童躰直衣事 一同狩衣事

一同狩襖事 一同半裾事

一水干事 一同垂頭事

一同淨衣事 一同髮結樣事

一鈍色を可令着次第。正道法師又  
入道同之。

先大口。赤大口。又白ね  
りすゞし兩様。

次大帷。白。夏冬同。そうかう  
の料にふりひろし。

次單。白生平絹。丈數三丈五尺。或は裃の上に着<sup>レ</sup>之云々。  
此外如。そうかうの料にゐりひろし。袖に中わりを入なり。

<sup>レ</sup>俗也。

次裃。白綾。文不<sup>レ</sup>同。白裏。夏は不<sup>レ</sup>着<sup>レ</sup>之。ぬい様單に同。  
丈數三丈三尺。夏引倍木とて白綾張單着<sup>レ</sup>之。非打物

なり。

次表袴。文藤丸。裏紅白青又浮線綾平絹等依  
<sup>レ</sup>人着<sup>レ</sup>之如<sup>レ</sup>俗也。丈數二丈五尺。

裃以下おなじ。まへにかさねて御かほの見

えぬ程にかけて。ひきちがへて。うへのはか

まの下に入てこむるなり。俗裝束のごとし。

うらをば前にむすぶ。まへふくらなし。

そうかうをたつるなり。よくくわきを入

て。袖の下をかさぬべき也。

たゞし當時は。鈍色法服袖單。みじかくし

て。尻まではさがらず。

次裳。香白無文薄物(單なる物也。或平絹。練生。又練貫。又打物。是は法服に着する也。夏冬通用也。貴人香貫白。凡人不<sup>レ</sup>着

<sup>レ</sup>之。丈數四丈三尺。寸法にはあしつ

きとあり。同事なり。ふき返しあり。

うしろよりあてゝひきちがゆれば。まへは  
二重になるをうしろより前へととりてゆふ

也。もろかぎかたかぎ。いづれくるしみなき

なり。うへのはかまより三寸ばかりあるべ

し。下ざまの人はたかくきすべきなり。若裳

のながくば。こしにてをるべし。

次鈍色。香白。同<sup>レ</sup>裳。丈數三丈三尺。四袖ならば四丈なる

べし。ころも下具。べちくになくむなり。又か

まへを引ちがへて。御帶をあてゝむすぶ。を

びより下を三にをりて。帶のみえぬ様にう

へにをしあてゝ。まへもおなじくをりてひ

きちがへて。帶によくくおちぬやうには

さむ。帶のはしもみえぬ様にかふべきな

り。

又そうかうよくくたつべし。

次に衣文をかくべし。袖の下をしたぐと

よくかさねて。身より入。わきに中高にしわ

を三入て。大袖の中のたゝみめにしわを入。

袖の上のをりめよりをりくだす。又はた袖



のぬいめのほどをさきのやうにをりて。な  
つの袖袍の衣文のやうにうへへかへすな  
り。此外袖のうちとのしわ。かりぎぬにおな  
じく。はた袖のはしをちとはねさするやう  
にたゝみ。よきやうにかくべし。

但室町殿御出家以後。御衣の御衣文は。大  
袖の中のたゝみより下にしわをたゞ一  
入て。そのしわのもとにはた袖をかへさ  
るゝなり。又わきのしわもたゞ一入なり。  
御このみによりて。予がやうにめさする  
なり。只公方の御好によりてさたすべき  
也。此室町殿の御衣をば。予毎度めさする  
也。

又どんじきのすそのひねりめみえぬやう  
たゝみて。帯のみえぬ様にかいたるが見よ  
きなり。

帯・生香白淨衣の帯の  
やうにたゝむ也。

襪。平絹。若法師は練貫  
も無三子細なり。

檜扇。置物なし。糸計垂レ之。又若法師は有置  
物。歟。夏も晴の時は猶ひあふきに候。

鼻廣。俗のあさ沓の鼻のあるものな  
り。沓しきはあやにてはる。

念珠。まろすゝなり。鈍色の時はいら  
たかすゝなばもたす云々。  
白綾半細坊官などは色々に着す也

又指貫をも鈍色に着用あり。白下袴なり。

身の入様は俗におなじ。又上結もあるべし。  
下具あこめかゝり歟。夏は單大かたびら歟。  
下具はさしぬきの下に入。鈍色裳はうへに  
あるべし。只さきの如し。青蓮院門跡には。  
慈鎮和尚より公方へ申うけられて。指貫を  
着用なしと云々。

一五帖袈裟事。丈數一丈七尺。裏なし。  
なつふゆ差別なし。

香。練浮織物。又堅織物。文不レ同。せいかうの染色。凡人僧  
正懸レ之。大納言入道はゆるされて着レ之。織物は法皇

竹園攝家懸レ給之。凡人不レ懸レ之。室町殿  
者浮織物有御懸也。御文桐唐草也。

紫。貴人僧正以下懸レ之。浮織物貫白。  
文不レ同。但綾は口など懸レ之歟。

白。薄物せいかう。  
貴賤懸レ之。

薄墨。

有文薄物織物同前。綾并平絹生等付重もあり。

かくる様。鈍色唐袈裟付衣袴等に常にこれをかくるなり。

右の袖より入て。そうかうをこして。左のかたにかくるなり。緒のむすびめはまへにあるべし。後の緒のつきたる上をよこざまに右のわきの下までうちへをるべし。又前は緒より上を外へうはむくやうにをるべし。いきの緒のむすびやうは。山寺南都にむすびかふるなり。又山寺のおなじ内にても。門跡によりてむすびかふるなり。さだまらず。先々法皇様は御崇敬によりて。いづかた様にも御むすびあり。代々一樣にあらず。代々當家奉仕なり。室町殿は青蓮院様にむすびあり。時宜にしたがひて。所の門跡のむすび様をたづねならふべきなり。

一椎鈍事。

此事よく尋ねれば。鈍色におなじ物云々。

どんじきにおなじ物と云々。或説には。うす

墨の織色の鈍色をいふなり。

一袈袋事。

丈數六丈三尺。此内ひろは一丈五寸。ひろはなき時は七丈なり。たゞみやうはもつけ衣のごとし。下具かさ

れながらなり。

しぐら綾。のしめ綾。又平絹。

俗の直衣の調様也。文法。皇竹園は菊八葉。其

外は家々文不同。白裏あり。若人裏色ぬいやう付衣

に同じ。夏は袈袋を不着用之云々。又夏も

冬を通用之。別にすゞしはなきなり。凡上

さまばかりめさるゝものなり。大納言入道

まではゆりて着用參内すと云々。僧正又同

也。是以下人不着之歟。

首露香織物袈袋事。

正安五十二。於圓山殿下。十種供養之時。

法皇着御之。

裏衣應永三年四月廿八日。尊道法親王青蓮院

天台座主宣命之時。爲御見物。有人御彼

門跡。室町殿御裝束。

御裘袋。如<sub>レ</sub>冬。白張單。文桐。長大帷。

御指狩。白平絹生。香御袈裟。同織物練。文桐唐草。

白生御帶。大數四丈二尺。香御扇。大數拾二同。御念珠。予奉仕也。

下具白綾。裱。大帷。白丁。大口。指貫。下袴。五

條香袈裟。念珠。いらたか。夏はかうも。帯。白生。なり。りあふぎ。

上結之時は腰次あるべし。

可<sub>レ</sub>着様。

下結上結兩様なり。俗のごとし。あこめ以下

なににても。下具は指貫下。したのはかまの

上に入べし。まへふくらなし。よくひきちが

ゆべし。きうたいはさしぬきの上也。をびを

あてゝ。まへうしろのわきをよくつくろひ

て。御裳をとりになめて。まへへをしやるな

り。直衣の欄のごとし。又えんはもゝより三

へにたゝみて。御裳のつけめにとち付る也。」

とはへかゝるほどに深くちがへれば。そう

かうのむねわろきなり。そうかう衣文どんじ

きに同也。うらある程にはた袖をかへさず。

應永三元三坑飯。室町殿御出座之時。御裘

袋。しぐら。文桐丸。白綾御裱。文桐。白綾御指貫。熨目。文藤丸。

白下御袴。五帖香御袈裟。聖織物。文桐唐草。御檜扇。垂

糸。御轆。平絹。御衣文。御はかまぎは。以下予

沙汰之。以前のごとし。

一指狩事。はかまのひろさ一尺三四寸計なり。六ののものなり。

白。薄墨。地綾。色。又平絹。練生。

裏あり。色面にしたがつなり。

ぬいやう淨衣の袴に同じ。ほそき物なり。又

はすゞし也。あしくびくゝりをゆひすへて

着す。下の袴なし。又しわも別してさだめて

入す。大口をも着せず。裘袋付衣に此さしか

りを着する時は。長大帷なり。又下具とも指狩の下ぐ入てもきせ申也。下具はみなさ

しかりの上にあるべし。下具はいくへもあ

れ。かさねて一まへ。その上に衣は一まへ

に。ひきちがゆるなり。裳のうしろの中を。



ちととりにかむべし。

此指狩は青蓮院門跡久々着之。他門跡は着せず。其故は慈鎮和尚指貫を着する事をきらひて。これをさたしいたさるゝ也云々。室町殿はさしかりをよしとて。さいく御出などの時。御裘袋御付衣にめさるゝなり。又のしめしゝら。綾文藤丸。只調樣指貫のごとし。予めさする也。其樣以前のごとし。

一付衣事。

無裏。丈數六丈五尺。くびたちたる裳付衣の事。たゞ、み樣常のごとし。

香薄物。

文不<sub>レ</sub>同。法皇竹園は菊。攝家は牡丹。室町殿は桐なり。又無文有<sub>レ</sub>之。

白薄物。

同前。薄墨。同。

長絹。布。

可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>着樣。

織物絹は裳をとりにかめす。布はとりにかむるなり。

先大口。

俗の如し。次長大帷。ながさ柏にななじ。

次柏。香白薄色

綾也。

次付衣を着す。下具は一まへ。又衣はその

うへに一まへなり。まへふくらなし。次帶を白生

あつ。そののちそうかうをたつ。衣文以下ど

んじきに同じ。又内々はくびを半にをりても着す。又指狩を着せば大口を略す。其外はさきのごとし。若又此付衣に指貫を着せば。下具はさしぬきの中へ入べし。着樣裘袋のごとし。室町殿は御付衣に香の織物の御衣を柏の上にかさねらるゝなり。常の御出にかくのごとし。袈裟は五帖。かけやう先に同じ。

一法服事。

丈數下具等鈍色におなじ。縫樣同前。夏冬あり。たゞ、み樣は鈍色に同じ。

赤色袍裳。

文小葵。浮織物。かた織物裏あり。裳には裏なし。夏は薄物。文同<sub>レ</sub>冬。

法皇竹園貴人晴之時着給之。

又打裳貴人晴之時着給之。色并文等同。御袍。

夏も有<sub>レ</sub>裏。又冬も裏なし。綾付色也。

應永九年九月五日唐僧御對面之時。北山

殿赤色御法服。桐竹遠文。

香袍裳。

冬は練堅織物。文不<sub>レ</sub>同。裏あり。法皇は御文。菊八葉なども御用あり。夏は薄物。文不<sub>レ</sub>同。

僧正以上貴賤着之。

黒袍裳。冬は綾。裏あり。色ふしかれぞめ。夏は薄物。文不同。

貴賤着之。

布袍裳。色絹。兩面夏冬無差別。表袴面薄墨平絹なり。此外下具は常の法服におなじ。

受戒の人又は如法經導師等着之歟。此色目。應永二年九月十六日室町殿御受戒愚記に委細注之。

法服着様。又どんじきにおなじ。

### 凡法服寸法事。

其人のたけはたばりをとりて。俗の装束の寸法になすらへてこれをいたす。むかしより定れる法なし。

後伏見院御法躰の時。當家注進案有之。奥に注す。是を見て能々はからふべきなり。

室町殿御出家以後は。聖護院僧正道基の鈍色付被進めされて着給て御覽せられ。此寸法無相違とて。このごとく御衣ども御さたあり。予此時祇候御衣を召さするなり。

凡法衣は流通物なり。別而無寸法に沙汰歟。年少の法師は此限にあらず。

法服鈍色の裳は十二のの物なり。

後伏見院御寸法。當家注進古案。

御しゐにぶの寸法。

御たけ三尺九寸。御はたばり四尺八寸の寸法にていたし申候也。これに准じて寸法をはからひいたすべし。

一 御身のたけ二尺八寸。御大きくび常のごとし。御身のひろ

さ壹尺壹寸。御ふり九寸五分。御そうかう七寸五分。御袖のひつた

て貳尺四寸。御大袖のひろさ一尺一寸五分。御はた袖八寸。御裳のたけ

二尺九寸。御あしつき九寸。十二の御ひだ四尺五寸。御ひだのたゝみのひろさ二寸五分。御こし

一丈。

一 御あこめの御たけ。御くびつねのごとし。御

身のひろさ一尺一寸。御ふり九寸五分。御そうかう七寸五分。御袖の

ひつたて二尺四寸。御袖のひろさ一尺三寸。

一 御ひとへ。御あこめにおなじ。

一 御長大かたびら。御あこめに同じ。

一 御さしぬき御下のはかま日比におなじ。

一 白すゞしの御裳。御けさ同。

一 御どんじきの御寸法。御裳以下いつでも御しゐにぶにおなじ。

一 御法服もおなじ。

一 御うへのはかま。普通におなじ。

但うらはあをかるべし。ねりはり御大口。

いつもにおなじ白。

御くむたての御ころもの御寸法。

一 御身のたけ四尺二寸。御えりより御裳のつけきわまで。御えん七寸。

御身のひろさ一尺一寸。御大くび常のごとし。御えり九寸五分。御そうかう七寸五分。

御袖のひつたて二尺四寸。御大そでのひろさ一尺一寸五分。御はた袖八寸。

御裳のたかさ一尺。ながさ一丈一尺。かいまはり也。

一 御けさ御たけ一尺五寸。御ゐき四尺六寸。

一 御きうたいの御寸法。いつでも御くびたての御ころもにおなじ。いさゝかもかはるべからず。

### 二 平袈裟事。

法服の時懸又鈍色にもかくるなり之。丈數四丈。裏はなきなり。緩も甲も一色の物也。七帖敷。

香織物。浮堅文不レ同。僧正以上懸レ之。

白織物。浮堅文不レ同。可レ然人懸レ之。常には不レ懸レ之歟。

白生平絹。貴賤懸レ之。

布。薄墨布。法服之時懸レ之。

横皮。色緩様はけさにしたがひておなじやうにあるべし。丈數一丈八尺五寸。

まづ横皮の小緒を左のいきのまへの帯に

むすびつけて。袖のしたよりうしろへと

て。右のかたより前へうちかくる。中土さまはた、まではたい

みめさる、なりな裏音がらなり。

應永三年五月廿日。室町殿。武家大政入道准三后。山門

大講堂供養日。着座之時。香法服。金襴袈

裟。青地文牡丹唐草。横皮。同前。中をた、まで御かけ也。



同廿一日。同日受戒之時。赤色法服。同色打裳文桐

唐草同

白地金襴袈裟。文牡丹。横皮。同前。

すみなつづりをびにかくるなり

次にけさを左のたけたかゆびにかけて。うしろへひきまはして。うしろの緒をば左の肩より前へとり。したの緒をば右のわきよりまへへとりてひきかけて。かたむすびに胸の邊にてゆふなり。さてけさのはしをたゝみて。むねなる緒にをしかふ也。その上へ横皮をば引いだすなり。

徳治二年十二月九日。石清水御幸之時。後字多法皇

赤色御法服。白浮織物御袈裟。縮線綾御表袴と。或記に有之。

應永二年九月十六日。室町殿於東大寺御受戒之時。布御法服同御平袈裟着給に。予如此奉懸之。但御受戒以前沙汰は。御袈裟のうしろの緒を御ころもと御けさとのなかへをし入るゝなり。御受戒畢。教授師奉出

緒候也。先々法皇御受戒之時。當家如此奉仕之。仍今度も存故實。此事可秘々々。只沙彌受戒之時。御袈裟をかへさまにかけて。受戒之後かけなをすこと。其故はいかに。

二袈裟事。

甲も綴も色々不同。又綾織物。文等不同也。九條歟。かけ様平げさにおなじき歟。法服の時懸之。

丈數。

たけ二尺七寸。ひろさ七尺五寸。つゞり綴

一丈貳尺三寸。かう甲一丈八尺七寸。裏一

丈九尺六寸。黄鼻五尺七寸。かう周。裏

一丈二尺八寸。

一甲袈裟事。

丈數も懸様も平袈裟におなじ。横皮又けさの色にしたがふべし。法服に懸之。香甲。紫甲。青甲。櫛甲。

二入道着用衣袴事。

薄墨絹。生用之。貴人着。

同色布。貴賤着レ之。

色の淺深。人のとしによる。極宿老はちとこかるべし。

丈數。布ごろもに二段。はかまに一段。以上三段なり。

ころもはひとへにうらなし。そうかうも只ひたゝれのゑりのやうにして。うちへおりかへす。又付衣などの様に、そうかうのあるもありと云々。つねには見不及。大くびあり。ゑんあり。此ゑんは身よりつくくなり。それをみへにたゝみて。裳のつけぎはにかへしぱりにとちつくるなり。二身四袖なり。袖つけより裳のもとまで兩方のわきあくるなり。みなはたゝにひねる也。裳のうしろの中に兩方にひだ三づつあり。また左右

のわきまへうしろにひだ三づつあり。この裳兩方のわきへひろぐるやうになみがたにしわをぬするなり。裳をばうしろの中よりとるなり。まへの兩方のひだより前はすぐにしはをぬする。うしろは左右はこまかにとりにがむれば。をのづからなみがたになる也。袖のたんのありのいでたるやうにとりなすべし。裳は大きくびまでつくべし。ゑんは裳のつけぎはにてとどまるべし。ゑんまではいづべからず。

はかまはもゝだちのの二のわりのとをしあるべし。うらは白きぬ練生いづれもしさゐなし。また腰は白生平絹つねのごとし。ぬい様又身の入やうたゞ淨衣に同じ。下袴白きぬ。はかまのこしと下袴とにきぬ二疋ばかりなり。

大帷白布一たんばかり。ぬい様。かり衣の大

かたびらのごとし。

白生帶。淨衣のおびのごとし。

可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>着樣。

大帷は下袴のうへ。はかまのしたにあるべし。衣ははかまの上にある。まへを能々引ちがへて。まへうしろのわきにこをりをす。わきひろくばふかくをるべし。人にしたがふべし。をびをあてゝゆふつねの如し。衣文は鈍色のごとし。大かたびらはかねてかさねてもつけ衣のやうにたゝむ也。はかま又かさねて身を入。つねのごとし。袈裟は五帖薄墨の薄物。文は人の所爲にしたがふ。不同なり。貴賤懸之。かけやう同前。

大臣の入道以上は絹衣袴。香袈裟をも又懸るなり。香げさは大納言入道もゆるされては懸之云々。

應永二年八月。時正中於室町殿北御所。御

懺法之時。具行人四辻前大納言入道殿。季顯卿。

中山前大納言。親雅卿。等は。布衣袴に香袈裟懸

之。實白薄物。文色々。

衣袴寸法を出次第。

一ころものたけ。その人の一のほねよりきびすのもとまでの寸法に四五寸ばかりおとすべし。下さまの人は七八寸もおとすべし。

大くびの上は。つねのごとし。下は身のひろさ半分。に今五分計ますべし。

ゑりのひろさ二寸にすぐべからず。

こゑりのひろさ六寸ばかり。但くびふとくこゑたすべ。ゑんは六七寸にすぐべからず。身よりつ

づくものなり。つねは五寸なり。

うちたれの事。

一のはねより左のたけたかゆびの寸法に今二三寸ますべし。下さまの人は一寸五分ますべし。この内にて身

大袖はたそでをつもりあはすべし。身と大袖



は同ひろさなるべし。たゞしこゑたる人は身を  
ちとひろくまはすべし。  
はた袖は。大袖二寸或一寸五分ばかりおと  
すべし。

一袖の引たての事。

その人のたけの半分に一寸ますべし。たゞし上  
二寸もま  
すべし。  
様は今一

一裳のたかさははた袖におなじ。又今一寸も五  
分ばかりもひろくあるべきか。能々はからふ  
べし。たゞゑんのひろさに三寸ますべし。なが  
さ一丈二尺。

一はかまのながさ。その人のこしより下の寸法  
に五六寸ますべし。下ざまは三四  
寸ますべし。ひろさ一尺四  
五寸にすぐべからず。此内にて大のとをしの  
わりのをはからふべし。大のにとをしのは。二  
寸或は一寸五分ばかりおとすべし。又わりの  
は大のの半分ばかりにあるべし。たゞみよき  
やうにはからふべし。當時は袴のひろきをみ

な好む。しからば一尺六七寸にもあるべき歟。  
人の体によりてはからふべし。又みじかきを  
きらふ。しからばその人のたけの寸法にいま  
三四寸おとすべし。

一大かたびらは淨衣の大帷におなじ。身は衣の  
ひろさに同じかるべし。こゑりも同じかるべ  
し。袖はころもに二寸ばかりひろく。ながくし  
ておるべき也。

一下のはかまは袴のながさに今七八寸ばかり  
ますべし。ひろさははかまに五分ますべし。

一あこめは着せず。むかし着する人あり。それは  
難あり。

一直綴事。

うす絹のぢきとつ。れりす  
すし。白生大口は大臣以下三

位入道まで着用之。或色々のおりものうす物

等の直綴も着用之。

布の直綴布の大口は殿上人以下入道着用之。

夏は公卿もうすもの。ぢきとつ布を用。こゝろにまかすべし。

童躰装束事。

一直衣。浮織物。文小葵。裏紫。夏は三重多須幾。

下具等俗に同じ。指貫攝家以下は二重織物なり。腹白。童躰の時は年齢いかほどなりともうへをとをしてくみてさぐべきなり。結を前の縫目より出て組之。此外は俗におなじ。是當流説なり。永章卿流は俗の指貫腹白も此色形のごとく。前の縫目より出之。兒俗をいはずくむ。公方様御指貫の腹白ばかりも、だちのぬいめより出之組之。當説は童形ばかり前のぬいめより出して。俗のは皆も、だちの縫めより出して組之。公私とも差別なし。此事如何。

一狩衣事。夏冬着用の時俗に同。

色下具等俗におなじ。指貫腹白同前。袖のくゝ

りけぬき形。又十六才よりふせぐみつねのごとし。

袖のくゝりはおさあいもおとなしきも。當イ五たんに入るゝものなり。袖の下の小はりはなし。袖のくゝりはふせぐみなりとも。濃紫の指貫はら白はくむべし。童躰のほどは。とし三四十なりともかやうなるべし。

一狩襖事。袖結同前。裏あり。又單もあり。

上下ともにおなじ物なり。織物色下具等かり衣に同じ。練生時節色時にしたがふべし。ぬい様上はかり衣に同じ。下は淨衣の袴におなじ。下袴又身の入様も同前。帶は狩衣におなじ。

着用只淨衣に同じ。俗も着用之有例。童形狩衣并狩襖の色々下具等。應永二年九月室町殿御受戒之時の愚記に委細注之。

一半裾事。色同前。裏あるべし。又單もあり。

狩衣のうしろの短物也。つねにながき大口に

着給之。帶は狩衣に同じ。下具なし。又指貫を着する事もあり。その時は下具狩衣に同じかるべし。俗鉢も着給之。下ざまは不着。高野御幸供奉の若殿上人着用の例あり。

一水干之事。

色々織物随節。上下同色。練生裏あり。

上は狩衣のぬいやうにおなじ。但くびかみのひぼを入す。木をも入す。紙ばかりなり。つねよりはほそう。ゑりかたもなし。ひたゝれの様にかどをたつるなり。まへうしろみじかくて。袴のうちへこむる也。くびかみの兩方のはしをしたへをし折て。まへをひきちがへてきする也。くみのひぼを上がへはくびかみのさきにつけて。むねより入て。左のわきより引出す。下がへのひぼは身のうしろの中のとをりのくびかみにつけて。くびかみの外より引まはして。むねの引ちがへよりうちへ入て。右のわきより引いだして。むねにてもろかきにむ

すぶつねのごとし。袖のくゝりはふせぐみつねの如し。十五才まではけぬきがた也。此まへのひぼのくみも袖のくゝりに同じくみなり。たゞしつゆのさがりのくみわけなし。又單ぐみとて水干のひぼにするくみあり。袴も上におなじ色なり。ぬいやうはひたゝれのはかまに同じ。こしまたも白すゝしなり。練生いづれもしさいなし。但單水干よりくゝりの時はかならずすゝしたるべし。

菊閉も色々の糸なり。水干の色にはへあふやうにすべし。とち所。上は五所なり。又袖のうちをもとづる事あり。それは衣文にさしあひてわろき也。袴は股立ひざ四所なり。

下具事。冬は衣。夏は單なり。色織様は時にしたがつべし。衣の縫様多く狩衣の衣に同じ。大口と袴とのあはひへ衣は入べし。左右のものだちをはかまきぬ大口を能々かさぬべし。



袖合衣生衣等も着すべし。いづれにても一色を用べし。單はかさぬべからず。

又色ある單。水干并長絹の水干には色々の糸の菊閉。生よりくゝりひば等なり。

衣をかさねず。只大口ばかりの色々の小袖など着する事しさいなし。

又色々のゑなどかさたるもあり。

きくとぢはなくて。たゞひば袖のくゝりおなじ色の糸にてもとづるなり。かならずすじのいとなるべし。

一たりくびの事。色々織物。又繪などもかく也。つねはよりくゝりなり。

水干のうへばかりをくすばかまにこめて着之なり。衣はかさねず。つねはひとへにて裏なし。菊閉のあるもあり。又只いとにてもとづるなり。

くすばかまは下のはかまもかさねず。たゞあしくびにひきすばめて着るなり。しへもさだ

まらず。淨衣の袴のぬいやうのごとし。ゑをかきても着す。又かゝぬもあり。菊閉のあるもあり。又たゞいとにてもとづるなり。

竹園攝家など童形俗躰御若年の時。ながき大口に着給之。下様はくす袴にて。御童形俗躰皆着之。つねのことなり。

以上皆衣文かりぎぬのごとし。寸法をいだしやうは寸法の抄にあり。

一淨衣事。俗人も十五六才までは。絹にも袖にも袖くゝりかやうなるべし。但絹は下ざまいたく着せず。生平絹。

袖くゝり生白平絹。又白糸のよりくゝり。二筋づゝ入べし。そでのはたひねるべし。年齢はおとなしくとも。童躰のほどはかやうなるべし。袖のはたはぬいて。つゆのくみばかり入事あるべからず。

又布をも着すべきか。

衣紅梅萌黃蘇芳時によるべし。夏は更衣單生

單生衣引部木等。白下袴白生帶皆俗におなじ。  
二兒のかみのゆひやうの事。

もとゆひうすやう。又はくたんしなり。もとゆひの左をあげてみじかく。右をさげてながくする也。もとゆひ左はうつむき。右はあをのく也。さてかみのすそは。左のわきへとるなり。かみのしなによりて中をかみひねりにて一所二所ゆふなり。髪のゆひやうはをしのはがたつねのごとし。宮など御童躰の時。かやうにゆひたてまつるなり。

應永二年室町殿御受戒之時。上童たちのもとゆひ。右をあげてゆふなり。此事仰出さるゝによりてなり。是はつねにかはられんためとなり。しかれどもかみのすそは左のわきへとるなり。又妙法院門跡にはむかしよりもとゆひを右あがりにゆひて。かみのすそをも右へとるなり。

抑主上春宮御童躰は。御束帶の時御あげびんづら。御引直衣口傳抄に有之の時は。御ぐしをみださる。又内々はたいそと御ゆひあり。あながちに御もとゆひなどのさたまでもなし。

又親王御童躰は。御束帶の時さげびんづら。口傳抄に有之御直衣の時は。御ぐしをみださるゝなり。又ゆはるゝ事もあり。ゆはればさきのごとくにあるべし。宮以下御直衣の時はみださるべき歟。又つねはゆはるゝ也。

應永元十二十七御名字稱持御童九

室町殿若公御元服之時。御直衣。御ぐしをみださるゝなり。狩衣を着せむ時は。宮をはじめ奉りみなかみをゆふべきなり。以前の如く髪のゆひやうに公私の差別なし。

此法鉢の衣の着様寸法已下之事。先々法皇の御ころもは。當家の輩よそを奉る也。一向に分明に抄物などなし。今室町殿御衣は。愚身めさするなり。仍公私方々沙汰を經られて。淵底を

## 女官飾鈔

### 春冬のきぬの色々

きわむるの間。子孫の蒙昧の不審を散せんが爲に自筆にこれをしるし。裏判を加之者也。短慮之身定有違失歟。努々不可有外見云々。可秘々々。この一流の中にも。無左右一見をゆるすべからざる者也。

應永三年三月十八日

正四位下行左兵衛權佐藤原朝臣永行在判

右法帖裝束抄於柳堤得之

一 みなくれなるのきぬ。くれなるのひとへ。白きうはぎ。松がさねの小うちぎ。

一 くれなるにほひのきぬ。うへくれなるにうす紅をかさぬ。紅梅の

ひとへ。もへぎのうはぎ。赤いろの小褂。

一 くれなるのうすやう。うへくれなるに白きをかさぬ。白きひと

へ。櫻のうはぎ。ゑびぞめの小うちぎ。

一 紫にほひ。うへむらさきにうす紫をかさぬ。くれなるのひとへ。う

ら山吹のうはぎ。もへぎの小褂。

一 紫のうすやう。うへ紫に白きをかさぬ。白きひとへ。紅は

き也。萌黃のうはぎ。紅梅の小うちぎ。

一 梅のきぬ。おもて白し。うらすわう。すわうのひとへ。紅梅の

うはぎ。あかいろの小うちぎ。

一 つぼみ紅梅。表紅梅。うらすわう。青きひとへ。萌黃のう

はぎ。ゑびぞめの小うちぎ。



一うらまさりの紅梅。表紅梅。裏紅。まさりたるひと

へ。もえぎのうはぎ。赤いろの小褂。

一紅梅がさね。くれなゐのひとへ。ゑびぞめの

うはぎ。もへぎの小うちぎ。

一紅梅にほひ。うへ紅梅に。うす紅梅を重。まさりたるひとへ。

萌黃のうはぎ。ゑび染の小うちぎ。

一柳。表しろく。うら青。くれなゐのひとへ。櫻。もえぎの

うはぎ。あかいのうら小うちぎ。

一さくら重ね。表しろく。うらあかきあ花。紅のひとへ。紅

梅のうはぎ。すわうの小うちぎ。

一山吹にほひ。山ぶきの衣に黄な。うら黄いろ。葉。青きひとへ。萌黃

のうはぎ。ゑび染の小うちぎ。

一花山吹。表うすくち葉。うら黄いろ。紅のひとへ。うら山吹の

うはぎ。青き小うちぎ。

一うら山吹。おもて黄色。うらくれなゐ。青きひとへ。魚龍のう

はぎ。ゑび染の小褂。

一くれなゐつゝじ。おもてすわう。うらうすくれなゐ。青きひと

へ。松がさねのうはぎ。山ぶきの小褂。

一つゝじ。表すわう。うら青し。萌黃のひとへ。かばざくら

のうはぎ。藤の小うちぎ。

一藤がさね。おもてうす紫。うら青し。紅のひとへ。うら山吹

のうはぎ。松がさねの小うちぎ。

一色々五。うすい。うら青し。こうばい。も。うらあかき。くれなゐのひと

へ。紅梅のうはぎ。萌黃の小うちぎ。

一七重。うへ白き六。くれなゐのこきうすき二かされ。あをきこきうすき一かされ。うすい。のこきうすき一かされ。うへとも。紅のひとへ。すわうのうはぎ。も

えぎの小うちぎ。

一しろうすやう。うへもかされも白き。うらあか花。白きひとへ。紅

梅のうはぎ。くれなゐの小褂。

一松がさね。表あな。うら紫。くれなゐのひとへ。萌黃の

うはぎ。すわうの小うちぎ。

一かばざくら。表すわう。うらあか花。もえぎのひとへ。櫻の

うはぎ。柳の小うちぎ。

一さくらもえぎ。表もえぎ。うらあか花。紅のひとへ。紅梅の

うはぎ。すわうの小うちぎ。

一ゑび染のきぬ。表すわう。うら花田。 紅のひとへ。もえぎのうはぎ。紅梅の小うちぎ。

此内。梅紅梅は十一月の五節より二月まで。櫻山吹は三月まで。藤は三四月ばかり。其外の色は時をさだめず候。四月にはあはせのきぬにも此色を用候。きぬの地はからをり物二重なり。たゞのをり物。綾。何にても子細あるまじく候。常はおはやけわたくしををしなべて五ぎぬにて候。其内しかるべき御方は。七つも八つも又十も時によりてかさねられ候。唯今の人は五より外はいたく用ひ候はず候。又うち一にひとへをかされ二三重ねたるもしさいなしと云々は衣一二をも用なり。

一うはぎ小掛などはふたへをり物。又唐をり物をも用べきにや。

夏のはじめの衣の色。

一藤重ね。表うす紫。うら青。 白きすゞしのひとへ。松が

さねのうはぎ。くれなゐの小うちぎ。

一卯花。おもて白く。うら青し。 しろきすゞしのひとへ。紅のうはぎ。ゑび染の小掛。

此外色々。さきにしるすに同じ。四月中は裕の衣にて候。ひとへは衣がへのひとへとて。精好の生絹を何れもかさねられ候。又賀茂の祭の日は生絹の五衣を用事も候。

五月五日より秋までの衣の色。

一あやめのひとへがさね。表青し。うら紅梅。 すわうのうはぎ。ふたあいの小うちぎ。

一花橘のひとへ重ね。おもてくち葉。うら青し。 白きうは着。

すわうの小うちぎ。

一撫子のひとへがさね。おもて紅梅。うら青し。 すわうの上着。紅の小うちぎ。

一女郎花のひとへ重ね。おもてたて青ぬき黄色。うらあなし。 紅

のうはぎ。赤いろのこうちぎ。

一すわうのひとへ重ね。女郎花のうはぎ。二藍

の小うちぎ。

一萩のたてあをのひとへ重ね。表たて青くぬきすわう。うら青し。

一萩のひとへがさね。おもてすわう。うらあなし。

女郎花のう

はぎ。くれなゐの小うちぎ。

一うすすわうのひとへ重ね。こきすわうのう

はぎ。松がさねの小うちぎ。

一紅のひとへ重ね。二あひのうはぎ。朽葉の小

褂。

一二あひのひとへ重ね。をみなへしのうはぎ。

すわうの小うちぎ。

一ゑびぞめのひとへ重ね。白きうはぎ。紅の小

褂。

一白きひとへ重ね。紅のうはぎ。二あひの小う

ちぎ。

ひとへがさねの事。うへはすゞしの織物。ある

ひはうすものあや。したは綾のひとへひねり

がさねにて候。下ざまはへいげんうす物など  
を用る。又綾を何色にても染てはりて用る也。  
あやめたちばなは五月中。なでしこは六月ま  
で。をみなへし萩は祇園の會より秋のうちめ  
さるべく候。うはぎ小うちぎ皆すゞしの織物。  
或はふたへ織物をも上ざまは用る也。

九月九日より衣の色。

一菊紅葉又何にても五きぬ。すゞしにうすきわ  
た入て用ひ候に。近比はいかゞ候やらん。

十月より五節までのきぬの色。

一菊の御衣八。うへ五。すわうには。あをきひとへ。き

ひ。した三。しろし。あをきひとへ。き

あをうらのうはぎ。表黄。裏青。りうたんの小うちぎ。

おもてすわう。うら青し。

一紅葉重ね八。黄色三山吹のうすき。こき一かされ。紅の

うすき。こき一重ね。すわう一。合て八也。

紅のひとへ。菊のうはぎ。黄ぎくの小うちぎ。

一白菊。表白。裏すわう。

くれなゐのひとへ。黄菊のう



一黄ぎく。表黄。裏青。くれなゐのひとへ。白きうはぎ。

ゑびぞめの小うちぎ。

一うつろひ菊。おもて中紫。うら青し。

紅のひとへ。松重ねの

うはぎ。あをき小褂。

一黄もみぢ。表黄いろ。うらすわう。

くれなゐのひとへ。すわ

うのうはぎ。青き小うちぎ。

一はじ紅葉。表すわう。うら黄。

紅のひとへ。ゑびぞめのう

はぎ。すわうの小うちぎ。

一かへで紅葉。表うす青。うら黄。

すわうのひとへ。くれな

ゐのうはぎ。ゑびぞめの小褂。

此外の色々は。先の春冬の色のところにしるしをはんぬ。

一うちぎぬの事。紅の綾をうちてかさねられ

候。おさあひ人は濃きうち衣也。夏冬にかはら

ず。ひきつくろふ時かさねられ候。常にはひと

へばかりをかさぬる也。又ひとへの上のうち

ぎぬをかさぬる事もあり。こきうちぎとは。紫

の打たるを云也。今の地に五倍子鐵醬にて染るはまねび物也。

一ひとへの事。夏は紅。或は濃きひつへぎ也。冬は何にてもひとへねりはる。又ひとへ重ねに引へぎを重ねる事も有。大概此分にて候。大かたはさだまりたる事候はず候。きぬの色によりてうはぎ小褂は時によりて御さたあるべく候。見どころ候はんずるが肝要にて候。此外又ものゝぐはれの時用候も。からぎぬにてこうちぎあるまじく候。

一裳唐衣は下づかへまでもきる也。

一かざみの事。うはぎのうへにきる童女のきるもの也。

一小褂の事。きぬの上にひとへ。びとへのうへにうちぎぬ。うちぎぬの上にうはぎ。うはぎの上に小褂。其上に袴をきる也。ながさ小袖とひとし。中陪うらあり。寸法は次第にうへにきる

はをめらかす也。

一かいねりの事。うすき紅のねりはりたるきぬ也。

一ほそながの事。櫻のほそながにつやゝかな

るかいねりとりそへてと。玉かづらの卷に見ゆ。童殿上も細長をきる也。皇太子幼童の時着之。白織物。水源云。未通女のきるものなり。か

りぎぬのくびかみの様にたてゝ。三はたばりの物也。然ども。可然人若は君達女御參の時。をとなしきも着用する也。組にて紐を付る也。

一のしひとへの事。はりたるひとへ衣を云也。うへのはかまの事。童女ははれの時は。うき

紋の表の袴をきる。紋はくはにあられをつくる也。よのつねには。うへのはかまをばきず。

源氏葵の卷に見ゆ。

一しびらたつ物。しびらはうは裳の事也。男は袴の上に着也。女はから裳の上にきる也。褶と

書也。

一きぬのたけの事。八尺九寸也。それによりてかづらのたけもながくする也。

一袴は紅のはりばかま。祝之時こきはり袴。夏冬同じ。褻の時。生の紅のはかま。冬は御ぞ八領或は六領或は五以下。此上に袴をきる也。夏はひとへ重ねの上に袴を着す。近代は小袖を着用す。但ひきつくるふ時御ぞを着す。物の具は冬ひとへ。夏ひつへぎ。うはぎもから衣。小腰ひきこし等。はれの時着す。

一主人は唐きぬ着せざる時小褂をきる也。からぎぬには小うちぎを着せざる事也。

一主人のうはぎ。小褂はかならずふたへ織物也。一女房は褻の時はひとへうはぎ。紅のうちぎぬから衣等着して。裳をきぬ例也。なを内々うはぎひとへはりばかまを着せず。たゞきぬの上にもから衣を着する例也。

一ひとへ重ねはすゝしの織物をも又綾をも何をもそめはりてひねり重ねる也。すわうはりをみなへしも常の事なり。私には平絹うす物などを用る也。又うはぎは織物也。入内るとき女房五節の童女等織物を用なり。内裏中下臈は織物綾等をきざる也。

一うちいでに袴を出すは不可然事也。

依<sub>基春</sub>左金吾卿。所望<sub>下</sub>禿筆<sub>訖</sub>。可<sub>レ</sub>禁<sub>外見</sub>而已。

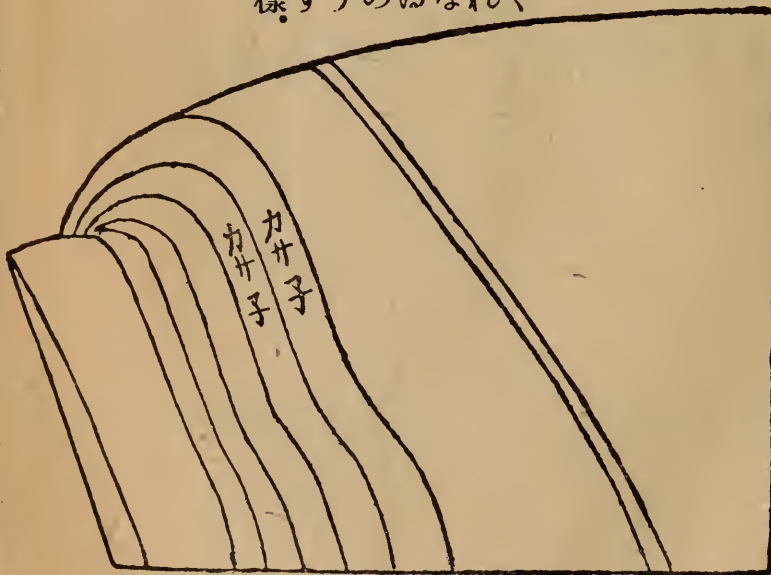
永正三年春日

從一位

右女官飾抄以松岡辰方本書寫校合畢

曇花院殿裝束抄  
一五ツ衣單色目事。

くなれるのうすの様



一朱  
二朱  
三丹  
四薄紅梅  
五白  
六白  
七白



むらさきのうす様。

紅梅にほひ。つぼみ

さくら。

梅重。

一紫

二紫

三薄紫

四白むらさきにほひ

五白

六白

七白

紅梅とも。

一紅梅

二同

三たんうすく

四朱

五朱 紅梅そ  
たんカサネ

六朱

七六

もえぎにほひ。

やなぎ櫻はうらうす

雪のした。

六ぎぬ二色。

一草具コク青菜

二同

三カリ

四六

五六

六六

七朱

色。

一白

二同

三同

四同

五同

六同

七朱

五筋アサギニテ  
フチ取六

一白

二同

三同

四同

五同

六一

七六

紫ニテ  
フチ六

一白

二同

三同

四朱ウスク中

五朱極緋

六朱ウスク

七六

一白

二同

三朱 少ウスク上ノ  
方カサネ

四朱又コク

五朱又コク

六朱極朱

七六

一薄紫エング

二同

三同 此間ノ筋ハ紫ニテ  
フチ也

四黄 同斷

五同

六六 此四ハ白シ

七六

八朱

同さくらつゝじ。

同色く。

紅もみぢ。

山ぶき。

一紫

二薄紫 エンガ白フチ

三同

四白

五同

六六

七六

八朱

カク

二筋紫フチ六

一薄紫 エンゲ

二同

三同

四朱

五六

六黄

七朱

八朱

紫フチ六

朱ニテフチ六

すわうのにほひ。

うつろひぎく。

又きく共いふ。

まつざくら。

かばざくら。

一白

二同

三同

四薄紫上ノカタヘカサネ

五同 又少コシ

六紫

七六

八六

一紫

二同

三薄紫

四同又少ウスク

五同又ウスシ

六同又ウスシ

七同少紫ニホヒ

八六

六

ス

ヂ

白

テ

一朱 アカ紅也

二同 コク少クロメアリ

三丹

四黄

五六

六朱 コク黄也

七朱

一丹

二同

三紅梅ウスシ

四丹

五キ

六キ

七六

一六

二六

三六

四ウルミエンチノク

五白 クロミチサシテ

六ウルミ同レ右

七朱

一紫

二同

三同

四同

五同

六同

七朱

白フチ取

りむだう。

ちりもみぢ。

うらぎく。

松がさね。

一紫

一六

一白

一紫具

二同

二同

二同

二同

三ウス紫 成程ウスク

三同

朱常ノフチ

三同

三同

四同

四キ

朱フトリ 常ノ一倍

四キ

四六

五六

五朱

五六

五六

六六

六同

六同

六六

七朱

七同

七朱

七朱

きはじもみぢ。

かえでもみぢ。

むらさきむらご。

うすぎぬしやうぶ。

紅のひとへもん也。

一キ

一六

一藤色

エングウク  
クロム心歟

一六

二同

二同

二同

二六

三同

三同

三同 成ほとうすく

三六一ツクサシル引

四丹

四キ

四同

四白

五同

五丹

五六

五朱

六同

六同

六六 後一ツ上ニ  
クサノシル引

六紅梅 オウトマゼ  
テかほた

七朱

七朱

七朱

七白



つゝじひとへ共 花たちばな。すゞしひとへはあなきも心也。 紅も心也。

- |         |            |
|---------|------------|
| 一朱      | 一朱 肉皮引     |
| 二同      | 二同 たんにセテ紅也 |
| 三同      | 三同         |
| 四紅梅 タング | 四白         |
| 五六      | 五六         |
| 六六クサシル引 | 六六クサシル引    |
| 七白      | 七白         |

ふち。しろきすゞし のひとへも心也。

- |         |
|---------|
| 一紫 中ウスシ |
| 二薄紫 エング |
| 三同      |
| 四白      |
| 五白 二筋六  |
| 六朱      |

一みづし御厨子のたな棚のおき物の事。

上のちう層にてば手こ筥かり。

二ちう層め居に火とり。ちむ盆ば取こ匙。たき物火筋のつば煮。

ぼむ盆にす居へて。きやう香し。こし匙。かう火筋は煮い煮おし灰押たて煮。

る脇べ脇にたん短冊ざく筥ば文こ箱。ふみ文ば箱こ。

下のちう層にす碗ぐり。引薄合様う上すやう。す上ぐりのう

へにはあるまじく候。なら並べてあるべし。

くろ黒だ柵な置のをき物の事。

上のちう層にはら角ひ赤ば元こ結。

二ちう層め齒にすみあかもとゆ黒ひ筥のは且こ紅。わき脇の

ちう層に御は包ぐろみ紙のは文こ紙。わたし紙木紙くれ紙な紙ぬ

のう紙すやう上につ文い紙みて。下のちう紙にやは紙く

のかみ紙。う紙へ紙にぶむ紙ちむ紙置紙べし。

一こそ房で男のとちやう替の事。

女房ばう男おと替こ重にはか重はり候まじ。五つがさね

はひとへにとちぬ。十か苑さねはす開べりてわろ

く候ほどに。これも五つがさね苑つ開つにとち候

てふたに入候か。

一女だいのりの房ばう衆小袖こそでの事。

三月一日より二なり。

四月一日よりあはせ拾一つにこしまさ。

五月五日よりすゞし生裏うら。

六月一日よりまるすゞし。

九月九日より二なり。公麻くがいには三ゑりか。

十月一日より三ゑり。

一紅梅こうばいぬき緯白じろ。ひとつませは。廿八の春ま

でにて候。いづくもこのぶんにもちゐ候か。

一かもじの水ひきは。四十のとしより二すぢに

て候。

一ぶけの御所一のたいより曇花院どんげいゐむどの

へたづね申されし御返事。

一こしのかなものゝ事。もとはすいぶむのが七

にて候つるが。今はぶげんしだいになりゆき

候へども。とがめも候はず候。大上らふにて参

候などに。九つにては入候はんずるかとおも  
ひまいらせ候。こしのあしをかな物にてつゝ  
み候事。上次第ざまならではときゝつれども。これ  
もぶげんしだいにて候。

一ぬひ物とをしにては下まじく候。とく大じど  
のの上らふは。かみざまはんぶんのやうに候  
つれども。とをしはめし候はず候つる。向なにも  
きと申ほどのくらゐなくてはときゝ候つる。

一ぬひものうへにおり物を御ゑりをりてめ  
し候て。撮取かいどりにものをり物めし候はむず  
かの事。二をり物はいかゞにて候。

一ぬひ物の下にそめ物の事。

たいがいをりすぢ。こうばいなどのたぐひに

て候。はくの下にはそめ物にて候べく候。

一川原能かわらのうの時。けつこうにだにも候はゞ。

きり桐風はうは入候まじきよし仰出され候につ

きて。をり物のうへにぬひ物とをし。又かひき

りなどにしてめしたるとて候。  
 一小袖のたぐひにきり柄をめし候事。

なにむきにてもゑめし候はず候。上ざまばかりにて候。色々御たづね候。みし世は久しき事にて候ほどに。御しんかう候まじく候。とうせいはわれまゝのやうにみおよび候。よろづのみちすたり申候まゝ。かやうの事ども大かたたへきたり候。

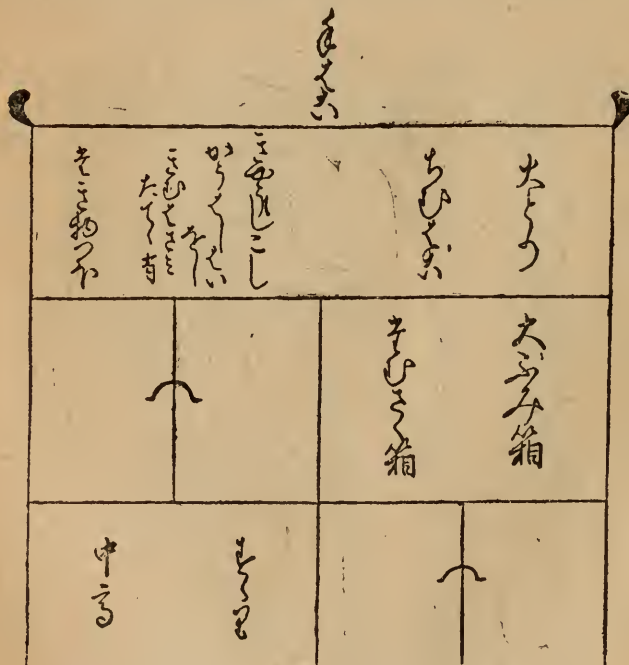
天文八年霜月一日

一のたいどの御返事

かやうのとをり。どんげいゐんどのあそばし候をうつしをき申候。

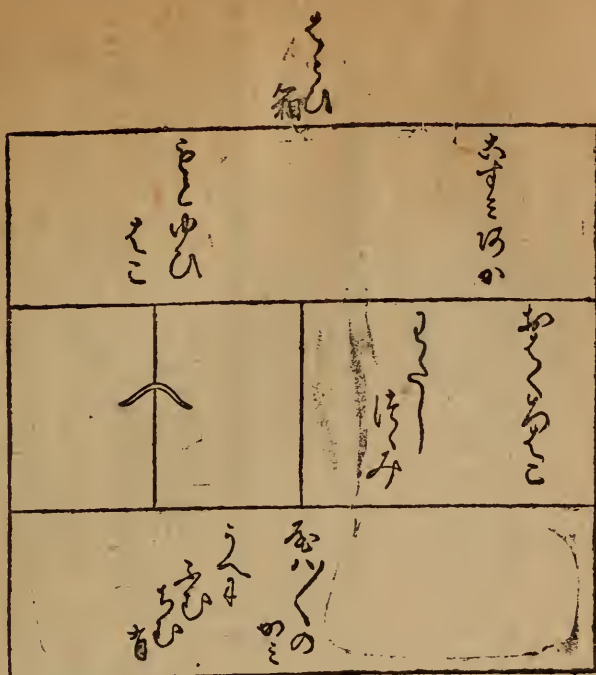
天正三年五月十日

みづしだな。

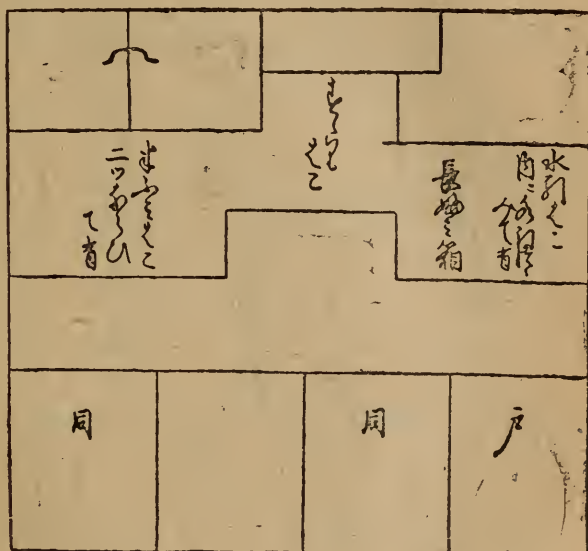




くろだな。



さうしだな。



天保甲辰十一月讀了

忠實

群書類從卷第二百二十一

裝束部十

御禊行幸服飾部類第□

節下。供奉史內記弁裝束司判官等裝束見之。

寬治記云。節下左大臣。有取物等。

左大臣。馬副十人。手振十二人。四人取物。蘇芳袴。同色搗下襲。自餘如常。

少納言公衡。和鞍。有銀面。杏葉。尾袋。取物四人。持物同大臣。

外記雅仲。仲信。袖葉縫腋袍。巡方着靴。

寬治時範記云。

節下左大臣。唐鞍。飾馬。

馬副十人。裝束如手振。蘇芳褐衣。躰躰單執物。

四人。簀篲。笏篲。

少納言公衡。倭鞍。有銀面。尾袋。杏葉等。裝束如尋常。

執物四人。胡床。轡。少納言侍。

外記二人。三善雅仲。惟宗仲信。倭鞍。楚鞆。結唐毛。各着深綠袍。俗稱袖葉色。

權大納言兼右大將家忠卿。裝束如常。長秋記云。令隨身之儀。有手振馬副等。

振馬

隨身如常。但熊形蠻繪。肅慎羽胡錄。雖番

長不騎馬。

抑近代例。為大臣人多為節下。而左府籠

居觸穢。內府服暇。仍上薦大納言民部卿雖

當其仁。有議召之。

少納言家隆。用飾馬。帶劔。長秋記云。雲珠。頸總。陪從四人。

少外記二人。在節下上卿左右。清原祐隆。惟宗貞成。

天仁元江記云。

大臣代右大將。

手振十二人。紫褐。取物四人。隨身八人。熊蠻繪。緋眞□青單下重。魚形尻

鞆。肅愼羽。

馬副八人。取物。熊蠻繪。與近衛播磨貞重取口渡。

少納言。

從二人。外記左右各一人。柚葉色袍。兵庫屬各

一人。

允各一人。以上例袍。

左頭。允。右助。

退紅從二人。

節旗。

騎馬者持之。以緋綱四人張之。件旗上三俣鉾如山字。

保安外記記云。供奉外記史內記等。各着柚葉

色絹縫腋袍。下重以下如例。內記用尻長下

重。殊上官等着袍。

保安四忠教卿記云。

節下右大臣。

馬副十人。

隨身八人。

召加番長一人。府生敦貞。路次行列之時。在手振後。先例也。而於院御棧敷。太

政大臣被下。知可。在前之由。仍前行。垂袴。下重躑躅。

手振十二人。

赤色褐衣。着柳半臂下襲。朽葉袴。柳下重。依先例也。藤色。而治曆節下。

故大殿爲右大臣左大將。令用伴色給。仍以彼例所用也。不付面事。依彼例也。

取物四人。

笏筥。鞭筥。豹毯。是依先例也。

保安四師元記云。供奉外記史內記各着柚葉色

絹縫腋袍。

同師元記云。裝束司判官史內記裝束。同行列

外記史內記等。

保安四外記記云。節下少納言公章。少納言侍布

衣冠帶革履。

馬副相從了。少納言可

着布袴。供奉外記史內記等各着深綠縫腋

袍。

柚葉色是也。

下襲表袴等如例。但內記用尻長

下重。自餘上官等如例。

保安四永昌記云。節下右大臣。

家左大將。

位服如常。

蒲萄染打下襲。縮線綾表袴。飭劔代。飾馬。馬

副十人。

手振十二人。八人手振。四人取物。紫褐。柳下襲。

青色。青末濃袴。隨身府生。黃染布狩衣。以柿

猊摺。小々紅打相。白襖袴。熊皮行騰。脛巾。

沓。帶弓箭。依例供奉本陣。仍在大臣後。番

長以下蠻繪狩衣。濃打相。同半臂。躑躅打下



重。蘇芳袴。脛巾。沓。平胡錄。弓等也。節下少納言公章。鈴少納言俊隆。巡方。魚袋。杏葉同前。

保安四朝記云。

節下右大臣左大將。

飭馬。唐鞍。院御馬。馬副十人。手振十二人。

四人取物。鞭笏宮。隨身。召加權番長府生敦貞。

着柏摺。在下。隨身。將軍御命云々。

少納言公章。

和鞍。杏葉。馬副四人。取物四人。持物同大臣。

外記惟長。盛賢。

柚葉色縫腋。巡方。着靴。盛賢雜色當色色

襖。黃相甚不可然歟。

康治元信範記云。

節下內大臣殿。

御裝束如恒。但縮線綾表袴。紅打相。筋劔等。

馬副十人。瀧口。但爲內舍人。者不召之。內々經院奏令申殿下一給。

紺布褐衣。袖端着二村濃平組。但寸法身尻六尺五寸。同前四尺三寸。袖一尺六寸。四袖。

袴。長三尺五寸。

已上縫調定。渡大路之時插褐衣尻。

濃蘇芳張相。面裏共強張。四尺五寸許。青張單衣。寸法同白。

合袴。卷纓冠。無文。厚額。老懸。布帶。革脛巾。以紫。爲結。夏扇。藁沓。黑柄唐笠。

件裝束具別曇。白生曇。冠宮笠等相具。

送遣瀧口。本所御使下家司歟。

手振十二人。依入道仰出。用三宇治侍面相美麗者。八人手振。四人執物也。

卷纓冠。無文厚額。件冠細纓卷纓被尋。先例之處。無三定式法。只無官者卷纓也云々。

老懸。紫色布褐衣。尻七尺。前四尺五寸。袖二尺無結。

下襲。稱二柳色一也。尻二幅七尺。前四尺五寸。袖二尺餘。

已上縫調定。褐衣身一幅。下襲身二幅也。渡大路之時。并下重尻引庭上。

青末濃布單袴。長四尺五寸。黃色張相。馬副。同。

色張單衣。白合袴。布帶。革脛巾。以青色革。爲結緒。

夏扇。藁沓。白柄唐笠。藥袋。黑漆螺鈿有九緒并蘇芳末濃綱。

執物四種。豹毯。鞭。筥。笏筥。

御廐舍人一人。

赤色狩衣。襖袴。濃色布裏。山吹色張相一領。淺

黃目染帷。合袴。烏帽子。帶。藁沓。夏扇。白

柄笠。

居飼一人。

裝束退紅水干。布黑襖袴。布襖衣。白帷。布

下袴。烏帽子。

御馬。

御唐鞍。鏡。杏葉八子。雲珠。鈴。頸總具。蘇

芳手綱。濃打覆。蘇芳裏。白差繩。蒔繪鞭。銀柄

立袋。

節下少納言源師教。

裝束如尋常。和鞍。付杏葉。不付銀面尻

袋等如何。又無執物。

同範家記云。節下內大臣。瀧口十二人爲三馬副。

同或記云。節下內大臣。飭馬。馬副取口。瀧口十人爲馬

副。手振十二人。瀧口從者。懸胡籙在雜色

後。

少納言師教。飭馬。馬副四人。內二人取口。

同記云。

諸司裝束。

節下大臣。裝束飭馬等如公卿。

節下少納言。飭馬。銀面。尾袋。裝束尋常。

外記史內記。柚葉色縫腋袍。深沓。

裝束司判官主典。柚葉色縫腋袍。

康治元十廿六字槐記云。

紅打下襲。浮文表袴。黑半臂。飭太刀。如法飭劔。非代。

紫綵平緒。

予供奉儀式。類長。

鹿毛馬。自入道殿下給。先日雖尋求敢無被飭之馬。只有葦毛馬。被飭。俗人說不飭葦毛馬。

依似淨飯王也。仍飭葦毛馬。否。欲申入道殿之間。昨日下午給此馬。柔耍無驕氣。向車差笠。更以不

驚。今朝置唐  
鞍。予先乘試。

唐鞍。八子雲珠鈴。頸總也。雲珠頸總。馬頗有厭氣。仍解之令持手振。

馬副十人。瀧口一二。腐穢一。(右)二。(左)夏。扇等令持馬副料懷中。不露持。

師實長元九大二條殿。內大臣左大將治曆四年京極

大殿。右大臣左大將等節下之時。以瀧口爲馬

副之由。見彼兩殿御記。仍今日。予以

瀧口爲馬副。

手振十二人。宇治侍。其中執物四人。又依解銀面令持手振。笏筥。豹毯代。

瀧口調度懸十人。淺黃狩衣袴也。俗呼曰槿色黃衣。

調度懸不挾尻剝禮。胡錄如常負。但以表

帶自左肩絃卷當胸結之。弓左持。以弦

方爲表。

先日入道殿仰云。調新車可渡大路。予

案。事情理不可然。又檢舊記。攝政之外攝政

騎馬時事也。此事不見。仍不令渡。

裝束。保安四年新制。不令着打衣。

馬副十具。

卷纓冠。綏。紺布袴。褐衣袴。

褐衣身尻六尺五寸。同前四尺三寸。袖長

一尺六寸。袖端着付。濃平組緒。袴長三尺五寸。渡大

路之時。夾褐衣尻。

濃蘇芳張相。面裏共強張。長四尺五寸。青張單衣。寸法同合

袴。布帶。夏扇。藁脛巾。以紫色革。爲結緒。藁沓。唐

笠。

手振十二具。

卷纓冠。綏。紫色布褐衣。身尻七尺。同前四尺五寸。青張絹

單下重。稱三柳色。尻七尺。前四尺五寸。袖四尺五寸。

褐衣身一幅。下襲身二幅也。渡大路之

時。褐衣下襲等裾引庭上。

青末濃布單袴。長三尺。寸法同。黃色張相。馬副相。同

色張單衣。寸法同。合袴。布帶。革脛巾。以青色革。爲結緒。

夏扇等。藁沓。藁袋。在唐鞍具。唐笠。

攝政騎馬時。厩舍人着褐冠。自餘公卿



舍人裝束。舊記等無所見。仍問人之處。天仁保安例。公卿舍人着布衣之由。多被答。但節下舍人着褐冠。自餘着布衣也。後日宗輔卿談云。院御厩舍人磯次曰。攝政騎馬時。舍人着褐冠。諸卿舍人皆布衣。磯次古老者云々。

御厩舍人一具。

赤色布狩襖袴。濃色布。欸冬色張祖一領。淺黃

目結帷。合袴。烏帽子。帶。夏扇。藁沓。唐笠。

居飼一具。

退紅色水干。黑布襖袴。布襖衣。白袴。布下

袴。烏帽子。藁沓。唐笠。

同云。節下少納言。先例雖乘和鞍。有銀面尾

袋。又相具取物六。少納言公章依家貧。無銀

面尾袋。又無取物。今度師教。又依貧家。逐

公章之例。

同云。節下少外記中原安俊。權少外記清原景

兼。兩外記着柚葉色祖。深沓。

久壽二重方記云。節下大臣。

併通。內府。于時。左大將。

番長秦重

種。近衛佐伯貞弘。張御馬綱。

蠻繪。平。胡。近衛七

人。各着。蠻繪。平。胡。侍史行。

次馬副十人。褐衣如。平胡。常。

手振

十二人。

麴塵。褐衣。朽葉末。濃袴。取物如。常。

同信範記云。

節下內大臣。

左大將。

唐鞍。飭馬。馬副。手振。取物。已上如。隨身番

長二人。着。蠻繪袍。躑躅下重。濃半臂。打蘇。芳末。濃袴。藁腰巾。繪尻鞆。平胡。六。府生

供奉本陣。而猶在馬後。近衛六人。裝束。同前。

少納言成隆朝臣。

和鞍。銀面。尾袋。杏葉。取物四人。少納言。言侍。

平治元。節下內大臣。

公教。左大將。

少納言。倭鞍。不具。少納言侍。

同兼光記云。唐鞍如常。府生着遠山摺袍。

仁安元帥記云。節下右大臣。兼左大將。經宗公。府生在馬

前。弓箭不被具。

實能皆具。弓箭。

仁安三記云。左大臣。節下。手振不具半臂。是有

所見云々。以吉上爲手振。其時着市比。是左府談給也。

同賴業記云。節下左大臣。馬副。二人取口。十人在後。外記

二人相從。上臈左下臈右。當馬副第三程。馬副後有手振十二

人。左右相並。節下少納言泰經。螺鈿劔。魚袋。

同帥記云。節下左大臣。馬副如例十人。手振十二人。無雜色。

壽永二信範記云。節下內大臣。宗盛。飭馬。隨身

八人。番長二人。近衛六人。左右各四人。鑾繪以下如殿下御隨身。番長二人爲臈

馬副十人。手振十二人。實定記云。麴塵褐。

維房記云。少納言有家。不駕飭馬。不具取物。

元曆元經房記云。節下內大臣。左大將實定。

建久九良業記云。節下少納言重定。螺鈿劔。魚袋。

同忠良卿記云。節下右大將。大納言。良器。右大臣輕服。內

大臣籠居也。左大將馬。銀面并尾袋撤之。令

持馬副番長武守。臈一座敦尙張馬口。弓令

持從者等。件從者皆列其傍。右大將同之。但銀面不撤。張口事同前。但以兩人之弓令

持居飼一人。件大將騎馬之時。每度如件。

同成定記云。右大將今日令節下給。冠垂纓。帶。飭劔。紫綵。

平緒。有文帶。付魚袋。不能具弓箭。隨身近衛二人假召。加臈。番長敦近。近衛敦秀。鑾繪袍不綵色。柳半臂。下重。青末濃狩袴。肅慎羽。懸緒。繪尻鞆如常。路次引移馬。

建曆元年十月廿二日宮槐記云。內大臣爲節

下。裝束如常。躑躅下重。紫綵平緒。先々多如。不依。

年齒。高官人。院御馬。御厩舍人。二藍以黃多用之歟。乘黑毛馬。一糸縫。尾長鳥丸。持鞭。手振

居飼等。馬副十人。手振十二人。取物如例。手

振蘇芳褐衣。稱紫褐。是歟。蘇芳末濃袴。半比可尋。唐鞍。

借送。雲珠。頸總。手振持。不具雜色。

建曆元年十月廿二日長兼記云。

節下內大臣。

馬副十人。手振十二人。

蘇芳褐衣。如例。舍人居

飼等如例。舍人平禮。有縫物。

還御之時。馬副一人。上臈。持勅。祿也。

建曆元年十月廿日長兼記云。左府被尋仰云。

節下大臣還御時。令持祿於馬副之由見吉記。馬副之中最前歟最末歟。又被仰云。手振令持銀面者。第三者可持之歟。雲珠頸總第一二持之故也。予申云。勅祿令馬副上臈可持之。古儀。朝覲行幸還御。公卿皆纏頭騎馬也。御襖嚴重尤異他。宇治左府依好古儀給令持歟。此作法不可限節下。公卿各可令持也。然而省略歟。雖節下省略亦不可難。但可令持者。道理之所判。馬副上臈可持也。銀面必可被飾歟。但馬沛艾之時。又令取之。先例歟。第一者可取銀面歟。是皆以今案令計候。

建曆二年十月廿八日顯俊卿記云。

節下大臣。貞輔 左大臣。

瀧口十人。御馬副。瀧口調度懸十人。帶弓

箭在後。

貞應元年十月廿三日外記師弘記云。

少納言惟忠。節下螺鈿 魚袋。  
少外記良元。

師守。已上各着 柚葉色袍。

仁治三年十月廿一日公光卿記云。

節下。

右大臣。實錄 番長二人左奏額種。右同兼躬。張口。近衛六人在後。懸有彩色。馬副十人。瀧口在隨身後。手振十二人。瀧口調度懸十人。在手振口。鞍號鈴。前關白被借進云々。

仁治三年十月廿一日師躬記云。

節下。

右大臣。假隨身二人。前行舍人。二臺山吹衣。居飼馬副舍人。肅不黃衣袴。賴峯兼躬二人。懸。張口。其外六人。馬副十人。手振十二人。

寬元四年十月廿四日陽龍記云。

節下。

右大臣。實平 筋太刀。紫綵平緒。

馬。白栗毛鞍。鞍累代之重寶也。鞍有錦水引差繩。蘇芳綵唐綾。有同末濃總。

馬副二人。瀧口三臈。依二代。爲櫛。代例一申請云々。



舍人二人。烏帽子尻。不付口。

次舍人居飼。相竝傍路北。

次馬副八人。瀧口還御之時二人取三松明一在レ前。

次隨身八人。左番長下野武利。右番長同武仲。已下左右。蠻繪袍以下如レ例。

次手振十二人。麴塵褐衣。每事如レ例。但豹皮懸棹持レ之。還御之時不三撤取。

次瀧口調度懸十人。槿上下如レ常。

寛元四年十月廿四日陽龍記云。

少外記兼左衛門尉中原爲貞。垂纓。袖葉色闕腋袍。帶劔。付三絃袋。

雖爲三衛府准三入藏人之由師元稱レ之云々。今度被三新任之處。無三所望者三歟。愚案。八藏人更不三足三准據。只白地辭三衛府可レ宜也。

權少外記兼右衛門尉中原範基。同前。

文應元年十月廿一日經光記云。

節下左大臣。公相用口綵平緒。

馬副八人。手振十二人。相具舍人居飼。其

外無雜色。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

節下左大臣。馬副以下如レ例。

文永十一年十月廿二日山御記云。

節下大臣。師忠被レ着三蒲萄染下襲。

文永十一年十月廿二日花内記云。

節下右大臣。

被用三蒲萄染下重。攝政密被談云。治曆京極大殿被用三蒲萄染下襲。彼者。面ハ白也。

普通躑躅下重也。仁治今大閣尋治曆例。

殊經沙汰被着。其時モ面ハ白也。故光明

峯寺入道攝政者。面白天裏蘇芳打ナル下

重ヲバ。躑躅。蒲萄染。蘇芳ト天。皆同躑異

名ニシ天着也。アヤマリ天蘇芳ヲ着セン

ト思天。蘇芳ハナヤカニ染タルハ劣說也。

家口傳如此云々。今度右府面蘇芳。頗不

審事也。

延慶二年十月廿一日御記云。抑節下右大臣。蒲

萄染下重着之。自餘裝束如恒歟。

文保二年十月廿七日按察入道記云。既出御東門之由有其聞。仍有御參。御裝束躑躅打下重。有文巡方帶。金魚袋。紺地平緒。如法飭劍。是鷹司前關白物也。寬元節下所用物云云。強無相違。然而依佳例令帶給。前駟六人。雜色長不被召具。如木雜色無之。小雜色少々前行。殿上人右中將公綱朝臣。關服袍。卷纓。懸綬。螺鈿野劍。如常。弓。平胡錄。不帶之。令持隨身。三人召具之。褐衣。朽葉袴。狩胡錄。葉腰巾。候御共。御馬并舍人居飼。馬副八人。手振十人。此內取物。

文保二年十月廿七日按察入道殿記云。

次節下大臣。

先白張小雜色三四人。行列之外。副路傍先行。不定其數。自然之儀歟。或又爲走使用心歟。乘馬銀面始置之。馬頻有馱却氣。仍於途中取之。馬副下臚持之。

次上臚馬副二人張馬口。舍人二人取馬口。各香白裏狩衣。無單袴。其外左衛門尉爲

清。花田狩衣。無單袴。副御馬傍。唐鞍有傾奇之恐之上。老躰以後。自然依有恐。被召具云々。馬尻近左方□舍人□原氏房。平禮。花田狩衣。無裏山吹衣。黃單。御鞭持之。但於路次被召之。馬有停滯之氣之故云々。爲清取次進之。御馬右方居飼龜清。裝束如例。紗鞍覆懸之。

次馬副六人。第三四□各二行。舍人居飼ヨリ

ハ駟步也。

文保二年十月廿二日按察入道殿記云。

次少納言信雅朝臣。付花童雜色召具之。抑又非雜色歟。白張。紅衣。少納言侍一人相加之。冠白張。步行。馬副二人。手振不召具之。執物先々若有歟。可勘知。

正慶元年十月廿八日御記云。

節下左大臣。

鞆在水引。赤地。錦。長杏葉。下無曳。非如總鞆。

馬副八人。手振八人。舍人居飼侍二人。在馬左右。節下外記大略在馬尻。行列散々

之間。委不見分。

次第司。

寬治記云。御前次第使。同前。長官。

右衛門督。不負。胡錄。

御後長官。

右兵衛督。同前。

同大府記云。

長官。

御前。右衛門督俊明卿。御後。右兵衛督俊實卿。

飭馬。不帶弓箭。垂

纓。飭劍。馬副各八人。手振十人。

其內四人取物。隨

身六人。

蠻繪。肅慎羽。但右衛依帶。大理。召加火長四人。

次官。

御前。式部少輔在良。御後。兵部少輔隆兼。

飭馬。馬副張左右口。

闕腋袍。馬副。手振。各四人。

判官。柚葉色闕腋袍。靴。

主典。同之。以上帶劍。

主禮。黃袍。虎皮布行騰。塗沓。垂纓。

同時範記云。

前後次第司長官。

御前。右衛門督俊明卿。御後。右兵衛督俊實卿。

以上垂纓冠。不帶弓箭。帶劍。飭劍。馬副八

人。手振六人。執物四人。

大略同上。

隨身四人。

裝束同上。用。但右兵衛督依爲檢非違使別肅慎羽胡錄。當有火長四人。無看督長。

次官。

御前。式部少輔在良。御後。兵部少輔隆兼。

着緋平絹闕腋袍。帶劍。帶劍。假被下。唐鞍。銀面。宣旨。

尾袋。杏葉等。取物四人。

同。大。臣。

御前判官。

式部丞菅原淳中。中務丞藤原正景。

主典。

式部錄。中務錄。兵部丞。

御後判官。

兵部丞。兵部錄。民部錄。

主典。

兵部錄。民部錄。

以上着深綠闕腋袍。帶劍。帶劍。假有。倭鞍。結。唐

尾。付杏葉。取物二人。笏。胡。簪。

主禮史生。

着黃染袍。垂纓。行騰。畫如虎文。

天仁元大記云。

次第司。

御前。

長官權中納言宗通卿。

手振取物十二人。相竝扈從。帶劍。唐鞍如常。



次官式部少輔大江有元。緋闕腋袍。帶劔。着靴。騎馬。

判官中務丞藤原安賴。有陪從二人。着二。柚葉色闕腋袍。

藤原知仲。帶劔。柚葉色。

主典式部錄中原實行。從二人。

中務錄清原成行。從二人。

主禮二人。中務史生。着黃袍。虎皮繪行騰。布帶。

御後。

長官參議右兵衛督能俊卿。陪從十人。隨身等可准之。

次官兵部少輔知信。從二人。裝束同有元。

判官兵部丞藤忠貞。從二人。

民部丞藤忠理。從二人。

主典兵部錄惟宗友景。從一人。

民部錄大江行俊。從二人。

主禮。

天仁元次第司記文云。

次第司長官。馬副六人。手振十人。有取物。

乘飭馬。

次官。緋闕腋表衣。柳打半臂下襲。螺鈿劔。乘

唐鞍。銀面。頸總。尾。袋。杏葉。雲珠。馬副四人。手振四人。胡持。

簾。鞭。笏。笏。簪。

判官。深綠闕腋袍。躑躅半比。着靴。黑造劔。

倭鞍。結唐尾。無他飭馬。從二人。白布袴。布帶。胡床。

笏。胡床。

主典。同判官等。

主禮。黃闕腋表衣。垂纓。布帶。深沓。布唐形

行騰。

天仁元江記云。

次第司長官按察中納言。手振十二人。馬副六人。唐鞍。他上卿又同。

次官式部少輔大江有元。平絹緋闕腋袍。唐鞍。飭劔。馬副四人。手振四人。

判官中務丞。柚葉色闕腋袍。黑作細劔。無文平緒。馬副二人。着二褐衣。取物二人。着紫褐。他判官准。

官准。

主典式部錄。柚葉色。主禮式部史生。各一人。黃平。

絹。

次第司長官左兵衛督能俊卿。馬副四人。手振四人。隨身六人。師子。

變繪薄色下重。黃朽葉鏹形尻翰。鷄羽。

次官。

判官。

主典。

保安師元記云。

前後次第司。

次官式部權少輔藤原資光。兵部少輔平知信等。平絹緋闕腋袍。柳色下襲。蒔木打半臂。巡方。魚袋。螺鈿劔。平緒。唐鞍。馬副四人。手振六人。

判官主典等。柚葉色闕腋袍。柳色下襲。蒔木打半臂。巡方。黑作劔。綠螺鈿楚鞆。取物二人。

主禮史生等。着絹闕腋黃袍。深沓。布帶。行騰。

布也。畫二虎皮形。

同忠教記云。

御前長官別當實行。右衛門督。

馬副六人。隨身六人。朽葉袴。火長六人。看督。

長六人。手振十人。麤麁褐。黃朽葉下襲。青末濃袴。

御後長官師時。參議右中將。

馬副六人。隨身六人。青柳下重。朽葉袴。手振。青半臂。青下襲。青末濃下袴。

保安四師遠記云。

前後次第司。

次官式部權少輔資光。兵部少輔知信。平絹緋闕腋袍。柳青下襲。蒔木打半比。巡方。魚袋。螺鈿。平緒。唐鞍。馬副四人。手振六人。

判官主典等。柚葉色闕腋袍。柳色下重。蒔木打半比。巡方。黑作劔。綠螺鈿楚鞆。取物二人。

主禮史生等。着絹闕腋黃袍。深沓。布帶。行騰。

布。畫二虎皮形。

保安四外記記云。

前後次第司。

次官式部權少輔資光。兵部少輔知信。其裝。

束。平絹緋闕腋袍。柳打下重。萌木打半比。  
縵着。巡方。魚袋。文平緒。螺鈿劔。唐鞍。銀  
面。杏葉。頸總。髮袋。尾袋。雲珠。馬副四人。  
裝束如例。手振四人。胡床。笏筥。豹。毯。裝  
束如例。

判官。闕腋青絹袍。柳下重。縵着。青打半比。巡  
方。黑作劔。平緒。和鞍。結。唐尾。手振二人。  
胡床。笏筥。黑褐。白袴。布帶。市比脛巾。  
主典。同判官。但主典已上着靴。

主禮史生。黃染絹闕腋袍。布帶。深沓。虎皮行  
膝。黃布。以墨畫文。

保安四次記云。

次第司長官。馬副六人。手振八人。有取物。乘飭  
馬。

次官。緋闕腋表衣。柳打半比。下襲。螺鈿劔。乘

唐鞍。飭馬。銀面。頸總。尾袋。杏葉。雲珠。馬副四人。手振四人。持胡床。笏筥。豹。毯。

判官。深綠闕腋表衣。柳打半比。下襲。黑造劔。

着靴。緣螺鈿鞍。結。唐尾。手振二人。赤色褐袴。布帶。胡床。笏筥。市比脛巾。

主典。同深綠闕腋表衣。柳打半比。下襲。黑造  
劔。着靴。緣螺鈿鞍。結。唐毛。手振二人。  
褐。白布袴。市比脛巾。胡床。笏筥。皆巡方也。

主禮。黃闕腋表衣。卷纓。今度垂纓也。  
保安四永昌記云。

次第司長官。御前右衛門督。實行。不帶弓箭。  
火長隨身四人。看督長八人。手振十人。蠻  
繪隨身六人。其裝束如例。御後皇后宮權  
大夫。師時。除火長看督長之外同前。馬副  
四人。

前後次第司次官。御前式部權少輔資光。御後  
兵部少輔知信者。着緋平絹闕腋袍。倭鞍。  
銀面。尾袋。杏葉。

判官。御前式部丞有隆。中務丞□隆。御後民  
部丞公長。廣兼。各柚葉色闕腋袍。着靴。



主典。御前式部錄倫俊。中務錄。御後

民部錄。已上帶劔。

主禮。黃袍。虎皮布行騰。垂纓。深沓。

保安四朝記云。

次第使。

御前右衛門督實行卿。

垂纓。不帶弓箭飭劔。馬副六人。手振十人。依爲別當。看督長八人。火長八人。隨身

六人。蠻繪。

御後右宰相中將師時朝臣。

每事假御前。但馬副。手振。蠻繪隨身也。

次官。唐鞍。銀面。尾袋。杏葉。緋平絹闕腋袍。

判官。柚葉色闕腋袍。靴。

主典。同之。已上帶劔。

主禮。黃袍。虎皮布行騰。深沓。垂纓。

保安四御前次記云。

次官。闕腋緋平絹袍。青色打半比。柳色下重。

巡方。魚袋。帶劔。螺鈿。着靴。無飭馬。取物

四人。豹。毯。笏宮。胡床。褐衣。市比。脛巾。帶。

判官。主典。深綠闕腋絹。青色打下重。黑造劔。

倭鞍。結唐尾。着靴。取物二人。笏宮。胡床。黑褐。白袴。

布帶。市比。脛巾。

主禮史生。黃染闕腋絹袍。青半比。下重。垂纓。

布帶。虎皮敎行騰。深沓。

康治元信範記云。

前後次第司長官。

御前左衛門督。公教。

御後左宰相中將。季盛。

已上垂纓冠。不帶弓箭。〔箭〕

同範家記云。次第司次官。式部少輔茂明。着緋袍。如大外

記袍。次官兵部少輔忠能。着紅梅袍。非穩便色也。

同或記。

次第司。

御前長官。權中納言左衛門督藤公教卿。飭馬。馬副。

取口。不帶<sub>二</sub>胡籙<sub>一</sub>。馬副十人。手振六人。從四人。手振。火長。

次官式部少輔藤茂明。取口。馬副

御後長官參議左中將季盛卿。取口。馬副

次官兵部少輔忠能。飭馬。馬副取口。袍色如紅梅。不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>案內<sub>一</sub>歟。

同記云。

諸司裝束。

次第司長官。公卿不<sub>レ</sub>帶<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>。

次官。無文緋袍闕腋。帶劔。半比。下重如<sub>レ</sub>常。飭馬同上。

判官主典。柚葉色闕腋袍。帶劔。和鞍。楚鞅。唐尾。但式部丞付<sub>二</sub>香葉<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>尋<sub>二</sub>先例<sub>一</sub>。

主禮。黃染闕腋袍。布帶。虎皮行騰。黃細霽之。

康治元宇槐記云。

前後次第司長官。御前中納言別當左衛門督公教。御後參議左近中將季成。

飭劔。魚袋。不帶<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>。馬副八人。手振六

人。之中取物四人。隨身四人。裝束同<sub>二</sub>衛府公卿<sub>一</sub>。兩長官手振。

着<sub>二</sub>半臂<sub>一</sub>歟。

後日按察使實行卿云。故按察大納言實季。

奉<sub>二</sub>仕次第司<sub>一</sub>之時。手振着<sub>二</sub>半比<sub>一</sub>。今度逐<sub>二</sub>彼

例也。

久壽二重方記云。

次第司。

御前長官左兵衛督忠雅卿。皇範記云垂綬帶劔不帶<sub>二</sub>胡籙<sub>一</sub>。別當<sub>二</sub>權中納言<sub>一</sub>。

馬副六人。蠻繪。隨身六人。帶<sub>二</sub>平胡六<sub>一</sub>。看督長六人。

火長六人。手振十二人。取物如<sub>レ</sub>常。豹在<sub>レ</sub>南。雜色二

人。雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>後列<sub>二</sub>路傍<sub>一</sub>。

御後長官右兵衛督雅通卿。皇範記云同御前參議。

其儀同<sub>二</sub>別當<sub>一</sub>。但蠻繪隨身。帶<sub>二</sub>四切平胡六<sub>一</sub>。

仁安元兼光記云。

御前長官權中納言右衛門督重盛。唐鞍。不<sub>レ</sub>帶<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>。馬副隨

身手振等如<sub>レ</sub>常。

次第司御前次官。着<sub>二</sub>緋袍<sub>一</sub>。帶<sub>二</sub>唐鞍<sub>一</sub>。

御後次官。緋袍如<sub>レ</sub>常。

同三賴業記云。

御前次第司。

長官權中納言兼右衛門督時忠卿。飭劔。魚袋。帶<sub>二</sub>

弓箭。

次官式部少輔業實。緋闕腋袍。其色薄紅梅也。

判官主典。柚葉色闕腋袍。黑作劍。着靴。

壽永信範記云。實定公記同之。

次第司長官右衛門督實家。廷尉別當。飭馬。馬副(八人)。手振(十人)。蠻繪隨身(六人)。火長(六人)。看督長(六人)。追前。

同經房記云。

次第司次官式部少輔元輔。着緋平絹袍。帶劍。駕唐鞍。馬副六人。隨身六人。看督長(六人)。追前。

御後長官參議右兵衛督光能。馬副六人。隨身六人。看督長(六人)。追前。

元曆元外記記云。

前後次第司長官。手振。蘇芳褐也。

同經房記云。

御前長官權中納言兼右衛門督家通卿。蠻繪隨身

建久九良業記云。裝束司長官權中納言光雅卿。六人。火長六人。手振馬副如例。不具。看督長一。

次官左中弁宗隆朝臣。右大史重元。少內記行

景以下。已上位袍。長官已下淺沓。

同記云。御前次第司長官權中納言左衛門督通

資卿。不帶弓箭。次官式部少輔菅原爲長。緋平絹闕腋袍。螺

細劍。魚袋。

同成定記云。御前次第司長官別當。不帶弓箭。

建曆元年十月廿二日長兼記云。

次第司長官。

御前別當實宣卿。

馬副六人。一部。蠻繪。看督火長各六人。手振十二

人。麴塵。看督長等追前如常。

御後宰相中將有雅卿。

馬副四人。一部。蠻繪。手振等如例。

建曆元年十月廿二日宮槐記云。

次第司御前長官實宣。別當。

馬副六人。手振八人。隨身六人。二人沓。四人藁沓。如何。

火長六人。看督長六人。

建曆元年十月廿二日宮槐記云。

御後長官有雅。



撤取物。手振懸尻。各奉炬。

相國云。臨時之時略取物例也云々。有雅之所爲叶彼定之趣也。若諷諫歟。

仁治三年十月廿一日公光卿記云。

御前長官權中納言兼左衛門督源顯親卿。

馬副六人。隨身六人。有彩色也。手振六人。

仁治三年十月廿一日庚午公光卿記云。予爲御後次第司長官。仍未明勤行粧束。

裝束。

冠。垂纓。袍。半臂。略之。下襲。表袴。藤丸相文。紅。單衣。同。大口。襪。飭劔。如常。平緒。紺地。

帶。有文。魚袋。笏。扇。靴。花仙用青地。依大理也。

馬。黑鹿毛。唐鞍。借用前內大臣。橋。黑地摺貝如恒。表數如常。表腹帶。袖付。一筋。

鐙。力革。轡。左蹕。鞞。杏葉。鞞左右各五枚。胸五枚。面懸左右各五枚。

合廿五枚。銀面。髮袋。尾袋。手綱。蘇芳紵。如恒。差繩。如

常。打鞍覆。同。鞞。同。雲珠。手振持之。頸總。同。

馬副六人。同諸大夫侍。

員數事。西宮抄云。長官馬副。納言六人。參

議四人云々。而度々例。參議爲長官。雖有

八人之輩。未聞四人之例。仍申合淨土寺

殿之處。可爲六人之由。被仰云々。

裝束如常。

看督長四人。左豐守。近顯。右國成。未。

承保。按察殿爲參議。令具四人給。仍今

度追彼例。

冠。老懸。退紅狩衣。白襖袴。白相。白單衣。

下袴。絹。絹帶。布帶。菜脛巾。表帶二筋。白

羽矢二筋。笠。

已上調給也。

鞞。在藍革後緒。兼日召。藍革裝束。鼠毛尻翰。寄加修理給也。同加修理給也。

火長四人。友弘。友安。宗時。友久。

冠。老懸。桃花色狩衣。白襖袴。白相。同帷

下袴。布。絹帶。布帶。革脛巾。笠。

已上調給也。

劔。藍革裝束。鹿皮尻鞵。兼日召寄加修理給也。白羽胡錄。如常。當日朝給也。如三

先赤弓。

隨身六人。衛府爲三長官一者。必召加二人。

冠。細燕尾。老懸。蠻繪袍。熊文。不レ加彩。朽葉末濃袴。青

打半比。同下重。濃打衣。在同。合袴。布帶。

劔。藍革裝束。左筆尻鞵。虎皮文。平胡錄。肅慎羽。藍革裝束。三竝差レ之。依略儀也。青緞丸

緒。弓。卷。白樺。檀紙也。并紺組。懸緒。青打。有文。葉脛巾。扇。葉

白。沓。笠。

手振八人。依二家例一用二家中雜人。侍臣人也。

納言六人。三木八人也。

冠卷纓。用二家中雜人一之時如レ此。吉上之時細纓也。老懸。褐衣。麤麁結。綠黃練。

狩袴。青末濃。半比。青朽葉。下重。同。相。炎色絲一筋差レ之。依二大理一

也。單衣。同。下袴。布帶。革脛巾。藁沓。

取物。

笏宮。鞭宮。豹。毯代。

舍人二人。

一人。布裏香染上。下同樣上下。下白袒。一人。白袒。

予駕毛車。

牛童車副退紅。火長如常。

取物持樣事。

頸總。不レ懸木。以右手取。項緒。以左手取。中程。雲珠。以左右手持之。

各鞍具也。不具手振之人。馬副可持

之。笏宮。如レ持。右手橫持也。外方ナ長ク懸レ之。鞭宮。同。豹。懸左肩。以尾方爲後。懸杖。以左

次還御。予供奉御後。

火長四人。看督長四人。隨身四人。取松明

前行。馬副二人。如畫儀。四人取松明在

後。手振不取松明。挿尻在後。

仁治三年十月廿一日師朝記云。

次第司判官。

中務丞藤原盛宣。綠袍。腰懸帶。劔。馬副二人。

仁治三年十月廿一日師朝記云。

次第司主典。

中務錄紀維宗。

楚鞆。杏葉。綠袍。垂纓。結唐尾。童一人。

主禮。

中務史生二人。

二行。騎馬。冠卷纓。黃袍。

仁治三年十月廿一日師朝記云。

次第司次官。

式部少輔藤原茂範。

赤袍。平絹。唐鞍。馬。鹿毛。銀面。尾袋。帶劔。舍人。萌木。薄色。

馬副四人。張口。手振四人。有取物。省掌二人。黃衣。

次第司判官。

式部少丞惟宗行氏。

楚鞆。白杏葉。省掌二人。

次第司主典。

式部錄和氣助次。

青袍。深沓。巡方。楚鞆。童一人。省掌一人。

次第司長官。

權中納言源顯親。

隨身六人。手振六人。

仁治三年十月廿一日師朝記云。

次第司長官。

參議右衛門督藤原公光。

馬。鹿毛。唐鞍。銀面如。レ恒。馬副六人。三人張口。

蠻繪隨身六人。看督長四人。火長四人。手振八人。ヨリ取物。

次官。

兵部權少輔菅原在氏。

帶劔。唐鞍。如レ例。赤衣。馬副四人。手振四人。取物。

寬元四年十月廿四日師元記云。

今度御前長官行粧儀。

舍人二人。

二藍上下。黃衣。張帷賜之。

馬副六人。如レ恒。

手振十人。

召具本府吉上。仍冠細纓。蘇芳褐袍。青下

袴。下重。

綾。無レ裏。半比。青。無レ裏。下袴。絹合。布帶。如レ例。葉脛巾。同。藁沓。同。張帷。給之。

隨身六人。

蠻繪。

文師子丸。不ニ彩色。

蘇芳下濃袴。濃打下重。同半

比下袴。絹合袴。葉脛巾。如レ例。淺沓。同。布帶。

加例。懸緒。無文。紅打。張帷。給之。



手振十人。內左右一二不取之。

右三。雲珠。右四。笏筥。右五。豹皮。

左三。頸纒。左四。鞭筥。左五。毯。

寬元四年十月廿四日陽龍記云。

次第司。

御前長官權中納言兼左衛門督言藤卿。

飭劍。紺地平緒。不帶三弓箭。

馬。鹿毛。馬副二人。張口。舍人二人。二藍黃衣。付口。

次馬副四人。裝束如例。

次手振十人。依爲本府吉上。細纒。褐衣。青末濃袴。青朽葉半臂。下重。無裏。袖。自餘如常。左近左衛門左兵衛用。蘇芳末濃袴。躰躰半比下重。而令着右近陣。不可然歟。左右一二無取物。右三持雲珠。左三持頸纒。右四持笏筥。左四持鞭筥。右五懸豹皮於肩。左五持毯代。抑雲珠頸纒。左右一持之。彼例也。今所爲之違失也。還御之時。撤取物。不取松明。懸裾。已上相國諷諫云々。

次隨身六人。師子蠻繪袍。無彩色。蘇芳末濃袴。躰躰。半比下重。濃打衣。紅打無文懸緒。葵脛巾。草襪。沓如例。劔着左筆尻鞘。弓卷。樺并紺組。取柄卷。青地錦。平胡六。鷲羽。青綵丸緒。抑隨身行五。馬副前後。家々說不同也。而手振以後令列之例無所見。是又相國教命云。還御之時二合。松明

在

寬元四年十月廿四日陽龍記云。

御後長官三木右衛門督兼中宮權大夫通成。

馬。黑。馬副二人。張口。舍人二人。付口。

次馬副四人。雖三木具六人。先例也。

隨身六人。熊蠻繪袍。青末濃袴。平胡籙。肅慎羽。

次看督長六人。

次火長四人。已上裝束如恒。

次手振八人。雖爲吉上。番長卷纒。堀河大納言諷取物如恒歟。可尋之。諫云。麴塵褐衣。青末濃袴。不着袖。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

次第司次官。

式部權少輔菅原在嗣。

着平絹朱紱帶劔。唐鞍。

馬副四人。手振如例。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

次第司長官。

權中納言源基具。左衛門督。

馬副六人。蠻繪隨身六人。手振十二人。

相具舍人居飼等。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

次第司長官。

參議右衛門督藤原隆顯。別當。

馬副四人。蠻繪隨身。看督長。火長。手振

如例。不具雜色。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

次第司次官。

兵部少輔平信繼。

闕腋平絹朱紱。

馬副張口。手振如例。

永仁六年十月廿五日經親卿記云。下官勤仕御

後。

次第司長官。

裝束如恒。席劔。平緒是御後長官御前次官

以下。白地可帶劔之由職事宣下。節下左府。今朝於官司奉行之。

○同 ○舍人 ○同 ○雲珠 ○鞭 ○豹皮

○馬副 ○同 ○馬副 ○持笏 ○頸總 ○笏 ○毯代

僮僕行五。如建久源相公所爲。無慥記。而馬

副員數。如西宮者。御後長官四人分明也。近

例如此。副府又如此。可爲四人之由。兼申

合內府之處。被相計也。手振六人。又爲家

例。取物樣。雖付雲珠頸總。令持馬副。令

持手振。先例兩樣也。而手振空手。又近詮

賀茂祭使節之時。馬副空手。手振持雲珠頸

總例也。用唐鞍之日同前也。其上前々長官

兼衛府之間。具隨身僮僕在數。馬副之外

今度無人。仍手振空手。無由令持也。御前

次第司長官。令持手振也。後日相尋。予所

存無相違。兼日彼卿申合內府云。不着半

比例也。馬副如例。雜色不召具例也。而下馬之所。近召仕之者一兩具之。在馬傍。唐鞍申下近衛殿。女騎鞍兼申出。加修理之。取物具同前。豹皮借物他所。

予同參束帶。

躑躅打下襲。有文帶。巡方。金魚袋。如法飭

劍。手木御取用持之。靈後有伏組。

青綵文蝶平緒。雖衛府

不卷纓。不懸綬。次第司長官也。

文保二年十月按察入道記。

御前長官。

隨身六人。本式四人之外召加二人。次第

司長官法也。細纓冠。綬。蠻繪袍。文師子丸。依

也。濃半比。令躑躅裏許一倍也。依左也。無文懸緒。依右蘇

芳末濃袴。葉脰巾。沓。鰐繪尻鞘劍。黑漆平

胡籙。近衛關白物也。鷲羽箭指之。已上作法依左也。紙卷弓。

左右絃卷絲。其外式已無從。小雜色少々在

前。布衣上結。諸大夫二人侍四人在共。馬

從。御厩舍人。居飼。馬副六人。手振八人。執物如先。

廿六日記。

又馬二匹。大臣殿御分。予分。唐鞍二口。被留

大炊御門第。明日拂曉飭整。御厩案主。左衛門尉藤爲

清。可參由被仰置了。大臣殿御分。近衛前關

白被借進。一雲珠也。及鼻。唐鞍。銀面。尾袋。

髮袋。杏葉。地敷錦。雲珠。頸總。蒔繪鞭。於鷹

司前關白物也。是等如例。紗鞍覆。此文同此文必雖

非唐鞍具物。依異恨時々用之。去延慶御

禊行幸時。亞相爲大弁宰相中將供奉時。被

用此鞍覆。強雖非本儀。今度又被執物具。

笏宮。鞭宮。豹皮。毯代。手振料藥袋。皆相具。

鞍自近衛借進之者。予分事。院御馬五栗

毛。御厩舍人居飼同被副也。鞍。大炊御門物。

鞞。杏葉。無地數錦。雲珠。頸總。又自他仁取加。蒔

繪鞭。打鞍覆。執物。笏宮。毯代等。花山院物



也。豹皮。自院被下之。以上如此。

先之。予自同門內騎馬打出。先行徐到。二

條邊。行遂小雜色三四人。先行副傍。非行五。

凡此行幸。不召具雜色。者本儀也。仍如。如本雜色。無

其儀。不分明難用。或副雜人。或內々使之時。非無

其用。仍上四人。路東仁居給也。先自身。次馬副上。隨二人張口。

副舍人二人。赤色一倍。次舍人。居飼。舍人立。右

舍人也。鞭可持之。而路間稱有勞事。令持下人。御

棧敷前舍人自身持之。內々由請之。強不叱呵。裝束。平

禮。崩木狩衣。金銅裏。杉木山巢。又濃山吹衣。紅單。亂緒。

居飼立。左尻方。裝束如例。打鞍覆。自左肩懸。右脇。天立

如常。次馬副四人二行。自舍人居飼。ハヒロゴリ。天立

レ例。制符以後不著濃打衣。源氏。次隨身六人。本式

輩着。查。他家不。然。都合六人也。各二行。前後以。一丈。爲

依。長官。召。加。二人。爲。六人。其裝束見。左。間。左右。一丈五尺許。皆如此。次手振八人二

行。同隨身。手振裝束。依。地。濕。手振皆開。付。之。到。二

之上。不。可。有。三。下。隨。四人。捧。執。物。豹。皮。懸。二

殊。晴。所。之。口。也。文保二年十月廿七日御前次第司注文云。

次第司次官式郭少輔。

赤色闕腋袍。青半比。帶劔。靴。唐鞍。付。二。赤

珠。頭。舍人一人。馬副四人。二人張。取物四人。

總。裝束同前。旁。宮。胡。下。部。二人。卷。櫻。袍。

床。毯。代。虎。皮。也。正慶元年十月廿八日御記云。

次第司長官。權中納言源通冬卿。左衛門督。

垂。櫻。飭。劔。魚。袋。隨身六人。蠻。繪。火。長。四

人。看。督。長。六人。馬。副。六人。手。振。六人。此

四人。舍人。居飼。依。次。第。司。不。帶。弓。箭。

取。物。次第司次官。式部權少輔菅原長繼。

唐鞍。馬副二人。手振四人。參議左兵衛督藤原長光。

次第司長官。垂。櫻。飭。劔。付。二。魚

袋。依。次。第。司。不。帶。弓。箭。

隨身四人。蠻。繪。師。子。丸。驚。羽。平

胡。六。鰐。繪。尻。鞆。劔。先々大略六人也。四人又有例。今度

次第司次官式郭少輔。

次第司次官式郭少輔。

次第司次官式郭少輔。

如此云々。

馬副四人。手振六人。取物四人。

同次官。

兵部權少輔藤原朝任。

和鞍。杏葉。

御禊行幸服飾部類第三公卿

公卿。

寬治元十廿二記云。未申剋計行幸。大略如例。

上達部。唐鞍。魚袋。有文帶。衛府弓箭。

寬治大府記云。殿下御裝束如常。但被用隱文巡方。飭劍。魚袋等。御後

令供奉給。攝政騎馬供奉。承平二年例有。左右大將殿。其外多用車被參進。今日御車副着。

謁馬。鏡杏葉。八子。雲珠。鈴。頸綵。御馬副十二人。瀧口裝束如常。調

度懸相具。御隨身。內舍人。中原季行。源行遠。蘇芳染布衫。白袴。熊行騰。但弓

箭。移馬。從殿給之。府生二人。左近友。右兼方。黃祖摺布衫。熊行騰。白袴。

弓箭。移馬。從殿給之。但府生隨身。先例用移馬。如本陣。今度左右相分列。內舍人前。下々如供奉陣。自然可相從。番長四人。左敦時。右武忠之外。左右各一人召云々。番長四人。加本府。府生可供奉本陣之替也。番長以舍人十人。左右各五人。已上裝束疊繪。左師子文。下步行。舍人十人。右熊文。牛臂下襲。左鷹。右柳。末濃袴。左鷹。右青。平胡籙。左鷹。右鷹。樺卷弓。左種稻。右胡。懸緒。左無文。右堅食文。尻鞆。左鷹文。右赤皮。濃擣衣。市比脛巾。草襪。淺沓等也。

同記云。上達部。各飭馬。唐鞍。馬副。大納言八人。中納言六人。參議四人也。帶劍人。飭劍。但衛

府督。宰相中將。帶螺鈿劍。弓箭。各隨身四人。疊繪。

寬治時範記云。攝政殿。隱文御帶。付魚袋。御騎馬。唐

無手振取物云々。御隨身。內舍人。源行遠。中供。奉御後。在左右。束如例。卷廣纓冠。退紅色衫。自狩袴。熊皮行騰。布帶。

騎馬。左右相分。在御馬前左右。近衛番長四

人。二人本府御隨身。二人假召。近衛八人。已上十二人。府生供奉本陣替。

綵。左師子。右龍。下襲。牛臂。左鷹。單。已上織者。右柳色。末濃袴。左蘇芳。右青。伊知比脛巾。平胡籙。左鷹。右鷹。樺卷弓。左種稻。右柳。懸緒。左無文。赤懸緒。左無文。

赤懸緒。左無文。已上步行。府生御隨身二人。近友。兼方。

裝束如常本陣。柏摺黃衫。白袴。熊行騰。濃色打袒。伊知比脛巾。布帶。狩胡籙。乘移馬。



自<sup>レ</sup>殿假番長參會陣頭云々。御馬副十二人。

裝束如例。瀧口等勤仕之。各相ニ從調度懸。御厩舍人一人。着冠褐衣。

等。御鞍覆。令用蒲萄染。內府同前。儀

時。大臣令<sub>レ</sub>用ニ  
此色一云々。

同記云。殿下御車檳榔毛。所被渡大路也。御

車副六人。着蘇芳褐衣。冠。綏。柳色單下襲。

半臂。黃袒。青單。青末濃袴。布帶。牛飼一人。

着<sup>二</sup>褐衣。布帶。白袴等。持<sup>レ</sup>榻。各以相從。是則

寛和例云々。

同記云。按察大納言已下各騎馬。有馬副。大納言八

人。中納言六。帶<sub>二</sub>衛府督并近衛中將之人帶<sub>二</sub>弓

箭。帶弓箭一人。不付魚袋。御隨身。其裝束同上。蠶繪胡箭也。右司人

用<sub>二</sub>肅<sub>一</sub>慎<sub>羽</sub>但近衛中將被<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>奉本陣<sub>一</sub>。公卿着<sub>二</sub>飭劔<sub>一</sub>。

但帶<sub>二</sub>弓箭。用<sub>二</sub>螺鈿劍。

天仁大記云。公卿權大納言經實以下。下薦爲

先<sup>レ</sup>駕<sup>ニ</sup>唐鞍<sup>。</sup>馬副等如常<sup>。</sup>

同記云。攝政殿下令候御後給。御裝束如常。

江記云。攝政行列。左近陣中。府生二人騎馬在

前番長二人。國重。兼近。御馬口。内舍人。隨身二

人。藤原友宗。瀧口藤原清宗。裝束大略如三諸衛府。卷纓。退紅襖袴。熊行騰。布帶。藁脛巾。鹿皮尻鞆。狩胡錄。

府生一人。如三陣俱奉儀享時公種等也。已上四人移馬。番長四

人。兼近。國重之外。左加二假二人。繒繪袍。左師子。右麒麟。下襲。左躡躅。右柳。末濃袴。左蘇芳。右青。布帶。脛巾。淺履。懸緒。

左無文。右有文。平胡錄。左蒼羽。右鸛。繪尾鞞。左鴈。右赤皮。近衛八人。裝束已上在御同前。

馬後。御馬副十二人。召瀧口。相三具調度懸一。

殿下御車。檳榔毛。被<sup>レ</sup>渡<sup>ニ</sup>大路也。寛和寛治是先

例也。御車副六人着蘇芳褐。柳單下襲。黃袍。

青單。青末濃袴。布帶等。牛飼一人着褐衣。布

帶。白袴。扈從執レ榻。

仁元次第司記文云。公卿乘唐鞍。銀面雲瑤杏葉。尾袋。頸綰。

馬副。非參議乘倭鞍。結三唐肩一付二杏葉一又公卿已下五位已

上着魚袋。衛府公卿着螺鈿劍。他公卿着二隨

身著蠻繪。柳打半臂下襲。平胡錄。狩袴等。

仁元記云。右衛門督能實卿。不<sub>レ</sub>負<sub>二</sub>胡<sub>一</sub>鈴<sub>一</sub>螺鈿。不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>。爲房粧同。



殿下。公卿。下騰爲先。左大弁重資。修理大夫顯季。

大藏卿道良。中納言基綱。皇后宮權大夫顯

通。右衛門督能實。隨身二人。熊襲繪袍。青單下重。青朽葉袴。魚形尻鞆。肅慎羽。已

上馬副各六人。大納言經實。馬副八人。凡陣節下次第使

之外。公卿不具手振。

保安四次第司記文云。公卿乘唐鞍飭馬。銀面。雲珠。杏葉。

尾袋。頸綫。馬副等。非參議倭鞍。結唐尾。付杏葉。又公卿以下五

位已上着魚袋。衛府公卿着螺鈿劔。他公卿着。飭劔。

隨身着轡繪。柳打半臂下襲。平胡錄。狩袴等。

保安四師元記云。今日攝政殿下。府生二人。內

舍人二人。各乘細馬前行。番長以下步行。右

大臣。內大臣。府生一人各前行。番長以下步

行。今日攝政已下諸卿各用唐鞍。攝政并右

大將。番長取御馬口。自餘馬副取之。

同外記記云。衛府公卿帶弓箭。但右大將不然。

但帶劔。今日頓宮御禊座。公卿乍帶弓箭着

座。但實行宗能不不着座。宗輔師時着弓箭着

座。

保安四記云。兼衛府督公卿。垂纓。帶弓箭。

同記云。攝政殿下。府生二人。內舍人。各乘細

馬前行。番長以下步行。右大臣。內大臣。府

生一人各步行。番長以下步行。今日攝政殿下

以下諸卿各用唐鞍。攝政并右大將。番長取

御馬口。自餘馬副取之。

同忠敦卿記云。內大臣。有仁。飭劔。魚袋。隨身。柳

襲。面白裏青。持主人平胡六。左衛門督。通季。螺鈿劔。不。着。帶。魚袋。

平胡錄。隨身。躑躅單下重。左兵衛督實能。同左衛門

督。但隨身。躑躅下重。面白裏濃打。白襖袴。

衛府公卿隨身袴皆有。色。而用白袴。可尋。

大臣左兵衛督等隨身下襲二重也。自餘皆

單也。是太政大臣雅實公。可用二重之由

被申。內府云々。土御門右府。師房。二ケ度

供奉大嘗會御禊。而一度。治曆。隨身下襲二

重也。一度單。承保。治曆節下。故大隨身下襲

單。是依先例也云々。就彼例。天仁攝政隨身下重單也。

抑治曆。土御門右府被申宇治殿云々。隨身下襲相違。何以可爲善哉。被仰云。登毛加久毛有哉。而承保之度被用單。尙依此說歟。

保安四永昌記云。內大臣。有(一七)右大將。馬副隨身同。左大將。大納言

五人。按察經實。帶。筋劔。馬副八人。皇后宮大夫能實。藤大

納言宗忠。中宮大夫能俊。民部卿忠教。帶。螺鈿劔。他事同前。中

納言六人。源中納言顯雅。馬副六人。侍從實雅。帶。筋劔。新源

中納言雅定。已上同前。除戶部一之外。雜色五人。或兩三人。左衛門督通季。

左兵衛督實能。縫腋袍。螺鈿劔。隱文。帶。弓箭。隨身着。疊繪。左大弁爲隆。

半靴。馬副四人。同上。具。雜色三人。

保安四朝記云。

殿下御參。駕檳榔御車。連着鞆。常晴時不被。懸。件御鞆。

御車副六人。冠卷纓老懸。蘇芳褐衣。半臂。下重。黃袖一襲。朽葉末濃袴。葵脛巾。

牛飼。褐衣。打衣。濃單衣。白襖袴。葵脛巾。布帶。

御隨身。

內舍人二人。府生二人。番長二人。

殿下御。御輿左腋。舊記云。左近陣內者。大殿仰云。須前驅扈從。其人有數。置之其所。可令供奉一給。

御裝束如常。

紫綵平緒。縫孔雀。隱文巡方。魚袋。筋劔。

仰云。如此之時多被用。筋劔代。而大嘗會御禮。依爲希代事。故大殿寬治帶給了。天仁例又以如此然者雖今度。又可令用代給。香御扇。御靴。窠錢用黃之由。所令申給一也。鳥錦。每事美麗之故也。

飭馬。新院御馬。黑栗毛。

唐鞍。八子。雲珠。鈴。頸總。已上。御馬副下。藹持之。依御馬不堪

不令付。鏡杏葉。腹鈴。

御馬副十二人。瀧口奉仕之。一二藹取御馬口。裝束如常。調度懸十二人。在御隨身後。帶野箭。

內舍人隨身二人。列府生前。移馬。狩胡六。自殿給之。他事私所儲也。



橘賴重。檢非違使賴兼男。自院被獻之。濃蘇芳布衫。紅打袖。泥繪紅單。白狩袴。押錦窠文。

其廻押伏組。付唐衣。熊行騰。葵脛巾。冠。老懸等也。從者郎從四人。紺水干。欸冬。初末濃。雜色四人。

萌木薰形木襖相。紅袴。調度懸一人。着。已上裝束等。皆自院下給云々。

藤原重能。武藏權守重孝男。櫛衫相如賴重。狩袴。押銀窠文。打襖施泥繪熊行騰。伏籠以青地錦。繼比禮類。雜色二人。萌木摸牡丹未濃袴。調度懸一人。赤色引錦襖上下。已上私儲之。所從皆具。可隨賴重。由兼有仰。共駕鹿毛駁。

府生二人。狩胡六。移馬。紅打袖。紅單。白袴。自殿給之。黃柏摺。劔尻鞆。布帶。葵脛巾。私儲之云々。

左武忠。乘鹿毛。糟毛。乘栗毛。以上兩人。內舍人後在御馬外。各相具從者二人。皆着狩衣。

右兼方。乘栗毛。以上兩人。內舍人後在御馬外。各相具從者二人。皆着狩衣。

番長二人。紅蒲衣。同色單衣。合袴。兼行以下二行列立。在御馬副口。

左兼行。元右長也。今日行列被渡左。

右敦弘。今日右番長補所召也。

權番長二人。濃打衣。濃單衣。合袴。

左兼恒。

右久利。已上兩人。府生隨身供奉本府之代所召也。寬治天仁例如此。御參內之間。不乘移馬。參會陣。

近衛八人。裝束同番長。文略。

已上番長以下裝束。蠻繪袍。左師子。右熊。半臂下襲。左躑躅。右柳色青單。濃擣。已上。末濃袴。左蘇芳。懸緒。左無文。右尻鞆。左鰐文。右赤皮。平胡篋。左鷲羽。百大中堅食文。右鷹羽。衛府紫革裝束。右肅慎羽新調之。以三烏鷲羽切續。三府他事如常。平胡六。青革裝束。樺卷弓。左卷三種組。右卷三種組。常例也。又見度々記。而今度以紫革替三種組。黑文革替三種組。是即周防入道清實朝臣日記。

已上內舍人隨身裝束。官人黃柏摺之外。皆悉賜之。

御厩舍人。冠細纓。老懸。褐濃擣濃單。布帶。白袴。葵脛巾。新院御厩舍人長忠清參仕。

居飼。裝束如常。御供院御厩舍人同參仕。移馬居飼四人。裝束同前。

移馬舍人四人。

內舍人隨身二人。麴塵紫擣裏襖上下。濃欸冬衣。支子染單衣。張袴。

府生舍人二人。一人格子布藍蒲染擣裏襖上下。黃襖。紅單衣。一人格子布朽葉欸冬打裏上下。濃蘇芳相。青單衣。已上四人在移馬前。

上達部。各飭馬。唐鞍。馬副。大納言八人。中納言六人。帶劔人。劔。但衛府督宰相中將。帶螺鈿弓篋。各隨身



繪

左衛門督通季。左兵衛督實能。

已上兩人帶平胡籙。天仁御禊。能實爲左衛門督。不帶胡籙。衛府督皆代官。然者不可帶胡籙之由。有殿仰被示云云。

參議左大弁。

已上雜色二三人。或融大路。或相具令追前。此內雅定卿右大將無雜色。如式文者。尤可然。就中不可追前事歟。可尋知之。

康治元信範記云。攝政殿下乘唐車。自閑路遮令參頓宮給。內舍人隨身二人。府生一員。番長以上騎馬云々。可尋裝束。

同記云。權大納言宗輔已下。右衛門督家成。右兵衛督公行在此列。已上各騎馬。有馬副。

言八人。中納言六人。宰相四人。帶衛府者帶弓箭。

同範家記云。殿下自閑路令參給。唐車。御隨身裝束如陣供奉。見年々記。

同或記云。諸司裝束。

公卿裝束。

半臂。尋常。飭馬。唐鞍。銀面。尾袋。或不。用。銀面。新中納言右兵衛督。

永治二十廿六字槐云。

攝政御裝束儀式。

打下襲。有文帶。魚袋。飭劍。

隨身內舍人二人。

豐原泰忠。藤原仲清。

濃蘇芳染布衫。白襖袴。打衣。熊行騰。卷纓。老懸。鹿皮尻鞆。布帶。伊知比脛巾。草襪。淺沓。狩胡籙。弓。移馬。

將監將曹各二人。

權。

同本府裝束。

府生二人。

黃布柏摺衫。

謂之野摺。

打衣。熊行騰。白襖袴。細纓。老懸。猪尻鞆。布帶。伊知比脛巾。草襪。

淺沓。狩胡籙。弓。移馬。

番長二人。騎馬給時四人。今日被三乘車。仍不召加。

近衛八人。

蠻繪衫。左師子。右熊。半臂。左濃打。右青打。下襲。左躑躅白面壁。

之。右柳。

寬治天仁攝政隨身皆單也。今違彼例。

如何。左大曰。寬弘九年御堂御隨身下襲

二重。實資日記難之。

狩袴。左蘇芳末濃。右青末濃。老懸。細纓。濃打相。同單。赤

懸緒。左無文。右平文。布帶。伊知比脛巾。平胡

籙。左鷲羽。右肅慎羽。樺卷弓。畫尻鞘。左鰐文。右赤皮。草襪。

淺沓。

內舍人已下番長以上。騎馬在御車前。

唐御車。

車副六人。

冠。老懸。赤色。褐柳單。半臂下襲。朽葉末

濃袴。黃相。合袴。菜脛巾。布帶。

牛童。

青單袴。布。

移馬十匹。

舍人居飼各十人。

主上美福皇后駕輿之後。自閑路騎馳。於二條万

里小路被見物。乘輿過後。近扈從兵衛陣前

云々。乘車被候陣中。頗似任意。還御之時。

自閑路參會。長元九年經賴記云。關白殿乘

車行列。女御代從車後也。御隨身官人以下。

皆褐衣狩胡籙等也。以之思之。不騎馬之時。

供奉本陣之裝束相違歟。今日隨身裝束

違彼例。令用何年例給哉。可尋知事也。同

攝政殿御對面之次。奉問御隨身等裝束。仰

云。長和五年御堂乘車供奉。先於上東門見

物。天皇自一條院出御。乘輿後車扈從之時。隨身裝束

如常裝束。如今度。此事等見行親記。今度偏

隨彼例也。但其後關白乘車扈從之時。隨身

裝束如常行幸。又寬和二年。大入道殿乘車。

行幸已前渡大路令參頓宮給。

同記云。

諸卿儀。

打下襲。有文帶。付魚袋。帶劔之人用飭劔。  
多被用二 飭劔代一

但帶弓箭之人。帶螺鈿不付魚帶。有隨身之人。如攝政隨身。  
左如左。右如右。衛府督如此。

今日左大將右衛門督家成。三位中將忠雅。隨身下襲如攝政。自餘人隨身下襲單也。皆乘飭馬。

久壽二重方記云。忠道殿下柳檳庇。御車副六人。蘇

芳褐衣。朽葉末濃袴。舍人居飼各四人。隨身在本陣。御車後。檢非違使爲信供奉。

同信範記云。

關白殿下。

御束帶如常。螺鈿御劔。紺地平緒。孔雀圓文。魚

袋。

唐御車。平鞞。牛飼持楊。

車副六人。

着冠。綏。蕪芳張袴。朽葉末濃袴。柳半臂

下襲。面白張。裏青張。件半比下重。先例着二布帶。單張絹。今度如法被調二柳色。如何。

菜脛巾。□張相。同色單衣。

牛童。

紺褐衣。濃相。黃張相。青單衣。白襖袴。布

帶。菜脛巾。

御隨身。左蘇芳。狩胡錄。菜脛巾。右朽葉。

上臈四人。近衛八人。裝束同上臈。

前駟廿人。

平治元。

殿下騎馬。本實。蹲躡下襲。固文表袴。隱文巡方帶。魚袋。飭劔。着鞞。紫綾平緒。

御隨身府生二人。右黃白襖袴。熊行騰。紅打衣。布帶。狩胡錄。乘二移馬。在二御前。件裝束供二奉本陣一儀也。

唐鞍。八子。雲球。鈴。頸總。

御馬舍人。冠。老懸。褐衣。白袴。濃打

相一重。布帶。菜脛巾。



移馬舍人二人。着赤衣狩襖袴。山吹袈。黃單衣。

居飼三人。色目一同。

番長四人。

近衛六人。

蠻繪袍。左師子。右熊。未濃袴。左蘇芳。右青。半比。下襲。

左躑躅濃打絹單也。右柳青打絹也。已上纔着。相。番長二人紅打。權二人并近衛六人濃打。十人皆單衣。赤懸緒。左無文。右有文。繪尻鞆。左鰐。右蜥。右葉脛巾。淺蜥尾。

沓。平胡錄。左鷲羽。右樺卷弓。肅慎羽。

已上步行。此中右番長付御馬口。

御馬副十二人。瀧口。裝束色目如常。上臈取二御馬口。次一人持銀面。雲珠。頸纒。

調度懸十二人。公能。

平治元中山記云。內大臣。左大將。右大將公。已下

公卿已上裝束如常。但非衛府者飭劍。付魚

袋。衛府者帶螺鈿劍。至于前後次第司長官

者。不帶弓箭。公卿皆駕飭馬。馬副舍人外

無他從。兼衛府督并中將一人隨身。皆着蠻

繪。負胡錄。左鷲羽。右肅慎羽。大將隨身又以

如此。番長不騎馬。近衛取口。

仁安元師記云。攝政左大臣騎馬在左近陣中。

內舍人二人。府生二人在前。信範記云。騎馬。番長以下八人步行。

兼光記云。攝政殿御騎馬令用鈴唐鞍給。有內

舍人隨身。瀧口奉仕。御馬副十二人。

仁安三記云。實綱卿裝束。隱文帶。付二飭馬。尾袋。銀面。

今日追前。公卿三人。左衛門督。別當。右兵衛

督等也。右兵衛督賴盛。相具隨身六人。尤失

也。左衛門督實國。隨身着退紅單衣。同以失。

可着濃單衣也。

仁安三記云。攝政殿車副警蹕。先例不然之由。

左府談給。

同信範記云。隨身上臈騎馬。移馬。物節以下蠻繪

左躑躅下重。面白張瑩。裏濃打。右柳。面白。裏例青。打如常。

同中山記云。攝政乘唐車列女御代車前。今度

可騎馬給之。由自院被申。然而第二度。先

々用車之由令申給云々。或記。內舍人隨身。

府生二人。番長二人。番長以下隨身。左右皆

着下襲。

同記云。

供奉公卿。

內大臣。兼右大將(忠雅)。番長二人。一人取口。府生包貞前行。被具弓箭。

左大將師長。大納言。帶弓箭。隨身持之。

右大將。隨身躑躅下重。但濃單衣。

權大公保。雜色。二人。

實保。馬副外雜色一人。

權中實國。雜色。追前。

參議賴盛。追前雜色。有二人。

有隨身之人具隨身。無雜色。有雜色之

人追前。

壽永元信範記云。攝政殿令參內給。御裝束如

常。但紅打袒。黑半臂。縮線綾袴。有文巡方。

金魚袋。飭劔。非代。紫綵平緒。黃鳳文。

隨身。騎移馬。在左右。

內舍人二人。藤原盛季。實行憲。

卷纓冠。老懸。蘇芳褐衣。顯文紗白狩袴。以紫

絲縫。鴛丸。紅打袒。施泥。文徑三寸許。同色單衣。熊行騰。

散物劔。紫革裝束。鹿皮後鞘。布帶。棠脛巾。狩胡

籙。紫革。小手。騎移馬。移鞍。緣螺鈿。橋。堅食文。無表敷。

豹文彩色下鞍。文以紺青。彩色。文廻。押細金。懸金銅伏輪。赤地唐

錦渡皮。同力革。散物鐙。堅食。大奈女藍革

緣。白針如常。此緣可用紫革。由有議定。尤可然也。絲代可用紫革。散物轡。堅食。

鉤龍頭。鼻革付金。銅堅食文。手綱。蘇芳打物。押伏組。白差繩。腹

帶。連着鞞。代々古物。被用之。引差繩。

府生二人。

冠纓。黃色野摺狩衣。黑劔。斑猪尻鞘。熊行

騰。棠脛巾。已上用。私物等。紅打衣。同色單衣。白襖

袴。合袴。布帶。狩胡籙。黑柄唐笠。已上調給之。黑

移鞍。散物轡。連着鞞。虎皮文下鞍。文廻押細金。

青草大奈女。堅食也。白針如恒。鉤龍頭。鼻革在。金銅文。手綱。

白差繩。腹帶。一丈二尺。引差繩。

御厩舍人四人。

內舍人隨身舍人二人。

麴塵狩襖袴。山吹相。黃單衣。合袴。烏帽。

平禮。藁沓。白柄唐笠。

府生舍人二人。

一人。二藍狩襖袴。黃相一重。合袴。烏帽子。

平禮。藁沓。笠。

一人。朽葉狩襖袴。蘇芳相。青單衣。合袴。

烏帽子。平禮。藁沓。笠。

居飼四人。

退紅衫。黑袴。白布襖下袴。烏帽子。白柄唐

笠。

番長四人。二人元番長。無移馬。騎私馬。在御車後。二人權者。本府備進之。

近衛八人。左右各四人。

都合十二人裝束。

冠。綾。劔。藁脛巾。已上用。私物。蠻繪袍。左師子。右熊丸。眼窗。

牙爪等押銀薄。左躑躅濃打單。右柳色青打單。半臂下襲。末濃袴。

舌口中付朱砂。右柳色青打單。左蘇芳。打衣。正員二人。紅打。權者二人。近衛八人。濃打。單衣。皆紅花。不論正員權者。

懸緒。紅打。左無文。右有文。各打絹五尺細帖之。合袴。布帶。

草襪。繪卷。左赤色組。右紺組。各打所々卷。村濃絲。黑柄唐笠。已上調給之。

御馬副十二人。各具調度懸。

冠卷纓。老懸。褐衣袴。着紫絲組結。濃打衣一重。

合袴。藁脛巾。藁沓。檜扇。已上具別褰。平

褰。冠入宮。具黑柄笠。一蒲兼能參藏人

所。下給裝束。行幸後朝。冠。綾。褐衣。布帶。

藁脛巾等返上。

調度懸十二人。

淺黃狩衣袴。黃相一重。合袴。烏帽子。平禮。

藁沓。具別褰之。

飭馬。院鹿毛。

唐鞍。黑地橋。縫物表敷。付櫻珞。八筋。下鞍。紫檀地。螺鈿鏡。



地孔雀縫物。金銅伏輪。二重懸。鏡銀面。八子。雲珠。  
之。樣物堀物金物付下鞍銀。

鈴。頸總。鏡杏葉。在青地唐。髮袋。付鈴。尾袋。

鏡雲珠。付金銅金物。赤革鞞。入青瑠璃玉。腹下大鈴。蘇芳

綵手綱。白差繩。二筋。五丈。白布鞞。搦赤地錦。表

腹帶。蒔繪鞭。濃打覆。引差繩。

御廐舍人。

冠。綏。紺褐衣。白襖濃打衣一重。合袴。布

帶。藁脛巾。藁沓。白柄笠。

居飼。

裝束色目同移馬居飼。

同記云。舍人隨身二人。騎移馬在左右。同府

生隨身二人同前。居飼舍人各四人前行。攝政

令騎餉馬給。馬副瀧口二人爲櫛。舍人居飼

等左右。居飼履。次御隨身番長四人。近衛八

人。皆蠻繪。色。馬副十二人。瀧口。上藤賜御笏扇等。持懷中。下藤二人持頸

珠。調度懸十二人。帶弓箭同列。

同記云。殿下御車檳榔毛。被渡大路。車副。六人。着蘇

芳褐衣。着黑褐衣。末濃袴。白襖袴等。等相副。

同隆房記云。公卿皇后宮大夫實房。已下。左兵衛

督。家通。隨身四人。着蠻繪。修理大夫。經盛。具維色。三人。持劔。駕唐鞍。各

有馬副。大納言八人。中納言。六人。參議四人。鈴印少納言。黑地鞍。連着鞞。

付杏葉。

同實定公記云。左衛門督時忠卿。裝束司。長官。蒔

繪。不帶弓箭。門部四人。垂袴。壺。

元曆元外記記云。殿下庇御車。被具。內舍人隨

身云々。

同信範記云。攝政殿駕車令供奉給。

先前駐笠持。

次居飼十人。

次舍人十人。

一員將監將曹各二人。府生二人。內舍人二

人。番長二人。移馬。舍人。

皆着當色。虫色狩襖袴。山吹衣。黃單。烏

帽子。平禮。

次一員將監二人。將曹二人。

次前駢廿人。

次御隨身番長二人。

蠻繪袍。

左師子文。右熊丸。

半臂下襲。

左濃打。右青打。各單。

末

濃袴。

左蘇芳。右青。

紅打衣。同張單。赤懸緒。

左無

有文。布帶。

伊知比脛巾。黑造劔。繪尻鞘。

左豹鰐文。右虎皮文。

平胡籙。

左鷲羽。皆用二中黑。右肅弓。慎羽。以三鳥鵠一造之。

左赤組。右紺組。

府生二人。

黃摺袍。紅打衣。同單。白襖袴。熊皮行騰。

黑劔。猪皮尻鞘。布帶。伊知比脛巾。狩胡

籙。

次內舍人。

蘇芳褐。白狩袴。

紫丸文。縫之。

紅打衣。

泥繪同。

單衣。

卷纓冠。散物太刀。

紫革裝束。

鹿皮尻鞘。熊行

騰。狩胡籙。

紫革小手。

布帶。藁脛巾。

次御車。

新造唐車。式法如例。平絹蘇芳下簾。無縫物。平鞆。無緒。

次車副六人。

卷纓冠。老懸。蘇芳張褐衣。柳半臂下襲。

青色單絹。

朽葉末濃袴。黃袈一重。布帶。藁脛

巾。

次牛童。

紺褐衣。白襖袴。濃打袈一重。布帶。藁脛

巾。持楊。院御牛。同童。

次近衛八人。

蠻繪袍。末濃袴。半臂下重以下裝束如

番長。但濃打衣。其外同番長。

次雜色。

定長。光久。

烏帽子。平禮。無裾袴□等。革沓。

次連雜色百人。

此中番十三人。

平禮。上結。垂尻。

次唐笠持舍人。雨皮張筵持仕丁。退紅白袴

如常。

建久九忠良記云。殿下令着御裝束給如常。

有文帶。紺地平緒。筋劔。魚袋。御參內。唐車。院御車也。下簾有縫物。

堅文紗。蘇芳末濃如常。前駟十六人。御隨身府

生二人。黃野摺褐衣。內舍人隨身二人。蘇芳

褐衣。番長四人。近衛八人。已上蠻繪。

建曆元年十月廿二日宮槐記云。今日公卿大都

不具雜色歟。一兩卿召具之云々。良平大

納言二人。忠茂中納言三人許也。

又衛府公卿。弓多ハ持左。道家左大將ハ左持之。

右大將公房。者右持之。是非左右相合儀。故

入道左府者右持之由執之。左大將ハ持左

之由被執之云々。且於出座左幕之所爲

ハ。院相國語給也。

公卿之中。或令持雲珠。頸總。或否。又或以

雲珠令持馬副上臈。或以頸總令持上臈。

博陸ハ中央之程ニ令持之云々。

又中納言雅親。三位範明。乘葦毛馬。故實者

次ノ事也。當時之所見尤下品なりけり。後人猶可慎歟。

建曆元年十月廿二日宮槐云。關白騎馬。瀧口張

口。隨身取口。如先規。隨身官人野摺。置染衫。菊是也。

無內舍人隨身。關白之時無之云々。關白車。總轍。下簾長

引地。可然事歟。可尋。雜色二三十人步行

車後。是先例也。

建曆元年十月廿二日宮槐云。

公卿列。

馬副二人。取炬前行。

三位家衡。

從二人。取松明在後。尤可前行歟。取物

等皆持也。

建曆元年十月廿二日長兼記云。

供奉公卿。

源大納言。通光。還御時馬副持祿。

藤大納言。師經。輕服。



九條大納言。

良平。被具三舍人居飼。

二位中納言。

忠房。有舍人居飼。還御時雜色二人取松明云々。如何。

土御門中納言。

定通。

新源中納言。

雅親。

新中納言。

教成。

右衛門督。

親兼。帶弓箭。門部着蠻給。

藤宰相。

範明。

六條三位。

家衡。

已上用唐鞍。馬副持雲珠頸總等。此外左

衛門督忠信卿。何自御棧敷前西程乘馬

引走。於一條室町馬留立入。舍弟佐親候

棧敷乘車歸家。

關白殿騎馬供奉左近陣。

殿下有御輕服事。

府生二人騎馬在前。馬副二人張口。自餘

馬副行列如例。

一人持笏。一人持雲珠。一人持頸總。

番長近衛

等步行。是先例也。舍人着褐衣冠。是又先

例也。

貞應元年十月廿三日禪大御記云。

于時宰相中將。

辰剋限召集從者等見之。

隨身四人。

蠻繪袍。

師子丸。依左。躑躅下重。單打也。右柳色也。右熊文。今度依左。

也。濃打半比。

單。右青。蘇芳末濃狩袴。貫布。右青末濃。

狩袴貫布事。先日尊閣令申禪閣給。拔

布常事之由有御返事。仍如此。

平胡錄。

鷲羽黑染服。黃金物。無象眼。マフタギ用白色紙。朽綻丸緒。箭押軟錦。

今度鷲羽所見之處。偏ウスベ尾也。若聊

可爲切普敷。又黑染簾。マフタギナド

不審。仍尊閣令申禪閣給。御返事云。鷲

羽ニテダニ候バ。ウスベ尾不可有苦。

又簾ノマフタギ色紙也。黑染簾常事也。

仍此定所調也。

樺卷弓。菴脛巾。淺沓。赤懸緒。

無文。廣二寸餘。許。打之。絹也。

繪尻鞘劔。

鰐文。地ハ虎文色取之。其上鰐文也。右ハサヒツ。是ハ地ノ虎文許也。是ヲ稱左簾。

馬副四人。

今度用家司侍。

冠。卷纏。四組紫絲ヲ以爲ノ結。褐衣。褐袴。裳。亂緒。布帶。

濃打衣。

召寄テ見之處。尻廣テ插之。仍後許ハ廣シ。前ハヒシノト帖テ插也。前ハ有尻ドモ不見也。

居飼一人。

退紅。無結。布襖。布ヲ粘張テ袖許ヲ二重ニ返テ重タル也。黑布袴。

舍人長一人。武清。

平禮。二藍狩衣。垂尻。朽葉衣。亂緒。

雜色一人。元源。

白張立烏帽子。

立烏帽子事。禪閣仰云々。

舍人二人。

一人蒔木黃衣。一人紺水干。葛袴。

飭馬。

唐鞍。銀面。髮袋。尾袋。杏葉。鞞二十。胸懸二五。面懸兩方各二七。

如常。

今度。本ハ雲珠頸總等不可持之儀也。

而見舊記。參議已上。髮袋。尾袋。雲珠。

頸總如常ト書之。驚而見建久尊閣御

記。于時中納言。不持雲珠頸總云々。仍予不

持之。

次予着裝束待剋限。漸至院御棧敷之間。予取上手。手綱。前傍。

冠。卷纏。老懸。縫腋袍。縮線綾表袴。螺鈿劔。沈地。有樋。

金柄。不付有文巡方帶。魚袋。

裝束着了。付使於官廳。令見剋限。使者歸

來云。御輿已出官東門云々。予帶弓箭。着

靴。騎馬。蒔繪鞞。卷檀紙。西緒。打出門前。自此立

行列。令下知從者。

先飭馬。

馬副二人張口。

次舍人長。居飼。

舍人長ハ馬左。小馬傍。居飼ハ馬右。懸鞍覆。打馬右。小馬傍。

次馬副二人。

上臚持笏。アラハニ持レ之。

次蠻繪隨身四人。

雜色具笠持步路傍。是爲鹵薄外者。御棧

敷前可步幔外之由示含了。又不可追

前之由同仰含了。

暫立大宮辻待御輿。

小時節旗渡。

馬上者持之。四方張綱。地上者張之。

次節下左大臣。家通。

番長一人。騎馬在前。

野摺。舘馬。鞞下引赤地。錦付杏葉。

馬前蠻繪隨身六人步行。

次大納言。忠房。

飭馬如常。雲珠。頸總。令持馬副。

次權中納言。

雲珠。頸總。令持馬副。

建曆二年十月廿八日顯俊卿記云。爲還御御

輿已寄云々。仍騎馬。先行於二條高倉邊。乘

馬頗有厭銀面之氣。仍撤之。令持雜色。

抑參議馬副四人也。二人張口。二人秉松明。

此時撤銀面者可令持雜人哉。先例不分

明。當座令案也。迷是非。然而雜色一人之外

敢無所從。仍如此。後聞。人々成不審云々。

且後日上皇有御尋申此旨了。猶雜色二人

秉松明。馬副可持之歟之由有御氣色云

云。此條誠可然歟。但兩人共召具之。雜色一

人。老

川原

留了。其上召具雜色之條。是非正儀。秉松

明渡御棧敷之條。理不可然。猶可尋存。又

令持雜色之條。誠何事有哉之由有其沙

汰云々。

予供奉儀。

束帶如常。有文帶。

但非。巡方。魚袋。栗毛駿馬。唐

鞍。新大納言被。借送之。

舍人。

赤色上下。黃相。依。爲新制一人也。馬副四



人。二人張口。二人在後。水干袴。舍人密相副。人々如此。雜色二人。平禮。

路次之間在路。笠持。自閑路參會河原。不傍。不追前。笠持。令行行列路頭也。

貞應元年十月廿三日禪大御記云。人々雜色。或

渡着檜牆。或渡幔外。予雜色渡幔外。

仁治三年十月廿一日公光卿記云。

公卿。

權大納言藤原公基卿。馬副八人如常。雜色雲珠頸總等令持之。

同實雄卿。馬副八人。雲珠頸總令持。馬副。

權中納言同公親卿。馬副六人如恒。雜色一人。不持。雲珠頸總。具舍人居飼。

同冬忠卿。馬副六人如恒。雜色一人。具舍人居飼。依家例着袴。

同公持卿。馬副六人如恒。雜色一人。雲珠頸總等令持。馬副。具舍人居飼。

居飼。

參議 源顯平卿。馬副四人如常。

仁治三年十月廿二日公光卿記云。抑土御門前

內大臣。束帶。蒔繪劔。

仁治三年十月廿一日公光卿記云。良實。關白。被着。縮線綾。

表。乘車供奉。右衛門陣後。前駟十五人。隨身上臈四人乘移馬。

仁治三年十月廿一日師朝記云。

公卿。

權大納言藤原公基。副舍人二人。各赤色。馬副八人。四人取物。

同 實雄。馬副八人。上臈四人。取物不持。銀面。副舍人二人。舍人居飼。馬副六人。雜色一人。

權中納言藤原冬忠。舍人居飼。馬副六人。雜色一人。

同 公時。舍人居飼。馬副六人。

仁治三年十月廿一日山御記云。予供奉。螺鈿

劔。有文帶。馬副八人。雜色不召具。雲珠頸總

等令持。馬副。銀面又令持之。馬依有厭氣

色也。

寬元四年十月廿四日陽龍記云。一院可有御

棧敷御幸。行幸以前。先可供奉之由。先日有

催。近習之外先例無催。仍鷄鳴之間。召集僮僕

等。卯刻着束帶。雖有衣冠之催。有所存着

之。帶蒔繪太刀。着無文帶。一日之中雖不

可改。飭劔。魚袋。尚不可然之由。有淨土寺

殿之仰。

抑行幸供奉公卿先參御幸先例。保安四年。民部卿忠教。左衛門督通季等卿之外。

無所見歟。裝束事。件日記等不分明。加之。承久三年正月一日。院拜禮了有御幸

始。公卿蒔繪太刀。而別當經通卿。帶飭劔

參上。見人々劔令帶改。殿上人近將者。

着闕腋袍。或及魚袋。右少弁兼右衛門權

佐光俊。着縫腋袍。此等例尤可准據歟。

駕毛車。車副牛飼如常。左衛門尉中原仲光。源行繼。雜色二人細烏帽子在共。令引

馬。栗毛。借請攝政。和鞍泥障如常。用舌。二人。花田水干。袴。黃相。着下袴。

寬元四年十月廿四日陽龍記云。次大臣騎馬前

行。漸進之間。予御幸之時所着之裝束改着

之。有文帶。魚袋。飭。劍。紺地平緒。

寬元四年十月廿四日陽龍記云。

公卿。

權中納言公親卿。馬副六人。不令持雲珠頸總。具舍人居飼。雜色二人。細烏帽子藁

顯親卿。馬副六人。上臈持銀面。不持雲珠頸總。具院御厩舍人居飼。

予。馬栗毛。馬副六人之内。第一第二

籠。第三持笏。第六持尾袋。同略雲珠頸總。雜色二人在共。同公親卿。舍人

二人同上。還御之時。馬副第三第四

取松明。在面前。笏令持侍。不撤銀面。尾袋等。

參議左大弁經光卿。馬副四人。各持雲珠頸總。最末持尾袋。雜色二人平禮在共。

寬元四年十月廿四日陽龍記云。攝政唐庇車。

申請院御車。前駟十五人。四位二人。五位十人。六位一人。

文應元年十月廿一日經光記云。

公卿。

花山院大納言。通雅。具舍人居飼。

中院新中納言。通基。具舍人居飼。

華山相具雜色一人。其外無雜色。

文應元年十月廿一日經光記云。

兼平關白殿。院檳榔庇御車。

車副。蘇芳。裼衣。藁御隨身。裼衣。藁

前駟十二人。彈正大弼範。重朝臣以下。

文應元年十月廿一日信輔卿記云。關白殿駕

車。唐庇。被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>請<sub>一</sub>。院御車云々。令<sub>二</sub>供奉給<sub>一</sub>。前駟十二人。御隨

身四人。騎<sub>二</sub>移馬<sub>一</sub>。在<sub>二</sub>御車前<sub>一</sub>。御車副八人。例。御牛飼。

褐衣。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

公卿。

權大納言源 顯良。馬副八人。相<sub>二</sub>具院<sub>一</sub>。御厩舍人居飼。

藤原通雅。馬副同前。具<sub>二</sub>舍人居飼<sub>一</sub>。又雜色。二人召<sub>二</sub>具之<sub>一</sub>。此外平禮。公卿相<sub>二</sub>具<sub>一</sub>。雜色。

權中納言藤原爲氏。馬副六人。

參 議 平 時 繼。馬副四人。

文應元年十月廿一日經俊卿記云。

關白殿下。

檳榔庇。被<sub>レ</sub>申<sub>二</sub>請<sub>一</sub>院。車副。蘇芳。

前駟十二人。隨身。褐衣。

文永十一年十月廿一日花內記云。

着束帶。

用蒔繪劔。丸鞆帶。不<sub>レ</sub>付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>。御禊日供奉公卿。

不用<sub>二</sub>飭太刀<sub>一</sub>。巡方帶。付<sub>二</sub>魚袋<sub>一</sub>也。予不<sub>二</sub>供奉<sub>一</sub>。依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>御乳父<sub>一</sub>。內々爲<sub>二</sub>奉<sub>一</sub>扶持之。參會

官司并河原頓宮也。依<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>職掌用<sub>一</sub>褻劔也。寬元入道相國實氏公。文應入道左府實

雄公。非<sub>二</sub>職掌<sub>一</sub>參會川原。其裝束不<sub>二</sub>勘付<sub>一</sub>。

追可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>。

駕毛車。前駟四入。在<sub>レ</sub>共。

文永十一年十月廿二日花內記云。

攝政。家經。

紫綵平緒。被<sub>二</sub>持<sub>一</sub>香扇。件扇。檜木ヲ香ニ染

テ。以<sub>二</sub>白糸<sub>一</sub>閑之。被<sub>二</sub>談<sub>一</sub>云。香扇者老者之

持所也。而保安攝政法性寺殿爲<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>持<sub>一</sub>之。

今追<sub>二</sub>彼例<sub>一</sub>云々。又鞍覆被<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>葡萄染<sub>一</sub>。是寬

治大殿例云々。自餘行粧追可<sub>二</sub>尋記<sub>一</sub>。

西園寺大納言。

紫綵平緒。

紫綵平緒。

紫綵平緒。



忠敬 左大將。

同。

家基 右大將。

同。

公守 洞院中納言。

同。

文永十一年十月廿二日花內記云。

人々馬事。

攝政自院被借遣去年貢馬一駿也。唐鞍付固。殊攝政肥滿之間。馬不堪。於待賢門內兩度臥云々。被乘之時。被用白木大床子。土御門大納言不參內。自途中被打出之間落馬。然而不損裝束。

實家 左衛門督。馬於官北門被乘之間。太沛艾。

置替鞍。又予令置替之間及三疋。少將教賴馬如步欲走出。能乘之。人々遂驚目。

同年十月廿二日山御記云。午剋許着裝束。有文帶。

飭劍。次參官司。毛車。具雜色長侍。

魚袋。上話。着諸大夫各兩三人。着布衣。用細鞆。

正應元年十月廿一日師顯記云。關白殿。毛車。

自閑路參會。唐車難得故者。法性寺殿。康

治度召唐車令參會給云々。

正應元年十月廿一日御記云。午一點着裝束。

飭劍。紫綵平緒。巡方帶。駕毛車。車副二人。牛飼雜色。無單袴。如常。參內。相

具飭馬。三也。銀面。髮袋。黑地螺鈿鞍。橋繡大滑。有伏輪。輪鐙施薄。赤滑子鞆。鏡杏葉。尾袋等也。

櫛舍人。無單袴。狩衣色々也。馬副六人。

永仁六年十月廿五日仲定記云。殿內舍人隨身

乘用平文移鞍。任望御厩別當調進色目。

橋。緣螺鈿。文堅食。下鞍。彩色豹皮色。廻押細金略之。金銅伏輪。緣赤地錦。用經綯。

轡。散物。文同。鐙。散物。文堅食。力ユ白塗之。

力皮。赤地。蘇芳。手綱。

差繩。白。腹帶。同。

色目自殿被下之。骨鐙不借他所。古物

也。

延慶二年十月廿一日御記云。爲供奉。予辰二

刻着束帶。

位袍縫腋。躡躡下重。裾長三尺。チメリナシ。薄色袈。紅單等如レ常。縮線綾表袴。青綵平

緒。螺鈿劔。木地有文帶。不レ付魚袋。

參官司。相具弓箭飾馬。雜色。牛童。

車副等。無單袴也。變繪隨身四人。束帶五位一人。布衣輩五六位。羣召具之。

今日予行粧。

隨身四人。

蟹繪袍。

師子

紫末濃袴。

上

平胡錄。

黑漆鷲羽矢二並差。

有板突。如普通。平胡錄。紅薄樣間塞。

如レ常。但着繪尻鞆。鐔文也。

茶脛巾。沓。

馬副四人。如レ常。

小雜色三人。

雖爲拜賀日。不召具如木等。是西園寺入

道相國。大將後叙一品。供奉官司行幸之

時。不召具之云々。依彼例。不召具。其

外准據之例等有之。

舍人。

花田狩衣袴。黃衣。練貫單。平禮亂緒。

居飼。如レ例。

副舍人二人。

無單袴。一人香狩衣大帷已下如恒。一人

二藍狩衣。

正慶元年十月廿八日御記云。

公卿。

權大納言藤原公宗。

藤原資名。

馬副六人。一人持銀面尾袋。在馬口舍人居飼在馬副內。馬副六人。召具舍人居飼。申請院御廄也。如木雜色一人。依家例別申請也云々。依家例。一人着赤色水干葛袴。

藤原公清。

藤原長定。

藤原資明。

藤原忠兼。

藤原經顯。

馬副六人。右衛門督。螺鈿劔。木魚袋。卷纓綾。隨身四人。平胡錄。馬副六人。

參議 藤原實茂。

正慶元年十月廿八日御記云。

左近衛府。

大將藤原經通。隨身蠻繪。鷲羽。馬副六人。  
銀面。有取物。番長張レ口。

右近衛府。

大將代參議右中將藤原實繼。蠻繪隨身六人。平  
胡錄。肅慎羽。馬副

六人。二人持  
銀面尾袋。

正慶元年十月廿八日御記云。

關白殿。唐庇車。地下前駟八  
人。隨身蠻繪如レ例。

文永

以下缺失

右御禊行幸服飭部類以異本一按了



群書類從卷第二百一十二

文筆部一

懷風藻序。

述聽前修。遐觀載籍。襲山降蹕之世。檀原建邦之時。天造草創。人文未作。至於神后征坎。品帝乘乾。百濟入朝。啓龍編於馬廐。高麗上表。圖鳥冊於鳥文。王仁始導。蒙於輕嶋。辰爾終敷。教於譯田。遂使俗漸。洙泗之風。人趨齊魯之學。逮乎聖德太子。設爵分官。肇制禮義。然而專崇釋教。未遑篇章。及至。淡海先帝之受命也。恢開帝業。弘闡皇猷。道格乾坤。功光宇宙。既而以爲。調風化俗。莫尚於文。潤德光身。孰先於學。爰則建庠序。徵茂才。定五禮。興百度。憲章法則。規摹弘遠。復古以來。未之有也。

於是三階平煥。四海殷昌。旒纁無爲。巖郎多暇。旋招文學之士。時開置醴之遊。當此之際。宸翰垂文。寶臣獻頌。雕章麗筆。非唯百篇。但時經亂離。悉從煨燼。言念湮滅。輒悼傷懷。自茲以降。詞人間出。龍潛王子<sup>大津</sup>翔雲鶴於風筆。鳳翥天皇<sup>高市</sup>泛月舟於霧渚。神納言之悲。白髮。藤太政之詠。玄造。騰茂實於前朝。飛英聲於後代。余以薄官餘閑。遊心文囿。閱古人之遺跡。想風月之舊遊。雖音塵眇焉。而餘翰斯在。撫芳題而遙憶。不覺淚之泫然。攀<sup>（露）</sup>縟藻而遐尋。惜風聲之空墜。遂乃收魯壁之餘壺。綜秦灰之逸文。遠自淡海。云暨平都。凡一百二十篇。勒成一

卷。作者六十四人具題姓名。并顯爵里冠于篇首。余撰此文意者。爲將不忘先哲遺風。故以「懷風」名之云爾。于時天平勝寶三年。歲在「辛卯」。冬十一月也。

懷風藻目錄。略以「時代」相次。不以「尊卑等級」。

淡海朝皇太子二首侍宴  
述懷

淨大三河嶋皇子一首山齋

大津皇子四首春宴  
遊獵  
述志  
臨終

僧正吳學生智藏師二首春日宴  
秋遊  
山水

大納言直大二中臣朝臣大嶋二首詠孤松  
遊山齋

正四位上式部卿葛野王二首遊春苑  
入龍門山

大納言正三位紀朝臣麻呂一首春日應詔

從三位中納言大神朝臣高市麻呂一首應詔

文武天皇三首詠月  
述懷  
詠雪

太宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須二首應詔

治部卿正四位下犬上王一首遊覽山水

正五位下〔下本文〕紀朝臣古麻呂二首望雪  
秋宴

大學博士從五位下美努連淨麻呂一首應詔

判事從七位下紀朝臣末茂一首臨池  
觀魚  
〔水本文〕

唐學士辨正法師二首與朝主人  
憶本鄉

正五位下大學頭鯛忌寸老人一首春日從駕

贈正一位太政大臣藤原朝臣史五首應詔  
侍宴  
遊吉野  
二首  
七夕

正六位上左大史荆助仁一首詠美女  
〔人本文〕

大學博士從五位下刀利康嗣一首侍宴  
〔奏本文〕

皇太子學士從五位下伊預部馬甘一首應詔

從四位下播磨守大石王一首侍宴

大學博士從六位上田邊史百枝一首應詔

兵部卿從四位下大神朝臣安麻呂一首山齋

從三位左大弁石川朝臣石足一首春日  
〔苑本文〕  
應詔

從四位下刑部卿山前王一首侍宴

正五位上近江守采女朝臣比良夫一首侍宴

正四位下兵部卿安倍朝臣首名一首 春日應詔

大納言從二位大伴宿禰旅人一首 侍宴

從四位下左中弁中臣朝臣人足二首 從駕(遊本)吉野宮

大伴王二首 從駕吉野宮

正五位下肥後守道公首名一首 秋宴

從四位上治部卿境部王二首 長王宅宴 秋夜宴山池

大學頭從五位下山田史三方三首 宴新羅客 長王七夕

從五位下息長真人臣足一首 七夕

從五位下出雲介吉智首一首 七夕

主稅頭從五位下黃文連備一首 侍宴

刑部少輔從五位下越智直廣江一絕 言志(通懷本文)

從五位下常陸介春日藏老一首 述懷 總本文

從五位下大學助背奈王行文二首 宴新羅客 上巳宴

皇太子學士正六位上調忌寸古麻呂一首 宴新羅

客

正七位上伊預掾刀利宣令二首 賀冊足(豆)長 敬本文 王宅新羅客宴

大學助從五位下下毛野朝臣虫麻呂一首 宴新

羅客

讚岐守外從五位下田中朝臣清足一首 宴長

正二位左大臣長屋王三首 應詔宴新羅客 初春置酒

從三位中納言安倍朝臣廣庭二首 男本文

正四位下大宰大貳紀朝臣雄人三首

正六位上但馬守百齊公和麻呂三首

正五位下大學博士守部連大隅一首 內樂

正五位下圖書頭吉田連宜二首

大學頭外從五位下箭集宿禰虫麻呂二首

陰陽頭正五位下大津連首二首

贈正一位左大臣藤原朝臣總前三首 七夕宴新羅客侍饗 羅客侍饗

正三位式部卿藤原朝臣宇合六首 宴南地 贈長 王宅宴 悲不遇 遊 吉野川 奉節度使

從三位兵部卿藤原朝臣萬里五首 園池置酒 過 神納言墟 釋 奠遊 吉野

從三位中納言丹墀真人廣成三首 遊吉野 吉野作述懷 吉

從五位下鑄錢長官高向朝臣諸足一首 從駕 吉野



律師大唐學生道慈師二首奉皇太子初春在竹溪山寺

外從五位下石見守麻田連陽春一首和藤江守

大學頭外從五位下鹽屋連古麻呂一首宴長王宅

從五位下上總守雪連古麻呂一首賀五年八年

隱士民忌寸黑人二首幽棲獨坐山中

沙門道融師五首

從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂四

首寓南荒贈三僚公一贈三舊識一閨情

正五位下中宮少輔葛井連廣成二首和藤太政夜坐河濱

# 懷風藻

## 淡海朝大友皇子二首

皇太子者。淡海帝之長子也。魁岸奇偉。風範弘深。眼中清耀。顧盼煒燁。唐使劉德高見而異曰。此皇子風骨不似世間人。實非此國之分。嘗夜夢。天中洞啓。朱衣老翁捧日而至。擎授皇子。忽有人。從腋底出來。便奪將去。覺

而驚異。具語藤原內大臣。歎曰。恐聖朝萬歲

之後。有巨猾間釁。然臣平生曰。豈有如此

事乎。臣聞。天道無親。惟善是輔。願大王勤

修德。災異不足憂也。臣有息女。願納後庭。

以宛箕帚之妾。遂結姻戚。以親愛之。年甫弱

冠。拜太政大臣。惣百揆。以試之。皇子博學

多通。有文武材幹。始親萬機。群下畏服。莫

不肅然。年廿三。立爲皇太子。廣延學士。沙

宅紹明。塔季春初。吉太尙許率母木素貴子

等。以爲賓客。太子天性明悟。雅愛博古。下

筆成章。出言爲論。時議者歎其洪學。未幾

文藻日新。會壬申年之亂。天命不遂。時年

廿五。

## 五言。侍宴一絕。

皇明光日月。帝德載天地。三才竝泰昌。萬國表臣義。

## 五言。述懷一絕。

道德承天訓。鹽梅寄眞宰。羞無監撫術。安能臨四海。

河嶋皇子一首。

皇子者。淡海帝之第二子也。志懷溫裕。局量弘雅。始與大津皇子爲莫逆之契。及津謀逆。嶋則告變。朝廷嘉其忠正。朋友薄其才情。議者未詳厚薄。然余以爲。忘私好而奉公者。忠臣之雅事。背君親而厚交者。悖德之流耳。但未盡爭友之益。而陷其塗炭者。余亦疑之。位終于淨大參。時年卅五。

五言。山齋一絕。

塵外年光滿。林間物候明。風月澄遊席。松桂期交情。

大津皇子四首。

皇子者。淨御原帝之長子也。狀貌魁梧。器宇峻遠。幼年好學。博覽而能屬文。及壯愛武。多力而能擊劒。性頗放蕩。不拘法度。降節

禮士。由是人多附託。時有新羅僧行心。解天文卜筮。詔皇子曰。太子骨法不是人臣之相。以此久在下位。恐不全身。因進逆謀。迷此詿誤。遂圖不軌。嗚呼惜哉。蘊彼良才。不以忠孝保身。近此奸豎。卒以戮辱自終。古人慎交遊之意。固以深哉。時季廿四。

五言。春苑宴一首。

開衿臨靈沼。遊目步金苑。澄徹苦水深。晻曖霞峯遠。驚波共絃響。哢鳥與風聞。羣公倒載歸。彭澤宴誰論。

五言。遊獵一首。

朝擇三能士。暮開萬騎筵。喫齏俱豁笑。傾蓋共陶然。月弓暉谷裏。雲旌張嶺前。曦光已隱山。壯士且留連。

七言。述志。

天紙風筆畫雲鶴。山機霜杼織葉錦。後人聯句。

赤雀含書時不至。潛龍勿用未安寢。

五言。臨終一絕。

金烏臨西舍。鼓聲催短命。泉路無賓主。此夕誰家向。〔難い〕

釋智藏二首。

智藏師者。俗姓禾田氏。淡海帝世。遣學唐國。時吳越之間有高學尼。法師就尼受業。六七年中學業穎秀。同伴僧等頗有忌害之心。法師察之。計全軀之方。遂被髮陽狂奔蕩道路。察寫二藏要義。盛以木筒。着漆密封。負檐遊行。同伴輕蔑。以爲鬼狂。遂不爲害。太后持統天皇世。師向本朝。同伴登陸。曝涼經書。法師開襟對風曰。我亦曝涼經典之奧義。衆皆嗤笑以爲妖言。臨於試業。昇座敷演。辭義峻遠。音詞雅麗。論雖蜂起。應對如流。皆屈服莫不驚駭。帝嘉之。拜僧正。時年七十三。

五言。翫花鷺一首。〔第七〕

桑門〔實い〕窠言晤。策杖事迎逢。以此芳春節。忽值竹林風。求友鸛嬌樹。含香花笑叢。雖喜遨遊志。還愧乏雕虫。

五言。秋日言志一首。

欲知得性所。來尋仁智情。氣爽山川麗。風高物候芳。〔無い〕鷺巢辭夏色。鴈渚聽秋聲。因茲竹林友。榮辱莫相驚。

葛野王二首。

王子者。淡海帝之孫。大友太子之長子也。母淨御原帝之長女。十市內親王。器範宏逸。風鑒秀遠。材稱棟幹。地兼帝戚。少而好學。博涉經史。頗愛屬文。兼能書畫。淨御原帝嫡孫。授淨大肆。拜治部卿。高市皇子薨後。皇太后引王公卿士於禁中。謀立日嗣。時群臣各挾私好。衆議紛紜。王子進奏曰。我國家爲法也。神代以來。子孫相承以襲天位。若兄弟相及。則亂從此興。仰論天心。誰能敢測。然以人



事推之。聖嗣自然定矣。此外誰敢間然乎。弓削皇子在座欲有言。王子叱之乃止。皇太后嘉其一言定國。特閱授正四位。拜式部卿。時年卅七。

五言。春日翫鶯梅一首。

聊乘休假景。入苑望青陽。素梅開素靨。嬌鶯弄嬌聲。對此開懷抱。優是暢愁情。不知老將至。但事酌春觴。

五言。遊龍門山一首。

命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。

大納言直大二中臣朝臣大嶋二首。自茲以降諸人

未得傳記。

五言。詠孤松一首。

隴上孤松翠。凌雲心本明。餘根堅厚地。貞質指高天。弱枝異萬草。茂葉同柱檠。孫楚高貞節。隱居悅登輕。

五言。山齋一首。

宴飲遊山齋。遨遊臨野池。雲岸寒猿嘯。霧浦挹聲悲。或樓葉落山逾靜。風涼琴益微。各得朝野趣。莫論攀桂期。

正三位大納言紀朝臣麻呂一首。年卅五。

五言。春日應詔一首。

惠氣四望浮。重光一園春。式宴依仁智。優遊麗詩人。崑山珠玉盛。瑤水花藻陳。階梅鬪素蝶。塘柳掃芳塵。天德十堯舜。皇恩霑萬民。

文武天皇二首。年廿五。

五言。詠月一首。

月舟移霧渚。楓檝泛霞濱。臺上澄流耀。酒中沈去輪。水下斜陰碎。樹除<sub>著</sub>光新。獨以星間鏡。還浮雲漢津。

五言。述懷一首。

年雖足戴冕。智不敢垂裳。朕常夙夜念。何以拙心匡。猶不師往古。何救元首望。然母三絕

務。且欲臨短章。

五言詠雪一首。

雲羅囊珠起。雪花含彩新。林中若柳絮。梁上似歌塵。代火暉霄篆。逐風迴洛濱。園裏看花李。冬條尙帶春。

從三位中納言大神朝臣高市麻呂一首年五十

五言。從駕應詔一首。

臥病已白鬚。〔髮〕意謂入黃塵。不期遂恩詔。〔遂〕從駕上林春。松巖鳴泉落。竹浦笑花新。臣是先進輩。濫陪後車賓。

大宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須二首。

年卅八。

五言。春日應詔二首。

玉管吐陽氣。春色啓禁圍。望山智趣黃。臨水仁狎敦。松風催雅曲。鶯啁添談論。〔今〕今日良醉德。〔誰〕難言湛露恩。

姑射遁太賓。崆巖索神仙。豈若聽覽隙。仁智

寓山川。神衿弄春色。清蹕歷林泉。登望繡翼徑。降臨錦鱗淵。絲竹時盤桓。文酒乍留連。薰風入琴臺。曷日照歌筵。岫室開明鏡。松殿浮翠烟。幸陪瀛洲趣。誰論上林篇。

正四位下治部卿犬上王一首。

五言。遊覽山水一首。

暫以三餘暇。遊息瑤池濱。吹臺睥睨始。挂庭舞蝶新。沐鳧双廻岸。窺鷺獨銜鱗。雲鬢酌烟霞。花藻誦英俊。留連仁智間。縱賞如談倫。雖盡林池樂。未翫此芳春。〔下目談〕

正五位上紀朝臣古麻呂二首。年五十九

七言。望雪一首。

無爲聖德重寸陰。有道神功輕球琳。垂拱端坐惜歲暮。披軒褰簾望遙岑。浮雲飄颻紫巖岫。驚飈蕭瑟響庭林。落雪霏々一嶺白。斜日黯々半山金。柳絮未飛蝶先舞。梅芳猶遲花早臨。夢裡鈞天尙易涌。松下清風信難斟。

五言。得聲清驚情四字一首。秋葉目錄

明離照。吳天重震啓。秋聲氣爽。烟霧發。時泰風雲清。玄燕翔已飯。寒蟬嘯且驚。忽逢文雅席。還愧七步情。

大學博士從五位下美努連淨麻呂一首。

五言。春日應詔一首。

玉燭凝紫宮。淑氣潤芳春。曲浦戲嬌鴛。瑤池躍（露）潛鮮。階前桃花映。塘上柳條新。輕烟松心入。轉鳥葉裡陳。絲竹遏廣樂。率舞洽往塵。此時誰不樂。普天蒙厚仁。

判事紀末茂一首。年卅一（一）

五言。臨水觀魚一首。

結宇南林側。垂釣北池潯。人來戲鳥沒。船渡綠萍沈。苔搖識魚有。縉盡覺潭深。空嗟芳餌下。獨見有貪心。

釋弁正二首。

弁正法師者。俗姓秦氏。性滑稽。善談論。少年

出家。頗洪玄學。大寶年中。遣學唐國。時遇李隆基（元）龍潛之日。以善圍碁。屢見賞遇。有子朝慶。朝元。法師及慶在唐死。元歸本朝。仕至大夫。天平年中。拜入唐判官。到大唐。見天子。天子以其父故（文）。特優詔。厚賞賜。還至本朝。尋卒。

五言。與朝主人。

鐘鼓沸城闌。戎蕃預國親。神明今漢主。柔遠靜胡塵。琴歌馬上怨。楊柳曲中春。唯有關山月。偏迎北塞人。

五言。在唐憶本鄉一絕。

日邊瞻日本。雲裡望雲端。遠遊勞遠國。長恨苦長安。

正五位下大學頭調忌寸老人一首。

五言。三月二日應詔一首。

玄覽動春節。宸駕出離宮。勝境既寂絕。雅趣亦無窮。折花梅苑側。酌醴碧瀾中。神仙非存意。廣濟是攸同。鼓腹太平日。共詠太平風。



贈正一位太政大臣藤原朝臣史五首。年六十三。

五言。元日應詔一首。

正朝觀萬國。元日臨兆民。有政敷玄造。撫機御紫宸。年花已非故。淑氣亦惟新。鮮雲秀五彩。麗景耀三春。濟々周行士。穆々我朝人。感德遊天澤。飲和惟聖塵。

五言。春日侍宴應詔一首。

淑氣光天下。薰風扇海濱。春日歡春鳥。蘭生折蘭人。鹽梅道尙故。文酒事猶新。隱逸去幽藪。沒賢陪紫宸。

五言。遊吉野二首。

飛文山水地。命爵薛蘿中。漆姬控鶴舉。圯媛接莫通。煙光巖上翠。日影浪前紅。翻知玄圃近。對翫入松風。

夏身夏色古。烁津秋氣新。昔者同汾后。皇イ粉イ今之見

吉賓。靈仙駕鶴去。星客乘查遼。洛性拉流水。臨イ

素心開靜仁。

五言。七夕一首。

雲衣兩觀夕。月鏡一逢秋。機下非曾故。援息是威猷。鳳盖隨風轉。鵲影逐波浮。面前開短樂。別後悲長愁。

正五位下左大史荆助仁一首。年卅七。

五言。詠美人一首。

巫山行雨下。洛浦迴雪霏。月泛眉間魄。雲開髻上暉。腰逐楚王細。體隨漢帝飛。誰知交甫珮。留客令忘歸。

大學博士從五下刀利康嗣一首。年八十一。

五言。侍宴一首。

嘉辰光華節。淑氣風自春。金堤拂弱柳。玉沼泛輕鱗。爰降豐宮宴。廣垂栢梁仁。八音寥亮奏。百味馨香陳。日落松影開。風和花氣新。俯仰一人德。唯壽萬歲真。

皇太子學士從五位下伊與部馬養一首。

年卅五。

五言。從駕應詔一首。

帝堯叶仁智。仙蹕玩山川。疊嶺杳不極。驚波斷復連。雨晴雲卷羅。霧盡峯舒蓮。舞庭落夏槿。歌林驚秋蟬。仙槎泛榮光。風笙帶祥烟。豈獨瑤池上。方唱白雲天。

從四位下播磨守大石王一首。年五十七。

五言。侍宴應詔一首。

淑氣浮高閣。梅花灼景春。歡睽留金堤。神澤施羣臣。琴瑟設仙籥。文酒啓水濱。叨奉無限壽。俱頌皇恩均。

大學博士田邊史百枝一首。

五言。春苑應詔一首。

聖情敦汎愛。神功亦難垠。(來)唐鳳翔臺下。周魚躍水濱。松風韻添詠。梅花薰帶身。琴酒開芳苑。丹墨點英人。適遇上林會。忝壽万年春。

從四位下兵部卿大神朝臣安麻呂一首。

年五十二。

五言。山齋言志一首。

欲知閑居趣。來尋山水幽。浮沈烟雲外。攀翫野花秋。稻葉負霜落。蟬聲逐吹流。祇爲仁智賞。何論朝市遊。

從三位左大弁石川朝臣石足一首。年六十。

五言。春苑應詔一首。

聖衿愛良節。仁趣動芳春。素庭滿英才。紫閣引雅文。水清瑤池深。花開禁苑新。戲鳥隨波散。仙舟逐石廻。舞袖留翔鶴。歌聲落梁塵。今日足忘德。勿忘唐帝民。(來)

從四位下刑部卿山前王一首。

五言。侍宴一首。

至德洽乾坤。清化朗嘉辰。四海旣無爲。九域正清淳。元首壽千歲。股肱頌三春。優々沐恩者。誰不仰芳塵。

正五位上近江守采女朝臣比良夫一首。

年五十。

五言。春日侍宴應詔一首。

論道與唐儕。語德共虞隣。冠周埋尸愛。賀〔篇〕殷解網仁。淑景蒼天麗。嘉氣碧空陳。葉綠園柳月。花紅山櫻春。雲間頌皇澤。日下沐芳塵。宜獻南山壽。千秋衛北辰。

正四位下兵部卿安倍朝臣首名一首。年六十四。

五言。春日應詔一首。

世頌隆平德。時謠交泰春。舞衣搖樹影。歌扇動梁塵。湛露重仁智。流霞輕松筠。凝麈賞無倦。花將月共新。

從二位大納言大伴宿禰旅人一首。年六十七。

五言。初春侍宴一首。

寬政情既遠。迪古道惟新。穆々四門客。濟々三德人。梅雪亂殘岸。烟霞接早春。共遊聖主澤。同賀擊壤仁。

從四位下左中弁兼神祇伯中臣朝臣人足二首。年五十。

五言。遊吉野宮二首。

惟山且惟水。能智亦能仁。万代無埃垓。一朝逢異イ招民。風波轉入曲。魚鳥共成倫。此地即方丈。誰說桃源賓。

仁山狎鳳閣。智水啓龍樓。花鳥堪沈翫。何人不淹留。

大伴王二首。

五言。從駕吉野宮應詔二首。

欲尋張騫跡。幸逐河源風。朝雲指南北。夕霧正西東。嶺峻絲響急。谿曠竹鳴融。將歌造化趣。握素愧不工。

山幽仁趣遠。川淨智懷深。欲訪神仙迹。追從吉野潯。

正五位下肥後守道公首名一首。年五十六。

五言。秋宴一首。

望苑商氣艷。鳳池煖水清。〔無イ〕晚鶯吟風還。新鴈拂露驚。昔聞濠梁論。今辨遊魚情。芳筵此〔餘イ〕俺友。追



節結雅聲

從四位上治部卿境部王二首。年廿五。

五言。宴長王宅一首。

新年寒氣盡。上月濟光輕。〔淑ろ〕送雪梅花笑。含霞竹葉清。歌是飛塵曲。絃卽激流聲。欲知今日賞。咸有不飯情。

五言。秋夜山池一首。

對峯傾菊酒。臨水拍桐琴。忘飯待明月。何憂夜漏深。

大學頭從五位下山田史三方四首。

五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。并序。

君王以敬愛之冲衿。廣闢琴罍〔樽し〕之賞。使人承敦厚之榮命。欣戴鳳鸞之儀。於是琳瑯滿目。蘿薜充筵。玉俎雕華。列星光於烟幕。珍羞錯味。分綺色於霞帷。羽爵騰飛。混賓主於浮蟻。清談振發。忘貴賤於窓雞。歌臺落塵。郢曲與巴音雜。響。咲林開靨。珠暉共霞影相依。于時露凝。晏

序。風轉商郊。寒蟬唱而柳葉飄。霜雁度而蘆花落。小山丹桂。流彩別愁之篇。長坂紫蘭。散馥同心之翼。日云暮矣。月將繼焉。〔除し〕醉我以五十之文。既舞蹈於飽德之地。博我以三百之什。且狂簡於叙志之場。清寫西園遊。兼陳南浦之送。含毫振藻。式贊高風。〔云々〕

五言。七夕一首。

金漢星榆冷。銀河月桂秋。靈姿理雲鬢。仙駕度潢流。窈窕鳴衣玉。玲瓏映彩舟。所悲明日夜。誰慰別離憂。

五言。三月三日曲水宴一首。

錦巖飛瀑激。春岫暉桃開。不憚流水急。唯恨盞遲來。

從五位下息長真人臣足一首。年卅四。

五言。春日侍宴。

物候開韶景。淑氣滿地新。聖衿屬暄節。置酒引搢紳。帝德被千古。皇恩洽萬民。多幸憶廣宴。還悅湛露仁。

從五位下出雲介吉智首一首。年六十八

五言。七夕一首。

冉々逝不留。時節忽驚秋。菊風披夕霧。桂月照蘭洲。仙車渡鵲橋。神駕越清流。天庭陳相嘉。華閣釋離愁。河橫天欲曙。更歎後期悠。

主稅頭從五位下黃文連備一首。年五十六

五言。春日侍宴一首。

玉殿風光暮。金墀春色深。雕雲遏歌響。流水散鳴琴。燭花粉壁外。星燦翠烟心。欣逢則聖日。束帶仰韶音。

從五位下刑部少輔兼大學博士越智直廣

江一絕。

五言。述懷。

文藻我所難。莊老我所好。行年已過半。今更爲何勞。

從五位下常陸介春日藏老一絕。年五十二。

五言。述懷。

花色花枝染。鶯吟鶯谷新。臨水開良宴。泛爵賞芳春。

從五位下大學助背奈王行文二首。年六十

五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。賦得風字。

嘉賓韵少雅。設席嘉大同。鑒流開筆海。攀桂登談叢。盃酒皆有月。歌聲共逐風。何事專對士。幸用李陵弓。

五言。上巳禊飲應詔。

皇慈被萬國。帝道沾羣生。竹葉禊庭滿。桃花曲浦輕。雲浮天裏麗。樹茂苑中榮。自顧試庸短。何能繼歡情。

皇太子學士正六位上調忌寸古麻呂一首。

五言。初秋於長王宅宴新羅客。

一面金蘭席。三秋風月時。琴樽叶幽賞。文華叙離思。人含大王德。地若小山基。江海波潮靜。披霧豈難期。

正六位上刀利宣令二首。年五十九〔或七十九〕

五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。〔賦得〕

玉燭調秋序。金風扇月幃。新知未幾日。送別何依々。山際愁雲斷。人前樂緒稀。相顧鳴鹿爵。相送使人歸。

五言。賀五八年。

縱賞青春日。相期白髮年。清生百萬聖。岳士半千賢。〔下〕宴當時宅。披雲廣樂天。茲時盡清素。何用子雲玄。

大學助教從五位下下毛野朝臣虫麿一首。〔年〕

六。五言。秋日於長王宅宴新羅客一首。〔并序〕

〔賦得〕

夫秋風已發。張步兵所以思飯。秋氣可悲。宋大夫於焉傷志。然則歲光時物。好事者賞。

而可憐。勝地良遊。相遇者懷而忘返。況乎皇明撫運。時屬無爲。文軌通而華夷翁欣載之。〔或〕心。禮樂備而朝野得歡娛之致。長王以五日休暇。披鳳閣而命芳筵。使人以千里羈遊。俯雁池而沐恩眄。於是彫俎煥而繁陳。羅薦紛而交映。芝蘭四座。去三尺而引君子之風。祖餞百壺。敷一寸而酌賢人之酌。琴書左右。言笑縱橫。物我兩忘。自拔宇宙之表。枯榮双遣。〔遺〕何必竹林之間。此日也溽暑方間。長皇向晚。寒雲千嶺。〔深〕涼風四域。白露下而南亭肅。蒼烟生以北林藹。草也樹也。搖落之興緒難窮。觴兮詠兮。登臨之送歸易遠。加以物色相召。煙霞有奔命之塲。山水助仁。風月無息肩之地。〔北〕請染翰操紙。卽事形言。飛西傷之華篇。繼此梁之芳韻。人操一字。

聖時逢七百。祚運啓一千。況乃梯山客。垂毛亦比肩。寒蟬鳴葉後。朔雁度雲前。獨有飛鸞曲。



竝入別離絃。

從五位下備前守田中朝臣淨足一首。

五言。晚秋於長王宅宴一首。

萋々秋云暮。飄々葉已涼。西園開曲席。東閣引珪璋。水庭遊鱗戲。巖前菊氣芳。君候愛客日。霞色泛鸞觴。

左大臣正二位長屋王三首。年五十四。

五言。元日宴應詔。

年光泛仙籞。月色照上春。玄圃梅已故。紫庭桃欲新。柳絲入歌曲。蘭香染舞巾。於焉三元節。共悅望雲仁。

五言。於寶宅宴新羅客一首。賦得三字。烟字。

高晏開遠照。遙嶺靄浮煙。有愛金蘭賞。無疲風月筵。桂山餘景下。菊浦落霞鮮。莫調滄波隔。長爲壯思篇。

五言。初春於作寶樓置酒。

景麗金谷室。年開積草春。松烟双吐翠。櫻柳分

含新。嶽高閭雲路。魚驚亂藻濱。激泉移舞袖。流聲韵松筠。

從三位中納言兼權造長宮安倍朝臣廣庭

二首。年七十四。

五言。春月侍宴。

聖衿感淑氣。高會啓芳春。鑄五齊濁盈。樂萬國風陳。花舒桃苑香。草秀蘭筵新。堤上飄絲柳。波中浮錦鱗。濫叨陪恩席。含毫愧才貧。

五言。秋日於長王宅宴新羅客。賦得三字。流字。

山牖臨幽谷。松林對晚流。宴庭招遠使。離席開文遊。蟬息涼風暮。雁飛明月秋。傾斯浮菊酒。願慰轉蓬憂。

大宰大貳正四位下紀朝臣男人三首。年五十七。

七言。遊吉野川。

万丈崇巖削成秀。千尋素濤逆折流。欲訪鍾池越潭跡。留連美稻逢槎洲。美稻一作茅渚。

五言。扈從吉野宮。

鳳蓋停南岳。追尋智與仁。嘯谷將孫語。攀藤共許親。峯巖夏景變。泉石秋光新。此地仙靈宅。何須姑射倫。

五言。七夕。

犢鼻標竿日。隆腹麗書爍。風亭悅仙會。針閣賞神遊。月斜孫岳嶺。波激子池流。〔歡〕懽情未充半。天漢曉光浮。

正六位上但馬守百齊公和麻呂三首。年五十六。

五言。初春於左僕射長王宅。〔謙〕

帝里浮春色。上林開景華。芳梅含雪散。嫩柳帶風斜。庭燠將滋草。林寒未笑花。鶉衣追野坐。鶴蓋入山家。芳舍塵思寂。拙悵風響譁。琴罇興未已。誰載習池車。

五言。七夕。

仙期星織室。神駕逐河邊。咲臉飛花映。愁心燭處煎。昔惜河難越。今傷漢易旋。誰能玉機上。留怨待明年。

五言。秋日於長王宅宴新羅客。賦得時字。勝地山園宅。秋天風月時。置酒開桂賞。倒屣逐蘭期。人是鷄林客。曲卽鳳樓詞。〔懷歎〕青海千里外。白雲一相思。

正五位上大學博士守部連大隅一首。年七十三。

五言。侍宴。

聖衿愛韶景。山水翫芳春。〔樹〕椒花帶風散。柏葉含月新。冬花消雪巔。寒鏡泮冰津。幸陪濫吹竽。還笑擊壤民。

正五位下圖書頭吉田連宜二首。年七十。

五言。秋日於長王宅宴新羅客。賦得秋字。

西使言畝日。南登餞送秋。人隨蜀星遠。驂帶斷雲浮。一去殊鄉國。万里絕風牛。未盡新知趣。還作飛乖愁。

五言。從駕吉野宮。〔谷〕

神居深亦靜。勝地寂腹幽。雲卷三舟谿。霞開八石洲。葉黃初送夏。桂白早迎秋。今日夢淵夕。

遺響千年流。

外從五位下大學頭箭集宿禰虫麻呂二首。

五言。侍<sub>レ</sub>讌。

聖豫開<sub>二</sub>芳序<sub>一</sub>。皇恩施<sub>二</sub>品生<sub>一</sub>。流霞酒處泛。薰吹曲中輕。紫殿連珠絡。丹墀<sub>レ</sub>宴草榮。卽此乘槎客。俱欣<sub>二</sub>天上情<sub>一</sub>。

五言。春於<sub>二</sub>左僕射長王宅<sub>一</sub>宴。

靈臺披<sub>二</sub>廣宴<sub>一</sub>。寶齊歡<sub>二</sub>琴書<sub>一</sub>。趙發<sub>二</sub>青鸞舞<sub>一</sub>。夏踊<sub>二</sub>赤鱗魚<sub>一</sub>。柳條未<sub>レ</sub>吐<sub>レ</sub>綠。梅葉已<sub>レ</sub>芳<sub>レ</sub>蹊。<sub>〔賴い〕</sub>卽是忘<sub>レ</sub>歸地。芳辰賞<sub>レ</sub>巨<sub>レ</sub>舒。

從五位下陰陽頭兼皇后宮亮大津連首二

首。<sub>〔年六十〕</sub>

五言。和<sub>二</sub>藤原太政遊吉野川<sub>一</sub>之作。<sub>〔仍用前韵〕</sub>

地是幽居宅。山惟帝者仁。潺湲浸<sub>二</sub>石浪<sub>一</sub>。雜沓應<sub>二</sub>琴鱗<sub>一</sub>。靈懷對<sub>二</sub>林野<sub>一</sub>。陶性在<sub>二</sub>風堙<sub>一</sub>。<sub>〔煙い〕</sub>欲知<sub>二</sub>歡宴曲<sub>一</sub>。滿酌自忘<sub>二</sub>塵<sub>一</sub>。

五言。春日於<sub>二</sub>左僕射長王宅<sub>一</sub>宴。

日華臨<sub>二</sub>水動<sub>一</sub>。風景麗<sub>二</sub>春堤<sub>一</sub>。庭梅已<sub>レ</sub>含笑。門柳未<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>眉<sub>一</sub>。琴罇宜<sub>二</sub>此處<sub>一</sub>。賓客有<sub>二</sub>相追<sub>一</sub>。飽<sub>レ</sub>德良爲<sub>二</sub>醉<sub>一</sub>。傳<sub>二</sub>盞莫<sub>一</sub>遲<sub>二</sub>夕<sub>一</sub>。

贈正一位左大臣藤原朝臣總前三首。<sub>〔年五十七〕</sub>

五言。七夕。

帝里初涼至。神衿翫<sub>二</sub>千秋<sub>一</sub>。瓊筵振<sub>二</sub>雅藻<sub>一</sub>。金閣啓<sub>二</sub>良遊<sub>一</sub>。鳳駕飛<sub>二</sub>雲路<sub>一</sub>。龍車越<sub>二</sub>漢流<sub>一</sub>。欲知<sub>二</sub>神仙會<sub>一</sub>。青鳥入<sub>二</sub>瓊樓<sub>一</sub>。

五言。秋日於<sub>二</sub>長王宅<sub>一</sub>宴新羅客。<sub>〔賦得難字〕</sub>

職貢梯航使。從此及<sub>二</sub>三韓<sub>一</sub>。岐路分<sub>二</sub>衿易<sub>一</sub>。琴罇促<sub>二</sub>膝難<sub>一</sub>。山中猿吟斷。葉裏蟬音寒。贈<sub>レ</sub>別無<sub>二</sub>言語<sub>一</sub>。愁情幾<sub>二</sub>萬端<sub>一</sub>。

五言。侍<sub>レ</sub>宴一首。

聖教越<sub>二</sub>千禮<sub>一</sub>。<sub>〔禩い〕</sub>英聲滿<sub>二</sub>九垓<sub>一</sub>。無爲息<sub>二</sub>無事<sub>一</sub>。垂拱勿<sub>二</sub>勞塵<sub>一</sub>。斜暉照<sub>二</sub>蘭麗<sub>一</sub>。和風扇<sub>二</sub>物新<sub>一</sub>。花樹開<sub>二</sub>一嶺<sub>一</sub>。絲柳飄<sub>二</sub>三春<sub>一</sub>。錯繆殷湯網。繽紛周地蘋。鼓<sub>レ</sub>枻遊<sub>二</sub>南浦<sub>一</sub>。肆<sub>二</sub>筵樂<sub>一</sub>東濱。



正三位式部卿藤原朝臣宇合六首。年冊四。

五言。暮春曲宴南池。并序。

夫王畿千里之間。誰得勝地。(池也)帝京三春之內。

幾知行樂。則有沈鏡小池。勢無劣於金谷。

染翰良友。數不過於竹林。爲弟爲兄。醉花

醉月。包心中之四海。盡善盡美。對曲裏之

長流。是日也人乘芳夜。時屬暮春。映浦紅

桃。半落輕錦。低岸翠柳。初拂長絲。於是林

亭問我之客去來花邊。池臺慰我之主。賓左右

琴罇。月下芬芳。歷歌處而催扇。風前意氣。

步舞場而開衿。雖歡娛未盡。而能夏紀筆。

盡各言志。探字成篇云爾。

得地乘芳月。臨池送落暉。琴罇何日斷。醉裏

不忘飯。

七言。在常陸贈倭判官留在京一首。并序。

僕與明公忘言歲久。義存伐木。道叶探葵。

待君千里之駕。于今三年。懸我一箇之榻。於

此九秋。如何授官同日。乍別殊鄉。以爲判

官。公繫等冰壺。明逾水鏡。學隆万卷。智載

五車。留驥足於將展。預琢玉條。迴鳬鳥之

擬飛。忝簡金科。何異宣尼返魯。剛定詩書。

叔孫入漢制。設禮儀。聞夫天子下詔。包列

置師。咸審才周。茲擇三能之逸士。使各

得其所。明公獨自遺闕此舉。理合先進。還

是後夫。譬如吳馬瘦。鹽人尙無識。楚臣泣玉

世獨不悟。然而歲寒後驗。松竹之貞。風生廼

解芝蘭之馥。非鄭子產幾失。然明。非齊桓

公何舉寧戚。知人之難匪今日耳。遇時之

罕自昔然矣。大器之晚。終作寶質。如有我

一得之言。庶幾慰君三思之意。今贈一篇之

詩。輒示寸心之歎。其詞曰。

自我弱冠從王事。風塵歲月不曾休。褰帷獨坐

邊亭夕。懸榻長悲搖落秋。琴瑟之交遠相阻。芝

蘭之契接無由。無由何見李將鄭。有列何逢

道與猷。馳心悵望白雲天。寄語徘徊明月前。日下皇都君抱玉。雲端邊國我調絃。清絃入化經三歲。美玉韜光幾度年。知己難逢匪今耳。忘言罕遇從來然。爲期不怕風霜觸。猶似巖心松栢堅。

七言。秋日於左僕射長王宅宴。

帝里烟雲乘季月。王家山水送秋光。霑蘭白露未催臭。泛菊丹霞自有芳。石壁蘿衣猶自短。山扉松蓋埋然長。遨遊已得攀龍鳳。大隱何用覓仙場。

五言。悲不遇。

賢者悽年暮。明君冀日新。（日い）周占載逸老。殷夢得伊人。搏舉非同翼。相忘不異鱗。南冠勞楚奏。北節倦胡塵。學類東方朔。年餘朱買臣。二毛雖已富。万卷徒然貧。

五言。遊吉野川。

芝蕙蘭蓀澤。松柏桂椿岑。野客初披薜。朝隱暫

投簪。忘筌陸機海。飛繳張衡林。清風入阮嘯。流水韵嵇琴。天高槎路遠。河廻桃源深。山中明月夜。自得幽居心。

五言。奉西海道節度使之作。

往歲東山役。今年西海行。行人一生裏。幾度倦邊兵。

從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣万里五首。

五言。暮春於第園池置酒并序。

僕聖代之狂生耳。直以風月爲情。魚鳥爲翫。貪名徇利。未適冲襟。對酒當歌。是諧私願。乘良節之已暮。尋昆弟之芳筵。一曲一盃盡。歡情於此地。或吟或詠。縱逸氣於高天。千歲之間。嵇康我友。一醉之飲。伯倫吾師。不慮軒冕之榮身。徒知泉石之樂性。於是絃歌迭奏。蘭蕙同欣。宇宙荒芒。烟霞蕩而滿目。園池照灼。桃李咲而成蹊。既而日落庭清。罇

傾人醉。陶然不知老之將至也。夫登高能賦。卽是丈夫之才。休物緣情。豈非今日之事。宜裁四韵各述所懷云爾。

城市元無好。林園賞有餘。彈琴仲散地。下筆伯英書。天霽雲衣落。池明桃錦舒。寄言禮法士。知我有龔疎。

五言。過神納言墟。

一旦辭榮去。千年奉諫餘。松竹含春彩。容暉寂舊墟。清夜琴罇罷。傾門車馬疎。普天皆帝國。歸去遂焉如。

君道誰云易。臣義本自難。奉規終不用。飯去遂辭官。放曠遁嵇竹。沈吟珮楚蘭。天閭若一啓。將得水魚歡。

五言。仲秋釋奠。

運伶時窮蔡。吾衰久歎周。悲哉圖不出。逝矣水難留。玉俎風蘋薦。金罍月桂浮。天縱神化遠。万代仰芳猷。

五言。遊吉野川。

友非干祿友。賓是飡霞賓。縱歌臨水智。長嘯樂山仁。梁前招吟古。峽上竇聲新。琴樽猶未極。明月照河濱。

從三位中納言丹墀真人廣成三首。

五言。遊吉野山。

山水隨臨賞。巖谿逐望新。朝看度峰翼。夕亂躍潭鱗。放曠多幽趣。超然少俗塵。栖心佳野域。尋問美稻津。

七言。吉野之作。

高嶺嵯峨多奇勢。長河渺漫作廻流。鐘地超潭。豈凡類。美稻逢仙同洛洲。

五言。述懷。

少無瑩雪志。長無錦綺工。適逢文酒會。終愿不才風。

從五位下鑄錢長官高向朝臣諸足一首。

五言。從駕吉野宮。



在昔釣魚士。方今留鳳公。〔風い〕彈琴與仙戲。投江將神通。〔祐〕拓歌泛寒渚。霞景飄秋風。誰謂姑射嶺。駐蹕望仙宮。

釋道慈二首。

釋道慈者。俗姓額田氏。添下人。少而出家。聰敏好學。英材明悟。爲衆所〔歎い〕懽。太寶元年。遣學唐國。歷訪明哲。留連講肆。妙通三藏之玄宗。廣談五明之微旨。時唐簡于國中義學高僧一百人。請入宮中。令講仁王般若。法師學業穎秀。預入選中。唐王憐其遠學。特加優賞。遊學西土。十有六歲。養老二年。歸來本國。帝嘉之。拜僧綱律師。性甚骨鯁。爲時不容。解任飯遊山野。時出京師。造大安寺。時年七十餘。

五言。在唐奉本國皇太子。

三寶持聖德。百靈扶仙壽。壽共日月長。德與天地久。

五言。初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭。并序。

沙門道慈啓。以今月廿四日。濫蒙抽引。追預嘉會。奉旨驚惶。〔不い〕罔知攸措。但道慈少年落飭。常住釋門。至於屬詞談吐。元來未達。況乎道慈。機儀俗情全有異。香盞酒盃又不同。此庸才赴彼高會。理乖於事。事追於心。若夫魚麻易處。方圓改質。恐其失養性之宜。乖任物之用。撫躬之驚惕。不遑啓處。謹裁以韻。以辭高席。謹至以左。〔如い〕羞穢耳目。〔編素い〕素緇查然別。金漆諒難同。衲衣蔽寒体。綴鉢足飢隴。結蘿爲垂幕。枕石臥巖中。抽身離俗累。滌心守眞空。策杖登峻嶺。披襟稟和風。桃花雪冷々。竹溪山沖々。驚春柳雖變。餘寒在單躬。僧旣方外士。何煩入宴宮。

外從五位下石見守麻田連陽春一首。年五十六。

五言。和藤江守詠裨叡山先考之舊禪處。

柳樹之作。

近江惟帝里。裨叡寔神山。山靜俗塵寂。谷閑眞理專。<sup>〔等し〕</sup>於穆我先考。獨悟闡芳緣。寶殿臨空構。梵鐘入風傳。煙雲萬古色。松栢九冬專。日月荏苒去。慈範獨依々。寂寞精禪處。俄爲積草堀。古樹三秋落。寒草九月衰。唯餘兩楊樹。孝鳥朝夕悲。

外從五位下大學頭鹽屋連古麻呂一首。

五言。春日於左僕射長屋王宅宴。

卜居傍城闕。乘輿引朝冠。繁絃辨山水。妙舞舒齊紈。柳條風未煖。梅花雪猶寒。故情良得所。願言如金蘭。

從五位下上總守伊與連古麻呂一首。

五言。賀五八年宴。

万秋長貴戚。五八表遐年。<sup>〔後い〕</sup>眞率無前役。鳴求一愚賢。令節調黃地。寒風變碧天。已應螽斯徵。何須顧太玄。

隱士民黑人二首。

五言。幽棲。

試出囂塵處。追尋仙桂叢。巖谿無俗吏。山路有樵童。泉石行々異。風煙處々同。欲知山人樂。松下有清風。

五言。獨坐山中。

煙霧辭塵俗。山川<sup>〔壯ろ〕</sup>處居。此時能草賦。風月自輕余。

釋道融五首。

釋道融者。俗姓波多氏。少遊槐市。博學多才。特善屬文。性殊端直。昔丁母憂。寄住山寺。偶見法華經。慨然歎曰。我久貧苦。未見寶珠之在衣中。周孔糟粕。安足以留意。遂脫俗累。落飭出家。精進苦行。留心戒律。時有宣律師六帖抄。<sup>〔卷イ〕</sup>辭義隱密。當時徒絕無披覽。法師周觀未踰浹辰。敷講莫不洞達。世讀此書。從融始也。時皇后嘉之。施絲帛三百匹。

法師曰。我爲菩提修法施耳。因玆望報。市井之事耳。遂策杖而遁。自以此以下可有五首詩。等無歎今闕焉。

我所思兮在無漏。樂土欲往從兮貪曠難。行且老令路險易子在由己。壯士去兮不復還。再

山中。

山中今何在。倦禽日暮還。草廬風濕裏。桂月水石間。殘果宜遇老。衲衣且免寒。玆地無伴侶。携杖上峯巒。

從三位中納言兼中務卿石上朝臣乙麻呂四首。

石上中納言者。左大臣第三子也。地望清華。人才穎秀。雍容閑雅。甚善風儀。雖勗志典墳。亦頗愛篇翰。嘗有朝譴。飄寓南荒。臨淵吟澤。寫心文藻。遂有銜悲藻兩卷。今傳於世。天平年中。詔簡入唐使。元來此舉難得其人。時選朝堂。無出公右。遂拜大使。衆僉悅服。爲時所推。皆此類也。然遂不往。其後授

從三位中納言。自登台位。風采日新。芳猷雖遠。遺列蕩然。時年。

五言。飄寓南荒贈在京故友一首。

遼復遊千里。徘徊惜寸心。風前蘭送馥。月後桂舒陰。斜雁凌雲響。輕蟬抱樹吟。相思知別慟。徒弄白雲琴。

五言。贈掾公之遷任入京一首。

余含南裔怨。君咏北征詩。詩興哀煇節。傷哉槐樹衰。彈琴顧落景。步月誰逢稀。相望天垂別。分後草長違。(莫)

五言。贈舊識一首。

万里風塵別。三冬蘭蕙衰。霜花逾入鬢。寒氣益頰眉。夕鴛迷霧裏。曉雁苦雲垂。開衿期不識。吞恨獨傷悲。

五言。煇夜閨情一首。

他鄉頻夜夢。談與麗人同。寢裏歡如實。驚前恨泣寒。空思向桂影。獨坐聽煇風。山川險易路。



展轉憶閨中。

正五位下中宮少輔葛井連廣成二首。

五言奉和藤太政佳野之作二首。仍用前韵四字。

物外置塵遠。山中幽隱親。笛浦棲丹鳳。琴淵躍

錦鱗。月後楓香落。(香林)風前松響陳。開仁對山路。獵

智賞河津。

五言。月夜坐河濱一絕。

雲飛低玉柯。月上動金波。落照曹王苑。流光織

女河。

亡名氏。

五言。歎老。

臺翁雙鬢霜。伶俜須自怜。春日不須消。笑拈

梅花坐。戲嬉似少年。山水元無主。死生亦有

天。心爲錦綢美。自要布裘纏。城隍雖阻絕。寒

月照無邊。

長久二年冬十一月二十八日。灯下書之。

古人三餘。今已得二者也。

懷風藻

文章生惟宗孝言

此書蓮華王院寶藏之本也。久埋塵埃。人不知之。康永元年之比撰出之。上古之風味。尤有興。仍今書寫之。

右以奈佐勝臯屋代弘賢藏本校合了

〔更以印本校謄及伴直方校本朱書校謄一校了〕

# 群書類從卷第二百二十三

## 文筆部二

### 凌雲集序

從五位上左馬頭兼內藏頭美濃守臣小野朝臣岑守上

臣岑守言。魏文帝有曰。文章者經國之大業。不朽之盛事。年壽有時而盡。榮樂止乎其身。信哉。伏惟<sup>陛</sup>皇帝階下。握<sup>茶</sup>哀紫極。御<sup>陛</sup>辨丹霄。春臺展<sup>茶</sup>熙。秋柰翦繁。睿知天縱。艷藻神授。猶且學以助<sup>茶</sup>聖。問而增裕也。屬<sup>茶</sup>世機之靜謐。託<sup>茶</sup>琴書而終<sup>茶</sup>日。歎<sup>茶</sup>光陰之易暮。惜<sup>茶</sup>斯文之將墜。爰詔<sup>茶</sup>臣等。撰<sup>茶</sup>集近代以來篇什。臣以<sup>茶</sup>不才。忝承<sup>茶</sup>絲綸命。汗代大匠。傷手爲<sup>茶</sup>期。臣今所<sup>茶</sup>集。掩<sup>茶</sup>其瑕疵。舉<sup>茶</sup>其警奇。以表<sup>茶</sup>一篇盡善之未<sup>茶</sup>易。得<sup>茶</sup>道不居

上。失<sup>茶</sup>時不降<sup>茶</sup>下。無言<sup>茶</sup>存亡。一依<sup>茶</sup>爵次。至<sup>茶</sup>若<sup>茶</sup>御製令製。名高<sup>茶</sup>象外。韻絕<sup>茶</sup>環中。豈臣等能所<sup>茶</sup>議乎。而殊被<sup>茶</sup>詔旨。敢以採擇。水夷讚洋詠井<sup>茶</sup>之見。不及<sup>茶</sup>大陽昇景化草之明。斯迷博<sup>茶</sup>我以<sup>茶</sup>文。欲<sup>茶</sup>罷不能。辱因編載。卷軸生<sup>茶</sup>光。猶<sup>茶</sup>川含<sup>茶</sup>珠而水清。淵流<sup>茶</sup>玉而岸潤。起<sup>茶</sup>自<sup>茶</sup>延曆元年。終<sup>茶</sup>于弘仁五年。作者<sup>茶</sup>二十三人。詩惣<sup>茶</sup>九十首。合爲<sup>茶</sup>一卷。名曰<sup>茶</sup>凌雲新集。臣之此撰。非<sup>茶</sup>臣獨斷。與<sup>茶</sup>從五位上行式部少輔菅原朝臣清公。大學助外<sup>茶</sup>從五位下勇山連文繼等。再三<sup>茶</sup>議。猶有<sup>茶</sup>不盡。必<sup>茶</sup>經<sup>茶</sup>天鑒。從四位下行播磨守臣賀陽朝臣豐年。當代大才也。迫<sup>茶</sup>緣病不朝。臣就問簡呈。更無<sup>茶</sup>異

論。從此定焉。臣岑守謹言。

凌雲集目錄

太上天皇 御製二首

詠桃花

賦櫻花

御製廿二首

落花篇

重陽節神泉苑錫宴群臣

九月九日於神泉苑宴群臣

夏日皇太子南池

秋日皇太弟池亭

秋日入深山

夏日藤冬嗣閑居院

河陽驛經宿有懷京邑

江亭曉興

春日宿江頭亭子

和冬嗣河陽作

和藤緒嗣過交野離宮

和朝臣嘉通聽早雁作

和菅原清公途中聞笙

和菅清公賦早雪

和進士貞主初春過菅祭酒舊宅

聽誦法華經

野美聞使邊城賜帽裘

餞朝嘉通慰問關東

贈寶和尚

贈錦寄空法師

〔綿本文〕

皇太弟五首

九月九日侍讌神泉苑

秋晚侍內殿宴

奉和宿江頭亭子

奉和江亭晚興

駕幸南池後日簡大將軍

參議左近衛大將從三位兼行春宮大夫美作守

藤原朝臣冬嗣三首

神泉苑雨中眺矚

和菅祭酒聞笙

奉和宿舊宮

從三位行常陸守菅野朝臣眞道一首

晚夏禮泉苑勒四字



從五位下行內膳正仲雄王二首。

早舟發

謁海上人

從四位下行播磨守賀陽朝臣豐年十三首

三月三日侍宴四首

晚夏神泉苑勒四字

留別故人

同宴紀千牛池亭作

別諸友入唐

賦得大史公自序傳

代琴之詞

逸人詞

高士吟

傷野將軍

左兵衛督從四位下兼行但馬守良岑朝臣安世

二首

九日侍宴神泉苑

早秋月夜

正五位下行紀伊守藤原朝臣道雄二首

詠雪

春日代妓

正五位下林宿彌彌娑婆二首

在難波江口贈野二郎

晚年歸學簡山請益菅原五郎

從五位上大外記兼因幡介上毛野潁人一首

春日歸田

內藏頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑

守十三首

落花篇

神泉苑釣臺

九日侍宴神泉苑

皇太弟池亭應製

奉和觀佳人蹋哥

奉和春女怨

奉和江亭晚興

奉和宿江頭亭子

奉傷坂將軍

賀賜新集

砂上卽佛

遠使邊城

別故人之任贈琴

從五位上行式部少輔菅原朝臣清公四首

九日侍宴神泉苑

途中聞笙

冬日逢雪

別王國父還京

征夷副將軍從五位下行陸奧介小野朝臣永見

二首

田家 遊寺

從五位下行日向權守淡海真人福良滿三首

早春田園 言志

被譴別豐後藤太守

散位從五位下仲科宿禰吉雄一首

秋夜臥病

外從五位上行山城介高丘宿禰第越二首

三日侍宴神泉苑 落花篇

左大史正六位上兼行伊勢權大掾坂上忌寸今

繼二首

涉信濃坂 詠史

從六位下守大內記大伴宿禰氏上一首

渤海入朝

從七位上守少內記滋野宿禰貞主二首

陪幸閑居院 王昭君

從八位上播磨權少掾多治比真人清貞二首

奉和春朝雨晴 和菅祭酒衰柳作

陸奧少目從八位下桑原公宮作一首

伏枕吟

文章生相摸權博士太初位下桑原公腹赤二首

春日過丈人山莊 秋日興飲

蔭孫無位巨勢朝臣志貴人一首

和過菅祭酒舊宅作

凌雲集

太上天皇 御製二首。

詠桃花一首。

春花百種何爲艷。灼々桃花最可憐。氣則嚴兮應制冠。味惟甘矣可求仙。一香同發薰朝吹。千笑共開映暮煙。願以成蹊枝葉下。終天長樹玉階邊。

賦櫻花

昔在幽岩下。光華照四方。忽逢攀折客。含笑宜三陽。送氣時多少。乘陰復短長。如何此一

物。擅美九春場。

御製廿二首。

神泉苑花宴賦落花篇。

過半青春何所催。和風數重百花開。芳菲歇盡無由駐。爰唱文雄賞宴來。見取花光林表出。造化寧假丹青筆。紅英落處鶯亂鳴。紫萼散時蝶群驚。借問濃香何獨飛。飛來滿坐堪襲衣。春園遙望佳人在。亂雜繁花相映輝。點珠顏綴駘驪吹。人懷中。嬌態閑。朝攀花。暮折花。攀花力盡衣帶賒。未厭芬芳徒徙倚。流連林表晚光斜。妖姬一翫已爲樂。不畏春風忽吹落。對此年美絕何憐。一時風景豈空捐。

重陽節神泉苑賜宴群臣勒空通風同。

登臨初九日。霽色敞秋空。樹聽寒蟬斷。雲征遠雁通。晚藥猶含露。衰枝不裊風。延祥盈把菊。高宴古今同。

九月九日於神泉苑宴群臣各賦一物

得秋菊。

旻商季序重陽節。菊爲開花宴千官。藥耐朝風今日笑。榮霑夕露此時寒。把盈玉手流香遠。摘入金杯辨色難。聞道仙人好所服。對之延壽動心看。

重陽節神泉苑同賦三秋大有年。題中取

韻。大韵成篇。

旻氣何寥郭。登高望悠悠。大田穫豐稔。從此歲工休。芳莢筵上薦。時菊盞中浮。林洞逢搖落。池清爲潦収。蟋蟀藏聲曉。蒹葭變色洲。重陽常宜宴。況復有年秋。

夏日皇太弟南池。

納涼儲貳南池裏。盡洗煩襟碧水灣。岸影見知楊柳處。潭香聞得菱荷間。風來前浦収煙遠。鳥散後林欲暮閑。天下共言貞萬國。何勞羽翼訪商山。

秋日皇太弟池亭賦天字五言。



玄圃秋云肅。池亭望爽天。遠聲驚旅雁。寒引聽林蟬。岸柳惟初□。潭荷葉欲穿。肅然幽興處。院裡滿茶煙。

秋日入深山。

歷覽那逢節序悲。深山忽感宋生詞。半天極嶂煙氣入。暗地幽溪日影遲。聽裏清猿啼古木。望前寒雁雜涼颼。炎氛盛夏風猶冷。況□高秋落照時。

夏日左大將軍藤冬嗣閑居院。

避暑時來間院裏。池亭一把釣魚竿。迴塘柳翠夕陽暗。曲岸松聲炎節寒。吟詩不厭搗香茗。乘興偏宜聽雅彈。暫對清泉滌煩慮。況乎寂寞日成歡。

河陽驛經宿有懷京邑。

河陽亭子經數宿。月夜松風惱旅人。雖聽山猿助客叫。唯能不憶帝京春。

江亭曉興。

今宵旅宿江村驛。漁浦漁歌響夜亭。水氣眠中

來濕枕。松聲覺後暗催聽。天邊曉月看如鏡。戶外朝山望似屏。記得煙霞春興足。況乎河畔草青々。

春日遊獵日暮宿江頭亭子。

三春出獵重城外。四望江山勢轉雄。逐兔馬蹄承落日。追禽鷹翻拂輕風。征船暮入連天水。明日孤懸欲曉空。不學夏王荒此事。爲思周卜遇非熊。

和左大將軍藤冬嗣河陽作。

節序風光全就暖。河陽雨氣更生寒。千峯積翠籠山暗。万里長江入海寬。曉猿悲吟誰斷得。朝花巧笑豈堪看。非唯物色催春興。別有泉聲落雲端。

和左金吾將軍藤緒嗣過交野離宮感舊作。

追想昔時過舊館。悽涼淚下忽霑襟。廢村已見人煙斷。荒院唯聞鳥雀吟。荊棘不知哥舞處。薜

蘿獨向戀情深。看花故事誰能語。空望浮雲轉傷心。

和左衛督朝臣嘉通秋夜寓直周廬聽早雁之作。

涼秋八月驚塞鴻。早報寒聲雜遠空。絕域傳書全漢信。關門表弓守胡戎。凌雲陣影低天末。叫夜遙音振水中。葵女彈琴清曲響。潘郎作賦興情融。朝搏渤澥事南度。夕宿煙霞耐朔風。感殺周廬寓直者。終宵不寢意無窮。

和菅清公秋夜途中聞笙。

秋欲彈時聞怪音。吹笙寫得鳳皇吟。鳴簧公曲添羌笛。列管催調協雅琴。新聲宛轉遙夜振。妙響聯綿遠風沈。途中暫聽腸應斷。况腹仙郎有興心。

和菅清公賦早雪。

雲晴朔方早雪降。從天落地本亡聲。班姬秋扇已無色。孫子夜書獨有明。梅柳此時花與絮。樓

臺併是銀將瓊。雖言委積未盈尺。須賀初冬瑞氣呈。

和進士眞生初春過菅祭酒宅悵然傷懷

書閣閑來冬變春。梅花獨笑向啼人。雖知世上必然理。猶恨門前斷舊賓。

聽誦法華經各賦一品得方便品題中取韵。

春暮禪心何寂寞。恭々傾耳聽經王。甚深知慧極難解。微妙因緣豈易量。續火香爐烟不滅。從風清梵響猶長。唯歸一乘權立二。引入群生有萬方。

史部侍野美聞使邊城賜帽裘。

歲晚嚴冬寒最切。忠臣爲國向邊城。貂裘暖帽宜羈旅。特贈卿之萬里行。

錢右親衛少將軍朝嘉通奉使慰撫關東探得臣。

遠使邊城撫殘虜。禁中賜餞送良臣。離庭物  
候雖初夏。向處風烟未換春。鄉心杳々切歸  
想。客路悠悠稀故人。別後卿能應努力。莫愁千  
里多苦辛。

贈賓和尚。

賓公遁跡星霜久。萬事無情愛寂然。水月尋常  
冷空性。風雷未敢動安禪。苦行獨老山中室。盟  
嗽偏宜林下泉。遙想焚香觀念處。寥々日夜着  
雲烟。

贈綿寄空法師。

間僧久住雲中嶺。遙想深山春尚寒。松栢斜知甚  
靜默。烟霞不解幾年飡。禪關近日消息斷。京邑  
如今花柳寬。菩薩莫嫌此輕贈。爲救施者世間  
難。

令製五首。

九月九日侍讌神泉苑各賦一物得秋露  
應製。

薜收警節秋云老。百卉初腓露已淒。池際凝荷殘  
葉折。岸頭洗菊早花低。未央闕側承雙掌。長信  
宮中起隻啼。謬忝恩筵何所賦。睇陽湛々被  
羣黎。

秋晚侍內殿宴。

季序將除風旣冷。禁垣木葉共含秋。當時聖主  
賜霑澤。不測鴻恩分外優。舞態近□看處變。歌  
聲遙入聽中留。微臣荷德良無力。但壽天基  
獻山丘。

奉和春日遊獵日暮宿江頭亭子應製。

二月平臯春草淺。千乘犯曉出城中。鶉驚遙似  
星光落。兔盡還疑月影空。合晴征船唯見火。連  
霄浦樹豈分紅。今朝聖想期何後。不異周王獵  
渭風。

奉和江亭晚興呈左神榮清藤將軍。

我后巡方春日晚。廻鑾駐驛次江亭。水流長製  
天然帶。山勢多奇造化形。岸上松聲眠裏雨。舟



中火色望前星。烟霞欲曙雞潮落。歸雁群鳴起廻汀。

駕幸南池後日簡大將軍。

南池葉暗惟初密。聖主追涼過小臣。此地從來天臨處。林花再得遇陽春。蕪蹊更輟先時跡。舊構還成昔日新。海岳鴻恩何以報。願當粉骨化灰塵。

參議左近衛大將從三位兼行春宮大夫美作守藤原冬嗣三首。

神泉苑雨中眺矚應製一首。

探得初字。

雨氣三秋冷。涼風四面初。蘆洲未低雁。芳餌自群魚。岸水飛還落。池荷卷且舒。從天恩盞下。不醉也焉如。

和菅祭酒秋夜途中聞笙之什。

高天日暮多秋感。退食飛纓下玉京。遊子吹笙乘甲夜。一長一短惱人情。風生柳際傳鸞響。月照槐間寫鳳形。完議虞音從此聽。跼々鳥獸

滿皇城。

奉和聖製宿舊宮應製一首。

林泉舊邸久陰々。今日三秋錫再臨。宿殖高松全古節。前栽細菊吐新心。荒涼靈沼龍還駐。寂歷稜岩鳳更尋。不異沛中聞漢筑。謳歌濫續大風音。

從三位行常陸守菅野朝臣眞道一首。

晚夏神泉苑同勒深臨陰心應製一首。

王母仙園近。龍宮寶殿深。追涼天驛幸。縱賞鳳輿臨。竹疎長竿節。松傾小蓋陰。醉臣迷聖造。唯有歲寒心。

從五位下行內膳正仲雄二首。

早舟發。

早旦偏舟發。微茫海未晴。浦邊孤樹遠。天際片帆征。釣火收殘燭。榜訶送迴聲。悠々雲水裏。鄉思轉傷情。

謁海上人。

韵勒遇樹住樹句孺務霧芋聚賦趣。

道者良雖衆。勝會不易遇。寢興思馬鳴。俯仰謁龍樹。一得遭吾師。歸食□寓住。飛流馴道眼。動殖潤慈澍。字母弘三乘。眞言演四句。石泉洗鉢童。鑪炭煎茶孺。眺矚存閑靜。栖遲忌劇務。寶幢拂雲日。香刹干烟霧。瓶口插時花。瓷心盛野芋。磬鳴員梵徹。鐘響老僧聚。流覽竺乾經。觀釋子流賦。受持灌頂法。頓入一如趣。從四位下行播磨守賀陽朝臣豐年十三首。

三月三日侍宴應詔

錫宴紫微中。皇歡被物忽。布恩優月令。分思激春風。柳葉依絲綠。櫻花拂舞紅。同茲霑德寓。具醉也融融。

三月三日侍宴應詔三首

問春開曲水。乘節施陽煦。獻壽千祥溢。含歡萬國附。烟霞處々□。飛鳥番々遇。殊冀高遊日。義和惣轡駐。

紫禁疏佳詔。青陽樂禊風。布帷分柳綠。襲佩

挺蘭紅。品彙春芳徧。早高夏預通。自然相率舞。何待后夔工。

禊賞千斯歲。恩榮一件春。露晞心已肅。雲上慶還申。松竹同宜古。鶯花併狀新。歡餘良景暮。日御借烏輪。

晚夏神泉苑釣臺同勒深臨陰心應製

神泉苑裡多雄勝。樓觀飛驚倒水深。玉樹長堆跨帝園。珠流曝布寫天臨。千端赫□承春渙。百品差池仰夏陰。今日優遊何所樂。群臣同有釣璣心。

留別故人

一茲阻面□。百里塊班條。交臂分張切。涉江悲望遙。風途飛藥敢。敢賊雲路別魂鎖。唯有流天月。相憶寄秋霄。

同元忠初春宴紀千牛池亭之作

以我龜疎性。閑齋喜遇逢。貞交符水石。深寄契寒松。酒湛情彌暢。琴幽賞自從。還暫久會日。

條已令邕容。

別諸友入唐。

數君爲國器。萬里涉長流。奮翼鵬天眇。軒髻鯤海悠。登山眉自結。臨水淚何□。但此僊天處。空見白雲浮。

史記竟宴賦得大史公自序傳。

宏材承五百。博瞻釁三千。第穴遺文借。梧嶷古冊全。尺一屈中天慶起。識大日官傳。張輔稱孤秀。五嶽且明耻。獨賢名高良史籍。身毀妬臣年。義魄懸聲價。爰言陵谷遷。

代琴之詞。

託根方據儉。抽幹已臨危。奔溜春秋壞。衡颺歲月吹。侍人誰復說。仙道幸先知。願載重輪響。高飛九寓垂。

逸人詞。

閑庭幽貞士。休慮潔旣攸。明心高翫晚秋。但想榮期三樂趣。還從汗漫九坂遊。

高士吟。

一室何堪掃。九州豈足步。寄言燕雀徒。寧知鴻鵠路。

傷野將軍。

蝦夷搆亂久。擇將屬吾賢。屈指馳三略。揚眉出二權。驤頭勳未展。馬革志方宣。完士何難過。徒悲凶問傳。

左兵衛督從四位下兼行但馬守良岑朝臣安世二首。

九月九日侍宴神泉苑各賦一物得秋蓮應製。

神泉御苑霜氛下。靈沼秋蓮過半黃。露泛穿杯眼一拙生玉。風吹舊眼眼一無復香。波收隱士三秋蓋。浦落幽人九月裳。妖艷佳人望已斷。爲因聖主水亭傍。

早秋月夜。

三秋三五夜。夜久夜風涼。虫網露懸白。樹條葉



未黃。

正五位下行紀伊守藤原朝臣道雄二首。

詠雪。

紛々白雪從千里。熒々漉々一何斜。疑是天中梅柳地。雨師風伯獵玄花。

春日代妓。古詩体。

通夜粧樓獨畫眉。春朝擬向歌舞臺。篋裡鬱金未薰衣。聖君數度使人催。

正五位下林宿禰娑婆二首。

自山崎乘江赴讚岐在難波江口述懷贈野二郎。

泛流催楫棹。指海共朝宗。漁火通霄烈。商帆拂曙逢。遙山疑接漠。遠樹似生江。可歎乘桴客。營々不得容。

久在外國晚年歸學。知舊零落已無其人。聊以述懷。簡山請益菅原五郎。桃李之報豈無壞。

晚年歸學館。舊識幾相辭。物是人非日。悲來樂去時。忘筌無故友。傾盖有新期。欲繞平生事。居然淚不持。

從五位上行大外記兼因幡介上毛野朝臣穎人一首。

春日歸田直疏。

干祿終無驗。歸田入弊門。庭荒唯壁立。籬失獨花存。空手飢方至。低頭日已昏。世途如此苦。何處遇春恩。

內藏頭從五位上兼左馬頭美濃守小野朝臣岑守十三首。

雜言。於神泉苑侍讌賦落花篇應製。

三陽二月春云半。雜樹衆花咲且散。鸞駕早來遍歷覽。奇香詭色互留翫。昔聞一縣榮河陽。今見仙源避秦漢。此時澹蕩吹和風。落蘂因之滿遠空。梅院不掃寸餘紫。桃源委積盡所紅。看花落。落花寂々聽無聲。青黃赤白天然染。南北東

西非有情。遊蝶息。尋葉初見。群蜂罷。釀草纔生。待花宴。花宴。何太合良辰。玉管千調無他曲。金罍百味自能醇。臺上美人奪花綵。欄中花綵如美人。人花兩々共相對。誰得分明。僞與眞。借問花節有期否。花開花落億萬春。

夏日神泉苑釣臺應製。

釣臺新結構。浮柱出從深。水近綸偏盡。軒低竿直臨。岸喧瀑布落。浦暗橘柚陰。自仰中孚化。同欣在落心。

九月九日侍宴神泉苑各賦一物得秋柳應製。

九月高颺吹暮柳。千條縮折無復柔。寒聲寥亮空留笛。衰蔭淒涼不障樓。短晷晚斜星舍冷。邊山盡暗塞途脩。哀生雖謝對霜靄。恩煦之餘未先秋。

秋日皇太弟池亭應製賦園字。

高秋八月氣將肅。叡興幽尋太弟園。古地猶居

帝城裏。杯池體勢絕煩喧。梨庭帶露冷菓落。蘆浦生風水葉翻。憶昔欲論吳季重。南皮之賞不足言。

奉和觀佳人蹋歌御製。

春女春粧言不及。無量無數滿華庭。心嬌膽小羞蹋步。聲裏微々壽千齡。洛津迴雪當韜影。巫嶺朝雲應歛行。河湯舊縣先亡色。金谷新園無復榮。泣眼看々不曾厭。徒然奪魂亦損明。還知人間仙路近。重見桃李目前生。

雜言奉和聖製春女怨。

春女怨。春日長兮怨復長。聞道陽和煦萬物。何偏寒妾一空牀。爲愁心死君不數。緣耻顏銷誰假粧。慈母教喻遂相泣。伴儔戲慰還共傷。強對鏡臺試拂塵。影中唯見顚顚人。平生容色不曾似。宿昔蛾眉迷自身。春女怨。吁嗟薄命良可憐。庭前隱映茂青草。階上班々點碧錢。林暮歸禽入簷簷。園囂遊蝶抱花眠。幽園獨寢危魂

魔。單枕夢啼粉顏穿。君若欲老腸斷處。高樓明月曉孤懸。

奉和江亭曉興詩應製。

傳舍前長枕。江側。滔々流水日夜深。本期旅客千里到。不慮變興九天臨。棹唱全聞邊俗語。漂歌半雜上都音。曉猿莫作斷腸叫。四海爲家帝者心。

奉和春日暮宿江頭亭子御製。

君王獵罷日云暮。江上郵亭駐綵輿。鑽石山流汲御井。□郡客館作重闌。鷄潮曉落波瀾急。蜃氣朝涵瀉鹵微。室乏草澤今在否。應知天子同載歸。

奉和傷右衛大將軍故宿禰御製。

蠡爾蝦夷不息亂。羽書力斗月夜傳。此時承命鑿凶出。千里戰勝厭捷旋。援武當居貳師右。論勳須初衛青前。豈圖丹壑潛相代。知與不知共潛然。廐馬長吟從戀主。良弓久橐不復弦。

柳條還生百中碎。伏石猶留一發穿。馬鬣新封未及燥。鷓鴣泥舊感欲覺先。滋養唯泣早朝露。古木空浮薄暮煙。天子哀傷下神筆。悠悠功德日月懸。魂貴儻君無所味。應載殊寵照重泉。

賀賜新集兼謝。

貿々庸人識多蹟。舉言不顧累相隨。偏恩哀讚神筆麗。謬失樞機味所宜。慎口三緘知先毀。悔過駟馬性空馳。俯焦寒戰未喻極。履薄春冰遂謝危。誰謂鴻私典肆々。免千國典被虐吹。天門中使賜臨辱。秘府新詩許獨披。花徑還開欲落咲。柳園尙看鬱茂垂。一生非分恩涯久。萬死何階報不訾。

砂土印佛應製。

檀印一點玉沙上。尊容倏忽手下生。四八靈相省工巧。八十妙好廢丹青。風來吹拂終填滅。誠見應不久停。唯有如々理法體。坦然無壞亦無成。



遠使邊城。

王事古來稱靡盬。長途馬上歲云闌。黃昏極嶂哀猿叫。明發渡頭孤月團。旅客期時邊愁斷。誰能坐識行路難。唯餘勅賜裘與帽。雪犯風牽不<sub>レ</sub>加寒。

別故人之任贈琴。

素琴申舊意。塵穢不嫌君。單父思良宰。武城望雅聞。重財非子好。輕贈是吾分。每對他鄉月。須彈慰離群。

從五位上行式部少輔菅原朝臣清公四首。

九月九日侍宴神泉苑各賦一物得秋山。

三山漂渺滄瀛外。五嶽嵯峨赤縣中。防霞古松千載翠。待風花葉九秋紅。落泉曝布懸飛鶴。晴雨收絲間薄紅。仁者樂之何所寄。國家襟帶在西東。

秋夜途中聞笙。

皇城陌上槐風隸。天漢波間桂月明。不知誰家

郎第幾。寫鸞摸鳳以吹笙。金商繞曲秋聲亮。玉管成文夜響清。王子偶仙何處在。落濱遺態使人驚。

冬日汴州上漂驛逢雪。

雲霞未辭舊。梅柳忽逢春。不分瓊瑤屑。來<sub>レ</sub>雷旅客巾。

越州別勅使王國父還京。

我是東番客。懷恩入聖唐。欲歸情未盡。別淚濕衣裳。

征夷副將軍從五位下行陸奧介小野朝臣永見二首。

田家。

結菴居三徑。灌園養一生。糟糠寧滿腹。泉石但歡情。水裏松低影。風前竹動聲。聊輸太平祝。獨守小山亭。

遊寺。

久倦樊籠苦。來尋解脫津。息心歸六度。改跡

仰三輪。水月非眞曉。空花是僞春。今朝昇覺路。何處犯迷塵。

從五位下行日向權守淡海真人福長滿三首。

早春田園。

寒牖五出花。空厨一罇酒。已迷帝王力。安辨天地久。四分一頃田。門外五株柳。差堪助貧興。何事貪富有。

言志。

孤樹輪困久。三秋零落期。風霜日夜積。榮曜待何時。

被別豐後藤太守。

故鄉何處在。天際白雲浮。歸鴈遙將沒。杳然漂查去不留。邊聲四面起。悲淚數行流。今日生死別。何年問白頭。

散位從五位下仲科宿禰善雄一首。

秋夜臥病。

臥來頻改歲。年去復逢秋。照月三更靜。無人四

壁幽。養形方已省。知命送非優。唯有風前樹。搖落使人然。

外從五位上行山城介高丘宿禰第越二首。

三月三日侍宴神泉苑應詔。

我皇徵樂事。元已宴華林。壽爵山府久。恩波謝深。看花前後落。聽鳥短長吟。既醉仍餘舞。何關樹石音。

雜言。於神泉苑侍宴賦落花篇應製。

落花飛々去。落丹墀。本謂隨風落。方知彼化歸。乍往乍還浮御蓋。一連一斷點仙衣。無心草木猶餘戀。況復微臣醉恩危。

左大史正六位上兼行伊勢權大掾坂上忌寸今繼二首。

涉信濃坂。

積石千里峻。危途九折分。人迷邊地雪。馬蹶半天雲。岩冷花難笑。溪深景易曛。鄉關何處在。客思轉紛々。

詠史。

陶潛不狎世。州里俗塵埃。始覺幽栖好。長歌歸去來。琴中唯得趣。物外已忘懷。柳掩先生宅。花薰處士杯。遙尋南岳徑。高嘯北窓隈。嗟爾千年後。遺聲一美哉。

從六位下守大內記大伴宿禰氏上一首。

渤海入朝。

自從明皇御寶曆。悠悠渤海再三朝。乃知玄德已深遠。歸化純情是最昭。片席聊懸南北吹。一般長冷去來潮。占星水上非無感。就日遙思眷我堯。

從七位上守少內記滋野宿禰貞主二首。

夏日陪幸左大將藤原冬嗣閑居院應製。

寂然閑院常馳道。祇候仙輿灑一路。酌茗藥室經行入。橫琴玳席倚岸居。松陰絕冷午時後。花氣猶薰風罷餘。水上青蘋莫赴浪。君王少選愛遊魚。

王昭君。

朔雪翻々沙漠暗。邊霜慘烈隴頭寒。行々常望長安日。曙色東方不忍看。

從八位上守播磨權少掾多治比真人貞清二首。

奉和御製春朝雨晴應製。

雨晴宸眺遠。雲罷彼蒼披。朝露懸餘滴。殘虹卷半規。梅香深淺度。柳色短長垂。氛靄從斯沒。翹心就堯曦。

和菅祭酒賦朱雀衰柳作。

皇城陌上楊將柳。兩々三々夾道斜。疇昔榮卒都不見。今時顛顚一應嗟。寒着樹非真葉。霏雪封枝是僞花。既就堯衢待恩煦。阿誰更憶陶潛家。

陸奧少目從八位下桑原公宮作一首。

伏枕吟。

勞伏枕伏枕不勝思。沈痾送歲力盡魂危。鬢謝蟬兮垂白。衣懸鶉兮化緇。悽然感物。物是



人非。撫□□以耿耿。陟岵岵而依々。悵雲花於遼落。嗟風樹於俄衰。池臺漸毀。僮僕先離。客斷柳門。群雀噪。書品蓬室。晚螢輝。月鑑帷兮影冷。風拂牖兮聲悲。聽離鴻之曉咽。覩別鶴之孤飛。倒絕兮悽。今日。淚潺湲兮想昔時。榮枯但理矣。倚伏同須期。特皇天之祐善。折靈藥以何爲。

文章生相摸權博士大初位下桑原公腹赤二首。

春日過丈人山莊探得飛字。

入春今幾日。聞道數鶯飛。煙沒主人柳。花薰客子衣。野童驅犢去。山叟負薪歸。何獨漢陰老。此間可絕機。

秋日於丈人山莊興飲探得簷字。

聞有幽栖地。捫蘿試一瞻。白雲杯下起。黃菊掌中黏。野近獸馴坐。林隣鳥望簷。登臨不外俗。吏隱兩相兼。

蔭孫無位巨勢朝臣志貴人一首。

和進士貞主初春過菅祭酒舊宅悵然傷懷之作。

間庭宿草無復掃。虛院孤松自依聲。但見平生風月處。春朝花鳥慘人情。

右以弘文院本及太田覃本校正了

群書類從卷第二百二十四

文筆部三

文華秀麗集序

從五位下守大舍人頭兼信濃守臣仲雄王上  
臣仲雄言。凌雲集者。陸奧守臣小野岑守等之所  
撰也。起於延曆元年。逮于弘仁五載。凡所綴  
緝九十二篇。自厥以來。文章間出。未逾四祀。  
卷盈百餘。豈非□□儲聰。製文之無虛月。朝  
英國俊。揆藻之靡絕時哉。或氣骨彌高。諧風  
騷於聲律。或輕清漸長。映綺靡於艷流。可謂輟  
變椎而增華。冰生水以加勵。英聲因而掩後。  
逸價藉而冠先。至瓊環與木李齊暉。蕭艾將  
蘭芬雜彩。寔由紉緹未異。篋笥仍同者矣。正  
三位大納言兼行左近衛大將陸奧出羽按察使

臣藤原朝臣冬嗣奉勅命。臣等□焉。臣謹與從  
五位上行式部少輔兼阿波守臣菅原朝臣清公。  
從五位下行大學助紀傳博士臣勇山連文繼。從  
六位下守大內記臣滋野宿禰貞主。從七位下守  
少內記兼行播磨少目臣桑原公腹赤等。各相平  
論甄定。取舍若有難審。上稟睿奉。先漏凌雲  
者。今議而錄之。竝皆以類題叙。取其易閱。凡  
作者廿六人。詩一百四十八首。分爲三卷。名曰  
文華秀麗集。鳳掖宸章。龍闈令製。別降綸旨。俯  
同縹帙。而天尊地卑。君唱臣和。故略作者之數。  
編採撫之中。臣謬以散材。忝侍詮簡。重承天  
渙。虔制茲序。臣仲雄上。

文華秀麗集卷上

遊覽

江頭春曉一首。

燒峨  
御製

江頭亭子人事睽。鼓枕唯聞古戍雞。雲氣濕衣知近岫。泉聲驚寢覺隣溪。天邊孤月乘流疾。山裏飢猿到曉啼。物候雖言陽和未。汀洲春草欲萋々。

春日嵯峨山院探得遲字一首。

同

氣序如今春欲老。嵯峨山院暖光遲。峯雲不覺侵梁棟。溪水尋常對簾帷。莓苔踏破經年髮。楊柳未懸伸月眉。此地幽閑人事少。唯餘風動暮猿悲。

春日侍嵯峨山院探得廻字應製一首。

涼和  
令製

嵯峨之院埃塵外。乍到幽情興偏催。鳥嘯遙聞綠堦壑。花香近得抱窓梅。攢松嶺上風爲雨。絕澗流中石作雷。地勢幽深光易暮。變輿且待莫東廻。

春日大弟雅院一首。

御製

詩家有興來雅院。雅院由來絕世閑。陽御雖看新柳色。陰堦常點舊苔斑。就暖晴花開簾外。欲巢時鳥啄庭間。此地端居翫風景。寂寥人事暫無關。

奉和春日江亭閑望一首。

仲雄王

凝流派上思。降蹕對紅花。野甸宸哀遠。川臯容望賒。猿深雲樹峽。鶴立浪痕沙。古橡松蘿院。春窓楊柳家。水鄉漁浦近。山館鳳庭遐。老圃鋤遲日。高帆高舫早霞。岸陰生液乳。洲暖長蘆芽。綢服侍臣馬。垂鬟公主車。驛門臨迴陌。亭子隱高葩。幸賴陪天覽。還同星渚查。



奉和春日江亭閑望一首。

巨識人

浩蕩三仲□。春晴万里天。園林半灼灼。原野盡芊芊。日煖鴛鴦水。風和楊柳煙。山光霽後綠。江氣晚來鮮。遠樹繞湖小。長波接海連。潮生孤嶼沒。霧卷巨帆懸。草色洲中短。花香窓外傳。歸聲聞去鴈。春響送鳴鵲。流靜看遊艇。溪幽聽落泉。興餘日已暮。江月照仙眠。

江樓春望應製一首。

野岑守

春雨濛々江樓黑。悠々雲樹盡微茫。橋頭孤立一竿柱。湖口競入千許檣。麥壠新色荒村綠。楓林初葉釣家香。滔々流水何所似。四海朝宗歸聖王。

夏日臨泛大湖一首。

御製

水國追涼到。乘舟泛大湖。風前翻浪起。雲裡落帆孤。浦香濃。盧橘。洲色暗。蒼芦。邑女採蓮伴。村翁釣魚徒。畏景西山沒。清猿北嶼呼。泓洄

興不已。弭棹轉歸艫。

夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼探得閑字應製一首。

令製

此院由來人事少。況乎水竹每成閑。送春薔棘珊瑚色。迎夏巖苔玳瑁斑。避暑追風長松下。提琴搗茗老梧間。知貪鸞駕忘歸處。日落西山不解還。

嵯峨院納涼探得歸字應製。

巨識人

君王倦熱來茲地。茲地清閑人事稀。池際追涼依竹影。巖間避暑隱松帷。千年駿薜覆堦密。一片晴雲亘嶺歸。山院幽深無所有。唯餘朝暮泉聲飛。

秋日冷然院新林池探得池字應製一首。

令製

君王本自耽幽趣。泉石初看此地奇。積水全含湖裏色。重巖不謝硤中危。徑栽晚竹春餘粉。歲

淺新林未拱枝。景物仍堪遊聖目。何勞整駕向瑤池。

秋夕南池亭子臨眺一首 合製

池亭氣冷秋風度。吹入波心亂水文。明月東山看漸出。莫愁白日巖頭暝。

秋山作。探得泉字。應製一首。

朝鹿取

八月秋山涼吹傳。千峯萬嶺寒葉翩。羽客裳斑蜺氣度。隱人帶綠女蘿懸。谿生濃霧織薄縠。水寫輕雷引飛泉。入谷猶知玄牝道。登巒何近白雲天。

尋良將軍華山庄將軍失期不在一首。

仲王雄

君家白雲東嶺下。昨對宮內暮相期。平明騎歷山中路。蹋石溪行駘自遲。一徑南斜門樹入。孤亭松色女蘿颺。塘頭佇立不看至。落日寒蟲鳴草時。

宴集。

春日左將軍臨況一首 勇文繼

灑掃荆扉望風久。尊卑禮融未成歡。微誠有感降恩顧。欲酌春醪心自寬。檐下閑花光艷燦。籬前修竹影檀欒。何圖一損台門貴。今日高車過下官。

奉勅陪內宴詩一首 王孝廉

海國來朝自遠方。百年一醉謁天裳。日宮座外何攸見。五色雲飛萬歲光。

七日禁中陪宴詩一首 釋仁貞

入朝貴國慙下客。七日承恩作上賓。更見凰聲無妓態。風流變動一國春。

春日對雨探得情字一首。

王孝廉

主人開宴在邊廳。客醉如泥等上京。疑是雨師知聖意。甘滋芳潤灑羈情。

餞別。

和金吾將軍良安世春齊別筑前王大守  
還任一首。

御製

星使去年入王畿。今年事畢万里歸。山隨客路  
春光送。人至他鄉交結稀。離心積日風煙遠。回  
首前程指落暉。獨在羈亭傷別意。聞猿夜々  
轉依々。

左兵衛佐藤是雄見授爵之備州謁親因  
以賜詩一首。

御製

別時節修春云暮。爲謁慈親辭帝京。邑裏兒童  
歡相待。村中耆耋拜邀迎。馬踏雲山鄉念切。猿  
啼海嶠助羈行。雖言客路多芳草。莫學王孫  
不歸情。

餞美州掾藤吉野得花字一首。

令製

今霄儻忽言離別。不慮分飛似落花。莫怨白雲  
千里遠。男兒何處是非家。

留別文友一首。

野岑守

一朝從吏十年許。文友存亡半是新。固爲同道  
無新舊。但悲我作万里人。

敬和左神策大將軍春日閑院餞美州藤大  
守甲州藤判官之作一首。

巨識人

杜鵑啼序春將闌。閑院花亭餞兩官。飛鳥始乘  
鳥翼去。離絃頻送鶴聲彈。鄉心遠樹孤雲跡。客  
路邊山片月寒。一別情期勿暫忘。音書屢寄往  
來看。

春日餞野柱史奉使存問渤海客一首。

巨識人

使乎遠欲事皇々。芳惜睽離但有觴。遲日未  
銷邊路雪。暖煙遍着主人楊。天涯馬踏浮雲影。  
山裡猿啼朗月光。策騎翩々何處至。春風千里  
海西鄉。

春日別原掾赴任一首。巨識人

良儔本自非易得。之子爲別最情深。水國天邊



千里遠。暮山江上一猿吟。白鷗狎人隨去舳。青草連湖傍客心。此日交頤無可贈。相思空有淚沾襟。

秋日別友人一首。

巨識人

林葉翻々秋日曛。行人獨向邊山雲。唯餘天際孤懸月。万里流光遠送君。

月夜言離一首。

桑腹赤

地勢風牛雖異域。天文月兔尙同光。思君一似雲間影。夜々相隨到遠鄉。

早春別阿州伴掾赴任一首。

紀末守

一朝銜命遠離別。上月春初風尙寒。欲識我魂隨子去。羈亭夜々夢中看。

贈答。

臥中簡毛學士一首。

令製

今年有閏春猶冷。不解韶光着砌梅。風夜忽聞窓外馥。臥中想得滿枝開。

蒙譴外居聊以述懷敬簡金吾將軍一首。

仲雄王

儒家偏隨樽俎趣。帝宅朝例不生知。當年忝奉端闈禮。詰旦淹除伏奏時。厚壤焦情無踏處。高穹負譴更何祈。終離節會簪纓列。獨漏寰瀛雲雨施。閣外空聞歌管響。階前隔見舞臺姬。昏歸耻對閨中妾。夜臥強談床上兒。過重功輕心自解。恩深責淺幾銘肌。君門出入雖無制。外候仍言天聽卑。

書懷呈王中書一首。

仲雄王

邊旅十年老時明。海行千里入帝城。君門九重未通籍。閑臥窓樹晚鶯聲。

臥病謝故人相問一首。

仲雄王

臥來旬向歷。門客問初通。爲君思倒屣。衰良不勝風。

在邊贈友一首。離合。

野岑守

班秩邊城久。夕來夢帝畿。衿霑異縣淚。衣緩故

鄉園。望年頻改。弓鞍力稍非。綿々千累路。帛素寄雙飛。

奉拜掖庭簡橘尚書一首。

野岑守

朔平門衛不敢入。別有殊恩拜掖庭。美女花簪傳芳命。一言猶是紛骨情。

秋朝聽鴈寄渤海入朝高判官釋錄事一首。

坂今雄

大海途難涉。孤舟未得迴。不如關隴雁。春去復秋來。

和渤海大使見寄之作一首。

坂今繼

賓客寂莫對青□。處々登臨旅念悵。万里雲邊辭國遠。三春煙裡望鄉迷。長天去鴈催歸思。幽谷來鶯助客啼。一面相逢如舊識。交情自與古人齊。

春夜宿鴻臚簡渤海入朝王大使一首。

滋貞主

枕上宮鐘傳曉漏。雲間賓雁送春聲。辭家里許不勝感。況復他鄉客子情。

和渤海入覲副使公賜對龍顏之作一首。

桑腹赤

渤海望無極。蒼波路幾千。占雲遙驟水。就日遠朝天。慶自紫霄降。恩將丹化宣。以君吳札耳。應悅聽薰絃。

在邊亭賦得山花戲寄兩箇領客使并滋三一首。

王孝廉

芳樹春色色甚明。初開似咲聽無聲。主人每日專攀盡。殘片何時贈客情。

和坂領客對月思鄉見贈之作。

王孝廉

寂々朱明夜。團々白月輪。幾山明影徹。万象水天新。弃妾看生恨。羈情對動神。誰言千里隔。能□兩鄉人。

從出雲州書情寄兩箇勅使一首。

王孝廉

南風海路連歸思。北雁長天引旅情。賴有鏘々雙風伴。莫愁多月住邊亭。

文華秀麗集卷中

詠史。

史記講竟賦得張子房一首。

御製

受命師漢祖。英風萬古傳。沙中義初發。山中感彌玄。形容類處女。計畫撓強權。封敵反謀散。招翁儲貳全。定都是劉說。違宰勸蕭賢。追從赤松子。避世獨超然。

賦得季札一首。

良安世

所謂吳季札。芳命冠古今。交賢情若舊。當讓義逾深。晏子終納色。孫文不聽琴。還將一寶

劍。空報徐君心。

賦得漢高祖一首。

仲雄王

漢祖承堯緒。龍顏應晦冥。豁如有大度。生事未曾營。住在中陽里。微班泗上亭。呂公驚貴相。王媼感奇靈。望氣秦皇厭。尋雲呂后停。徑關創漢統。軍旅入咸京。撥亂資三傑。膺天聚五星。烏江窮楚項。軹道降秦嬰。命革登乾極。時平戢甲兵。絳侯重厚者。劉氏遂安寧。

賦得司馬還一首。

菅清公

漢史惟司馬。高才爲代生。龍門初降化。禹穴漸研精。續孔春秋發。基軒得失明。三千猶存眼。五百但嫌情。實錄傳無墜。洪漪遊不停。終令萬祀下。長作百王禎。

述懷。

奉和重陽節書懷一首。

仲雄王

寰中農時澇旱事。帝念黔首不登年。強乘客槁文雄罷。却□伶人侍樂懸。菊浦早花霜下發。荷



潭寒葉水陰穿。災不勝德古來在。況乎神哀輔自天。

奉和宿蕉居之什一首 野岑守

君王一去池館廢。四海爲家感舊來。昔從驂駕曳裾出。今配龍輿鏘佩廻。簷前枯柳看後樹。岸曲長松聽初栽。漢筑□□□□盡。況乎沛唱復相催。

奉和秋夜書懷之作一首

仲善雄

今茲聖主無疆算。始及安仁秋興年。感發良霄不寐久。況乎聞鴈白雲天。清風吹起上林樹。曉月光流禁掖前。當慶貞松不彫葉。誰論蒲柳望秋遷。

奉和臥病重陽節之作一首

野岑守

聖躬違和日數廻。令節重陽儵忽來。時菊不知高宴罷。黃花一兩殿前開。

晚秋述懷一首

姬大伴氏

節候肅條歲將闌。閨門靜閑秋日寒。雲天遠雁聲宜聽。擔樹晚蟬引欲殫。菊潭帶露餘花冷。荷浦含霜舊盞殘。寂々獨傷四運促。紛々落葉不勝看。

艷情。

奉和春閨怨一首

菅清公

怨婦含情不能寐。早朝褰幌出欄栢。自言楚國名倡族。家是宮東宋王隣。獨賴耶孃偏愛重。何圖見者以爲神。庭前見舞鸞常顧。樓上吹簫鳳未臻。四五芳期當順禮。出從君子正爲嬪。男兒好事方有□。□□從□□年。蕩子別來多歲月。那堪夜々掩空扉。要身屢驗真知瘦。眼瞭常啼謾似肥。合歡寂院寧獨忿。萱草閑堂反召悲。可妬桃花徒映靨。生憎柳葉尙舒眉。心如煎。眼不眠。良人不意思。歸引賤妾常吟薄命篇。胸上積愁應滿百。眼中行淚且成千。

君不見閨怨□□顏華直爲思君塞路遐。奈何征人大無意。一別十年音信賒。桑下受金君豈各。機中織錦詎能嘉。羅帳空。角枕凍。角枕羅帳恨無窮。春苑看花泣。長安。霄閨理線憶。桑乾。顏思嬾。聽門前鵲。衰面慙。當鏡裡鸞。願君莫學班定遠。慙々徒老白雲端。

奉和春閨怨一首 朝鹿取

妾本長安恣驕奢。衣香面色一似花。十五能歌公主第。二十工舞季倫家。使君南來愛風聲。春日東嫁洛陽城。洛陽城東桃與李。一紅一白蹊自成。錦褥玳筵親惠密。南鵬東鯨還是輕。賤妾中心歡未盡。良人上馬遠從征。出門唯見揚鞭去。行路不知幾日程。尙懷報國恩義重。誰念春閨愁怨情。紗窓閑。別鷓鴣。似登隴。首腸已絕。非入楚宮。腰忽細。水上浮萍豈有根。風前飛絮本無蒂。如萍如絮往來返。秋去春還積年歲。守空閨。妾獨啼虛座。塵暗空階草萋。池前

悵看鴛比翼。梁上慙對鸞雙栖。淚如玉箸流無斷。髮似飛蓬亂復低。丈夫何時凱歌歸。不堪獨見落花飛。落花飛盡顏欲老。早返應看片時好。

奉和春閨愁一首 巨識人

妾年妖艷二八時。灼々容華桃李姿。幸得良夫憐玉良。鬱金帳裡寫蛾眉。綺筵朝共琅玕食。錦褥夜同翡翠帷。誰慮遣君向戎路。恩情婉嬾忽相遺。皇城一去關山遠。閨閣連年音信稀。自恨相別不相見。使妾長歎復長思。長思長歎紅顏老。客子何心還不早。君不見妾離別。晝夜吁嗟涕如雪。雙蛾眉上柳葉嚬。千念吟中桃花歛。空床春夜無人伴。單寢寒衾誰共暖。金繡羅衣盡啼濕。銀莊縷帶日瘦緩。又不見守空閨。閨中怨坐意常迷。昔時送別秋蘆白。此日愁思春草萋。階前花積妾不掃。窓外鶯啼妾復啼。柳寒廻鴻引群度。杏梁來鸞比翼栖。閑庭點々蒼苔駮。暗

牖依々綠柳低。晚來嬾織機中錦。愁向高樓明月孤。片時枕上夢中意。幾度往還塞外途。

奉和春情一首。

巨識人

孤閨已遇芳菲月。頓使春情幾許紛。玉戶愁寒蘇合帳。花蹊嬾曳石榴裙。鶯啼庭樹不堪妾。雁向邊山難寄君。絕恨龍城征客□。年々遠隔万重雲。

和伴姬秋夜閨情一首。

巨識人

比來朔雁度千番。一箇封書未曾看。遙想燕山涼氣早。誰堪砧杵搗衣難。眞珠暗箔秋風閉。楊柳疎窓夜月寒。不計別怨經歲序。唯知曉鏡玉顏殘。

長門怨一首。

御製

日暮深宮裡。重門閉不開。秋風驚桂殿。曉月照蘭臺。對鏡容華改。調琴怨曲催。君恩難再望。買得長卿才。

奉和長門怨一首。

巨識人

日夕君門閉。孤思不暫安。塵生秋帳滿。月向夜床寒。星怨鑿難霽。雲愁鬢欲殘。唯餘舊時當。猶入夢中看。

婕妤怨一首。

御製

昭陽辭恩寵。長信獨離居。團扇含愁詠。秋風怨有餘。閑階人跡絕。冷帳月光虛。久罷後庭望。形將歲時除。

奉和婕妤怨一首。

巨識人

昔時同輦愛。翻怨裂紈情。孤帳秋風冷。空簾曉月明。啼顏拭尚濕。愁黛畫難成。絕妬昭陽近。聞來歌吹聲。

奉和婕妤怨一首。

桑腹赤

年色誠難保。妾人獨自尤。昭陽歌舞盛。長信綺羅愁。月向空帷落。風經暗葉流。銀環終不賜。嬌愛永成秋。

奉和聽擣衣一首。

桑腹赤

雙々秋鴈數般翔。聞妾當驚邊已霜。何處擣衣



霄達旦。空樓月下萬家場。暗中不辨杵低舉。枕上唯聞聲抑揚。守夜宮鐘乍相和。應通長信復昭陽。

樂府。

王昭君一首。

御製

弱歲辭漢闕。含愁入胡關。天涯千万里。一去更無還。沙漠壞蟬鬢。風霜殘玉顏。唯餘長安月。照送幾重山。

奉和王昭君一首。

良安世

虜地何遼遠。關山不忍行。魂情還漢闕。形影向胡塲。怨逐邊風起。愁因塞路長。願爲孤飛雁。歲々一南翔。

奉和王昭君一首。

菅清公

御狄寧無計。微軀鎮一方。泣隨重塞盡。愁向遠天長。隴月分行鏡。胡冰凍旅裝。誰堪氍帳所。永代綺羅房。

奉和王昭君一首。

朝鹿取

遠嫁匈奴域。羅衣淚不干。畫眉逢雪壞。裁鬢爲風殘。塞樹春無葉。胡雲秋早寒。閼氏非所願。異類誰能安。

奉和王昭君一首。

藤是雄

含悲向胡塞。辭寵別長安。馬上關山遠。愁中行路難。脂粉侵霜減。花簪冒雪殘。琵琶多哀怨。何意更爲彈。

梅花落一首。

御製

鷓鴣鳴梅院暖。花落舞春風。歷亂飄鋪地。徘徊颺滿空。狂香燼枕席。散影度房櫳。欲騷傷離苦。應聞羌笛中。

奉和梅花落一首。

菅清公

春風吹物暖。朝夕蕩庭梅。花點紅羅帳。香縈玉鏡臺。榆關消息斷。蘭戶歲年催。未度征人意。空勞錦字迴。

折楊柳一首。

御製

楊柳正亂絲。春深攀折宜。花寒邊地雪。葉暖妓

樓吹。久戍歸期遠。空閨別怨悲。短簫無異曲。惣是長相思。

奉和折楊柳一首。

巨識人

楊柳東風序。千條搖颺時。邊山花映□。虛牖葉頰眉。樓上春簫怨。城頭曉角悲。君行音信斷。攀折欲寄誰。

梵門。

答澄公奉獻詩一首。

御製

遠傳南岳教。夏久老天台。杖錫凌溟海。躡虛歷蓬萊。朝家無英俊。法侶隱賢才。形體風塵隔。威儀律範開。袒肩臨江上。洗足踏巖隈。梵語翻經閣。鐘聲聽香臺。經行人事少。宴坐歲華催。羽客親講席。山精供茶杯。深房春不暖。花雨自然來。賴有護持力。定知絕輪迴。

和光法師遊東山之作一首

御製

幽栖東岳上。禪坐對林巒。法宇傳經久。深山乞

食難。溪流猿共漱。野飯鬼相飡。擊磬雲峯裡。暮春不退寒。

過梵釋寺一首。

御製

雲嶺禪局人蹤絕。昔將今日再攀登。幽奇巖嶂吐泉水。老大杉松離舊藤。梵宇本無塵滓事。法筵唯有薜蘿僧。忽鎖煩想夏還冷。欲去淹留暫不能。

扈從梵釋寺應製一首。

令製

君王機暇倦炎熱。午後尋真幸日宮。四五老僧迎鳳輦。久除有結意恒守。飛棧樹杪空雲過。危磴巖頭拂霧通。瞻仰尊容纏網盡。還疑自入鷲峯中。

扈從梵釋寺應製一首。

藤冬嗣

一人問道登梵釋。梵釋蕭然太幽閑。入定老僧不出戶。隨綠童子未下山。法堂寂々煙霞外。禪室寥々松竹間。永劫津梁今自得。器塵何處更相關。

和澄公臥病述懷之作 御製

聞公雲峯裡。臥病欲契真。對境知皆幻。觀空厭此身。栢暗禪庭寂。花明梵宇春。莫嫌應化久。爲濟夢中人。

同。 仲雄王

古寺北林下。高僧毛骨清。天台蘿月思。佛隴白雲情。院靜芭蕉色。廊虛鐘梵聲。臥病如入定。山鳥獨來鳴。

同。 巨識人

吾師山上寺。託疾臥雲煙。猿鳥狎梵宇。鬼神護法筵。澗花當佛咲。峯月向僧懸。已覺非真有。觀身自得痊。

遊北山寺 多清貞

香刹青巒頂。登攀指世情。高簷松上出。危路竹間行。梵語聞無厭。塵心伏不驚。寥々雲樹裡。定水晚來聲。

題光上人山院一首 錦彥公

梵宇深峯裡。高僧住不還。經行金策振。安坐草衣閑。寒竹留殘雪。春蔬採舊山。相談酌綠茗。煙火暮雲間。

哀傷。 和尙書右丞良安世銅雀臺一首。

御製

昔時魏武帝。臺榭起城阿。遺令奏絃管。空帷舞綺羅。每對平□月。追思怨恨多。西陵揮淚望。松檟復如何。

仰同尙書良右丞銅雀臺一首。

桑腹赤

憶昔妓堂好。君情應未闌。一朝雄志滅。千載爵□寒。北上臨風詠。西陵向月看。漳河與妾涕。日夜流無乾。

奉和傷野女侍中一首 藤冬嗣

艷年從官陪層秘。華髮辭榮返故鄉。川月不留殘魄影。風燈何□寸烟光。宮姬口實推貞素。



列女傳文載儉良。聖主非常動哀感。魂而有識應慰亡。

同。

桑腹赤

思媚一人容髮老。崦嵫暮晷不留年。孤墳對月貞女破。閨水咽雲孝子泉。柳絮父詞身後在。蘭紛婦德世間傳。古來蒿里爲誰邑。今日松門問鬼塋。野暗驂嘶通白霧。山空挽轡入黃煙。何崇盜藥求仙臺。不朽哀榮降聖篇。

哭賓和尚一首。

御製

大士古來無住著。名山晦跡老風霜。隨緣化體厭塵久。歸正真機忽滅亡。松掩舊□猶鬱茂。草暗新塔漸荒涼。生前蘿席空留月。沒後金爐誰添香。禪林時見擢枝幹。梵宇長懷失棟梁。緇素共愁而禮罷。遙々仰拜向西方。

和菅清公傷忠法師一首。

御製

臘老煙□裡。歸真攝化形。不知何世界。出現救

蒼生。

侍中翁主挽歌詞二首。

御製

生涯如逝川。不慮忽昇仙。哀挽辭京路。客車向暮田。聲傳女侍簡。別怨艷陽年。唯有孤墳外。悲風吹松煙。威里繁華歇。皇家淑德收。悲傷盈旦暮。悽感積春秋。月色姮娥慘。星光織女愁。一聞簫管曲。日夜淚同流。

奉和侍中翁主挽歌詞二首。

菅清公

百年嗟易辭。過隙幾何時。晨晷叙無駐。春花落有期。桃蹊長掩迹。蒿里忽迎輜。雖覺生涯理。人情尙可悲。鳳掖榮華盡。爲書卜兆通。向朝傷薤露。欲暮泣楊風。漢浦星光缺。秦樓月影空。定知雲雨良。長絕臺中。

同二首。

巨識人

夜谿生涯盡。佳城艷□淪。婺星藏遠漢。仙桂落虛輪。淑門遺仍在。恩榮歿更新。冥途無節候。何處復知春。

曉月銘旌出。春山轅馬通。繁筵悲薤露。盡髮送松風。洛雪廻光罷。巫雲行影空。可嗟桃李貞。長掩重泉中。

同內史滋貞主追和武藏錄事平五月訪

幽人遺跡之作一首 御製

悽然□幽客。隙骨曬風霜。歲月經書古。煙蘿仙竈亡。巖扃松作蓋。虛室石爲牀。契道乘空復。泥中獨自傷。

和武藏平錄事五月訪幽人遺跡之作一首

首 藤冬嗣

幽遁長無返。捐身万事睽。玄書明月照。白骨老猿啼。風度松門寂。泉飛石室淒。白雲不可見。懷古獨淒々。

訪幽人遺跡一首 平五月

借問幽栖客。悠悠去幾年。玄經空秘卷。丹竈早收煙。影歇青松下。聲留白骨前。因今訪古跡。不覺淚潺湲。

文華秀麗集卷下

雜詠。

河陽十詠四首。以三字爲題。以終字爲韻。

河陽花 御製

三春二月河陽縣。□□從來富於花。花落能紅復能白。山嵐頻下萬條斜。

江上船。

一道長江通千里。漫々流水漾行船。風帆遠沒虛無裡。疑是仙查欲上天。

江邊草。

春日江邊何所好。青々唯見王孫草。風光就暖芳氣新。如此年々觀者老。

山寺鐘。

晚到江村高枕臥。夢中遙聽半夜鐘。山寺不知何處在。旅館之東第一峯。

奉和河陽十詠二首。

河陽花。

藤冬嗣

河陽風土饒春色。一縣千家無不花。吹入江中如濯錦。亂飛機上奪文沙。

故關柳。

故關折罷人煙稀。古堞荒涼餘楊柳。春到尙開舊時色。看過行客幾回久。

奉和河陽十詠一首。

五夜月。

良安世

客子無眠投五夜。正逢山頂孤明月。一看圓鏡羈情斷。定識閨中憶不歇。

奉和河陽十詠四首。

河上船。

仲雄王

晴初駐蹕馳玄覽。一點孤浮江上船。爲虛物

情不相怨。乘吹遙度浪中天。

水上鷗。

行客近起清江北。御覽煙鳴水刷鷗。鷗性必馴無取意。況乎玄化及飛浮。

山寺鐘。

古寺館東山翠下。日暮噉咷響疎鐘。天籟相和幽洞谷。餘音過盡白雲峯。

河陽橋。

別館雲林相映出。門南脩路有河橋。上承紫宸長拱宿。下送蒼海永朝潮。

奉和河陽十詠二首。

江上船。

朝鹿取

江潮漫々流幾年。日夜送迎往還船。已似飛龍遊雲裏。還看翔風入天邊。

水上鷗。

河陽別宮對江流。不勞行往見群鷗。能知人意狎不去。或泝或泓與波遊。



奉和河陽十詠一首。

山寺鐘。

滋貞主

行虬屢寫江樓靜。一道聞來初夜鐘。諳識山僧巖水嗽。焚香合掌拜尊容。

和巨識人春日四詠二首。

舞蝶。

御製

數羣胡蝶飛亂空。雜色紛紛花樹中。本自不因絃管響。無心處々舞春風。

飛鷺。

望裡遙聞鷺語聲。双飛來往羽儀輕。本期借屋初乳子。還耻空爲漢后名。

和巨內記春日四詠一首。

飛燕。

朝鹿取

衣玄裳素入蘭閨。双去双來不獨栖。梁上登巢居是逸。簾前向戶飛暫低。

同。

滋貞主

故年剪瓜今春歸。棟宇改修猜未依。稟性將凡

鳥□□。再三飛到狎簾帷。

奉和觀新燕一首。

佐長繼

海燕新來度春天。差池羽翼如往年。既能忘却蒼波遠。朝夕欲巢畫梁邊。

同。

野年永

早燕双飛入曙晴。遙經聖眼奏新聲。還嗟未狎鴛鴦帳。先負漢家妖艷名。

奉和聽新鶯一首。

野岑守

聽新鶯。鶯聲新兮人惟舊。御柳初暖仰狎々。帝梧猶寒未易就。澁音近恩先雜沓。弱羽承煦早差池。小臣授命戎麾遠。万里沙場欲傷離。邊亭節物花鳥異。料得唯門笛中吹。

故關聽鷄一首。

御製

烽火不傳罷關城。唯餘長短曉鷄聲。孟嘗沒後年代久。誰客今鳴令人驚。

奉和故關聽鷄一首。

桑腹赤

霸道寢來是舊城。人鷄獨送司晨聲。自分陽精

應覺曉。如今不爲<sub>二</sub>孟嘗<sub>一</sub>驚<sub>上</sub>。

奉和過古關一首。

宮村繼

皇猷遠被車書同。關路長開古鎮空。白馬時來無吏問。東西行客日夜通。

代神泉古松傷衰歌一首。

御製

昔從凡木殖上林。過却風霜年幾深。帝者愛貞賜恩顧。水亭忽構頻近臨。本森沈。今顛頽。長條縮折乏蒼翠。不是辭榮好寂寞。還愁稟質抱幽情。

奉和代神泉古松傷衰歌一首。

仲雄王

孤松盤屈薜蘿枝。貞節苦寒霜雪知。御琴臺廻仙驕。風入鸛鷗添清曲。森翠宜看軒月陰。還羞不材近天臨。自然色衰無他故。不敢幽懷負恩顧。

奉和代美人殿前夜合詠之什一首。

毛穎人

久厭幽溪何處託。朝家假貸御樓傍。卽今自入仙園裡。已後春恩任聖皇。

冷然院各賦一物得澗底松一首。

御製

鬱茂青松生幽澗。經年老大未知霜。薜蘿常掛千條重。雲霧時籠一蓋長。高聲寂々寒炎節。古色蒼々暗夕陽。本自不堪登嶺上。唯餘風入韻宮商。

冷然院各賦一物得瀑布水應製一首。

桑腹赤

兼山傑出院中險。一道長泉曳布開。鶯鶴偏隨飛勢至。連珠全逐逆流迴。巖頭照日猶零雨。石上無雲鎮聽雷。疇昔耳聞今眼見。何勞絕粒訪天台。

冷然院各賦一物得水中影應製一首。

桑廣田





團欒七八者。重樓粉窓下。百香懷裡薰。數樣掌中把。擁裙集綺筵。此首雜華鈿。相催猶未出。相讓不肯先。鬪百草。鬪千花。矜有嗤無意。遞奢初出紅莖敵紫葉。後將一藥爭兩葩。證者一判籌初負。奇名未盡日又斜。勝人不聽後朝報。脫贈羅衣耻向家。

和野內史留後看殿前梅之作一首

桑腹赤

夙分爲官樹。開榮不畏寒。向南仙仗從。臨北綵花殘。待蝶香猶富。藏鶯影未寬。雖知先衆木。尙恨後天看。

夏日賦雨裡梅一首

令製

庭梅入夏惟初晴。夕雨時霑葉復低。不辭實重枝將折。預恨無人追七分。

奉和觀落葉一首

滋貞主

寒聲落葉簾前雨。點着閑筵不濕衣。聞道璇璣秋月暮。聖年宮樹待黃飛。

賦得隴頭秋月明一首

御製

關城秋夜淨。孤月隴頭圓。水咽人腸絕。蓬飛砂塞寒。離筵驚山上。旅雁聽雲端。征戎鄉思切。聞猿愁不寬。

奉和先韻

野岑守

反覆天驕性。元戎馭未安。我行都護道。經陟隴頭難。水添鞞鼓咽。月濕鐵衣寒。獨提勅賜劍。怒髮屢衝冠。

賦得絡緯無機應製一首

菅清公

歲暮倡樓冷。征夫消息希。思雖寧有憶。誰爲織寒衣。細緯元無杼。疎經不待機。疋成如可借。遠送寄金微。

和內史貞主秋月歌一首

御製

天秋夜靜月光來。半捲珠簾滿輪開。舉手欲攀誰能得。披襟抱影豈重懷。雲暗空中清輝少。風

來吹拂看更皎。形如秦鏡出山頭。色似楚練疑天曉。群陰共盈三五時。四海同朋一月輝。皎潔秋悲斑女扇。玲瓏夜鑒阮公惟。洞庭葉落秋已晚。虜塞征夫久忘歸。賤妾此時高樓上。街情一對不勝悲。三更露重絡繹鳴。五夜風吹砧杵聲。明月年々不改色。看人歲々白髮生。寒聲淅瀝竹窗虛。晚影蕭條柳門疎。不從姮娥竊藥遁。空閨對月恨離居。

同和前韻

桑腹赤

鐘鳴漏盡夜行息。月照無私幽顯明。歷々衆星皆掩輝。悠々万象不逃形。亭々光自嶺頭來。漸入高樓正徘徊。葉映洞庭波裡水。珠盈合浦蚌心胎。堯蓂莢滿自暗曆。仙桂花開誰所栽。點彩蕭疎楊柳堤。凝華遙襲白雲倪。吳江影下寒鳥宿。巫峽光中曉猿啼。長信深宮圓似扇。昭陽秘殿淨如練。西園公讌本忘倦。北地胡人應好戰。占募狂夫久從征。料知照劍獨橫行。漢邊

一雁負書叫。外城千家擣衣聲。月落月昇秋欲晚。妾人何耐守閨情。

神泉苑九日落葉篇一首

御製

寥廓秋天露爲霜。山林晚葉併芸黃。自然灑落任朔風。搖颺徘徊滿雲空。朝來暮往無常時。北度南飛寧有期。歲月差馳徒逼迫。川臯變化遞盛衰。熙々春心未傷盡。慙忽復逢秋氣悲。商飈掩亂吹洞庭。墜葉翩翻動寒聲。寒聲起□洞庭波。隨波泛々流不已。虛條縮槭楓江上。舊蓋穿遁荷潭裡。塞外征夫戍遼西。閨中孤婦怨睽携。容華鎖歇爲秋暮。心事相違多慘悽。觀落葉斷人腸。淮南木葉新雁翔。對此長年悲。合情多所思。吁嗟潘岳興。感歎淚空垂。秋云晚。無物不蕭條。坐見寒林落葉飄。

神泉苑九日落葉篇應製

巨識人

晚節商天朔氣侵。嚴霜夜雨變秋林。高颺一獵欲吹盡。灑落寒聲萬葉吟。來往本無何處定。東

西偏任自然心。颺空無著千餘滿。積地不掃  
尺許深。觀落葉兮落林塘。半分紅兮半分黃。洞  
庭隨波色泛映。合浦恩風影飄揚。繞縈宛似莊  
周蝶。度浦遙疑郭泰舟。四時寒暑來且往。一歲  
榮枯春與秋。劉安獨傷長年歎。屈平多增遲暮  
憂。紫塞寒風苦鐵衣。紅樓夜月怨羅帷。已見淮  
南木葉落。還逢天北雁書歸。觀落葉。落林中。  
林中葉盡秋云窮。衰影遙知楚山桂。餘香猶想  
吳江楓。誰使變化能若此。一時万物不相同。唯  
餘上林凌霜葉。歲寒之後獨青葱。

和滋內史奉使遠行觀野燒之作一首。

巨識人

皇華辭宅遠有期。行踏雲山臘月時。正馬駢馳  
忽逢夜。瞑矇暗色迷所之。誰村野火客行邊。不  
待月暉見朗天。初着孤褰微燎發。須臾逆散  
萬山然。炎爛紛飛無暫斷。冬時不寒還生暖。狀  
似天河曉星落。色如仙竈暮煙滿。寒水鎔盡百

谷中。熱雲蒸落九天空。山鳥愁傷搆巢樹。野人  
畏着編宇蓬。忽起邊風吹焦聲。雄光列々看更  
明。長途今夜不知暗。屢策輕蹄獨照行。

山亭聽琴一首。

良安世

山客琴聲何處奏。松蘿院裡月明時。一聞燒尾  
手下響。三峽流泉坐上知。

琴興一首。

巨識人

獨居想像嵇生興。靜室一弄五絃琴。形如龍鳳  
性閑寂。聲韻山水響幽深。極金徽一曲。萬柏  
無倦時。伯牙彈盡天下曲。知音者或但子期。子  
期伯牙歿來久。鳴琴千載□□□。



群書類從卷第一百二十五

文筆部四

經國集序

東宮學士從五位下臣滋野朝臣貞主上  
臣聞天肇書契。奎主文章。古有採詩之官。王  
者以知得失。故文章者所以宣上下之象。明人  
倫之叙。窮理盡性。以究萬物之宜者也。且文  
質彬彬。然後君子。譬猶衣裳之有綺縠。翔鳥之  
有羽儀。楚漢以來。詞人踵武。洛汭江左。其流  
尤隆。楊雄法言之愚。破道而有罪。魂文典論之  
智。經國而無窮。是知文之時義大矣哉。雖齊梁  
之詩。風骨已喪。時イ周隋之日。規矩不存。而沿濁更  
清。美イ襲故還新。必所擬之不異。乃暗合乎曩篇。  
夫貧賤則懾於飢寒。富貴則流於逸樂。遂營目

□之務。而遺千載之功。是以古之作者。寄身於  
翰墨。見意於篇々。不託飛馳之勢。而聲名自  
傳於後。世イ在君上則天文之壯觀也。在臣下則  
王佐之良媒也。才何世而不奇。世何才而不用。  
方今梁園臨安之操。瞻筆精英。縉紳俊民之才。  
諷託驚拔。或強識稽古。或射策絕倫。或苞蓄  
神奇。或潛摸舊製。伏惟皇帝陛下。教化簡樸。文  
明鬱興。以爲傳聞不如親見。論古未若徵今。  
爰詔正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫  
良岑朝臣安世。令臣等鳩訪斯文也。詞有精  
龜。濫吹須辨。文非一骨。備善維雜。若無琳瑯  
盈光。琬琰圓色。則取虬龍片甲。騏驎一毛。既

而太上聖皇。推玉璽而蹤寂。皇帝叡主。受昭華而德隆。共勉積學之添明。同要博文之助道。慧性竝懋。天才俱聰。雅操飛文。似兩龍之分燭。興寄摛藻。疑雙曦之齊暉。緊健之詞。體物殊聳。清拔之氣。緣情增高。寶韜染毫。無勝負於八體。翡翠開匣。不優劣於六書。堯之克讓文思。舜之濬哲好問。先聖後聖。其揆一焉。又先歲昇霞之駕。叡藻猶遺。當代重輪之光。精華彌盛。臣閱史籍之卷。未有如此之時。但至如製令。不敢評論。特降綸言。尙俾高確。尺表測景。日月不以其輝。寸管候時。陰陽無以錯其節。遂使龍蛇同穴。龜魚共淵。屈荆山之光。和砭砭之質。斷自慶雲四年。迄于天長四載。作者百七十八人。賦十七首。詩九百十七首。序五十一首。對策三十八首。分爲兩帙。編成廿卷。名曰經國集。冀映日月而長懸。爭鬼神而將與。先入秀麗者。卽不刊之書也。彼所漏脫。今用

兼收。人以爵分。文以類聚。然年代遠近。人文存亡。搜而未盡。闕而俟後。謹與參議從四位上行式部大輔臣南淵朝臣弘貞。從四位上行大學頭兼文章博士播磨權守臣菅原清公。從四位下行東宮學士臣安野宿禰文繼。正五位下守中務大輔臣安部朝臣吉人等。詳舉甄收。無所隱秘。臣等學非飽蹠。智異聚沙。朱愚出上。逼以嚴命。辭而不獲。敢以參議。爵次姓名列之如左。謹上。

天長四年五月十四日

經國集卷第一目錄

賦一

太上天皇春江賦一首

太上天皇重陽節菊花賦一首

大納言贈從二位石上朝臣宅嗣小山賦一首  
播磨守贈正四位下賀陽朝臣豐年和石上卿

小山賦一首

從三位勳二等行式部卿藤原朝臣宇合棗賦

一首

從五位行信濃守仲雄王和少輔鶴鴿賦一

首

大學頭從五位下兼行肥後介菅原朝臣清人

一首

從四位上行大學頭兼文章博士播磨權守菅

原清公嘯賦一首

太上天皇重陽節神泉苑賦秋可哀一首

皇帝重陽節神泉苑賦秋可哀應制一首

正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良

峯朝臣安世一首

仲雄王一首

菅清公一首

正五位下行內匠頭和氣朝臣眞綱一首

從五位上行攝津介中科宿禰善雄一首

從五位上行近江介和氣朝臣仲世一首

東宮學士從五位下滋野朝臣貞主一首

經國集卷第一

春宮學士從五位下臣滋野朝臣貞主奉

勅撰

賦類

春江賦

太上天皇

仲月春氣滿江鄉。新年物色變河陽。江霞照出  
辭寒彩。海氣晴來就暖光。柳懸岸而烟中綻。桃  
夾堤以風後香。望春江兮騁目。觀清流之洋  
洋。或漫兮似不流。或渺兮逝不留。長之難可  
識。濬之誰能測。茲可謂春氣動而著於江色  
也。是以羽族翱翔。鱗群頡頏。繽紛雜沓。載來載  
行。咀嚼初藻。吞茹新荇。各々吟叫。處々相望。  
涉人廻櫂。與淵客而爲倫。漁童搆宇。接鮫  
室而同隣。隨波瀾之渺邈。轉舳艫而尋津。菱



歌於是頻<sub>レ</sub>汭<sub>レ</sub>沂。客子於是不勝春。茲可謂江  
村春而感於情人也。于時花飛江岸。草長河  
畔。蝶態紛紜。鶯聲撩亂。遊覽未已。日落<sub>レ</sub>溪。夜  
在江亭。高枕臥矣。江上月。浪中明。靜如練而  
雲間發光。與水而共清<sub>レ</sub>々。山風入於戶牖<sub>レ</sub>兮。  
聽<sub>レ</sub>颼颼乎松聲。歸雁欲辭汀洲去。飢猿曉動  
羈旅情。歸旅乘春心轉幽。江南江北事遨遊。惣  
爲春深多感歎。年々江望得銷<sub>レ</sub>憂。

重陽節菊花賦。

太上天皇

白藏氣季。玄月天高。霜零漂々。商風騷々。觀物  
理於盛衰兮。知造化之異時。林何樹而不搖  
落。原何艸而不具腓。豈若芳菊神奇。在枯獨  
滋。蔓延<sub>レ</sub>靡靡。緣岸被<sub>レ</sub>坻。花實星羅。莖葉雲布。香  
飄朝風。色照夕露。於是日當重陽。高宴華堂。  
正開玳筵。傍引賢良。陽隨桓景而訪古。就陶  
潛以命觴。摛賞心於翰墨。聽絲竹之清商。于  
時衆芳彫寒菊咲。殊蓊鬱獨照曜。或素或黃。滿

庭芬馥。淑媛望兮移步。妖姬歡兮屬目。攘<sub>レ</sub>溺  
腕而探<sub>レ</sub>嫋。擢纖手以摘<sub>レ</sub>花。珠顏俄爾益<sub>レ</sub>艷。雲  
髻忽焉重<sub>レ</sub>釵。期採摘於盆把兮。爰逍遙乎日  
斜。亦有鍾生稱其五美。屈子淪其落英。飭神  
仙之靈藥。忘塵俗之世情。感雁序於薄晚兮。  
傷落葉乎秋聲。時屬長年之多歎。還欣斯花  
之延齡。

小山賦。

石宅嗣

夫四序之交代。經萬古以無私。草逢春而花  
錦。樹入夏而葉帷。秋氣悲兮落實。冬風急兮空  
枝。觀節物之如此。覺世人之盛衰。聞瀛岳方  
靡<sub>レ</sub>覲。望帝鄉兮難期。顧爲山之在進。想覆  
簣之不移。事孰有貴。會心無卑。搆微岫於庭  
際。引細流於堂垂。天下有山。地中生木。小人  
以遠。君子所育。雖乏習坎之勢。豈謝設險之  
德。坐酌損之澤西。臨制節之水北。爾乃參差簣  
土。日度不障。皎潔坳地。風動而奚漲。松欹岸

兮傾蓋。石澄流兮泛鏡。雲片覆兮嶺陰。月半出兮谿映。鳥乍鳴兮遷木。我若遺兮委命。嗟大造之珠品。誠卑細而同慶。於是攝深思於一指。跨鯤海而無居。騁幽情於萬物。據蟻垤而有餘。信夫不出戶牖而知矣。何必歷覽山水而尚諸。聊託文之在茲。式寫心之所如。亂曰。四節遞謝兮萬物榮枯。視昔異代兮知後同途。高尚在心兮坳地足只。清淨委命兮崑岳蔑爾。禽獸不羣兮何必避世。簞瓢爲樂兮聊以卒歲。爲而不恃兮孰知其德。燕處超然兮唯道是則。

和石上卿小山賦

陽豐年

惟峻極之降神。據命世之偉人。擇仁里而獨放。追義跡而自珍。既自公而暢俗。亦退私而尋真。高臥吏隱之際。幽居道德之隣。噓東海之肥遁。恨北山之隱淪。於是榮阿蘭兮臨一邊。建菴室兮奏五絃。巖構礪齒之石。池涵洗耳之泉。魚喁水而相戲。鳥擇木而爭遷。植貞松

於情岳。挺幽蘭於心田。冒霜霰兮增勁。引風烟兮翻妍。時招拔茅之客。乍對竊藥之仙。一岳一壑。三益三樂。優遊仁智之藪。皓蕩經史之閣。冲玄其志。高素其致。瑩神兮泉石。息肩兮人事。或舉目而高吟。或負手而長喟。覩徙溟之垂天。翫槍榆之控地。惟逍遙之在我。何夸仙之足翼。嗟夫寵辱若驚。貴賤混情。既無謀於異道。唯有應於同聲。樂大玄於尙白。悲化緇於拾青。且得丘園之趣。焉知賓賓之名。亂曰。玄之又玄兮暢我情性。材與不材兮處我運命。纏牽之長兮累彼千里。池館之寂兮縱茲一己。吾生有疑兮世事無當。忘蹄得兔兮臨岐亡羊。大鵬小鷄兮相去幾許。左琴右書兮稅駕此處。

棗賦

藤宇合

一天之下。八極之中。園池綿邈。林麓斗茸。奇木殊名而萬品。神葉分區以千蒙。持西母之玉棗。



麗成王之圭桐。何則卜深居而榮紫襟。移盤根以茂彤庭。滄地養之淳渥。稟天生之異靈。依金闕而播彩。隨玉管而流形。固本枝於百卉。植聲譽於千齡。爾其秋實抱丹心而泛色。春花含素質而飛馨。朝承周雨漢露。夕犯許月陳星。當晚節而愈美。帶涼風以莫零。石虎瞻而類角。李老翫而比瓶。投海傳繆公之遠慮。在篋開方朔之幽襟。雞心釣名洛浦。牛頭味稱華林。斯誠皇恩廣被草木。聖化實及豚魚。何必秦松授乎封賞。周桑載乎經書。

和少輔鵲鵲賦

仲雄王

何陶冶之多端。包萬類兮流形。惟雍渠之微鳥。居一物兮含靈。稟玉衡之散彩。銜金水之淳精。常棲渚而任性。或在原而勞生。若乃韶風澹蕩。景色淑美。惟雄惟雌。爰孳爰尾。就河畔之青草。託孤栖於茂裏。外則蒙密兮亭童。內則渤朗兮芳通。視鷹鵬兮不能。窮鳥鳶兮安

得知。已異幕燕之易覆。寧同園鵲之極危。爾乃化素卵於翼下。破白玉而出雛。思飲啄之未習。勞哺育而忘軀。既而吉日良辰。天晴雲低。振尾憖翮。將雛離栖。出藂簿兮亂飛。集水濱兮羣啼。或居南居北。或向東向西。振斑翼而對母。開黃吻而乞哺。咨衆雛之已幼。專仰恃於一母。故不擇處兮苦求。寔寧居兮匪息。顧毛翮之既短。憫翩翾之無方。故得虫兮不獨貪。得粒兮不獨食。伊茲鳥之無智。何茲愛之無極。於是嶺含斜影。庭生半陰。素嶺窺梁。丹鶯宿林。獨念衆雛之晚食。乘反照而悲吟。至如求多得少。哺繁食稀。貧生之養母。見之增悲。寡婦之提孩。對之酸鼻。至如且行且搖。則飛鳴。兄之友弟。弟之事兄。聞之忽欲咸之動。彼天情之自然。非是自習之所成。誰其謂之異類。誠知契於生靈。

同。

菅清人



觀羽族之羣類。偉原上之連錢。挺參差之毛翮。施背腹之素玄。受含養於造化。任亭毒於自然。從運命兮舉動。與時節兮推遷。却斑彩于翡翠。謝貪穢于鴟鵂。望羊角以無及。竝鹿鳴以成篇。既薄雙翔之入藻。詎異孤翥之廻紘。及至星纏青陸。氣變蒼天。見飛幕之難恃。思草芥之不全。逮峻嶺之極危。就翳蒼之安禪。生雛兩箇。共哺同翩。下集金門之內。頡頏玉階之前。蔭息所得。進退靡捐。伊鳥之微陋。何處身之篤虔。鸚武慧以見羈。鷹隼猛以被攀。非鶴脛之當斷。豈鳬足之可延。勤恩愛乎一己。盛孝敬乎維賢。於是歡文之會友。美德之有憐。同狂簡之小識。異斐然之爲賦。攀桃李以報蘭桂。唱下里以和陽春。

嘯賦 并序。

菅清公

清公少好音樂。長而尙耽。雖云造次。心未暫捨。然而性與好背。事與意違。未曾手撫一絃。

口吹一管。至乎池亭景物色將涼。吟咏乍疲。繼之以嘯。洪纖在口。脩短任心。無曲不寫。無歌不習。乃知音聲之妙。莫過於嘯。援筆賦之。聊以寫想。

伊八音之雅倫。共五聲而變會。導神祇之滯鬱。發陰陽之冥昧。諧奇調於律呂。馳妙響於琴簾。或金石之鏗鎗。或譟鼓之琅璫。爾其製器。凌重巖而過松庭。涉危澗而入篁町。首岐衰專慮。班倕量程。鑠礪矯揉。鏤鏐經營。皆因人以成事。猶假物以振聲。惟此嘯之作。音在唇吻。而浮沈。意在竹而寫笙笛。想歸絲以像瑟琴。發春林之鶯囀。亮曉巖之猿吟。分一氣於角羽。取衆響於淩深。暢山水之曲弄。流吳越之謳吟。爾乃韻無常調。無出不妙。翫無定時。有興是要。非拘栖雞之曙鳴。不守臯鶴之夜叫。避龍聲之陳階。謝鳳翼之入廟。至如蘇門之巔聽鼓吹之噲然。印山之上驚林谿之動焉。擅美前哲。

見述往篇。復有晉將城邊胡賊感乘月之妍。趙子江上船人見呼風之玄。是乃非止從容之散適。抑亦濟厄之奇權。故雖非感神之妙器。猶識微藝之可宣。

重陽節神泉苑賦

秋可哀

太上天皇在祚。

秋可哀兮哀年序之早寒。天高爽兮雲渺々。氣蕭颯兮露團々。庭潦収而水既淨。林蟬踈以引欲殫。燕先社日蟄巖嶺。雁雜涼風叫江洲。荷潭帶冷無全葉。柳岸銜霜枝不柔。寒服時授。熟稼難収。秋可哀兮哀草木之搖落。對晚林於變衰。分聽秋聲乎蕭索。望芳菊之丘阜。省幽蘭之皐澤。年華荏苒行將闌。物候蹉跎已廻薄。梵客悲哉之詞。晉郎感興之作。秋可哀兮哀秋夜之長遙。風凜々月照々。臥對風月正蕭條。窓前墜葉那堪聽。枕上未眠欲終宵。到曉城邊誰擣衣。冷々夜響去來飛。不<sub>レ</sub>是愁人猶多感。深

閨何況怨別離。□嗟四運易行邁。惆悵三秋絕可悲。

重陽節神泉苑賦

秋可哀應制。

皇帝在東宮。

秋可哀兮哀秋景之短暉。天廓落而氣肅。日淒清以光微。潦収流潔兮霜降林稀。蟬飲露而聲切。雁冒霧以行遲。屏除熱之輕扇。授御棗之寒衣。秋可哀兮哀百卉之漸死。葉思吳江之楓。波憶洞庭之水。草變貞以搖蕩。樹容而懸子。秋可哀兮哀榮枯之有時。送春光之可樂。逢秋序之可悲。嗟搖落之多感。良無傷而不滋。悽承弁於岳興。想拊衾於湛詞。粵採萸房之辟惡。復摘菊蕊之延期。小臣常有蒲柳性。恩煦不畏嚴霜飛。

同前

良安世

秋可哀兮哀初月之微涼。火度天而西流。金應律以爲玉。蟋蟀吟兮壁幽寂。蟬蜩鳴兮野蒼茫。



觀桐林之早彫。感節物而增傷。白日兮爰短。  
玄夜兮自長。秋可哀兮哀。仲月之收成。天高兮  
氣靜。池冷兮水清。燕背巢而北去。鴻含蘆以南  
征。家々畏兮朔方氣。戶々起兮擣衣聲。秋可哀  
兮哀。季月之薄寒。寒眉嘔於陌柳。晚佩落於庭  
蘭。竊窈誦。莫兮鴛鴦席。簪纓飲菊兮翡翠樓。痛  
風景之蕭索。悲搖落之暮秋。

同前。

仲雄王

秋可哀兮哀。清商之初涼。高旻淒兮林藹變。厚  
壤肅兮山髮黃。聽征鴻之遵洛。睇素領之辭  
梁。秋可哀兮哀。具物之具腓。送悠陽之暮曜。  
承曠曠之初輝。潭鳥鳴兮音冷。岸螢落兮火微。  
秋可哀兮哀。水木之清幽。屬君王之景祚。陪帝  
者之佳遊。獻千秋之壽爵。荷萬代之天休。

同前。

管清公

秋可哀兮哀。三秋之爽節。潦行収而水淨。雲旣  
廓以天潔。望朝露之團々。聽夕風之烈々。秋可

哀兮哀。秋物之變衰。草辭翠以委薄。葉帶紅  
而去枝。寒園柳落蟬聲斷。晚蒲蘆枯雁響悲。秋  
可哀兮哀。秋情之易驚。蘭幸佩以擢秀。菊憶  
杯而含馨。皇歡爰發。叡興自生。資神泉之閑  
敞。降恩席以延英。鈞天奏樂。磬地壽禎。俱醉  
重々心未盡。義和冀駐向西晶。

同前。

和真綱

秋可哀兮哀。歲時之如流。季白鷹節。百工具休。  
秋何處而不興。興何秋而不愁。却暑絺於匣裡。  
禦寒纈於輕裘。傷曹子之惻怛。歎淮王之感  
憂。秋可哀兮哀。物候之淒清。野改色以草檺。林  
代狀以枝輕。轉花心於風上。驚葉影於秋聲。霜  
凝菊兮蕭々。露留荷兮冷々。望離鴻之高翥。  
聽檐虫之潛鳴。秋可哀兮哀。短景之微陽。火遷  
行而增分。日廻晷而収光。晚蟬吟於疎柳。夜  
兔臨於戶堂。君王發言以形惆悵。揆擗叡作以  
挺天章。雖悲零落之序。欣奉名辰之昌。



同前。

科善雄

秋可哀兮哀。秋氣之依々。望景宇而高爽。瞻林沼以澄稀。樹在庭前而併槭。草非塞外以具衰。菊方新而欲暮。蘭雖敗而猶芳。物色直置如此。自然堪斷人腸。秋可哀兮哀。歲序之遞過。觀搖落以起感。履代謝而自嗟。惜百年之過半。愴一生之蹉跎。陪重陽之慶席。知品彙之同類。雖對秋天之淒景。何異冬日之可愛。

同前。

和仲世

秋可哀兮哀。光陰之不駐。歎涼氣之奪熱。痛盲風之落樹。一葉增長年之思。獨杵悲征夫之戍。秋可哀兮哀。羣物之彫殘。柳斂眉於天苑。菊映貞於故欄。綵燕去而林巢闕。文魚聚以苦水寒。思虫苦於晚織。旅雁倦於路難。何四運之有信。寔大塊之多端。

同前。

滋貞主

秋可哀兮哀。秋候之蕭然。潘郎可哀之歎。楚客

悲哉之篇。虫慘悽而聲冷。露咄咄而泣懸。班姬酷怨同輕扇。青女微霜自晏天。却細絺於雲匣。授寒服於香筵。秋可哀兮哀。卉木之灑落。具物縮悴。爽氣遼廓。烟斷崇嶺。雲愁幽谿。淮南木葉聲虛散。上苑楓林陰未薄。幕下巢空燕早辭。湖中洲喧雁始歸。節灰尙如此。情人誰不悲。秋可哀兮哀。秋暉之易斜。巖筵掃葉。藤杯挹霞。朗吟聽竹樹。夕照倒水砂。脆柳暮分觀。踈星襲蘭蔚。兮聞濃馨。物色豔雖使人感。潭花但喜益仙齡。

經國集卷第一

經國集卷第十目錄

詩九

樂府

太上天皇塞下曲一首

從四位上行大學頭兼文章博士播磨權守菅

原朝臣清公奉和塞下曲一首

從五位上巨勢朝臣識人一首

菅原朝臣清公奉和塞上曲一首

三品有智子公主奉和巫山高一首

巨識人一首

公主奉和關山月一首

菅原清公一首

滋野貞主一首

參議從四位上小野朝臣岑守梅花引二首

梵門

高野姬天皇讚佛一首

太上天皇見老僧歸山一首

左大臣兼行左近衛大將贈正一位藤原朝臣

冬嗣奉和老僧歸山應太上天皇制一首

太上天皇和藤是雄舊宮美人入道詞一首

太上天皇和藤是雄春日過安禪師舊院一首

太上天皇與海公飲茶送歸山一首本文

太上天皇和惟逸人春道秋日臥病華嚴山寺

精舍之作一首

蔭子無位滋野朝臣善永和惟治中秋日臥疾

華嚴寺堂公之作一首

太上天皇春日過山寺觀菩薩舊壇一首

太上天皇問淨上人病一首

無位源朝臣弘奉和一首

無位源朝臣常奉和一首

太上天皇寄淨公山房一首

皇帝聞右軍曹貞忠入道簡大將軍良公一

首

太上天皇和御製聞右軍曹入道簡大將軍

良公一首

正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良

岑朝臣安世奉和御製聞右軍曹貞忠入

道見賜一首

近江少掾從八位上惟良宿禰春道送伴秀才

入道一首

皇帝扈從梵釋寺應制一首

中納言從三位兼行左近衛大將民部卿清原

真人夏野扈從梵釋寺應制一首

從四位下行彈正弼兼下總守三原朝臣春上

一首

安養尼和氏禪居詩一首

正五位下春宮亮藤原朝臣三成春日山寺探

得春字一首

太上天皇和良將軍題瀑布下蘭若簡清大

夫之作一首

源弘一首

惟春道一首

太上天皇和惟山人春道晚聽山磬一首

良安世和藤判事題石窟僧之作一首

良安世別男子出家入山一首

良安世登延曆寺拜澄和尚像一首

小野岑守歸休獨臥寄高雄山寺空海上人

一首

大僧都傳燈大法師位空海南山中新羅道者

見過一首

釋空海過金心寺一首

釋空海留別青龍寺義操阿闍梨一首

釋空海入山興一首

釋空海在唐觀昶法和尙小山一首

大學頭從五位上兼行東宮學士文章博士大

外記朝原宿禰道永孟蘭盆會悲感歸心一

首

正六位上加賀介弘道宿禰眞貞一首

大納言贈從二位石上朝臣宅嗣三月三日於

西大寺待宴應詔一首

從四位下守刑部卿兼因幡守守勳三等淡海

眞人三船於內道場觀虛空藏菩薩會一



首

淡三船扈從聖德宮寺一首

淡三船聽維摩經一首

淡三船和藤六郎出家之作一首

淡三船贈南山智上人一首

從五位上行式部少輔藤原朝臣常嗣秋日登

叡山謁澄上人一首

左衛門權佐從五位上守左少弁笠朝臣仲守

冬日過山門一首

滋貞主和光禪寺山房曉風一首

滋貞主和澄上人題長宮寺二月十五日寂滅

會一首

正五位下守中務大輔安部朝臣吉人忽聞渤

海客禮佛感而賦之一首

大外記正六位上嶋田朝臣清田同安領客感

客等禮佛之作一首

大舍人助正六位上小野朝臣年永夏日同美

三郎遇雨過菩提寺一首

惟春道賦得深山寺應太上天皇制一首

經國集卷第十

詩九

東宮學士從五位下滋野朝臣貞主奉

勅撰

樂府。

七言。塞下曲一首。

太上天皇在祚。

百戰功多苦邊塵。沙上萬里不見春。漢家天子

恩難報。未盡凶奴豈顧身。

七言。奉和塞下曲一首。

菅清公

天山秋早雲花開。征客心消上苑梅。萬里他鄉

無與晤。遙瞻漢月自南來。

同前。

巨識人

胡兒塞月曉吹笳。梅柳雖春未見花。爲報國

恩不敢死。邊亭萬里老風沙。

七言。奉和塞上曲。

太上天皇在祚。

營清公

虜塞草枯膠已寒。將軍浴鐵向桑乾。龍沙日夜風霜烈。壯士爲恩未識難。

五言奉和巫山高一首。太上天皇在祚。

公主

巫山高且峻。瞻望幾岩々。積翠臨蒼海。飛泉落紫霄。陰雲朝曖曖。宿雨夕飄飄。別有曉猿叫。寒聲古木條。

同前。

巨識人

巫嶺巴東峙。雲崖貌削成。危巖干鳥路。虛谷寫雷鳴。雲臨朝館起。雨向夕臺行。秋月狐猿曙。腸斷旅遊情。

五言奉和關山月一首。太上天皇在祚。

公主

皎潔關山月。流光萬里明。懸珠露葉浮。臨扇霜華清。寒雁晴空斷。狐猿曉峽鳴。那堪空閣妾。未慰相思情。

同前。

營清公

關山秋宿月。夜冷月彌清。影共征輪滿。光含旅鏡明。龍城照雲陣。雁塞□星營。還入高樓裡。空令思婦情。

同前。

滋貞主

戍上孤明月。恒將太白看。弓彎漢卒臂。□挂拂兒鞍。□陣鼓聲死。伍營兵氣寒。嫦娥如有意。應照妾汎瀾。

七言梅花引二首。

野岑守

水精窓外一株梅。擬納芬芳壓砌栽。地近恩煦花早發。君王帳裡香風來。百卉寒無色。梅花獨有春。欲添新粧美。灑着妓樓人。

梵門。

五言讚佛。

高野天皇

慧日照千界。慈雲覆萬生。億緣成化德。感心演法聲。

七言。見老僧歸山一首。太上天皇

道性本來塵事遐。獨將衣鉢向煙霞。定知行盡秋山路。白雲深處是僧家。

七言。見老僧歸山應太上天皇制一首。

藤冬嗣

老僧落葉往玄虛。策杖伸腰四剋餘。自語一還不更出。乞城無若臥雲居。

七言。和藤是雄舊宮美人入道詞一首。

太上天皇

遁世明皇出帝畿。移居舊邑遣歲時。忽從此地昇雲後。唯有空居戀寵姬。訪道初停羅綺艷。剃頭新□比丘尼。嬌心欲識乖□縛。弱體那堪着草衣。山殿風聲秋梵冷。漢窓月色曉禪悲。焚香持誦寒林寂。坐向蒼天怨別離。

和藤是雄春日過安禪師舊院一首。

太上天皇

釋子歸真炎涼變。空山獨閉應禪局。草堂空駐

松蘿月。石室罷翻了義經。護法鬼神何日會。隨緣猿鳥竟誰聽。道心拭淚禮遺跡。何恨化身不久停。

七言。與海公飲茶送歸山一首。

太上天皇

道俗相分經數年。今秋晤語亦良緣。香茶酌罷日云暮。稽首傷離望雲烟。

和惟逸人春道秋日臥疾華嚴山寺精舍之作一首。

太上天皇

絕頂華嚴寺。雲深溪路遙。道心登靜境。真性隔塵囂。閱薦禪庭栢。觀空法界蕉。天花流邃澗。香氣度烟霄。風竹時明合。聲鐘曉動搖。轉經山下。羸病轉寥々。

同。滋善永

病中秋欲暮。策杖到雲居。古徑人來遠。霜林鳥道疎。飛雲心不定。身世是浮虛。月色孤猿絕。



岑聲一夜初。吹螺山寺曉。鳴磬谷風餘。蘭若遲  
廻久。寥々臥草廬。

七言。春日過山寺觀菩薩舊壇一首。

太上天皇

禪扃閉雲春山寒。林下苔封萬古壇。菩薩化身  
滅後事。空餘歲月白雲殘。

七言。問淨上人疾一首。太上天皇

聞公暫病臥山房。空報鐘聲不上堂。道性如  
思幽客問。須療身是真藥王。

七言。奉和太上天皇訪淨上人病一首。

源弘年十六。

高僧幾歲養清閑。病裡天花映暮山。野客時來  
通幽問。踈鐘獨通白雲間。

同前。

源常年十六。

支公臥病遣居諸。古寺莓苔人訪疎。山客尋來  
若相問。自言身世浮雲虛。

七言。寄淨公山房一首。太上天皇

古寺從來絕人蹤。吾師坐夏老雲峯。幽情獨臥。  
秋山裏。覺後恭聞五夜鐘。

七言。聞右軍曹貞忠入道因簡大將軍良

公一首。

皇帝

久厭輪廻多苦事。遙思聽法鷲峯中。昨朝劒戟  
陪丹閣。今夕僧衣向花宮。苔蘚密間乏塵垢。松  
杉攢處有清風。芭蕉疎裊新慣著。貝葉眞經誦  
未工。山霧始開無明氣。溪泉欲洗夢心聾。夜  
來坐念因緣理。了得皆空々亦空。

七言。和御製聞右軍曹入道簡大將軍良

公一首。

太上天皇

伊昔邊頭俠少年。今爲末將禁庭前。歸心厭俗  
兵戈罷。仰拜彤闈謝皇天。塵衣已替薜蘿裊。道  
惟初寒楊柳綿。古寺莓苔新跡破。草堂磬梵舊聲  
傳。對鏡持齋宜野果。觀空爐氣和山烟。雖逢  
聖代多雨露。別是素懷奉金仙。

七言。奉和聖製聞右軍曹貞忠入道見

賜一首。

良安世

功忠非獨兵欄士。護國之誠法門人。丹闕上書已罷職。緇壇落髮不關塵。九重城裡回頭望。一乘車前專意臻。服色就真道體改。冠痕未減半額分。秋嵐晚偈對黃葉。曉月疎鐘在白雲。行道偏雖深蘿處。懸心猶是爲明君。

七言。送伴秀才入道一首。

惟春道

厭見風塵上下情。欲雲栖去學無生。妻孥弃在人間。錫鉢遙尋象外行。盥漱應隨溪水暮。觀身靜坐進鐘聲。不知別後相思伴。何處烟霞訪姓名。

七言。扈從梵釋寺應制一首。太上天皇在祚。

皇帝在東宮。

君王機暇倦夏日。午後尋真幸龍宮。四五老僧迎鳳輦。形如槁木心恒空。飛棧樹杪踏雲過。石燈岩頭拂烟通。不待緣終象法盡。而今此處

仰世雄。

扈從梵釋寺應制一首。清夏野

同前。三春上。

鑾輿近出王畿外。仙蓋高飛天闕中。合掌凝眸尋鷺嶺。焚香散蕊拜龍宮。老僧護法心彌寂。童子虛飡體既窮。徐出庄梯知俗遠。閑遊石落覺塵空。禪塲蘚色無冬夏。幽谷松聲有隔通。冥眼今看真如理。是着□□□□□。

五言。禪居一首。尼和氏

棲隱多歸趣。從來重練耶。駕言尋此處。此處幾經過。煙泛暗山樹。霞昭瑩野花。禪居無異物。微月入巖阿。

七言。春日山寺探得春字一首。

藤三成

法堂寂寞凡幾辰。雲樹朦朧欲暮春。遙聽風中誦經處。定知時有安禪人。

七言。和良將軍題瀑布下蘭若簡清大夫之作一首。

太上天皇

瀑布一邊一山寺。高車訪道遠追尋。空堂望崖銀河發。古殿看溪白虹臨。霧雨灑來霑爐氣。雷風噴怒亂鐘音。澹肢僧朮流懸水。盥漱獨行禪定心。

同前。

源弘年十五（六）。

傳聞蘭若無人到。瀑布高流過半天。涌珠飛釜分萬壑。連波灑落成一川。四時每聽奔雷響。遠近同看白鶴懸。此地幽閑禪誦客。煩塵洗滌幾千年。

同前。

惟春道

知君策馬到雲居。古岸懸流數里餘。鏡色每將空性徹。氷華長磬道心虛。羅浮擊磬含風遠。于闐鳴鐘帶雨疎。終日洗塵看不足。銅瓶汲取夜

禪初。

七言。和惟山人春道晚聽山磬一首。

太上天皇

黃昏磬發烟霄中。點々悠揚帶山風。林下暗堂臥聽磬。禪心觀念法皆空。

五言。別男子出家入山一首。

良安世

我有一兒子。塵煩不可侵。天縱成道器。童齒拔禪心。新負心經帙。初諳梵字音。野縫青葛袽。□□綠蘿襟。杖錫岩苔上。提瓶澗水潯。苦行何處所。雪嶺白雲深。

五言。登延曆寺拜澄和尚像一首。

良安世

溟海占杯路。天台轉求イ法輪。芳蹤踞冠國。應化不留身。道與乾坤遠。基將日月均。鑪煙猶似昔。形像正疑真。定室苔封砌。禪房雲是隣。登攀春黛裡。拜頂暮鍾辰。



五言。歸休獨臥寄「高雄寺空海上人」一首。

野岑守

三千千法界。一十三生死。空色將有無。俄頃復忽矣。影花假艷嬌。風火期滅已。寵辱驚難息。是非紛易似。聖人獨出鑒。獨臥白雲裡。忍鎧詎爲穿。慧刀豈因砥。五明探真密。七覺泊神理。護戒鵝得性。依慈鵠知時。垂蘿宜綴袂。盤木便馮几。野院醉茗茶。溪香飽蘭茝。昔余深結義。自爾十餘紀。眞諦憐俗物。緇衣交素履。彌天許道安。四海慙鑿齒。幸遇滄浪清。濯纓欣貴仕。榮華尙貪進。盈滿未能止。恩貸雖曲私。庸虛忝揆。勵鈇求一割。策駘思千里。日往月還來。慎終願如始。歸休樂閑寂。在謦忘蒿滓。披帙遊玄妙。彈琴翫山水。寄言陵數客。大隱隱朝市。偏將瓊琚報。投之以桃李。

七言。南山中新羅道者見過一首。

釋空海

吾住此山不記春。空觀雲日不見人。新羅道者幽尋意。持錫飛來恰如神。

七言。過「金心寺」一首。

釋空海

古貌滿堂塵暗色。新華落地鳥繁聲。經行觀禮自心感。一兩僧人不審名。

七言。留別青龍寺義操阿闍梨一首。

釋空海

同法同門喜遇深。遊空白霧忽歸岑。一生一別難再見。非夢思中數々尋。

七言。在「唐觀」禪法和尙小山一首。

釋空海

看竹看花本國春。人聲鳥弄漢家新。見君庭際小山色。還識君情不染塵。

雜言。入山興一首。

釋空海

問師何意入深寒。深嶽崎嶇太不安。上也苦。下時難。山神木魅是爲瘴。君不見。君不見。京城御苑桃李紅。灼灼紛々顏色同。一開雨。一散風。

飄上飄下落。園中春女群來一手折。春鶯翔集  
喙飛空。君不見。君不見。王城城裏神泉水。一  
沸一流速相似。前沸後流幾許千。流之流之入  
深淵。不入深淵轉々去。何日何時更竭矣。君不  
見。君不見。九州八嶋無量人。自古今來無常  
身。堯舜禹湯與桀紂。八元十亂將五臣。西嬌嫖  
母支離體。誰能保得萬年春。貴人賤人總死去。  
死去死去作灰塵。歌堂舞閣野狐里。如夢如泡  
電影賓。君知否。君知否。人如此。汝何長。朝夕  
思堪斷腸。汝日西山半死士。汝年過半若尸起。  
住也住也一無益。行矣行矣不須止。去來去來  
大空師。莫住莫住乳海子。南山松石看不厭。南  
嶽清流憐不已。莫慢浮華名利毒。莫燒三界火  
宅裏。斗數早入法身里。

五言。孟蘭盆會悲感歸心一首。

朝道永

皈依三界主。景慕六通賢。拔苦覃窮地。酬恩

達昊天。花飄開法宇。香泛發飢脣。既請如來  
教。還休餓鬼神。善哉爲子道。拔苦遂安親。

七言。三月三日於西大寺侍宴應詔一首。  
高野天皇  
在祚。石宅嗣

三昇三月啓三辰。三日三陽應三春。鳳蓋凌空  
臨覺苑。鸞輿□日對禪津。青絲柳陌鶯歌足。紅  
藥桃溪蝶舞新。幸屬無爲梵城賞。還知有截不  
離眞。

五言。於內道場觀虛空藏菩薩會一首。  
高野天皇  
在祚。淡三船

鳳闕留仙影。龍墀演法音。是空神尙寂。卽色理  
逾深。夕梵聞雲霧。朝鐘徹霧林。幸從無漏界。  
長絕有爲心。

五言。扈從聖德宮寺一首。  
高野天皇  
在祚。淡三船

南嶽留禪影。東州現應身。經生名不成。歷世  
道彌新。尋智開明智。求仁得至仁。垂文傳正

法。照武掃凶臣。茂實流千載。英聲暢九垓。我皇欽佛果。廻駕問芳因。寶地香花積。鈞天梵樂陳。方知聖與聖。玄德永相隣。

五言。聽維摩經一首。 淡三船

演化方丈室。談玄不二門。已觀心有種。旋覺理無言。地似毗耶域。人疑妙德尊。誰知從此會。頓入總持園。

五言。和藤六郎出家之作一首。

淡三船

戚里辭榮親。玄門問覺津。法雲爰疊彩。惠日更重輪。樂道心逾逸。安空理轉真。高風如可望。從子避<sup>謝</sup>露塵。

五言。贈南山智上人一首。

淡三船

獨居窺巷側。知已在幽山。得意千年桂。同香四海蘭。野人披薜祲。朝隱忘衣冠。副思何處所。遠在白雲端。

五言。秋日登叡山謁澄上人一首。

藤常嗣

城東一岑聳。獨負叡山名。貝葉上方界。焚香驚嶺城。飢飡藜藿熟。白飯練沙成。輕梵窓中曙。疎鐘枕上清。桐蕉秋露色。雞犬冷雲聲。高陽丹丘地。方知南嶽晴。

冬日過山門一首。 笠仲守

香剎青雲外。虛廊絕岸傾。水清塵躅斷。風靜梵音明。古石苔爲席。新房菴作名。森然蘿樹下。獨聽暮鐘聲。

七言。和光禪師山房曉風一首。

滋貞主

孤峯仰與白雲同。到曉深寒滿院風。雁影吹來古塔上。泉聲纔定近溪中。侵窓老樹雖鳴葉。閉戶妙燈猶護蟲。百籟相和山更靜。禪心彌觀世間空。

和澄上人題長宮寺二月十五日寂滅會



一首。韻不  
改。

滋貞主

種好六年備。昏衢仰映臨。涅槃非實道。尊象是夢金。名字自希絕。經王亦甚深。化流崛山嶺。霍留菩提林。一字悲難竭。三車感不任。聞經帝釋下。捧穀虛堂尋。繞塔看歸雁。思龍託樹陰。不常猶不住。非曩亦非今。法座楞伽說。禪房仙人掌。貝葉傳梵啓。鐘聲入谷沈。德水洗塵意。天花落俗襟。如來不生滅。照薰修□心。

七言。忽聞渤海客禮佛感而賦之一首。

安吉人

聞君今日化城遊。真趣寥々禪跡幽。方丈竹庭維摩室。圓明松蓋寶積球。玄門非無又非有。頂禮消罪更消憂。六念鳥鳴蕭然處。三歸人思幾淹留。

七言。同安領客感客等禮佛之作一首。

嶋渚田

禪堂寂々架海濱。遠客時來訪道心。合掌焚香

忘有漏。廻心願偈覺迷津。法風冷々疑迎曉。天萼輝々似入春。隨喜君之微妙意。猶是同見崛山人。

七言。夏日同美三郎遇雨過菩提寺作一首。  
野年永

晚景雲蒸雨初下。遊人半濕青山側。垂鞭撫轡無所往。便寄玄爐且棲息。古殿燈薰梅檀香。山僧法服薜花色。深窓欲曙憑松暗。絕巘初明街雲蘿。誰識心田先種因。希夷覺路仰餘德。

七言。賦得深山寺應太上天皇制一首。

惟春道

上方來往路難尋。塔廟青山祇樹林。片石觀空何劫盡。孤雲對境幾年深。紗燈點々千峯夕。月磬寥々五夜心。到此能令身世忘。塵機不得更相侵。

經國集卷第十

經國集卷第十一目錄

詩十

雜詠一

平城天皇詠殿前梅花一首

從四位下行東宮學士兼文章博士高村宿禰

田使詠庭前梅花應制一首

平城天皇落梅花一首

參議從四位上小野朝臣岑守奉和落梅花

一首

正五位下行但馬守和氣朝臣廣世一首

平城天皇詠庭梅一首

播磨守贈正四位下賀陽朝臣豐年奉和庭

梅一首

太上天皇早春一首

東宮學士從五位下滋野朝臣貞主奉和早春

春一首

太上天皇早春觀打毬一首

太上天皇春日作一首

三品有智公主奉和春日作一首

野岑守一首

從四位上行大學頭兼文章博士播磨權守菅

原朝臣清公一首

滋貞主一首

從五位上行民部少輔藤原朝臣衛一首

太上天皇見滋貞主春日病起一首

太上天皇和藤朝臣春日過前尚書秋公歸

病之作一首

野岑守一首

從四位下行民部大輔兼東宮學士上毛野朝

臣穎人一首

太上天皇閑庭早寐一首

太上天皇和菅原清公春雨之作一首

滋貞主一首

太上天皇老翁吟一首

太上天皇鞞韞篇一首

滋貞主奉和鞞韞篇一首

皇帝看源童子書跡二首

公主賦新年雪裏梅花一首

正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良

岑朝臣安世暇日閑居一首

野岑守竹樹新栽流水遠引卽事有興把筆直

疏得寒字應制一首

大僧都傳燈大法師位空海現果詩一首

空海過因詩一首

陽豐年賦桃應令一首

正五位下林宿禰娑婆一首

陽豐年詠櫻一首

毛穎人春庭友人見過一首

從四位下行越中守南淵朝臣永河奉和太上天皇春堂五詠四首

從五位下淨野宿禰夏嗣一首

從八位上守近江少掾惟良宿禰春道三首

從五位上行刑部少輔石川朝臣廣主同春太

詠鬼之什一首

滋貞主臨春風效沈約體應太上天皇制一首

首

滋貞主春日奉使入渤海客館一首

太上天皇聽早鶯示惟山人一首

太上天皇和滋貞主城外聽鶯簡前藤中納

言之作一首

滋貞主文友見過賦鶯勒情晴一首

滋貞主和藤神策大將閉門好靜花鳥馴人

不勝感與之什一首

陽豐年詠禁苑鷹生雛一首

從五位上行攝津介中科宿禰善雄一首

淡福良月下聞孤雁一首

文章生從八位上大枝朝臣眞臣詠燕一首



從五位下守右近衛少將兼行下總權介紀朝

臣長江賦賜看紅梅探得爭字應令一首

文章生從八位下藤原朝臣令緒早春途中一

首

經國集卷第十一

詩十

東宮學士從五位下臣滋野朝臣貞主奉

勅撰

雜詠一。

五言。詠殿前梅花一首。

平城天皇在東宮

仲春雖少暖。梅樹向驚時。發艷將桃亂。傳芳

與桂欺。可攀猶可折。堪寄亦堪貽。儻有臨羹

和。能無致味滋。

五言。奉和殿前梅花。

高田使

忽見三春木。芳花一種催。素葩承日咲。黃蕊對

風開。舞蝶飛更聚。歌鶯去且來。和羹如可適。以

此作鹽梅。

五言。落霖花。

平城天皇在東宮

二月云過半。梅花始正飛。颺颺投暮牖。散亂拂

晨扉。萼盡陰初薄。英疎馥稍微。再陽猶未聽。誰

爲恡芳菲。

五言。奉和落梅花一首。

野岑守

晚樹梅花落。輕飛競滿空。窓前將歛素。簾下未

銷紅。著面催粧婦。黏衣助女工。華篇終寡

和。何獨郢之中。

同。

和廣世

凌空朱早發。競暖素初飛。送吹香投牖。迎光

影拂扉。棟葦實漸見。葉細蔭猶微。願遇重陽日。

承暉擅芳菲。

五言。詠庭梅一首。

平城天皇在東宮

庭梅競艷色。朝暮正芳菲。可惜春風下。苑花一

亂飛。

五言。奉和庭梅一首。

陽豐年

宮裡一梅樹。寒花尙入春。風涼徒苦節。日暖獨

當仁封雪猶餘影。拾霞未斂新。竟逢攀折興。  
輕散舞儲茵。

五言。早春一首。

太上天皇在祚。

玉律三陽始。年芳萬里生。山晴銷片雪。地暖動  
群萌。色微沙嶼草。晷涉柳園鶯。唯有歸飛雁。連  
連回北聲。

五言。奉和一首。

太上天皇  
在祚。

滋貞主

淑穆年華早。圭陰漸欲長。舒榮仙御柳。仰煦古  
疇楊。北雁非寒候。南鶯是暖陽。春人釋舊服。  
何處不新粧。

七言。早春觀打毬一首。

使渤海客  
奏此樂。

太上天皇

芳春烟景早朝晴。使客乘時出前庭。廻杖飛空  
疑初月。奔毬轉地似流星。左擬右承當門競。  
分行羣踏虬雷聲。大呼伐鼓催籌急。觀者猶嫌  
都易成。

七言。奉和觀打毬一首。

滋貞主

蕃臣入觀逢初暖。初暖芳時戲打毬。綉戶爭開  
鵝鵲館。紗窓不閉鳳皇樓。如鈎月度。莫階側。  
似點星晴。綵騎頭。武事從斯弱。見輸。輸家妬死  
數千籌。

五言。春日作一首。

太上天皇在祚。

聞是新正後。陽和二月時。庭蘭萌稚葉。窓柳亂  
輕絲。花色風初暖。鶯聲日漸遲。春來傷節候。幽  
興復熙々。

五言。奉和春日作一首。公主

近來風日麗。萬物奢春光。烟輕新艸綠。林暖早  
花芳。餘雪落梅院。遊絲垂柳塘。鴻雁初遵渚。  
歸飛向朔方。

同前。

野岑守

苦寒經暮節。服暖仰初陽。龍鳳長樓影。鴛鴦  
簿瓦霜。窓開青柳色。院閉紫梅芳。一聽虞韶美。  
能令三月忘。

同前。

菅清公

歲去纔移月。年光處々賒。和風催柳絮。殘雪伴梅花。樹暖鶯能語。蘂芳蝶自奢。一馳千里目。春思忽紛拏。

同前。

滋貞主

聖眼閱奔靄。芳情從此頻。便娟韶吹暖。旖旎歲腴新。紫籜須抽節。青蘂欲勝茵。金堤輕凍罷。初使詠潛鱗。

同前。

藤衛

時去時來秋復春。一榮一悴偏感人。容顏忽逐年序變。花鳥恒將歲月新。

五言。見滋貞主春日病起一首。

太上天皇在祚。

辭闕沈痾久。別來秋復春。賴逢陽氣煦。喜見更生人。

五言和藤朝臣春日過前尚書秋公歸病

作一首。

太上天皇在祚。

闕下新辭祿。都門舊一踈。幽情吟招隱。孤興賦閑居。烟景春深色。群萌雪尺餘。夜來琴酒意。松月曉窓虛。

同前。

野岑守

伊人登仕久。閑養臥芳春。知足慎玄誠。辭盈謝鬼神。貞松百尺節。寒竹四時筠。應識千年後。獨將疎氏倫。

同前。

毛穎人

未及懸車乞骸骨。明皇恩寵帶平章。近江太有鱸魚膾。定識休閑壽命長。

七言。閑庭早梅一首。

太上天皇

庭前獨有早花梅。上月風和滿樹開。純素不嫌幽院寂。濃香偏是犯窓來。纖々枯幹知初暖。片片寒葩委舊苔。自恨無因佳麗折。徒然老夫野人栽。

五言。和菅清公春雨之作一首。

太上天皇在祚。



崇朝雲氣晴。密雨泛春空。京洛囂塵歛。章臺夕影朦。懸珠新古樹。含潤短脩蒙。芳澤被群物。鶯華二月中。

同前。

滋貞主

有淦公私遍。初令東作霑。杏花新色淺。莖葉早莖纖。暮影頻來館。春聲不斷簷。群芳從此出。何處見寒潛。

七言。老翁吟一首。

太上天皇

世有不羈一老翁。生來無意羨王公。入門忘却貧與賤。醉臥芳林花柳風。

雜言。鞦韆篇一首。

太上天皇在祚。

幽閨人。粧梳早。正是寒食節。共憐鞦韆好。長繩高懸芳枝。窈窕翩々仙客姿。玉手爭來互相推。纖腰結束如鳥飛。初疑巫嶺行雲度。漸似洛川迴雪皎。春風吹休體自輕。飄々空裡無厭情。佳麗鞦韆爲造作。古來唯惜春光過。清明。踢雲雙履透樹差。曳地長裾掃花却。數舉不知香氣

盡。頻低寧顧金釵落。嬋娟嬌態今欲休。攀繩未下好風流。教人把着忽飛去。空使伴儔暫淹留。西日斜。未還家。此節猶傳禁火。遂無燈。月爲燈。鞦韆樹下心難歇。欲去踟躕竟不能。

雜言。奉和鞦韆篇二首。滋貞主

寒食節。周舊制。禁火餘風猶未廢。麗景雖多雄勝壞。光華未若帝鄉霽。相將容豫自何憐。昨日烟林採摘人。借問遊蹤攸向處。鞦韆好樹一園春。自凌旦。欲暮時。後輩趕來滿路暉。或步或車塵影合。半休半戲語聲微。初惟淺暗榆槐柳。酷氣深濃桃李梨。聳幹高橫來似落。長繩倒着去如飛。常人熟得新者畏。往歲過停今年遲。弱腕經營不識罷。輕躬憐愛無意歸。花與飾。飾與花。一香發。雙色奢。鬟髮迎枝蟬翼薄。釵鈿礙葉燕陰斜。非唯瑋態鞦韆工。婦容婦德亦婦功。明日更期鬪百草。君王花樹芳菲中。

七言。看源童子書跡一首。

皇帝在東宮。

花間垂露綠毫滿。峯際崩雲逐點安。上代神童  
吾所聽。誰言今日眼前看。

七言。賦新年雪裡梅花一首。

公主

春光初動寒猶緊。一株梅花雪裡開。想像宮中  
嬋娟處。暗知黃鳥稍相催。

五言。暇日閑居一首。

良安世

暇日除煩想。春風讀楚詞。簷閑啼鳥換。門掩世  
人稀。初筍簟邊出。遊絲柳外飛。寥々高枕臥。庭  
樹落花時。

五言。竹樹新栽流水遠。引卽事有興把筆

直疏得寒字。應制一首。

太上天皇  
在祚。

野岑守

竹樹新成蔭。春光始欲闌。雜花壓欄暖。瀑水擊  
梁寒。侍女開扉聽。親臣卷箔看。非經山河遠。  
卽坐得考盤。

七言。現果詩一首

釋空海

青陽一照御苑中。梅蕊先衆發。春風一起  
馨香遠。花萼相暉照天宮。

七言。過因詩一首。

釋空海

莫道此花今年發。應知往歲下種因。因緣相感  
枝幹聳。何況近日遇早春。

七言。賦桃應令一首。

平城天皇在  
祚。

陽豐年

武陵仙萼本紛々。南國容花未足云。幽徑無掃  
維隱士。成蹊有託彼將軍。風翻麗影遙揚馥。  
露點鮮光更起文。如值上林移植會。垂蔭萬  
畝插青雲。

同。

林婆娑

千歲一花聞舊史。三春坐移照今年。紅華媚日  
紅逾煥。錦色須霞錦更鮮。秦客迷源長不返。漢  
兒延壽幾要仙。欲知此樹成蹊德。真疑芬芳自  
可憐。

五言。詠櫻。

陽豐年

早花春梢杪。櫻樹乃舒榮。獨抱後肘歎。還開仲節英。風前香自遠。日下色逾明。試賦臨年夢。仙齡幾箇迎。

五言。春庭友人見過一首。

毛穎人

春氣不嫌人。席門花自新。雖異陳平德。欣驚長者塵。

雜言。奉和太上天皇春堂五詠四首。

南永河

御春堂。春堂六扇屏。淡墨圖形尙可辨。朝雲歸處巫山晴。

右屏。

御春堂。春堂苔蘚牀。幽棲自從嫌玳瑁。尋常石上又水傍。

右牀。

御春堂。春堂灼々瑋。蘭人高情天下小。偃息依之代負辰。

右几。

御春堂。春堂灼々燈。蘭膏更加夜過半。隱映雙

花連影登。

右燈。

同一首。

淨夏嗣

侍春堂。春堂雲母屏。屈伸隨用無定意。唯期日夜對龍局。

右屏

同三首。

惟春道

臥春堂。春堂疎竹簾。幽眺不眠復不卷。閑窓向曉月鉤纖。

右簾。

臥春堂。春堂南郭几。更有千年靈壽杖。相携與爾扶坐起。

右几。

臥春堂。春堂獨夜燈。清影未嘗欺暗室。挑時更使聖明增。

右燈。

五言。同春太詠鬼之什一首。

石廣主

鬼神惟不測。冥運入希微。論有形無形。言無道有奇。齊襄未免譴。晉景亦殃隨。隱顯雖難定。福淫在可知。

雜言。臨春風效沈約體應制。

太上天皇在祚。



滋貞主

臨春風。春風澹蕩起。初從青蘋末。過拂璇閨裏。香奩拭却飛栖塵。粧粉眠銷懊恨人。舞袖欲縫絲屢亂。音書未寄怨愈頻。綠動龍蟠葉。紅驚鳳腦花。柳絮非同處。梅芬是滿家。黃鶯雜沓誰求媒。素蝶翩翻不倦廻。一道風情如有感。吹簾似令蕩夫開。

七言。春日奉使入渤海客館一首。

滋貞主

蒼茫渤海幾千里。五兩舟中送一年。鯤壑難辛孤帆度。鯨濤致怕遠情傳。春鴻愛暖南江水。旅客看雲北海天。曉來莫驚單宿夢。他鄉覺後不勝憐。

七言。聽早鶯示惟山人春道一首。

太上天皇

春飯物色早鶯飛。曉哢初飯人不歸。寂々空房無與聽。春寒獨恨薜蘿帷。

七言。和滋貞主城外聽鶯簡前藤中納言之作一首。

太上天皇

遂谷黃鶯無儔侶。冬天不語在荒林。年來更遇陽春候。澁啼一喚舊知音。

七言。文友見過賦鶯勸情晴字一首。

滋貞主

春鶯出自環林裏。雜吹新聲舊歲情。不弄疎籬花樹色。群飛入我晚風晴。

五言。和藤神策大將閉門好靜花鳥馴人

不勝感什一首。

滋貞主

陰吏兩相得。嫌喧暫斷賓。松蘿宜避蹻。苔蘚不看塵。葉暗寸餘綠。花殘數片春。蒙牽風月好。非是道栖人。

五言。詠禁苑鷹生雛一首。

陽豐年

峻嶺增巢鳥。生雛禁苑中。依昂留聖囑。神俊狙禪風。理翮情方盛。廻眸氣不窮。願栖仙閣。

下將助魯臣忠。

同。

科善雄

玆禽群鳥俊。禁苑數雛生。日々雄姿美。朝々猛氣驚。青駮羈綵胖。素質狎丹庭。願以凌雲翼。長輸逐雀誠。

五言。月下聽孤雁一首。淡福良

邊亭夜已闌。一雁曉聲寒。隻影霜中沒。孤音月下聞。單飛倦繳網。獨唳怨離群。欲傳羈客淚。若箇故鄉雲。

五言。詠燕。

枝直臣

表瑞集齊郡。呈靈入玉筐。龍潛避爽節。鳳舉逐春光。栖宇傳新語。銜泥尋舊梁。去來不失候。可謂識行藏。

七言。賜看紅梅探得爭字應令一首。

紀長江

二月寒除春欲暖。搖山花樹梅先驚。卽今紅蘂滿枝發。仙萼褰簾感興情。香雜羅衣猶可誤。

光添粧臉。遂應爭。儻因委質瑤階側。朝夕徒仰少陽明。

七言。早春途中一首。藤令緒

平旦揮鞭城外出。林村雨霽早春生。傍峯近聽樵客唱。入澗深聞斷猿聲。關北寒梅花未發。江南暖柳絮先驚。愁中路遠行不盡。爲有羈人故鄉情。

經國集卷第十一

經國集卷第十三 詩十二

雜詠三。

雜言。九日翫菊花篇。太上天皇

沈寥兮旻穹。蕭索兮涼風。潦行兮池沼潔。露稍殞兮林莽空。菊之爲草兮。寒花露更芳。自分獨遲遇重陽。弱幹扶疎被曲丘。柔條婀娜影清

流。綠葉雲布朔風。紫蒼星羅南鴈翔。逸趣此時開野宴。登高遠望坐花院。翫菊花。菊花韡黃。粉葩寂々無人見。獨携菊酒。愜情素。各幽栖少與晤。花開花落秋將暮。秋去秋來人復故。人物蹉跎皆變衰。如何仙菊笑東籬。看花縱賞機事外。閑興攀花令節宜。盈把陶令。稱美鐘生。吾與二人愛晚榮。古今人共味。能除癘亦延齡。

雜言。九日翫菊花篇應製一首。

源明時年十三

翫芳菊。幾芬々。延壽時浮王弘酒。空嗟盈把夕陽曛。

同。

滋善永

〔卷有〕

萋々菊芳繞清潭。始有寒花一鴈南。岸芭早滋〔開敷〕朝夜露餘香。盈把隨陶元亮。登高欲訪費長房。冷英閑作湘南客。飲水延年酈北卿。翫黃花。黃花無厭日將斜。影入三秋。宛浦人傳。

往事舊龍沙。葉如雲花似星。紛々幾處滿山亭。自有心中彭祖術。霜潭五美奉遐齡。

七言。山夜一首。

太上天皇

移居今夜薜蘿眠。夢裡山鷄報曉天。不覺雲來衣暗濕。即知家近深溪邊。

七言。山居驟筆一首。

太上天皇

孤雲秋色暮蕭條。魚鳥清機復寥々。欹枕山風空肅殺。橫琴溪月自逍遙。僻居人老文章拙。幽谷年深髮髮凋。蘿戶閑來無一事。莫言吾侶隱須招。

五言。良納言秋山飲一首。

〔昨敷〕

遁世雲山裏。秋深掩弊廬。溪厨作酌濁。野院旦焚枯。詠興逍遙事。琴聲語笑餘。欣將軒冕客。俱醉晚林虛。

五言。途中九日一首。

良安世

客裏三秋暮。途中九日來。相留問行旅。如何菊花開。



五言。病中九日飲一首。良安世

聞說重陽至。秋中菊酒情。卷簾傷暮節。把盞歎頽齡。彭澤黃花味。齊諧赤實馨。非無登望憶。惟力不堪行。

雜言。九日林亭賦得山亭明月秋應。太上

天皇製一首。巨識人

秋天如水高且虛。上有明月無根株。流光洞澈空山裏。林下孤亭靜者居。往來一餌不死藥。已得一生長爲樂。山寂々。月團々。仙悵無眠山夜寒。千山一霜物衰朽。運謝時代空有々。雲鶴晴飛紫霄上。野猿清叫清溪口。月正午轉明。古蘿松下照幽情。今夕卽重陽。月樽唯是更生香。

五言。小池七夕一首。留高庭

星夕臥池邊。遙瞻肆遠天。不知烏鵲意。何似達神仙。

七言。重陽節得秋虹應製一首。太上天皇在祚。

橘常主

君王出豫重陽序。試望秋虹遠近光。首尾分形浮殿閣。雌雄半體跨池塘。晴天色爽弦文挹。碧水陰生橋勢長。別有夢中華洛度。千年一聖誕明王。

七言。秋山望雲雨以憶此心一首。

釋空海

白雲輕重起山谷。蒼嶺高低本入空。或灑或飛南北雨。乍飄乍扇東西風。唯一虛湛不變。千年方歲顏色同。欲言。傍烟色。天水含暉秋月通。

七言。夜亭晚秋探得廻字應。太上天皇製一首。安文繼

無能白首侍池臺。不厭閑亭俯巖隈。陽面指天森松栢。陰崖滿地點莓苔。朝烟有色看深淺。夕鳥無心聞往來。老病交侵秋已暮。恩和假借暫徘徊。

雜言。奉和搗衣引一首。太上天皇在祚。

巨識人

婦家禮。生來十年不出門。四教傳受慈母言。始修法度何嚴重。婦功之營無與論。春天蠶作塋收絲。秋景織紉霜授衣。從此卽今勞所務。招携姪蛇幾家姬。衣初擣。擣衣之難若寒早。女須鳴石秋聲擊。叔虞封枝月影抱。判是歌舞無勞曲。通霄砧杵未爲足。音韻填坑不相讓。響添珮暗連續。万杵千砧意豈齊。殊令怨者就中悽。鴈度相思蘇子女。妾駕機獨泣資生妻。擣衣罷華裁初織。四阿向曉風蕭疎。剪刀欲倦玉手冷。刺針還嫌線脚麤。不知肥瘦異於今。寬窄仍准別時襟。君不見。隴頭水。是妾悽切擣衣音。

同前。

惟氏

秋欲闌。閨門寒。風瑟瑟。露團團。遙憶仍傷邊戎事。征人應苦客衣單。匣中掩鏡休容飾。機上停梭裂殘織。借問擣衣何處好。南樓窓下多月色。芙蓉杆。錦石砧。出自華陰與鳳林。擣齊紈。

擣楚練。星漢西廻心氣倦。隨風搖颺羅袖香。映月高低素手涼。踈節往還繞長信。清音悽斷入昭陽。就燈影。來玉房。力尺量短長。穿針泣結連枝縷。含怨縫爲万里裳。莫怪腰圍疇昔異。昨來入夢君容悴。

七言。夜聽擣衣一首。

楊秦師

霜天月照夜河明。客子思飯別有情。厭坐長霄愁欲死。忽聞隣女擣衣聲。聲來斷續因風至。夜久星低無暫止。自從別國不相聞。今在他鄉聽相似。不知綵杵重將輕。不悉青砧平不平。遙怜體弱多香汗。預更深勞玉腕。爲當欲救客衣單。爲復先愁閨閣寒。疑雖忘容儀難可問。不知遙意怨無端。寄異土兮無新識。想同心兮長歎息。此時獨自閨中聞。此夜誰知明眸縮。千尋海水尺地停。晨昏不霽煙霞霧。晝夜無環日月星。霍嶺仙炊雜樹葉。蘇門客嘯向巖局。花林鳥入羽常引。薜荔人歸逕不盡。錦里將粧



拾翠具。仙家欲<sub>レ</sub>葺<sub>レ</sub>採黃菌。武陵縣裏疑迷源。  
明月峽中似聽猿。春秋暖冷同千嶺。草木榮枯  
共一園。古年奇好盡毫端。坐臥之間未厭看。  
潁川水曲巖陵瀨。不知濕叟釣潭竿。

雜言。青山歌一首。

太上天皇

青山峻極兮摩蒼穹。造化神功兮勢轉雄。飛壁  
嶽銓兮帖屏峙。層巒廻立兮氣融。朝噴雲兮  
暮吐月。風蕭々兮雨濛々。乍暗乍晴。一旦變。凝  
烟積翠四時□。神仙結閣仁智棲。暝或冥道而  
寤。晚或晦跡以寂寞。林壑花飛春色科。登臨逸  
興意亦賒。甚幽至險多詭獸。離俗遠絕囂譁。  
此地遨遊身自老。老來煢獨宿懷抱。夜深苔席  
松月眠。出洞孤雲到枕邊。

雜言。奉和太上天皇青山歌一首。

良安世

屹嶺青山亘千里。嶽巖碧嶂幾千尋。千穹蒼而  
獨秀出。凝積翠以常幽深。崔嵬不是關一匱。

嶽巖猶因容衆林。孔雀鳳凰翔其頂。熊羆犀象  
棲其陰。遊仙所樂些。逸士所說些。三休古路。  
雲格構危。一道飛泉澗石鑿。風聽仙僧清梵處。  
煙逢溪子釣漁泊。山蕭條些。心寂寥些。塵滓之  
鄉去迢々些。城中聖些。空黛色。有勝地兮不  
識。人不識兮物外趣。而我到之。何由得閣上。  
色映劉王汾水流。籠山暗濕長年葉。帶日高輶  
短晷暉。紫府欲迎仙駕養。青天曾助鵬翼飛。  
朝爲巫嶺神姬氣。夜作銀河織女衣。富貴人間  
如不義。華封勸我帝鄉意。

七言。奉試賦得秋一首。每句用二十  
二律名字。

紀長江

涼天蕭索太堪悲。況復寒鴻南度時。宦渡柳營  
計應碎。扶風松蓋想無衰。擣衣夾室月光冷。  
織錦中閨恩緒滋。白露凝。蘭洗佩淨。玄霜殺  
草驚鐘飛。晴空雲埃收遙嶺。古木蟬蕤咽晚  
颺。黃葉飄零秋欲暮。則知潘鬢颺如絲。



五言。奉試賦秋興一首。以建除等十二字居句頭。

治文雄

建西星初轉。除濕金正王。滿江鴻翼正。平陸菊  
蒙香。定識幽閨女。執梭織錦章。破簾蟲網薄。  
危牖月光涼。成雨葉聲亂。收芳草色黃。開書周  
覽後。閉戶歎潘郎。

五言。奉試賦得隴頭秋月明一首。題中取  
韻限

六十  
字。豐前王

桂氣三秋晚。萱陰一點輕。傍弓形始望。圓鏡暈  
今傾。漏盡姮娥落。更深顧免驚。薄光波裏碎。寒  
色隴頭明。皎潔低胡域。玲瓏照漢營。誓將天子  
釧。奴髮獨橫行。

同前。野筍

反覆單于性。邊城未解兵。戍夫朝暮食。戎馬曉  
寒鳴。帶水城門冷。添風角韻清。隴頭一孤月。万  
物影云生。色滿都護道。光流飲飛營。邊機候侵  
寇。應驚此夜明。

同前。藤令緒

簫關天氣冷。隴上月輪明。皎々含氷白。輝々入  
鏡澄。凌霜弓影靜。裏露扇陰清。彩比齊紈洽。  
光同道壁生。珠華浮鴈塞。練色照龍城。忝預  
昭君曲。長隨晉帝行。

同前。治穎長

霜氣冷關樹。秋月色更明。定識懷恩客。揮戈  
從遠征。影寒交河道。輝度万里程。水底沈鉤碎。  
葉中尋落星。胡騎氣逾勇。漢營陣難生。但忻重  
光暈。獨照隴頭城。

五言。奉試賦秋雨一首。宮殿名限  
天韻。

山古嗣

秋雨正滂沛。旬朝灑玉堂。花濃蒙發越。鸞度石  
飛翔。已濯蘭林佩。更霑蕙草香。迎風散斜影。  
清暑送浮涼。似露飄長樂。如塵拂建章。長年  
無破塊。崇德詠時康。

七言。看落葉應令一首。滋善永

秋天鶴唳露光團。萬葉紛紛歲欲闌。金井梧桐雖搖落。庭前孤竹不知寒。

五言。舊邑對雪一首。

平城天皇

始靄穹隆閣。紛々寂寞庭。如花梅下亂。似絮柳前縈。潔白因逢立。汚玄以染成。驟歌猶寡和。何處暢幽聲。

五言。奉和舊邑對雪一首。

太上天皇

舊邑同雲起。春天雪猶飈。含輝臨素扇。呈瑞滿冥霄。陰階飛更積。陽砌結還鎖。郢曲能安和。羞歌下里調。

七言。除夜一首。

太上天皇

欲眠不眠坐除夜。雲天此夜秀芳春。啓祥孤獨迎獻節。遁世詩情放隱淪。山雪暮光寒氣盡。庭梅曉色暖煙新。生涯已見流年促。形影相隨一老身。

七言。奉和除夜一首。

公主

幽人無事任時運。不覺蹉跎歲月除。曉燭半殘星色盡。寒花獨笑雪光餘。陽林煙暖鳥聲出。陰澗水消泉響虛。故匣春衣終夜試。朝來可見柳條初。

同前。

滋貞主

新年欲到故年去。新故相連四氣和。預喜仙齡難老歇。還悲人事易蹉跎。春聲北向鴈將少。曉聽南驚鷺未多。雖值喧寒猶不變。閑菴砌後古松蘿。

同前。

惟氏

自從習靜出風塵。北斗迴歲巡。俗事隨□夜盡。幽心獨對上陽新。煙嵐向暖迎年色。山燭閑燃避世人。泉石不知老將至。悠然徒任去來春。

五言。東宮歲除應令一首。

平城天皇  
在東宮

陽豐年

急景方彫節。窮陰復殺年。雪停羣嶺皎。風緊

衆林穿。壯齒隨霄變。衰客逐曉悛。搖山今日賞。錫命百憂蠲。

七言。守歲一首。

常光守

日月其除歲欲遷。風雲乍改尙冬天。不看明鏡暗知老。况復慈親七十年。

五言。閑庭雨雪。

皇太子春秋十七。

玄雲聚萬嶺。素雪颺宮中。帶濕還凝砌。無聲自落空。奪失將作白。矯異實爲同。閑坐獨經覽。紛々道不窮。

五言。閑庭雨雪探得迷字應令一首。

滋貞王

欲儷清彈曲。榮一紫臺獨奈兮。封條樹裏重。潤翼鳥飛低。珠綴簾彌映。銀生勝不迷。庭隅無穢濁。愚操此思齊。

五言。山齊賦初雪一首。

公主

朔氣三冬緊。寒花千里飛。班姬亡扇色。孫子得書輝。澗曉猿無嘯。林春鳥不依。野途失薪者。

還識薄蘿衣。

五言。夕次播州高砂一首。宿一

淡福良

夕次高砂浦。時風暴且寒。淒淒抱霜雪。夜々宿波瀾。釣火遙南岸。漁歌怨北灣。悲腸寸々斷。何日下生還。

五言。詠雪應詔一首。桓武天皇在祚。

朝道永

自天零者雪。撲地照而開。春絮紫冬柳。新花發舊梅。王家銀作屋。帝里玉爲臺。欲載千箱詠。東西一色來。

五言。詠雪一首。

金雄津

如玉如銀雪。自東自北來。園無無絮柳。庭有有花梅。瓊室非殷室。瑤臺異夏臺。九區千萬里。一種色皚々。

同前。

枝永野

散絮因風起。凝鹽任氣來。榭樓皆白玉。草樹總



花梅。國有豐年瑞。家無閉戶哀。但傷東隣履。隨步跡猶開。

雜言。冬日途中值雪簡在督。奉

巧諸勝

晚路逢寒雪。紛々落醉顏。披裘從捷經。策馬越關山。鶴髮彌添白。烏頭漸欲斑。高人有意如垂訪。可答非因興盡還。上

五言。奉和紀朝臣公詠雪詩一首。

楊秦師奉

昨夜龍雲上。今朝鶴雪新。怪看花發樹。不聽鳥驚春。迴影疑神女。高歌似郢人。幽蘭難可繼。更欲效而嚙。

五言。冬日友人田家被酒。

伊永氏代

一宅長堤古。良田在西東。閑門經柳入。客舍度溝通。水結波文斷。霜飛葉帷空。唯餘琴酒事。併是竹林風。

經國集卷第十三終

經國集卷第十四

詩十三

雜詠四。

五言。奉試詠天一首。

野岑守

列位三光轉。因時萬物通。窮陰終謝北。陽煦早驚東。就日望唐帝。披雲觀樂公。慙乏揆天術。來班與奪雄。

五言。奉試詠梁得塵字一首。

南弘貞

鳳閣將成歲。龍樓結構辰。杏翻華日影。梅起妙歌塵。帶紫朝光斷。含丹晚色新。願爲廊廟幹。長奉聖君宸。

七言。不堪奉試一首。

路永名

織鱗迸浪慙力微。弱羽逢風倦退飛。別有邯鄲

學步者中途匍匐不知歸。

五言奉試得治荆璞以天爲韻限六十字

紀虎繼

荆山稱奧府。經史不空傳。中有連城璧。世無覺彼妍。潛光深谷內。韜彩峻巖邊。價逐千金重。形將滿月圓。冰霜還謝潔。金石豈齊堅。未過卅和獻。無由奉皇天。

五言奉試得東平樹一首

伴成益

東平靈感木。傾影志非空。地隔連枝異。神幽合意同。葉衰寧待雪。條靡自因風。迥望相思處。悲哉古墓中。

五言奉試詠三一首以帷爲韻

文真室

青鳥居山日。丹鳥表瑞時。殷湯數讓位。管仲終固辭。韻曲流泉急。入湖江水遲。寧知損益友。長下董生帷。

同前。

石越知人

曼倩文才長。相如作賦遲。尋朋云有益。交意此成師。鳥影日中掛。猿聲峽裏悲。坤天患久尙。久下仲舒帷。

七言奉試賦得王昭君一首六韻爲限

野未嗣

一朝辭寵長沙陌。萬里愁聞行路難。漢地悠々隨去盡。燕山迢々猶未殫。青虫鬢影風吹破。黃月顏粧雪點殘。出塞笛聲腸闋絕。鎖紅羅袖淚無乾。高巖猿叫重壇苦。遙嶺鴻飛隴水寒。料識腰圍損昔日。何勞每向鏡中看。

五言奉試得寶鷄祠一首六韻爲限

鳥高名

秦政初基代。文公致霸時。分形雉全似。流彩星相疑。綠野朝聲散。青郊夕影飛。陳倉北坂下。千歲幾崇祠。

五言奉和詠塵一首六韻爲限

藤關雄

紫陌暮風發。紅塵靄々生。牀中隨電影。梁上洗歌聲。老氏和光訓。莊生守儉情。拂林疑霧薄。飄沼似雨輕。戰路從柴曳。粧樓含鏡冥。未期裨峻岳。飛颺徒自驚。

同前。

菅善主

大噫籠群物。惟塵在細微。遇霖時聚斂。承吹乍零霏。洛浦生神襪。都城染客衣。朝隨行蓋起。暮追去軒歸。動息常無定。徘徊何處非。冀持老聃旨。長守世間機。

同前。

中良舟

桂宮飛細質。柳陌泛輕光。影逐龍媒亂。形隨鳳轄揚。鏡沈疑霧月。衣染似粧帶。曲生珠履。臨歌繞畫梁。雨來収不發。風至聚還張。峻岳如無讓。微巧遮莫亡。

同前。

中良撰

康莊颺氣起。搏擊細塵飛。晨影帶軒出。暮光將

蓋歸。隨時獨不競。與物是無違。動息如推理。逍遙似知幾。形生范甯甑。色化士衡衣。欲助高山極。還差冥質微。

同前。

菅清岡

微塵浮大道。靄々隱垂楊。色イ聲暗龍媒埒。形飛鳳輦塲。徘徊寧有定。動息固無常。逐舞生羅襪。驚歌起畫梁。因風流細影。似雪散輕光。無由逢漢主。空此轉康莊。

七言奉試賦得照瞻鏡一首。

各以名字爲韻。八韻爲限。

野春卿

良冶練銅初鑄日。大雲烈々風煽頻。背文巧置盤龍體。面彩能銜滿月輪。玉匣池深朝氣微。金臺水冷夜陰中。空虛萬象見明處。野魅山精不隱身。西入秦城獻霸主。君王殿上燭佳人。夜裳整下綺羅色。容貌粧前桃李春。欲言情素卽因此。發昧誰勝奇寶真。如今可用妍媸鑒。長願猶爲照瞻珍。



七言。奉試賦挑燈杖一首。七言十韻。仍以挑燈杖爲韻。

猪善繩

斯杖任朴猶用勝。豈假良工加斲雕。白日黃昏燈始續。匪資茲具未能調。若非藜杖老全緊。或是莠莖炎亦焦。謬污鵠印盤外落。眼分精銳

悵中挑。後有招携宴友朋。華堂四照列羊燈。火時

因永夜燭垂滅。每効微功明更增。廉吏嫌然再不賞。神翁有備射吹杖。宣神正使蘇公厲。

致用亦令蜀婦紡。一客環堵曉夕勤。十年翫之自爲弊。唯喜陋質助光力。弗敢効貪膏澤養。

五言。奉試得爨燒桐一首。限三六韻。

枝礪磨

擢幹嶧陽岑。森々秀衆林。春花含日笑。秋葉帶

霜吟。鳳影飄枝上。風聲散麗音。忽遇涼颼激。幾香動桂陰。匠石方無顧。何思爲爨侵。幸逢邕

子識。長作五絃琴。

七言。看宮人翫扇一首。錦彥公

妖姬二八御樓東。華扇添粧翳顏紅。遙似恒娥憑漢月。還疑班子恐秋風。掩鬢影暗寶劍上。隨手泣生羅袖中。寄語陽臺爲雨者。朝夕應入楚王夢。

五言。和菅大夫曉頭聞鴈卒爾成篇一首。

惟春道

霜鴈猶翩々。隨陽南楚天。先羣飛稍遠。後舞來復前。弱羽資風力。危聲任月弦。稻梁恩欲報。猶繞舊池邊。

雜言。斲肩一首。仲雄王

斲肩肉。赤凝脂。白登俎。更待庖丁手。鑿刀磨石乃如霜。坐客看之相嚼久。鹽梅初和人爭喫。口飽情閑何欲有。君不見漢家一莊士。按劍寧辭一杯酒。

五言。石決明詞一首。璫高庭

七孔本無對。能令人決明。胎珠光未顯。誰識重連城。

雜言。清涼殿畫壁山水歌一首。

太山天皇在祚。

良畫師。能圖山水之幽奇。目前海起萬里濶。筆下山生千仞危。陰雲濛々長不雨。輕煙羃々無散時。蓬萊方丈望悠哉。五湖三江情沿洄。森漫濤如隨風忽。行船何事往復來。飛壁巉巖垂蘿薜。會巖盤屈衣<sup>荇</sup>莓<sup>苔</sup>。嶺上流泉聽無響。潺湲觸石落溪隈。空堂寂寞人言少。雜樹朦朧暗昏曉。松下群居都仙。與不語意猶眇。度歲橫琴誰奏曲。經年垂釣未得魚。馳眼看知丹青妙。對此人情興有餘。畫勝真花笑冬春。四時常悅世間人。

雜言。奉和清涼殿畫壁山水歌一首。

菅清公

丹與青。壁上裁成山水形。巖從危峯將蔽日。岬嶮澗鴈字連<sup>字一通</sup>。三江森々尋間近。五岳迢々大裏生。雜花冬不殫。積雪夏猶殘。靈禽百貌從心曲。

異木千名起筆端。飛流落前看鵲桂。重淵迴處識蛟盤。蔭松恰似八公仙。蹲石俄疑四皓賢。覓飲連猿常接臂。加飡擔客長息肩。漁人鼓枻滄浪裏。田父牽犁綠巖趾。繞棟輕雲未會出。窺窻狎鳥經年止。遊心自足幽閑趣。屬目元饒智仁理。丹青工有妙功。能令睿興發神爰。

同前。

都腹赤

仙宮粉壁畫師情。翰綵偏能逐手生。万像雖資造化力。丹青之妙更加精。名山大水宛然是。咫尺能分千萬里。眇々蓬萊指掌間。綿々員嶠寸眸裏。巨靈最負躡峯出。神鼉卽藏背鳥起。江漢朝宗入海寬。長流風拂不動瀾。玄鶴雲中飛不去。白鷗水上浴猶乾。空青淡著春楊暖。石黛濃施古栢寒。蜂蝶紛飛寧換葉。煙霞澹蕩不復空。秋花荻浦經年白。春色桃源度歲紅。羽客吹笙無韻調。幽人傾爵未曾醺。群鷗林裏春不停。積雪巖間夏仍照。朝望山。夕望川。山川朝夕右

座邊。人間氣序幾廻轉。壁上風光無明年。不學周王勞轍遍。取於戶牖知普天。

同前。

滋貞主

掖垣壁。每清冷。万事餘閑養聖齡。眼下思瞻造化體。令聽畫匠飾丹青。村鄉縣邑十州記。詭色環名山海經。万里江山。寸々發々。憶々兮心已懸。重閉兮不可穿。即將因夢尋聲去。只爲愁多不得眠。

五言。奉和太上天皇秋日作一首。

滋貞主

玉珥商氛起。璇閨砧杵勞。寒聲初落樹。秋色欲齊毫。露鶴警新滴。籬鷹換舊綯。悲哉爲氣也。歡興與天高。

七言。秋月夜一首。

滋貞主

輕簾朗卷夜窓靜。孤月閑來泛南端。白兔因瑩雲葉霽。恒娥竊藥仙居寒。渡河未見候輪濕。寫鏡徒憐秋扇團。承袖攬之不盈手。爲無

懺。翳通霄看。圓規滿耀寰區飛。陰魄生來二八時。長樂鐘聲傳漏久。衡陽鴈影下水遲。孤飛夜鵲簷枝怨。暗織昆虫機杼悲。賤妾單居不肯寐。風吹砧杵入雙扉。年來歲去容華空。古往今來月影同。上郡良家戎津遠。邊庭蕩子塞途窮。貞筠不變窓色暮。柳先疎官路風。明月如非照妾意。那堪秋夜暗閨中。

七言。和海和尚秋日觀神泉苑之作一首。

滋貞主

閣梨下自南山幽。勅許令看上苑秋。御路蕭疎柳楊影。遵行直到白沙洲。廻瞻肅殺無紛濁。眼沸清泉一細流。小嶺登攀頻見鶯。暗林沸入欲驚鳩。三明濕照龍池閣。二道薰迎秋蕙樓。法侶相隨嘉樹下。不殊昔與大比丘。

雜言。秋雲篇示同舍郎一首。

野簫

氣慘慄。具品秋。客在西。歲欲遁。登山臨水耶



楚望。移目寒雲遠近愁。初觸拳石一片起。盲風吹獵九圍浮。陰連潘岳晉下欠

同前。

滋貞主

涉崇山之嵬嶷。攀石磴之巉磊。避慘初深兮谷異。追閑稍遠兮嶺改。東西引望無行人。前後迴看絕世隣。野話何關京邑語。雲衣不染俗家塵。居諸恍惚易蹉跎。寂慮優遊每經過。花笑兮如喜見。猿驚兮似誰何。山文俄書葉。仙園欲爛柯。疋馬玄黃策不倦。爲隨高蹈之煙蘿。

同前。

惟春道

青山兮闌寂。懸岸兮絕壁。下臨不測之崢嶸。上仰窮高之空碧。雲雷兮吼怒。日月兮朝夕。負寰宇兮地隈隩。空鳥兮稀人跡。我來散髮兮秋復春。林壑森々惟一身。朝炊黍。暮烹鷄。白雲主臥青溪。溪流兮浩々。芳草兮萋々。在山中兮物無役。讀詩書兮身多癖。洞之口。巖之阿。有時獨坐青山歌。坐且歌。行且歌。青山寂々奈樂

何。

同前。

滋善永

山寂歷兮春欲嘯。澗幽深兮此閑雲。雲中靜兮逸人居。棟裏雲兮時卷舒。春遙花聲兮鷄犬。一林心事兮琴書。追訪赤松兮遺跡。長年隱几閑餘。山寂歷意幽清。幽上喜春晴。石蘿踈兮春色。溪扉暗兮夜泉聲。避喧兮遂無問。衣薜兮足了生。人間遊兮絕不夢。曉猿深兮落月洞。春光寂々暮山家。獨藜杖煙霞。

五言。和野評事旅行吟一首。

太上天皇

久戍君爲客。幽居我作翁。旅愁如可話。相待北山中。

五言。旅行吟一首。

野岑守

十年戍西東。客裏白頭翁。東臥無安寢。鄉心夜夜夢。

雜言。漁歌五首。每歌用帶字。

太上天皇在祚。

江水渡頭柳亂絲。漁翁上船煙景遲。乘春興。無厭時。求魚不得帶風吹。

漁人不記歲時流。淹泊汭洄老棹舟。心自放。常狎鷗。桃花春水帶浪遊。

青春林下度江橋。湖水翩翻入雲霄。煙波客釣舟遙。往來無定帶落潮。

溪邊垂釣奈樂何。世上無家水宿多。閑酌醉獨棹歌。浩蕩飄飄帶滄波。

寒江春曉片雲晴。兩岸花飛夜更明。鱸魚膾蓴菜羹。飡罷酣歌帶月行。

雜言。奉和漁家二首。每歌用逆字。

公主

白頭不覺何老人。明時不仕釣江濱。餒香稻苞紫鱗。不欲榮華送吾真。

春水洋洋滄浪清。漁翁從此獨濯纓。何鄉里何姓名。潭裏閑歌送太平。

同。

滋貞主

漁夫本自愛春灣。父イ髮髮皎然骨性閑。水澤畔蘆葉間。曄音遠去入江還。

微茫一點釣翁舟。漢イ不倦遊漁自曉流。濤似馬湍如牛。芳菲霽後入花洲。

潺湲綠水與年深。棹歌波聲不厭心。砂巷嘯蛟浦吟。山嵐吹送入單衿。

長江萬里接雲倪。水事心在浦不迷。昔山住今水栖。孤竿釣影入春溪。

水泛經年逢一浦。舟中暗識聖人生。無思慮任時明。不罷長歌入曉聲。

七言。漁歌一首。藤三成

春夕雨後雲天晴。夾岸紅花射水明。獨酌濁醴味魚羹。蘆中飲了向江行。

雜言。和出雲巨太守茶歌一首。

惟氏

山中茗早春枝。萌芽採擷爲茶時。山傍老愛爲寶。獨對金鑪炙令燥。空林下。清流水。沙中漉。

仍銀鎗子。獸炭須臾炎氣盛。盆浮沸浪花。起鞏縣坑商家盤。吳鹽和味味更美。物性由來是幽潔。深巖石髓不勝此。煎罷餘香處々薰。飲之無事臥白雲。應知仙氣日氛氲。

五言。遙和播州長史丹治中得絮柳請植。

左大將軍閑院之作。

滋貞主

柳條八許尺。截取寄情人。根斷葉憔悴。紛空絮落貧。星躔移夕建。龍路送朝鱗。委地日猶淺。須看後歲春。

經國集卷第十四終

經國集卷第二十目錄

策下

駿河介正六位上紀朝臣眞象對策文二首

正六位上伊勢大掾栗原連年足對策文二首

正六位上行石見掾道守朝臣宮繼對策文二首  
散位寮大屬正八位上勳十二等大日奉舍人連

首名對策二首

百濟君倭麻呂對策文二首

刀利宣令對策文二首

主金蘭對策文二首

下野虫麻呂對策文二首

葛井諸會對策文二首

白猪廣成對策文二首

船連沙彌麻呂對策文二首

藏伎美麻呂對策文二首

大神直虫麻呂對策文二首

經國集卷第二十

策下

對策。

問。三韓朝宗爲日久矣。占風輸貢。歲時靡絕。



頃蒙爾新羅。漸闕蕃禮。蔑先祖之要誓。從後主之迷圖。思欲多發樓船。遠揚威武。斷奔鯨於鯢壑。戮封豕於鷄林。但良將伐謀。神兵不戰。欲到斯道。何施而獲。

文章生大初位上紀朝臣眞象上

臣聞六位時成。大易煥師貞之義。五兵爰設。玄女開武定之符。人稟剛柔。共陰陽而同節。情分喜怒。與乾坤以通靈。實知天生五材。民竝用之。廢一不可。誰能去兵。若其欲知水者。先達其源。欲知政者。先達其本。不然何以驗人事之終始。究德教之污隆。故追光避影。而影逾興。抽薪止沸。而沸乃息。何則。極末者功虧。統源者効顯。觀夫夷狄難化。由來尙矣。禮儀隔於人靈。侵伐由於天性。鴈門警狁火。獫狁於周民。馬邑驚鹿驕。子梗放漢地。自彼迄今。歷代不免。其有協柔荒之本圖。悟懷狄之遠筭者。是蓋千歲舞階之主。江漢被化之君也。故

不血一刃而密須歸仁。不勞一戎而有苗向德。然則兇甲千重。虎賁百萬。蹴蹋戎冠之地。叱咤鋒刃之間。徒見師旅之勞。遂無綏寧之實。我國家子愛海內。君臨寓中。四三皇以垂風。一六合而光宅。青雲中呂。異域多問化之人。白露凝秋。將軍無耀威之所。兵器鎖而無用。戎旗卷而不舒。別有西北一隅鷄林小域。人迷禮法。俗尙頑兇。傲天侮神。逆我皇化。爰警居安之懼。仍想柔邊之方。秘略奇謀。俯訪淺智。夫以勢成而要功。非善者也。戰勝而矜名。非良將也。故舉秋毫者。不謂多力。聽雷電者。不爲聰耳。古之善戰者。無智力。無勇功。謀於未萌之前。立於不敗之地。是以權或不失。市人可駟而使。謀或不差。敵國可得而制。發號施令。使人皆樂聞。接及交鋒。使人安死。以我順而乘其逆。以我和而取其離。孫吳再生。不知爲敵人計矣。是百勝之術。神兵之道也。

於臣之所見。當今之畧者。多發船航。遠跨邊岸。耕耘既撫。阡之術。役之勞。紛織無脩。室盈怨曠之歎。殆撫阡之術。恐貽害仁之刺。誠宜擇陸賈出境之才。用文翁牧人之宰。陳之以德義。示之以利害。然後啗以玉帛之利。敦以和親之辭。絕其股肱之佐。吞其要害之地。則同於檻獸。自有求食之心。類於井魚。詎有觸綸之意。謹對。

問。上古淳朴。唯有結繩。中葉澆醜。始造書契。是知三五六經。由文垂教。未審七十二君。何字刻石子。貫穿墳典。該博古今。既辨三豕之疑。亦探百氏之奧。愁陳精辨。俟祛茲惑。

臣聞珠聯璧合。鏡圓蓋以垂文。翠岳玄流。灑方輿以錯理。黼藻法之而潤色。含章因之以成工。文之時義。其大矣哉。上古道存。不宰德光而孚。穀飲鵠棲。恬然大化。迨于聲績可紀。孝慈着聞。始制書契。遂改繩政。龜浮龍出。虛犧創

之於前。類物寫迹。蒼頡廣之于後。指事寫形之制。始闢其規。轉注假借之流。爰揮其法。皇墳所以大照。帝典由其聿脩。若其望綿載以肝衡。係玄風而繹恩。萬八千歲。盤古之際。難詳七十二君。皇極之猷。可驗。刻石紀號。禪云亭以騰英。展采觀風。登嵩岳而傳迹。仲父博物。其言匪妄。司遷良史。其書有實。然則施於王猷。用起六羽之後。徵於濫觴。理存九翼之前。矧夫威禽呈象。河圖負書。文字之興。殆均造化。但經典散亡。羣言繁亂。萬下之下。難以意推。臣學非稽古。業謝專門。以閭閻之小才。叨明時之貢薦。高問難報。范然闕對。揚之敏。下春易斜。逡巡無厝言之地。謹對。

天平寶字元年十一月十日

對策二首

天地始終

大學少允從六位下。兼越前大目。菅原朝臣清公



問。混元肇判。方圓自形。或陽或陰。日高日厚。緡七耀而左旋。載萬靈而右闢。斯則千品之源。三才之本者也。然而遞成遞壞。釋氏之教斯存。有始有終。儒家之風不落。今欲法之釋教。彼始自空。尋之儒風。其終焉在。雖默語別道。辭有頗異。而聖哲同致。何可錯。子才爲世出。識作物表。優劣異同。佇聞芳話。

文章生正八位上中臣栗原連年足上

對。竊以。陽清上動。懸二紀五緯而左旋。陰濁下凝。錯丘陵江海以右闢。考形測數。可寓遊心之端。推變研神。何得施慮之表。自皇雄畫卦取象於天。高密膺圖求步於地。雖陳數度。莫辨區條。故四術紛綸。異端之論蜂起。三家舛雜。臆斷之辭抑揚。言多米鹽。事爲楚越。累代因襲。指掌未詳。豈不以古今措刊錯之煩。夷夏致傳譯之謬矣。夫以周星殞夕。漢夢發霄。象譯之編爰傳。龍緘之教遂闢。於是辨虛空之

不極。說世界之無窮。接比十萬。積累三千。日月等。渤海之輪廻。百億閻浮。同塵沙之數。量是知章玄死驟豈盡其邊。隸首忽微何知其筭。至若天地終始。國界壞成。始以復終。終以復始。乍空乍住。俱壞俱成。滅則極於十年。增則留於八萬。何則住劫云謝。災難已多。烈火災々。洪波淼々。聚爲山岳。散爲江河。事隱於玄名。理絕於深蹟。然則區々庸陋不能達其淵源。蠢々凡愚不能詳其旨趣。但混家之法畧而可言。天圓而寬。地方而小。形如鳥卵。運似車輪。載水而浮。乘氣而立。日月之度。星辰之行。廻地而晦明。麗天而旋運。考之實狀。不失其宜。施之治方。尤得其理。又其上天下地。有始無終。不易之義攸詮。長存之說斯着。是則經典所緯。既有前聞。耳目所安。互無後異。管局之見。獨滯儒宗。豈曰談天。還同測海。謹對。

宗廟禘祫。



問。龍鳳別紀。五帝不相訟樂。金水遞旋。三王不相襲禮。斯知質文之變。隨時之義大哉。損益之事。追世之理深矣。聖朝務在勤恤。未建廟祠。德馨通神。頌聲愜物。今欲尋芳訓於姬孔。訪舊章於馬鄭。設七席而豐潔粢。則千古以啓殷祭。然則明堂祖廟之異說可據。詎人三五禘祫之盛禮。萌在何世。詳論義理。復陳可否。

對。竊以遐觀曩冊。想太易之初。歷討綿書。尋混元之始。太昊少昊以往。既櫟略而未聞。高陽高辛而還。漸昭彰而可見。雖復揖讓膺圖之主。干戈受命之君。沿革殊途。汗隆異等。莫不建七廟而嚴祖考。放五教而治邦家者矣。夫孝者發於深衷。本於至性。行之在己。外無因物之勞。體之由心。內有徇情之逸。萬德雖舛。以道爲宗。百行雖殊。以孝爲大。施之於國。則主泰。用之於家。則親安。既可以施於一人。又

可以移於四海。舒之則盈宇內。卷之則盈懷中。聖人之德無加于孝。人子之德無加于孝。人子之道可不欽哉。是以千帝百王。慎終追遠。前賢往哲。事死如生。春雨旣濡。方切林傷之思。秋霜爰降。轉增悽愴之心。然則事豈今哉。其來尙矣。洎馬鄭更進。三雍之論不同。義在可疑。兩存之宜所貴。祭祀之典雖興於曠時。禘祫之儀尤盛於周日。伏惟聖朝仁超四日。道冠九頭。莫遠不霑。雨露慙於渥澤。無幽不燭。日月謝於光輝。今欲資往聖之舊章。窮先賢之貴制。創立寢廟。新啓承嘗。斯誠尊祖之芳猷。昭孝之茂範也。夫以明王定制與世推移。哲后裁規。隨時變改。非從地出。非自天生。必在逐宜。安可滯執。誠須建茲千歲之運。置廟立戶。候彼五年之間。先祫後禘。合其照穆。序其尊卑。來百璧於助祭。受萬壽與繁祉。流靈德於歌詠。感聖神於管絃。何獨遊考室而賦

斯于。向沛宮而舞文始而已哉。年足學非今古。識謝方圓。璧雍綴文。同和道之返側。銅臺下筆。異曹植之立成。高問已來。庸才難報。謹對。

延曆廿年二月廿五日監試

對策二首。

調和五行。

大學少允從六位下。兼越前大目。菅原朝臣清公問。二儀剖判。五行生成。揚四序而遞旋。望七政以無謬。若使聖哲居世。風霜順節。號令失時。金木變性。然則八眉握鏡。滔天之災未休。四肘臨圖。焦地之膏獨厲。豈爲天地之應。終可無徵。將謂殷唐之治。時有所缺。孫弘之對必可有源。班固之書何所祖述乎。吞鳥之藻無慙於羅生。吐鳳之辭不謝於楊氏。詳稽往古之義。今可行於當。〔恐有脫字〕

文章生大初位下道守朝臣宮繼上

對。竊以。疊々圓象。懸日月以垂文。悠々方儀。列山川而分理。於是四時更謝。寒暑往來。五德遞遷。王相運轉。爾乃皇雄畫卦。天人之道爰明。高密錫疇。帝王之法既立。洎陳其性。則帝有不卑。能寶其真。則天有過叙。是以周王虛己訪奧。秘於文師。漢帝興言窮精。微於丞相。至唐堯受錄。洪水滔天。殷湯膺圖。亢旱焦土。運距陽九。時會百六。天地非無其徵。唐殷非缺其治。是知乘運之譴。哲后不能除。膺期之災。聖居不能救。故以孫弘之對。方看其源。班固之書。遂述其旨。伏惟聖朝儀天演粹。道備於禮經。揚德韜英。義光於易象。猶能欲明四時之理。窮五行之要。實治國之通規。爲政之茂範。夫以木火虧政。風蝗所以興災。金水乖方。霜雹由其告譴。若乃三驅有制。則曲直成其功。四佞離朝。則炎上得其性。抗威禁暴。遂從革之能。發號柔神。申潤下之德。卑儉宮室。



稼穡所成。儀形稟妻。草木惟茂。禮敷義暢。龜麟可以獻祥。仁洽智周。龍鳳於焉効祉。旣而弘之以德。長無一變之災。救之以道。安有五時之失。然則巍々之化。舉目應瞻。蕩々之風。企足可待。謹對。

### 治平民富。

問。民爲邦本。本固邦寧。吏爲民君。君良民足。是以漢帝宰極。委腹心於韓崇。齊侯務功。資羽翼於管仲。今欲揚澡幘褰帷之輩。引四知三異之人。習風教於孔氏。追昇平於周室。得賢之頌。何行興之。餘糧之隆。其術安在。證據經典。以發蒙滯。

對。竊以明王撫俗。克念承天。所愛惟民。所寶惟穀。誠知民爲國本。強國先於富民。下實上基。利上必於豐下。是以韓崇授職。久著腹心之功。管仲任官。長傳羽翼之歎。故上行下化。類水如泥。所以紫變齊風。纓遷鄭俗。但漢川照

車之寶。寒不可衣。荆岫連城之珍。飢不可食。是故帝籍斯闢。仍懷九載之憂。璽觀不親。便盈七月之歎。方今政清宇宙。地廣紘埏。淳風洽乎無垠。大道光乎有截。誠可抑止。未作勸勉。農功勤體。授力田之官。遊手□□。行投裔之罰。自然浮僞戢於四海。彫文紀於百工。黃金息無用之求。翠羽弃非常之貨。則千箱可積。万庾將儲。室餘栖畝之糧。家餘如坻之粟。加以位以德進。官以才昇。因賢致賢。由俊得俊。然則澡幘褰帷之輩。歛衽而風來。四知三異之儔。彈冠而雨集。庶績凝乎多士。羣寮整乎得人。朝無曠職之憂。野有擊壤之詠。旣而富教之術。方同宣尼。昇平之功。何異周室。御馬之方。鬱起烹鮮之要。可窮巍々而治。可不樂哉。謹對。

延曆廿年二月廿六日監試

問。摸陽而立文道。寫陰而樹武畧。所以揖讓之君。干戈之帝。是依世革。寔用斯緒。康時庇



俗庶聽捐指。

大日本首名

對竊以陰陽之理。寔乃千端。變化之義。本非一揆。是以摸陽之道。既顯之前策。寫陰之理。又彰之昔典。斯實對問之休烈。損益之大旨。用之則上下和穆。捨之則貴賤崩離。就日望雲之帝。握哀履翼之王。以文爲道。以武爲功。取經邦之權衡。闢緯俗之規模。所以芳猷雜沓。若春蘭之亂園。鴻績繽紛。似秋菊之蕩颺。乃知康時之道。其猶契合。庇俗之義。又似符同。伏惟聖朝。名薰紫霄之上。道光丹闕之前。豐功不測。高駟五岳之外。厚利無方。廣被四瀛之間。混車書而欣無爲。垂衣裳而事息浪。思驗文教之所辨。武機之所由。諒救溺之津梁。濟流之舟棹。然則春之與秋。義等鹽梅。文之與武。理同喉舌。故能括囊文華。包綜武幹。七功之高跡。皆行。九德之深致。咸用。觀者莫測。其源。聽者詎

知其際。噴紙含筆之夫。風流徹夜。運日連蜺之士。精勤新日。由是使武不廢文。文不偃武。則揖讓之猷。可談。干戈之理。未遂。謹對。問。信近於義。是有若被可之談。不信不立。是尼父應物之說。聖垂斯教。物惡不納。立身之道。謹對其要。

大日本首名

對。臣聞。信以交人。載之前書。義而事君。編於曩志。故泣麟歎鳳之聖。釣魚非熊之賢。莫不以信爲本。以義爲法。用之則上下芳菲。與春花而流香。捨之則貴賤別離。共秋葉而驚色。握建言之嘉謀。闢進德之高軌。所以聖賢深化。滿溢乾坤之外。賢俊茂跡。浮流宇宙之間。立身之道。既顯之屑玉。對策之理。又表之贏金。是以臣之事君。不安。下之奉上。不虛。斯實信義之深趣。仁智之大旨。猶風之靡草。蓋其斯矣。伏惟聖朝。繼天化民。存道育物。頌聲聞於天

樞。歌韻響於地軸。高仁麗天安照。側陋之幽。廣德鎮地。不擇塵溜之聚。今欲議其綱紀。辨其規模。鴻烈不墮。義在於焉。竊以。斟酌添海。義不易獲。烈燭助陽。理實難求。豈能筆分青黃。若三冬之理達。略以文辨章句。知七步之談藻。雖人物不同。信義相分。揚名建身。其要一也。然在士便可爲信。於女仍須爲義。於彼□有優劣。於此豈無長短。結期倚橋。是微生之深信。應物斷義。復尼父之洪術。有前事不朽。足爲准的。隨世垂教。復何疑也。謹對。

問。數步之內。空流蘭蕙之芳。十室之中。獨伏騏驎之櫪。而羽毛難辨。遂昧楚鷄。玉石易迷。浪珍燕缺。况復顓師愷悌。被輕於魯公。馬氏方圓。見重於魏主。帝難之旨。其斯謂歟。鑒識之方。宜陳指要。

### 百倭麻呂

對。竊以。赤帝文明。知人其病。素王天縱。取士

其失。然則珍缺不可辨矣。蓬性不可量矣。鳳鷄別也。華草情豈堪識也。但無求不得。負鼎朝殷。扣角入齊。擇必所汰。四凶剪虞。二叔除周。况今道泰隆。雄德盛導焉。歲星可談。所占風雨而仰欸。豎亥雨步。盡入提封之垠。遂使少微一星應多士之位。大雲五彩覆周行之列。巍巍蕩々合其時歟。不驅愚去。不召賢來。謹對。

### 百倭麻呂

對。臣聞。莅百寮而順二柄。宰九州而班六條。捐金投玉。虞舜之清儉矣。櫛風沐雨。夏禹之精勤矣。加以楊震作守陳神。知於枉道。馮豹爲郎侍天漁於閣前。飛譽目前。揚美身後。但清者稟根自天。勤者勞株由己。又飲水留犢之輩。經疎史少。駕星去虎之徒。古滿今多。臣器非宋寶。宇是燕石。豈堪決前後之源。唯竊



折梗概之枝。謹對。

慶雲四年九月八日

問。設官分職。須得其人。而行殊輕重。能有長短。委任成責。非當覆饋。授受之略。可得聞乎。

刀宣令

對。竊以。天垂七政。辨星紀於三百。地陳八座。條議式於三千。所以動異東西。調四時於玉燭。治兼刑德。齊萬機於金鏡者也。夫百臣分職。虞后致肅々之美。十亂當朝。周王有濟々之盛。士會還肆。衆盜去於晉郊。大叔爲政。羣奸聚於鄭蒲。輕重短長。略可言焉。伏惟皇朝。化平日域。德及天涯。執禹麾而招能。坐堯衢而訪賢。逃周避漢之臣。鴈行於丹墀。遊顧隱箕之夫。鱗次於絳闕。無爲軼於觀象。有道籠於垂衣。是知鈞潢同載。木運祚於七百。捐度成佐。金精滅於二世。得其人興畫一之歌。非其

任有尸素之譏。案此而論粗當分別。但東遊天縱猶迷兩兒之對。西蜀含章莫辨一夫之問。至於授洪務。維帝難之。況乎末學淺志。豈能備述。謹對。

問。烈火炎兵。畏之者歸魂。柔水衰陵。坤之者遂往。是以東里遺猛烈之言。西門盡嚴明之事。然臧孫爲政。端木街訕。廉茫莅官。雲中起詠。寬猛之要。冀叙厥猷。

刀宣令

對。竊以。飛龍不息。健猛之用顯矣。行馬無疆。順寬之利亨焉。稟天地之氣者人也。含喜怒之評者情也。稟同合異。理宣寬猛。猛能禁斷。子產有烈火之喻。寬是兼愛。廉范放夜作之令。沛公入洛。義帝許其寬容。仲由言志。素王樂於行。既載於經。亦見於史。義有二途。其揆一也。但理髮解繩。前史美論。以寬濟猛。聖人格言。是以水避高而趨下。民去急而就緩。因水民之



趨就明寬猛之梗概。欲使著弦之夫擁警寬窄之庭。佩章之臣束帶太平之運。謹對。

問。孝以事親。忠以奉國。既非賢聖。孰能兼此。必不獲已。何後何先。

### 主金蘭

臣金蘭言。臣稟性庸愚。操行狂悖。本無學問。素疏翰墨。幸逢分明之運。濫從于祿之後。蹇驚輒就招駿之肆。燕伏輕參求珠之庭。雖似孔父思齊之教。而違周任量力之義。三五所遺。鑽仰難窮。八九所傳。廣遠易迷。况復加之以玄旨。點之以七步。詎能尺綆汲淵井。寸管窺峻境者乎。伏惟聖朝。懸金鏡而導俗。持玉燭而敷化。振雅於膠庠。進賢能於帷展。是以秀才進士竝爭穎脫之說。蓬草沈淪。但恥負擔之賤。故躍纖鱗於滄波。勵短翮於雲路。敢因各言之義。不揆庸淺之才。實乖雅藻。猶冀君子之遺跡。非所尅當。尚仰誘人之鴻教。蓋鳥鳴

似語。虫葉成字。故龜寫古迹。薄陳今旨。臣聞夫人之生也。必須忠孝。故摩頂問道。負笈從師。然後出則致命。表忠所天。之朝。入則竭力。脩孝所育之圈。是以參損偏弘。孝子之風。政軻猶蒞。忠臣之操。蓋是事親之道。莫尚於孝。奉國之義。孰貴於忠。資孝以事君。前史之所載。求忠於孝門。舊典之所編。故雖公私不等。忠孝相懸。揚名立身。其揆一也。別有或背親以殉國。或捨私以濟公。故孔丞割妻子之私。申侯推愛敬之重。卽是能孝於親。移忠於君。引古方今。實足爲鑒。在父便孝爲本。於君仍忠爲先。探今日之旨。宜先忠後孝。謹對。彫華絢藻。便貽殉末之愆。破璽焚符。終涉守株之譏。彬々之義。勿隱指南。

### 主金蘭

對。臣聞。九野圓蓋。懸日月以高覆。八極方輿。列山川以廣載。於是牛首曰君。虵身稱帝。然

後文質之迹載敦。華實之軌彌闡。若乃尊崇朴質。便涉守株之識。偏行文華。仍貽殉末之愆。然則賦々雜々。得之稱君子。郁々兩兼。可爲主治。文之與質。義等皮毛。朴之與彫。理同屑齒。二途遞代。以照万祀。義臬兼兩。理難廢一。欲使非古非今。以操折中之理。行文行質。以平野史之義。五福長保。無爲繼於百王。六極永絕。有道傳于千帝。相變之禮。跡隱難辨。彬々之義。捐微易迷。臣實尋求不彈。其本。乘流未達。其源。然豈逢供慶而韜辭。仰芳猷而輟翰。謹對。

問。既號天龍。無足而走。還稱地馬。無翼而飛。雖逐時文異。如泉利同。豈可起詐之子。擅放西蜀之僞。乾沒之夫。專行東吳之私。斯濫群小。因冒公司。屢煩丹筆。徒闡黃沙。謂爾進士。應識公方。懲茲不軌。用何能爾。

下毛虫麻呂

對。竊聞沙石化爲珠玉。良難可以療飢。倉困實其<sup>址</sup><sub>4</sub>坵京。唯易迷<sup>遠</sup><sub>4</sub>以濟命。是知寫圖而前。猶事血飲。調律而後。誰不食穀。自太公問九府之制。管父通万鍾之式。龍文錯於郭裏。龜甲入於幣間。白金馳其奸情。朱火競其濫制。西蜀銅岳。徒擅佞倖之門。東晉金溝。遂滿誇奢之室。姬景舍輕。單穆陳擁子之譏。劉文放鑄。賈生致轉禍之談。寔由弃耕桑之務。爭錐刀之末。伏惟聖朝。握天鏡。紐地銓。德音被於有截。至教翔於無垠。銜禾之獸屢臻。見穰之鱗荐集。今欲既停起詐之功。終析冶鑄之途。誠使三農叶節。千箱盈庾。淮陽高枕。追長孺之芳趣。邪谷送歸。發祖榮之清轍。則銖文曷惑。鏹貫無訛。頓屏磨屑之風。永絕炭挾之俗。謹對。

問。周孔名教。興邦化俗之規。釋老格言。致福消殃之術。爲當內外相乖。爲復精龜一揆。定其同不。覆此真訛。



下毛虫麻呂

對。竊以。眇觀列辟。繞電履翼之皇。逖聽風聲。洞八連三之帝。雖歷代千古。而源仍畫一。但隨時之便不齊。救弊之術亦異。原夫公涉清虛。契歸於獨善。儒抱旋折。理資於兼濟。是以泣麟降跡。刻魯冊之秘典。狼跋垂教。闡周編之雅錄。至如白毫東輝。演打剝之道。紫氣西泛。望凝玄之□。斯誠事隱探。頤之際。理味鉤深之間。然詳搜化俗之源。曲尋消殃之術。既淺溜澀之疑。亦有涇渭之派。但學謝贏金。徒迷同不之義。詞瞑屑玉。寧述真訛之旨。謹對。

問。仁智信直。必須學習。以屏其弊。乃顯精暉。學爲何物。其理既然。遲爾吐實。以正指南。

葛諸會

對。臣聞。人生天地。以學爲先。所以本德之后。畫龜圖以學。星精之帝。摸鳥跡以習。然則學是脩德之端。習亦立身之要。至若七十之達。會

洙泗而鑽洪教。五六之童遊舞雩。而仰芳風。莫不慕道之志。雲合會イ振名四海。受業之人。霧集揚譽。一代廼識。仁智學枝。不剪根。則愚庸之蔽立至。信直習派。不堰源。則賊絞之綱必纏。謹對。

問。殺無道以就有道。仲尼之所輕。制刑辟以節放恣。帝舜之所重。大聖同致。所立殊途。垂教之旨。貞而言之。

葛諸會

對。竊以。誅惡之義。先聖垂典。戮逆之旨。後哲宣軌。所以無爲軒帝。動三戰之跡。有道周王。示二叔之放。則知凶必殛。邪必正者也。但宣父鳥殺之試欲行。偃草之德是旣權教。重華節恣之制乃敬。不天之法此亦將謨。兩聖所立。殊途以同歸。二訓攸述。異言而混志。謹對。

和同四年三月五日

問。禮主於敬。以成五別。樂本於和。亦抱八音。



節身陶性之用。寔由斯道。御世治民之義。既盡於焉。雖因世損益。而百王相倚。利用禮樂。已有前聞。未決勝負。庶詳其別。

白廣成

對。臣聞。三才始闢。禮旨爰興。六情漸萌。樂趣亦動。固知陰禮之作基。綿代而自遠。陽樂之開肇。遂古而實遐。但結繩以往。杳然難述。書契而還。炳焉可談。尋夫禮是肥國之脂粉。樂即易俗之鹽梅。莫不揖讓堯舜。率斯道以安上。干戈履發。抱茲緒以化下。美善則丹蛇赤龍之瑞自臻。和諧則黃竹白雲之曲彌韻。所以高暨天涯。共日月而俱懸。遠遍地角。與山川而齊峙。辟水火之利物。方梨橘之味口。縱無姜生之制地。有夏氏之應天。則敬異之旨悉卷。親同之跡偏舒。誠乃俎豆之業。鐘鼓之節。於理終須行兩。在義寧容廢一。謹對。

問。李耳嘉道以示虛玄之理。宣尼危難而修仁

義之教。或以爲精。或以爲龜。其理云爲。仰聽所以。

白廣成

對。竊聞。眷山林以被黃縹。道德之玄教也。是則柱下之風。入皇朝以施青紫。仁義之敦儒也。彼亦司寇之訓。故清虛之理。煥二篇而同春日。折施之蹤。明五經而類秋月。誠能拯蒼生之沈溺。繼皇風之絕廢。伏惟聖朝。德光萬寓。化高五岳。動植苞其亭育。翔走荷其陶鑄。烈風五日曾不鳴條。崇雨一句徒無破塊。復乃南蠻稌壤。占青雲以航海。北狄章身。蹈雲以梯山。魏分臈兮其化如此。猶懼聃丘之教未備。污隆。玄儒之旨有舒雄雌。欲思分其條目。辨其精龜。竊以玄以獨善爲宗。無愛敬之心。棄父背君。儒以兼濟爲本。別尊卑之序。致身盡命。因茲而尋鹽酸可斷。謹對。

問。帝王御世。必須賞罰。用賞罰之道。雖褒貶

善惡。或有辜而可賞者。或有功可辜也。理可分疏。庶詳其要。

船沙彌麻呂

臣聞。聖帝臨民。明王御俗。莫不隨才授爵。簡德分司。責其成功。罰其有辜。是以虞舜微用舉元。古而實遐。但結繩以往。杳然雖述。書契而還。炳焉可談。尋夫禮是肥國之脂粉。樂卽易俗之鹽梅。莫不揖讓堯舜。率斯道以安上。干戈履發。抱茲緒以化下。美善則丹蛇赤龍之瑞自臻。和諧則黃竹白雲之曲彌韻。所以高暨天崖。共日月而俱懸。遠遍地角。與山川而齊峙。辟水火之利物。方梨橘之味口。縱無姜生之制地。有夏氏之應天。則敬異之旨悉卷。親同之跡偏舒。誠乃俎豆之業。鐘鼓之節。於理終須行兩。在義寧容廢一。謹對。

問。李耳嘉遁。以示虛玄之理。宣尼危難。而脩仁義之教。或以爲精。或以爲龜。其理云爲。仰

聽所以。

白廣成

對。竊聞。眷山林以披黃縑。道德之玄教也。是則柱下之風。入皇朝以挹青紫。仁義之敦儒也。彼凱而竄四凶。姬旦攝機。封皇邵而討二叔。因知國之二柄。德之與刑。爲政之基。莫甚於此。方今化高龍首。道洽鶉居。行禮措刑。揚清激濁。但連城之寶猶稱有瑕。況旣非聖人。詎能無過。誠須賞疑從重。罰疑從輕。不可以讐淺罪輕。便以有功見弃。勳績重。終以小過掩功。必須考其真僞。察其虛實。則法禁行而不犯。賞罰明而不欺。謹對。

問。郊祀之禮。責簡尙存。孟春上辛。有司行事。由是正月上辛。應拜南郊。歷有盈縮。節氣遲晚。立春在辛後。郊祀在春前。因以爲疑。不知進退適用之理。何從而可。

船沙彌麻呂



臣聞。登大寶而垂衣。審高居而宰極。莫不  
 作二儀之化育。法四氣之環周。服若玉於早春。  
 建朱旗於孟夏。今聖撫運。暉光日新。明德內香。  
 仁風外扇。由是禾秀。瑞穎。時表歲精之名。龜  
 啓靈圖。屢紀天平之號。猶思節有遲速。曆亦盈  
 虛。立春上辛。或遞先後。斯乃奉遵穹昊。敬授  
 民時。竊以啓蟄而郊。明之魯策。立春迎氣。著  
 在周篇。然則拜帝南郊。是存啓蟄之後。迎氣  
 東北。非在立春之前。因此而言上。事在後。謹  
 對。

天平三年五月八日

問。郊祀之禮。責簡尙存。孟春上辛。有司行事。  
 由是正月上事。〔辛賊〕應拜南郊。曆有盈縮。節氣遲  
 晚。立春在辛後。郊祀在春前。因以爲疑。不知  
 進退適用之理。何從而可。

藏伎美麻呂

對。臣聞。哲王御宇。郊祀爲先。明后臨時。祐望

爲務。故知。拜天之禮。乃往帝之良規。報地之  
 儀。寔前王之茂範。雖復馳驟云異。沿革不同。莫  
 不就遠郊而焚柴。因厚地而埋王。遂使莫  
 聲遠著。茂實遐流。踰千祀而永存。經百代而  
 不朽。郊祀之設。無屬上辛。事不得已。因爲  
 常會。然而日月廻薄。盈縮時改。其行。節氣推移。  
 遲速或變。其序。立春後辛。祀日先春。不可以  
 一致尋。寧須以同塗量。且夫進退殊揆。聞諸  
 鄒衍之談。推步定辰。勤在容成之說。唯愚謂。適  
 用之理。宜合時便。事備司存。何煩更議。謹  
 對。

問。帝王御世。必須賞罰。用賞罰之道。雖褒貶  
 善要。〔惡賊〕或有辜而可賞者。或有功可辜也。理可  
 分疏。庶詳其要。

藏伎美麻呂

對。臣聞。經邦導俗。貴在慎刑。調風御民。先  
 務明賞。由是憚惡勸善。黜幽陟明。清彼姦



凶之源。改斯彫弊。季方今遐邇寧輯。內外元

釐。化被八荒。德流四。開三面以敷惠。慮

一物之有傷。爰及芻蕘。廣垂下聽。竊以賞疑

從重。哲后之格言。青災肆赦。明王之篤論。至

如管仲有隙。齊桓舉而厚任。韓信有過。漢高

捨而不驗。若專棄有功。掛彼重科。既忽良才。

不加褒賞。何以獎勵來者。勸勤後人者哉。雖

然不有典刑。稍長犯綱。此而可捨。積習生

常。若使寬布惠和。明慎賞罰。道忠信而齊

俗。班禮教而訓民。兼復選于公之儔。悉之庶

獄。召黃霸之輩。寧以群州。然則上下克諧。褒貶

得衰。靖之風斯在。邕熙之化可期。謹對。

天平三年五月九日

問。明主立法。殺人者處死。先王制禮。父讎不

同天。因禮復讎。既違國憲。守法忍怨。爰失

子道。失子道者不孝。違國憲者不臣。惟法惟

禮。何用何捨。臣子之道。兩濟得無。

神虫麻呂

對。竊聞孝子不遺。已著六義之典。幹父之蠱。

或綸八象之文。是知興國隆家必由孝道。故

使烝々虞帝。終受肥華之珪。翹々漢臣。乃標萬

石之號。自阿劉淳孝。乃殞身而令親。桓溫篤

誠。終振刀而殺敵。魏陽斬首。存薦祭之心。趙

娥刺仇。致就刑之請。我國家登樞踐曆。握鏡

臨圖。仁超栖鳳之君。道出駕龍之帝。取破觚

於漢律。弃繁荼於秦刑。兩璧決疑。從陶公之雅

說。百鍤遺訓。協夏典之明科。囚人不祭。皐繇

之靈。獄氣既銷。長平之醢。蒲鞭澄惡行。葦輿謠

惡行。猶恐屈志同天。則彌睽孝弟。推才報怨。

則多挂網羅。廣迨芻蕘。傍詢政略。夫以資父

事主。著在格言。移教爲忠。聞諸甲令。由是丁

蘭雪耻。漢主留赦事之恩。維氏乃讎。梁配有

滅死之論。若使酌恤刑之義。驗純情而存哀。

討議獄之規。矜至孝而輕罰。高柴出宰。良續

遠聞。高卿臨官。芳猷尙在。則可能孝于室。必忠於邦。當守孝之時。不憚損生之罪。臨盡忠之日。詎領膝下之恩。謹對。

問。虞舜無爲。垂拱巖廊之山。周文日昃。廣延英俊之人。夫常王之道。條貫豈異。何勞逸之不同。而黔黎之懷輯。欲使變斯俗於彼俗。化奸吏於良吏。人民富庶。囹圄虛空。其術如何。悉心以對。

神虫麻呂

對。竊以。逖覽玄風。邇觀列辟。結繩以往。鴻荒之世。難知。刻石而還。步驟之蹤可迷。至於根英易代。金石變聲。咸以事藹芸縑。義彰華篆。煥焉在眼。若秋昊之披密雲。粲然可觀。似春日之望花苑。當今握袞御俗。履翼司辰。風清執象之君。聲軼繞樞之后。設禹虞而待士。坐堯衢以求賢。鼓腹擊壤之民。舞於紫陌。負鼎釣璣之佐。接武乎丹墀。方欲窮姬文日昃之勞。

明虞舜垂拱之逸。驅風帝王之代。駕俗仁壽之鄉。博採芻詞。側訪幽介。夫以時異浮沈。運分否泰。文質之統茲別。張弛之宜不同。然則四乳登皇運。經二徵之虐政。重華踐帝世。近二皇之淳風。淳風之時必須垂拱。虐政之世何不經營。是知聖王與世以污隆。黎庶從君而低仰。若能追有虞無爲之化。則隆周勤己之治。表廉平宣禮讓。責帛旌其英俊。懸捧絕其奸回。勸之以耕桑。勗之以德義。則可金科不濫。沙園恒清。九歲有儲。千斯積庾。水魚不犯。共喜南風之薰。門鵲莫喧。盛懷東后之化。謹對。

天平五年七月廿九日

右經國集以奈佐勝臯藏本校合了

群書類從卷第二百二十六

文筆部五

扶桑集

殘欠

處士

山居

贈答部

贈答

蕃客贈答

懷舊部

懷舊

話舊

哀傷部

悼亡。

傷藤進士呈東閣諸執事。

菅丞相

我等曾爲白首期。何因一夕苦相思。披書未卷

同居處。檢藥空歸已葬時。不<sub>レ</sub>按秋聲喪父哭。  
猶勝曉淚夢兒悲。余先皆所<sub>レ</sub>有。今面喻<sub>レ</sub>之。此生永斷俱言笑。  
且泣將吟事母詩。東閣孝經竟宴。進士事母之詩。故云。

奉寄諸文友之。

江相公

自

露易晞身。螢留

字。鷺

遠烟巢戀主人。他日哭君應淚盡。況當秋月  
照心辰。

到河陽驛有感而泣。

菅丞相

去歲故人王府君。驛樓執手泣相分。我今到此  
問亭吏。爲報向事一點墳。

哭兒。



天元四年夏和小童傷亡之詩。

中書王

無花無柳又稀鶯。慵睡慵興任日傾。池藕四迴舒葉色。林鴉幾許引雛聲。撫桐未慰孫枝思。養笱難堪母竹情。懷舊心肝何復苦。被催詞客數篇成。

哭兒通朗。

都良香

驚貽晚路夢熊羆。三十年來一鼻兒。初咲謝家誇詠雪。擬從張迹亞臨池。促齡稟分皇天定。遠別難期父母知。園梨子熟憐無引。籬竹陰疎恨不騎。淚添暮水流哀逝。聲

章無繼者 晚 歸。

洛解纜之次 適寄一章廻棹停

舟立次來韻 善相公

馬鬣孤墳在古原。村翁傳道昔埋尊。經霜荒徑飛蓬轉。欲暮悲風落葉翻。秋棘刺繁人絕跡。寒松枝老樹生孫。今朝寂寞空歸去。更哭趨庭誨

不存。

病。

病中上尊師。

善宗

被囊藥笥古書案。坐臥依々獨自憐。病殆困羸將數日。齒踰成立已三年。從令名在諸生後。但恐身徂老母前。若可伯牛廻孔問。縱雖命也賴恩全。

病累。

善宗

世途千險勞生久。身病彌留失趣初。七十老親當枕泣。二三兒息哭傍扃。環垣不是終生地。寄居故 篋唯餘借債書。廻首無人應附託。不知身後欲何如。

病中上左親衛藤亞相。

善宗

自輟趨陪擲月旬。閉扉獨弔病精神。十年驪穴頻空手。今日蝸廬已露身。朋友問來無問餓。名醫治盡不治貧。將軍惠澤應周至。塾戶猶望一段春。

秋夜臥病。

都良香

臥病獨悽々。寂然人事睽。階前無履跡。門外斷賓蹤。忽歎浮生苦。寧知與物齊。形容信非實。魂魄恍如迷。夜久風威冷。窓深月影低。憂愁不能寐。長短聽鳴鷄。

五嘆吟并序。

源順

余有五歎。欲罷不能。所謂心動於中。形於言。言不足。故嗟歎之者也。嚴闢延長八年之夏。失父於長安城之西。其歎一矣。朱奎承平五年之秋。別母於廣隆寺之北。其歎二矣。余又有兄。或存或亡。亡者先人之長子也。少登台嶺。永爲比丘。慧進之名滿山。白雲不埋其名於身後。禮誦之聲留澗。青松猶傳其聲於耳邊。衆皆痛惜。況於余乎。其歎三矣。存者先人之中子也。宅江州之湖上。漁戶雙開。所望者烟波渺々。鴈書一贈。所陳者華洛迢々。何以得立身揚名。顯父母於後。

世乎。其歎四矣。余先人之少子也。恩愛過於諸兄。不教其和一曲之陽春。只戒守三餘於寒夜。若學師之道。遂拙。恐聞父之志。空拋其歎五矣。于時秋風向我而悲。双墳樹老。曉露伴我而泣。三巡草衰。歎而喟然。吟之率爾而已。詞曰。一隔嚴容十有年。又無親戚可哀憐。單貧久被蓬門閉。示誠多教竹簡編。聲是不傳歌白雪。德猶難報仰青天。立名終孝深聞得。成業爭爲拜墓邊。不可斯須母不存。悲哉早別老衡門。寧尋八里江聲遠。只望孤墳草色繁。年少昔思懷橘志。痛深今戀折蓂恩。堂中縱有秋風冷。更爲誰人使席溫。天台山上身遄沒。落淚唯聞雅譽殘。午後松花隨日曝。三衣薜葉與風寒。寫瓶辨智獨知易。破衣方便不難。豈計香烟相伴去。結愁長混片雲端。

阿兄拋我不相俱。分在江州東北隅。淪落忘歸寧孝道。浮遊得所幾平湖。携將曉浪孤舟子。染着秋風一箸鱸。自去年來書信絕。連枝何日問榮枯。

葉物蕭々虫唧々。始知悲感與秋深。偷光未倦穿東壁。移晷何嫌接子襟。枕上双行霜夜淚。窓前一道水寒心。心微酸鼻誰應覺。獨自吟斯五歎吟。

隱逸。付樵隱。

秋日諸文友會飲野亭同賦尋山路隱倫。

紀納言

一日閑遊忘俗機。更尋幽隱到山扉。交談暮雨依松蓋。于時遇雨。故云。虛抱秋風納薜衣。泉逐古痕床下繞。雲隨恒恒棟間歸。徘徊欲別還爲歎。不用明時遁自肥。

舊隱詠懷敬上所天閣下。

都良香

不才多愧業猶難。好是山莊一挂冠。夜鶴眠驚松月苦。曉鶻飛落峽烟寒。雲埋澗戶幽情積。水隔寰中野性閑。學路蹉跎年暗擲。更栽籬竹養漁竿。

陶彭澤。

善相公

心是盤桓身隱倫。自忘名字醉鄉人。歸來舟過三江月。出入門穿五柳春。園菊開時豐產業。林禽狎處得交親。野亭客到醅初熟。莫怪恣々脫葛巾。

樵隱。

樵隱俱在山。

清仲山

本自幽栖與俗離。樵夫野客有相知。遠尋曲澗柯應爛。高臥清流枕轉欹。谷口負薪孤月送。洞中劇藥片雲隨。家山縱有不材耻。在世何人禮移。

無隱。

山無隱詩。

七言八韻。每句用逸人名。

藤博文



滿山潛隱感風聲。脫却荷衣咸結纓。先擲草庵閑景域。共排蘭殿曉光城。周牆辟立猿空叫。連洞

苔徑沒。登臨記得藥

苗生。暗驅秋桂馳弘化。且織春蘿染泰平。濤鷺飛流琴韵古。長松無主蓋陰傾。何能狼藉貪幽獨。此是相隨謁聖明。遂罷栖遲禽獸處。應超鳳闕爭先鳴。

山無隱。

紀納言

幽人歸德遂難逋。抽却蒿簪別艸廬。虛澗有聲寒溜咽。故山無主晚雲孤。青郊不顧烟花富。絳闕初生羽翼扶。巢許若能逢此日。何因終作潁陽夫。

黃門署尙書竟宴各詠句得野無遺賢。

江相公

遍問千巖萬壑。幽人咸出誰逃名。初趨槐路隨鵷列。更顧松門愧鶴情。蘿帳遠拋殘月色。雲扉遙別暮聲。莫教秋桂偏嘲我。不屑移文

□□成。

處士。

題南山亡名處士壁。

管丞相

秘密鄉村與姓名。年顏朽邁意分明。無妻澗戶松偕老。不稅山畦黍猥生。泡影身浮修道念。烟嵐耳冷讀經聲。比量心地安閒理。一室應勝我百城。

山居。

訪鄭處士山居。

江相公

暮高趣到碧峯頭。便謁清顏述事由。心地早銷方寸火。鬢霜鎮帶數莖秋。馬迷紅葉難去。人礙青蘿醉更留。身隱深山名不隱。相尋所以暫同遊。

山中自述。

江相公

碧山遁跡臥松楸。謝遣喧々世上榮。龍尾舊行應斷夢。鶴頭新召不驚情。商山月落秋髯白。潁水波揚左耳清。唯有池魚呼後至。各隨次第

自知名。

山中感懷。

江相公

□無朋友室無妻。不奈生涯與世睽。曉峽羅深猿一叫。暮林花落鳥先啼。五湖賣藥隨雲去。三徑橫琴待月携。枕上心閑歸夢斷。如何白首老青溪。

奉同羽林藤校尉侍中稽于山居之什。

藤諸蔭

幽屈卜築白雲間。爽籟清涼景象閑。數曲管絃侵砌水。一張屏障逼窓山。依行栽樹庭蕪暗。隨步穿苔石徑斑。勝境更嫌遊覽遍。恐貪寂靜不能還。

北堂文選竟宴各詠句探得披雲臥石門。

江澄明

傍山披得暮雲屯。好是貪幽臥石門。罷夢松聲當枕散。洗心泉響繞床喧。柴局日落歸溪鳥。澗戶煙消□□猿。勝地古時攜麗藻。染毫還媿

謝家魂。

三日山居同賦青溪卽是家。勒春塵隣賓親綸。

高五常

野夫高意趣。雪臥幾廻春。獨飲南山水。寧踏北闕塵。青溪唯作宅。翠洞□爲隣。漢曲猶稱老。唐朝不要賓。俗人尋訪隔。禽鳥狎來親。自業何爲□。嚴陵瀨上綸。

贈答部。

贈答。

與野十一唱和往復之後餘思未洩更勸二章以代懷。  
良春道

慙登清貫免饑寒。鶯有喬枝鷄有冠。交友欲拋閑境薄。世情到老□頭看。蝸牛有舍客身穩。檻虎伍顏作氣難。儻有與君詩唱和。未能鎖盡舊心肝。

無能白首遇休明。只合騰々過一生。心事結風功不就。浮榮盡水字難成。年荒不食明時俸。

藝薄空塵別駕名。眼下飽看榮辱盡。贈君吟動  
鞠歌行。

近曾與橘才子相遇山寺。清談間發。或言  
詩章。或論釋教。兩道兼通。一不可及。予  
不堪欣感。同載歸家。喜天爵之有餘。歎  
人位之未備。聊題長句。叙其所由。

源英明

□行才名獨有君。清談一接我非群。陶元亮出  
能詩句。無垢稱生長。法文貞節寒松立雪。高  
情孤聳鶴棲雲。青衿未改携黃卷。大器晚成是  
舊聞。

右親衛源亞將軍忝見賜新詩。不勝再拜  
敢獻鄙懷。本韻。

橘在列

松桂晚陰一遇君。誰言鵲燕不同群。感吟池上  
白蘋句。泣染箱中綠竹文。近曾將軍有河原院池亭  
寫得白蘋洲樣岸相傳之句。余奉拜之次。青艸湖圖波  
一聞此句。感懷交至。涕泣漣如。故云。豹變豔藏南  
嶺霧。鵬搏空失北溟雲。爲君更詠栢舟什。莫

使凡流俗客聞。

橘才子見酬拙詩以本韻答謝。

源英明

恨我多年未遇君。山頭一旦適成群。知音如舊  
初傾蓋。會友無期只以文。膠漆交情斟淡水。  
瓊瑤麗句過青雲。相携欲結林泉計。塵網諠譁  
不足聞。

繼奉和右親衛源亞將見酬之詩。本韻。

橘在列

儒書將鉞共傳君。況是篇章別絕群。每見天然  
詞自妙。便知地未墜斯文。林中木秀先摧吹。  
嶺上月明更遇雲。若占山居相從去。泉聲松響  
飽應聞。

橘才子重見寄初二篇歎余之沉滯。後一  
章褒余之詩章。褒嘆之間五綴本韻。

源英明

日尋筆硯甚慙君。殊玉頻連瓦礫群。兵略素無



猶拙武。儒書曾學適飛文。應驚謝氏生安石。  
自識楊家有子雲。比按才名程百里。褒詞還恐  
外人聞。

源亞將軍頻投瓊章。絕妙奇珍。無比於世。  
余不顧庸虛。敢獻拙和。而餘興未盡。感  
吟更催。冰霜在口。黼黻照目。不堪情感。

重綴蕪詞。本韻。

橘在列

應是以才天縱君。二班二陸豈同群。還將揚土  
兼金價。欲買崑山片玉文。陳孔章詞空愈病。  
馬相如賦只凌雲。誰知亞將詩奇絕。鬼感神怜  
鳥獸聞。

源亞將軍或躍在淵。唱和之間。余常歎之。  
而亞將獨秉謙虛之志。動陳止足之詞。因  
綴本韻。敢獻鄙懷。

橘在列

滿朝有識盡悲君。無識人言自備群。莫謝放聲  
歌鳳德。猶怜累足履龜文。身留細柳孤營月。淚  
洒蒼梧一片雲。不耐廻頭思往事。先皇綸旨耳

中聞。

橘才子以子爲失時。贈答之中屢有此句。  
余乃不然。故述來由。復次本韻。

源英明

抽身也昔侍堯君。便是當初鸞鶴群。晨入紫微  
傳鳳詔。曉趨青瑱戴星文。竹悲湘浦空留淚。  
龍怨鼎湖遂隔雲。時去時來非不識。吾教知  
己一言聞。

重奉和。

橘在列

墻東避世似王君。欲逐浮圖羅什群。素業三千  
人外學。玄談八萬藏中文。王充因命還論凍。摩  
詰將身更喻雲。不二法門皆話盡。應超獨覺  
與聲聞。

重次群字。

源英明

賦玄吟興不如君。賈馬後身元白群。過自毛  
公三百首。貴於老氏五千文。空門何必師羅漢。  
證地終知至法雲。少有書生通法教。疑逢十六

會中聞。

重押聞字。

橘在列

□殊桂父與茅君。伊洛逍遙自出群。□後蓮花  
先展偈。興來竹簡更排文。西方欲蹈瑠璃地。上  
界應看碼碯雲。空有道中中道理。不憂夕死  
爲朝聞。

重賦文字。

源英明

園葵有信向東君。鮑叔知吾不棄群。金甲空  
懸依偃武。槐林獨茂爲修文。閑人多暇宜吟  
月。才子何年欲踢雲。苦學寧如奢不學。冬冰  
莫使夏虫聞。于時學者沈滯。  
淺智昇進。故云。

復賦文字。

橘在列

一自漢宮辭聖君。晦蹤欲逐隱倫群。伯鸞久  
抱山中志。高鳳猶看雨裏文。披艸飲來顏蒼水。  
採薇搜盡首陽雲。寄言巖戶寒蟬響。應異槐林  
昔日聞。

復賦雲字。

源英明

鍊藥有臣又有君。君臣和合拔痾群。蓬壺未  
得求仙棹。紫府難窺種玉文。心只辭塵行樂  
水。身何辭日上飛雲。吟詩便是長生計。不信  
應尋元白聞。

復賦羣字。

橘在列

□與凡庸共事君。但怜野鶴在鷄群。閑來時  
酌樽中酒。衙退暫拋案上文。報枕曉聲伊水浪。  
入簾晴色華山雲。雖懷塵土和光意。詔樂應備  
處々聞。

復賦聞字。

源英明

忠臣在下仰明君。何必追從遁世群。南嶺梳霜  
煩角綺。北山擺月見移文。彈冠有別孤巖水。  
拋杖無留古洞雲。爭勵愚鷺朝右立。表祥奏  
瑞耳根聞。

重賦雲字。

橘在列

晚歲堯朝未識君。尙將元凱久俱群。已殊呂  
望匡周武。應似賈生遇漢文。座右舊銘猶暗

字。窓中遠岫半連雲。失時欲逐閑居志。世上浮榮如不聞。

重寄。

源英明

君知我意。我知君。宿業因緣遇好群。念々歸依觀自在。生々親近釋迦文。榮名皆是波中沫。富貴寧非霧後雲。此事誰人能憶得。橘卿多見又多聞。

又。

橘在列

昭君古恨出於君。應惜遙交左袵群。蟬鬢不収風櫛色。雁書欲寄淚添文。行々相送漢宮月。去々猶深沙漠雲。馬上琵琶無限曲。胡兒掩泣不堪聞。

又。

橘在列

昔時魏有信陵君。令長連四子群。欲救平原獸穴厄。分偷晉鄙虎符文。三秦敗將歸關月。六國縱軍結陣雲。漢帝慕名今守冢。賢能應是古今聞。

又賦。

源英明

栽竹多年對此君。含情想像七賢群。劉伶常有紅顏色。阮籍應無白眼文。心是方圓隨器水。身唯來去觸巖雲。非趨名利宜多取。名是實賓稽古聞。

又。

橘在列

水石烟霞一屬君。家資疎薄業殊群。停盃慙讀思玄賦。欹枕長吟招隱文。風後松篁聽似雨。塵中冠蓋望如雲。雖留朝市同林麓。深巷車聲漸不聞。

余昨日奉和安才子書懷之詩。餘興未盡。重贈拙詞。才子高和。拂曉入手。不堪感。

吟以和之。次韻。

橘在列

須臾不可寸心遷。懷到林泉養浩然。高鳳讀書逢雨日。梁鴻晦跡入雲年。溪風吹木搖秋思。山月穿窻訪夜禪。早晚共尋商嶺去。去時宜詠採薇篇。



近以拙詩寄王十二。適見惟十四和之。什。因以解答。

野相公

勝負人間爭奈何。淬將心劍戰肝魔。虛名日脚翻陽焰。妄累風頭亂雪波。賤得交情探底盡。老看時事到頭多。見君行李平如砥。誰向羊腸取路過。

重酬。

野相公

野人閑散立身何。自課功夫文字魔。蹇步更教吹退鷁。醜嘔還被敵橫波。水中投物浮沈異。手裡藏鉤得失多。折軸孟門難進路。可憐騏驥坦途過。

代渤海客上右親衛源中郎將。

都良香

紫微親衛寵榮身。奉詔南行對此賓。出自華樓光照地。來從雲路迹無塵。虵驚劍影便逃死。馬惡去聲衣香擬嚙人。渤海朝宗歸聖澤。願君先道入天津。

劉大夫才之命世者也。修國史之次乞予詩卷。因勒四韻題于卷後。

良春道

空勞畫餅合供饑。幼學孜孜老未知。拭我古銅光不帶。涉君溟海水難爲。應修有國簪纓傳。那乞休官別駕詩。莫怪卷中多白眼。人生不得志多時。

野副使卓世之工文者也。常誦予詩句。枉見褒異云々。予每見子之文辭。盡怯我風塵。此絕世之大才也。夫以孔門論詩。野已入室。良未升堂。決其勝負。豈惟伯仲之間歟。之門哉。卽知此華予之言。故題六韻以寄謝之。

良春道

看他語蹟苦相交。毀譽隨心變羽毛。野調又玄遭世忌。良詩尙白被人嘲。俱遊虎窟君餘力。並覓驪珠我未遭。酌蠡判迷量海器。磨鉛嘗含剗犀刀。朝宗海口川流細。却過雷門布

鼓勞。如入大官無不有。宮牆數仞仰彌高。

和從弟內史見寄兼示二弟。

野相公

世時應未肯尋常。昨日青林今帶黃。不得灰身隨舊主。唯當剔髮事□王。承聞堂上增羸病。見說家中絕米糧。眼血和流腸絞斷。期聲音盡叫蒼々。

和沈卅感故鄉應得同時見寄之作。次來。

野相公

查客來如昨。寒蟾再遇圓。三冬難曉夜。萬里不陰天。漫遣刀環滿。空經破鏡懸。計應鄉國處。愁見一時然。

蕃客贈答。

遼東丹裴大使公。去春述懷見寄於余。勸問之間遂無和之。此夏綴言志之詩。披與得意之人。不耐握玩。偷押本韻。

藤雅量

烟浪淼茫雲樹微。廻□使節見依々。隨風艸靡

殊方狎。就日葵傾遠俗歸。遼水鵬聲重北去。滄

溟鵬翼三去聲南飛。若長有與心期在。万里分

襟更共衣。前紀鴻臚館。夜舍預被席。遙以指別。今任此州。更拜清塵。不堪懷舊。脫衣贈之。故云。

重賦東丹裴大使公。館言志之詩。本韻。

藤雅量

凌雲逸韻義精微。一詠難任萬感依。不奈東丹新使到。唯怜渤海舊臣歸。江亭日落孤烟薄。山館人稀暮雨飛。見說妻兒皆散去。何鄉猶曳買臣衣。

初逢渤海裴大使有感吟。

菅淳茂

思古感今友道親。鴻臚館裏□餘塵。裴文籍後

聞君久。菅禮部孤見我新。年齒再推同甲子。風

情三賞舊佳辰。往年賢父裴公以文籍少監奉使人朝。予先君時爲禮部侍郎。迎接感勸。非唯

先父之會友。兼有同年之好。紀裴公重朝。自說我家有三千里駒。蓋謂大焉。今予與使公春秋偶合。賓館相達。又三般禮同在仲夏。故云。

兩家交態皆人賀。自愧才名甚不倫。

渤海裴大使到越州後見寄長句欣感之至。押以本韻。

江相公

王道如今喜一平。教君再入鳳皇城。朝天歸路秋雲遠。望闕高詞夜月明。江郡浪晴沈藻思。會稽山好稱風情。恩波化作滄溟水。莫怕孤帆萬里程。

酬裴大使再賦程字遠被相視之什。

江相公

別後含毫意不平。滿篇總是憶皇城。迴頭遠拜堯雲影。戴眼遙瞻聖□明。詞苑花鮮抽旅思。詩流浪潔□深情。戀君欲趁夢中路。請問悠悠海驛程。

奉和裴使主到松原後讀予鴻臚南門臨別口號追見答和之什。

次韻。

江相公

一從分手指遼陽。妒使來賓斷雁行。得志何愁雲水隔。江湖深契在相忘。

奉酬裴大使重依本韻和臨別口號之作。

江相公

曉鼓聲中出洛陽。還悲鵬鷃遠分行。思傾別酒俱和淚。未死應無一日忘。

書懷呈渤海裴大使。

江相公

烟浪雲山路幾重。十三年裡再相逢。虛聲我類羊公鶴。遠操君同馬岌龍。雖喜交情堅似石。更怜使節古於松。兩迴入覲裴家事。饒趁芳塵步舊蹤。

和裴大使見酬之什。

江相公

想彼烟霞閉數重。停盃還喜與君逢。夢中艷藻雖吞鳥。筆下彫雲不讓龍。底徹交斟秋岸水。蓋傾心指暮山松。江家昔有忘年契。莫怪鴻臚暫比蹤。

重依蹤字和裴大使見酬之什。

江相公

冥溟森々樹重々。鰲扑應誇促膝逢。華表聲高



先聽鶴。葛陂鱗化再看龍。遠排波母青山霧。近對東王紫鬱松。廣イ使範頻傳詩獨步。飛觴還祝後來蹤。

裴大使重押蹤字見賜瓊章。不任諷詠。味イ敢以酬答。江相公

忽望仙樓十二重。馬頭連袂又遭逢。今日使主並馬詣闕。故占雲難伴苟鳴鶴。摘藻多慙茫彥龍。詞雲瑩珠先點草。筆鋒淬劒本藏松。憐君累代遙輸信。竹帛應垂不朽蹤。

懷舊部。

懷舊。

冬日於文章院懷舊招飲。

江相公

幹林懷古遇樽盈。銀艾紛々珮響清。緩引索郎心自動。閑携歡伯感先成。鶴歸舊里歌三曲。馬至新豐嘶一聲。想得今霄盃裡趣。依然難耐。

冬夜閑居話舊。以霜爲韻。

江丞相

懷舊猶勝到老忘。多言且恐損中腸。交遊少日心如水。閑話今霄鬢有霜。不恨寒更三五去。無堪落淚百千行。相論前事故人在。只是當時我獨傷。

扶桑集卷第七

扶桑集卷第九首缺

心酌清流於姬水。閨々如侃々如。所以悅耳目。娛心意者也。于時宴闌日晚。歡洽醉酣。聊抽後學之未聞。敢尋前脩之遺跡。廼命侍坐。各以賦詩云爾。

成林何必木叢生。聖世先教々化明。枝葉豈因風雨密。本根猶自典墳萌。曉花半綻唯詩草。春鳥高歌是頌聲。更有儒門餘孽在。還慙暫忝茂

材名。

毛詩。

仲春釋奠毛詩講後賦詩者志之所之。

并序。

菅三品

釋奠者。盖先王所以奉聖欽賢。崇師重道之大典也。是以仲月之春。初丁之日。散苾芬於和風之砌。明德惟馨。奏鏗鏘於媚景之庭。聲樂以正。於是禮畢講經。□罷開宴。盈耳者四百年之風雅。洋洋猶遺。解頤者三千人之生徒。濟濟未散。夫詩之爲言志也。藏於心。牽於物。尋其所本。偏是爲志。名其所之。乃是曰詩。觸緒而動。待感而形。始則躑躅於智臆之間。漸以流離於唇吻之外。王澤之及四海也。性水澄兮幽咽絕。德輝之滯一隅也。情竇暗兮怨曠生。至若彼鳥獸魚蟲栖於美刺之思。雪月花艸助其哀樂之音。則莫不言者聞者兩盡襟懷。乃君乃臣共取爛誠。爰知雖發自丹府之地。遂歸乎玄

化之基者矣。國家德被瀛表。仁洽寰中。苑柳隰桑之風。寂寞于歲月。汝墳漢廣之詠。衍溢乎康衢。至矣盛矣。太平之化不可得而稱計者。請歌治世之言。將貽探詩之職云爾。聞說篇三百。盖皆志所之。孕音凝在意。牽物散如期。動入風雲色。抽爲草木詞。當初庭訓絕。唯詠蓼莪詩。

同前。

菅雅規

在心爲志發爲詩。詩句何非志所之。意緒亂來誰解□。毫端書出不相欺。颿風吹送酬恩日。湛露流傳頌德時。玄化悠々清慮樂。詠聲自作治安詞。

孝經。

仲秋釋奠聽講古文孝經。

菅三品

一千八百有餘文。名是孝經忠不分。聽盡爲臣爲子道。秋風吹拂意中雲。

仲春釋奠聽講孝經同賦資父事君

菅丞相

仲春月之初丁大昕。有事于孔廟。蓋釋奠也。籩豆之事則有司存之。苾芬之儀則鬼神享之。禮云々。可名目以言矣。於是圓冠蹲節。博帶握衣。命夫君子之儒。稽其古文之典。立言在簡。憲章于魯堂之中。敷說如流。擬議于泮水之上。故能志道據於德。擁經猶有二千。芸其艸。修其書。去聖曾未咫尺。夫孝事親之名。經爲書之號。謂之義者。旁觀地理。謂之行。者。俯察人文。是以膺籙受圖之貴。非孝無以約左龍。啜菽飲水之卑。非孝無以據懸象。至如子諒之心。孫謀之詠。求之於百行。□如此一經者也。觀其一艸一木。不代勾甲於和風之前。乃父乃兄。無虧燕毛於觀學之後。濟々焉。鏘々焉。孝治之世。其猶鏡谷乎。况亦資於慈父。以事聖君。君父之敬可同。孝子之門必有忠臣。臣子之

道何異。然則揚名之義。可請益於北闕之臣。形國之儀。豈失問於南垓之子。願錄三綱之無爽。將叙五教之在寬云爾。謹序。

懷忠偏得意。至孝自成。人。換白何輕死。含丹在顯親。王生猶有母。曾子豈非臣。若向公庭論。應知兩取身。

陪相國東閣聽諸小侯聚學孝經一首

紀納言

夫孝者百行之本也。莫不資父事君。因嚴敬敬。出於家庭。而及於天下。盛於揚名。而終於顯親。孝之爲道。不其然乎。相國天然之性。孝根其心。將寫先聖之襟懷。以鑒後生之耳目。遂命於碩學。授此小侯。大化滂流。遙源勘在。諸小侯或居齟齬之年。或在綺紈之服。指以竹騎。更發叩鐘之情。聚彼艸螢。始齒函丈之列。期其陶染。知幾曾參于時。下欠



沈月落尼山時。好是三千夢後投。

仲春釋奠聽講論語有如明珠并序。

善相公

貞觀十九年仲春上丁。流衍之禮卽畢。函丈之儀初開。卽會鴻生。講述論語。所以傳儒風。教胄子也。說曰。前代學者。多以此書喻之明珠。取圓通也。嘗試論之曰。珠之爲器。寶之至重。或刻赤蚌之腹。或探驪龍之頷。內質虛融。外輝潔朗。徑纔過寸。照乘之光相分。圓不盈拳。燭堂之明自遠。故聖教之不可測。強名而比此物。其理該通。其旨奇妙。出自海口之談。傳於洙流之側。卷舒則照。璨於掌上。執持則玲瓏於懷中。探楚澤而難得。沒商丘而未逢。學之者智明。如洞穴之無暗。藏之者心潤。類河岸之不可枯。立□喻義。良有以哉。若乃五經廣大。同巨鏡之溢匣。諸子雜碎。比屑玉之盈車。所鑒最微。爲寶甚賤。未足與之論其光明。平其價

直者也。于時王公以下。會聚德經者。便屬篇章。嗟詠此理云爾。

聖教融通義入幽。更將光耀比隨侯。瑩來不  
是鯨精變。學得還如象罔求。誰覓漢濱尋潤  
岸。唯壁水記圓流。手中愛翫心中映。豈類神  
驚眄暗投。

夏日陪右親衛源將軍初讀論語各分一字。探得迷字  
爲句解源順

康保三年夏。右親衛源將軍招翰林藤學士。初讀魯論語。時人以爲不耻下問。能守文宣王之遺訓焉。何則俗人未必賢知。以爲論語者幼學之書也。不足於晚學。不知其先聖微言圓通如明珠之義矣。將軍閣下。職列虎牙。雖拉武勇於漢四七將。學抽麟角。遂味文章於魯二十篇。所謂汎愛衆而親仁。行有餘力則以學文。蓋將軍之謂乎。爰有總州員外順者。昔是南曹聚雪之生。今則東海指雲之吏。業拙官冷。愁獻

蕪詞云爾。

將軍始讀宣尼訓。劍是左提書右攜。幸遇君兼文武道。慙臨員外吏途迷。

史記。

春日侍前鎮西都督大王讀史記應教。并序。

江相公

古人有言曰。荆山之璞雖美。不琢不成其實。顏閔之才雖茂。非學非弘其量。是故鎮西都督大王。受史記於吏部江侍郎。蓋尋聖訓也。大王仁義有餘。百行無失。雖習馬遷之史。不忘車胤之勤。復在爲善。若非東平王之後身。業只好文。則是曹子建之再誕。于時綠觴頻傾。絃管緩調。春花面々。闌入酣暢之筵。晚鶯聲々。與參講誦之座。朝綱質謝冰光。文慙雕虎。猥奉大王之教。獻小子詞。謹序。

天孫思道幾疇咨。累葉儒林任在誰。欲問三千年鑒戒。迎來五百歲賢師。珠明成寶鑽。堅處青

出於藍染學時。幸遇馳心尋馬史。執轡還喜決狐疑。

蒙求。

八月廿五日第四皇子於披香舍從吏部郎橋侍郎廣相始受蒙求。便引文人命宴賦詩。并序。

都良香

禮記入學之歲。過之者非進道之勤。義有從師之方。違之者非漸訓之故。研乎其志。所以披沙鍊金也。礪乎其心。所以琢玉成器也。學之爲益不其然乎。皇子聰明在懷。日遠之對不敏。岐嶷居質。月初之談兆奇。然猶以老成之量。致童蒙之求。誰其擊之者。橋廣相是也。保此元吉。故讀李參軍之書。就彼明賢。故稟橋侍郎之誨。譬冰之解。碧水之心頓清。若霧之開。青天之顏可視。於是宴命綠觴。恩喚墨客。韻賜御管。歌吹驚於仙眠。舍在禁宮。講誦近於天耳。脫發跡於今日。當傳事於後人。不有詩章。

者乎。何爲不作焉。不有筆硯者乎。何爲不記焉。其辭曰。

天生俊哲號天人。自就賢師問道真。今日童蒙皆擊盡。心臺一鏡遂無塵。

詠史。

北堂漢書竟宴詠史得高祖。

菅淳茂

高皇本是布衣人。大度終爲黼辰身。聖體被知求飲客。龍顏應受入夢神。竹冠時着飛天日。雲蓋暗隨避地辰。初自斬蛇符已顯。漫言逐鹿說寧真。讖呈氏族金刀舊。盟指河山鐵契新。八難從流謀楚國。三章解網撫秦民。關中約背功雖廢。垓下圍成業遂陳。十二窮人尙憶。末孫九代繼餘塵。

漢書竟宴詠史得楊雄。

江相公

遠揖清風滿綠編。尋來遺跡感何專。巫山舊宅

孤雲細。蜀郡新門一子傳。賓客交遊耽旨酒。文章滋味□甘泉。階墀執戟秋霜重。天祿披書曉漏懸。生白室虛唯席月。艸玄庭靜漫鋪煙。怜君三代官無徒。不用才名聒八埏。

北堂漢書竟宴各詠史得淮南王劉安。

橘在列

問道鍊黃上翠微。也曾懷帙弄琴徽。形骸乍飽朝霞氣。齒髮長留日月輝。犬繞雲中紅桂吠。鷄依天上白榆飛。步虛唱了君知否。故國秋風露濕衣。

北堂史記竟宴各詠史得叔孫通。

紀納言

懷明難照世多艱。直道如諛十主間。他日遂逃秦虎口。暮年初謁漢龍顏。光加粉澤洪基貴。道拂風波少海閑。一代儒宗君第一。于今吾輩仰高山。

詠史得漢濱父老。

都良香



此翁連遁遠去聲煩拏。南北浮雲不定家。處賤安知天子貴。出塵唯蹈漢濱沙。慮貞膽徹清流底。歲暮髮分曉浪華。遺跡悠悠尋不得。如今空問舊烟霞。

八月十五日嚴閣尙書授後漢書畢各詠

詩得黃憲并序

菅丞相

若夫訓中挾一。天度之趣可知。記事寵群。日官之用爰立。故堯舜盛矣。尙書者隆平之典。周道衰焉。春秋者撥亂之法。司馬遷之修史記。君舉無遺。班孟堅之就漢書。國經終建。逮于洛陽。帝里劉嬰暫據宮城。建武王春更始纔偷甲子。遂撫運於堯胤。乘德於火方。靜我風雲。安我社稷者。斯乃光武中興之主也。雖則顯宗祇承使後之言事者。爭先永平之政。然而孝安屬當。令天之厭德者。遂至王土之糝。嗟庠。四百之年。圖書絕筆於孝獻。桓靈之弊。禮樂墜文於山陽。諸葛亮所謂親小人遠賢士。是所以後

漢傾頽者也。於是順陽芒蔚宗修紀傳。而繫日月。巨唐太子賢通注解。以膏肓。南陽故事雖百代而可知。東觀群言成一時之茂典。易曰。觀乎人文以化成天下者。斯文之謂哉。嚴君知斯文之直筆。咏斯文之良史。遂引諸生。授芸閣。蓋仲尼閑居。曾子侍坐。思道之事。自古而存。觀其人之吐白鳳者。通引籍以先來。世之蹈青雲者。待撞鐘而競至。肩舁汗簡。手執韋編。或不覺暴雨之漂流。或不知坑岸之顛墜。豈唯士安高尙。時人號爲書淫。元凱多才。獨自稱有傳癖而已。屬至貞觀六年甲申歲八月十五日。訓說雲披。童蒙霧散。三冬以足。百遍功成。知籟金之假珍。感瑤玉之眞器。稽古之力不可較量。於是赤帝之史。倚席於白帝之秋。三千之徒。式宴于三五之日。嚴涼景氣。方醉上界之烟霞。滿月光暉。盛陳中庭之玉帛。數盃快飲。一曲高吟。不可必趣瑤池。不可必臨梓澤。遊宴之

盛只復如是。子墨客卿。翰林主人。各分史以詠風流云爾。

黃生未免在人間。千頃汪洋一水閑。逆旅初知師表相。高才更見禮容顏。陳蕃印綬慙先佩。郭泰車鑾歎早還。儀就京師公府辟。徵君豈出白雲山。

### 後漢書竟宴各詠史得龐公。

#### 紀納言

後漢書者。宋太子詹事范曄之所刪定也。編世十二錄年二百。名居良史之甲。文擅直筆之華。莫不彰善癉惡。激一代之清芬。昭德塞違。備百王之炯戒。貞觀十四年秋明時以此書天下之奇作。令翰林學士臣大夫講之。大夫抵掌而談。提耳無厭。發彼先儒之墨守。擊以後學之蒙求。元慶元年春。擢遷左少丞。職非其勤。講以俄止。功漸爲山。恨如弃井。管師匠承祖業之後。爲儒林之宗。經籍爲心。得王何於

逸契。風雲入思。叶張左於神交。三年冬。遂以其有史漢之癖。令續其講。嗟乎德之有隣。道遂無墜。聽誘進之風者。投斧負笈。染惇誨之化者。虛往實歸。疑關捷排。非復金湯之險。義淵底徹。終知揭瀾之津。及五年夏。披授始畢。明年春。聊仍舊貫。以設竟宴。促膝者盡是王公之會。盈耳者莫非金石之音。于時和暖有候。風景不貧。老鶯舌饒。語入哥兒之曲。殘花跼斷。影亂舞人之衣。景傾醉酣。各相語曰。歡會易失。詩酒難并。豈只取樂於今。宜以詠史於古云爾。

襄陽高士獨推君。祿利諠々豈亂聞。清慮遠雖生產忘。素虛遺擬子孫分。逃名始得身巢穴。晦跡遂辭世垢紛。應是幽栖家不定。暮歸唯宿峴山雲。

北堂漢書詠史得路溫舒。

管三品



文華政理被<sub>レ</sub>人聞。鉅鹿雄才路長君。露澤青蒲留<sub>レ</sub>鳥跡。烟村碧艸從<sub>レ</sub>羊群。漢朝舟泛<sub>レ</sub>心中水。山色官尋<sub>レ</sub>眼外雲。惆悵春風棠樹蔭。芳聲遠播子孫分。

北堂漢書詠史得<sub>レ</sub>李廣

源訪

班史將軍誰最良。隴西李廣甚強梁。抱兒直過<sub>レ</sub>邊沙去。誤虎還教<sub>レ</sub>臥石傷。五十年來持<sub>レ</sub>漢節。三千里外老<sub>レ</sub>胡霜。終身好忝<sub>レ</sub>君王命。不耻<sub>レ</sub>朝家與<sub>レ</sub>朔方。

北堂漢書竟宴詠史得<sub>レ</sub>蘇武并序。

紀在昌

若夫萬八千年。聲塵堙滅於巢穴之居。七十二代。軌躅寂寥於繩木之化。自彼書契之道蒼精開<sub>レ</sub>其遙源。言事之官黃神垂<sub>レ</sub>其勝跡。或左或右。載筆之職不絕。乃竹乃帛。執簡之功可知。是以左丘明亞聖之匹也。爰遺<sub>レ</sub>百王之鑒。司馬遷命世之才也。廼成<sub>レ</sub>一家之言。史之爲勤。其來

尙矣。班孟堅之修斯書也。撫<sub>レ</sub>北闕之故事。正<sub>レ</sub>西都之前史。詞條強直。文操錦摛。高皇受<sub>レ</sub>命之主也。故起<sub>レ</sub>文於豐邑之日。平帝隆<sub>レ</sub>業之君也。故絕<sub>レ</sub>筆於康陵之年。則知勸<sub>レ</sub>德撥亂。彭善彈惡。十二世之撫運。絲綸載而不朽。二百年之傳曆。樞機編而無遺。謂<sub>レ</sub>之漢書。良有<sub>レ</sub>以也。我后之馭<sub>レ</sub>天下也。憲<sub>レ</sub>章六籍。搜<sub>レ</sub>獵百家。留<sub>レ</sub>玄覽於鳥策。傾<sub>レ</sub>清聽於蠹簡。延<sub>レ</sub>喜十九年仲冬十一月。以此書經國之常典。命<sub>レ</sub>翰林莒學士講<sub>レ</sub>之。學士鯨鵠之業累跡。雕龍之才陶性。垂訓無厭。已居<sub>レ</sub>魯儒之宗。敷說不躡。早得<sub>レ</sub>漢聖之號。故染<sub>レ</sub>提耳之教者擊<sub>レ</sub>其蒙。聽<sub>レ</sub>拭舌之談者去<sub>レ</sub>其惑。遜業之徒成<sub>レ</sub>都。相<sub>レ</sub>趨於函丈之間。歸化之士如市。競進於執卷之列。至<sub>レ</sub>夫昇堂禮成。叩<sub>レ</sub>鐘問發。尋疑關而排<sub>レ</sub>局。待<sub>レ</sub>鷄聲之曉。渡<sub>レ</sub>義淵而徹底。翻<sub>レ</sub>牛蹄之岑。廿一年春。以其有<sub>レ</sub>人望之德。兼拜<sub>レ</sub>尙書左少丞。管轄在<sub>レ</sub>職。僉勉從事。機密之



勤戴星無暇。誘進之道。兼日有妨。然而朝家賞斯文之雅麗。重其人之通博。雖當劇務之任。不奪惇誨之功。嗟乎。道之不墜。在今視矣。廿二年冬。篇軸漸盡。披授始畢。明年暮春。聊展宴席。會而連榻者。金章紫綬之客。唱而整節者。鸛絃鳳管之聲。馬相如之撫琴也。尋遺調而間奏。王子淵之弄簫也。逐舊曲以爭吹。況乎姑洗應律。韶陽屬候。定交於緩歌之後。流鶯知音。叶契於妙舞之前。低柳授分。旣而玉爵飲酣。金鳥影暮。豈只扇古風於今日。宜以寫舊史於新詩云爾。

欲言蘇武事君忠。奉命龍城不顧躬。抱節多飡邊土雪。霑襟獨對朔天風。三千里外隨行李。十九年間任轉蓬。賓雁繫書秋葉落。牡羊期乳歲華空。胡庭遂是丹心使。漢闕還爲白髮翁。非只英名垂竹帛。麒麟閣上記勳功。

勤學。

高鳳字文通。南陽鄴人也。少爲書生。家以農畝爲業。而專精誦讀。晝夜不息。妻嘗之田。曝麥於庭。令鳳護鷄。時天暴雨。而鳳持竿誦經。不覺淹水流麥。妻還怪問。鳳方悟之。其後遂得名儒。

嗜學從來聞鳳久。研精豈是護鷄難。持竿已忘持竿趣。意在書林不在竿。及第。

澄明重光一度及第。不勝欣喜。書詩相賀。

江相公

幸遇明時恩不訾。併名拔萃兩家兒。人言窓雪將三葉。桂許門風各一枝。忽見撫駒嘶破壁。更憐養笋透踈籬。老牛蹄□漏無用。舐犢歡餘涕似靡。

賀營秀才獻策登科。不堪欣感。贈以長句。

待詔初趨金馬門。道開還喜古風存。孫謀維見

三年面。祖業應驚四代魂。紅桂枝高分種久。青錢價躍買聲喧。求賢重放先賢後。繼絕寧非聖主恩。君以累代儒胤。擢補秀才。今果登。故有此興。

余近賀菅秀才登科。不勝助喜。敢綴老爛。酬和之詞。韻高調奇。情感難抑。重以吟贈。

江相公

東西雖異本同門。予祖父相公。天長年中。受業於君高祖京兆尹。承知之初。東西別當。各自名家。累代通家道尚存。八斗才多稱器量。九升情動惱夢魂。窓螢役了辭應退。梁燕惟新賀自喧。我已晚齡君始壯。忘年共契報朝恩。

對策及第後。伊州藏刺史以新詩見賀。不勝恩賞兼述鄙懷次韻。

菅淳茂

窮途泣血幾兼秋。今日歡娛說盡不。仙桂一枝攀月裡。儒風四葉壓人頭。我心似脫重羶苦。君賞勝封万户侯。魂若有靈應結草。遺孤繼絕豈無由。予昔蒙先君遺戒。中不廢家業。今自入都至揚庭。皆右相府之一。故叙報恩之意。以答本詩卒章。

暮春賀藤才子寮試及第。花下命酌。

江相公

口畔懸河涉漢深。春衫拭盞就花陰。外人傾耳猶添愛。況是堂中父母心。

落第。

落第後簡吏部藤郎中。

善宗

被病無才頻落第。明時獨自滯殷憂。青山不拒爲僧去。白社那妨作客遊。水菽難供違母色。田園已賣失孫謀。如今干祿君知否。轍鮒何須江漢流。

筆。

贈筆呈裴大使。

江相公

我家舊物任英風。分贈兼歡意欲通。縱不研精多置牖。猶勝伸指漫書空。毫含斐誕松烟綠。管染湘妃竹露紅。若訝本從何處得。江淹枕上曉夢中。

武部。

弓。

文選竟宴詠句賦卷帙奉盧弓。

清滋藤

忽自烟塵起遠戎。獨收黃卷奉盧弓。辭窓更  
通胡山月。拋簡猶隨越竹風。勝上揚名忘射  
鵠。蕃中擁旆罷揮虹。一文一武俱迷道。爲我  
邯鄲步漸窮。

扶桑集卷第九

右扶桑集以立原萬本按合



群書類從卷第一百二十七

文筆部六

本朝麗藻 卷首闕

三月三日侍宴同賦間柳發紅桃應製。

以春爲韻。

伊周儀同三司

三日花朝和暖辰。紅桃間柳發粧新。烟濃纔透綏山月。黛動半藏曲水春。碧玉簾中裁錦妓。青羅帳後舉燈人。震遊如舊群臣醉。醉意詠歌魏代塵。

暮春於右尚書菅中丞亭同賦閑庭花自

落。以心爲韻。

江以言

送春花下一相尋。自落閑庭助醉吟。脆是天爲人散地。飄非風意鳥馴林。遊塵紅定蹊初合。行履珠歸跡半深。徒見多年開復落。今年初識

有芳心。

七言。暮春於白河同賦春色無邊畔詩

一首。以情爲韻。

源孝道

白河院者。城東第一之山莊也。積九峯於華岳。十其峰而化成。鄙百木於銑溪。千其木而列樹。蓋風月勝賞之家。春秋耻醉之地也。是以左親衛藤次將。與同志者五六輩。命駕於此。誠有以哉。觀夫春滿乾坤。色無邊畔。煙霞幾程。秦城萬雉之固豈隔。光陰不限。周王八駿之蹄難追。遂使桃李之爲封疆也。不言之化遠被。詩酒之作家鄉也。無何之境難辨者乎。次將職勤營部。雖講武備於豺虎之群。志在詠詩。猶

伴文章於龍鳳之客。今日之會感其義也。孝道  
老年前吏。才薄詞疎。榮蕪塵深。雖類史雲之舊  
跡。草澤春吟。猶仰聖日之恩光。慙接芳遊。謬  
爲唱首云爾。

春色眇焉處々生。望無邊畔幾多情。天涯不定  
煙霞外。海角難分景氣程。四面紅花風豈限。寸  
眸綠草境難名。莫嘲乘醉沈吟苦。王澤盛中樂  
太平。

暮春陪都督大王<sup>敦道</sup>遊覽法興院同賦庭花

依舊開應教<sup>以春爲韻</sup>

源道濟

家移爲寺謝<sup>嘉塵</sup>。依舊花開憶主人。芳意寧  
將前日異。濃粧或有每年新。容輝樹老雖非  
昔。雨露恩遺不忘春。宜矣大王臨望處。今朝思

昔動精神。

林花落灑舟<sup>以風爲韻</sup>

左相府<sup>道長</sup>

花落林間枝漸空。多看漠々灑舟紅。夜維桃浦  
飄紅雨。春艤柳堤送絮風。范蠡泊迷霞亂處。

子猷行過雪飛中。更耽濃艷暫停棹。興引鎖  
爲吟詠翁。

同前。

江以言

春暮林花枝漸空。紛紛散落灑舟中。棹郎忽恠  
黃頭雪。畫鷁應迷繡羽紅。粧勝郭家歸路日。榮  
嘲傅氏濟川風。池亭頻侍華筵末。枯幹先歡道  
欲通。

同前。

高積善

花滿林梢映碧空。落來片々灑舟紅。行裝被  
染經波處。遠色猶隨去岸中。漁父棹歌應白  
雪。商人錦纜任青風。此時獨有不花木。折理誰  
能問化公。

花鳥春資貯。

右金吾

花鳥何日聞古今。爲春資貯勝千金。積應能  
散風前色。貪欲相傳露底音。顏景餘糧三月語。  
後句生計一園心。從茲想得非貧素。每見土  
宜任醉吟。

同前。

左金吾

春多資貯足相尋。非管花飛也鳥吟。裁錦惜將風底色。貫珠銜得月前音。林勝茅土三千戶。谷笑華山一萬金。軟語關々頻報處。拾葩還耻不廉心。

同前。

江通直

花鳥有時興味深。三春資貯一園心。生涯被養飄林色。行路不貧出谷音。落蕊封來應萬戶。清歌募得是千金。爲吾未有陽和德。鬢雪甚寒任陸沈。

七言。暮春侍宴左丞相東三條第一同賦度

水落花舞應製詩一首。以輕爲韻并序。

江匡衡

洛城有一形勝。世謂之東三條。本是大相國之甲第。傳爲左丞相之花亭。聖上不忘舊里。再備天臨。始廻翠華。一日禮外祖於當時。今准紫禁。二年移朝議於此地。父泉石增美。雲樂四

陳簾帷添華。庭實千品。整俗倫於龍舟。自調

春波之妙曲。擇墨客於鳳筆。皆瑩夜月之明文。

矣。蓋當曲水之翌日。翫艷陽之風光也。觀夫

落花不閑。度水自舞。遮沙風而宛轉。廻雪之

袖暗翻。過巖泉而婆娑。落霞之琴遠和。至夫赴

節之度無定樣。應聲之體有嬌粧。問根源於岸

口。若出自梨園。出自杏園。任進退於波心。

亦不知趙女。不知漢女者歟。夫勝地傳名以

雖交美。帝后未必生一家之光輝。賢相輔主

以雖世榮。父子未必致萬乘之臨幸。於戲千載

一遇。不光古乎。昔漢高祖之過沛中。賞父老

以擊筑。唐太宗之宴池上。率貴臣而獻詩而

已。臣謬當其仁。粗記盛事云爾。謹序。

君臣宴樂歡游好。落葉亂葩度水輕。霜葉冬題

陪地下。風花春宴近皇明。醉歌得趣桃源路。蹈

舞欲看李邵榮。翰墨寄身頭已白。爲兒未長

動心情。詩原脫。今據家集補。



同前。

左相府

花落春風池面清。舞來庭水伴歌鶯。趁流粧似玉簪亂。逐岸色疑羅袖輕。粉妓易迷飄浦暮。伶人難辨過波程。唯歡此地古今趣。再有沛中臨幸情。

同前。

儀同三司

仙家春暮落花程。度水飄飄舞自輕。艷態應歌遮岸色。奇香待拍踏波聲。雪膚路濕霓裳重。風力橋高錦袖明。鳳輦宴酣方欲幸。可憐沛老狎恩情。

同前。

左金吾

洞中今望落花明。度水舞時俗眼驚。應下粧樓飄岸處。似翻羅袖映波程。雙行蝶導流心動。送曲風來浮艷輕。爲倩陽春新調奏。宮商自有治安聲。

同前。

左金吾

韶樂非唯麟鳳驚。落花度水舞方輕。玉簪初動

飄流處。羅袖斜翻過浪程。飛笑粧娃縈岸出。亂隨伶客棹舟行。鶴遊蝶戲應同意。率舞皆知治世聲。

同前。

源明理

落花漫卜洞中晴。度水舞來妙曲粧。飛過沙風紅袖舉。亂經岸露玉釵傾。應歌粧脆逐舟去。赴節影翻趁浪行。溫樹今迷迴雪色。梨園佳妓欲相爭。

同前。

紀爲基

度水落花影又清。舞來唯任緩風聲。玉粧過浦簪先動。紅艷起波袖自輕。兩岸臺遙移節裏。長橋路遠應歌程。林池勝趣春方暮。寒木欲期何日榮。

同前。

源孝道

仙家春暮落花盈。度水舞來變態輕。紅袖濃葩遮浪處。羅裙彩艷過流程。岸應妓樹砂風送。林是粧樓浦月迎。二十年前重侍宴。淺緋未改

白頭情。

同前。

橘爲義

洞裏落花令眼驚。紛紛渡水舞猶輕。霞應羅袖經流處。鸞是鳳釵過浪程。赴節斜遮沙月色。廻臺被送岸風聲。何唯芳樹浴恩澤。二十年前花下情。

同前。

藤爲時

花前春暖鳳池清。落盡舞來度水程。分岸粧奢風漸送。上橋簪動月相迎。飄起石瀨紅裙轉。散過波塘玉履輕。此地猶應眞勝地。宸遊再奏九韶聲。先年有臨此地。故獻此句。

同前。

藤廣業

洞中花落望相驚。度水紛飛舞自輕。亂似婆娑經浦後。散如宛轉過波程。葩翻紅袖砂風送。句曳羅裙岸月迎。此地勝形人識否。鸞輿再幸有歡情。

花木被人知。以名爲韻。

中書王昇平

年齡稍邁減詩情。被誘鄒枚一句成。應笑久拋風月賞。桃李之外忌花名。

同前。

江以言

春天花木富芳榮。自被人知得擅名。何處未承霞養色。誰家不審鳥呼聲。句同唐帝專房女。粧笑秦聲一里兄。莫恨翰林零落去。西園今日接群英。

花色照青松。以春爲韻。

江以言

花色重々德及隣。青松引照假濃春。露瑩不暗含烟暮。霞映猶明凝雨晨。翠竹簾前紅袖透。綠蘿山上月眉新。使君今有芳心屬。零落翰林榮望頻。

花落掩青苔。以閑爲韻。

高積善

院裏青苔藏往還。落花掩布望彌閑。雨初散亂春崖變。風處紛飛古道班。瓊粉誤加粧黛上。綵雲漫鎖碧溪間。踏紅踏雪徘徊久。不識烏輪入暮山。

暮春與右金吾眺望施無畏寺上方。

儀同三司

今日引君出世塵。施無畏寺許交親。情歡偶入烟霞興。官耻俱爲獻納臣。山雨鐘鳴荒巷暮。野風花落遠村晨。此時眺望忘歸路。暫作騰々閑放人。

花落春歸路。以深爲韻。

儀同三司

春歸不駐惜難禁。花落紛紛雲路深。委地正應隨景去。任風便是趁蹤尋。枝空嶺微霞消色。粧脆溪閑鳥入音。年月推遷齡漸老。餘生只有憶恩心。

同前。

藤輔

花落春歸共背心。更遮行路共相尋。風和過處多薰地。鳥老去程漫謝林。媚景臨岐殘雪亂。芳辰按轡晚霞深。光陰冉冉當頭走。一日追歡勝萬金。

夏。

四月未全熱。

左金吾

炎蒸未及惱心胸。便識有時節氣從。千畝麥風秋暗報。一旬萍日暑猶情。試披筠簟還應卷。初製蕉衣半不縫。命飲言詩忘俗境。更嘲河朔昔劉松。

四月八日灌佛詩。

中書王

香湯灌佛喜還悲。沒後重看出世時。願以今朝供一絕。每逢花月解吟詩。

夏夜池亭卽事。

儀同三司

圍棊掩韻及鷄鳴。向老慙慙朋友情。口詠新調千首集。于時於座上披閱銀勝集。故有此興。心歸不斷一乘聲。不斷經年月。漸久。故云。水烟半濕綺羅冷。山月初昇樓閣明。逸樂君家時日事。風流常得到蓬瀛。

雨爲水上絲。以浮爲韻。

源伊賴

如絲雨脚水心幽。終日微々未得休。灑憶氷蠶池上吐。亂疑烟柳岸前浮。繆無定處唯風浪。充是何方任石流。豈只佳遊逢此日。花紅春與月。



明秋。

同前。

藤爲時

暮雨濛々池岸頭。更爲水上亂絲浮。經從潭面  
霑難結。曳自波心脆不留。細灑應爭漁浦藕。  
斜飛欲貫釣磯鉤。誰知流下沈潛客。霜縷數莖  
夏裏秋。

同前。

菅宣義

蕤賓初日雨油々。細脚如絲水上浮。紅女機疑  
移浦口。青州貢誤課沙頭。織從蘋浪輕文案。  
繆任蘆風暗縷柔。應似王言多惠澤。波臣在  
藻樂中流。

池水繞橋流。以情爲韻。

源相公賴定

前池形趣本傳名。流水繞橋入夏清。旅雁一行  
秋漢潔。長虹千里暮雨晴。魚驚左右紅欄影。人  
踏東西白浪聲。此處風烟非俗境。宜哉久契勝  
遊情。

同前。

藤敦信

池上雨收景氣晴。溶々流水繞橋清。廻塘烟裏  
龍鱗暗。枯岸晴前雁齒明。潭泛紅欄南北影。浪  
隨玉履往還聲。每看形勝消塵慮。何必遠求蓬  
與瀛。

絃歌伴月來。

右金吾

具說絃歌伴月程。蕭々來觸脆且清。高調欲踏  
樓中雪。相唱方趣嶺上晴。雲掩秋風吹示至。  
霧披瀧水撫初行。沸天遍使尊卑樂。應笑子游  
昔武城。

數簞待客來。使用來字。

江以言

夏天數簞立徘徊。終日相期待客來。且掃門前  
當月展。預空座右任風開。一條露滑憑言約。  
六尺烟平誠酒盃。珍重相公招引德。不然爭到  
晚涼廻。

夏月勝秋月。

左金吾

月好雖稱秋夜好。豈如夏月惱心情。夜長閑見  
猶無足。況是晴天一瞬明。

清夜月光多。以澄爲韻。

一條  
御製

偶迎清夜引良朋。滿月光多空碧澄。入牖家々添粉黛。照軒處々混華燈。山川一色天涯雪。鄉國幾程地面冰。席上英才宜露膳。由來諷諭附詩能。

同前。

右金吾將軍

從迎清夜月方昇。遠近光多似好朋。四五更天皆粉壁。三千界地盡層冰。樓臺內外無遺見。渠水高低各處澄。照到於同皇德遍。家々爭望得相仍。

初蟬纔一聲。以心爲韻。

御製

五月云來感自侵。初蟬纔報一聲吟。韻情誰有重傾耳。響止空催再聽心。岸柳綠前驚欲認。宮槐風底失何尋。此時莫道天功淺。三伏夏闌滿禁林。

高閣夜涼多。以風爲韻。

江以言

高閣斜排四望窮。涼多暑散夜登中。攀臨靈檻

昏煩息。歷上平臺暗熱空。納月簾瑩迎曉露。連雲燈動先秋風。淒清自遇爲善樂。宋景應慙侍楚宮。

水樹多佳趣。

右金吾

水樹清涼景氣深。自多佳趣助登臨。一千年鶴鑒流思。五大夫松傾蓋心。翡翠成行烟暗色。瑤璃繞地浪清音。歡遊已隔囂塵境。莫語此時漫醉吟。

同前。

源道濟

幽奇水樹足登臨。佳趣太多興味深。沙石縱侵何得汗。枝條方茂好成陰。流清自備聖人鑒。松古唯諧君子心。無限風烟蓮府裏。不思象外遠相尋。

秋花先秋開。以芳爲韻。

中書王

一畝家園映夕陽。秋花驚見先秋芳。紅顏且笑雖侵熱。紛艷猶含欲待涼。子月齊名傳早艷。南風越職領新粧。多年相對還添恨。叢上露疑

髻上霜。

左右好風來。以涼爲韻。

左相府

好風來處慰心腸。左右飄衣夏日忘。橫釵腰間連竹響。續銘座下送荷香。簾帷高捲雙矜動。羅綺閑居兩髻涼。唯樂前池無苦熱。月明白浪疊冰霜。

同前。

橘爲義

一從水閣避炎光。唯任好風左右涼。暮入西牕飄案牘。曉經東戶拂琴堂。先收短袖數行汗。忽動佩刀三尺霜。何必當初河朔飲。池頭今日勸殘腸。

秋。

早秋賦。秋從簾上生。題中取上韻。

中書王

秋至微涼未足驚。初從簾上漸應生。一身暑氣施未去。八尺商風展得清。曉後彌知烟竹滑。日中更愛露花瑩。炎天與汝相親久。莫恨秋深

月自輕。

七夕佳風爲使。以知爲韻。

御製

靈匹佳期素在斯。涼風爲使去來儀。感通鵲翅成橋路。韻訪龍蹄促駕崖。且託歡情飄至報。追傳別恨咽中知。一從蘋末迎秋起。念化自慙未得移。

牛女秋意。

儀同三司

何爲靈匹久相思。一歲唯成一會期。行佩應紐冷靈玉。雙蛾且畫遠山眉。未終秋夜難來意。已至朝雲欲別時。此恨綿々無說盡。蒼茫天水問阿誰。

七夕於秘書閣同賦。織女雲爲衣應製。

以秋爲韻。并序。

江以言

金商七年之候。銀漢二星之期。綺節麗辰之標。名露布於四民之令。詞人才子之傳。頌風羅於萬代之文。聖上裝金殿排石渠。列星位召風人。香粉曉散遙笑。秦城宮掖之雲。玉卷晴披長



嘲周王羽陵之露。盖乃聖範好文。宸旒鑒古之至也。于時仙星增飾。綵雲爲衣。裝居霧帳。相待鵲翅之南北。襲備霓裳。只從龍蹄之去留。至如夫榆風吹兮易亂。桂月臨兮欲晴。〔以下闕文據文粹補〕裁無刀尺。經西母之路而彌縫。染有淺深。逐子高之駕而潤色者也。旣而玉井影上。銅水聲移。醉天尉湛々之恩。乞星躔奕々之巧。以言聚丹蜃而成功。雖歡屬堯日之南明。問青鳥而記事。猶恨暗漢雲之子細。遙隔羽服之化。忽列仙衣之衿云爾。謹序。」

本朝麗藻卷上

本朝麗藻卷下

山水部。

遙山歛暮煙。以晴爲韻。

中書王

迴望四山向暮程。紅煙歛盡遠空晴。谿東唯任殘陽照。嶺上何妨滿月生。紈扇拋來青黛露。羅帷卷却翠屏明。秋深眼路無纖靄。其奈香爐舊日名。

同前。

江以言

眇々遙山幾許程。暮煙歛盡望中晴。遠松正色烏歸見。新月浮陰嵐去明。深帷高褰青黛出。低巾更整醉顏驚。吾王本自久相樂。尼嶺光輝顧盼生。

過秋山。

中書王

清晨連轡伴樵歌。漸上青山逸興多。松嶠煙深迷晚暮。石梁霜滑倦嵯峨。林間尋路踏紅葉。巖畔側身攀綠蘿。三叫寒猿傾耳聽。一行斜雁拂頭過。長安日近望難弁。碧落雲晴何可磨。莫道登臨疲跋涉。人間嶮岨甚山河。

海不辭水。

以深爲韻。

江以言

巨海儀形聞古今。不辭積水遂成深。謂多夏

后奔流漸。論細秋王滴露侵。吞閱渭波涇浪色。

納傳一日再湖音。朝宗有信未知飽。涯岸無厭

何處尋。坎位當仁宜自得。坤靈與化好相歆。三

廻九折東西路。江月漢雲曉夕心。萬國應歸南

面德。衆星猶拱北辰陰。拙詩述叙滄溟趣。更執

玄虛舊賦吟。

晴後山川清。探得遊字。

左金吾

山霽川清景趣幽。近望雨脚對東流。嶺摸毛

女唯青黛。浪伴漁翁自白頭。雲霧靄收松月曙。

菰蒲煙卷水風秋。云仁云智足相樂。宜矣登臨

促勝遊。

同前。深得添字。

善爲政

晴後遠尋勝地占。山清川潔色新添。潭心月映金

波漲。嶺面雲開翠黛纖。松鶴唳翎高歌舞。藻魚

掉尾入難潛。君多智仁長相樂。此處誰嫌久

滯淹。

與諸文友泛船於宇治川聊以逍遙。

儀同三司

篋筌蘆廬宇治川。泛然相憶古神仙。清談緩發盃

初匣。緩騎遲來棹未前。模嶺晚雲紅慘澹。落灣

秋水白潺湲。林南柳樹將軍宅。村本深草西岸有一舊墟。臨河有楊柳兩三

株。人傳天慶征東使終焉之地也。江相公詩云。只看小暗宅邊前。柳謂此乎。

橋北稻花帝王田。宇治院臺樹已毀。只有點田。波勢湯々巴峽路。風聲颯々洞庭

天。山河奇絕詩人記。土地苞茅里老傳。朝位共

趨鸞鳳闕。野遊同宿釣魚船。壽夭否泰非吾

意。唯誦莊周第一篇。

夏日陪於員外端尹文亭同賦泉傳萬歲

聲詩一首。以送爲韻。并序。

江以言

夫楚金風胡之利。豈非資砥礪之功。吳桐煙越

之材。且猶待彫斲之力。人之好學。其義在斯。

是以員外端尹。以左丞相之家督。定居東閣。引

梓材於群英之中。學步北闕。相期槐路於累葉

之下。於戲魯公者周公之嫡嗣也。霍禹者霍光之

長男也。漢家襲封之後。慙蒼頭於黃山之雲。齊

國政之中。責北而於東海之月。積善餘慶獨冠。古今者也。今屬泉聲之傳萬歲。始動風情之備六義云爾。

山呼萬歲空無識。水號千秋未足要。唯有泉聲新引得。相傳萬歲一家送。

同前。

藤爲時

人年萬歲傳何處。一道飛泉遶石橋。漢主若知家主意。山聲定愧水聲遙。

佛事部。

見大宋國錢塘湖水心寺詩有感繼之。

源爲憲

錢塘尋寺幾廻頭。見說煙波四望幽。精舍新詩應日想。白家舊句欲心遊。湖中月落龍宮曙。岸上風高雁塔秋。法界道場雖佛說。恨於勝境自難求。

同諸知己錢塘水心寺之作。本韻。

左金吾

錢塘湖上白沙頭。四面茫茫樓殿幽。魚聽法音應踊躍。鳥知僧意幾交遊。春風岸暖苔茵舊。暑月波寒水檻秋。已對詩章諳勝趣。何勞海外往相求。

酬和前遠州繼大宋國錢塘西湖水心寺詩之什。本韻。

源孝道

聞說錢塘對嶺頭。中占地勢寺亭幽。樓臺淨土新形趣。風月樂天昔宴遊。白浪傳聲湖面舊。紅林倒影水心秋。每看勝境在詩句。恨隔雲濤不得求。

晚秋遊清水寺上方。

左相府

清水寺深東嶺頭。暫辭塵境草堂幽。雲端鐘響逐嵐去。澗口泉聲穿石流。禮佛獨憐霜葉老。伴僧同入暮山秋。輪廻世々纏煩惱。今仰大悲豈有愁。

同前。

有國勘解相公

秋遊多被上方牽。清水寺中古洞前。路僻遙登



巖桂月。梯危斜度澗松煙。真心偏得逢千佛。俗骨還如到半天。從此塵機長斷盡。生々世々結來緣。

冬日宿法音寺各言志 江以言

近日相期此寺中。此霄相宿思方空。先言不信夏侯芥。雙鬢漸梳商老蓬。抱節還傷松竹雪。繫緣遙結悉檀風。有時候得好文日。姑識是吾運未通。

秋日遊東光寺各成四韻

善爲政

樓臺竹樹目高卑。此寺由來地勢奇。籬下寒花紅錦繡。池中秋水碧瑠璃。茶煙纔出山厨寂。松月遙昇岫幌垂。今日相尋偷願望。雲泉無厭我初知。

晚秋遊彌勒寺上方 源孝道

秋尋蕭寺陟高岡。攀樹踞巖只眺望。塵境心悲虛澗水。禪門徑踏半天表。巫陽有月猿叫。

商嶺無雲雁一行。日暮入堂偏念佛。生涯毀譽任家鄉。

禪林寺眺望 源道濟

一尋古寺到城東。靜立上方四望通。紅樹重重寒雨後。煙村處々夕陽中。塵勞欲洗胷波水。毀譽不來耳界風。自是宜隨無滌結。永拋俗累出樊籠。

石山寺小池蓮 源爲憲

寺鑿小池蓮正迸。與人間草不須論。經爲題目佛爲眼。知汝花中殖善根。

歲暮遊園城寺上方 江以言

歲暮偶尋山寺登。蕭々四望感相仍。鄉園迢遞令雲隔。林草彫殘被雪凌。風澗寒時掛綠桂。石橋滑處杖紅藤。松門親友昏看鶴。花路遠雞曉聽蠅。共引霜臺歡會客。初逢雲洞薜蘿僧。風情忽發吟猶苦。日脚漸斜去未能。泉戶草殘寒雪厭。山厨茶熟暮煙興。懺來累業眼前結。除却塵

勞言裏凝。學路虛名慙。夜月官途寸步踏。春水欲歸延佇及昏黑。遙指河西一點燈。

七言。冬日於雲林院西洞同賦。境靜少人

事詩一首。以餘爲韻并序。

源道濟

雲林院西洞。天下奇地也。本雖孕地之異勢。猶

未加人之潤色。往年定閣梨初來爲主矣。彫雲

以架經藏。籠月以裁佛座。疏方流而貯泉脉。

江鳬海鷗萃止其間。環小山而籠煙嵐。奇卉

靈木黼藻其下。內以備高深之事。外以極廣望

之趣。春風秋月好事之者無不遺賞焉。筭室煙

絕。金河波枯以來。鳥雀皆含愁雲之影。草樹盡

帶悲風之聲。戀慕之至也。况復歲暮而多情感。

境靜而少人事。寂々紙窓之中。禪侶誦分只微

音。漠々沙堤之上。仙禽眠兮不鼓翅。至於松軒

幽而塵客稀來。蘿洞深而香火纔點。煙霞其興

則身遊無何有之鄉。水月其觀。只心入空假中

之道者也。于時我黨之英都盧四人。雖偷出洛

城。遠尋風流之幽趣。而一入古寺。共動舊故之悲端。于嗟往其所思其人不出宜乎。請記今日之大概。將爲當主之小緣云爾。亦一辭塵巷入烟霞。乘興不知往反賒。境靜人稀無俗事。松風颯々日方斜。

七言。暮秋勸學會於法興院聽講法花經

同賦世尊大恩詩一首。以深爲韻并序。

高積善

暮春暮秋十五日。緇衣白衣四十人。講法華。呀

文藻。名曰勸學會矣。〔4无〕近世以降。會衆之鐘不

聞。赴期之客無音。月輪像前講筵。空倚曝露之

冷壁。天台山下詩境。還爲望雲之故鄉。廢絕之

趣自然而然。方今位〔依1〕祖〔稱1〕構者不幾。僧俗纔五六

人。適遇洛陽中。議以復舊之計。僉曰。本堂破以

不繕。無處相期。行路遠而有煩。誰人必到。况

乎九州之地。遞有盛衰。當其衰也。其事不建。

安知此會之所廢不須復。其去之令然。沈吟而



日月漸久。終入左相府之聽。相府觸事重舊風之欲墜。每道戒先祖之可傳。許此院以繼我會。依鴻恩以事雁王而已。遂使世尊之有大恩。我等之無一報。銜珠以有何由。已繫內衣之間。粉身以可不足。忽得中道之理。頂戴之志不可測量者也。既而清景難遇。佳期可知。汝南備雞之家。范張唯二友。城東讚佛之席。風月是幾聲。積善競宿露。以誦一乘之文。屬落日。以繫九品之望。歷閑官而多暇。朝暮之薰修漸積。顧殘涯而少歡。山林之素意屢驚云爾。

同前。

勸解相公

勸學會中聽法音。世尊未報大恩心。以虛空較空猶狹。樹巨海論海豈深。圓頂戴來難思議。兩肩荷負不堪任。春秋十有九年後。此會中興契。

古今。

探得富樓那。

俊賢  
源納言

出從釋氏富樓那。字是滿江意幾多。知惠風高詞卷霧。辨才浪涌口懸河。慈悲內契應由我。利益外情似忌他。第一名聞三世久。生々展轉在娑婆。

秋夜對月憶入道尚書禪公。

源爲憲

去年尋君談話夜。飛香榭東秋月明。今夜憶君端居夜。教業坊中秋月清。一虧一盈月相似。時去時來人不同。當我衰鬢難辨白。入君觀念應覺空。何事閑對得相憶。員外官冷無所營。定知山月吟遲來。行年比君二年兄。

贈心公古調詩。

中書王

少日受君業。長年識君恩。不嫌我才拙。頻垂師訓惇。交情深。淡水。操行染蘭蓀。秋同開月戶。春共入花園。看雪松下閣。避暑竹陰軒。結



契年幾改。十五變寒溫。逐年心彌固。金石何足言。相見期終世。何似水上鴛。一面歡忘憂。不用堂北萱。君已爲儒士。對冊上龍門。丹穴招鳴鳳。滄溟驚臥鯤。風煙賞翫處。沈恩琢璵璠。吟聲寒玉振。筆跡黑龍翻。公爲內書作自書。氣擬相如賦。理過桓子論。韻古潘與謝。調新白將元。博達貫今古。識鑒洞乾坤。終觀身幻化。長避世囂喧。禪坐一巖戶。山深僻民村。君我相別後。漸以累晨昏。形臧猶在目。戀慕幾動魂。林中拋風景。袂上點淚痕。收淚倩思量。遠哉君心源。人皆營榮利。擾々復惛々。上求三公位。下欲五馬轅。夜使筭財產。明也東西奔。入家憐妻妾。奉公爲子孫。晚歲方富貴。食飽而衣溫。貪欲所積集。錢帛似雲屯。奴婢曳羅綺。歡宴列疊蹲。庭院山水遙。林叢錦窠繁。秋露一朝殞。長入那落燐。籠中有飽雉。寮中有肥豚。少分生前樂。万劫後世煩。莫着夢花色。可畏邪棘蕃。雖道諸佛

力。不結斷惡根。譬猶日月光。不能穿覆盆。君已割恩愛。解纓入丘樊。慈悲覆法界。戒行爲化勤。我幸出皇胤。襁褓列于藩。衣食涯分足。虛閑方寸存。生□持妙法。菩提欲攀援。余有生々誡教化衆生之願。常隨君前後。宛如弟與昆。願共生極樂。公在俗之日常念佛。言談之際合衆。公在俗之日常念佛。言談之際合衆。公在俗之日常念佛。言談之際合衆。願共謁慈尊。公在天台源公。修值遇慈尊之業。予適預之。相次入地獄。罪人盡平反。分身隨鬼畜。忽解楚痛冤。世々爲師弟。遊化生死原。處々蒙教勅。施與法喜飡。縱盡未來際。此語誓不諼。

憐戶部出家。

應和右丞相之侍婢也。

儀同三司

撫簪昔戲紅樓上。對鏡今愁白屋中。盛者必衰新見取。剝除霜鬢出塵蒙。

近來播州書寫山中。有性空上人者。誦法華經爲事。寤寐不休。天台源公聞其高行。遠尋相見。緇素結緣者。寔繁而有徒。予傳見諸讚聖德詩。顧身恨障礙多緣。未

遂頂禮令綴拙什聊結緣

中書王

寂寥山中坐禪師。一乘蓮華能憶持。掌底鐵針出

胎日。上人出胎手拳。父母怪開之。有二鐵針云々。經中白米絕糧時。事見

本詩。妙文暗記眠猶誦。法力冥薰良未衰。上入春秋而猶有光澤云々。虱去都應身淨潔。禽馴只爲意慈悲。雖

歡同代聞來久。更恨終年面拜遲。縱使眼前

無見我。猶勝耳外不知誰。豈非今世述君美。

便是當來讚佛詞。再拜西方遙寄語。慧光早照

我愚癡。

神祇部

神祇部

竹生嶋詩

高積善

靈嶋聞名遙寄懷。秋風尋到立徘徊。老松古栢

相重插。怪石奇巖似欲頽。行雨終朝連水見。低

雲薄暮抱山廻。有神此上歲年久。天下剗誠任

浪來。

三月盡日陪吉祥院聖廟同賦古廟春方

暮各分字詩一首

探得分字并序

江以言

廟基祐兆。欲百年之間。家業繼塵。及七代之

後。吏部大卿相公。當三月之閏餘。乘五日之休

暇。懷故事於廊下。惜春輝於廟前。於是貫首弟

子大長秋納言。其餘受賚銜業之者。左圓右方

之倫。歷中露從下風。濟々焉。煌々焉。以助聖

廟之威儀。以貢聖廟之風月。盖有以矣。相公榮

昇伊第。高步十六行之中。材切辛君。永加三

十徒之首。卽以槐市之棟梁。遂爲棘路之翹楚。

豈非先廟之餘慶延及一家之後胤哉。方今芳

年已盡。花月將窮。百花亂落。叢祠之雪難留。一

日已斜。栢城之雲漸暗。彼伍子江之波。徒揭五

葉之聲。仙母山之花。空開九株之色。未如吾靈

廟。金策頻加。樹人位於夜臺之後。素功遂立。忝

靈望於日域之中。方配大祖之食。永傳胎孫之

慶焉。既而春夜欲明。望牛漢之西轉。夏日告



朔招象魏而北轅。以言性是愚魯。雖慙雁雲鳥イ之嘲。志猶思齊。未拋螢雪之業。一生只樂道腴。万事自任。廟意于時長保。元年閏三月二十九日。聊記大概。繫廟籍之卷末云爾。時置犧樽石鳳文。送春今宴。廟門雲。一門自有千年會。遮莫花飛後鳥分。

七言。九月盡日侍北野。廟各分一字詩一首。探得□字。并序。高積善

夫形者百年之旅館也。名者万代之嘉賓也。西狩以後。弈世聲塵。猶揚魯門之風。東征已來。幾年德輝。高懸漢家之日。如我聖廟。不其然乎。聖廟舊花可知。兼佩將相之印。末葉作鑒。忝顯詩書之功。況乎文學爭鋒之初。一家方享邦國之大名。雲雨裝駕之後。餘裔猶爲風月之著姓。補正今之吏部相公。是其四葉孫也。相公久樂祖宗之道。槐棘踏陰。多仕文武之朝。星霜在首。昔受任於海西之府。誠求拜其先靈之神。今設宴

於城北之祠。豈非講其先靈之德。當其觴爵行而座方酣。絃歌進而曲將罷。相公顧曰。景物之感窮於秋。古人以爲一歲終。愛賞之思迫此日。風俗以名。九月盡。前輩之深於詩者。觴其萬緒之時也。禮云。志之所至。詩且至焉。詩之所至。禮且至焉。今日賽於庠庭。宿昔之志而已。於戲黃公神。之受筆硯。文章落自前軒之雲。劉君仙之歸煙霄。青松老於故溪之月。情感之源。古今通浪者也。積善出懷宗以慕義。顧殘涯以祈恩。榮路遙而雖期。青陽薄寒木頂。筆耕疲而未獲。秋風暴虛苗之畦云爾。

同前。寒字。

藤爲時

時隨冠蓋認祠看。新樂鋒鏑古□寒。非管玄孫成盛集。九重天子促金鸞。

同前。通字。

源孝道



管絃商曲將秋暮。詩酒新聲與古通。靈廟本爲風月主。宜哉明德滿蒼穹。

海濱神祠。住吉祠。

藤爲時

晴沙岸上暮江千。鬱々林蘿陰社壇。應是神心嫌苦熱。浪聲松響夏中寒。

山莊部。

暮秋於左相府宇治別業卽事一首。

左相府

別業號傳宇治名。暮雲路僻隔華京。柴門月靜眠霜色。旅店風寒宿浪聲。排戶遙看漢文去。卷簾斜望雁橋橫。勝遊此地猶難盡。秋興將移潘令情。

同前。

拾遺納言

一尋別業許相從。賞翫風流到下春。交淡偏宜廻砌水。契堅最好拂軒松。門前秋導三巴峽。窓裏暮迎五老峰。此地勝形聞相者。濟川舟楫繼先蹤。

同前。

源孝道

河水橫西山峙東。王程頗僻洛陽宮。煙霞奴僕尋常物。泉石資儲造化功。庾信園非山境月。陶潛家隔相門風。如何別業幽奇地。主客公卿會此中。

偷見左相府宇治作有感。

中書王

聞說山家素得名。風流超過漢西京。樵夫路近談王事。漁父歌閑慣雅聲。白浪頻翻秋雪亂。紅林半透暮雲橫。一吟佳句讚遊樂。初慰終年寂寞情。

白河山家眺望詩。

左金吾

郊外卜居塵事稀。迢々春望思依依。荒村日落煙猶細。遠岫雲幽鳥獨歸。來去旅人行眼路。淺深花錦織心機。蓬居雖耻仙郎到。愁命詩篇惜晚輝。

題玉井山庄。在和泉國云々。

藤爲時

玉井佳名被世稱。松楸半接碧巖稜。山雲繞舍應褰幔。澗月臨窓欲代燈。梅發寒花朝見雪。水收幽響夜知冰。池邊何物相尋到。雁作來賓鶴作朋。

閑居部。

閑居無外事。

源道濟

閑居謝遣繫簪纓。況亦更無外事營。得意詩朋懸榻待。趨權軒蓋過門行。性情唯見籬花色。官冷不驚衙鼓聲。身適自由依卜靜。追嘲奔走買虛名。

門閑無謁客。

藤爲時

家舊門閑只長蓬。時無謁客事條空。翟公去尉塵長息。袁氏安貧雪不通。草舍闔生秋露白。苔封扉帶夕陽紅。久忘倒屣送迎禮。別作洛中泰適翁。

閑中日月長。

江以言

閑中氣味屬禪房。唯得自然日月長。幽室浮沈

無短晷。陰居隣里有餘光。陶門跡絕春朝雨。燕寢色衰秋夜霜。我是柴扉樗散士。閑忙苦樂兩相忘。

帝德部。

瑤琴治世音。

探得遙字。

御製

初識瑤琴佳趣饒。契唯治世思猶遙。無爲化出南風曲。有道心聞子野詞。撫似養民聲更理。張如布政操相邀。從他樂府清絃上。至德深仁幾聖朝。

感減四分之一之詔一首。

源憲爲

減服御常膳物。

明王濟世幾多功。遍代疲民事儉恭。御府奇文應減製。天厨異味不要重。堯年水溢多愁沴。湯日旱炎自弃農。聖代難逃天定數。何爲責己慕時邑。

減諸國今年調庸及租稅。

王澤旁流及八區。曩時擊壤豈相殊。紫泥文出

仁風動。黃紙詔傳惠露濡。宰吏無徵貪戶稅。官家不納廢田租。九重深處得知否。比屋黍元掩泣娛。

仲秋釋奠賦萬國咸寧 勸解相公

明王孝治好君臨。天下和平冠德音。草遍從風南面化。葵遙向日左言心。山拋烽燧秋雲暗。海罷波濤曉月深。請問來賓殊俗意。茫茫天外遠相尋。近日大宋溫州洪州等人類以歸化。故有此興。

仲秋釋奠聽講古文孝經同賦天下和平

源爲憲

萬國咸寧仰聖君。便知王德及飛沈。苞茅鎮入朝天貢。葵藿斜抽向日心。棧遠都無雲鑠色。航忙豈有浪驚音。中華彌遇堂々化。想像遐方各獻琛。

法令部

七言。夏日於左監門宗次將父亭聽講令

文一

詩一首。并序。

江以言

夫法令之興。其義遠矣。五祇含而裁成。萬靈稟而鎔範。順之者安。逆之者危。秦皇帝之慘虐。繁文酷秋荼之霜。漢高祖之寬仁。三章垂春竹之露。誠乃政教之門戶。理亂之樞機者也。我國家已自推古之聖朝。下迄養老之寶曆。上下三四代之間。增損屢悛。章條數十篇之裏。修撰甫就以安四海之波瀾。以定一天之防禦。是以我聖主降勅。促披講於宸位之前。或賢臣專精。受奧義於南面之下。近世以降。編竹不開。童蒙之煙漸暗。帶草歎朽。師說之風無傳。次將累一家之風葉。宣五代之雲英。才德掩古。正軌躅於左車之塵。敏思照今。馭街勒於右馬之水。於是欲令之必行。傷學之不講。掃幕下而開大座。飭席上而競分陰。遂命御史藤少丞。講誦斯文焉。如鐘鼓之在懸叩而有音。似刀劍之出剴割而無滯。當于斯時。生徒發問之者。朱紫提耳之倫。飛軒高蓋風吹于公之門。義實文華水



淡君子之席。於戲不登泰山者不知天之高。不臨深谷者不知地之厚。若今日不預此座者。豈知今典之爲大矣。于時長保元年六月三日。禮部侍郎以言。披三尺而初學。推一寸而愍記云爾。

講席偶牽儒學中。數篇法令聽于公。撫民基趾開東閣。體國權輿出上宮。三尺竹踈隆漢露。万方草動有虞風。猶歡結契弟兄義。得使多年深意通。

書籍部。付勤學。

書中有往事。以情爲韻。

御製

閑就典墳送日程。其中往事染心情。百王勝躅開篇見。万代聖賢展卷明。學得遠追虞帝化。讀來更耻漢文名。多年稽古屬儒業。緣底此時不泰平。

偷見御製有感自以次本韻。

中書王

齡傾性嬾學荒程。偷見天章更徵情。編次三千憑馬史。宣傳二百屬丘明。便知上聖如交語。莫道前賢但聞名。漢帝文花唐帝筆。擬於陛下蟻封平。

重有。

御製

万機餘暇閱書程。自省還傷治世情。鑒古多無聖德。當時又歎不皇明。志深縱樂先賢道。性拙年同往哲名。神筆雄文何比我。彼臨學海浪猶平。

奉讀重押情字御製不堪扑舞敬押本韻。

中書王

天然未必得功程。詩帝兼容草聖情。直氣充朝星宿聚。德輝照世日居明。玉鸞寒響皆依禮。蒼鷄新煙不爲名。忽戴君恩還自耻。風聲猶減漢東平。

冬日陪於飛香舍聽第一皇子始讀御注孝經應教詩一首并序。江以言

易曰。君子學以聚之。問以弁之。蓋乃所以雖有至德要道。非學不宣。雖有生知幼敏。非教不立之故也。夫崑陰之竹凌雪。待聖造而吹。龜背之音。嶧陽之桐干雲。遇良工而張。鶴翼之曲者歟。是以今皇帝第一皇子。初受御注孝經於吏部員外侍郎江大夫矣。皇子月中謝智。山下擊蒙。遂發此五更之問。將撫彼千載之運。漢代祖之有鼎副。慙曩史於千歲之塵。唐高宗之得鍾愛。傳古文於七年之風。在今思古。知有以焉。既而講誦儀畢。觴詠禮成。卿士之侍溫顏。宜承堯日之長照。絃管之奏妙韻。便添舜風之近薰。于時寬弘二年十一月十三日。翰林學士以言。蒙辭命。叙事緒云爾。

人倫高行無先孝。皇子執經幼學間。從此已知吾道達。  
出自尼山。

同前。 左相府

我王今日問微言。學得先知敬至尊。何忘兔園

朝夕志。自蒙君命不殊孫。

同前。 儀同三司

經傳百家多異說。微言被世古今聞。老臣在座私相語。我后少年學此文。

同前。 左金吾

今日天孫初問道。欲廻聰悟就研鑽。聖明治跡何相改。貞觀遺風觸眼看。  
唐太宗使諸王皆就學。故云。

同前。 源納言

珠得琢磨金待鍊。人情從教亦如斯。我王道問偏依禮。至孝自然生即知。

同前。 吏部侍郎

頽齡八十有餘霜。未見神聰似我王。遺老愚言君記取。一經造次不應忘。

同前。 江匡衡

呂望授來文武學。桓榮獨遇漢明時。幸傳延喜祖風跡。天子儲皇皇子師。  
延喜聖代。祖父爲大師。爲東宮學士。兼復授第十一皇子。皇子即天慶聖主也。訪之漢日本朝。未有三此比。今日有三情感。故獻此句。

同前。

菅宣義

天孫初折天經義。孔父舊章唐帝心。忽感神聰多孝行。定知四海悉曾參。

賢人部。

七言。早夏陪宴同賦。所貴是賢才。各分一

字。應製詩一首。

探得藤字。并序。

江以言

臣謹按月令曰。是月也。天子帥三公九卿大夫以迎夏。還反行賞。封諸侯。無不欣說。又曰。乃命樂師習合禮樂。贊傑俊。遂賢良。夫然。天子之馭民。順四時而宣布。月令之垂世。分百行而旁羅。我后張此一日之樂懸。協彼四月禮法。蘭陵竹園之驚貴命。嘲齊雲於二十餘之閑居。露槐風棘之備威儀。編堯日於十六族之未仕。于時所貴賢才。所待登用。散卒降虜之士。貂蟬傳七葉之風。芻牧賈胡之家。出步入五華之月。至如夫衣服之頒領袖。門戶之資樞鍵。齊桓公之得道左矣。便商頭牛口之足夫。周文王之載

車右焉。亦猶渭陽鶴髮之賤老者也。既而絃管曲罷。詩酒興酣。唐太宗之思鶯語。金殿之月眉傾。魏深彥之應鳳銜。瓊戶之花粧舊。以言多年遇崇聖道之德。空雖吞漏聖化之愁。今日仰貴賢才之化。悔還無遺棄愚才之恨。遙望仙殿。長慕隗臺云爾。謹序。

聖代猷尤足稱。賢才是貴碩聲興。礪溪跡去雲空宿。傳野道開月獨昇。春岸釣拋忘綠草。朝端齡老杖紅藤。庸材幸接仙材末。但喜孜孜道正弘。

同前。都字。

中書王

先貴賢才非一途。功成理定不須臾。張公暫入終安漢。陸氏相傳久輔吳。至性過人宜作寶。餘輝照物重於珠。松喬莫咲風儀濫。今日新仙詣玉都。

讚德部。

和高禮部再夢唐故白太保之作。



中書王

儀同三司

古今詞客得名多。白氏拔群足詠歌。思任天然  
沈極底。心將造化動同波。中華變雅人相慣。  
季頽風體未訛。我朝詞人才子以白氏文集爲視慕。故承和以來言詩者皆不失體裁矣。  
再入君夢應決理。當時風月必誰過。

同前。

藤爲時

兩地聞名追慕多。遺文何日不謳歌。繁情長望  
遐方月。入夢終踰万里波。露膽雖隨天曉隔。  
風姿未與影圖訛。我朝口慕居易風跡者多圖屏風故云。  
仲尼昔夢周公久。聖智莫言時代過。

夢中同謁白太保元相公。高積善

二公身化早爲塵。家集相傳屬後人。清句既看  
同是玉。高情不識又何神。白太保傳云。太保者是文曲星神。而相公未見其  
所傳風聞在昔紅顏日。余少年時先人對余以常談元白之故事。  
鶴望如今白首辰。容鬢宛然俱入夢。漢都月下水煙濱。

客有圖嘗孟君像以詩讚其德者矣。余  
昔讀史記知四君之爲人。同成四韻加篇末。

相門有相事无空。田代常爲六國雄。名門諸侯  
傳薛立。謀謔下客入秦宮。樓臺在昔綺羅月。同  
里至今任俠風。豪傑人々雖景慕。□憐冢上牧  
羊童。

詩部。

夏日同賦未飽風月思。深字。

儀同三司

風月結交非古今。相思未飽每年心。感時无  
止吹花色。逢友應永出霧陰。文路春行看不  
足。詞江秋望老彌深。美哉丞相優遊趣。詩酒興  
中聞法音。于時世講問。故有此興。

同前。

左金吾

何事詞人未飽心。嘲風哂月思彌深。嗜殊滋  
味吹花色。滴似詞飢落水陰。翰墨難乾蘋未  
浪。襟懷常繫桂華岑。一時過境无俗物。莫道醺  
々漫醉吟。

同前。

源則忠三品

風月自通幾客心。相携未飽思尤深。文場猶嗜  
照窓影。詩境更耽過竹音。幽谷春遊誰作足。高  
樓夜宴久難吟。此時獨恨无才用。其奈抽簪  
入暮林。

同前。

江以言

由來風月思沈々。遇境方知未飽心。到老恨遺  
朝不倦。逐時癖在弄彌深。起家望德清明影。嗜  
道猶求吹舉音。偶奉翹材東閣道。長誇古跡  
自傳吟。

同前。

藤爲時

未飽多年詩思侵。清風朗月久沈吟。志隨日動  
何爲足。興遇晴牽豈厭心。班扇長襟秋不盡。  
楚臺餘味老彌深。時人莫笑散樗吏。白髮緋衫  
獨尚淫。

春日同賦閑居唯友詩。

以心爲韻。

閑居希有故人尋。益友以詩興味深。苦嗜獨題

如合志。緩吟自聽便知音。思凝草木過連壁。  
義入風雲勝斷金。若不形言兼杖醉。何因安  
慰沈心。

酒部。

唯以酒爲家。情字。

中書王

以酒爲家无所營。時々吟詠助歡情。杜康昔  
構容人息。陶令重來寄我生。戶牖梨花松葉裏。  
鄉園藍水玉山程。榜題宜號忘憂觀。一入長休  
毀譽聲。

勸醉不如秋。心字。

高積善

酒客素雖被感侵。不如自勸醉秋陰。他時常  
醒應懷吟。近日頻傾是興深。論戶春風還報  
面。授鄉臘月欲寒心。莫言一盞忘憂物。蓮府  
二恩及陸沈。

醉時心勝醒時心。得酣字。

藤輔尹

醉心已勝最應甘。誰以醒時比漸酣。與彼停  
盃思往事。豈如添戶契交談。漢高祖樂頻欣



識。楚屈原憂未酌諳。百慮消中遺有恨。老來官散淚難堪。

寒近醉人消。題中。

江以言

凜々沍陰酒數巡。寒消難近醉中人。劉公席絕嚴霜及。王氏鄉占愛日隣。蘭殿宴闌花雪暖。竹林冬至玉山春。仰恩樹酌恩無筭。便識堯樽百姓親。

贈答部。

閑中聞左親衛員外將軍兩度遊宇治河

聊述中懷倫呈下風。

左金吾

行樂仙郎端坐客。寂寥相像勝遊程。華船有月波澄色。蓬戶無人雨滴聲。詩酒坐歌非吾事。林叢水石稱君情。相思未慰棄弔恨。空有多年合契名。

觀謁之後以詩贈太宋客羌世昌。

藤爲時

六十客徒意態同。獨推羌氏作才雄。來儀遠動

煙村外。賓禮還慙水館中。畫鼓雷奔天不雨。彩旗雲聳地生風。芳談日暮多殘緒。羨以詩篇子細通。

重寄。

言語雖殊藻思同。才名其奈昔楊雄。更催鄉淚秋夢後。暫慰羈情晚醉中。去國二年孤館月。歸程万里片帆風。嬰兒生長母兄老。兩地何時意緒通。

感勘解藤相公賢郎茂才蒙課試之綸旨

聊呈鄙懷。

源孝道

相公本是道英雄。材翰森然文亦工。棘路今歡名已列。李門昔恨業猶空。魚疲逆浪鱗雖泥。風拂重霄翅自冲。泗水慕龍情未忘。尼山砥礪志應同。宜誇仙桂連枝月。將扇儒林累葉風。七八廻間科第思。賢郎二人累應茂才之舉。舍弟侍中尙書右少丞長德四年登科令茂才。次蒙此宣旨云。三千徒裏拔群躬。非唯明主用君器。定識素王酬文功。大項稟賢苗不秀。公孫弘智文初



通。豈如才子專天爵。漸近年丁撰帝聰。万里青雲雙脚下。一家榮耀孔懷中。獨慙詞苑爲奴僕。兼歎更途作老翁。驥櫪縱無驚蹇偶。若俱得遇誠馳忠。

美州前刺再三往復。訪以予病。不堪感懷。詩以答謝。

勸解相公

一句臥病絕交遊。唯有美州致悶愁。老眼昏朦如遇夜。衰容颯灑似過秋。山隨寸步蹤猶峻。水逐殘齡淚暗流。世上君留應憶我。荒墳宜見暮松幽。

頃者侍中御史中丞到囚門前。近駐華轂。普見囚徒與食療飢。好事之輩以詩歎美。予傳以聞之。繼其末。本韻。

源爲憲

詠家着德知君子。積善餘風慶豈無。今日上天應感激。霜臺來愍夏臺辜。

奉和藤原才子登天台山之什。本韻。

同

天台山峻万門强。趁得經行古寺場。削跡霽塵尋上界。懸心發露契西方。鶴閑翅刷千年雪。僧老眉垂八字霜。珍重君辭名利境。空王門下立遑々。

戶部尙書重賦丹字見贈妙詞。吟咏反覆欲罷不能。愁課庸鶯以盡餘意。

中書王

瓊篇尋我曉凌寒。暫耻報詞日已闌。韻句花開堪賞翫。貞堅松老不凋殘。鼎湖早灑千行淚。金闕難供九轉丹。憶古見今猶悵望。漢文往昔示邯鄲。來詩有下天曆舊臣給背喪。戀恩幾許泣邯鄲之句。叙先朝之意也。

和戶部尙書同賦寒林暮鳥歸。本韻。

中書王

鏗鏘珠韻滿篇寒。六典沈吟及景闌。元白親情牋上出。楊班古意筆頭殘。唯應草聖妙飛墨。本自詩仙何用丹。奇字奇文看不足。還嘲彭澤與

邯鄲。

餞送部。

七言。暮春陪員外藤納言書閣餞飛州刺

史赴任應教詩一首。并序。

江以言

天德應和之間。天下士女之語才子者。多云高俊茂能。茂能則早遂儒業。永入佛道。高俊則今之所餞飛州刺史是也。刺史以才知世如此。以吏擇時如何。彼郭細侯之春竹。雖有風聲之可傳。劉太守之秋蒲。猶非霜威之不用。於是納言尊閣。靜置離酌。聊祖行鑣。計後會於四年。恨遺黃門之風月。指前程於千里。眼極東山之煙霞。子時西鳥漸落。離駒頻嘶。以言初指一道之先跡。今從同門之後塵。甲科偶登。未改青矜之在我。十年空過。豈圖白面而別君云爾。十餘年往結交久。忽到飛州万里雲。雲色風音應恠我。無官今送有官君。

賦飛州高使君赴任詩。儀同三司

把酒別筵日暮時。爲君更寄一篇詩。東都春月秋風夜。四五年來分付誰。

代送陵嶋人感皇恩詩。源爲憲

遠來殊俗感皇恩。彼不能言我代言。一輩先摧身殆沒。孤蓬暗轉命纔存。故鄉有母秋風淚。旅館無人暮雨魂。豈慮紫泥許歸去。望雲遙指舊家園。

高麗蕃徒之中有新羅國送陵嶋人折兢悅之者。其文不優。頗知詩篇。臨別之日。予

與一篇。勸解相公

我尋京洛辭雲去。君赴高麗棹浪歸。後會難期何歲月。秋風宜使雁書飛。

懷舊部。

秋日會宣風坊亭。與翰林善學士。吏部橋侍郎。御史江中丞。能州前刺史。參州前員外源刺史。藤茂才連貢士。懷舊命飲。

勸解相公

自趨榮利別文賓。酌酒吟詩亦不親。聚雪窓中三益友。宣風坊北一尋辰。心如少日紅顏昔。齒及殘秋白髮新。嘉說交談俱在我。泣言運命各由人。藤尚書恨藏山月。慶內史悲遁俗塵。保風藤尚書。慶內史。共是舊日詩友。落飾入道。兩別詩酒。余以有恨。故云。不若聊成懷舊飲。憂腸平忘養精神。

讀諸故人舊遊詩有感。中書王

往年歡與當時怨。世時皆如風裏雲。今日更披舊詩見。十中五六是遺文。

初冬感李部橘侍郎見過懷舊命飲并序。

勸解相公

予天元五載。石州秩罷。秋初歸洛。目秋暨冬。閑居宣風坊宅矣。橘李部過于家門。蓋舊懷之義也。時也宅荒主貧。交芳志切。眷戀留連。日將及昏。于嗟康保年中。文友廿有餘輩。或昇青雲之上。交談遠隔。或歸黃壤之中。存沒共離。其餘

多執臺省之繁務。亦割刺史遠符。居止接近。日不暇給。所謂左少丞。菅祭酒。兵部藤侍郎。太子學士藤尚書。肥州平刺史。美州源別駕。前藤總州。李部源夕郎。慶內史。高外史是也。如彼前日州橘太守。柱下菅大夫。工部橘郎中。三著作。命先朝露。恨深夜臺矣。便知君我之相逢。誠是平生之樂事也。推得忘年之友。偶令閑日之談云爾。

閑居情感被何催。門巷蕭條稀客來。偶遇芝蘭芳契友。宣風坊裏一傾盃。

題故工部橘郎中詩卷。中書王

君詩一帙淚盈巾。潘謝未流原憲身。黃卷鎮携踈牖月。青衫長帶古叢春。文華留作荆山玉。風骨消爲蒿里塵。未會茫茫天道理。滿朝朱紫彼何人。

齋院相公忌日令修諷誦。

儀同三司



相公去後幾光陰。每憶才名淚不禁。自少年時世稱有識。

翠羽簾前鸚鵡盞。往年人々參會齋院之日。相公簾中出盞。忽作佳句。紅花

帳下鳳凰琴。傳聞侍公主之帳下。受琴箏之妙曲。唯從神院蒸嘗禮。

未習佛門寂滅心。向使當初行一善。冥々中有

有相尋。

秋日到入宋寂照上人舊房。

儀同三司

五臺渺々幾由旬。想像遙爲逆旅身。異土縱無

思我日。他生豈有忘君辰。山雲在昔去來物。魚

鳥如今留守人。到此悵然歸未得。秋風暮處一

霑巾。

余近曾有到寂上人舊房之作。左丞相尊

閣忝賜高和。聊次本韻敬以答謝。

儀同三司

秋景纔殘不及旬。蕭條相憶遠遊身。徘徊巖戶

荒涼處。珍重瓊篇答艱辰。增價還慙吳市馬。吞

聲遙謝郢歌人。適交懷舊詩篇末。抱筆沈吟整

葛巾。

冬日往詣般若寺見故藏閣梨舊房。中心

之感觸緒難禁。遂書所懷寄覺上人。

左金吾

僧籠去後幾光陰。赴到那堪泉下心。林學釋尊

雙樹色。水傳憍梵一言音。慈悲已斷空留室。忍

辱長薰獨濕襟。殊惱心腸君識否。娑婆舊契與

年深。

秋日登天台過故康上人舊房。

勘解相公

天台山上故房頭。人去物存歲幾周。行道遺蹤苔

色舊。坐禪昔意水聲秋。石門罷月無人到。巖空

掩雲見鶴遊。此處徘徊思往事。不圖君去我孤

留。

去年春。中書大王桃花閣命詩酒。左尙書。

藤員外中丞惟成。右營中丞資忠。內史慶大

夫保胤。共侍席。內史在大王屬文之始。

以儒學侍。縱容尙矣。七八年來。洛陽才子之論詩人者。謂二人爲先鳴。當于其時。或求道一乘。或告別九原。西園雪夜。東平花朝。莫不閣筆廢吟。眷戀惆悵。廼者研精之餘。披覽去春之作。其文爛然存。其人忽然去矣。遂製懷舊之瓊篇。忝賜惟新之玉章。（並題）善以爲朝墨之庸奴。藩邸之舊僕而已。因之爲時一讀腸斷。再詠淚落。偷抽短毫。敬押高韻。

藤爲時

梁園今日宴遊筵。豈慮三儒減一年。風月英聲揮薤露。幽閑遠思趣林泉。新詩切骨歌還濕。往事傷情覺似眠。繁木昔聞摧折早。不才無益性靈全。

述懷部。

向西京過孔門口號。

勘解相公

出入廟堂舊小生。空歸今日向西京。過門禮拜殷勤祝。願許槐門作上卿。

除名之後初復三品。重陽之日得陪宴席。情感所催欲罷不能。聊述鄙懷呈諸知己。

同

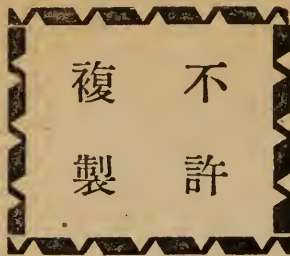
我是柴荆貶謫人。豈圖徵召列文賓。除名二月花開日。待詔重陽菊綻辰。籬落不耍陶隱醉。蘭叢應咲楚臣紉。忽拋野服染愁淚。更着朝衣賁老身。過死空爲黃壤骨。愁生再踏紫宸塵。半焦桐尾雖殘燼。已朽松心免作薪。寵鶴放雲振泥翅。轍魚得水潤枯鱗。鬢斑蘇武初歸漢。舌在張儀遂入秦。運任秋蓬風處轉。榮同朝菌露中新。抽簪將學空門法。未報皇恩未解紳。

本朝麗藻卷下

和田中敏治  
和田正夫  
校



昭和七年八月十五日印刷  
昭和七年八月廿五日發行  
昭和七年四月五日三版發行



(文協會員番號115016)

發行者

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八  
續群書類從完成會代表者  
太田藤四郎

印刷者

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九  
永島喜代次郎

印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八  
新英社印刷所

發行所

續群書類從完成會  
振替東京六二六〇七 電話大塚七一八  
大洋社

配給元

東京市神田區  
淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社











EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7948